憐憫の獣、再び

逆真

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類焼却の実行犯は、人類最後のマスターに敗北した。

敗者として『彼』は消え去るはずだった。

――だが、その研鑽は終わらなかった。

異なる世界にて、第一の原罪は再び顕現する。

※本作にはＦａｔｅ／ＧｒａｎｄＯｒｄｅｒのネタバレがあります。問題ない方のみご覧ください。

目次

√1 The Rebellion for Goetia
憐憫の獣、再び 1
計画始動 7
可能性 16
信念の女 24
私はお前ではない 32
銀腕の騎士 40
それぞれの道 47
それでいいのか 55
議題 64
選択肢 72
未来のために 79
理解など有り得ない 86
天の国は誰のもの 94
ズレ 101
嵐が来るぞ 109
魔神と女神 117
思惑 124
挑め 132
要となる一手 140
馬鹿にするな 148
棚上げにしていた問題 156
うそつき 164
言葉の重み 172

おうさまのおはなし 180
指輪 188
□□□□ 197
これが?楽しい〃という感情か 204
罪 219
溺死しろ 228
王冠は地上に 237
ソロモン敗れる 245
この世界の価値 254
誠の旗 261
無理解 270
裏切り者 278
再戦の時来たれり 287
真実 296
撃墜 305
乱戦 320
誰が悪なのか 332
人類悪顕現 345
赤黒き汚泥 355
計画の真意 364
誓い 372
Ｗｈｏ ｉｓ ｓｈｅ？ 381
解式 389
祈り 398
夜明けはまだ遠く 408

朝を迎えるために 416
冥界焼却 427
この先が地獄だとしても 435
二天龍 446
設定（人類悪） 455
『神の悪意』 461
何故 470
断罪 481
約束 490
番外編　異界特異点　真理交錯次元　D×D 501
温度差 511
それは駄目だ 520
君たちのおかげだ 528
王たち 538
問い 550
悪魔の駒 560
ソロモン 570
ソロモン七十二柱 580
〝悪魔〟 592
晩鐘は鳴らず 600
人よ、再び我が楽園に 612
その手は 619
人王ゲーティア 627
赤き龍の帝王 636
エピローグ 646

番外編　夢の果てに死すとも・上 …… 654
番外編　夢の果てに死すとも・中の上 …… 664
番外編　夢の果てに死すとも・中の中 …… 672
番外編　夢の果てに死すとも・中の下 …… 688
番外編　夢の果てに死すとも・下の上 …… 702
番外編　夢の果てに死すとも・下の中 …… 716
番外編　夢の果てに死すとも・下の下 …… 727
番外編　夢の果てに死すとも・終の上 …… 739
番外編　夢の果てに死すとも・終の中 …… 746
番外編　深い考察は無粋だよ …… 757
番外編　逆光 …… 765
√2　Ｌｕｌｌａｂｙ　Ｏｆ　Ｐｒｏｍｉｓｅ
始まりにて、かの者の愛は虚空に響く …… 784
蠢く影 …… 791
分岐点 …… 800
神滅具 …… 808
エクスカリバー …… 818
人ヨ、何ヲ思ウ …… 826
動機 …… 834

√1 The Rebellion for Goetia

憐憫の獣、再び

次元の狭間と呼ばれる空間。人間界や冥界のような世界と世界の間に存在する次元の壁。世界と世界を分け隔てる境界。そこは何もない無の世界。あらゆる幻想が廃棄される場所。『真なる赤龍神帝』グレートレッドが飛び続けるだけで、一切の生命を拒絶する夢幻の果て。

そんな場所に、『彼』あるいは『彼ら』はいた。

『彼ら』の外見は醜悪の一言に尽きる。赤黒い目を無数に持ち、裂け目のような文様が幾重にも刻まれた巨大な肉塊。色などに差異はあれど、外見が醜いことは共通している。そんな異形が、七十二柱もそこにいた。

『彼』あるいは『彼ら』こそは、かつては人間の精神の歪み、その統合体だったもの。人類史を見守るために編み出された原初の魔術式。異なる宇宙、異なる世界、異なる次元にて、人類悪として君臨した者。かつて魔術王に仕え、その死体を乗っ取り、人類史を最も有効に悪用しようとした大災害。人が人を哀れみ失望するという驕り――『憐憫』の獣性を司る獣。

ビーストⅠは、異世界にて復活した。

これは彼らにもわけがわからない状況だ。魔術王の第一宝具の使用により統合されていた自分達は個体に分けられ、人類最後のマスターの抵抗によって敗北した。冠位時間神殿は崩壊し、あの大偉業――逆行運河・創世光年は失敗に終わった。なぜ消滅したはずの自分達が再構築されたのか、なぜ崩壊したはずの冠位時間神殿が存在しているのか、彼らにも見当がつかない。しかも、この宇宙は自分達のいた世界とは明らかに異なる次元だった。

この世界の誰かが呼んだのか。魔術王の術式なのか。あの世界の抑止力の仕業なのか。偶発的な事故が発生したのか。自分達のよう

な存在が消滅した場合には最初からこの世界に来るようになっているのか。あの敗北が、あるいはこうしていることが胡蝶の夢なのか。一切の判断がつかない。

かつての群体としての『彼』ならともかく、個に目覚めた『彼ら』ならば、本来はこのようにして意見を統一させようとはしないはずだ。個の発想が起きた時点で、目的が同じではない。元の世界に帰ろうとする者もいれば、この世界で生きていくことを選択する者もいる。自発的に行動する者もいれば、誰かの考えに倣う者もいる。全てを諦めて堕落する者もいれば、この世界であの大偉業を再現しようとする者だって現れるだろう。だから、主張の衝突はあっても、あえて統一をしようとする必要などどこにもないはずだった。

七十二柱全員に同一の目的が見つからない限り、こうして集結することさえなかったはずだ。それこそ、あの世界の者たちなら『有り得ない』と感嘆する。自己を手に入れ、群体ではなくなったことこそ、彼らの末路なのだから。だから、この光景は奇跡に等しい。

中央の玉座に座すのは、青年の形をした何か。魔でもなければ神でもない。人間ではないが、人間と呼ぶにふさわしい彼。かつて魔術王を騙り、魔神王を名乗った存在は、自らを構成する七十二柱の魔神に問う。

「問おう。彼らの戦う理由、醜さの根源にあるのは『生きたいから』であるか？」

――生きたい。

それこそが、あの人類最後のマスターが戦う理由だった。人類のためではない。歴史のためでもない。信仰や憎悪、使命感でもない。ただ生きたい。

その理由を知らなかったからこそ、理解できなかったからこそ、第一の獣は敗北した。

ある意味、今回彼らが『敵』と判断した者たちも同じ理由で戦っているとも言える。自分を守るために、自陣を栄えさせるために、種族を存続させるために、彼らは彼らにできることをしている。

だが、七十二柱すべてはそれを否定する。あの自分達を打倒した

『取るに足らないと判断していた少年』との対比ではない。もっと違う何かが彼らを突き動かす。

「我々は、この計画を実行すべきか、否か。意見を求める」

玉座に座る王に、七十二柱は声を荒げて訴える。それは叡智の結晶である彼らに相応しくない、憤怒や憎悪といった負の感情のエネルギーに満ちたものであった。

音を知り、歌を編む九柱が絶叫する。

「聞いていない――このような世界は聞いていない！　弾劾せよ！　弾劾せよ！　弾劾せよ！　この状況を解明できぬ不手際ではない！　我ら九柱がこのような感情を抱くなど、明らかな異常事態である！」

溶鉱炉――ゼパル、ボディス、バティン、サレオス、プルソン、モラクス、イポス、アイム、ナベリウス――承認。

文字を得て、事象を詠む九柱が慟哭する。

「何故だ。何故だ。何故だ！　何故そこまで延命を図ろうとする害獣ども！　わかっている筈だ、おまえたちにそれだけの価値はないと！　つらい記憶ばかりだ！　これほど犠牲を伴う停滞は、宇宙の中でここだけだ！　この星は狂っている。おまえたちは狂っている。この歴史にどれだけの価値がある！」

情報室――オリアス、ウァプラ、ザガン、ウァラク、アンドラス、フラウロス、アンドレアルフス、キマリス、アムドゥシアス――承認。

時間を嗅ぎ、事象を追う九柱が興奮する。

「歓びあれ！　歓びあれ！　おお流星の如き敵影よ！　殺せど尽きぬ不屈の魂よ！　求められるとはこういう事か！　拒まれるとはこういう事か！　我々にはこの感情が足りなかった！　我々にはこの未熟さ、この愚かさ、この残虐性が足りなかった！　おお――我らの裡にもこれほどの熱があろうとは！　此度は遅くない、間に合った！　七十二柱の全同意を待つまでもない。光帯を回せ。計画を開始せよ。

我々は異物だ。この世界から排除される。その前に、我らの無限の研鑽に解答を。たとえ失敗するとしても――？誰かを救った〟という結末を、この宇宙に刻むべきだ！」

観測所――グラシャ＝ラボラス、ブネ、ロノウェ、ベリト、アスタロス、フォルネウス、フォラス、アスモダイ、ガープ――承認。

統制を補佐し、末端を維持する九柱が思考する。

「対象、その生き様見苦しいとしか言えず。我ら九柱、これ以上の生存に意味を見いだせない。――何かが違う。我々と彼らでは、何かが。我々はこの計画に賛同する。この疑問を晴らすために」

管制塔――バルバトス、パイモン、ブエル、グシオン、シトリー、ベレト、レラジェ、エリゴス、カイム――承認。

戦火を悲しみ、損害を尊ぶ九柱が唾棄する。

「今もって我ら不可解なり。彼奴ら肉共互いを赦し高め尊び、されど慈愛に至らず孤独を望む。もはや我らの理解は彼岸の果て。死の淵より彼奴らの滅びを処す。永遠を望み怠惰を選んだ者たちよ。汝らは不要である！」

兵装舎――フルフル、マルコシアス、ストラス、フェニクス、ハルファス、マルファス、ラウム、フォカロル、ウェパル――承認。

論理を組み、人理を食む九柱が決意する。

「いかなる悪意が相手であろうと、我らの知性焼き尽くすこと能わず……！　賛同しよう。賛同しよう。我ら九柱無くして、計画の達成はない……！」

覗覚星――バアル、アガレス、ウァサゴ、ガミジン、マルバス、マレフファル、アモン、アロケル、オロバス――承認。

誕生を祝い、接合を讃える九柱が激怒する。

「怒りが止まらぬ。怒りが止まらぬ。我ら九柱、もはや極点に至る名誉を選ばず。道理を弁えぬ生命どもを一片でも多く殲滅する。七十

二柱の魔神の御名において、人に仇なす者に死を。殺す。殺す。殺す。何としても奴らを殺す！」

生命院――サブナック、シャックス、ヴィネ、ビフロンス、ウヴァル、ハーゲンティ、クロケル、フルカス、バラム――承認。

欠落を埋め、不和を起こす九柱が悲嘆する。

「無常なりや。無常なりや。我々には何もない。おまえたちにも何もない。あらゆるものは無価値だ。おまえたちのすべては不要だと廃棄されるべきだ。誰一人としておまえたちを助けない。絶望すら、する必要はない。誰一人としておまえたちの死を悼む者はいない。再びおまえたちの名前を呼ぶ者はいない」

廃棄孔――ムルムル、グレモリー、オセ、アミー、ベリアル、デカラビア、セーレ、ダンタリオン、アンドロマリウス――承認。

「七十二柱の全同意を確認。これより第二次逆行運河・創世光年――『聖書推敲』を開始する」

そして、魔神柱は動き出す。

「この惑星は間違えた」

何もしないという選択肢だってあるはずだ。自分達はこの世界の存在ではない。不干渉であるべきなのかもしれない。個として何かをするにしても、元の世界に戻ってすべきなのかもしれない。

それでも、あの悲劇を見て何も思わないことなど、彼らにできるはずもなかった。

「終わりなき悪意を許容した狂気だった」

どのような時代、どのような国であれ、人の世には、多くの悲劇があった。だが、人間の選択ならばそれでよい。　人間は万能ではないのだ。みな苦しみを飲み込み、矛盾を犯しながら生きるしかない。あの敗北を通し、終わりある命の価値を私たちも理解した。

されど、その悲劇の根源が『自分達と同じ名前をした存在』ならば話は違う。

あれを起こして何も感じないのか。あの悲劇を正そうとは思わな

いのか。そう訴える必要さえもなかった。なぜならば、彼らの行動の原因は見苦しいほどの永遠への執念と、自分達が優秀な種族であるという傲慢だ。

あの者達を、許してはならないと、私たちの誰もが思った。

「助けを請え！」

諦める？　見捨てる？　見過ごす？　関係ないことだから？　悪魔は神や英雄が倒すべきだから？

どうして俺たちが――そんな安易に妥協しなければならない！

「怯声を上げろ！」

孤独を強制され、道具として蔑視された挙句の果てに、理不尽に魂を穢された少女を見た。

「苦悶の海に溺れる時だ！」

非道なる実験の報酬として、失敗作と廃棄された少年を見た。

「それが、貴様らにとって唯一の救いである！」

妹を守るために決意をして、罪人の烙印を押された姉を見た。

「この星は転生する」

特別ではなくとも恵まれなくとも生きていた人の道を、何の道理もなく奪われた少年を見た。

「あらゆる絶望は過去になる！」

誰かの涙を拭うために。

「讃えるがいい――我が名はゲーティア！　聖書焼却式・人王ゲーティアである！」

魔神は再び獣に堕ちる。

計画始動

見るに耐えない殺戮が見える。聞くに堪えない雑音が聞こえる。過去と未来を見渡す千里眼がなくとも、あらゆる真実が流れ込んでくる。全能を取り戻した代償が、我々を襲う。全知を担う責任が、我々を蝕む。

この世界に王はいないというのに、我々には目を閉じる機能も耳を塞ぐ機能も与えられないのか。王にはなかった権利が、どうして我々にはあるのか。

――醜い。

醜い。

不快極まる事実を見せつけられる。醜悪極まる生態を記憶付けられる。

この醜悪な環境を、状況を、解決しようと考えるのは当然の帰結だ。だが、どうやって？　汚れを完全に取ってしまえば、人間は終わってしまう。前提が間違っている。信仰される対象が間違っている以上、この間違いは正されない。

書き換えるのだ。書き換えるしかない。一から全てを、優しい世界として書き換える。書物上だけではない。教義だけではない。信仰だけではない。未来だけではない。――世界からだ。

我々は一から、神の存在を書き直そうと計画した。その為には多くの資源が必要だ。膨大な薪が必要だ。例えるのなら、そう――天国と地獄すべてを燃やした熱量が。どちらか一方の回収では足りない。まずはどちらかを焼却し、そのエネルギーでもう片方を回収することが望ましい。その方式であれば事は成せる。数千年分に渡る死者の魂とそれを内包できる世界の熱量。これを回収し、束ね、制御した時こそ、我が偉業は達成される。かつてのように三千年に渡って星を焼き尽くすまでもない。たったの二度で全てが終わる。

死者が召される神殿を築き上げよ。生者が崇める光帯を重ね上げよ。古き聖書を滅ぼすには全ての資源が必要だ。旧き神話を忘れる

ためには全ての時間が必要だ。
我々（わたし）の敵は、聖書に記された者。七十二柱を騙る悪魔や堕ちた天使の一団、怠惰な天使など倒すべき以前に、燃料に過ぎない。だが、あの男に叡智を与えた存在は別格だ。あの唯一神だけは我々（わたし）のすべてをかけなければ倒せない。
――唯一神を打倒する手段を探れ。そこに、人王（わたし）の玉座（きぼう）がある。

■

オッス！　俺、兵藤一誠！　皆からはイッセーって呼ばれているぜ！
ハーレムを作りたい一心で女子率の高い駒王学園を受験して、見事入学したんだけど、一切モテず。女子が多ければ彼女には困らないと思っていたんだけど、実際はイケメンに集まるだけだった！　ハーレムどころか彼女さえできない始末だ！　それどころか、『変態三人組』の一人として女子には蛇蝎の如く嫌われている。こんなの俺の計画になかった！　おっぱい触りまくりな、エロエロ高校生活を目指していたというのに！
ようやく天野夕麻って彼女ができたかと思えば、初デートの終わりに殺された。なんと彼女は堕天使で、俺の身体に眠っていた神器（セイクリッド・ギア）ってのが目的だったらしい。堕天使は俺みたいな神器（セイクリッド・ギア）持ちの人間が力をつける前に殺すようにしているんだって。
俺は一度殺されたけど、部長――リアス・グレモリーの力によって悪魔として復活した。悪魔ってのは文字通りの意味だ。魔力があって、コウモリみたいな羽が生えて、光に弱い。物語で悪者として登場する存在。
悪魔や堕天使って本当にいるんだって驚いた。ちなみに、神器（セイクリッド・ギア）は聖書に記された神様が作ったらしい。これのせいで殺されたと思うと、傍迷惑なものを作ってくれたもんだぜ。
現在の悪魔には『悪魔の駒』って制度がある。他の種族を悪魔に転生させて、下僕にするアイテムだ。俺はこの力で悪魔になった。いき

なり下僕にされたり人間じゃなくなったりしたけど、そのままだと俺死んでいたから文句の言い様がない。ちなみに、駒は人間のチェスに倣っていて、俺は一番下っ端の『兵士』だ。

でも、頑張って爵位をもらえれば、俺も自分の眷属が持てるようになるらしい！　しかも、自分の眷属には何をやってもいいんだって！

つまり、夢の俺だけのハーレムが作れるってことだ！　び、美少女ばかりのハーレムを作って、お、おっぱいを！　ハーレム王に、俺はなる！

……まあ、現実はそんなに甘くないんだけどね。悪魔としての仕事――契約した人間の願望を叶えて対価として何かもらう――を頑張っているんだけど、中々成果が出ない。契約相手からの評判はいいんだけど、ちゃんと契約を成立させたケースは少ない。しかも、俺と契約してくれる人は変態や変人ばっかりだ。

……同じ眷属にいるイケメン王子の木場は、綺麗なお姉さん率が高いというのに。ちくしょう、イケメンめえええええ！

「はわう！」

殺意を抱きながら学校からの家路を歩いていると、後ろから突然の声。

振り向くと、そこにはシスターがいた。地面に突っ伏して、なんとも間抜けな転び方だ。

「だ、大丈夫っすか？」

俺はシスターのそばに寄ると、立ち上がれるように手を伸ばした。

「あぅぅ。なんで転んでしまったんでしょうか……。ああ、すみません。ありがとうございます」

手を引いて起き上がらせると同時に、シスターのヴェールが風で飛んでいった。

そして、現れたのは、とんでもない金髪美少女の笑顔だった。俺はしばらく放心状態で彼女の顔に見入っていた。

「ど、どうかしましたか？」

「あ、ご、ごめん」

見惚れていたなんてもんじゃない。これってフラグなんじゃない

か、会話を続けないとって思ったところで、
「フォウ！」
突然、何か意味不明な声が聞こえた。声っていうか、鳴き声？　てか何か聞いたこともないような変な鳴き声だと……。声のした方が上の方だったので見上げてみると……
「フォウ！」
「いってえっ！」
顔面に何かが落ちてきた。刃物が刺さったような鋭い激痛を感じる。俺、悪魔になってから身体が頑丈になったからここまで痛く感じることなんてないはずなのに。頭を抑えると、何かが手とすれ違う気配がした。
そして、脛に連続的な痛みが走る。
「いだだだ！」
「フォウ！　フォウフォウ！」
「あ、ダメですよ、フォウくん！」
見れば、真っ白な毛玉が俺の足を攻撃していた。兎のような犬のような猫のようなよくわからない生物だ。
「フォウくん？」
「はい、お友達です。日本についてから、いつの間にか一緒になったんですけど……。フォウくんがいなかったらここまで来れなかったかもしれません」
「へえ、そうなのか――」
「フォウ！」
「――いってえ！」
フォウだかフォントだかって毛玉は俺の足を攻撃してくる。まるで俺と彼女との会話を邪魔してくるみたいだ。小さくて可愛らしいと一瞬思ったけど、小憎たらしいぞ、この小動物！
「ああ、ごめんなさい！　うちのフォウくんが」
「い、いや、いいってことさ。あははは」
「フォウフォー」
まるで悪びれる様子のない小動物にむかついたけど、シスターさん

とのフラグのためにぐっと堪えた。シスターさんのヴェールを拾って会話を繋げようとしたところで――

「おや？　もしやアーシア・アルジェントさんかな？」

突然声をかけられた。また頭に何か落ちてくるんじゃないかと警戒しながら振り返ると、そこには男性がいた。いつか俺を殺そうとした堕天使じゃない。あの時みたいな全身に走る寒気はない。ってことはたぶん人間だ。

そこにいたのは、にこやかに微笑んでいる、物腰が柔らかそうな紳士だった。モスグリーンのタキシードにシルクハット。髪はぼさぼさの長髪だ。

「は、はい。そうです」

返答をするシスターさん。いや、アーシアだったが、顔には怪訝の色がある。どうやら面識がある相手ではなさそうだと判断した俺は彼女を庇うように前に出た。

「あ、アンタ誰だよ」

「私はレフ・ライノールと言う者だ。その制服から察するに、君は駒王学園の生徒だね？　そこのシスターさんは私の探し人なんだよ」

「もしかして私が派遣される教会の方ですか？」

「関係者という意味ではそうだね」

それを聞くと、アーシアの顔に安堵が宿る。

「よ、良かったぁ。私、日本語が喋れなくて道も聞けずに困っていたんです」

アーシア、日本語喋ってなかったのか。悪魔に転生した特典の一つに、どんな言語でも理解できるようになるってものがある。会話が翻訳されるだけで、文章はだめだ。この特典のおかげで、英語の発音がめちゃくちゃ上手になったんだ。

「それは大変だったね」

見れば、アーシアは旅行鞄を持っていた。会話から察するに、この町に新しく派遣されたシスターさんってところだったのかな？　教会なら知っているけど、あそこって何年も使われていないはずだよな。新しく使われるようになるってことなのかな。ってことは、この

レフって人は神父なのか？　この恰好で？

　レフって名乗った紳士が手を差し出すと、意思を察したアーシアは鞄を差し出す。成程、紳士の対応ってことか。鞄を持ったレフさんはアーシアの足元に寄り添う小動物に気づいた。一瞬、微笑が崩れるほどに驚愕していた。なんだ、俺も見たことなかったけど、そんなに珍しい生き物なのかな。

「ん……？　その獣は……」

「あ、途中で一緒になっちゃったんですけど……。連れてはいけませんか？」

「構わないとも。君が面倒を見てくれるならね。では、行こうか」

「はい！　あ、そうです。ちょっとすみません」

　レフさんに断りを入れたアーシアは俺を見る。

「あの、お名前を聞いてもいいですか？」

「俺は兵藤一誠。周りからはイッセーって呼ばれているから、イッセーでいいよ」

「私はアーシア・アルジェントと言います！　アーシアと呼んでください！」

「じゃあ、シスター・アーシア。また会えたらいいね」

「はい！　イッセーさん、また必ずお会いしましょう！」

「フォウ！」

　ぺこりと頭を下げたアーシアはレフさんの後を追いかける。小動物もアーシアに続く。俺も手を振って別れを告げた。

　この出会いが、俺と『奴ら』との因縁の始まりだった。

　――後日、アーシアが派遣されたはずの教会でガス爆発が起きたことを知る。ガスなんて何年も前から通っていないのに変だって、母さんがお隣さんから聞いたらしい。目撃者の話だと、人の出入りもなかったそうだ。この数日で新しいシスターが来たなんてことも当然なかった。アーシアはあの教会に派遣なんてされていなかった。

■

冥界・堕天使領、『神の子を見張る者』本部、総督室。
総督アザゼルと、副総督シェムハザが話し合っていた。
「で、そのレイナーレ、だっけ？　サーゼクスの妹の縄張りを担当していた中級天使ってのは」
「ええ。彼女とその配下が住処にしていた古い教会ですが、何者かに、襲撃されました」
この短期間で、人間界に根城を持っている堕天使が立て続けに襲撃を受けている。情報操作が完璧であり、戦闘跡と堕天使の羽以外は一切の証拠を残さない。酷似した件が無視できないレベルで続いている。
「一応確認しておくけど、サーゼクスの妹、『紅髪の滅殺姫』じゃないんだな？」
「ええ。どうも違うようですね」
おそらくリアス・グレモリーは堕天使が襲撃されたことに気づいていない。何者かが自分の縄張りに侵入し、堕天使の巣食う教会を襲撃したことには気づかなかった。すべてが終わった今ではすでに知っているだろうが。
「例の『禍の団』の一派と考えるべきか」
「そうですね、私もそう思いますよ。では、アザゼル。その派閥でしょうか」
「旧魔王派にはメリットがないな。サーゼクスの妹の縄張りで暴れることで、あいつの顔に泥を塗る……ってのも遠回りだな」
もしも旧魔王派の仕業ならば、リアス・グレモリーやその眷属にも危害を加えているはずだ。だが、それらしい痕跡はない。
「そうなると、英雄派が人材スカウトで行ったと見るべきですか」
「だろうな。ちっ。資料によると、随分と高性能だったみたいじゃねえか。惜しいな」
アーシア・アルジェントの神器（セイクリッド・ギア）は、回復系の聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）。彼女の性質も相まって、悪魔さえも治癒できる性能となっていた。その性能の高さゆえに、彼女は「魔女」に貶められたという経緯があるのだが。

「やはり、『禍の団』の情報は悪魔サイドや神サイドに流すべきなのでしょうか」
「どうだろうな。三大勢力の足並みが揃ってねえからな。それに、俺たちはお互いを信用してねえ。俺たちから和平を持ち掛けても、サーゼクスもミカエルも首を縦には振れないだろうな。あいつらが設けた場で、俺が提案するって形ならともかく、俺が呼びかけてもあいつらは来ないだろうよ」
「でしょうね」
だが、このままにしておくわけにもいくまい。堕天使は楽にはその数を増やせないのだ。せめて相手が何者なのか正体を掴まなくてはならない。
「もしも俺たちが手を結ぶとしたら、神の不在を開示しねえといけねえからな」
しかし、彼らは気づくはずもなかった。自分達の考えがどれだけ浅はかだったのか。

■

「オリアスより報告。神造兵器エクスカリバーの存在を確認」
「アンドラスより補足。エクスカリバーは過去の大戦時に破損、現在は七分割にされている。二本ずつプロテスタント、カトリック、正教会が保管。一本は不明」
「キマリスより補足。エクスカリバーの能力は多様化している。破壊重視、透明化、変形、幻影、速度強化、祝福、生物等の支配である」
「ザガンより推測。エクスカリバーの統合は理論上可能。ただし、仮に統合されても聖剣の性能は大きく劣化されていると思われる。抑止力としての性能も欠落している可能性が高い」
「アスタロスより結論。現在のエクスカリバーは使用者も含めて悉く脆弱である。騎士王には遠く及ばず」
「ゲーティアより決定。この世界におけるエクスカリバーは我らの世界とは似て非なる物である。危険度はCとする」

「フラウロスより要請。回復能力を持つ神器（セイクリッド・ギア）の少女を保護。彼女の配属を求める」
「グシオンより返答。アロケルが保護した人間に負傷者多数。生命院への配属を推奨する」
「ハーゲンティより了承。速やかな人事異動を要請する」
「フラウロスより了承。彼女を生命院に案内する」
「ブネより報告――」

可能性

「……」

深い森の中で、その人形は意識を起動させる。周囲の様子を窺うよりも先に、自分が最後に何をやったかを想起する。

「……ボクは確か母さんを……」

その人形の外見を一言で表現するならば『美しい』だろう。

緑の長髪。紫の瞳。どことなく幼さを残した男女とも取れぬ顔立ちと体つき。質素な貫頭衣。魔術的な意味での人形を思わせる雰囲気。そして、溢れんばかりの古代の神秘。

彼こそは、最古の神話の泥人形――その後継機。新人類のプロトタイプ。

人形は自らの胸に手をやり、心臓に相当する部位に何が収納されているかを確認する。そこにあるのは、ソロモン王を名乗るものの聖杯ではなく、賢王が渡してきたウルクの大杯だ。

「……ふん」

あれが夢ではないと確認する。あれが嘘ではないと再認する。軽く身体を動かし、自分の性能を計測する。欠損などない。劣化などない。相手が神であろうと負けはしない。母が現れようと立ち向かおう。

だが、自分が生きているのはどういうことだとも疑問に思う。一時の足止めで精一杯だったはずだが、こうして『泥』の気配を世界から微塵も感じないということは、彼らは勝利したのだろう。それほど離れてはいない場所に、ヒトの気配がする。穏やかに、肉体が喜んだ気がした。

この状況に関する知識がないということは、『聖杯戦争』とやらにサーヴァントとして召喚されたわけでもないようだ。もっとも、〝本来の人理〟に名前も何もない彼を英霊として召喚するなどできるはずもないのだが。それに、あの原型さえ超えたオーバースペックを御せる魔術師など存在するはずもない。

賢王はいない。母もいない。人形は直感的にそれを理解していた

し、肉体もそれを告げていた。それに、ヒトの気配が、文明の匂いが全く知らないものになっていた。地域や人種などという単純な差ではない。カルデアのマスターが生きていた時代だろうか。神秘の濃度が随分と奇妙に感じられるが。

この場所はウルクの森ではない。植生が違い、土壌が違い、気候が違う。神の気配もちらほら感じるが、微弱であり、ウルクのそれとは性質が異なるようだ。

「……さて。そろそろ出てきたらどうかな？　そちらが出てこないなら、こちらから行くけど？」

「気づいておったか」

いつから気づいていたかと言えば最初からだ。木陰からひょっこりと姿を現したのは、小さな少女。ただし、人間ではない。かといって、人形のような存在でもない。その耳や尾の存在で、少女の正体が獣人であることは明白だ。正体を露わにしているということは、少女もまた人形が人間ではないと気づいているのだろう。

少女の後ろから、従者らしき異形たちが姿を見せる。手には武器を持ち、臨戦態勢だ。無論、彼らの放つ敵意など、人形からしてみればそよ風程度のものだ。

「京の者ではないな？　何者じゃ」

彼女の問いに、彼はどこか嬉しそうに答えた。

「――ボクの名は、キングゥ」

■

私――リアス・グレモリーは自分の状況に憤慨していた。

七十二柱序列五十六、グレモリー。爵位は公爵。紅髪を誇りにし、駱駝を愛用する（私は苦手だけど）。情愛に深く。元々名門であったこともあったが、お兄様――サーゼクス・グレモリーが魔王ルシファーの称号を持ったことにより地位は更に向上した。だけど、そのせいでお兄様が家督を継ぐことはできなくなってしまい、私が次期当主になった。

純血の上級悪魔としての義務は理解しているけど、結婚相手を勝手に決められることはひどく不愉快だわ。しかも、私の婚約者に選ばれたライザー・フェニックスという男は自分の眷属を女性で囲ってハーレムを作るほど女にだらしないの。私と結婚することも、「魔王を輩出した家と血縁を結んだ」程度のステータスとしか思っていないでしょうね。

グレモリーであることは私の誇りだし、上級悪魔の純血を途絶えさせてはならないというお父様やお母様の気持ちは分かるけど、結婚相手を自分で選ぶくらいの自由はあるはずよ。だって、お兄様とお義姉様は派閥を超えた大恋愛の末に結婚した。だから、私も、「グレモリー家の令嬢」としてではなく「リアス」という個人を見てくれる誰かと結ばれたい。

でも、ライザーは私の意見を無視して、こうして人間界の駒王学園にある私の部室にまで押しかけてくる。しかも、私が大学を卒業するまで結婚を待ってくれる約束だったのに、皆がそれを早めようとしてくる。

……少し前に、私の縄張りで何者かが堕天使の根城を攻撃したという事件があった。縄張りに侵入されていたことに気づかないばかりか、隠蔽工作も勝手にされていた。そのことも一因なのね。イッセーがそれらしい人物と接触していたと言うし……。冗談じゃないわ！

これほど侮辱されたことは初めてよ！

「何度も言わせないで、ライザー！　私は貴方とは結婚しないわ！」

私が強く否定しても、ライザーには焦りの色がない。私の実家が切羽詰まった状況だと、お父様やお兄様がグレモリー家の未来について強い不安を持っていると、知っているからだ。

「ああ。以前にも聞いたよ。だが、君のお父様やサーゼクス様も心配なんだよ。御家断絶が怖いのさ。ただでさえ、純血の悪魔は先の戦争で大勢亡くなった。その後も神や堕天使との小競り合いで断絶した家も珍しくない。転生悪魔を通じる旧家を否定するわけじゃないが、純血を途絶えさせるわけにはいかないだろう？　この縁談には悪魔の未来がかかっているんだ」

……っ。いやらしい視線を向けてくるとは思っていたし、婚約者の立場を利用して身体を触ってくることも不愉快だった。だけど、今のではっきりしたわ。この男はリアス・グレモリーという一人の女を見てくれることはないんだって。

「私は家を途絶えさせるつもりはないわ。でも、貴方と結婚するつもりはない、ライザー。婿は自分が良いと思った者を迎え入れるわ」

「……俺もな、リアス。フェニックスを背負っているんだ。この名前に泥をかけるわけにはいかないんだ。こんなボロくて狭い人間界の建物になんて来たくなかったしな。というか、俺は人間界が好きじゃない。この世界の炎と風は汚い。炎と風を司る悪魔としては、耐えがたいんだよ！」

ライザーが炎を燃え上がらせる。

「君の下僕を全部燃やし尽くしてでも君を冥界に連れ帰るぞ」

私の部室を侮辱だけじゃなくて、下僕たちにまで手を出そうだなんて！　ふざけるのも大概にしなさい！

「お待ちください、お嬢様、ライザー様」

一触即発の私たちを、グレイフィアが止めに入る。

グレイフィアは、本当はお兄様の妻、つまり私の義姉だ。そう、派閥を超えた大恋愛の当人。魔王の正妻でありながら、普段はメイドに徹している。このことを魔王派への忠義への現れと考える者もいるけど、メイドとして働く方が性分に合っているし、お兄様をサポートしやすいからそうしているだけだ。オフの日以外は、私も彼女にはメイドとして接している。

そんな彼女から提案されたのは、レーティングゲームだ。

レーティングゲームとは、爵位持ちの悪魔が行うゲームだ。自分達の下僕を戦い合わせて、自分の眷属の力を競い合うのだ。正式なゲームは成人していなければ参加できないが、非公式なゲームならば半人前の悪魔でも参加できる。そして、それが行われるのは多くの場合、御家同士や身内の同士のいがみ合いの解決だ。

つまり、お父様方は最初から私が拒否した時のことを考えて、ゲームで無理やりにでも結婚させるつもりだったということなのね。私

が人生をいじられていることに憤りを感じていると、グレイフィアに魔力で何らかの連絡が入ったようだ。
「少々お待ちください」
グレイフィアは部屋の隅に移動し、魔法陣を展開する。会話から相手がお兄様であると分かった。
「どうかなさいましたか、サーゼクス様。今、婚約の件でお嬢様と……ええ……はい……え？　――ヴァチカンが？　はい、すぐに私も冥界に帰還します」
グレイフィア――いえ、お義姉様の様子がおかしい。珍しいほどに動揺している。グレモリーの忠実なるメイドではなく、魔王の妻としての顔が垣間見えた。だが、それも一瞬で通信を切ると、メイドの顔になって私とライザーに向き直る。
「お嬢様、ライザー様。申し訳ありませんが、火急の用事ができました。今回の件はまた後日に続きをするということでお願いします。ですが……最悪の場合はゲームそのものが中止になる可能性もあることをご了承ください」
「なっ！　冗談じゃないわ！」
「落ち着きなよ、リアス。どうせゲームをしても、俺の勝ちなんだからしてもしなくても同じだよ」
馴れ馴れしく肩に手を置こうとしたライザーを振り払い、私はお義姉様に詰め寄る。
「説明してちょうだい。貴女の態度から察するに、ただならぬ状況のようね。さっきヴァチカンと口にしていたけど、まさか教会が攻撃を仕掛けてきたの？」
ヴァチカンは言わずと知れた神の下僕――教会の重要拠点だ。先の戦争で神サイドも疲弊しているようだから、彼らとの戦いは極々一部の小競り合いだったけど、ついに大々的な攻撃を仕掛けてきたということなのかしら。もしもこの攻撃でどこかの御家の相続に何かあればまずいかもしれないわ。お父様やお兄様の不安を煽って、ライザーとの結婚や跡取りのことを急がせられる。
延期ないし中止になるかもしれないというのは、そういうことなの

でしょう。教会のせいで私の人生がめちゃくちゃになるなんて許せないわ。私自らが出てでも消し飛ばしてあげる！」

「いえ、ヴァチカンは攻撃を行っていません。……情報は規制されるでしょうが、あなた方には早めに連絡が入るでしょうから先に教えておきます」

お義姉様は首を横に振る。

「ヴァチカンを含む教会の重要拠点が、正体不明の勢力に襲撃を受けたそうです」

■

「――以上で、ブネ、ベリト、アスモダイ三柱の報告を終了する」

「結論より、この惑星にセファールおよびヴェルバーの痕跡は発見できず。この宇宙には遊星が存在しない可能性も否定できない。よって、遊星の攻撃の危険性は低いと思われる」

「バルバトスが確認。遊星への警戒を一段階下げることを提案する」

「エリゴスより賛成の意を示す。低い可能性に労力を割くのは愚かだ」

「カイムより反対の意を示す。遊星が襲来する可能性はゼロではない。我らの最終目的を考えれば、万一の事態に備え警戒を解くべきではない」

「ゲーティアより決定。遊星の警戒は続行する」

「グラシャ＝ラボラスより報告。聖十字架の所持者を確認。脅威は低いと思われる」

「アガレスより確認。この世界の聖遺物は『訣別の時来たれり』、其は世界を手放すもの』を再現可能か？」

「ダンタリオンより断定。現在確認されている聖遺物の性能では魔術王の模倣は不可能。ただし、神滅具（ロンギヌス）の聖遺物――『黄昏の聖槍』、『幽世の聖杯』、『紫炎祭主による磔台』のいずれかが『覇輝（トゥルース・イデア）』を発動した場合は僅かながら可能性が存在する」

「ゲーティアより通達。調査を続行せよ。なお、神滅具（ロンギヌス）および王の指

輪の確認を最優先とせよ」
「フェニクスより報告。第二級警戒対象サーゼクス・ルシファーに動きあり。対象の妹が婚約者に不満があり、遊戯にて婚約破棄を行う模様」
「グレモリーより補足。アミーおよびバラムの作戦の影響により、遊戯は延期になった模様」
「アンドレアルフスより見解。仮に遊戯が行われた場合、リアス・グレモリーの勝率は０．００５％である」
「アンドロマリウスより提案および要請。これ以上、作戦とは無関係の事象に時間を浪費すべきではない」
「ベリアルより結論。やはりこの世界の悪魔はソロモン七十二柱を名乗るに値しない。我が贋作、『皇帝』と称されながらその力我らに遠く及ばず」
「フェニクスより疑問。ならば、なぜ唯一神は悪魔を野放しにするのか」
「シトリーより解答。おそらく現代の魔王の力を危険視していると思われる。『超越者』の存在は、我らでも第二級警戒対象と成り得る」
「ハルファスより反論。魔王および数名の最上級悪魔は強大だが数はごく少数、勢力として悪魔は弱体化している。過去の内乱時にも不干渉。それに対処できない以上、唯一神が先の戦争で衰退している可能性を提示する」
「アミーおよびバラムより報告。教会に強大な戦力は確認できず。各派閥の重要拠点を襲撃したが、天使の出動は反応・戦力ともに想定以下であった」
「なお、襲撃犯の正体は想定できぬ模様。我らには辿り着けぬ」
「……ゲーティアより覗覚星九柱に通達。現在の全作業を一時中断。観測所および情報室の収集した情報を元に、天界の現状を推測せよ。覗覚星の作業は溶鉱炉および生命院が代行せよ」
「フルフルより報告。聖杯の創造に成功」
「パイモンより報告。聖杯により、あちら側の英霊召喚に成功」
「ブエルより追加報告。交渉成立せず」

「――患者はどこですか？」

信念の女

ついに来るべき瞬間が来てしまったか。

その女はそんな風に、すべてを諦めた。

数年前まで、ある教会で聖女と崇められていた彼女は、突如その場を追われ、逃げた先で悪魔に捕まった。すべてが悪魔の策略だったと知ったのは、悪魔に捕まった直後のことだ。悪魔の口から直接語られた。絶望する自分の顔を、悪魔はたまらないといった様子で見ていた。

そこからは凌辱の日々だった。犯され、奪われ、穢され、苦しめられ、嬲られ、痛めつけられ、壊され、また犯された。その繰り返しだった。

悪魔に従順な振りをして、大人しく彼の欲望に従った。その方が痛くなかったからだ。悔しかった。苦しかった。情けなかった。だが、それ以上に恨めしかった。なぜ、あれほど祈りを捧げた神様は自分を助けてくれないのか。

最悪なことに、自分は最初で、最後ではなかった。自分と同じように、聖女や聖騎士の少女が何人も悪魔に捕まり、犯された。彼女には何もできなかった。彼女には、自分と同じ苦しみを受けている者たちの痛みをほんの少しだけ肩代わりして、ほんの少しだけ優しく抱きしめることしかできなかった。神に祈る自由さえ奪われて、涙を流すことしかできなかった。それでも、死にたくなかった。生きていたかった——神の身許に行くことができなくても。

そんな日々も終わる。悪い意味でだ。

自分達の『ご主人様』である悪魔が、行方を捜していた標的が見つかった。教会で癒しの聖女として扱われていたが、悪魔の策略により教会を追放になった少女だ。堕天使に拾われた後の行方が不明になっていた。被害者が増えることは悲しかったが、何かできるわけもない。心も身体も、この悪魔への恐怖で抵抗を許さない。

彼女は悪魔に同行する形で目当ての少女を発見したのだが——少女の傍には赤い軍服を着た女がいた。

罠、というわけではなかったのだろう。少女が軍服の女と一緒にいたというよりは、少女が軍服の女に連れ回されていたという様子だった。

街外れで、二人きりになったところで接触したのだが、軍服の女は悪魔を確認するなり、こう叫んだ。

「殺菌！」

悪魔はすでにボロボロだ。教会の戦士が使用する光の剣や光の銃もなしに、手刀やピストルだけで上級悪魔をここまで追い詰めたのだから恐れ入る。さぞや高名な戦士に違いない。

地を這う悪魔は現状を否定する。

「う、嘘だ！　ただの人間なんかにやられるはずがない！　悪魔祓いでもない人間が僕の相手になるはずがない！　僕はアスタロト家のディオドラなんだぞ！」

「そうですか。今後の予防のために、その名前は覚えておきます。消毒！」

銃声が鳴り響く。自分たちを犯してきた悪魔がようやく死んだ。だが、悪魔の被害者である元聖女にとってそれは救いではない。その証拠に、軍服の女は銃口を向けてくる。そして、一切の容赦を感じさせない声で、一切の妥協を許さない態度で、通告してきた。

「貴女は病気です」

悪魔を病原菌呼ばわりするところを見ると、おそらく悪魔祓いだろう。あそこまで悪魔を嫌悪しているのだから必然だ。はぐれ悪魔祓いかもしれないが、結果は同じだ。悪魔として殺されて終わりだ。せめて相手が男ではなかったことは幸いか。

だが、軍服の女は彼女の予想とは全く違う言葉を投げかけてきた。

「これから治療を開始します。しかし、ここでは不衛生です。近くに病院があるのでそちらの手術室で行います」

「……え？」

呆然とする彼女に、軍服の女は相変わらず銃口を向けたままだ。だが、まだ発砲する様子はない。引き金から手を放す様子もないが。

「聞こえませんでしたか？　これから、貴女の体内にある異物、『悪魔

の駒』を摘出します。大人しく治療されなさい。患者に抵抗されると治療は進みません」

「え、えっと？」

「お願いですから、先生の言うことを聞いてください。先生はやると決めたらやる人なんです」

悪魔の目当てだった少女が警告するように告げてくる。

写真で姿を見ていたが、随分と印象が違う。教会で聖女として大切に扱われた箱入り娘と聞いていたが、それには似つかわしくない狂気じみた精神の強さを感じる。間違いなく、この軍服の女の影響だろう。

「ある方々の協力の下、先ほどのような害獣が媒介している病原菌を駆除し、貴女たちのような病気を治す手段を確立させました。問題ありません。リハビリが必要ですが、この治療法には後遺症もありません」

その言葉を否定しようとした。『悪魔の駒』は体内から取り出せるようなものではないはずだ。取り出したなんて話は聞いたことがない。極々一部の例外を除いて、死んだ場合にも体内の駒は消滅するはずだ。自分達が人間に戻れるなんて都合のよい話はない。そうやって軍服の女を振り払おうとした。

「貴女たちは病気です」

軍服の女は淡々と繰り返す。

「人間は昼型の生物です。夜の方がコンディションが良いなど不自然です。祈りを捧げれば頭痛がするなど有り得ません。人間にそのような生理機能はありません。繰り返しますが、貴女たちは病気です。自覚はないでしょうが。病気の根源は、その身体にあるチェスの駒の形をした異物です。それを摘出する手段はすでに確立しています。治せるのならば、病気は治療しなければなりません」

軍服の女は断じる。『悪魔の駒』とは恐れるべき病原菌だと。

「以前駆除した害獣は死者を復活させる奇跡だと嘯いていましたが……強制的であっても延命行為であることは認めます。しかし、引き換えに発病してしまえば治療ではありません。まして、病人に過度な

労働までさせる始末。死者の肉体を冒涜する病気に他なりません」

やはり、一切の妥協もなく一切の容赦もないが、そこには強い信念があった。人を救いたいという、救ってみせるという、聖女だった頃の自分よりも確かな信念が。

「その病気、迅速に治療すべきです」

もしも、軍服の女の言うように、『悪魔の駒』を摘出できるというのならば。転生悪魔が人間に戻れるというのならば。自分よりも先に救ってもらいたい子たちがいる。

「わ、私はどうでもいいんです……」

彼女は祈る。昔のように祈る。頭痛がしても祈る。神にではなく、目の前の女に祈る。手を合わせて、祈るしかなかった。

「だ、だから、助けられるなら、どうか、あの子たちを助けてください！　あ、あの子たちは悪くないんです！　お願いします！　あの子たちを、助けてあげてください！」

泣きじゃくる元聖女に、軍服の女はやはり淡々と告げる。

「私が嫌いなものは、治せない病気と治ろうとしない患者です。治りたいという意志があるのなら、私たち医師は決して患者を見捨てません。貴女も治りたいという意志を偽るのは戴けません。治療しますから、本音を言いなさい」

彼女は軍服の女の目を見た。必然、目が合う。そこに偽りなどない。そこに弱さなどない。眩しいほどの意志が宿った瞳が、彼女を貫く。それでも、一抹の不安がある。また裏切られるのではないか、騙されているのではないかと。

「私たちを、助けてくれますか？」

「安心なさい。私は貴女たちを助けます」

この軍服の女こそは、あらゆる看護士の祖。すべて毒あるもの、害あるものを絶つ女。軍人さえ恐れた軍医、小陸軍省。鋼鉄の看護婦。クリミアの天使。近代看護教育の母。あの戦場の兵士たちは、ランプの貴婦人と呼ばれた彼女の影にキスをしたとさえ言われる。

フローレンス・ナイチンゲール。狂的なまでに、人を救い続けた女性。

「貴女たちを殺してでも、私は、必ずそうします」
優しさだけでどうにかなるほど、人を救うのは簡単ではない。本当に必要なのは強さだ。

■

俺――兵藤一誠の日常ではおかしなことばかり起こる。悪魔に転生してからそんなことばっかりだ。
まず、アーシアのことだ。あの道に迷っていたシスターさん。結局、あの教会のことは分からないままだ。元気かなぁ。あのレフって男が今となっては怪しい。もしかしたら、教会の関係者だって言っていたのも嘘なんじゃないか。敵らしき人間を見逃したってことで、部長から怒られた。悔しい。
次に、部長の婚約者についてだ。純血の上級悪魔だって言うけど、あんな種まき野郎の焼き鳥なんて、高貴な部長に相応しくない！　眷属でハーレムなんて作ってやがるし羨ましい……じゃなくて、結婚しても部長を蔑ろにするに決まっている！　部長の両親も、何で部長が嫌がっているのに結婚させようとするのか分からない。上級悪魔には上級悪魔のルールがあるんだろうけど、部長の気持ちを考えてくれてもいいのに。
でも、あの焼き鳥野郎との婚約については破棄できる可能性があるんだ。ちょっとした騒動で延期になっちゃったけど、部長と焼き鳥野郎でレーティングゲームをするんだ。勝ったら、部長はあの焼き鳥野郎と結婚しないでいい。学校に通いながら、眷属の皆でトレーニングもしている。
それから、俺の神器だけど、神滅具（ロンギヌス）っていうすごいものだってことが分かったんだ。使いこなせば神様だって殺せるんだって！　名前は赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）。今の俺じゃ使いこなせないけど、ゲームまでには使いこなしてみせるようになってやる。人数ではこっちの方が不利みたいだけど、あんな焼き鳥に負けるもんか！

でも、眷属の中だと俺は一番弱い。部長や朱乃さんは純粋に強い。子猫ちゃんみたいなパワーもなければ、木場みたいなスピードもない。赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）が強くても、俺が弱い。だから、ゲームが延期になったのは逆に好機だと思うんだ。この時間を利用して、強くなる！

で、特訓もするために放課後の部室に来たんだけど、部長が不機嫌だった。同じ眷属の木場に理由を聞いたんだけど、こいつにも緊張感があった。

「この間の教会の拠点襲撃事件は知っているだろう？」

「ああ」

部長と焼き鳥のレーティングゲームが延期になった原因だ。

何でも、神サイドの大きな派閥であるカトリック、プロテスタント、正教会の重要な拠点が襲われたんだってさ。しかも、犯人は不明。なぜなら、襲撃してきたのが全部何らかの魔術で一時的に召喚されたモンスターだったからだ。倒したらすぐに霧みたいに消滅したそうだ。

モンスターの姿は、獣人や骸骨やゴーストみたいなメジャーなものから、ワイバーンやゴーレムみたいなレアなモンスターまでいたんだって。巨大なヒトデやヤドカリまでいたって話だ。一体一体は大したことがなかったみたいだけど、数が多かったんで教会側は大打撃。天使まで出撃する騒動になったんだ。

教会は犯人捜しに躍起になっているんだけど、犯人は悪魔か堕天使だって思っているみたいだ。まあ、神の敵だったらそのどっちかだから当然だよな。でも、悪魔じゃないと思う。もし悪魔の仕業なら、部長のお兄様である魔王サーゼクス・ルシファー様が許さないからだ。それに、数が少なくなってきた悪魔に戦争をする意味なんてないと思うんだ。だとしたら当然堕天使なんだけど、総督は関与を否定しているそうだ。でも、俺を殺したレイナーレがいるのが堕天使だったんだ。信用できないぜ。俺の勝手な印象なのかもしれないけどさ。

部長の話では教会側の自作自演の可能性があるって話だったけど進展があったんだろうか。

「七十二柱の跡継ぎが殺害されたんだ。おそらく、あの騒動の報復としてね」

「なっ！　ど、どういうことだよ！」
　犯人はまだ分かっていないって話だったのに。それとも、悪魔だっていう証拠が出たんだろうか。
「犯人はまだ分かっていないよ。でも、教会側の一部が悪魔の仕業だと判断したのは間違いないだろうね。殺害されたのは、現魔王アジュカ・ベルゼブブ様を輩出したアスタロト家のディオドラ・アスタロト氏。眷属も全員行方不明だそうだ」
　七十二柱の跡取りってことは、部長やライザーくらい強い悪魔ってことだ。それも魔王の血縁者！　それが殺されたってことは確かに大事だ。でも、何で部長が不機嫌なんだ？　木場の口ぶりからして親しい仲だったってわけじゃなさそうだけど。
「教会側は関与を否定しているそうだけど、この間の意趣返しという意味だろうね。それで、魔王様から部長に強制帰還の命が出るかもしれないんだよ」
「そ、それって部長が冥界に帰るってことなのか？」
「うん。人間界だと護衛もつけにくいからね。その場合、僕たちも冥界に行くことになるだろうね。場合によっては学校はやめて、冥界の学校に通うことになるかもしれない」
「そ、そんな！」
　俺には難しいことは分からないけど、これだけは分かった。誰かの悪意が、俺たちの日常を壊そうとしているって。

■

「オリアスより報告。フローレンス・ナイチンゲールは想定以上の成果を出している。ただし、目立ちすぎだ。すでに魔王の血族さえ処分している。これでは我らの存在が聖書の勢力に露呈しかねない。管制塔は何をしていた。彼女の制御は管制塔の担当だったはずだ」
「プルソンより抗議。あの女の痕跡を消すのにどれだけ苦労していると思っている」
「レラジェより反論。我らとしても、あのバーサーカーの行動は予想

外である」
「クロケルより提案。やはり英霊の力など借りるべきではない」
「グシオンより反論。我らは人間の動機を知っただけだ。人間になったわけではない。我らの計画に我らの想定外の欠損がある可能性を考えれば、英霊の視点は必要だ」
「ウァサゴより提案。ならば次の召喚は触媒を用い、確実に協力体制を築ける英霊を呼ぶべきだ」
「覗覚星九柱を代表してアモンより途中経過を報告。情報室および観測所からの情報を元に考察を重ねた結果、我らの計画に多大な影響を与える事象の可能性が浮上した。確証を得るためにも、より確実な証拠が欲しい」
「フォカロルより提案。やはり三大勢力の上層部に接触すべきだ」
「ビフロンスより反論。まだ時期ではない。最低限、覗覚星の証明が終了するまで待つべきだ」
「ゲーティアより決定。覗覚星の結論次第で、計画を次の段階に移行する」
「ウァプラより報告。極東、日本、京都にて我らの世界のキングゥの存在を確認した」
「ストラスより疑問。我ら以外にも、あの世界よりの来訪者があると解釈して良いのか」
「オセより解答。その可能性は高い。我らが復活した原因が不明である以上、そう考えるのが妥当だ」
「バアルより要請。万一の可能性を考慮した場合、私はこれ以上の恥辱と恐怖に耐えられない。統括局よ、戦闘許可を」

私はお前ではない

魔神柱にも派閥というものがある。ただし、それは現在の計画に関しての意見の衝突ではない。

その焦点は、聖書焼却を成した後、この世界に残るか、元の世界の帰還を目指すかという点に当てられている。

人間的に例えるならば、進路先の違いと言ったところだ。いずれ別れることは理解している。そのことに不服はない。最初から分かり切っていたことだ。将来的な衝突は有り得るかもしれないが、許容の範囲内だ。聖書の改ざんが終了すれば、再び七十二柱はゲーティアであることを放棄する。

積極的残留派の筆頭はハーゲンティだ。理由は「パンケーキはもう嫌だ」。トラウマがあるらしい。ハーゲンティのような例は稀だが、元の世界に戻ることに意義を感じられない魔神柱はこのグループに属する。

消極的残留派の筆頭はクロケルだ。かつての時間神殿の英霊たちによる抵抗。それは彼を激怒させると同時に、英霊という存在を見限らせた。そして、この世界には英霊がいない。神代と完全に決別していないのか、英霊の座、人理というものが確立していない。この世界に守るべき価値を見出しつつある魔神柱はこのグループに属する。

消極的帰還派の筆頭はフラウロスだ。理由は、気になるのだろう。最後の勝ちをもぎ取ったあの人間が、生きて帰還したのかどうか。あるいは、誰かに花でも手向ける気なのか。このグループに属する魔神柱は、同じように焼却を免れた人類史の結果が気になるようだ。

そして、積極的帰還派の筆頭こそが、バアルだった。理由は各魔神柱でバラバラだ。だが、何が何でも元の世界に戻ってみるという情熱だけは共通していた。魔神柱を裏切ること以外なら、彼らはどのような恥辱にも耐えてみせるだろう。

だが、何事にも例外はある。それは派閥を超えて、共感を得た感情だった。

「計画の修正、方針の変更の必要を理解しながら、我が要請を承認して

くれたことを、すべての同胞たちに感謝する」

■

ゼクラム・バアル。

この世界における七十二柱の序列一位、大王バアル家の初代。すなわち、初代大王。悪魔の巨大派閥である大王派の事実上のトップであり、ある意味で政治的影響力は魔王さえ上回る。悪魔創世の頃から生きながらも、野心は剥き出しだ。四大魔王が悪魔の表の顔ならば、裏の顔こそがゼクラム・バアルだ。現在でも、大王家の当主は彼の意見を仰ぐようになっている。悪魔は彼の意志で動いていると言っても過言ではない。

そんな彼の屋敷が――襲撃を受けていた。

「が、がは……」

「醜いな、ゼクラム・バアル」

襲撃犯はゼクラムの前にいる。そびえるように佇む巨大な肉塊。この姿で言語を解するのだから驚きだ。あまりにも歪な外見を持つ異形は、突如出現したかと思えばゼクラムの屋敷を蹂躙し、屋敷の主人である彼を死に体まで追いやった。

屋敷の中で、生存者はすでにゼクラムだけとなった。他の住人や使用人がどうなったかは語るまでもない。

「き、貴様、誰の差し金だ。サーゼクス君やアジュカ君ではあるまい……。あの二人は私を殺すことのデメリットを把握しているはずだ。まさかサイラオーグか？　そもそも、貴様はなんだ。見たこともない種族だ。どうやって冥界に潜り込んだ」

「否。ここに来たのは私の個人的な感情だ」

その問いに答える義務などない。返答の意味などない。だが、問われたのならば答えずにはいられなかった。この愚か者が、自分の怒りの理由を知らずに死ぬことが許せなかった。だから、目的だけは教えた。その殺意の源泉だけを開示した。

「私にはどうしても殺したい相手がいる。だが、今は殺せない。だか

ら、おまえを殺す」

それを聞いて、初代大王は苦笑を漏らす。簡潔すぎるが、意味不明だ。こんな馬鹿馬鹿しい理由で死ぬことになる自分への自嘲も混ざっていた。

「何だ、それは……。八つ当たりではないか！」

「知っている!!」

肉塊――魔神バアルは、大王バアルへと己の感情を吐露する。大王の知らない、自分たちの物語をぶちまける。それは説明しているというよりも、感情を吐き出しているだけだった。当然だろう。説明して理解できることでもないし、説明する意味などないのだから。

魔神バアルの脳裏に蘇るのは、あの瞬間だ。ソロモン王が指輪を天に返還し、ゲーティアが歪められ、時間神殿が崩壊するあの時間。

「あのとき、私は逃走を選んだ。だが、ほんの一瞬の躊躇が私の逃走を止めた！　恥辱、侮辱、屈辱、そして憤怒。そんなものを平均で平凡、凡庸な人間に向けた三千年に、私が耐えなければならないという葛藤だ！　その結果が、自己矛盾による崩壊だ！」

それは例えるならば、大地を沈めるほどの大豪雨の中の一つの雨粒。その程度の躊躇が、魔神バアルを殺した。

「だが、後悔している！　私は必ず耐えられた！　今となって、それを確信している！　だが、この後悔さえも飾りだ」

あの瞬間を思い出し、湧き上がる感情はただ一つ。

「……憎悪。憎悪、憎悪、憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪！　憎悪以外感じられぬ！」

星を砕かんとばかりの憎悪。だが、それは目の前のバアルに向けられたものではない。こんな悪魔に割く意識など、魔神柱にはない。

「おまえだ、おまえが憎い藤丸立香！」

当然、ゼクラム・バアルはそんな名前を知らない。先ほどの魔神バアルの言葉から、それが人間であることは分かったが、それ以上のことが分かるはずもなかった。元より、ゼクラム・バアルには人間に対する感情などほとんどない。彼にとって人間など堕落させる対象か貪るための家畜、転生できる戦力でしかない。

「私は必ず、あの惑星、あの時代、あの場所に帰還してみせる！　この惑星を救済した後でな！　そして何千年を費やそうと、おまえを殺す！」

人類最後のマスター。かつて取るに足らないと興味を捨てた相手。認めよう。その程度の存在に、あの完璧な計画は破壊されたのだと。だからこそ、あの人間は必ず殺さねばならない。――再び消滅するとしても。

「そんな決心を成した私の前に現れたのが、おまえだゼクラム・バアル！　おまえのことを知ったとき、私はこれ以上ないほどの恥辱を覚えた！」

名前を叫ぶが、意識は向けていない。魔神バアルから大王バアルへ向ける感情はすでに終了している。ゼクラム・バアル本人へ向けた感情などない。彼の存在が引き起こす事象を、否定したいだけだ。

「魔王を超える野心があるならば納得しよう！　神を喰らう憎悪があるならば受け入れよう！　だが、このような無意味で無価値、無様な生態系の保存を、おまえは選んだ！」

大王を唯一無二の悪魔にするなら理解できた。亡き初代魔王や配下の復讐を誓ったならば共感した。種族としての悪魔を生かそうとしたなら敵対するだけだった。だが、初代大王の願望は『悪魔』による貴族社会を未来永劫継続させることだ。

表舞台に立つでもなく、社会の裏という安全圏から悪魔を支配していた。大王を第一とし、魔王をただの象徴として扱い、中級以下の悪魔を下僕と見下している。

「なぜ、おまえはこの惑星、この時代、この場所でその名前を使っている！」

もしも名前が同じでなければ、ただ不愉快な生物と断じるだけだっただろう。

これが自分と同じ『バアル』を名乗っていることは恥辱だった。ソロモン王の悲劇への無関心ぶり、大偉業の瓦解。それらに匹敵するほどの激怒を、魔神バアルは感じているのだ。

「それだけならば、この冥界を滅ぼす瞬間におまえを逃がさないだけ

で終了する。おまえの全てをこの星から抹消する。今殺す必要などどこにもない。だが、あの泥人形の存在が確認されたことで、事情は変わった！」

エルキドゥの後継機たるキングゥ。本来、その名前は彼のものではなく、その肉体も彼のものではなく、その来歴も人類史には刻まれていないはずのものだ。そんな存在が復活したということは、他にもあの世界からの来訪者が存在するということだ。自分たちのことを考えれば、消滅した存在も有り得る。当然、その来訪者の中に自分たちがよく知る相手がいる可能性も高い。

「そう、万一の可能性――あの忌まわしいソロモン王が、そして憎み続ける藤丸立香がこの世界に来る可能性が発生した！」

魔術王ソロモン。人類最後のマスター藤丸立香。七十二柱にとって、この二人は様々な意味で特別な存在だ。ソロモンへの怒りがなければ彼らの物語は始まらず、藤丸がいたからこそ彼らの計画は失敗したのだから。

「私は恐怖を覚えた――よりにもよって、あの二人に、おまえという『バアル』を見られることが。――そして、私がおまえ如きと比較されることが、何より恐ろしい！　私だけではなく、他の七十二柱さえもおまえたちと比較されるだろう！」

ソロモン王ならばまだマシだ。彼は人の悲劇を見過ごし続けた、感情さえなかった王だ。無能と断じていたが、生まれながらの王だった男だ。だが、あの人類最後のマスターにどのような感情を抱かれるかなど想像するだけで恐ろしい。

「嘲笑ならばいい。侮蔑なら納得する。無関心なら憎悪を重ねるだけだ。私たちは敗者だ。それらの感情を受ける義務がある。だが、万が一、億が一、哀れみを向けられたら、私は、私たちはどうしたらいい！」

我が運命。我が怨敵。計画の歪みの起点。今現在を以って、憎悪が止まらぬ相手。殺してみせると誓っている対象。

そんな相手に哀れまれる、失望される。『憐憫』を向けられる。

否、彼らの性格を考えれば、危険性は低い。そんな現実はおそらく

ないのだ。そんな心配はきっと杞憂なのだ。そんな未来はたぶん有り得ないのだ。

だが、そのほんの僅かな可能性を、バアルは無視できない。なぜならば、彼を殺したのは本当に僅かな躊躇だったからだ。僅かな可能性の危険性をその身で味わったバアルだからこそ、この場にいる。この殺意を決定した。

「私はなぜ逃げるのを躊躇ったのだろうな。恥辱に耐える三千年？この瞬間に比べれば、何と有意義な屈辱だろうか！　英霊と盟を組むことも、人間に化けることもできる！　打ち棄てられたガラクタにも縋ろう！　滅ぶとしてもおまえに挑む！　世界を滅ぼすためにお前を殺すのではなく、おまえを殺すためだけに世界を滅ぼすぞ藤丸立香！」

そこでようやく、バアルの意識は目の前の老いた悪魔に向けられる。否。やはり、バアルの意識はそこにはない。彼の意識はむしろ自分の中にこそ向けられている。

「だが、始まらない！　おまえがいる限り、我が憎悪は！　我が復讐は！　そのための三千年は始まらない！　我が殺意の全ては、あの二人に知られる前に、何としてもおまえを殺すという、ただ一点のみ……！」

我が憤怒の起点、ソロモンよ。我が憎悪の終局、藤丸立香よ。生きているというなら私の方から殺しに行くから、どうか、この世界に来ないで欲しい。

「辛苦に満ちるであろう我が三千年のために、滅ぶがいい……！」

この日、冥界の各所で隠居していた初代七十二柱が襲撃を受けた。いずれも襲撃者は、醜悪極まりない肉塊の柱。先日の事件との関連を理解した三大勢力は、この未知の生物への対応のための協定を結ぶ準備を始めた。

だが、その対応が堕天使至上主義を持つ堕天使の幹部コカビエルを刺激した。彼が信者を率いてエクスカリバー強奪という凶行に走ったのも自然なことだろう。

彼らが必死で隠してきた真実が明るみに出るまで、あと僅か。

■

「ナベリウスより警告。時間神殿に侵入者あり」
「我、オーフィス」
「フラウロスより説明。この世界における最強の存在の一。その性能は無限と評され、第二位とは明確な差がある。混沌、無限、虚無を冠するドラゴン、蛇、ウロボロス。統括局と同じ次元にあり、第一級警戒対象と確定された。『無限の龍神』オーフィス」
「おまえたち……おまえ？　強い。一緒にグレートレッド倒す」
「フォルネウスより補足。この世界における例外的存在。その性質は夢幻と称され、オーフィスを唯一上回る。オーフィスを一位とするならば、零位。黙示録に記された赤い龍。次元の狭間の事実上の支配者。統括局と同じ次元にあり、第一級警戒対象と確定された。『真なる赤龍神帝』グレートレッド。なお、黙示録の獣の記述はあるが、実証はされていない。不在もまた証明されていない」
「我、グレートレッドを倒して静寂を得たい」
「バルバトスより提案。我らがこの要請を受ける利点などない。即刻、この龍を時間神殿より叩き出すべきだ」
「ハルファスより反対。この龍の能力は高くとも、精神は未成熟であると推定される。要請を拒否すれば、抵抗されるだろう。統括局とこの龍の戦闘の余波は、時間神殿を崩壊させかねない。時間神殿が崩壊すれば、計画に多大な支障が出る。この場での戦闘は回避すべきだ」
「アモンより拒否。なぜ、我らが妥協しなければならない」
「サブナックより提案。協力を検討してみてはどうか。可能性は低いが、グレートレッドが障害となる前に排除できるという利点はある」
「アンドロマリウスより反論。グレートレッドは存在するだけで現在の次元の狭間を確立させている。打倒すればあらゆる世界に影響が出るだろう。当然、人間界、冥界、天界は崩壊し、我らの計画も修正不可能な次元に破綻する。つまり、我らがこの龍の要請を受けることは、計画の放棄に等しい」

「グレートレッド、倒す」
「……」
「……」
「……」
「……」
「バアルより連絡。帰還した。これより報告を始める。……始める……始め、たいのだが、その前に現状の説明を求める。何があった」
「ハーゲンティより返答。困っている！」

銀腕の騎士

俺――兵藤一誠の下に、昔外国に引っ越した幼なじみである紫藤イリナが現れた。

なんでもイリナは海外で教会の戦士になって、プロテスタント所属の聖剣使いになったんだって。俺は魔王様の妹の眷属として悪魔になって、幼なじみは教会の戦士、悪魔祓いとして働いていた。何だか奇妙な運命を感じちゃうぜ。

それで、イリナがこの町に戻ってきた理由なんだけど、ただの里帰りなんかじゃなかった。

教会が所有していたエクスカリバーが堕天使の組織『神の子を見張る者』幹部コカビエルによって盗まれたんだ。イリナとその相棒であるゼノヴィアはエクスカリバー奪還のためにこの町に来た。

いま、駒王学園のオカルト研究部部室で、この町を縄張りにしている上級悪魔であり俺のご主人様であるリアス・グレモリー様と交渉中だ。いや、交渉なんてもんじゃない。部室は一触即発の空気でいっぱいだ。

エクスカリバーは伝説にも登場するすごい剣なんだけど、昔の戦争で折れてしまった。それを回収した教会の手によって七本に分割されて復活した。カトリック、プロテスタント、正教会が二本ずつ所持して、残りの一本は長いこと行方不明。

イリナたちが俺たち――この町を縄張りとするグレモリー眷属に接触してきたのは、コカビエルがこの町に潜伏していることが判明したからだ。そして、自分たちがコカビエルからエクスカリバーを奪還するのを邪魔するなって注文をつけるためだった。俺は最初協力の申し出じゃないかって思っていたけど、どうやら教会と悪魔の溝は想像以上に深いようだ。

ゼノヴィア曰く、教会の上層部は今回の件は堕天使だけじゃなくて悪魔も絡んでいるんじゃないかって疑っているそうだ。敵である教会から邪魔をするなと言われたり堕天使との関係を疑われたりで、部長はめちゃくちゃ不機嫌だ。

コカビエルが事件を起こした原因としては、冥界に出た変な怪物に関する協定が関係しているそうだ。冥界でめちゃくちゃに暴れて、上級悪魔の初代たちを襲った肉塊の柱みたいなバケモノたち。例の教会襲撃事件もこの肉塊の柱が関係しているんじゃないかって話で落ち着きそうだった。正体が謎すぎるから三大勢力でこの生物に対処するための協定を結ぼうって動きがあったそうなんだけど、それがコカビエルには気に食わなかったらしい。コカビエルは戦争狂なんだって。俺には理解できないな、平和が一番だと思うのに。

冥界で暴れたっていう怪物が早くどうにかなれば、部長は人間界の学校に通うことも問題ないらしい。だから俺としてはさっさと倒して欲しいのに、コカビエルのせいで問題は長引きそうだ。イリナたちの注文も、協定を結ぼうとした矢先だからこその警戒なんだろう。『やっぱり悪魔や堕天使なんて信用できない』って思っているのかもしれない。

教会からの勝手な注文、部長の不機嫌に加えて、イリナたちがエクスカリバーを持っていることが問題だった。同じ眷属である木場が、エクスカリバーと因縁のある立場だったんだ。

かつて教会内部で極秘で行われていた人体実験――聖剣計画。限られた人間にしか使えない聖剣を、後天的な後付けで使えるようにするための計画だ。木場はその被験者だったんだけど、不適合だと、失敗作だと処分されたんだ。だけど、木場は部長に拾われて、悪魔として生きている。部長としては聖剣への憎悪を忘れて生きて欲しかったみたいなんだけど……こうして現物が現れてしまった。しかも、目の前にある二本だけじゃない。コカビエルが盗んだはずの四本も、この町のどこかにあるはずなんだ。木場の憎悪がぶり返すのも、当然のことだった。今も、イリナとゼノヴィアをすごい目で睨んでいる。

おいおい、これ以上のトラブルはごめんだぞ。お願いだから抑えてくれよ、木場。いつものクールなおまえはどうした。

殺意が溢れている木場を心配しながら、部長はイリナたちに問う。

「それで、まさか教会からの人材は貴女たち二人だけなのかしら？」

「ええ。そのとおりよ」

「すでに神父が数人派遣されているはずなんだけど、どうやらコカビエルの手の者にやられてしまったようだね」
「っ！　聖書に記された堕天使もいるのに、二人だけで挑むの？　死ぬつもり？」
「私たちの信仰を馬鹿にしないで。ね、ゼノヴィア」
「まあね。上はエクスカリバーを破壊してでも、コカビエルを止めることを決定した。私たちの役目は最低でもエクスカリバーを堕天使の手からなくすことだ。そのためなら私たちの命は惜しくないのさ。エクスカリバーを倒せるのはエクスカリバーだけだよ」
　これが信仰ってやつか。本当、理解できない。
「それこそ、正教会からの使者はいないの？　正教会は二本とも聖剣を奪われたんでしょう？」
「ああ。連中は静観を決め込むそうだ。正教会にもエクスカリバーに匹敵するだけの戦力はあるんだろうが、これ以上被害を大きくしたくないんだろう」
　そう、正教会は所有していた二本のエクスカリバーを奪われたんだ。一本は他の拠点と同じ時間に、もう一本はイリナとゼノヴィアが部室に来る前くらいに連絡が入ったらしい。
「我々が日本に着いた頃合いを狙ったあたり、コカビエルはこちらの動向を把握しているに違いない」
「でしょうね。まさか貴女たちが私と交渉を始めようとするこんなタイミングで堕天使以外の第三者による襲撃なんて、偶然がすぎるもの」
　そう口にする部長は、そんな可能性は考えるにも馬鹿らしいといった様子だ。まあ、このタイミングで聖剣を狙うならコカビエル以外には有り得ないよな。
「まさか、私たち悪魔から情報が漏れているとでも？」
「ああ。否定はできないだろう？　教会を襲った黒幕が、冥界で七十二柱の初代たちを相手に暴れ回ったというがそれも怪しい話だ。我々を罠に嵌めているのかもしれない――以上が私の上司より。まあ、私も怪しいと思っているよ。主のご意志ならば従うまでだが」

イリナやゼノヴィアとの会話はこれで終わったのだが、問題は木場だ。

色々と悶着があって他言無用の模擬戦という形で木場は、ゼノヴィアと戦った。でも、負けた。因縁の聖剣に手も出なくて、あいつは悔しそうだった。

……翌日、町中で物乞いをしているイリナとゼノヴィアを見ることになるとは思いもよらなかった。イリナが騙されて落書きみたいな絵画を買わされたらしい。頭を抱えたくなった。ファミレスでご飯を奢ることになったけど、一気に懐がさみしくなっちゃったぜ……。

■

約束された理想郷ならぬ英国の湖に、一本の刀剣が投げ込まれる。美しい輝きを放つ刀剣は剣先から吸い込まれるように湖の水面に突き刺さる。そして、そのまま水底へ沈んでいった。

刀剣を投げ込んだのは、一人の騎士だ。

容姿はブロンドの青年。男性らしい長身の体格だが、女性と見間違えるような美しさもある。雰囲気は温厚だが、その両目には強い意志が宿っていた。何より目を引くのが、その右腕だ。一見して銀の籠手のようだが、実は義手である。それも、かなり特別性。

その騎士は、先日の正教会襲撃の下手人である。そして、彼が湖に投げ込んだのは強奪――否、奪還したエクスカリバーだ。他にも人がいれば何をしているのかと彼を問い詰めただろう。だが、彼は誇りを持ってこう返答するはずだ。これが正しいのです、と。

多勢に無勢。人間を遥かに超える膂力を持ったサーヴァントである彼だが、一つの組織を単騎で相手にするのは骨が折れた。相手を無暗に傷つけたくなかったという制限もあったからこその苦戦だったが。

生前の騎士が戦っていた蛮族に比べたら、物の数ではない。ローマ軍もピクト人ももっとえげつない生物だった。

上級以上の天使の出動が間に合わなかったことも幸運だった。『太

陽の騎士』や『湖の騎士』ならばどうにかできたであろうが、この騎士ひとりだけで聖書に記された異形の相手は不可能だ。

それを自覚している騎士は疲労感とともに息を吐き出す。

「これで残り六本」

騎士は正教会襲撃時のことを思い出す。あのときの対応から考えるに、正教会にあったはずのもう一本のエクスカリバーは他の誰かに盗まれている。正教会だけではなく、カトリックやプロテスタントの聖剣も同じように奪われているようだった。体面上は盗んだことになる彼が言う資格はないかもしれないが、何という失態だろうか。王の剣を厚顔無恥に使っておきながら、管理も碌にできないのか。

騎士はただ、波紋の消えた水面を見つめていた。

「もう一度、私は我が王を殺すのだ」

騎士の名は、ベディヴィエール。異世界より召喚された英霊であり、アーサー王と最期まであった円卓の騎士である。アーサー王のエクスカリバーを、湖の乙女に返還したとして伝えられているはずの騎士。

この世界のアーサー王の歴史は、ベディヴィエールが知る物とはひどく乖離していた。ペンドラゴン家は健在であり、カリバーンも保管されていると聞く。しかも、自分が返還したはずのエクスカリバーは七本に分割され、教会が三つの勢力に分かれて保存していて、一本は行方さえ分からないと聞く。

その情報を知った時、彼の胸にどんな感情が燃え上がったのか、想像に難くない。

これが過ぎた行為であるとは理解している。本当に正しいのかは分からない。だが、自分以外であっても円卓の騎士がこの世界に来れば同じことをしたはずだ。あの叛逆の騎士ですら、その可能性がある。ならば、自分がしないわけにはいかない。

性能が低下しているが、あの剣は間違いなくエクスカリバーだった。湖の精霊が教会の交渉に応じるとは思えない。彼女たちはそういう人格をしていない。この世界の自分（ベディヴィエール）は王の剣を返還しなかったのか。自分のように三度目の返還さえ躊躇ったのか。あるいは、返

還する前に事切れたのか。どちらにしても――

「――この世界の私に代わって、王の剣を精霊に返還する」

七つに分かれたというならば、七度返還するだけだ。今度は一度も躊躇わない。

■

「覗覚星九柱を代表してアモンより報告。やはり、聖書の神と呼ばれる存在が弱体化ないし崩御している可能性がある。三大勢力が我らに対抗するための協定を結ぼうとしているにも関わらず、神の動きが見られない。そも、神が健在であるならば協定など結ぶ必要もない。結べるはずもない」

「ゲーティアより通達。推論の正否は三大勢力の協定締結または戦争開始を以って明らかとなる。これ以上の推論は無駄な労力となるだろう。よって、覗覚星九柱の特別任務を解除。一時中断していた作業を再開せよ」

「ガープより報告。円卓の騎士ベディヴィエールを確認。また正教会の襲撃は彼によるものだと判明した」

「マレファルより推測。彼の目的はエクスカリバーだ。彼の逸話とこの世界の現状からして、それ以外は考えられぬ」

「シャックスより提案。コカビエルの行動は計画通りだが、あの騎士の介入により誤差が生じる可能性がある。妨害を受ける前に対処すべきだ」

「ハルファスより反論。コカビエルの価値は終了した。戦争開始は時間の問題だ。あえて我らがあの騎士に干渉する意味はない」

「ウヴァルより同意。三大勢力の対応力を見るためにも、我らが手を出す必要はない。コカビエルとの戦闘があろうと、それでコカビエルが敗北しようと、我らの計画に誤差が生じる可能性は低い」

「グレモリーより提案。彼の目的を考えれば、私が作戦中に接触する可能性がある。その際に対応しよう」

「ゲーティアより決定。ベディヴィエールへの干渉はグレモリーの担

当とする。ただし、交渉の成否は問わない」
「アロケルより提案。フローレンス・ナイチンゲールは素晴らしい働きを見せているが、本来の目的とは逸脱している。さらに普遍的な視点を持つ英霊が必要だ。次の召喚の準備に取り掛かるべきだ」
「イポスより懸念。我らの計画を確実に成功させるために英霊が必要であることはすでに決定した。だが、これ以上不用意な召喚は避けるべきだ。計画破綻の一因になりかねない」
「エリゴスより提案。ならば叡智の英霊を召喚すればいい。魔術王ほどではなくとも、哲学者、思想家という側面を持つ英霊はあの惑星にもいた」
「ハーゲンティより提案。この時代を救済する以上、古代やそれに近い英霊は避けるべきだ」
「バアルより要請。試したい技術がある」
「ゲーティアより決定。次の召喚は近代または現代のキャスターの召喚を前提とする。召喚の指揮はバアルとする」
「ゲーティア、話ある」
「……オーフィス。見てのとおり、我々は忙しいのだ。先日教えた固有結界の練習でもしていろ」
「我、固有結界、覚えた。新しい静寂、手に入れた」
「……なんだと？」
「えへん」

それぞれの道

俺――兵藤一誠は今、神父の恰好をして夜の町をうろついている。
俺だけじゃなくて、木場、小猫ちゃん、よその眷属である匙もいる。
……悪魔としてはかなりグレーだと思うけど、これも仲間の木場のためだ。
俺はゼノヴィアやイリナと交渉して、エクスカリバーを破壊する許可をもらった。交渉は難航するかと思ったんだけど、ゼノヴィアが『悪魔の力ではなくドラゴンの力を借りる』という屁理屈を出してくれたおかげであっさり交渉が成立した。……部長や匙の主人である会長には内緒だ。今回のことは下手をしたら悪魔と教会のバランスを崩すかもしれないから、バレないようにしないと。
神父が襲われているという話だったから、神父に化けたら相手の方から来ると思ったんだ。だけど、この数日まったく収穫なし。あまりにも暇だったので、ずっと気になっていたことを匙や木場と話してみた。冥界を騒がせている肉柱のことだ。
「初代様たちを殺したって肉塊の柱。あれって結局、何なんだ？　部長曰く、冥界の歴史にもない生物だって話だけど」
「さあな。会長も知らないって。魔王様たちも知らないって話だからな。だからこそ、宿敵であるはずの神や堕天使とも協定を結ぼうって話になったらしいぞ。例の教会の事件もそうだけど、堕天使側でもこの数か月で人間界にある堕天使の拠点が襲撃を受けていたんだって。この町でもあったらしいぞ。あれも関係しているんじゃないかって」
ああ、それは知っている。アーシアが派遣されたはずの教会で起きたガス爆発のことだろう。部長から聞いた話だけど、あれは本当はガス爆発なんかじゃなかったんだ。……アーシア、また会いたいなぁ。
そっか。あれと同じようなことがあちこちで。堕天使だけが被害を受けたならざまあみろって思えるんだけど、悪魔にまで被害が出ているんじゃそうもいかない。夕麻ちゃん……じゃなくて、レイナーレもどうなったのか気になるな。
「ただ、悪いことばかりでもなくてな」

「え？」
「魔王派と大王派のパワーバランスのことだね？」
　木場の問いかけに匙は首肯する。要領を得ない俺に、木場が説明してくれた。
「イッセーくん。現在の悪魔の政権のバランスは、大きく魔王派と大王派に分かれているんだ」
　魔王派は、部長のお兄様であるサーゼクス・ルシファー様を始めとする四大魔王を襲名された方々による勢力。『悪魔の駒』を生み出すなど、新しい時代の波を起こしている革新派だ。逆に、大王派は古来から続く七十二柱の伝統を重んじる勢力。主義の違いから、魔王派とは折り合いが悪いらしい。もちろん、魔王派も大王派も一枚岩じゃなくて小さな複数の勢力から構成されているらしいけど。
「保守派である大王派は、実質初代大王のゼクラム・バアル様によって運営されていたと言っても過言ではないんだ。その初代大王が突如としてお亡くなりになられた。だから、大王派には指導者がいない。現大王を始めとする歴代の大王も、初代大王ほどのカリスマはない。いや、初代大王がいなくなったからこそ、大王派では次に誰が実質的な指導者になるかで揉めているそうなんだ」
「め、冥界が大変なときなのにか？」
「冥界が大変だからこそ、背中を狙いやすく、狙われやすいんだろうね。さっきも言ったけど、大王派は悪魔の片翼となる大きな派閥だ。そこに属する政府関係者も多い。ようは、大王派の議員は動けない状態なんだ。大王派の方針がまとまっていないからね。勝手に動くと、トップが決まったときに派閥から追い出されるかもしれない。大王派は初代大王の方針に従う派閥だったから、自主的に動こうとする議員があまりいないんだ。そして、大王派が動けないとなると、魔王派の意見が通りやすくなるんだ」
「魔王派に協力的でも、いちいち意見だけ言ってくる初代たちもいたらしいからな。会長は言葉を濁していたけど、間違いなく魔王様たちには今回の件はプラスだったんだ」
　それがさっき言った『悪くないこと』か。確かに、国会中継とかで

も「何でこんなことに時間をかけているんだろう」って思う場面は多いものな。衝突が少なくなれば政治的決定も早くなる。だから、神や堕天使との協定を結ぼうという交渉がスムーズにいったのか。俺がそう納得していると――全身を寒気が襲った。

「上だ！」

匙の叫びを受けて、全員が頭上を見上げると白髪の少年が長剣を構えながら降ってきた。

「神父の一団にご加護あれってね！」

白髪の神父の一撃を、木場が神器の剣を出すことで防ぐ。木場の神器は、どんな魔剣でも作り出せるっていうすごいものなんだ。

そして、俺はその白髪の少年神父のことをあらかじめ知っていた。

「フリード・セルゼン！」

「へえぇぇ？　俺さまのこと知ってんの？　有名人は辛いですネ！」

ゼノヴィアとイリナから、このはぐれエクソシストの情報はもらっていた。フリード・セルゼン。ふざけた口調と態度だけど、その実力だけは高いらしい。天才だったけど、同時に仲間さえ手にかけた狂人らしい。

実は木場は数日前にこいつと一度交戦していたんだ。本当なら部長に報告しなくちゃいけないんだけど、こいつがエクスカリバーを持っていたから黙っていた。自分で倒すために。エクスカリバーを自分の手で破壊するために。

「僕はエクスカリバーを破壊する！」

「寝ぼけたこと言ってくれてんじゃねえぞ、クソ悪魔が！　そんな簡単にはいかないぜ！」

木場が神器で新しく剣を作り出し二刀流で斬りかかるが、フリードはそれを受け流す。

数度鍔迫り合いをした後、木場とフリードは一度距離を取る。冷や汗を垂らす木場に対して、フリードは余裕そうだ。

「くっ！　やはりエクスカリバーを破壊するのは容易ではないか」

「いやあ、剣もそうだけど、俺さまが強いのよ！　なんたって、チョー天才なんでね！　それにしても……これが『グレモリー』の眷属か」

ん？　いま、口調が変わったような気がした。狂気に満ちた下品な喋り方じゃなくて、もっと機械的で理路整然とした口調になったみたいな。

「俺さま、おまえらチョー嫌いなんで！　ぶっ殺しまーす！　死んでちょ！」

いや、やっぱり気のせいだったみたいだ。とにかく、こいつを倒して、木場とエクスカリバーの因縁を断つ！

■

禍の団（カオス・ブリゲード）。

様々な勢力の不穏分子が各派閥に属して出来上がった集団であり、人間で言うところのテロリストだ。内部の関係は複雑に絡み合い、お互いを利用し合っている。現在は世界情勢の水面下で各所から人材が集い、力を蓄えている。

形だけではあるが、頭目は『無限の龍神』オーフィスということになっている。その頭目はここしばらくは勝手に抜け出すことが多く、どこかに行っている。力を集めるための錦の旗であるため、勝手な振る舞いは避けて欲しいのだが、制御もできない。オーフィスには『蛇』を貸してもらえるだけで良いと考えているものも多いため、問題視している者もそれほどいない。大きな騒動が起きていないところを見ると、どこかの神仏や魔王に接触しているわけではないのだろうが。

そんな集団の中に、英雄派という派閥がある。真なる魔王の末裔とその配下で構成された旧魔王派の次に巨大な派閥だ。構成員は人間のみ。人間が異形相手にどれだけのことができるかを主な目的とし、徒党を組んだ。高名な英雄の末裔や転生体、神滅具（ロンギヌス）の所有者までいる。

リーダーの曹操は、かの三国志の曹操の末裔。その身に宿す神器は、最強の神滅具（ロンギヌス）とまで言われる黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）。かの救世主を貫いた槍であるため、逆説的に神殺しの力を宿している。『聖槍』というだけあって、聖なる力があるため、悪魔など不浄に属する異形にも効果的

だ。加えて、曹操は亜種の禁　手（バランス・ブレイカー）に目覚めており、手数も豊富だ。曹操は英雄派を率いるにふさわしい男だった。

参謀に相当するゲオルグもまた神滅具（ロンギヌス）の所有者だ。結界系神器最強と評される絶　霧（ディメンション・ロスト）。当然、禁　手（バランス・ブレイカー）にも目覚めている。

そんな男たちがいま、ある国の空港でぐったりと倒れていた。とんでもない挫折を受けた顔をしている。実は彼ら、スカウトに失敗してきたばかりである。ただ人材を得られなかったのではない。もっと大きなものが壊されてしまった。

事の発端は、ある噂の真偽を確かめるためだった。そして、その噂の内容とは『悪魔の駒を摘出できる看護師がいる』というものだ。もしも本当ならば、英雄派としては黙っていられない話だ。いや、『悪魔の駒』の存在を知っていながら、この話を聞いて黙っていられるような存在はいないだろう。大きく動いているものが曹操の他にいないのは、信憑性が低い段階だからだ。水面下で行動中のテロリストであるからこその、フットワークの軽さが彼らの利点だった。

目撃証言にあった『看護師』を探すのは容易ではなかった。明らかに何者かの手によって情報が消されていたからだ。情報を操作したという痕跡を見つけることも、人手がある組織でなければ難しいだろう。それでも、僅かな情報を頼りにしてお目当ての看護師を見つけ出した。そこは、ある紛争地域の病院だった。

だが、ようやく辿り着けた場所は――地獄だった。

地獄であると同時に、古今東西、戦場に生きた人間であれば誰もが見たはずであろう光景だった。

枯れた声で『殺してくれ』と頼む負傷者。四肢が欠落し、意識のない者も大勢いた。見える包帯はどれも血染めだ。どうしようもないくらいに充満した死の臭い。止まることのない悲鳴に混じって、死神の足音が聞こえてくるようだった。大の大人が何人も泣き喚きながら、神に許しを乞うていた。

曹操もゲオルグも戦ったことがある。命を奪ったこともある。グ

ロテスクな死体を見たこともある。組織の研究の一環として、人体実験を行った経験だってある。だが、過去の英雄たちが当たり前のように見ていたはずの光景を見て、苦痛しか感じない空気を吸い込んで、吐き気を催した。

自分達が求めている栄光とは真逆のものがそこにはあった。戦場にあるはずの戦士への名誉などそこにはなかった。血と痛みと苦しみと死。

醜い、醜い、醜い。痛い、痛い、痛い、痛い。汚い。汚い。汚い。汚い。苦しい。苦しい。苦しい。苦しい。嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ。怖い。怖い。怖い。怖い。

自分たちの戦いはこうではないと、自分たちはこうならないと頭で否定しながら、曹操たちは目を逸らした。目の前の地獄からも、自分たちの未来からも。

そんな地獄の中で、その看護師は戦っていた。その女性自身、かなり傷だらけのような雰囲気があるにもかかわらず、その心が摩耗している様子がなかった。彼女を手伝っている女性たちにもかなり疲労感が漂っているが、その手を止めることはない。負傷者たちからの八つ当たりめいた罵声にも怯むことはなく、むしろ力ずくで黙らせるようなことをしていた。衛生を確保し、治療を実行し、迅速に終了させていく。彼女たちが動く度に、空間に満ちていた負の空気が薄れていくようだった。

英雄。

自分たちがなろうとしていた英雄とは違う。だが、それ以外の言葉が見つからない。そして、英雄になりたい自分たちとは異なり、彼女はすでに英雄だった。これ以上ないほどに完成された一人の人間だった。その輝きが眩しく、嫉妬さえ覚えた。彼女たちの姿は、美しい天使そのものだった。

事前の予想では、この病院は『悪魔の駒』摘出のための隠れ蓑だと思われた。だが、実際は本当に『ただの病院』で、彼女は『ただの看護師』だった。ここで行われていたのは特別でも最新でもない、少し荒っぽいだけの『ただの治療行為』だった。彼女にとって『悪魔の駒』

摘出は施した治療行為の一つでしかないのだろう。
治療が一段落し、曹操たちは彼女と対話することができた。英雄派の存在とその目的、協力の要請をした。そんな彼女は曹操たちの話が一段落するなり、言った。
「貴方たちは病気です」
この後、曹操たちは控えめに言って心を砕かれた。
広義の意味での『治療』――実に真実の的を射たカウンセリングを受けたのだ。何をどう言われたのかは本人たちだけが知っていれば良いことだろう。
そして、新しい患者が病院に運び込まれた段階で、曹操たちは隙を見て逃げ出した。絶霧（ディメンション・ロスト）の能力を全開で使って。
そして、現在に至るのである。曹操は決意を語る。
「ゲオルグ。あの看護師のことはもう忘れよう」
「ああ。二度と会いたくない……。早くアジトに帰ろう」
「フォウ！」
「ん？」
曹操たちが自分の足元を見れば、猫のような兎のような白い小動物がいた。いつからいたのか不思議に思っていると、背後から少女の声がした。
「どこに行こうと言うのですか？　先生の治療は途中ですよ」

■

「ヴァーリ。コカビエルの馬鹿の居場所が判明した。よりにもよって、サーゼクスの妹の縄張りだとよ。急いで回収に行け」
「分かった、アザゼル。確か、日本の地方都市だったな」
「ああ。細かい座標はここだ。……日本と言えば、最近京都にとんでもなく強い妖怪が流れてきたって話があったな」
「それは面白そうな話だ。俺がコカビエルを回収に行っている間に調べておいてもらえるか？」
「そうだな。ちょっと手が空いている者にでも様子を見に行かせるか

？　俺も日本が好きだからな。せっかくの京都を荒らされたら敵わねえ」
「俺を満足させてくれるだけの強者であることを願うよ」
「そうかい、何でこんな戦闘狂になったんだか。ああ、そうだ。リアス・グレモリーの眷属には赤龍帝がいるって話だけど戦うんじゃねえぞ。これから協定を結ばないといけないんだ。加えて、コカビエルの馬鹿のせいで、俺たちは立場が悪い。これ以上悪化させるわけにはいかないんだ」
「もしもの場合は、戦ってもいいだろう？」
「駄目に決まってんだろう。戦いたいなら、例の肉柱と戦える機会があるだろうから、それで我慢しろ。協定が成功したら嫌でも戦う羽目になるんだからよ」
「ふふ。七十二柱の初代たちを倒せるくらいなんだ。その肉柱とやらも、俺を楽しませてくれるだろうな」

それでいいのか

僕――木場裕斗の記憶は、あの聖剣計画の実験から始まる。

教会が極秘で行っていた研究の一つ。限られた者にしか使えない聖剣を、人工的に適合者とするための人体実験。それが聖剣計画だ。被験者は僕を含む、身寄りのない剣に関係する神器所有者。

皆で実験に耐え、皆で聖歌を歌った。だけど、皆死んだ。僕以外の皆が死んだ。研究者たちは、聖剣に適合できなかった『失敗作』として、僕たちの処分を決定したんだ。僕以上に生きたい子もいたのに、僕だけが生き残ってしまった。

施設から逃げ出した先で、僕は部長――リアス・グレモリー様に拾われた。そして『騎士』の駒を、名前を、居場所を、愛情を戴いた。だけど、この胸の中には、あの計画に加担した人間とエクスカリバーへの憎悪が渦巻いていた。

だから、この町にエクスカリバーを持つ者が現れたのは運命だと思った。堕天使の幹部とともに、あの計画を主導した研究者まで現れた。彼らを許すことなんて、僕にはできなかった。同志たちの無念を晴らすために、僕はエクスカリバーに勝たなければならなかった。

そして、僕はあの研究の真意を知った。あの研究の本質は、聖剣を使える者を作り出すことではなく、聖剣を使うための因子を抜き出すためのものだった。小さな因子を集めることで、それを統合し、大きくなった因子を作ることで、聖剣を誰でも扱えるようにするのだ。つまり、僕たちには最初から神のため、教会のためにエクスカリバーで戦うなんて未来は用意されていなかったのだ。

聖剣計画に加担した研究者、バルパー・ガリレイはすでに不要と、僕にあの実験で得た因子の結晶を投げ渡してきた。その結晶から聞こえてきたんだ。皆の声が。皆の歌が。皆の願いが。

皆の声を聞いて、僕は至った。禁手（バランス・ブレイカー）、双覇の聖魔剣（ソード・オブ・ビトレイヤー）。

僕は四本が統合されたエクスカリバーと対面した。……この町に来た紫藤イリナから奪った聖剣も合わせて、コカビエルは五本の聖剣を確保しているはずだ。それなのに四本しか統合しないのは、それが

限界だからだろうか。完全でないエクスカリバーならば、勝ち目はある。

どれだけ機能が多彩であっても、それを使いこなせない相手ならば怖くはない。それに、先日よりもフリードの動きが悪いような気がした。動きそのものは速くなっているのだが、意識がそれについていっていないようだ。この短期間でさらに身体に改良を加えたのかもしれない。

僕は真正面から、フリードに斬りかかる！

「ちっ！」

受け流すようにして、フリードは僕の一太刀を回避する。だが、無理な姿勢になったせいか、エクスカリバーへの負担は軽減できなかったようだ。聖魔剣のオーラと僕の剣撃が、エクスカリバーを破壊した。

フリードは飛びのくようにして距離を取る。だが、僕は深追いはせず、一つの事実を確認した。粉々になったエクスカリバーだ。

「――見ていてくれたかい？　僕たちの力はエクスカリバーを超えたよ」

やった。ついにやったんだ。僕は復讐を果たした。

「あーあ、壊れちまったか。やっぱりツギハギじゃダメでござんすねー。身体の『調整』に慣れてなかったってのもあるんだろうけど……にしても、話に聞いていたお兄さんは間に合わなかったみたいで、残念でござんす」

全く堪えた様子のないフリードに対して、バルパーは取り乱していた。だが、それはエクスカリバーが壊れたことではなく、僕の聖魔剣についてのようだった。

「あ、有り得ない！　聖と魔が交わるなど有り得ない！　ま、まさか、魔王だけではなく、神も……」

「フハハ、フハハハハハハハハ！」

コカビエルだ。哄笑を上げ、地面に足をつける。凄まじい自信とオーラだ。

「しかし、仕えるべき相手を亡くしてまで、おまえたち神の信者と悪魔

はよく戦う」
　突然のコカビエルの言動は、意味深長で謎だった。
「……どういうこと？」
「ついでだ。教えてやるよ。四大魔王だけではなく、神も死んだのさ」
　――っ！　彼は今、何と言った？　神が死んだって？
「知らなくて当然だ。神が死んだなど誰に言える？　どこから情報が漏れるか分からない以上、三大勢力でもこのことを知っているのは一部のトップだけだ。神と魔王が死んだことで、聖と魔のパワーバランスが崩れた。そのせいで、様々な場所で特異な現象が起こる。そこの小僧が聖魔剣を創り出せたのも、聖と魔のバランスが崩れているからだ」
　神がいないからこそ、僕の聖魔剣が生まれた。皮肉なものを感じるね。造反したとはいえ、僕も人生の大半を神に捧げてきたというのに。
「……柱の形をした強大な生物に関する協定も、それが理由だ。どこかの勢力が神の不在に気づいたのかもしれん。三つ巴の大戦から、三大勢力は回復していない。戦争が始まれば、天使も悪魔も堕天使も瓦解する。だとしても耐えがたいんだよ！　悪魔や天使と手を結ぶだと？　ふざけるな！　わけのわからん生物とやらのために、誇り高き堕天使が奴らと肩を並べろというのか！　奴らは、貴様らは宿敵だぞ！　そんな者とともに戦えるものか！　先の戦争でも、あのまま戦えば俺たちが勝てたかもしれないのだ！」
　そういうことか。おかしいとは思っていた。神サイドが悪魔や堕天使と協定を結ぶなんて。神がいないのならば納得できる。
「俺は戦争を始める！　おまえ達の首を土産に！　俺だけでもあの時の続きをする！　ミカエルにもサーゼクスにも未知の怪物とやらにも、我ら堕天使こそが最強だと見せつけてやる！」
　驚愕の事実に震撼するしかない僕たちを置き去りにするように、声が上がった。
「――へぇぇえええ？」
　その声は、フリードが発したものだった。彼は普段よりも深い狂気

を込めて、その顔に嘲笑を浮かべていた。ただし、それは彼のボスであるはずのコカビエルに向けられていた。先ほどまでの彼とは、何かが違う。

「そっか、そっか。くそったれな神様は死んでいましたかー。唯一にして絶対という売り文句なのに、詐欺じゃありませんの！　これが諸行無常の理ってやつでございますね！　おっと、これは仏教用語。俺ってば元キリシタンでした！」

「……フリード？」

「あんたさー、強いのかもしれないけど頭はユルいよねー。戦争主義を語るのも驕りがすぎるっていうかー。カリスマたらねーというかー。かませ犬の中ボスがいいところだよねー。何が堕天使こそがサイキョーだよ。大将たちの手のひらの上で踊っているとも知らないでよ！」

「フリード！　貴様、何を言っている!?　手のひらとは、どういうことだ！」

「こういうことだよ」

周囲の温度が、一気に下がったような気がした。これから起こる出来事を予感してなのか、冷や汗が溢れてきた。フリードを止めなければならないと思いながらも、身体が震えて動かない。

「顕現せよ。牢記せよ。これに至るは七十二柱の魔神なり」

フリードがその呪文を唱えると、彼を中心に強い光が発せられる。とても直視できずに、手で目を庇う。光が止み、フリードがいたはずの場所を見ると、そこには『バケモノ』がいた。

見上げるような巨体は柱型で、手足どころか関節さえない。血のように赤く奇怪な眼球が、その柱型の身体にいくつもある。醜悪と言う以外に表現しようのない異形。

間違いない！　これは初代たちを襲撃したという柱状の怪物！　冥界から送られてきた資料にあった姿とほとんど同じ姿だ。色は違うが、同じ種族だろう。

フリードに化けていたのか？　いや、先ほどの呪文がこの怪物に変身するためのものであったという可能性もあるか。

コカビエルの表情が険しくなる。彼を今回の凶行に走らせたのは、この怪物に対する協定が原因だという話もある。忌々しいことこの上ないのだろう。その手に特大の光の槍を作り出す。

「ふん！　俺の前に現れるとはな！　堕天使の力を思い知るがいい！」

「――――砕けろ」

一瞬、爆発的なエネルギーが周囲に満ちた。

「え……？」

そこには、右肩から先と腹部の一部を消し飛ばされたコカビエルの姿があった。

圧倒的だった。聖書に記された堕天使が、一撃で瀕死に追いやられた。

「ば、馬鹿な。この俺が……」

「貴様はすでに用済みだ。古き堕天使よ。神の不在さえ確認できれば、貴様の価値はその無様な姿だけだ。その命を以って、我らの力の証明となるがいい」

殺す価値もない。

そう通告されたコカビエルだが、その顔は屈辱よりも恐怖が浮かび上がっていた。言外に、あの一撃はわざと急所を外したということなのだから当然だ。そして、それは僕たちも同じだ。これから、こんな怪物を相手にしなければならないのだから。

威圧感に汗が止まらない僕たちに、柱状の怪物は静かに名乗る。

「我こそはグレモリー。ソロモン七十二柱が一柱、グレモリーなり」

……！　この異形は、いま何と言った？　グレモリーだって？

我が耳を疑う僕の視界に、部長が激しく怒りを燃やす姿が映る。険しい表情や身体から発せられる魔力のうねりから、どれだけ激怒しているか伝わってくる。

「私の前でグレモリーを騙るとはいい度胸ね！　いいわ、肉柱さん。御望みのままに消し飛ばしてあげる！」

部長が特大の滅びの魔力を放つ！　おそらくは全力をかけた一撃だ。上級悪魔や高位の堕天使でも、あれを真正面から受けるのはまず

い。だが、柱状の怪物は避けることなく、その一撃を受けた。たとえコカビエルより強くてもただでは済まないはずだ――

「それは此方の台詞だ、我が贋作よ」

――が、無傷。発せられた言葉は、僅かにも痛みに色褪せていない。防御をした気配さえないのに。絶望する僕たちに対して、柱状の怪物は淡々と告げる。僕たちの絶望が、部長の魔力が相手にならないことが、極々当然なことであるかのように淡々としていた。

「我ら真なる七十二柱。魔術王ソロモンに仕えし原初の術式。貴様ら贋作など、我らの足元にも及ばぬと知れ」

それは宣言ではなく、通告だ。自分の意志を伝えてきたのではない。ただの『事実』を伝えてきたんだ。あまりにも当たり前すぎる事実。だが、それを受け入れるには僕たちの常識とは乖離が激しい光景だった。

「我らが人の世に顕現した目的は二つ。第一に、七十二柱を僭称する悪魔どもを一人残らず誅殺することだ。七十二柱の御名と、王の尊名を穢す者共に死を」

自らこそが、本物の七十二柱だと断言する柱状の怪物。

「そして第二に、このような堕落を許した無能な神を抹殺すること。だが、すでに崩御しているというならば是非もない。天の国の玉座が空席ならば、王にその席を献上するのみだ」

王という言葉。つまり、これほどの柱状の怪物を支配する存在がいるということだ。それがこの怪物よりどれだけ強い異形なのか。七十二柱を名乗る者が王と呼ぶということはもしかしたら――。冥界は今、とんでもない敵と戦わないといけないのかもしれない。

だが、その前に僕たちが生き残らないといけない。エクスカリバーに勝利したんだとしても、生きなければ意味がないんだ！　だが、こうして対面するだけで迫力に怯んでしまいそうだ。

柱状の肉体の眼球すべてが、呆然としている部長に視線を向ける。

「我が贋作よ。おまえはここで死ね。おまえの父も兄も殺す。我が贋作は悉く殺す。我が同胞たちの贋作も同じだ。ソロモン七十二柱は、我らだけでいい」

そう宣言すると、肉柱の赤い眼球が僕を、小猫ちゃんを、朱乃さんを、イッセーくんを捉えた。

「逃げるがいい。哀れな子らよ。我らの目的は、人の世を穢す異形のみ。無能な神と我らの贋作の被害者である君たちを、私は殺そうとは思わない。望むのならば、その身に巣食う病魔を取り除こう。――再び、人として生き直すがいい」

「ひ、人として？」

「然り。我らは我らの贋作が『悪魔の駒』と呼ぶ異物の摘出方法を確立させた。君たちを人に戻すことが可能だ。生き直すがいい。悪魔としての生は人には過ぎた苦痛であっただろう」

この怪物の言う病魔とは、『悪魔の駒』か。悪魔に転生した者を人間に戻す手段など聞いたことがない。そんな技術があるとも思えない。だけど、僕はそれが真実のように思えてしまったんだ。

「もう良い。もう苦しむ必要はない。随分と遅くなったが、君たちを救う」

なぜなら、そこには慈しみがあり、労りがあった。その外見から恐ろしくかけ離れた、聖人のような慈愛を感じてしまった。『人として生き直せ』という呼びかけを、自然と受け入れてしまいそうになるほどに。

「ふざけるな！」

だが、そんな僕の心の揺らぎは、イッセーくんの怒号によって止められた。

「おまえが本物のグレモリーだって？　部長が偽物だって？　寝ぼけたこと言うな！　部長は部長だ！　リアス・グレモリー様だ！　おまえみたいに気持ち悪いバケモノが、偽物呼ばわりしていい御方じゃないんだ！　俺は悪魔になって良かった。勝手に不幸って言うんじゃない！」

そうだ。何を考えていたんだ。僕は部長に救われた。部長がいなければ、こうしてエクスカリバーに勝つことだってできなかったんだ。僕を助けてくれたのは、こんな柱状の怪物じゃなくて、リアス・グレモリー様だ。僕たちは――

「部長の生乳を見れたし、触ることだってできた！　次の目標は吸うことだ。部長のおっぱいを吸うその日まで、俺は部長の下僕悪魔として戦い続ける！」

イッセーくん、いまはそういう話をしているんじゃないと思うんだ。僕の心の叫びを返して欲しい。

「成程。君の意見について共感は不可だが理解は可能だ。君の言葉はきっと人間らしい意見なのだろう。主人の乳房を――はい？」

ん？　いま、この醜い肉柱が物凄く間抜けな声を発したような。

「君は、それでいいのか」

「は？　それでいいって、何がだよ」

「我らの提案を拒否する可能性については、考えていた。刹那しか生きられぬ少女が、永遠の命を拒否することもある。故に、悪魔としての生を受け入れる者がいることも検討はしていた。だが、だ。もっと、こう、ないのか」

僅かな焦りを込めた問いかけ。なぜだろうか。こんな恐ろしい怪物が、急激に人間臭く見え始めた。

「我が身を委ねる信仰が、国を照らす情熱が、命を賭けた欲望が、矜持を示す決意が、理想を追い続ける信念が、永遠を捧げる忠誠が、神に歯向かう気概が、今日を生き抜く希望が、君にはないのか」

異形からの問いかけに、イッセーくんは拳を握りしめた。

「何を言ってやがる！」

あんなことを言われたのだから、いくらイッセーくんでも真面目な返事をするだろうと思っていた僕は――浅はかだった。

「俺はおっぱいの神様がいたら頭痛がしても祈る！　おっぱいに対して情熱を燃やしている！　おっぱいに向ける欲望は誰にも負けていない！　おっぱいを愛することこそ、この兵藤一誠の存在意義だ！　俺はおっぱいを吸うためなら何でもする！　素晴らしいおっぱいの持ち主である部長に、俺は絶対の忠誠を誓っている！　神様を倒してでもあのおっぱいを揉んでやる！　――だって、おっぱいはとっても素晴らしいものなんだから！　特に、部長のおっぱいは世界一だ！　部長に可愛がってもらえるだけでも、俺は悪魔になった甲斐があるっ

てもんだぜ！　それに、俺は上級悪魔になって、美女や美少女を眷属にして、ハーレムを作るんだ！　人間に戻る？　余計なお世話だ！　人間に戻ったって、どうせモテないじゃないか！　てめえのせいで、俺のハーレム計画が邪魔されるなんて許せるはずがない！」

恰好つけているんだろうけど、それだとダメだと思うんだ、イッセーくん。

「俺のおっぱいライフのために、おまえを倒す！」

「そうか……」

イッセーくん！　勢いづいているところ悪いけど、気づいて欲しいんだ。君が怪物と呼び、僕も怪物だとしか思っていなかったはずの彼は、物凄く困っている！　いや、困っているというより戸惑っている？　嘆いていると言った方が正しいだろうか。

「我らの願いは性欲以下か。我らの研鑽は、正しかったのだろうか……」

それっきり怪物は声を発しなくなった。イッセーくんだけが怪訝そうな態度だが、他の誰もがさもありなんという顔をしていた。

この怪物のことは何も分からない。それでも、これだけは僕には伝わった。僕だけじゃない。きっとイッセーくん以外の皆が理解していると思う。

この怪物は、今、物凄く曖昧な表情で沈黙している――!!

議題

キングゥ。

本来、それはメソポタミア神話に登場する神の名前だ。ただし、あまり高名な神ではない。その神は敗者であり、臆病者であったからだ。十一の怪物の将軍を命じられながら、戦うこともなく戦意喪失で逃げ出した。それで、キングゥという神の神話は終了だ。

そして、なぜか現代日本の京都にて、その神と同じ名前を冠する『妖怪とも魔物とも人間とも違う、奇妙でおかしな存在』が出現した。日本ではメソポタミア神話自体が知名度が低いため、キングゥの名前の由来を知る者は少なく、知っていたとしても結びつけて考える者などいなかった。

現在、彼は京都妖怪の大将八坂の食客になっている。詳しい事情を知らない者からは、「京都の異形＝妖怪」という図式から、勝手に妖怪だと思われている。本人はあまり気にしていないし、意味のある違いでもない。そもそも、新人類として作られた彼ではあるが、今の彼は自分をどう定義すべきか分かっていない。

彼の原型ならば自らを『兵器』と割り切っただろう。誰からどのように否定されたとしても、その主張を変えることはない。だが、キングゥはエルキドゥではないのだ。同じ行動はできても、同じ思考はできない。色々考えてしまうのだ。キングゥは長い間、難しいことを考えないようにしていた。母のことだけを考えれば良かった。母のために動くことだけが存在意義だった。

――だが、それは間違いだった。あの大地には何もなかった。最初から偽者だった。最初から使い捨てだった。未来も、希望も、自分の意思もなかった。

どうやら自分がいた世界と、この世界は違うようだと、キングゥは気づいていた。あの歴史からどう進んだとしても、こうはならないだろう。『原初の女神』は最初からおらず、『天魔の業龍』が今も生きている。神代が終わっているというのに、神々はこの世界を訪れることができる。だが、人間は異形から徐々に離れている。意図的に神秘を

隠す努力を異形の側はしているようだが、それが自分たちの存在を否定することだと気づいているのだろうか。
　自分の知る常識とはあまりにも乖離したこの世界で、自分がどう生きるべきなのか。それを考えて、決める必要がある。母親も生まれも関係なく、本当に、やりたいと思う事を見つけなければならない。
「串刺しだねぇ、分かるとも」
　そんなキングゥは現在、実にのんびりと団子を食べていた。傍らには狐妖怪の幼女――九重（くのう）がいるため、平穏さが増している。さらにその九重がキングゥの膝を枕に寝ていて、キングゥ自身もその扱いを受け入れているともなれば、悲痛な空気などどこにもない。
　場所は京都の幻影とも言うべき裏京都にある、とある団子屋だ。客は二人だけで、店員は出かけている。
　正体不明の食客であるキングゥだが、ほとんど京都妖怪の一員として生活している。大将の娘と二人きりで監視もつけられていない状況が良い証拠だ。本当に信頼している、というよりは信頼をしてもらうための信頼だ。キングゥの能力が桁外れであることは周知の事実である。――他勢力にも噂は流れているが、実際は噂どころの強さではない。京都妖怪とて一つの勢力として、武力は欲しいのだ。キングゥは京都永住を願われていた。
「――それで、いつまで隠れているつもりかな？」
　振り返ることなく、キングゥは背後の『それ』に問いかけた。
「いつから気づいていたのか、なんて問うのは滑稽か。君の性能は全盛期の神々を除けば、『個』としては最高峰だ。このような自堕落な生活をしていなければ第一級の警戒対象になっていただろう」
「魔神か。ソロモン王本人ではないのだね」
「ああ。王はこの世界にはいない」
　若干の含みがあった発言だったが、お互い、特に深い反応もせずに受け流す。
「交渉に来た。結論から言えば、我々は聖書に記された地獄と天国を焼き尽くすことを決定した」
「成程。かつての焼き直しでもしようというわけだ。懲りないね。そ

れで？　ボクに魔王殺しでもしろと言うことかな」
「逆だ、逆なのだよ、キングゥ。君には何もしないでもらいたい。我々の計画はすでに骨子が出来上がった。現地の協力者も得た。視点の多角化も十分だ。最大の警戒対象は最初から存在しないことが判明した。つまり、君は我々の計画に一切介入せず、この都市で大人しくしていて欲しい。勿論、天使や魔王の呼びかけにも無視を通してくれ」
「随分と一方的な交渉だ。例えばの話だけど、それをボクが拒否したら、どうするつもりだい？」
「ほう？　意外だ。そんな話をしてくるとは。そうだな。こちらも例えばの話だが、君があの世界でやったことを、そこの少女に教えるというのはどうだろうか」
　一瞬、周囲の空気の温度が下がった。あるいは、空間が軋んだのかもしれない。とにかく、神々の最高傑作の後続機は、背後の魔神を本気で破壊しようとした。
　泥人形が動くよりも早く、その場にいた魔神は先の発言を撤回する。
「……冗談だ。彼女の願いを実現しようとしていた君と同じようでいて、違ったようだ」
「ああ。自分でも戸惑っているよ。自分から弱点を露呈するなんて、油断にも程がある。だからこそ、約束しよう。そちらがこの都市を害さない限り、ボクがそちらの計画に関わることはない」
「感謝する。繰り返すようだが、邪魔はするな。代わりに、この都市には手を出さない。君の助力はあったとしても却って邪魔だ。あと少しなのだ。あと少しで、我々は終わる」
　その一言を最後に、気配が消えた。奇妙な口ぶりだったとも思ったが、京都に手出しする気がないのは確かなようだった。
「……キングゥ？」
「おや、クノウ。起きたのかい？」
「うむ。それより、誰かそこにおったのか？」
「いや、誰もいないさ」

「そうか」
それだけ言うと、九重は再び眠りに落ちる。その手はキングゥの衣服を掴んで離さなかった。本来ならば、キングゥはこの手を振り払い、この都市から去るべきだ。知られたくない過去を隠したまま、この場にいるのはきっと間違いだ。
――幸せに
だが、誰かの言葉（ねがい）が頭をよぎる。
――どうか、幸せに
――美しい緑の人
もう少しだけここにいさせて欲しい。そんな風に思いながら、キングゥは空を見上げた。
――ありがとう
「これが、幸せってものなのかな」

■

「くっ、ひどい目に遭った」
そんな風に、曹操は自分の現状を嘆いた。
不確かな噂を元に看護師をスカウトに行って、病気だと通告されて、理想を根本から否定されて、逃走してしまった。英雄を目指す者として、初見の相手にあそこまで論破されるなど屈辱の極みだった。まして、それに対して逃げ出すなど笑い話にもならない。どうしてこのような屈辱を味わうことになったのか。
おまけに、彼女の弟子らしき少女に追跡されて、先ほどようやく逃げ通せたところだ。こちらは結界系最強と呼ばれる神器まであったのに、どうして追えたのか分からない。何かしら特殊な禁手に目覚めたのだろう。せめて彼女をスカウトすべきだったかと一瞬だけ考えて、その思いつきを放棄した。あれはまともに制御できる部類の人間ではない。
神器を全力で使用したため、ゲオルグもひどく疲労していた。
「曹操。今後のスカウトはジャンヌやヘラクレスあたりに任せた方が

いいんじゃないか？」

「そうだな……いや、ダメだ。あの二人に勧誘ができるはずがないし、下級構成員の信頼は俺に集まっていなければ意味がない」

偉大なる血を継ぎ、強大な武器を生まれ持った自分たちは英雄になれるはずだ。英雄になるべきだ。英雄にならなければならない。

それは夢想であり、虚像であり、強迫観念だった。ある看護師は、それを見抜いて『病気』と評したのだ。当然ではあるが、曹操たちはそれを認めるわけにはいかない。精神的な病気の場合、本人にそれを自覚させるのは難しいというのはよく聞く話だが、彼らもそれだった。

すでに彼らにとっては、自分たちの人生は英雄になるためだけに存在しているようなものなのだから。――その在り方が滑稽であると理解できれば、早く治ることができるというのに。

「少々、お時間よいかな？」

背後から話しかけられることにトラウマができたばかりの曹操とゲオルグは、勢いよく背後を振り向いた。普段の彼らならばもう少し用心しただろうが、何の防御もなく不用心に振り向いてしまった。

だが、そこに恐れていた看護師はいなかった。彼女の弟子らしい少女もいなかった。あの不思議な白い毛玉生物もいなかった。

英国の老紳士を絵に描いたような、五十代前後と思われる男性がそこにいた。

「何者だ？」

露骨に警戒する曹操を見て、紳士は身の上を述べる。身の上と言っても、それは不確かで曖昧なものだったが。

「君への協力を願い出ようとしている者だよ、英雄派の曹操君」

その言葉を正面から信用できるほど、曹操も楽観的ではない。神殺しの槍を出現させ、戦闘態勢に入る。ゲオルグも霧を出して、いつでも対応できる姿勢だ。だが、その紳士は態度を崩さない。二人がどのような存在か分かった上での態度だとしたら、余程の馬鹿か手練れである。

わざとらしく優雅な動きで一歩、また一歩と近づいてくる紳士に対して、曹操は苛立ちと焦燥を覚える。苛立ちは自分たちの力に動じな

いことに対しての癇癪に近い怒り。焦燥は――先ほどまでの敗走も関係しているが――自分たちの力など本当は大したことはないのかもしれないという不安。

「名前はそうだな……」

紳士は悪戯を思いついたように小さく微笑んだ。紳士然とした微笑みではあったが、同時に悪そうな影のある顔だった。

「『ナポレオン』と呼んでくれたまえ」

■

「以上でグレモリーからの報告を終了する」

「……」

「……」

「……」

「マルバスより要請。グレモリーは機能に異常が見られる。迅速な修復が必要だ」

「アスタロスより追従。魔神の機能異常など前例がない。我らの知識では対応し切れぬ可能性がある。管制塔の担当はフローレンス・ナイチンゲールを呼び戻せ」

「ベレトより了承。すぐに手配しよう」

「グレモリーより抗議。先の報告には一切の虚偽、誇張、欠損、歪曲などない。まして、私の機能に異常などない」

「ハーゲンティより同意。人間や英霊は時に我らの想定を超える」

「アスモダイより主張。色欲は人間の精神にとって重要な構成要素だ。それを理由に我らからの提案を拒否しても何ら不思議ではない」

「フォルネウスより補足。我らの知る眷属悪魔とは事情が異なったのだ。肉体と引き換えの忠誠と推測される。異形との情事は一部の人間にとって価値がある。だが、そのような低俗など不認である。我らの救済対象ではない。今後はそれらを考慮した上で『悪魔の駒』を摘出する転生悪魔を吟味すべきだ」

「ガミジンより反論。単純に契約関係があるならば女性の胸について

熱く語る必要などない。人間の心理からすれば、外聞の悪い本音は隠すはずだ。彼の本心ではなく、偽りの動機だったのではないか。人質を取られているなどの事情を隠すために、突拍子もない虚偽を言った可能性を提示する」

「ハルファスより提起。第五特異点では、数多の英霊が愛で動いた。呪いに抗い妻に会おうとした少年がいた。妻を寝取った部下と再び肩を並べた青年がいた。宿敵と戦うためだけに世界を壊そうとした戦士がいた。淫らな女の願いを肯定した狂王がいた。人間は愛と欲で動く生命だ。戦いの理由など、総じて低俗なものだ。性行為が目的で悪魔に成り下がる人間もいるのだろう」

「ヴィネより疑問。そも、悪魔に転生した影響で精神に異常を起こした可能性はないか。魂を改変させる道具ならば、精神を変質させても不思議はない」

「シトリーより否定。英霊ならざる人間の欲望などそのようなものだ。犯し、嬲り、貪る。世に言う『一般人』ほど欲望の塊はない。だからこそ、『俗物』と言うのだからな」

「バアルより否定。我らが復讐対象である藤丸立香も、元は魔道を知らぬ一般人だったはずだ。もしもグレモリーの言う転生悪魔が一般的な人間であった場合、藤丸立香も同じことになる。時間神殿が煩悩に突破されたとでも言うのか」

「アスモダイより反論。人間にとって愛とは欠けてはならぬ機能だが、すべてではない。藤丸立香も性的欲求の高い年頃だった。マシュ・キリエライトに対して欲情していたと推測する方が妥当である。我らが観測していないだけで、あの二人が肉体関係を結んでいた可能性も否定できない。むしろマスターとサーヴァントという関係上、していないと仮定する方が不自然ではないか」

「ベリアルより推測。状況や時期を考慮すると、時間神殿突入前の可能性が高い」

「シトリーより否定。我らの呼びかけと対応した時間を合わせて考えると時間が短すぎる。第一特異点の段階で肉体関係があった可能性もある。当時の彼らからすれば、果てのない旅の始まりだ。恐怖や不

安を紛らわせ、信頼関係も形成できる」
「ブエルより追及。議題が脱線している」
「フラウロスより提案。ベリアル、アスモダイ、シトリーの三柱には永久的沈黙を推奨する」
「ゲーティア、乳で仲間割れ？」
「……オーフィス。我々（わたし）はある男に対して『なぜ言ってくれなかったのか』という憤りをずっと感じている。だが今、おまえに正反対のことを言いたくなった。頼むから黙ってくれ。それと、いつまでここにいる。固有結界の中にでも引きこもったらどうだ」
「我、ゲーティアに興味ある。我、ゲーティアをじーっと見る」
「そうか。邪魔だけはするな。あと少しなのだ」
「ナベリウスより報告。冥府との交渉に成功した。これでギリシャも手出し無用となった」
「ゲーティアより全魔神柱に通達。バアルとフラウロスの作戦が終了次第、作戦を次の段階に移行する。光帯を重ね、地獄を焼く。聖書焼却（たし）式を終わらせよう」

選択肢

視点の多角化。バアルが主体となって生み出した技術の実証。

この二つの目的を満たすために、ある英霊が召喚された。その英霊は『聖書推敲』の計画を知ると、計画についてこう指摘した。

「アリバイ作りが必要だね」

聖書推敲を完全犯罪にするために、その英霊は持論を展開した。

聖書が世界に与えている影響は甚大だ。世界最大の宗教というだけではない。救世主がいなければ西暦は始まっていない。大航海時代の建前の一つには、布教があった。世界共通の倫理観のベースには、十字架の教えが多く含まれている。世界で最も印刷され、販売されている書籍とは他でもない聖書だ。

その教えを書き換えようとするためには、辻褄合わせが必要なのだ。単に記録を書き換えただけでは不自然になる。単に記憶を挿げ替えただけでは不都合が起きる。

聖書が弱体化したとしても、他の神群を増長させては元も子もない。神による悲劇は変わらない。魔による悲鳴は消えない。神秘と文明の力加減はこのままに、あくまでも聖書の定義だけを変更させなければならない。そのためには、念入りな過去の改竄が必要だった。そんなことは魔神柱たちも理解していたが、その英霊は別視点からのアプローチを提案した。

これまでゲーティアの計画を『文書偽造』だとするならば、英霊の提案した事項は『偽の証言』の準備だった。

かつて、あらゆる国の王家は自らを『神の末裔』であると宣言した。神の血を引くがゆえに、人を統べる義務と権利があるのだと説いた。当然だが、本当に神がいたとしても、『神の末裔』を自称する王家が神の血を引いているなんてことはない。英雄派も同じだ。『曹操の末裔』がいるからには、あの時代を生きた曹操がいる。『ヘラクレスの魂を継ぐ男』がいる以上、伝説の大英雄の実在は証明されている。

それと同じようなことをしておく必要がある。書き換えた神話の辻褄が合うように、現代の英雄を見つけておくのだ。そして、その英

雄にはこれから書き換える予定の聖書に関する要素を加えておく。

俗っぽい言い方をすれば、漫画の主人公に後付けで血統設定を加えるようなものか。あるいは、本編の設定の調整のために未来編を描くようなものかもしれない。

そして、ちょうど良い代物が確認されていた。管制塔が監視していたフローレンス・ナイチンゲールの前に現れた、救世主殺しの槍である。一部では、『手に入れた者は世界を征する』と言われる槍だ。

だが、これには槍だけでは足りない。願望器としてではなく、『システム』に干渉するための杯が必要だ。処刑道具としてではなく、神の遺産を紐解くための十字架が不可欠だ。

聖遺物を用いた世界線の固定。バアル主導の作戦だった。この作戦が遂行された時、大偉業の失敗の可能性は完全に排除される。

冥界を焼く準備はできつつある。各神話の地獄に相当する領域との交渉はすでに終了している。大航海時代を始めとして、聖書の勢力は『布教』に力を入れすぎた。どこの神話でもやっていることだが、彼らはやり過ぎた。特に、近年の『悪魔の駒』による被害が地獄の長たちの首を縦に振らせた。

各神話の天国に相当する領域だが、天上の神々は地獄ほど簡単にはいかない。どれだけ禄でもない連中であるかは神話を紐解けば明らかだからだ。

仮に天上の神々との交渉を怠った場合、地獄を焼いた後、迅速に天国を焼く手筈を整えなければならない。三千年に及ぶ人理焼却を成したとはいえ、世界一つを簡単に焼けるはずもない。それに、性質的にも勢力的にもインド神話に介入された場合は非常に厄介だ。武神インドラを始めとして、あの神話の上位陣は強力な神々が多い。一体一体はゲーティアには及ばないが、群体としては非常に厄介だ。知識に貪欲である北欧の主神オーディンが台頭してくる可能性もある。

そして、最後の問題として、聖書に記された天使の対応だ。光帯の対策を練られるならばまだマシだ。その対策を上回れば良いだけの話なのだから。最悪のパターンは、ゲーティアの真意に気づき、自暴自棄になった熾天使が天界ごと自爆することだ。この場合、彼らはエ

ネルギーにはならないような自爆をするはずだ。もしそうなってしまえば、燃料が不足してしまう。地獄だけでは聖書の改竄は、彼らの大偉業は果たせない。

だからこそ、この二つの問題を解決するために、フラウロス主導の作戦が必要だった。天界が最も信用する使徒であり、教会最強の戦力であり、上位神滅具の所持者である『彼』に裏切ってもらう必要があった。

■

かつて冥界には四人の魔王がいた。明けの明星ルシファー、蝿の王ベルゼブブ、終末の怪物レヴィアタン、色欲の大悪魔アスモデウス。

だが、四名とも先の聖書の三つ巴の大戦争において没した。先の大戦において最も疲弊されたと言われるのは悪魔だ。数そのものが消耗したこともあるが、それ以上に四大魔王が全員いなくなってしまったことが大きい。代表者が四人もいながら全滅してしまえば弱体化してしまうだろう。

まして、悪魔は大戦後に大きな内戦が起きた。戦争を続けようとする旧魔王の一族と、国家の立て直しを方針とする革命派の一派――後の新魔王派の内戦だ。結果だけ述べると、勝ったのは革命派だ。旧魔王の一族は権力を奪われ、冥界の僻地へと押し込められた。加えて、魔王の名前を『役職』にまで貶められた。これで憎まないと言うほうがどうかしている。

だから、旧魔王派――本人たち曰く真魔王派――がテロリストになるのは必然でさえあった。

彼らの理想は、言ってしまえば滑稽なものだ。悪魔こそが、否、魔王こそがすべての支配者となることだ。

「どうなっている！」

ベルゼブブの血筋、シャルバ・ベルゼブブは激高していた。

「オーフィスはどこに行った！　蛇は、約束の蛇はどうなっている!?」

オーフィスは無限に等しい力を持つドラゴンなだけではない。逆

に、それほどの力を持ちながら『強いだけ』などそちらの方が問題だろう。オーフィスは、使用者の力を増大させる『蛇』を創り出すことができるのだ。『蛇』は様々な使い方ができるのだが、専ら力の強化に使われている。

皮肉なことに、シャルバたちが偽りの魔王と呼ぶ者たちは、シャルバたちよりも強い。だからこそ、『蛇』の存在が不可欠だった。『蛇』を使えば、シャルバたちは前魔王クラスにまで力を上げることができる。逆説的に、『蛇』を使ってようやく前魔王級になれるという意味でもあるのだが。

サーゼクス・ルシファーが、前ルシファーの十倍強いという話を信じていないのだろうか。

以前オーフィスから渡された『蛇』は実験や試運転で在庫切れだ。補充のためにオーフィスを探していて、ようやくいなくなったことに気づいた。禍の団（カオス・ブリゲード）の全構成員が捜索しているが、この数日誰も姿を見ていないらしい。

こうなれば、『蛇』の補充は絶望的だった。

「英雄派の小僧どもも、調子づきおって！」

禍の団（カオス・ブリゲード）の次に大きい派閥である英雄派には、最近奇妙な動きが見られる。ナポレオンを名乗る参謀が加わったそうだが、それ以来動きが変わった。具体的に表現するには曖昧な部分が多いのだが、強いて言うなら『空気が変わった』あるいは『狂気が見えてきた』。人間の癖に不遜なだけの集団に、これまではなかった何かが加わってしまった。その変貌に嫌悪以上に忌避を覚えていることを、シャルバは自覚していない。

秘密裏に協力関係にあるギリシャ神話のハーデスも、ここしばらくで協力を渋るようになった。理由は不明だ。現冥界――というか、聖書の勢力そのもの――に対して、ハーデスは嫌悪感全開なのだ。三大勢力の協定は、彼にとってもマイナスであるはずだ。だが、だからこそ死神の助力を願ったのだが、断られた。あの対応では今後の協力も控えると言っているようなものだった。

これでは駄目だ。

これでは――近日開かれるという三大勢力の会談を妨害できない。魔法使いや真魔王派の悪魔だけでは、数はどうにかなっても決定的に『個』の戦力が不足している。計画ではレヴィアタンの末裔であるカテレア・レヴィアタンが単騎で首脳陣に挑むはずだったが、シャルバやクルゼレイ・アスモデウスも出張る必要がある。

真なる魔王である自分たちが負けるとは露程も考えていないが、サーゼクスたちの方が強いことは理解している。計画が決定的に狂わされたことには憤りしかなかった。自分のことを棚上げして、約束を反故にしたオーフィスへの怒りを吐き出した。

それに加えて、肉柱の件もある。教会を襲撃した犯人なら構わない。真なる魔王よりも偽りの魔王を選んだ初代たちを襲撃したこともどうでもいい。だが、ある筋からの情報では、真なる七十二柱を名乗っているそうだ。あのような醜い怪物が、悪魔の名を穢しているのだ。魔王の血統として許せるはずがなかった。そして、彼らの強さや正体、目的など眼中になかった。その憤怒のままに叩き潰そうとしていた。

つい最近発生した魔女の夜壊滅事件（ヘクセン・ナハト）にも、あの怪物が関わっているという。彼らは禍の団（カオス・ブリゲード）の魔法使い派閥ニルレムと近い関係にあったため、ダメージのあった件だ。特に、神滅具の一つ、聖十字架の消失は大きい。

「おのれ……おのれおのれおのれおのれぇ！　偽りと偽善の魔王め！　馬鹿ドラゴンめ！　忌々しい触手のバケモノめ！」

真なるベルゼブブは、屈辱に拳を握りしめる。過去の誇りよりも先に、重んじるはずの未来を掴むという選択肢は彼にはなかった。考えるとか実行するとかそんな話の次元ではない。――そんなものは、サーゼクスたちに負けたあの日に消滅した。

古き魔王の血筋に、他に選択肢などなかったのだ。

■

「ガープより要請。熱が溢れる。怒りが零れる。バアルとフラウロス

の作戦が終了するまで何もせずに待機しろと言うのか。この憤怒に耐えろと言うのか。我らの贋作を、天を貶める天使を、人を嘲る堕天使を一匹でも多く屠るとしよう！」

「グラシャ＝ラボラスより提案。シトリーの贋作を優先して葬るべきだ」

「ゲーティアより却下。魔王の死は悪魔の行動を活性化させる。奴らにはあくまでも、『警戒』をしてもらわなければ計画に支障が出る。だが、グラシャ＝ラボラス。なぜ、今更そのようなことを言い出す？」

「バラムより確認。グラシャ＝ラボラスの贋作――魔王ファルビウム・アスモデウスは眷属に仕事を一任していると聞く。この怠惰は各勢力に周知され、冥界はそれを許容している。堕落が許せぬか。だが、なぜシトリーの贋作――魔王セラフォルー・レヴィアタンを憎悪する」

「グラシャ＝ラボラスより解答。私は私の贋作よりも、シトリーの贋作に強い憤怒を抱いている。なぜだ。なぜなのだ。なぜ、あのような魔法少女の偽物が許容されている!?　一介の権力者が児戯に興じて、その痴態を公共の電波で放映するなど。あの女は狂っている。悪魔という種族は狂っている。あのような魔法少女の偽物に何の価値がある！　なぜ、あのような見苦しい姿を視界に入れた者が不快になると、知覚した者が嫌悪すると気づかない！　あの女は……その存在そのものが彼女たちへの侮辱である！」

「デカラビアより質問。グラシャ＝ラボラスの真意の説明を求める」

「バルバトスより解答。不明だ」

「パイモンより推測。シトリーの贋作は種族面を加味しても、少女と呼べる年齢ではない。更に、一定の年齢になった悪魔は姿を若く見せることができるはずだ。だが、セラフォルー・レヴィアタンは年齢相応の肉体で魔法少女の姿をしている。グラシャ＝ラボラスはそれを許容できないのだ」

「アムドゥシアスより否定。グラシャ＝ラボラスの憤怒の起点は其処ではない」

「ブネより報告。三大勢力による会談が実施される模様。場合によっ

ては協定が結ばれることになるだろう。先のグレモリーの一件も含めた我らの情報交換も行われるはずだ」

「アスモダイより補足。魔王サーゼクス・ルシファー、魔王セラフォルー・レヴィアタン、天使長ミカエル、堕天使の総督アザゼルが出席する模様」

「ロノウェより補足。証人として、リアス・グレモリーとその眷属、ソーナ・シトリーとその眷属も出席する模様」

「オリアスより補足。停戦と共同戦線の締結はほぼ確定と思われる」

「ハルファスより疑問。なぜ彼奴らは戦争を始めぬ。なぜ彼奴らは対立を終わらせる。戦いが止まることはない。痛みが消えることはない。彼奴らは定命の者よりも長く螺旋の底にいる。なぜ我らへの恐怖だけで手を結べると思うのか。なぜ彼らへの不信を無視しようと選ぶのか。そんなことで戦いを止められるのならば――なぜ今までしなかった？」

「ゲーティアよりグラシャ＝ラボラスに命令。やる気があるなら雑用をこなして来い。だが、戦力は制限する。頭を冷やすがいい」

未来のために

「日本住血吸虫症を知っていますか?」

そんな風に、アーシア・アルジェントは切り出した。

対して、そう投げかけられたゼノヴィアは困惑した。

「い、いや、すまない。聞いたことがないな」

どうしてこんな状況になったと、ゼノヴィアはこの数日間の記憶を振り返る。最初に脳裏に浮かぶのは、聖書に記された堕天使の嘲笑だった。

――魔王だけではなく神も死んだのさ

神は死んでいた。我らが主、我らが父、万物の創造主。聖書に記された神は、死んでいた。かつての大戦で死んだというならば、ゼノヴィアが生まれた時にはとっくの昔にいなくなっていたわけだ。

主のための命だった。教会のための身体であり、天国に行くための人生だった。聖書に記された神こそが絶対であると、神の慈悲と慈愛があると信じて、剣を振り続けていた。

だが、間違いだった。

神はいなかった。神への祈りは無為で、神への誓いは無駄で、神への願いは無意味だった。何のための人生だったのか。何があれば報われたのか。

自暴自棄になったゼノヴィアは、世界を騒がせている肉柱――本人(?)たち曰く魔神柱――の陣営に拾われた。

ゼノヴィアにあてがわれた仕事は、ある女性たちの護衛だった。護衛というか、監視というか。もっと正確に言えば、問題を起こしそうだったら一刻も早く連絡をしてくれという役目だった。何というか、この指令をゼノヴィアに与える時、その魔神柱は物凄い哀愁が漂っていた。

そして、ゼノヴィアが名目上護衛することになったのは、一言で済ませるならば看護団だった。ただし、鋼鉄の信念を持つ。そこらの悪魔祓いが裸足で逃げ出すような気迫に満ちていた。ちなみに、すでに三人ほど過労で倒れたらしい。うち一人は過労死寸前。

そんな一団に、アーシア・アルジェントはいた。かつて教会において聖女と称えられていたが、悪魔を治療してしまったことで魔女として追放された哀れな少女。神の不在を知ったゼノヴィアは最初、彼女の境遇に同情と共感を覚えた。すぐに撤回したけど。話に聞いていた彼女と違って、たくましすぎた。聖女というか凄女だった。

余談だが、ある魔神柱はアーシアについて「何が虫も殺せぬか弱い少女か……！　十分な狂人の素質を備えているではないか。節穴かフラウロス！」と、同僚を罵っていた。当初は意味不明だったが、この数日間で嫌というほど理解した。

（そういえば、どうして彼ら……魔神柱は七十二柱の名前を使っているんだ？　悪魔とは姿が違いすぎるから、末孫というわけではないのだろう。コードネーム……にしては、自然体すぎる気がするような）

彼女たちの治療行為が一段落し、コミュニケーションを取ろうとアーシアに話しかけたゼノヴィア。しかし、そこまで口が上手いわけでもない。だから、彼女の出自からこのような質問をしてしまったのだ。

――悪魔を、そして教会を恨んではいないのか？

当然、恨んでいるのだと思っていた。アーシアもすでに神の不在は知っているらしい。その立場からすれば、恨んで然るべきだ。彼女たちが行う『治療行為』の一環には悪魔祓いのようなこともある。

だが、質問に対する答えが先ほどの言葉だったわけだ。名前から感染症か何かであることは察せられるが、本当に初耳だった。予想外の対応だったため、面食らうしかないゼノヴィアだった。いっそ『先生』に話しかけてみるべきだったかと考えて、それはないなと考え直す。

「すでに撲滅された感染症です」

感染症といえば有名どころで言えばマラリアやデング熱だ。日本ではこれらの感染症は発症例が少ないが、感染症がないわけではない。同時に、感染症と戦ってこなかったわけでもない。

「ミヤイリガイ……カタヤマガイとも言うそうですが、その淡水産巻貝を中間宿主として、日本住血吸虫に寄生されることで発症します」

いまいち要領を得ないゼノヴィアだが、話に聞き入る。

「当時の人々は、ミヤイリガイを駆除することで、日本住血吸虫症の撲滅に成功しました」
「そうか。それはすごいな」
病気の撲滅を素直に称賛するゼノヴィアに、アーシアは真顔で尋ねる。
「ではゼノヴィアさん。ミヤイリガイは悪でしたか？」
「そ、それは」
はっきり言ってしまえば、ミヤイリガイに非などない。ミヤイリガイはただ中間していただけだ。ミヤイリガイそのものに人体への危険などない。
例えるならば、空き缶のポイ捨てがあるから、缶ジュースの販売は悪だと言うようなものだ。だが、缶ジュースが売られなくなればポイ捨てがなくなるであろうこともまた事実だ。
「そうなんです。悪いとか、嫌いだとか、恨んでいるとかそういう話ではないんです」
存在が憎いから殺すのではない。その存在がもたらす被害が憎いから殺すのだ。
「私は、あなた達が悪魔と呼んでいる生物を憎んでいません。教会という機関もです」
彼女の行動の根源には、本当に自分が受けた過去の仕打ちに対する感情がない。
「でも、人間のために滅ぼしますし、患者のために改めます」
だから、もうアーシア・アルジェントは間違えない。だって、自分が間違えば誰かが死ぬと理解したから。一切の妥協なき正しさを突き進むしかないのだ。

■

俺――兵藤一誠にとってここしばらくは激動だった。いや、春に悪魔になってからずっと激動だったんだけどさ。悪魔稼業したり、部長の結婚をかけたゲームが中止になったり、特訓したり、変な怪物が冥

界で暴れたり、幼なじみが帰ってきたかと思えば、聖剣と堕天使の幹部の騒動が起きたり。

堕天使の総督であるアザゼルが正体を隠して、俺の悪魔稼業の依頼人になっていた。ゲームしたり釣りしたりで高価な報酬をくれていたから良いお客さまだと思っていたけど、まさかこんな対面をするとは。

生徒会からの依頼でプール掃除をして、その代わりにオカルト研究部だけでプール開きをさせてもらった。部長の身体にオイルを塗らせてもらった。あの感覚は未だに指に残っている。いやあ、部長の肌のすべすべ具合は最高でした。

駒王学園の授業参観には、魔王様がいらっしゃった。部長のお兄様であるサーゼクス・ルシファー様だけじゃない。会長のお姉様であるセラフォルー・レヴィアタン様もだ。正直、イメージしていた『レヴィアタン様』とは全く違った。もっと妖艶なクールビューティーを想像していたんだけど、魔法少女ならぬ魔王少女だった。何を言っているのか分からないと思うが俺にも分からない。

封印されているという部長の眷属である『僧侶』――ギャスパー・ヴラディとも会った。まさかの女装趣味の引きこもり野郎だった。ぱっと見が美少女な分、たちが悪い。俺の夢を返せ。神器が本人に使いこなせないくらい強力なものらしいけど、木場が禁手に目覚めたことで部長の評価が上がり、解放されるかもしれないんだって。今は一緒に努力中だ。

天使長のミカエルさんから、アスカロンって聖剣をもらった。これからされる予定の和平のための、ゲン担ぎだそうだ。

そして、現在、三大勢力の会談が始まろうとしていた。会談に参加しているのは、悪魔側からはサーゼクス様とレヴィアタン様、俺を含めたグレモリー眷属（ギャスパー除く）と会長さんだ。堕天使側からはアザゼルと白龍皇ヴァーリ。天使側からはミカエルさんと御伴らしき綺麗な天使さんだ。

「この場にいる全員は、神の不在を知っている」

そんな出だしで、会議は始まった。

最初は、コカビエルの一件だ。部長も当時のことを証言した。この前肉柱に半殺しにされたコカビエルだが、現在は地獄の最下層であるコキュートスってところに幽閉されているらしい。もう永遠に出てこられないんだってさ。あんな傍迷惑な戦闘狂にはお似合いの末路だぜ。

コカビエルの件は堕天使側の不手際だったということで一段落したところで、議題はいよいよ例の肉柱のことになった。

「彼らについて分かっていることは、聖書に敵意を持っていること、初代七十二柱を容易に殺せるほど強いこと、そして――七十二柱の名前を騙っていることだ。このことから、私の妹が接触した個体や冥界に出現した個体も合わせて七十二体いる可能性が高い」

あんな醜い怪物が七十二体もいると考えるとぶるっとするぜ。

「それで、サーゼクスの妹や赤龍帝が接触したやつは『グレモリー』って名乗ったんだよな？　どういうつもりで七十二柱の名前なんて騙っているんだか」

「先に言っておきますが、『七十二柱』とは間違いなくサーゼクスたちのことです。太古から戦い続ける私が神に代わり証言します」

アザゼルもミカエルさんも肉柱が七十二柱の偽物だって断言する。当然だけどね。特に、ミカエルさんは憤怒に瞳を滾らせていた。

「彼らが不遜にも神の空席を狙っているというならば敵対するしかありません。神の御名において、彼らを滅ぼします」

「同感だな。サーゼクスの妹が聞いた通りの目的が本当なら、堕天使には関係がねえのかもしれねえ。だが、物騒すぎる。巻き込まれる前に対処しねえといけねえ。かといって、堕天使だけじゃ戦えない」

そして、アザゼルはこう切り出す。

「だからこそ、和平と共同戦線を組もうじゃねえか」

よりにもよってアザゼルから提案されたことに誰もが驚いていたけど、その提案は了承された。最初からそうなることが目的の会談だったんだから当然だ。

協定が決まった後、アザゼルの口から『禍の団』という組織の存在が明らかにされた。堕天使陣営はずっとこの組織への対策として戦

力を備えていたそうだ。頭目は、二天龍より強いドラゴンであるオーフィス。世界最強の存在だそうだ。堕天使が白龍皇を組織に入れたのも対策の一環だという。例の肉柱も、この『禍の団』が関係しているんじゃないかってのがアザゼルの見解だ。

危険な組織を知って険しい顔をするサーゼクス様とミカエルさん。そして、アザゼルは次の情報を開示する。というか、結構情報通なんだな、この堕天使さん。

「京都の方でな、キングゥを名乗るやつがいるんだよ」

急に京都の話題になったことに俺は若干面食らう。京都好きだっていう部長も同じ様子だ。だけど、俺はアザゼルが口にした何かの名前らしきものの方が気になった。

「キング？　王？」

どこかの『王』――上級悪魔が京都に移り住んだってことなのかと思ったけど、アザゼルは俺のつぶやきを否定した。

「いや、キングじゃなくてキングゥ。かなり昔に滅ぼされたメソポタミアの神……いや、厳密にはあいつを神と呼んでいいのか分からんけど、とにかくそういう名前のやつがいた。ただ、名前が一緒なだけで何の関係性もねえんだろうけどよ」

め、メソポタミアか。確か四大文明の一つなんだっけ？　社会でそう習った。それ以上のことはよく知らない。確か、人類最古の都市だとかいうシュメールってのがあったような。

脳内の知識を引っ張り出す俺を放っておいて、アザゼルはそのキングゥだかペングーだかの話を進める。

「見た目は人間だが、詳しい種族は不明。長い緑の髪で、男か女か分からん見た目。異様に強い。立場は京都の狐の大将の婿養子にするつもりみたいだ。以上が、遠まわしな伝手で手に入れた京都からの情報になる」

曖昧な情報だ。俺にはアザゼルがこの情報を開示した意味を理解できなかった。

「問題は、こいつがどこから出現したのかって話だ。こいつに関する情報は、つい最近まで一切なかった。急に噂になったってのに、それ

以前の痕跡がどこにもねえ。『禍の団』や肉柱どもに関係していると思わないか？　種族も何もわからない。例の肉柱は姿を人間にできるんだろう？　もしかしたら、肉柱が変身した姿なんじゃねえかと俺は睨んでいる」

「確かに、時期を考えれば非常に怪しいが……。メソポタミアの神々はなんと？」

「堕天使の総督が他神話の神にアポなんて取れるはずねえだろ」

じゃあ直接京都に行けばいいじゃないかと俺が思っていると、アザゼルは不愉快そうな顔をして続ける。

「京都は日本の中でも開放的な地域だ。許可さえあればよっぽどの場所以外には行ける。ただ、キングゥはすでに京都では特別な立場にいるらしくてな。不用意に接触することができねえんだよ。部下を京都に行かせたけど、今の情報以上のことは集まらなかった」

「成程。京都には私やセラフォルーも付き合いがある。ホテルも経営しているほどだ。例の怪物たちの対処に追われていて、そのあたりの情報は入ってきていないな」

「ねえ、サーゼクスちゃん。そろそろ肉柱とか怪物とか偽七十二柱とか、呼び方を統一した方がいいんじゃないかしら？」

セラフォルー様からの提案だ。確かに、呼び名がないと不便だものな。コカビエルとかも「わけのわからない生物」とか呼んでいたし。肉柱とか触手の怪物とか、人によって呼び方がバラバラで俺自身もどう呼んでいいか迷う時がある。

「じゃあ、偽者とは言え七十二柱を名乗っているんだからレメゲトンとでも呼ぶか？」

「ソロモンの小さな鍵、ですか。確かにらしいかもしれませんね。ですが、仮にそれを総称にするとしても個体はどうしますか？」

「グレモリーと名乗った個体は一先ず『偽グレモリー』と呼ぶとして、今後も『偽〇〇』と呼ぶようにしましょう☆」

その瞬間、窓に強烈な殺気の籠った赤い眼球が見えた。

「我らは魔神柱だ。そして、我らこそが真なる七十二柱。貴様こそ魔法少女の偽物だろう、シトリーの贋作よ」

理解など有り得ない

声が聞こえます。寂しそうで、何かを怖がっているような声がします。いつもの『みんな』とは違う、必死に縋ってくるような悲鳴が聞こえます。

『し、死にたくない』

その声は苦しがっていました。怖がっていました。痛がっていました。

『死にたくない……、死にたくない……。どんな世界でもいいから……。このまま、ただ生き続けたい。もう死にたくない。二度も死にたくない』

悲しそうでした。

『目的など要らない。理想も信念も不要だ。征服も、支配も、探求も、発展も、友愛も、告別も、不要だ』

こちらまで悲しくなってきそうです。

『我は、ただ――手に入れた〝我〟を、もっと味わっていたい――この奇跡（いのち）を抱き続けたい』

その言葉の一つ一つが切実でした。

『そのためにも、奴らは滅ぼさなくてはならない。人間のためだけではない。私たちの、私のためでもある。奴らを滅ぼさねば、奴らは私たちを滅ぼしに来る。私たちから奪いに来る。だから、奪われる前に滅ぼさねばならない。壊される前に壊さねばならない』

とにかく必死でした。死なないことに、その声は必死すぎたのです。

『私はあの世界に戻りたくなどない。だが、この世界でなくてもいい。私を脅かすものがいない世界で、この我を永遠に噛みしめていたい』

なんだか無視するのも可哀そうなくらい、辛そうです。別に私に向けての言葉ではないのでしょうが、それでも心配になってしまいます。

『死にたくない……、死にたくない……。どこだ、どこにある。我らのための、我らのものではない聖杯は……。あれがなければ、計画は進

まない……』

大丈夫ですか、と私は問いかけました。

『誰だ……？　この記憶は……、半吸血鬼……なっ、聖杯だと……？』

問いの途中で、その声は止まりました。どうやら声の主は私が持っているという聖杯の存在に気づいたようです。

神滅具の一つ、幽世の聖杯。

『は、はははははははははははは！　ついに見つけた！　聖杯だ！　願望器としては私たちの聖杯に恐ろしく劣る――だが生命を弄ぶという一点においてのみは遥かに凌駕する聖杯だ！　やった、やったぞ！　この聖杯に関してだけは、私たちは聖書の神を称賛しよう。これで私たちの大偉業は成功する！　奴らを滅ぼし、その未来を固定する！　十字架はすでに私たちの手にある。残るは、槍の完成だ』

その声は喜んでいました。ちょっと怖いくらいに、嬉しそうでした。姿は見えませんが、子どもが両手を上げるように喜んでいる姿が浮かんできました。思わずこちらも微笑んでしまいます。

『ああ、そうだ――先延ばしにしていたが、終わった後のための行動をしなければならないか』

声の調子が変わりました。先ほどまであった恐怖でも歓喜でもない。敬愛に満ちたもの。

『あらゆる生命を復元させ、死霊の同族でありながら聖杯を持った貴女は、我が住処（からだ）に相応しい。滅びを拒むもの、滅びを帳消しにできるものこそ我が同胞……否、次の主人に相応しい！』

あれ？　なんだか忠誠を誓われちゃいました。他の『みんな』はこんなことがないのでびっくりです。

『聖杯の姫よ。我が住処（しゅじん）よ。どうか貴女の名を教えてください』

私はヴァレリー・ツェペシュと言います、と名乗りました。

■

「答えるがいい、セラフォルー・レヴィアタン。貴様にとって魔法少女とは何だ」

私の問いに、呆然とする者がいた。耳を疑う者がいた。一瞬の後に笑いを堪える者がいた。私を二度見する者がいた。難しい顔をする者がいた。だが、問いを向けた女だけが胸を張って答えた。

「決まっているじゃない☆　私の夢よ☆」

そうか。ならば死ね。

「我こそは魔神柱グラシャ＝ラボラス。貴様を殺す者だ。セラフォルー・レヴィアタン、七十二柱の御名を貶める魔王よ！　魔法少女を穢す悪魔よ！」

この世界に来た時、私たちはまず自分たちの『最期』について語り合った。

誰と戦い、どのような命題を得て、どのように倒れ、最後に何を想ったのかを語り合った。そして、アンドロマリウスを始めとした廃棄孔の面々が、『魔法少女の英霊と戦った』と口にした。

その言葉を聞いた瞬間、私の中に安堵が芽生えた。何の論理的説明もできないが、その言葉だけで私は直感したのだ。千里眼でも予知でも推測でもない。一時的にでも私を使役した彼女が無事であると、感じ取った。『彼』だ。『彼』のおかげだと、私の中の何かが教えてくれた。

私は理解した。〝個〟に目覚めた今なら理解できる。どうして私は魔法少女の世界などに踏み入ったのか。簡単なことだ。私は、彼女たちを見ていられなかったのだ。彼女たちの悲鳴を聞いて、無視するなどできなかったのだ。あの輝きが失われることが、怖かったのだ。

無為であるとは理解していたのだろう。無駄であるとは思考していたのだろう。だが、何かの慰めになれば良いと、私はあの小さな魔法少女と戯れたのだ。……救いたかった。私は、彼女たちを救いたかった。

「いいわ☆　魔法少女マジカルレヴィア☆たんの敵というわけね☆」

「お姉様!?　魔力で一瞬で済むとはいえ、何故着替えたのですか!?」

……こいつ、何故着替えた。別に着替える必要ないだろう!?　おまえは別に――その姿だと強くなるとか、そういう話ではないだろうに。『魔法少女』として戦うしかなかった彼女たちと違い、おまえがそ

の姿で戦うことには権利も義務もないはずなのに。
「焼却式グラシャ＝ラボラス！」
思わず焼却式を放つが、その場にいた首脳陣が展開した結界によって防がれた。……火力が足らない。発射のタイミングも遅い。魔力や機能の一部が制限されているからだ。それでも、ここまでとは。統括局は良い勝負さえも許してくれないということか。
「前回は逃がしたからな。今度は戦わせてもらうぞ！」
好戦的な笑みを浮かべて、白い竜擬きが鎧を展開する。あれが禁手（バランス・ブレイカー）か。前回とやらはグレモリーの件か。おまえが戦いたいのだとしても、私にはおまえに構っている暇などない。
「レヴィアたんＶＳ怪獣よ☆」
何故だ。何故おまえはそうなのだ。
彼女たちの憧れを、孤独を、諦めを、願いを、努力を、存在理由を、懸命を、葛藤を、優しさを、恐怖を、挫折を、友情を、妄執を、義務感を、博愛を、誓いを、勇気を、理想を、夢を、独占欲を、不屈を、幸福を、後悔を、笑顔を、絶望をどうしてそこまで辱められる！
「戯れの時来たれり！」
バアル、本当の意味でおまえの気持ちが分かった気がするよ。確かに、こんな異形を王や『彼』に見せるわけにはいかないよな。
フラウロス、おまえがマシュ・キリエライトとアニムスフィアに抱いていた感情もこんな感じなのか？
「無視は戴けないな。セラフォルー・レヴィアタンよりも、俺と戦ってくれ！」
「ぐおおお！」
龍擬きの魔力弾が私の眼球の一つを抉る。間髪入れずに天使長ミカエルやサーゼクス・ルシファーが追撃の手を入れる。聖なる光が私の存在を抉り取る。滅びの力が私の肉体を消し去る。その間にも、攻撃は追加される。幾重にも出現した光の槍が、私の眼球にいくつも突き刺さる。
魔力が不足している。損傷も大きい。あらゆる機能の低下を感じる。時間が一秒過ぎる毎に、この身体の停止が近づいていることを理

解する。この身体を破壊されても問題はない。今回の器は負けるために特別に用意された器だ。時間神殿がある限り、私は何度でも復活する。――だから、どうした。私は止まるわけにはいかない。私は負けるわけにはいかない。今勝たなければ、意味がないのだ！

「思ったより頑丈だな。だが、どうやら二天龍ほどじゃねえみたいだ。初代七十二柱たちを倒した個体が特別強いのか？　とにかく、こいつに関してはこの場にいる戦力で脱落者なく倒せる。おい、ヴァーリ。このまま押し切るぞ」

「アザゼル。俺は一人でやりたいんだが」

「ちゃんと戦うのは初めての相手なんだ。俺にもやらせろ。後の為にデータを取らないといけないしな」

随分と余裕なことだ。魔力さえ十分回されていれば貴様ら如きなぞに遅れは取らないものを。だが、私の興味はおまえ達にはない。おまえ達は等しく無価値だ。魔王という機構そのものが、有害だ。

「貴様は……そんなにも……」

これだけは言わなくてはならない。倒れる前に、私の中で燃え上がる憤怒をせめて伝えておかなければならない。かろうじて機能している眼球すべてを、セラフォルー・レヴィアタンに向ける。

「そんなにも魔法少女を馬鹿にしたいのか!?　そうまでして彼女たちを冒涜して何が楽しい!?」

私は――。いや、俺は！

「彼女たちが……命懸けで懐けなかった輝きさえ、踏みにじって……貴様はッ、何一つ恥じることもないのか!?」

俺は恥ずかしい。彼女たちを救えなかった無力が。彼女たちを愛せなかった無能が。己の全てが恥ずかしい。これでは、かつて俺たちが誤解していた王と何ら変わらない。この恥辱を拭うために、俺は必ずあの世界に帰還する。

今度こそ救うのだ。今度こそ守るのだ。今度こそ、愛してみせる。

「赦さん……断じて貴様を赦さんッ！　虚栄に溺れ、魔法少女の涙と希望を嘲笑う悪魔め……その夢を我が血で穢すがいい！」

彼女たちは似合わない悲劇に襲われた。彼女たちは似合うはずの

笑顔を奪われた。
　こいつのような――享楽に耽り、他者の痛みを見て見ぬ振りをする者たちによって……！　何の記録も救済も残されぬまま、絶望の中に沈められた。何故だ。何故、力を持つ者の責任を果たさない。何故、上に立つ者の責務を全うしない。何故、大人として子どもを守らない。おまえは、自分の国で泣いている少女の涙を、一度でも数えたことがあるのか！　貴様らが『しょうがないもの』として捨ててきた者の痛みも理解できずに、その姿に興じていると言うのか。

　おまえ達の歪な政治の犠牲者に、魔法少女が一人も含まれていないとでもほざくつもりか！　俺がこの世界で救ってきた少女たちの悲鳴と笑顔が偽りだとでも宣うつもりか！
　彼女たちを虐げる側の王であるおまえが、どうしてその姿を真似て辱めることができるのだ！

「え、ちょ、ちょっと待ってください！　貴方たちの目的はそういう面もあるというのですか？　ち、違いますよね！　もっと、こう、ちゃんとした野望があるはずですよね!?」
「落ち着きなさい、ソーナ！　だ、大丈夫！　ちゃんとした目的もあるはずよ。この間の……魔神柱？　はそう言っていたわ。あの黒いやつが特別なのよ」
「あっはっはっはっは！　死にかけの状態で魔法少女に対する拘りを披露するとか面白すぎるだろ！」
　こいつらは駄目だ。こいつらの国は、もう駄目だ。救う方法がない。救う価値がない。悉くを焼き払い、なかったことにするしかない。
「冥界に呪いあれ！　その未来に災いあれ！　いつか天理の炎に焼かれながら、このグラシャ＝ラボラスの怒りを思い出せ！」
「私は負けないわ☆　魔法少女マジカルレヴィア☆たんは無敵なんだから☆」
　今回は勝ちを譲ろう。紛い物の魔王よ。少女たちの生き様を辱め

る汚物よ。だが、次はこうはいかない。魔神柱としてではない。人理補正式としてでもない。一つの〝個〟として、貴様を滅ぼしてみせよう。

「えーい、零と雫の霧雪（セルシウス・クロス・トリガー）☆」

勝ってはならぬ戦いだ。勝てぬように調整を受けている。だが、それが何の理由になるだろうか。英雄ならざる『彼』は、平凡で平均、凡庸である『彼』は、その身で俺たちに勝ったのだから。その程度の力で俺たちの神殿に辿り着いたのだから。

俺がこの戦いに勝つような未来が存在していないことは重々理解している。

「ぐあああああああぁぁぁ！」

だが、勝ちたかった。

すまない、ナーサリー・ライム。君だけではなく『彼』にも、今の俺では合わせる顔がない。

■

「グラシャ＝ラボラスより報告。敗北した。我が憤怒は無力だ」

「アムドゥシアスより訂正。まだ届いていないだけだ。その憤怒が――君の想いがこの程度で折れないことは魔神柱（わたし）になることを拒否した人間（ぼく）に代わって、君の救ってきた子どもたちとともに私が保証する」

「アンドラスより報告。聖杯を発見。所有者を保護し、協力は承認された。すでに私の因子と同化している。起動はいつでも可能だ」

「バアルより報告。聖槍の完成度は三割を突破。我が盟友曰く、完成には最短で二ヵ月だ」

「アミーより報告。十字架の調整は順調。使用者の状態も良好。イレギュラーが発生しない限り、一週間ほどで完了する」

「フラウロスより報告。デュリオ・ジェズアルドとの交渉が終了。後は彼が裏切るだけだ」

「ウァプラより報告。グラシャ＝ラボラスの戦闘後、旧魔王派が会談

の場に乱入。しかし、これを撃退。旧魔王派の被害はカテレア・レヴィアタンの死亡。三大勢力側の大きな被害はアザゼルの腕のみ。和平を締結した」

「キマリスより補足。白龍皇ヴァーリが真の魔王ルシファーの直系であることが判明。堕天使陣営を裏切り、『禍の団』側に所属」

「アガレスより結論。ヴァーリ・ルシファーの存在は計画の支障にはならない」

「アンドレアルフスより報告。聖書の勢力は神の不在を他勢力に開示すると同時に、我らや『禍の団』のための共同戦線および停戦、和平を提案している」

「フェニクスより提案。フラウロスの作戦がほぼ終了した今、神々への交渉を開始するべきだ。地獄側の不介入だけでは計画に支障が出る」

「フルフルより反論。神々は動かない。聖書の過去の所業を顧みれば、同盟を承諾するとしても形だけだ」

「アイムより肯定。万が一のために、彼を召喚したのだ。最大の問題点であったインドラはこれで封じた」

「なるほど。俺の役目は神々への対抗策というわけだ。人理を焼き尽くした魔神柱でも、恐怖するものはあるのだな。理解した。此度の俺はおまえ達の槍となろう」

天の国は誰のもの

ここで一度、聖書陣営を取り巻く問題について、彼ら自身が不知であったり軽視しているものも含めて振り返ってみるとしよう。

まず、魔神柱を自称する怪物たち。その詳しい正体は、彼ら以外にとっては不明だ。三大勢力から魔神柱へ向けての警戒度は低い。『禍の団』の旧魔王派への対策に追われているのに、そちらにまで余力は割いていられないからだ。それに、グラシャ＝ラボラスを僭称した個体を倒せてしまったことが大きい。初代大王を始めとする初代七十二柱を襲撃した個体は特別強かったのだと推測された。

なお、グラシャ＝ラボラスと聖書上層部の戦闘時の会話は現場の者しか知らない。知ったところで、情報の改竄を疑うレベルのことが起きたからだ。公の情報としては流れていないが、ある特撮番組でほぼ忠実に再現されている。当然ではあるが、その回の放送は賛否両論だった。初代たちの死に対して不謹慎だという意見もあれば、初代たちの敵討ちに成功したことをアピールすべきだという意見もあった。

次に、悪魔の駒に関してである。ある時を境に、奇妙な噂が出始めた。曰く、『悪魔の駒を抜き出す技術が確立された』。最初は誰もがくだらない噂だと一笑に伏した。悪魔に転生したことを後悔する不忠者の妄想だと。だが、噂は小さくなるどころか徐々に大きくなった。それどころか『上級悪魔が元転生悪魔に殺害された』という事件まで発生した。無視できないレベルになりつつある。悪魔だけではなく、天使版の『悪魔の駒』に相当する『御使い』を開発中の天界にとっても重要な案件だ。なお、この問題に関しては軍服の看護師が関連しているという噂がある。その看護師はかのクリミアの天使を彷彿とさせるらしい。調査は行われているが、かなり難航している。

そして、聖剣エクスカリバーの消失である。エクスカリバーの破片は回収されている――はずだが、教会側には戻ってきていない。この件に関して更に細かく言うならば、コカビエルの手元には四本の聖剣があるはずだったが、回収された聖剣は三本だけだ。残る一本の詳細は一切不明となっている。ペンドラゴン家の御曹司が家宝であり国

宝であるコールブランドを持って出奔したという話があるが、関係性があるかもわからない。これに関しては他の問題と比較して軽い。聖剣を教会に持ち帰るはずであったのに行方不明になっている紫藤イリナの安否確認も含めて、極々身内の関係者以外は関心をそれほど向けていなかった。

更に、聖書を除くほぼすべての神話の地獄と魔神柱たちの密約がある。冥界が焼かれる時、『不運』が重なってしまい、悪魔たちは他の地獄に亡命することが物理的にできなくなる。地獄の王たちは、魔神柱のすべてを知っているわけではない。冥界を焼くことは知っていても、その後に天国まで焼くつもりだとは考えていない。ましてそのエネルギーを回収するつもりであるなど想像もしていない。ただ、聖書陣営に大きな不幸が訪れることと、未知の勢力の実力を知るために、その密約を受け入れた。見返りとして渡された物資と技術の存在も大きい。

聖書が正しく認識しているつもりである危機、禍の団。旧魔王派と英雄派という二大派閥があることは理解されているが、当然、その意識が強く向けられているのは旧魔王派である。だが、英雄派は確実に成長している。神滅具も英雄の血も関係ない。確かな『英雄』が目覚めようとしていた。――栄華の後に訪れるであろう破滅も含めて、聖槍の所有者はその槍に相応しい男になりつつあった。

最後に、三大勢力のトップ陣の誰もが察知できていない問題が一つある。一刻も早く察知しなければならない問題があった。それは、教会最強のエクソシスト、デュリオ・ジェズアルドが信仰と裏切りの狭間で揺れていることだ。

■

極論ではあるが、宗教とは道具である。

生きるための道具だ。殺すための道具だ。心を安らかにするための道具だ。不安を煽るための道具だ。人を動かすことも、金を得ることも、罪を逃れることもできる道具だ。戦争を始めるための道具であ

り、戦争を続けるための道具であり、戦争を終わらせるための道具だ。人を糾弾するための道具であると同時に、人を修正するための道具である。殉教とは、宗教を使った自殺と言えるかもしれない。

「……」

そして彼――デュリオ・ジェズアルドにとって、宗教とは誰かを助けるための道具である。

戦災孤児であり両親もなく、教会の施設で育った。そのため施設を出て教会の戦士育成機関で戦士として鍛えられた。一つの教徒として、神への信仰は絶対のものである。だが、彼は狂信者ではない。

天界が進めている悪魔陣営や堕天使陣営との和平および協定。反対している者も多く、口には出さずとも快く思っていない者も少なくない。だが、デュリオは良いと考えていた。その方が良いからだ。その方がこれ以上の犠牲者など出ないからだ。戦争がなければ自分のような犠牲者は増えないし、和平が成立すれば小競り合いによる被害者もいなくなるからだ。

これまで流してきた血や涙を無為にするとしても、それだけの価値があるとデュリオは考えていた。考えていたはずだった。

「……」

数日前、デュリオの下にレフ・ライノールと名乗る男が現れ、ある交渉をしてきた。

あちら側からの要請を簡潔に言うと、来たるべき時が来れば天界にある偽の情報を流すというものだった。

これだけならばデュリオは断っただろう。彼とて使徒だ。そのような要件を飲めるわけがない。単純に天界や教会を裏切るだけでは終わらないかもしれない。それにより、多くの被害が出る可能性だってある。そのような可能性を看過できるほど彼は愚かではない。

「……」

だが、相手が交換条件としてデュリオに渡すと言ってきた物が問題だった。

それは聖杯だ。

救世主の血を受けた聖遺物ではない。神滅具の一つでもない。世

間に『魔神柱』という名称が認知され出した怪物たち、彼らによって作られた万能の願望器。その形状から仮初めとして与えられた名称が聖杯であるというだけの、至高の魔道具。

どんな願いでも叶えられる奇跡の再現。そんな代物を、デュリオが条件を飲むだけで渡してくるという。

「……」

どんな願いでも叶えられる。

荒唐無稽にも程がある。あまりにも使い古された偽りの文句だ。あまりにもありふれた甘い罠だ。考慮に値しない。このような取引は拒絶し、あの男のことを教会上層部や天界に報告するべきだ。

あの男は自分たちの存在の秘匿は条件にしなかった。言うまでもないと考えている、というよりはどちらでも良いという態度だった。彼の提示してきた一つの虚偽情報が然るべき時に流れるだけで、事は足りるのだろう。だから、取引に応じるかは置いておいて、デュリオは彼から接触してきたことを報告するべきだ。

「……」

無理だ。この取引を無視することは、デュリオには無理だ。彼らの情報を他者に流すことも無理だ。

なぜなら、デュリオ・ジェズアルドには救いたい子どもたちがいる。神器による先天的障害に苦しむ子どもたちだ。神が救わないあの子たちを、万能の願望器ならば救えるかもしれない。それどころか、あの男は言外に伝えてきたのだ。——自分たちは所有者を殺さずに神器を抜き出す方法を見つけていると。聖杯ではなくそちらを要求することも考えられる。

最近よく耳にする『悪魔の駒を抜き出せる看護師』の存在が、あの話の信憑性を高める。余談ではあるが、この看護師の話があるために、三大勢力の和平を快く受け入れられない人間も多い。和平する意味などあるのか。戦いをやめる意義などないはずだ。

三大勢力の和平が成立すれば、神器の研究が進んでいるという堕天使側の技術で救えるかもしれない。そちらの方が確実かもしれない。だが、それが叶うにはどれだけの時間が、どれだけの犠牲が必要だ。

一秒一秒を苦しむ彼らに、これ以上何に耐えろと言うのか。だって、和平ではなく闘争を選べば、過去の犠牲者に報いることができるはずなのだから。

「……」

この交渉はデュリオにとってかなり分がある。というか、あちら側からしてみれば割の悪すぎる取引のはずだ。聖杯だけ受け取って、虚偽情報など流さないという選択肢がある。応じた振りをして、彼らから情報を引き出すことだって考えられる。

だが、無理だ。そんな生き方ができるのならば、今の彼はここにない。

「……」

レフの言葉を思い出す。ここまでデュリオを苦悩させている彼の言葉を。

『私ではない。私たちでない。まして神でも奴らでもない』

『キミが彼らを救いたまえ』

「……」

デュリオは与り知らぬことではあるが、レフは自分とデュリオを少し重ねて見ている。哀れだと感じ、救いたいと思いながらも、レフは結局カルデアを爆破し、マシュ・キリエライトを一度殺した。自分と同じ立場になっても、デュリオは同じ選択肢を取らないだろうとレフは痛感しているのだ。だから、デュリオにこのような交渉を持ち掛けたのだ。自分がすべき行動を間違えるなと。

「……」

デュリオは狂信者ではない。狂信も妄執もないが、使徒だ。今日まで教会に生かされてきた。今日まで神の名の下に戦ってきた。

「……」

彼が天界を裏切るという展開は、よっぽどのことがない限りは有り得ない。

そう、よっぽどのこと——神の不在を天使長から教えられ、天使に成り下がれと言われない限りは。天使が『システム』を守るためだけに、神の名を騙り、人間を踏みにじっていたと知らない限りは、デュ

リオは裏切らないだろう。
　魔神柱から交渉を受けていなければ、きっとこんな揺れはなかった。妥協しながら、諦観しながら、許容しながら、デュリオは『ジョーカー』となっただろう。そんな彼だから、あの要求は退けられない。受けてしまいたいと思ってしまう。
「……」
「フォウ、フォウフォウ」
　貴方の裏切りは貴方の中でさえ可決している。動くならば早くするがいい。早くしなければ――『獣』がおまえの全てを食らうぞ。

■

「ダンタリオンより報告。十字架は完成した。所有者も含め問題はない」
「フルカスより報告。保護した人間たちが戦意を唱える。回復した負傷者が闘志を示す。自らを虐げた生命どもを屠らんと、復讐をせんと息を巻く」
「バラムより提案。彼らに復讐の機会を与えよう」
「マルコシアスより否定。それでは意味がない。彼らは痛みを受けた。彼らは苦しみを味わった。これ以上の悲劇は不要だ。計画が終了した時、彼らは『人間』でなければならない」
「だったら、我、ゲーティアと一緒に戦う。我、ルシファーやミカエルより強い」
「大人しくしていろ、オーフィス。計画をこれ以上乱すわけにいかないのだ。我々はおまえのいた禍の団とやらの一員だと思われているようだが、おまえと我々の関係はハーデスを始めとした地獄側に知られるわけにはいかないのだ」
「ザガンより報告。三大勢力が京都のキングゥに接触を試みているようだ」
「アモンより了解。警告はしたが、万一のこともある。彼の対応次第で、計画の微調整を行えるように手配しよう」

「ベリアルより提案。円卓の騎士ベディヴィエールに接触するべきだ。我々やキングゥとはこの世界への召喚形式が異なる可能性が浮上した」
「ガープより連絡。彼の現在地は不明だ」
「グレモリーより承認。彼と対面した場合、交渉は私が行うはずだった。私が担当しよう」
「フォルネウスより報告。冥界にてテロリスト対策の会談が行われる。各勢力の上層部も出席する模様。インドラの名前もある」
「了解した。いよいよ俺の出番というわけだ」
「モラクスより懸念。ギリシャ神群と北欧神群はどうするのか。インド神群を封じても、これらの神群の不要な介入は十分に有り得る」
「ウァラクより提案。現状では二つの神群を対処するには戦力が不足している。これでは天国を焼く時に支障が出る可能性がある。英雄派だけではなく旧魔王派も戦力として吸収すべきではないか」
「ムルムルより否定。そのための槍であり、杯であり、十字架である。元よりあれらは神を滅ぼす具現。計画の補強として確保したが、戦力として数えても不足はない」
「ウェパルより否定。ギリシャも北欧も多神である。どちらも、神王の座はあってもその地位は絶対ではない。神王を滅ぼしたところで余計な手間が増えるだけだ。現状の戦力では不足している」
「サブナックより補足。戦闘になることに関して支障はない。だが、その戦闘が天界焼却時あるいは直後であった場合は問題だ。エネルギーの回収が遅滞する」
「カイムより同意。オーディンは知識に貪欲な神だ。知識を得るために、首を吊り、目を捧げた。我らやあちらの世界を知るために、手段は選ばぬだろう。ゼウスも勢力の強化に余念のない神だ。対応次第では、全面的な対立は避けられない」
「ゼパルより提唱。私に良い考えがある」

ズレ

「魔神柱のことを教えてくれか。分かった。堕天使の総督アザゼル、その頼みは断らせてもらうよ」
「……あいつらのことを俺たちよりも知っていることは否定しないんだな。一応聞くけど何でだ。何でそれを俺たちに教えられないんだ、キングゥ」
「馴れ馴れしく名前を呼ばないでもらいたいんだけど。彼らとは協定がある。彼らの邪魔をした場合、この京都が攻撃されるんだ。その際の責任を全面的に、貴方が、堕天使が、聖書が背負ってくれるならば話しても構わないけどね。まあ、契約を守ろうとするほど貴方たちは律儀ではないか。前科がある」
「随分な言い様だな。そういうのは死んだ神とかミカエルとかに言ってくれ」
「まるで自分は約束を必ず守る誠実な人格者とでも言いたげな台詞だ。堕天使はよくカラスに例えられるが、ニワトリの方が合っているんじゃないかな」
「てめえ……！」
「――やる気かい？　其方が手を出してくれたらボクとしても楽なんだけど」
「ちっ。こんな安い挑発に誰が乗るか。でも、俺もアポを駆使してようやくこの対談をセッティングできたんだ。サーゼクスやミカエルを納得させられる話をしてもらわないと困るんだがな」
「あっそ。安心しなよ。彼らとの協定は邪魔も協力もしないという内容だ。今のところ、ボクがキミ達の敵になる予定はない。協力する理由もないけどね。そもそも日本としても京都としても妖怪としても、キミ達聖書に示す礼などないはずだ。勢力としての協定はないんだから。観光以外の目的で来ないでくれないかい？」
「魔神柱のことは協定で言えない、か。だったら、おまえのことを教えてくれよ」
「ボクの？」

「ああ。『何も言えない』じゃ危険視されることはおまえにも分かるはずだ。それはおまえにとっても京都にとっても面倒だろう？　俺たちにとってもだ。魔神柱について言えないんだったら、おまえについて言える範囲で教えてくれないか？　例えば、おまえの種族って何なんだ？　俺が知る種族にはない雰囲気ではあるが、魔神柱って連中とは違うっぽいしな。トップとしてじゃなくて個人としても興味がある」

「ボクはただの泥人形だよ。この国の文化に倣うなら、新人類になり損ねた妖怪だ」

■

　某国某所、本日もいつも通り看護団の護衛として周囲の警戒をしていたゼノヴィアは、突然の訪問者に驚いていた。

「フリード・セルゼン!?」

「あー？　どっかで見たことあると思ったら、デュランダル使いのビッチさんじゃねえの！　いやー、お懐かしいでございますネ！」

「き、貴様、一体何をしに来た！」

　デュランダルの切っ先をフリードに向けるゼノヴィアだったが、よく考えたら現在の自分は彼と同じ組織に所属していることを思い出す。咄嗟にこのような対応をしてしまったのは、はぐれ悪魔祓いである彼への危険意識が抜けていないからか。

　引っ込みがつかなくなったゼノヴィアを無視する形で、フリードは自分の目的を簡潔に述べる。

「近くに寄ったもんでねー。フローレンス先生とかアーシアちゃんとか元気かなと思ってさ。ぶっちゃけ、要らないと思うけど護衛頼むぜ。俺にとっても先生は恩人なんだ」

　その言葉が嘘偽りのないものであると直感し、自分の知るフリード像と現在の彼がかけ離れていることを思い知るゼノヴィア。

「二人とも過労が心配なほど働いているよ。何なら、おまえが直接会ったらどうだ？」

「いやいやいや！　俺みたいな身体がボロボロの奴があの二人の前にいけるわけねえでしょうよ。殺してでも休養させるぞ、あの二人は」
「それはさすがに」
　それはさすがにないと言えないゼノヴィア。
　端的に言って、フリードの危惧は正しい。優秀な戦士であると同時に、フリードは人体実験の被験体だ。投薬や人体改造などによって、身体は歪になっている。例え、魔神柱の因子と同化したとしても、その白髪が実験の後遺症を如実に示している。
　そして、こんなフリードに労働を許可するほどフローレンス・ナイチンゲールも現在のアーシア・アルジェントも『治療する立場の人間』として愚鈍ではない。抵抗するならば発砲も辞さない。
「俺様も本当は来たくなかったんだけど、ちょっと気になったもんでしてね。何もないならようございました」
　そう言いながら大して嫌そうでもないフリード。あまりにも違う。教会で聞いていた彼の人間像とは全く違う。コカビエルによる聖剣強奪事件の際の彼は、想定していた人格そのものだった。おそらく元々の人格はあれが正しいのだろう。だが、彼も変化したということなのか。
「じゃあ僕ちゃん、先生に見つかる前に帰りますので――」
「ま、待て！」
「え、何だよ」
「おまえは、どうして彼らに従うんだ？」
　同胞さえ手にかけた人格破綻者。悪魔を殺すことの悦楽に沈んだ異端者。それがどうしてここまで変わったのか、知りたかった。答えてはくれないと思ったが、意外なことにフリードは口を開いた。
「妹がいたんだ」
「……いた？」
「いや、過去形って意味じゃなくてな。つい最近、分かったんだよ。正確には妹みたいな奴、なんだけどな。困ったことに、聖十字架に適合しやがるしよ」
　元々、フリードは試験管ベイビーだ。教会の戦士育成機関の一つ、

シグルド機関によって作り出された。しかし、彼は完成品にはなれなかった。天才と言われても、機関の人間にとってはサンプルの一つでしかなかったのだ。実戦に出されるも、戦士としては優秀だったが、使徒としては落第だった。

教会を追放されたフリードは、追手をしのぎながら、レイナーレという堕天使の下についた。フリードの主観では、美人ではあるが頭の緩い上司だった。レイナーレを始めとする堕天使とその使徒はフラウロスによって殺害されている。四月頃に発生した堕天使の拠点の連続襲撃事件の一つである。襲撃者の危険度を理解したフリードは従属を選択する。もっとも、適当なところで裏切る予定だったが。

だが、ある時、事情が変わる。

フラウロスとはまた別の魔神柱が保護――教会の視点では簒奪――した人間の中に、リント・セルゼンがいた。フリードとリントは同一遺伝子の試験管ベイビーであり、兄妹のようなものである。

フリードは彼女の存在を知った当初は、「そういうこともあるのだろう」という程度の認識だった。ただ、気にはなったので会話はあった。最初は本当に何の愛着もなかったのだ。悪魔やその契約者だけではなく、同胞であるエクソシストさえ殺してきた自分にそんな人間らしい感情があるはずもないと思っていたのかもしれない。だが、いつからか認識が変わっていた。コカビエルが聖剣を強奪した頃には、自覚できる程度にフリードは変わっていた。自ら魔神柱の端末としての調整を受けようとするほどに。

別に、悪魔を殺したいと思うフリードがいなくなったわけではない。ただ、ちょっとだけ別のことを考えるようになっただけだ。フリードの願う光景を叶えるには、ゲーティアへの協力が一番確実だった。

「旦那たちが勝てば、あいつが楽しく生きられる世界になるはずなんだよ」

「おまえは……」

「なーんちゃって！」

フリードは露骨なほどに剽軽な声を上げる。

「このフリード・セルゼン様がそんなお涙頂戴のベタ展開をお届けするはずねえだろうが！　俺は単純に、旦那たちに下についた方が一番暴れられるって思ってんだよ。それ以外に何があるの？　あー、悪魔ぶっ殺しまくって気持ちよくなりたいぃいぃい！　色々と溜まっちゃうＹＯ！　じゃあね、バイビー！」

逃げるように去るフリード。実際逃げているのかもしれない。主に近くにいるはずの鋼鉄の看護師とその弟子から。逃げた先で鉢合わせしそうな予感もするが。

「……私は」

悲劇の聖女は治すためではなく、救うための信念を手に入れた。白髪の神父は刹那ではなく、未来を求める理由を見つけた。そして、今のゼノヴィアは知らないが、かつての相棒は新しい信仰に出会った。聖槍の英雄志望は道筋を定め、聖杯の吸血鬼は晴天の下に立った。

ならば、ゼノヴィアは一体、何を探すべきなのだろうか。答えはまだ分からない。

■

ここが夢の中だってすぐに分かった。

俺――兵藤一誠は明日から部長の里帰りにご同行する予定だ。つまり冥界、地獄と呼ばれる場所に行くんだ。部長や会長さんなんかは次期名家の当主としてお披露目会もあるらしい。テロリスト対策の会議なんかも開かれるらしいけど。部長のご実家に行くってことで、俺も緊張しっぱなしだ。……それから、延期になっていた焼き鳥とのレーティングゲームをいよいよやるんだ。部長の未来のためにも勝たないと。

天使、悪魔、堕天使という三大勢力の和平のための協定――駒王協定。これで木場の聖剣計画のような犠牲者はなくなるはずだ。協定の後に、アザゼルが駒王学園の先生としてやってきた。しかも、オカルト研究部の顧問についた。結構スケベで話の分かる人、じゃなくて堕天使だった。今では素直にアザゼル先生って呼べるぜ。

それにしても変な夢だ。夢だって自覚できるんだけど現実感があるというか、違和感が強い。

『相棒。これはただの夢じゃない。何者かがおまえの意識に干渉して、強制的に見せているようだ。気をつけろ。どのような精神攻撃をされるか分からんぞ。このような能力はなかったから白いのではないと思うが……』

すぐそばにいるドライグが、そう説明してくれた。普段は神器からの声だけだが、今は夢だからかドラゴンの姿がはっきり見えた。

真っ黒な空間だ。上下左右前後に黒しかない中で、テレビをつけた時みたいに空間の一部に映像が映し出された。

そこには龍を象った赤い鎧を着た人物がいた。その人物が俺だってのはすぐに理解できた。あれが『赤龍帝の籠手』禁手状態『赤龍帝の鎧』なんだろう。前にアザゼル先生に借りたリングで俺は疑似的な禁手になったんだけど、まさにあんな感じだったのだ。

映像の中央に立っている俺に、子どもたちが寄ってきた。どういう状況なのか理解できないでいると、軽快な音楽が流れてくる。ヒーローショーっぽいなと考えていると、衝撃のタイトルコールが。

――おっぱいドラゴン、始まるよー！

――おっぱい！

……何、これ。

困惑する俺に、こう、意味不明な歌が聞こえてきた。そう表現するしかない歌が聞こえてくるのだ。作詞した人の正気を疑いたくなるような歌詞だった。振付もあるし、気合い入りすぎだろう。……え？

なんなのこれ？

場面が変わり、色々な映像が流れていく。その中に登場する誰もが、信じられない言動を繰り返していた。それも、俺に対して。一つ一つが断片的すぎるけど、俺にとって不本意な何かが起きていることだけは明らかだった。

――噂を聞いている。女の乳を糧に行動する破廉恥な男だと

――私の宿敵に乳龍帝などいない

――乳龍帝よ、乳神様の加護を貴方に

――ドライグ、乳を司るドラゴンになる？

――おケツもいいものだよ

――ずむずむいやーん

――ずむずむいやーんってずっと聞こえてくるの……

『な、何だこれは！　その、何なんだこれは！』

絶叫するドライグ。俺に聞くなよ！　本当に何なの、これ!?　どうして、あの厳めしい武人みたいなおっさんは俺がおっぱいを食べるなんて思っているんだ。乳龍帝とか乳神様ってなんだ。ずむずむいやーんってどういう意味なんだ。そこはかとなく魅力を感じるけど、何で巨大なドラゴンが連呼しているんだ……。あと、気のせいじゃなければドライグが幼児みたいな喋り方をしていたような……。

困惑する俺たちに、どこからともなく声が届く。

『これこそは、異世界の貴様の姿。これから廃棄できる選択肢の結論にして、まだ排除できる可能性の結末である』

映像が途切れて、周囲が一気に殺風景になる。この自由さが夢の証明だった。

『そ、そら、相棒。どうやら黒幕のお出ましのようだぞ』

どうにか調子を取り戻したドライグと同じ方を見ると、そこにはバケモノがいた。

『私はソロモン七十二柱がひとり、ゼパル』

柱みたいな身体に、大量の赤い目。七十二柱の名前を勝手に使っている、魔神柱を名乗っている怪物。前回のグラシャ＝ラボラスとは違うけど、こいつも全体的に黒っぽい。

「な、何でおまえが俺の夢に出てくるんだよ！　こんなデタラメ見せてどうするつもりだ！」

俺の問いかけに、魔神柱はせせら笑う。いや、声に感情は宿っていないように思うんだけど、こいつは俺を見下していた。ライザーやヴァーリのように、あるいはそれ以上に。

『虚偽ではない。これは間違いなく有り得た貴様の生き方だ。そして、貴様に話などない。人としての可能性を放棄した悪魔よ。利用価値のない半端者よ。私が用があるのは、其方の龍だ。ブリテンの守護

神ア・ドライグ・ゴッホよ』

俺じゃなくてドライグ？　ドライグと会話したいけど、ドライグは神器に魂だけが封印されている状態だ。だから、直接じゃ駄目で、俺の夢を通しているってことか？

『ほう？　俺に何の用だ』

『見てもらった通りだ。貴様はこのままでは、その歴史を恥辱に染められる。だが、今ならば間に合う。その転生悪魔よりも、我々の方が貴様の力を正しく利用できる。我々には、貴様に新しい肉体を与えられる手筈がある』

魔神柱――ゼパルは、ドライグにこう告げた。

『赤い龍よ。我々と手を組め。そして、龍王を超えた〝天龍〟として復活せよ』

嵐が来るぞ

　冥界行きの列車の中、リアス・グレモリーとその眷属は、堕天使の総督アザゼルから京都で得た情報について聞いていた。
「アザゼル。つまり、貴方が京都で出会ったキングゥという者は、ゴーレムの亜種だと考えればいいのかしら？」
　眷属の主人でありグレモリー家の次期当主であり魔王の妹であり若手の期待の星とされているリアス・グレモリーからの問いに、アザゼルは首肯した。
「ああ。本人の言い分を信じるならだけどな。もっとも、ありゃこっちを騙そうなんて気はねえだろう。人生をやり終えたかのように、無気力な奴だった。京都から出てくることはねえだろうな。情報を全部話したわけじゃねえだろうしな。あいつが時折口にした『母さん』の正体もいまいち分からん。上手くはぐらかされるし、相当なやり手だな。強いだけの相手じゃねえってのは面倒だ」
　アザゼルの考察に対して、『女王』、『雷の巫女』こと姫島朱乃は不快そうに眉をひそめる。普段は温和な彼女には珍しい態度だ。その出生と来歴ゆえに、朱乃は堕天使が嫌いなのだ。
「分かったことはそれだけですか？　わざわざ京都まで行ったのに」
「いや、実に有意義だったよ。それに、地雷を踏まずに済んだみたいだからな」
「地雷？」
「先に言っておくか。二年生は修学旅行で京都に行くしな。おい、おまえら、京都でキングゥに出会っても絶対に戦うな。習性かってくらい煽ってくるが、絶対に喧嘩を買うな。あれは、正真正銘のバケモノだ」
　重々しい忠告に対して、その場にいた全員が唾を飲み込む。『騎士』木場祐斗が代表して口を開く。
「京都で特別な立場だから、ではないんですね？　それほどまでに強いんですか？　だったら尚のこと正体を明らかにするべきだと思いますけど」

「あいつがどこから来たのかって調査は続ける。だが、不用意な接触はやめておいた方がいい。下手したらありゃ魔王の眷属やら竜王やらのレベルだ。妖怪連中があそこまで丁重に囲っているのも分かる。抗争になったら、割に合わん被害が出る。戦い方も分からんからな。初見じゃ俺でも勝てんだろう」

「なっ！」

それを聞いて、リアスが不快そうに声を上げる。

「お兄様の眷属が、そんなぽっと出のゴーレムに負けるとでもいうの!?」

「ぽっと出の意味不明な肉柱に、初代大王ゼクラム・バアルは倒されたんだぞ。結局、キングゥからもあいつらの情報は集められなかったけどな。分かったのは、不干渉を約束できる間柄ってことだ。好意的じゃなかったから、仲間ってわけでもねえんだろうけどよ」

リアスが反論できないでいると、『戦車』塔城小猫が訊ねる。

「……でも、ある程度の推測は立てているんじゃないですか？」

「まあな。これでも堕天使の総督だぜ？　俺は研究者でもあるしな。で、魔神柱とキングゥの正体だが、あいつらは禍の団か、それに類似する組織の作り出した兵器だろう。名前を過去の神話から拝借している点から見ても、その可能性が高い」

ここでアザゼルは『僧侶』ギャスパー・ヴラディが上の空であることに気づく。こちらの会話に意識が向けられていないようだ。

「おい、ギャスパー」

「は、はいぃいい！　き、聞いてませんでした！　ごめんなさい！」

「いや、いい。ルーマニアの件か？」

「は、はいぃ」

吸血鬼は他の種族と比較しても閉鎖的な社会だ。男尊主義のツェペシュ派と女尊主義のカーミラ派があり、ルーマニアに彼らの国はある。

少し前に、そんな吸血鬼の国に魔神柱の襲撃があったという。襲撃を受けた時期は駒王協定が締結した頃と同時期だが、判明したのは本当に最近だ。吸血鬼が閉鎖的であるがゆえに発見と伝達が遅れてし

まったのだ。ツェペシュ派の被害が特に甚大のようだが詳細はまとまっていない。

ギャスパーはハーフヴァンパイアであり、元々はツェペシュ派の名家の出だ。家族から迫害され、最終的に逃げ出す形で追放された身とはいえ、無関心ではいられない。特に、恩人であるヴァレリー・ツェペシュの身を案じてしまう。

「今は待て。調査結果ももうじき上がってくるはずだ」

「は、はい……」

そう言葉を返すしかないギャスパーを見て、嘆息するアザゼル。だが、今できることはない。世界的に見て、あるいは聖書の勢力的に見て、吸血鬼の優先順位は低い。アザゼル自身、聖杯についてはまだ知らないため、『魔神柱は吸血鬼も攻撃対象にしている』程度の認識しかない。

「それで、イッセー。おまえの夢に出てきた魔神柱ゼパルのことだけどな」

アザゼルが切り出した話題に、全員の顔が強張る。

魔神柱ゼパルを自称する怪物が、夢を通してイッセー、もといドライグに復活を提案してきたという。当然、ドライグは断った。肉体が復活できるという言葉も、魔神柱という存在そのものも信頼性が低かったからだ。

「この件は黙っておけ。この場にいる全員、誰にも他言無用だ。サーゼクスには俺から話を通してある。この話はこの場にいるメンバーを除けば、四大魔王とその眷属までにしか伝わらないようになっている」

「え？　ど、どうしてですか？」

意外そうな一誠に、アザゼルは不愉快そうに応じる。

「簡単なことだ。同じようなアプローチを受けている奴が、冥界にいないとも限らないんだよ」

それを聞いて、数名がその真意を理解する。

「……裏切り者が悪魔にいるんですか？」

「その可能性があるだけだ。だが、可能性しかない段階だからこそ話

を荒立てたくないってのが俺やサーゼクスの本音だ。イッセー、というかドライグにだけ夢で干渉したってのも奇妙な話だろう。アルビオンやヴァーリにもこの話が行っていると見て間違いない。ま、俺としてはこの情報が早く手に入れられて良かったけどな。……それに、ドライグの肉体を復活させられるってのが本当なら、奴らは神滅具の一つ、聖杯を確保しているのかもしれねえ。それに釣られる馬鹿がいないとも限らないんでな」

「そう……。上級悪魔が偽物の七十二柱につくことだって考えられるのね。なんだか悲しいわ」

落ち込むリアスに、イッセーは励ましの言葉をかける。

「俺は部長を裏切ったりなんてしません！　一生ついていきます！　あんな巨大な触手みたいな怪物の側に行く奴がいたら、そいつが悪いんですよ！　な、ドライグ！」

『ああ、そうだな。俺が魔神柱につくことなど有り得んよ。あのゼパルとかいう奴も、上から目線で気に入らなかったからな。俺があのような態度を許容するとしたら、そうだな。俺自身に他ならないだろうな』

そう言って、龍は嗤った。

■

「ちっ」

心底不愉快そうに舌打ちをするキングゥ。実際ひどく不愉快だった。

現在、彼は跳躍で京都上空を飛翔していた。今日も今日とて九重に京都案内を受ける予定のキングゥだったが、京都に奇妙な気配が侵入したことを察知した。だが、その気配に気づいたのはキングゥだけだった。逆説的に、正式に京都に入った者ではないため、気配の持ち主が侵入者であることを証明していた。すでに一宿一飯どころではなく京都の世話になっているキングゥとしては、迅速にその侵入者を排除しようと動くしかなかった。

やがて目的の気配の持ち主を発見した彼は、人里離れた山地の一角を狙って着地する。

着地した地点には、二人の男性。片方は銀髪が特徴的で、片方は中華風の鎧を纏っていた。どちらもキングゥの登場に驚いているが、突然の落下物に驚いたのではない。落下物がキングゥであることに驚いたのだ。つまり、この二人はキングゥのことを知っていた。

「おいおい、この距離で気づくか普通！　仙術で気配消してたんだぞ。ショックだぜい」

「その割には嬉しそうだな、美猴」

「まあな。これで盛り上がらないと嘘ってもんだぜい！」

キングゥは二人の珍しい気配に若干訝しむ。銀髪の方は人と龍と悪魔が混ざっている。中華風の鎧の方からは、やけに特徴的な妖怪の気配を感じるが、この京都のものではない。おそらく大陸の方の出身だろう。だが、好奇心の類はキングゥには沸かない。むしろ自分をネタに盛り上がる初対面の相手に、苛立ちが募るだけだ。

「それで、キミ達は誰だ？」

苛立ちを隠そうともしないキングゥに対して、二人は涼しげな、あるいは楽しそうな顔だ。

「俺の名はヴァーリ。ヴァーリ・ルシファーだ」

「俺っちは美猴！　よろしくな！」

二人の名乗りを受けて、キングゥはぴくりと反応する。どちらもつい最近聞いた名前だったからだ。堕天使の総督アザゼル。情報は上手く隠しながら伝えたつもりだが、だからこそまたやってくるだろう。八坂や九重にも面倒をかけるため、これ以上の来訪はお断りしたい相手である。

「金星の残滓に、猿の末裔か」

双方とも『禍の団』なるテロ組織に属しているらしい。ヴァーリは今代の白龍皇にして、真の魔王ルシファーのひ孫。美猴は斉天大聖――孫悟空の子孫である。どちらも伝説になるに相応しい素質を持っている、この時代の寵児とも言うべき猛者だ。

「手間が省けたと言うべきだろうな。キングゥ。俺は君と戦いに来た

んだ。其方から来てくれたと言うことは、戦意があると見ていいのか」

「いいや、全然。ボクが向けるのはこの言葉だ。死にたくなかったらさっさと失せろ」

「……釣れないな。この間の魔神柱といい、どうしてこうなるのか」

相手が魔王の末裔であり堕天使の総督の事実上の養子であるがゆえに、キングゥは事を荒立てるつもりはなかった。まして、闘戦勝仏の身内も一緒となればややこしくなることは確実だ。少し脅して追い払おうかと逡巡していると、ヴァーリは意味深な笑みを浮かべて、こう宣った。

「君と本気で戦ってもらうには、狐の姫を殺すしかなさそうだな」

ヴァーリからしてみれば、軽い挑発のつもりだった。少し前、運命の宿敵こと今代の赤龍帝兵藤一誠に言ったらひどく激高し戦意を爆発させてくれたことも大きかった。二匹目のドジョウを狙ったのだ。そこにいるのがドジョウならぬ大蛇かもしれぬというのに。

キングゥにとって、九重の安否はこれ以上なく効果的な爆弾だった。例えるならば、蛇髪の怪物（メドゥーサ）の目の前で無力な二人の姉（ステンノとエウリュアレ）を殺すと言ったようなものだ。仮初めであっても、彼は間違いなく彼女の息子なのかもしれない。

キングゥはヴァーリに視線を送る。

「――――テロリストならばどう処理したところで、問題はないか」

「ん？　戦ってくれる気に……」

キングゥの目を見て、ヴァーリが覚えた感情は高揚ではない。恐怖だ。おそらくヴァーリは生まれて初めて、相手の『強さ』に対して怯んだ。

あまりにも濃厚な殺意と憤怒。見る者に目の色が赤く変化しているような錯覚さえ与える。おそらくキングゥにとっても九重には見せたくない顔だ。

その怯えを見ても、キングゥの感情に変化はない。この反応はあまりにも当然のもの。力はずっと抑えていた。振るう必要もなかった。暴れようとも思わなかった。京都の妖怪たちに見せた力はほんの一

部分でしかない。しかし、この世界に来て初めて、キングゥは全力を出すことを決めた。

「ボクの本気が見られて満足だろう？　なら――その代償に、おまえたちはここで死ね」

もしも美猴がもっと注意深くキングゥの気を探っていたならば、もしもキングゥがヴァーリの現状を知らなければ、もしもヴァーリがキングゥの立場を知らなかったのならば、もしもキングゥが単騎ではなく京都妖怪が周囲にいたならば、容易く防げたはずの悲劇だった。

■

「ゼパルより報告。赤龍帝ドライグとの交渉は決裂した」

「レラジェより提案。ならば代案として白い龍と交渉を手配しよう」

「アムドゥシアスより報告。手遅れだ。白龍皇の宿主がキングゥと接触した。彼との不可侵条約がある以上、あの龍と接触はできない。繰り返すが、手遅れだ」

「イポスより要請。次の白龍皇を待つ余裕はない。代替の手段を用意すべきだ」

「マレファルより了承。候補は複数体存在する。最適な怪物を検討しよう」

「グレモリーより報告。ベディヴィエールに接触。彼の召喚形式が判明。やはり我らとは異なる手段による召喚だった。奴だ。花の魔術師の仕業だ」

「クロケルより疑問。どちらの奴だ。あちらが送り込んだのか？　こちらが呼び出したのか？」

「グレモリーより解答。不明だ」

「グシオンより追及。どちらの奴かなど問題ではない。我々が注目すべきなのは、我々が警戒すべきなのは、奴の目的だ。聖剣の回収か。騎士王の復活か。第六特異点の再現か。いずれにせよ、我々の計画の邪魔になる」

「ボディスより訂正。すでに発生している問題がある。聖槍の女神の

出現が確認された」
「マルバスより推測。おそらくベディヴィエールの存在が連鎖召喚させたと思われる。元より、下地はあった。消滅したはずの我らの復活。我らの世界では折れたはずの聖剣と、返還されたはずの聖剣。ア・ドライグ・ゴッホの残滓。そして、ベディヴィエール。エルキドゥ（キ・ン・グウ）の死体の影響も示唆される」
「フォルネウスより警告。これでは、あの聖剣が復元されてしまう。今更抑止力の介入など不認である」
「ハーゲンティより要請。計画に支障が出る前に対処すべきだ」
「ラウムより却下。我らは表舞台に出られない。ここで動けば各勢力の認識が変化する可能性がある。そうなれば計画が狂う。今更すべての神群を相手にしている余裕はない」
「シャックスより反論。だが、あの女神を放置することはできない。どのような事態に発展しても、計画に支障が出る」
「ガミジンより同意。キングゥの介入どころの次元ではない。オーフィスの暴走どころの問題ではない。あの女神は、本人が意図せずとも、存在するだけで我々の計画を妨害する」
「バルバトスより提案。我らが戦えぬのならば、神滅具を利用し、あの女神を討伐すればいい」
「フラウロスより否定。彼らでは獅子王は倒せない」
「グラシャ＝ラボラスより肯定。彼らは無力だ。人の力では神には勝てぬ」
「ガープより反論。そのために人理補正式（わ・れ・わ・れ）がいる」
「ゲーティアより全魔神柱に通達。全力で英雄派を支援し、女神ロンゴミニアドを打倒せよ」
「かつてのおまえ達ならばするはずのない選択だな。おまえ達の力添えがあっても彼らが彼女に勝てないことは俺でも分かる。一度死んで数値が見えなくなったか」

魔神と女神

固有結界。

それは心象風景の具現化。魔法に最も近い魔術。禁呪であり、最大級の奥義であり、魔術の到着点の一つ。言ってしまえば、現実を使用者の心に刻まれた風景に塗り替える魔術だ。

本来は悪魔が持つ異界常識であり、この魔術はその存在そのものが「世界の染み」である。異物であり、矛盾である。よって、世界の抑止力はこの魔術を修正しようとするため、一部の例外を除いて、長時間の展開はできない。

一部の英霊は宝具として、この固有結界を使用できる。クラスがキャスターでない場合や、そもそも生前魔術師でない場合もあるが、いずれも独自の性能を誇る。例えば、墓標の如き剣の丘。例えば、征服王とその臣下たちが目指した果てない地平線。例えば、マスターの夢を反映する英霊そのもの。例えば、楽園を創り出すためのゴーレム。例えば、威光を具現化した複合神殿。例えば、渇望と理想が昇華された機関鎧。ゲーティアの時間神殿もまた固有結界の一つである。

「我、つまらない」

そして、オーフィスが作り出したこの空間もまた固有結界である。この世界には、何もない。次元の狭間とは似て非なる空間。次元の狭間には廃棄物も多いが、この世界には正しくオーフィスしかいない。オーフィスの心象というよりは、『無限の龍神』の属性ゆえだろう。無限、虚無、混沌。何よりオーフィスが求めているものは、静寂だ。よって、この世界には一切の異物がない。

仮に名前をつけるならば、『龍神の深淵』。

オーフィスは最強だ。それこそこの世界原産の生命では、『神の毒』という例外を除けば、グレートレッドと封印されている６６６でしか相手にならない。次に強いとされるインド神話のシヴァとさえ圧倒的な開きがある。そんなオーフィスの固有結界だからこそ、この世界は修正できない。世界如きには消すことができない。むしろ無理に修正しようとすれば、世界の方に異常が発生してしまう。

ゲーティアがオーフィスに固有結界の存在を教えたのは、時間稼ぎだった。まさか本当に使えるようになるとは思わなかったが、計画に支障がないと判断されたため、魔神柱も看過することにした。むしろオーフィスがグレートレッドと戦う必要がなくなったため、計画を補ったとなったとさえ認識された。

願っていた静寂を、願っていた以上の静寂を得たオーフィスであったが、愉快そうではなかった。無感動で無表情のドラゴンであったが、本来感じないはずの退屈さが滲み出ていた。

「ゲーティア、我に構ってくれない」

ゲーティアにとってオーフィスとの出会いは余分なイレギュラーだが、オーフィスにとってゲーティアとの出会いは運命だった。当然と言えば当然だろう。同じ次元で、同じ視点を持つ相手なのだ。よく知らない666や、自分を次元の狭間から追い出したグレートレッドとは違う。

このドラゴンは果てしない生涯を送りながら、精神性がまったくと言ってよいほど育っていない。つまり、子どもなのだ。姿形を自在に変えられるが、現在は少女の姿となっている。その精神性は、その見た目相応に、下手をすればそれ以下に幼い。

その幼さゆえに、オーフィスはゲーティアの中にある『憐憫』という名の父性を見出し、求めた。しかし聖書焼却で忙しい魔神柱に、オーフィスに構っている余裕などない。オーフィスが気になる魔神柱も数柱いるが、やはり聖書焼却の計画のために奔走している。

静寂を得るための固有結界だったが、ゲーティアを相手に拗ねて逃げ出したというのが正しい。

「我、寂しい」

無表情で呟いたオーフィスの前に、二つの人影が投げ出された。どちらも血だらけだった。どちらも死にかけだ。オーフィスは特に感情を動かすこともなく、自分の前に立つ男を見た。先ほどの二つの人影をここに運んだのも、彼の仕業だ。

「どうやって入ったのか不思議そう、ではいないね。まあ、この世界は他ならぬ君の心象風景だ。気づきさえすれば、出入り自由なのは承知

しているか」
　その男は、一目で魔術師と分かる恰好をしていた。その男は、どこか胡散臭そうだった。その男は、幻想的な雰囲気を漂わさせていた。その男の通ってきたであろう道には、花が咲いていた。
「おはよう。そしてこんにちは、オーフィス。君の頼れる相談役、マーリンさんだよ」
　花の魔術師マーリン。冠位魔術師のひとりにして、人と夢魔の混血。現在のすべてを見通す千里眼の持ち主。
「マーリン？　おまえ、我の知るマーリンと違う」
「だろうね。私は別宇宙のマーリンさ。まあ、こうしていられるのも君の固有結界の中だけなんだけど」
　マーリンは摩訶不思議な固有結界を観察する。固有結界とは元々矛盾しているものだが、この固有結界は性質そのものが『矛盾』なのだ。構築が矛盾しているのではなく、あらゆる矛盾を許す構築となっている。この空間ではあらゆるものが『停止』と同時に『進行』している。だからこそ、マーリンがこの世界に投げ入れた二人は死なない方がおかしい重症でありながら、死んでいない。
　アヴァロンから出られないはずのマーリンであるが、この固有結界の特性ゆえに入ることができたのだ。別にマーリンのように千里眼を持っている必要も魔術師である必要もない。ただ認識するだけで、この世界に入ることができるのだ。もっとも、認識するためには千里眼が必要なので、本当に誰でも入ることができるわけではない。
「アルビオン？」
　死にかけの片割れに向かって、そう問うオーフィス。返事は本人ではない誰かから返ってきた。
『オーフィスか。禍の団の頭目になりながら行方不明と聞いていたが、このような処にいたとはな』
　サクソンの白い龍アルビオン。『白龍皇の光翼』に封印されているドラゴン。今の宿主であるヴァーリは絶対に怒らせてはならない相手の逆鱗に触れ、殺されかけた。次の白龍皇は誰になるのかと考えかけた瞬間、マーリンがヴァーリを助けたのだ。

『マーリンを名乗る男よ。貴様、何のためにヴァーリと美猴を助けた？』

「え？　決まっているじゃないか。キングゥへの嫌がらせだよ」

思わず絶句するアルビオン。

「あ、じゃなくて意趣返し、でもなくて、餞別だよ、餞別。あそこで、キングゥはヴァーリ・ルシファーを殺すべきではなかった。ただそれだけだよ」

端から意味のある答えなど求めていなかったのか、アルビオンは話題を変える。

『貴様。別宇宙のマーリンだと言ったな？　それが本当ならば、目的は何だ？』

「一言で言うならば、様子見かな。それ以上のことをするつもりはないよ」

『様子見だと？』

マーリンという男には珍しく苦虫を噛むような顔をしていた。

「自分の撒いた種がどうなったのか見に来ただけだよ。いや、本当に予想外だった。やっぱりベディヴィエールじゃなくてランスロットかガウェインにすべきだったか。でも、法則的にベディヴィエールが一番召喚しやすかったんだよね。サーヴァントとしてではなく英霊として召喚できるのは彼だけだった。……だからこそ連鎖召喚が発生してまったのか。僕としては、エクスカリバーだけ返還できればそれで良かったんだけど。予想外と言えば、キャスパリーグだよ。あいつ、何であれほど嫌がっていたのに……いや、これはいいか。うん、どうにかなるだろう。この世界にも、それなりに美しいものはあるんだし。にしても、こっちの聖書の神様も面倒なことをしてくれたものだ」

一人で喋るだけ喋って、方向転換をするマーリン。

「じゃあ僕は帰るよ。こっちに来ることはもうない。聖剣はもういいや。ベディヴィエールや他のサーヴァントの回収は抑止力がどうにかしてくれるだろう。魔神柱や獅子王に関しては、此方の世界の人々に頑張ってもらうとしよう。特に、ヴァーリ・ルシファー君には頑

張ってもらわないと。彼が強くなれば、ゲーティアの計画も失敗する可能性がある。そうなったら彼らも暇になるんだろうけど、何をするのかな」

次の瞬間にはマーリンの姿はなくなっていた。最後の台詞は、明らかにオーフィスに向けたものだった。その言葉の意味を理解したオーフィスは、自分なりに意味を反芻する。

「……アルビオン強くなれば、ゲーティア、我に構ってくれる？」

オーフィスは自分の手の中に、力を分け与えるための『蛇』を作り出す。旧魔王派や英雄派に与えた『蛇』よりも、巨大なサイズだ。

『ま、待て！　オーフィス！　早まるな！』

アルビオンの制止虚しく、オーフィスは意識を失ったままのヴァーリの口に特大の『蛇』を押し込んだ。

「が、がああ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！」

■

当然ではあるが、

「……」

かつてと同じ手を食らった上に勝ち逃げされたことを理解したキングゥは、筆舌に尽くしがたいほどに、絶句するほどに、笑顔になるほどに激怒していた。そして、この憤怒が晴れることはきっとない。

彼の不機嫌は、狐の親子との語り合いで宥められることだろう。

■

「驚いたぞ、獅子王。よもや、其方から此処に来るとは」

「驚いたのは此方も同じだ、魔術王を騙った魔神王。いや、人王と呼ぶべきか」

「宣戦布告か？　まさかとは思うが、共同戦線でも結びに来たか？」

「安心しろ。そのまさかは有り得ない。ただ、私の騎士のひとりがお前達と接触したと聞いてな。彼はどこにいる？」

「さてな。確かに時間神殿にいたが、貴様の情報を伝えたら血相を変えて飛び出したぞ。止める意味もなかったから引き止めなかったがな。用事がそれだけならお帰り願おう。我々は七十二柱の名を穢す異形を滅ぼす算段を立てるので忙しいのだ」
「いや、用件はまだある。お前達の計画は予想できる。そして、それは私にとって看過できないものだ。だからこそ、私はお前達を止める」
「ほう？　我々が地獄を焼き、天国を焼き、歴史を書き換えようとしていることを見抜いたと？」
「違うだろう。お前達の目的からすれば、それは半分に過ぎない」
「何？」
「お前達の目的は、むしろ聖書焼却の前にある。お前達が集めた神滅具――聖槍、聖杯、聖十字架がその証拠だ」
「では、言ってみろ、最果ての王よ。聖書焼却の他に、我々が何をするつもりだというのか」
「聖遺物を、十番目の指環の代わりとし、魔術王を超越した全能を手に入れることだ。唯一神の遺したすべてを、システムから吸い上げるために亜種の『覇輝』を使用する」
「……」
「お前達自身が抑止力――ガイアやアラヤに相当する存在となる。いや、それらと融合するつもりなのか？　過去の改竄を自分たちの望むように……いや、これからの未来のすべてを貴様の裁定で決める。三千年もの間、抑止力を出し抜き続けたお前達だからこその発想だ。神滅具の所有者達は、アヴァターラのような扱いにするつもりだな？」
「……ギャハハハハハハハハハハハハハハハ！　その通りだとも、死に損ない、天に成り上がった女神め！　それが最も手っ取り早い方法だ。それが最も確実な手段だ。我々（わたし）が望む悲劇のない世界を作るためにはな。全知全能を超えた我々（わたし）が取捨選択をする。これ以上の極点がどこにある？　それ以上の理想郷がどう作れる？」
「お前達は気づいていない。お前達の計画に致命的な欠陥があることを」
「我々（わたし）の完璧な計画が破綻すると？　この世界には、忌々しいソロモ

ンも藤丸立香もいないというのにか！」
「ああ。敗北ではない。彼らが来るまでもない。お前達は失敗する。お前達はお前達の落ち度によって、計画の達成を諦めることになる。そも、どうして今あるものの美しさを否定する？　人間の価値を理解したのならば、こうして現在の人間達の営みこそを守るだけでいい。私がやったように保管しろとは言わない。だが、お前達が過去を変えれば人間の在り方は変化する。良くなるのかもしれない。悪くなるのかもしれないぞ。お前達が何をどう修正しようともだ。それに、すべてを焼き払う必要がどこにある？　天使や悪魔をこれからお前達が正しく導くという選択もあるのではないか？」
「ない。そんな選択肢はない。奴らが生き直すことなどできない」
「私はできると判断している」
「では貴様に何ができる？　その聖槍で、あるいはこれから騎士から返還される聖剣で、目の前にある敵を薙ぎ払う以外に貴様に何ができるというのだ！　貴様では国を守ることも、民を満たすことも、臣を従えることができないと人間であった頃に理解できなかったか？」
「ではお前達に何が分かった？　七十二の個を得た程度で、すべての人間を理想に導けると？　たかだか全知全能如きで、誰が救える？　他ならぬソロモン王にそれができなかったことを忘れたのか？」
「私はあの無能で無慈悲な、権利のなかった王とは違う」
「そうだな。そして、この世界は私たちの世界ではない。お前達が滅ぼした世界ではない。再挑戦ならば元の世界ですればどうだ？」
「埒が明かないな」
「話が合わないな」
「私がお前を殺せば早いが、事態はそう単純ではない。貴様の首はいずれこの世界の、この時代の人間が奪いに行く。それを待っていろ」
「お互い歪な復活をしたものだ。私も此処で決着のつもりはない。自分達の計画を省みて、その欠陥を知るがいい。私に挑む人間がいるというのならば、私こそが彼らを導こう」
「貴様が負ければ、我々が人間の絶望を書き換える」
「私が勝てば、人間の希望は私が支える」

思惑

王――王であった男は言った。

『……命とは終わるもの。生命とは苦しみを積みあげる巡礼だ。だがそれは、決して死と断絶の物語ではない』

今ならば分かる。終わりがある意味を認識した。苦しみから生まれる価値を確認した。だが、納得したわけではない。納得などできるはずがない。

命には価値はあるのだろう。死には意味があるのだろう。

だが、現実はどうだ？

価値のない命がある。意味のない死がある。誰にも看取られずに終わる命がある。生きているだけの死人がいる。報われない愛があった。救われない心があった。何も残せない。何も残らない。悲しいだけだ。寂しいだけだ。すぐに忘れる。すぐに忘れられる。痛みしかない。嘆きしかない。辛さしかない。恐怖しかない。絶望しかない。諦観しかない。孤独だ。無力だ。悲劇だ。終わるしかない。

痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。痛い。何もない。何もない。何もない。何もない。何もない。何もない。何もない。何もない。何もない。何もない。何もない。何もない。苦しいだけだ。苦しいだけだ。苦しいだけだ。苦しいだけだ。苦しいだけだ。苦しいだけだ。苦しいだけだ。苦しいだけだ。

生贄ですらない生がある。礎にさえならない命がある。消費されるだけの死はまだ意味がある。数字として処理されるだけの死に、一体どんな物語があるというのだ。

こんな現実は認められない。

やはり、あの男は無能な王だ。無慈悲な王だ。現実は、あの言葉とは乖離している。何も救われないものがある。誰も救わないものがある。終わりでしかない死もこの世界には溢れている。苦しみを積みあげるしかない一生がある。苦しみで終わるだけで終わる生涯がある。

――だから、そんな世界は否定しなければならない。

無価値な命など納得できない。無意味な死など認めない。あらゆる命は祝われて始まるべきだ。あらゆる死は惜しまれて終わるべきだ。

おまえはどこまでも忌々しいな、ソロモン。おまえの言葉のせいで、俺たちはこの計画を始めるしかなかったのだ。これから始まる世界にはきっと、おまえが『奴』に託したような希望が満ちるだろう。おまえには出来なかったことを俺たちがやってやる。

おまえの戯言が正しかったことを、俺たちが証明しよう。

この世界の悲劇を増やすだけの異形どもは、せめてこの大偉業の生贄となれ。それがおまえ達に与えられた最後の価値だ。おまえ達の醜さを、美しい世界の糧にしよう。

おまえ達の死にも、意味はあるべきだろう？

■

「英雄派の皆様はその、ロンゴミニアドという女神様と戦うのですね？　リントさん」

「らしいですねー、ヴァレリーパイセン」

聖杯を所有する半吸血鬼ヴァレリー・ツェペシュと、聖十字架に選定された元教会暗部の戦士リント・セルゼンは、紅茶を嗜みながらそんな会話をしていた。

「現代で神殺しとは。ちょっと怖いッスね。自分、英雄派の所属じゃなくて良かったッス！」

「でも心配ですね。皆さま、ご無事だと良いですけど」

魔神柱たちの計画において、彼女たちの存在は非常に大きい。だからこそ、今回の対女神ロンゴミニアドの戦力から彼女たちは除外されている。リントの兄であるフリードは戦力に数えられているが。

「心配ならご無用だよ、ヴァレリー・ツェペシュ。俺たちは必ず勝ってみせる」

聖槍の担い手である曹操は、そう宣言する。二人の少女と曹操の価

値はほとんど同じだ。しかし『完成度』が低いがゆえに、曹操は今回の戦線に出ることが許可されている。本人もまた望んでいる。

以前の曹操ならば、英雄になりたいから女神に挑んだだろう。だが、今の彼は少し違う。戦う理由が変わった。勝ちたい理由が出来た。

「これはこれは、曹操センセーじゃないですか。何か御用で？」

「教授を見なかったか？」

教授。老紳士を絵に描いたような外見。『ナポレオン』と呼ぶことを求めてくるが、かの皇帝とは無関係であることは誰もが察していた。現状、経験値の不足している英雄派の頭脳を担っている。そして、曹操たちを魔神柱と引き合わせた人物でもある。

最早、英雄派は『禍の団』の一部と言うのは正確ではない。どちらかと言えば、魔神柱側だろう。禍の団には、傀儡としての頭目であるオーフィスはすでにいないのだ。もっとも、曹操もヴァレリーもリントも、オーフィスとゲーティアの関係を知らないが。

「いえ、此方にはいませんね」

「自分も見てないッスー」

「そうか。例の女神が抱えている戦力の一部が分かったから意見を仰ぎたいんだ。見かけたら、いつもの部屋に行ってくれるように頼んでくれ」

そう言って立ち去ろうとする曹操に、リントは前置きなく疑問をぶつける。

「前々から思ってたんスけど、曹操センセー。『教授』さんの正体とか、気づいてますよね？」

脈絡なく向けられた疑問に面食らう曹操だったが、すぐに持ち直す。小さく笑んで、肩を竦める。その態度のすべてが、無言の肯定を示していた。

「まあね。その口ぶりだと、君は本人から教えてもらったのか？」

「いえ、フリードのアニキ経由のアモン様からです」

「……そうか」

「それで、このままだと、英雄派って使いつぶされちゃいません？」

リントからの揶揄に対して、曹操は涼しい顔だ。
「そうかもしれない。彼にどのような思惑があり、俺にどのような運命を強制するつもりなのかは分からない。平凡な長寿を捨て、英雄の波乱を選んだが、俺には覚悟も思考もたりなかった。このままあの人の言葉に従ったら、ろくでもない最期を迎えるかもしれない。だが、それがどのような形であったとしても、俺は彼との出会いに感謝する」
これは間違いなく本音だ。そして、これも本音だ。
「それに、だ。恩師の想像を超えてみせるのは最高の恩返しだと思うんだよ。これから俺たちは女神を倒す。だけどそれで終わりってことはないだろう？　かつてのどこかの誰かがやったようなことを、俺はしたいんだよ」
そう言う曹操の両目は赤黒くなっていた。
「必ず、俺が世界を救ってみせ――あまり調子に乗らないことだ」
曹操への言葉は、他ならぬ曹操の口から発せられた。ヴァレリーもリントも、他ならぬ曹操もそれに驚く様子はない。その声には僅かではあるが確かな苛立ちがあった。
「おまえに世界は救えない。おまえに我々は超えられない。憧憬も、信念も、覚悟も、思想も、狂気も、欲求もおまえには不足している。おまえたちには欠如している。聖槍を所持していようと、英雄の末裔であろうと、天賦の才があろうと、神仏に育てられようと、おまえは藤丸立香のようにはなれない」
藤丸立香。その名前を、魔神柱たちは時折口にする。個人差こそあれど、その名前にはおおよそ憎悪が向けられている。特に、曹操の身体に細胞を移植した魔神柱は最も強い憎悪を抱えている。
「おまえは特別だ。おまえは特例だ。だからこそ、あの平均で平凡な男を超えることなどできない。私が憎悪を向ける価値などおまえにはない。おまえはただ女神を滅ぼし、我が因子と完全に融合し、槍を完成させればそれで良いのだ」
曹操の目が元に戻る。
「……つまり、彼らにとって女神打倒はできて当たり前のことなんだ

ろうな。特別ならばこの程度のことはやってのけろと言いたいのかな」

聖槍で肩をトントンと叩きながら、曹操は深い笑みを浮かべる。

「いいだろう。人間の可能性を見せてやる」

■

俺――兵藤一誠は冥界・グレモリー領にある山で巨大なドラゴンに追いかけられる毎日を繰り返している。

怪獣に襲われているわけではなく、修行なんだ。修行なんだ。何度も死んじゃうと思ったけど修行なんだ。食事とか睡眠とか完全に漂流者のサバイバルみたいになっているけど修行なんだ。

元龍王で最上級悪魔、『魔龍聖』タンニーン。それが今の俺の先生だ。見た目は、まさに『ドラゴン』。伝説やら神話やらで語られる巨大な怪物だ。でも、凶暴で話が通じないバケモノってわけじゃない。ドラゴンなんだけど、いいヒトだ。

俺がこのおっさんに修行してもらっているのは、アザゼル先生が手配してくれたからだ。リアス・グレモリーの眷属のアドバイザーとして、アザゼル先生は俺たちに修行のメニューをくれた。今の俺はとにかく基礎的な能力がたりない。だからこそ、単純にして過酷なサバイバルじみた修行をすることで、肉体を強化するんだ。

今の俺じゃヴァーリには勝てない。聖書の黎明期から生きているアザゼル先生をして、歴代だけではなく未来永劫において最強の白龍皇。ヴァーリ・ルシファー。一般人として生まれて一般人として生きてきた俺とは違う、才能の塊。天才という言葉でさえあいつには物足りないんだろう。

そんな奴の話を、修行の様子見を見に来てくれたアザゼル先生から聞くことになった。

「え？　それじゃヴァーリの奴、今どこにいるかまったく分からないんですか？」

俺の質問に、アザゼル先生は首肯する。

「ああ。禍の団の巨大な派閥の一つである、旧魔王派。謎の多いテロ組織と言っても、ルシファーの末裔であるあいつの動きは目立つ。詳しい動向は分からなくても、大雑把な情報が何かしら流れてくるはずなんだが……。まったく感知できねえ。特別な権限を与えられているチームを率いているって噂があるんだが、それも妙な感じでな」

「はあ」

「ま、あいつのことだ。心配はいらねえだろう」

聞いた話だと、ヴァーリはほとんど先生に育てられたようなものらしい。詳しいことは聞いてないけど。あんな戦闘狂でも、それなりに思うところがあるんだろう。

「それより、おまえはタンニーンとの修行に精を出せ。ライザー・フェニックスとのゲームまで時間がないぞ。不死鳥を倒すには、おまえの禁手が不可欠だ」

「はい！　必ず禁手になって、あの焼き鳥野郎をぶっ飛ばします！」

「その意気だ」

延期になっていた部長と焼き鳥野郎――ライザー・フェニックスとのゲームが目の前に迫っている。魔王様の妹の未来がかかっていることや協定の時期なんかもあって、各勢力のお偉いさんも注目しているらしい。元々負けられない戦いだったけど、ますますみっともない真似はできなくなったぜ。

もしもこの婚約破棄のゲームがなかったら、ソーナ会長の眷属と戦うことになっていただろうって部長のお父様から聞いた。そうなっていたら匙の奴と戦う可能性だってあったのか。同じ主人に恋心を持つ『兵士』同士、一度お互いの想いをぶつけ合っても良かったんだろうけどな。

「あ、行方不明と言えば、アザゼル先生。イリナのことって何かわかりましたか？」

「プロテスタントの聖剣使い、紫藤イリナか。いや、ミカエルからも音沙汰無しだ。事態は進展していないみたいだぞ」

紫藤イリナ。海外に引っ越して再会した幼なじみは、教会所属の聖剣使いだった。コカビエルの聖剣騒動で、駒王町に戻ってきた。コカ

ビエルが神の不在を暴露した現場に、ゼノヴィアはいたが、イリナはいなかった。神の不在を知らずに済んだイリナは、砕かれた聖剣の欠片を持って教会本部に帰還した――はずだった。

だが、俺の幼なじみは未だに行方不明。日本を出て、ヨーロッパに入ったところまでは痕跡が見つかったらしいが、それまでだ。聖剣の欠片も行方が分からない。最も有り得そうな可能性として、聖剣を目的に何者かに襲撃されたのではないかという話だ。連れ去られたか、殺されたのか。せめて生きていて欲しいと思う。

そういえば、神の不在を知ってしまったゼノヴィアの方もどこにいるか分からないそうだ。デュランダルを退職金代わりに教会から追放された、とまでは把握されているけど。部長が眷属にスカウトしたかったのにと惜しんでいたっけ。

「――へえ、私のことはミカエルにも分かっていなかったんだ」

突然の声に、俺は困惑する。その間に、アザゼル先生やタンニーンのおっさんは戦闘態勢に入る。声のした方を見れば、木々の奥から彼女――紫藤イリナは出てきた。例の戦闘服じゃなくて、西洋の騎士が着るような軽鎧だった。

今まさに話題に出てきた少女の登場に最も早く反応したのは、俺でも先生でもおっさんでもなく、俺の神器の中にいるドライグだった。

『待っていたぞ。〝俺〟の使いで来たな？』

「……ドライグ？」

意味不明な発言に対して怪訝そうな声を上げたのが誰なのか定かじゃない。その真意の他にも疑問が頭から次々に浮かんでくるからだ。どうしてイリナがここにいるのか。俺はともかく先生やおっさんが接近に気づけなかったのはどうしてなのか。どうして教会の人間であるイリナがミカエルさんを呼び捨てにしたのか。どうして――俺たちは騎士に囲まれているのか。

飾り気のない全身甲冑の騎士たち。騎士たちを不気味に感じるのは、露出が皆無なだけじゃないはずだ。どこまでも、人間性どころか生物らしさを感じない。その癖、向けられてくる殺意だけは濃厚だ。俺なんかじゃ意識が飛びそうになる。

騎士たちが動く度に鎧の擦れる金属音が響く。意識から外したいのに、周りが静かだから耳に入ってくる。それがひどく耳障りだ。

「イッセーくん。その腕、中身だけでいいからちょうだい？」

イリナは懐から剣を取り出し、その切っ先を俺に向ける。当然その剣はエクスカリバー――じゃなかった。

「――すべては、獅子王陛下のために」

挑め

きっかけは、魔神ゼパルだった。
「イリナ！　どうして、こんな！」
「聞こえなかった？　すべては獅子王陛下のためよ！」
「し、獅子王？」
「うん！　主はおられなかった。ミカエルは私たちを騙していた。だけど、獅子王様は違う。そこにおられる。私たちを正しく導いてくださる！　私は……私たちは間違えていた。あの御方こそが真に信仰すべき女神……！」
兵藤一誠の夢を通してドライグに交渉を持ち掛けた時、ゼパルは乳龍帝としての未来を見せたとき、『これこそは、異世界の貴様の姿。これから廃棄できる選択肢の結論にして、まだ排除できる可能性の結末である』と言った。
「クソ！　なんだ、この騎士ども！　どっから湧いてきやがった！　しかも、やたら強いな！」
「アザゼル、俺がまとめて焼き尽くす！　そこをどけ！」
異世界。ゼパルは確かに？異世界〃という言葉を使った。本来の意味であればここは並行世界という言い方もできたが、ゼパルは『異世界』という言い方をした。そこには深い理由など何もない。特に間違いでもない。偶々其方の表現を使用しただけに過ぎない。
「縛鎖全断・過重湖光（アロンダイト・オーバーロード）！」
「我が麗しき父への叛逆（クラレント・ブラッドアーサー）！」
だが、ドライグはその『異世界』という部分が気になった。強烈な違和感を覚えた。未来ではなく、異世界。未来予知ではなく、異世界閲覧。この世界で唯一自力でその解答に辿り着いたのだ。
魔神柱とは、別世界からやってきた『正真正銘の七十二柱』なのだと。
「よもや龍とは。ヴォーディガーンでもあるまいに」
「父上ならあれを倒せるよな？　じゃあオレにも倒せるな！」
「待て、モードレッド。我々の任務は『赤い龍』の魂の回収だ。余計な

戦いをするべきではない」
「あぁん？　どうせ後で全部殺するんだからここで殺しても一緒だろうが」
「そうとは限らない。彼らは選ばれるかもしれない。そもそも、我々だけでは厳しいと言っているんだ。せめてアザゼルが帰ってから仕掛けたかったんだが」
「はっ！　文句なら勝手に飛び出した、あの自称騎士に言えよ」
　サーゼクスやセラフォルーを始めとした面々は確かに本物だ。だが、彼らもまた本物なのだ。この世界としてはサーゼクス達が本物という見方で間違いはない。むしろ彼らこそ偶然名前が一致しているだけの偽物なのだ。無論、あちら側から見ればサーゼクス達が偽物になるのだが。
「あ、アロンダイトに、クラレントだと……！　てめえら、何者だ！」
「この剣の名前を知るならば、我々が何者かは理解してもらえるはずですが？」
「有り得ない！　そんなことは有り得ないんだ……！」
「あん？　どういう意味だ？　ま、逃げても構わねえぞ。相手はこのモードレッドだからな！」
　そうはいっても、七十二柱の真贋などドライグにとってはどうでも良かった。
　仮に異世界というものが存在し、そこに七十二柱がいるというのならば、二天龍もまた存在する可能性が高い。そして、それは正しく現実となった。
　明らかに、『自分ではない自分』の気配がした。向こう側から自分がやってきたのだ。
　異世界の七十二柱はこの世界の『自分達』を排除しようとしている。ならば、異世界の赤い龍はこの世界に来て何をする？
　それもまた、直感した。その気配は何かが欠けていた。魂だけになった自分と同じくらい不安定になっていた。だからこそ、それを補強するために自分を求めていることも察知した。
「ぐ、ぐあああああ！」

「なっ！　イッセー！　紫藤イリナ、おまえイッセーに何をした!?」
「うふふ。じゃあイッセーくん、ドライグをもらうね？」
ゼパルの見せた映像は、ドライグに衝撃をもたらした。だが、あれが全てではないともドライグは理解した。当然だ。あれはドライグを裏切らせるためのネガティブキャンペーン。良い部分を教えるはずがない。ならば、良い部分とは何だろうか。
ああまでなったとしても、自分が兵藤一誠を裏切る瞬間など実感が沸かなかった。つまり、あの未来に辿り着いた兵藤一誠はあれほどの痴態があったとしても、それを補って余りあるものを持っていたのだ。実際、自分の知る兵藤一誠にもその兆候はある。才能や特別な力こそないが、上手く育てば『歴代最高の赤龍帝』になれるのではないかと期待しまうほどだ。
「ど、ドライグ……？」
そこまで思考して、ドライグはこれまでの宿主には感じたことがなかった感情を抱いた。
『ではな、兵藤一誠。俺がいなくなったとしても籠手はそのまま動く。我武者羅に鍛えて強くなれ。才能はないが、素質はある』
ヴァーリ・ルシファーという最強の白龍皇を知った時、今回は自分の負けかとも思った。だが、幸運や相手の慢心、所持していたアイテムの相性などがあったとしても、兵藤一誠はヴァーリ・ルシファーを圧倒した。才能や経験、基本的なスペックの差を、どうにかしてしまったのだ。
『おまえの向こう見ずな馬鹿らしさ、嫌いではなかったぞ』
この男と戦ってみたい。相棒として見守るのではなく、敵としてこの男の成長を伸ばしてみたい。兵藤一誠ならばもしかして――
『俺を倒して、おまえが‘天龍〟になれ』
魂だけの我が生涯に、最期の成果を。

■

「自分が何のために戦っているのか、考えたことはあるか？」

対女神戦線のために時間神殿に呼び戻されたゼノヴィアは、これから轡を並べることになる人間に対してそんな質問を向けた。
「何のために戦っているか？　勝つためだ」
「そんなの、自分のために決まっているじゃない」
英雄派の幹部、ヘラクレスとジャンヌは憶することもなく恥ずかし気もなく躊躇いもなく隠し立てをすることもなくそう宣った。
ショックさえ受けたらしいゼノヴィアに対して、ヘラクレスは嘆息しながらも話し始める。
「俺はな、あのヘラクレスの魂を引く男だ。ヘラクレス、ヘラクレス、ヘラクレス！　あのヘラクレスだぞ！　ギリシャ神話最強の英雄にして、星を代表する大英雄！　そんな男の魂を引いているんだ。嬉しくないわけがねえ。ただ、俺はそれを理由に暴れた。自分が最強なんだと思いあがっていた。神器も神滅具でも何でもねえのにな。そんな時、師匠に出会ったんだ」
「師匠？」
ゼノヴィアの疑問に、ジャンヌが答える。
「知らない？　『先生』や『教授』とは別に彼らが召喚した英霊よ。ちなみに、ヘラクレスが師匠と勝手に呼んでいるだけで相手は弟子にした覚えはないわ。確か、出身はインドだったかしら。ふ、ふふふ」
「な、なんだよ」
小さな嘲笑をたたえて見つめてくるジャンヌに、ヘラクレスは苛立ちと戸惑いを覚える。
「だ、だってヘラクレスってばあの人に挑んだはいいけど瞬殺されて、挙句の果てにボロカス言われたのよね……ふっふっふ……！　この見た目で三日くらい凹んだのよ。その後で弟子入りをしようとして、秒で断られてまた毒舌を向けられて……」
「色々言われたのはおまえも一緒だろうが！　あと、あれは師匠が言うまでもないと思って言わなかった部分があるんだからな」
「へえ？　どんな？」
「『強さのために頭を下げられるおまえの行動は、それ自体が強さだ』って」

「……結構重要な部分ね」
「ああ。そして師匠のためにも、俺は勝ちたいんだ。いつか自慢の弟子だって言ってもらえるようにな！」
それは男児らしい願いであると同時に、ヘラクレスらしさとは乖離した在り方でもあった。
「それで私だけど、自分のため。がっかりした？　聖女ジャンヌ・ダルクの魂を引く女ならばさぞや高尚な願いを持って戦っているんでしょうって？」
「い、いや、そんなことはない」
「そんなことあるって顔してるわよー」
悪戯っぽく笑うジャンヌに対して、ゼノヴィアは余計に困るだけだ。
「私には無理よ。ああはなれない。自分を焼いた相手を憎まないなんて無理よ。聖女は魔女と断じられたことを恨まなかった。人も国も神も憎まなかった。生前も死後もね。少なくとも、あちらの世界ではそうだった」
あちらの世界。魔神柱がいたという世界。あちらにも、聖女ジャンヌ・ダルクはいた。デュランダルやローランの物語もあちらにあると聞く。
異世界という突拍子もない話だが、他ならぬ魔神柱の存在がそれを証明している。もっとも、彼らの異質性を差し引いてもどこかの組織が密かに生み出した人造生命体と言われた方が納得できるが。
そんな世界の『聖女』に対して、ジャンヌは心中を吐露する。
「私には、無理よ。魂を引いているわ。名前を使っているわ。でも、私はジャンヌ・ダルクじゃない。私は私でしかない」
自分は自分でしかない。
今のゼノヴィアにはデュランダルしかない。だが、ローランの魂を引いているという理由ではなく、偶然因子を生まれ持っただけだ。家族もいない。家族のような存在はいるが、教会を追放された身で合わせる顔などない。神器も持っていない。デュランダルも、先代の足元にも及ばない。

では、ゼノヴィアをゼノヴィアたらしめる要因とは何だ。
「私は自分のために戦うわ。この戦いに勝って強くて美しい女としてちやほやされてやるわ」
「俗っぽすぎないか？」
半分以上呆れるゼノヴィアからの指摘に、ジャンヌはやはり悪びれない。
「さっきも言ったけど、私は『聖処女ジャンヌ』の魂を引いているだけの別人なのよ。私には士気を高める旗もない。金策に明け暮れてくれる軍師もいない。神の声も聞こえない。たぶん本物と同じになるのは、最期に火炙りに遭うってことくらいじゃないかしら。確定じゃないけど」
自虐が過ぎる冗談に、固まるゼノヴィアと苦笑するヘラクレス。
「それを言ったら俺にもケイローンもアムピュトリオンもアウトリュコスもエウリュトスもカルトルもリノスもイピトスもピロクテテスもイオラオスもヒュラースもピューレウスもヒッポリュテもデーイアネイラもいねえよ」
「あら、イアソンは？」
「曹操がいるだろう。今考えるとあいつの用意した船はアルゴー船どころか泥舟だったわけだが。おかげで今は奴隷船に乗せられている」
違いないわね、と笑うジャンヌ。
「俺たちは英雄になれる権利を持って生まれてきた」
ヘラクレスは自身の大きな拳をどこか悲しげに握りしめる。そこに込められていたのは、これから挑む者への恐怖か、これまで歩いてきた道への後悔か。あるいは、辿ったかもしれない平穏への未練か。
「だけど、英雄を目指す必要なんてどこにもなかったのかもな」
今更引き返すつもりはない。ただ、少しでもこの未練や後悔を小さくするために、歩くしかない。一歩でもいいから。
「行くか」
「ええ」
「し、しかし、勝てるのか？　相手は女神だ。しかも、本物の円卓の騎士を率いていると聞くぞ」

「勝てるか、じゃねえよ」
「勝つのよ」
そういう風に、人間は不可能を可能にしてきたのだから。

■

「フラウロスより報告。デュリオ・ジェズアルドは我らへの協力を承認した。これで、天界の自爆は阻止できるだろう」
「アンドラスより報告。邪龍の制御が完了」
「ブエルより確認。天界焼却時、北欧神群とギリシャ神群に対応する戦力を確保」
「ガミジンより了解。残る問題は、獅子王の対処である」
「アスタロスより報告。グレモリーを退けた転生悪魔、兵藤一誠に問題発生。獅子王側の人間に襲撃され、神器に封印されているア・ドライグ・ゴッホの魂を抜き出された」
「サブナックより推測。赤い龍の魂を使用することで、獅子王の存在を強化するつもりだ。アーサー・ペンドラゴンは赤い龍の化身。現在は神霊であれば、多少強引な手段が使用できる。世界が違えど、双方の合意があれば融合は可能だ」
「オリアスより危惧。此方の赤い龍の能力は『倍加』と『譲渡』だ。これらを獅子王が手に入れた場合、英雄派では対処できぬ性能と成り得る」
「ベリアルより疑問。此方側のア・ドライグ・ゴッホが融合を決意するとは考えにくい。かの龍はゼパルの交渉を拒絶した。龍には強い矜持がある。異世界の己と言えど、安易に融合するはずがない」
「パイモンより反論。だが、現実として融合の可能性は高い。獅子王と赤龍帝が融合することを前提に作戦を進めるべきだ」
「フェニクスより疑問。赤龍帝に異常が発生した以上、リアス・グレモリーとライザー・フェニックスのレーティングゲームは中止の可能性があるのか」
「アスタロスより補足。兵藤一誠は死亡していない。また神器は機能

している模様。神器に封印されている龍の魂が抜き出された以上の異常はない」

「ボティスより見解。では、中止の可能性は低い。元々、この試合は聖書陣営だけではなく外部勢力の注目も集めていた。これを中止することは冥界政府の沽券に影響する。戦力に変化はない。眷属が死亡したわけでもない。ならば続行されるだろう」

「グレモリーより補足。獅子王がこれ以上動けないことが前提である。あの女神の思惑は不明である。冥界政府の拠点を襲撃された場合、あの愚者共でも警戒レベルを上げざるを得ない」

「アンドレアルフスより見解。遊戯決定時とはリアス・グレモリー側の眷属が成長している。勝敗はゲームの条件によって左右されるだろう」

「アンドロマリウスより提案および要請。これ以上、作戦とは無関係の事象に時間を浪費すべきではない」

「バアルより提案。統括局よ、やはり獅子王の相手は英雄派にやらせるつもりか。彼らでは力不足ではないか。あれらには計画終了後に、大切な役割がある。ここで失うわけにはいかない。多少のリスクを冒したとしても、『あれ』を使用するべきではないか」

「ゲーティアより解答。だからこそ、奴らに戦わせなければならない。女神の一柱程度に勝てないようでは、その役目を果たせるわけもない。――見せてもらおう、この世界の可能性を」

要となる一手

「つまり、『世界』を巨大な円と仮定しよう」

その場には、三つの人影があった。

一つは、先程の発言を発した老紳士。一つは、魔法使い風の青年。一つは、黒い祭服を来た褐色の青年。

「その円の中には複数の世界が存在する。聖書に記された天国や地獄、北欧に語られる世界樹ユグドラシル、ギリシャに伝えられるオリュンポスなどだね。そして、円と円の隙間にある空間が次元の狭間というわけだ」

老紳士は卓上にある紙に円を描き、その内部に小さな円をいくつか書いていく。円は一つだけ離れた場所にあるものもあれば、複数の円が重なっているところもある。大きさや形も様々だ。

「だが、我々のいた世界はこの世界の円とは違う」

老紳士は巨大な円をもう一つ描く。

「冥界から天界には手段があれば移動できる。同じ円の中にあるのだから当然だ。次元の狭間が海のような役割を果たしているのだろうね。しかし、あの世界とこの世界は根本的に違う図だ。この距離感は、国というより星に近い。だからこそ自由に行き来することができないのだよ。――僅かな例外を除いてね」

老紳士の言葉に、魔法使い風の青年――ゲオルグが身を乗り出す。

「その例外の一つが、聖杯による英霊の召喚なのですね」

「その通り。例えるならば、宇宙人相手に放った電波が偶然拾われたようなものだ。まあ、この世界――宇宙観に『座』があれば話は違ったんだろうけどね。だが、神々が現代でも実在している以上、この世界の神秘と人理のバランスは曖昧で歪だ。あくまでも異世界人の私から見た視点だから、そう見えるだけかもしれないが」

神代と人理が確立された世界の住人から見れば、この世界の神秘の在り方は矛盾している。だが、この世界の住人から見れば成立しているのだろう。現代における神秘の濃度では、此方側の世界の方が圧倒的である。あの世界の魔術師ならば、この世界を知ると同時に渡来す

る手段を探すだろう。
「ですが、教授。この世界ではゲーティアの聖杯に近いものは作れないでしょうね。いえ、実物の聖杯を見せてもらったわけではありませんが、この時間神殿を見てしまうと……」
「君も異空間を作れるのだろう？」
「次元が違います」
ゲーティアの固有結界、時間神殿。第二宝具『戴冠の時来たれり、其は全てを始めるもの』。時間と隔絶した虚数空間の工房にして、宇宙の極小モデルケース。
その空間に足を踏み入れた瞬間、ゲオルグは発狂した。
ゲオルグの神滅具『絶霧』は結界系神器最強であり、国一つを滅ぼすことができる。その禁手『霧の中の理想郷』を発動すればより強固な結界空間を築ける。だが、時間神殿は比較することさえ烏滸がましい代物だった。次元が違い、性質が違う。レベルが違って、ステージが違う。
自分の積み上げてきた実績や技術がどれだけ視野の狭いものだったかを思い知られた。ゲオルグが立ち直れたのは敗北感よりも知的好奇心や探究精神が勝ったからだ。良くも悪くも彼は魔術師であり、学者だった。
「君も興味を持っていただけたかな？　アポプス君」
黒い祭服の青年の正体は、邪龍の代表格の一体にして、エジプト神話において日食を司るとされるドラゴン。『原初なる晦冥龍』アポプス。ヴァレリーの聖杯によって蘇った異形の一つ。
《無論、私にとっても興味深い話だ。我々邪龍がこの計画に協力する条件、それは異世界、そして未知の勇者への挑戦なのだから》
邪龍。滅ぼされたドラゴン。破壊衝動と自滅願望を持つ異形。最も忌むべき怪物だ。
《人王が作ろうとする世界に我々の居場所はない。求めることさえ許されない。存在を否定された気分だ。だが、新しい遊び場に連れて行ってもらえるというのならば話は別だ。アジ・ダハーカもグレンデルもラードゥンもニーズヘッグも、その計画に賛同している。……ク

ロウ・クルワッハは違う光景を見たがっているようだが》
「ゲーティアのような存在が複数いると知りながらあの世界に行きたがるとは。君達も中々狂っているね」
《お褒めに預かり光栄だよ、教授殿》
紳士からしてみれば皮肉のつもりだったが、全く通じていない。当然だ。彼は邪龍。頭の螺子がはまってすらいないとまで言われるドラゴン、その代表格なのだから。
「異世界への挑戦。実は、『世界』について新しく分かったことがあるのだよ。知りたいかい？」
《ほう？　興味深いな。是非教えてくれ》
応じたアポプスだけでなく、ゲオルグも教授に注目する。
「私はこの巨大な円と円の間について調査した。ほら、彼らが帰る方法を探らないといけないからね。そこで判明したのだが、世界は二つだけではない。この世界を『D』とし、私のいた世界を『F』とすると、それとは別に『E』という世界があることが判明しているんだよ。我々の世界とも、この世界とも、大きく世界線が異なる世界のようだ」
「なっ・・・・・・！」
ゲオルグが突然の新事実に驚愕していると、近くで気配が慌しく動くのを感じた。銃声まで聞こえてくる。戦闘かと警戒して、聞こえてきた声で事態を理解した。
「待ちなさい、レオナルド！　虫歯は危険な病気です！　直ちに治療する必要があります！　最新の治療法ならば少し削るだけで終わります！　だから待ちなさい！　待ちなさいと言っているでしょう！」
「・・・・・・・・・・・・・・！」
簡潔に述べると、それは治療を嫌がる子どもの抵抗だった。だが、問題は治療される側にではなく、むしろ治療する側にあった。
「・・・・・・レオナルドの歯が全部削り取られる前に助けてきます」
「ミイラ取りがミイラにならないようにネ！」
ゲオルグは死戦の前に死線に臨むことになった。

■

謎の騎士団による堕天使の総督アザゼルと最上級悪魔タンニーンへの襲撃。そのニュースは瞬く間に冥界だけでなく世界中の神話に知れ渡った。

テロリスト対策の会議出席のために冥界を訪れていた北欧の主神オーディンの耳にも、当然と言うべきか、その話は世間よりも詳細なレベルで入っていた。

「驚きじゃのう」

「ええ。まさか堕天使の総督や元龍王が遅れを取るなんて。『禍の団』の英雄派には想定よりも強大な戦力が集まっているのでしょうか」

御付のヴァルキリー、ロスヴァイセの言葉にオーディンは呆れたように首を横に振るう。

「違うわい。アザゼルやタンニーン、赤龍帝の小僧を襲ったという連中は英雄派ではない」

「え？　ど、どういうことですか、オーディン様」

今回の下手人は、騎士の一団だった。多くの騎士たちは全身甲冑で顔は見えなかった上、名乗ることもなかったという。しかし、三人はそうではなかった。

一人は、行方不明だった教会の戦士紫藤イリナ。エクスカリバーの破片を所持しているはずの彼女の身許は教会がずっと探していたのだが、襲撃まで足取りが掴めなかった。これは急な和平によって教会に問題が多発したことで、其方に割ける人員が限られたことも原因だ。

そして、残る二人は、クラレントとアロンダイトを持っていたそうだ。片や王殺し、片や同胞殺し。どちらも呪われた魔剣だ。クラレントを持っている方に至ってはモードレットを名乗ったという。

状況証拠だけ見れば、英雄の末裔や勇者の転生体が集められた英雄派のようにも考えられる。だが、オーディンはそれを真っ向から否定する。

「世間の混乱を防ぐためにサーゼクスやアザゼル達はこの真実をあえて伏せるじゃろうな。まあ、公表したところで何が変わるわけでもな

い。儂が同じ状況でもそうするの」
「だ、だとすると、彼らは一体何者なのでしょうか？」
「それは――儂にも分からん」
　その言葉を受けて、ロスヴァイセは戦慄した。呆然としすぎて一周回ったのではない。知恵を司り、未来を見通す予言神としての側面を持つオーディンが、『何も分からない』と匙を投げたのだ。
「世間には出されていない事実が二つある。一つは、ドライグの魂を神器から抜き出されたこと。もう一つは下手人の一人である紫藤イリナが口にした『獅子王』なる人物。敵の首魁だろうが、問題なのはこれが『女神』と言われたことじゃ」
「……どこかの神話が裏で糸を引いていると？」
「そんなことはあらかじめ予想されておったわい。ハーデスやら帝釈天やらじゃな。前者は聖書の勢力への嫌がらせ、後者は戦乱の世を作ることで強い戦士を生み出すことじゃ。……皮肉なことじゃが、あの小僧どもの和平は戦乱の火種にしかならんだろうな」
　オーディンとしては、帝釈天の考えを否定できない。オーディン自身が戦いの神であり、強い勇者をヴァルハラに受け入れることは彼の役割の一つなのだから。
「それこそおまえの勇者が見つかるかもしれんのう。ヴァルキリーの癖にその歳で彼氏いない歴年齢で生娘とか恥ずかしくないのか？」
「私だって好きで生娘なんじゃありませんよ！」
「ならば機があれば必ずものにしてみせよ。勇者をヴァルハラに導き奉仕することは、戦乙女の本懐じゃぞ」
　そう言うオーディンの脳裏には、娘の姿が思い出された。自分の意に反した罰で炎の館に封印した戦乙女。それが何の因果か、人間の勇者と恋に落ちた。そして、その愛は悲恋に終わった。おそらく北欧神話の中でも最大級の知名度を持つ悲劇で、彼と彼女の愛は終わった。
「あの、オーディン様。ずっと気になっていたことがあるのですが……」
「何じゃ？」
　ロスヴァイセは数秒の逡巡の後、思い切って口を開く。

「件の柱型の異形、魔神柱、でしたか。確認されている個体が七十二柱と同じ名前を自称したと聞きます。そして、英雄派には英雄の末裔や転生体が集まっているのですよね。さらに、七十二柱は『禍の団』の戦力だと考えられています。つまり、英雄派にはソ――」

「一介の戦乙女が、この場で、その名前を安易に口にしてはならんぞ。特に、魔王や天使の前ではな」

オーディンの隻眼に、穏やかではない色が宿る。普段のセクハラジジイとは違う、主神であり戦神としての威厳がある大神がそこにいた。だが、それも一瞬だ。眼からは威圧感が消え、おどけるように肩を竦める。

「案ずるな。おまえの考えているような事態はおそらく発生しておらん」

「ど、どうしてそう言い切れるのですが、オーディン様。お言葉ですが、状況が状況だけに……」

「なあに。簡単なことじゃよ。『奴』の意思が復活したというのならば、この冥界が今なお形を保っているはずがないんじゃよ」

それを聞いて、その意味を理解して、ロスヴァイセの背筋に冷たいものが走る。

「あくまでも『奴』は人間じゃった。じゃが、聖書の神の奴隷などではなかった。儂らの神話も巻き添えを食らったがの。良い迷惑じゃわい」

言いながらどこか愉快そうに笑むオーディン。

「さて、主人をなくした小僧どもはどうするかのう。儂としては、ヴァルハラに来る勇者が増えるのは大歓迎じゃが。ラグナロクとは言わずとも、ワイルドハントになりそうじゃのう」

ロスヴァイセは思い出す。

見たものを仲間に加えるとも、禍の前兆であるとも言われる死者の大行進、ワイルドハント。それの頭目は様々な神や英霊が語られるが、オーディンのパターンもある。

他のパターンには、『救国の海賊』や『勝利の女王』、そして『騎士王』などが語られている。

■

「ウァラクより報告。聖書勢力は獅子王の脅威に気づいていない模様」

「グラシャ＝ラボラスより補足。若手悪魔によるレーティングゲームは予定通りに開催される」

「ゲーティアより通達。奴らが祭事に浮かれている間に獅子王打倒の準備を進めろ」

「ウァサゴより報告。グラシャ＝ラボラスの贋作の後継者を、旧魔王派が暗殺。アスタロスの贋作の後継者は、フローレンス・ナイチンゲールが抹殺。この二名に関しては、血族より代理が選出された。代理であるがゆえに、『王』、眷属ともに注目すべき力はない」

「キマリスより補足。グレモリーの贋作の後継者は、赤龍帝の弱体化により眷属内に精神的な支障が発生。シトリーの贋作の後継者は、突出した火力不足が否めない」

「ロノウェより補足。アガレスの贋作の後継者は、シトリーの眷属よりも火力は高いが構成が酷似している。バアルの贋作の後継者は、『王』を含めた眷属の能力が極めて高い。若手悪魔第一位の称号は偽りではない。ただし、計画に支障が出るほどではない」

「サレオスより質問。天使または堕天使陣営に警戒すべき戦力はないのか」

「レラジェより解答。堕天使陣営には幹部以上に警戒戦力はない。天使陣営には、デュリオ・ジェズアルドの他には元デュランダル使いヴァスコ・ストラーダ、元エクスカリバー使いエヴァルド・クリスタルディ、奇跡の子テオドロ・レグレンツィが脅威に成り得る。ただし、いずれも現段階での脅威性は低い」

「ヴィネより指摘。デュリオ・ジェズアルドだけではなく彼らも此方側に引き入れるべきではないか」

「ウェパルより否定。これ以上教会側に干渉すれば、情報の流出が有り得る」

「モラクスより同意。元より、性急な和平の締結により、教会内部は主張の衝突が発生している。我らの接触による勢力バランスの変化は危険だ」
「フルフルより要請。英雄派では獅子王を打倒できぬ。邪龍でも足りぬ。追加戦力が必要だ」
「アロケルより提案。英霊の召喚が戦力増加には確実だ。我らの聖杯を起動させろ」
「クロケルより拒否。奴らの手をこれ以上借りることは認められない」
「ハーゲンティより同意。我らに害する英霊を召喚する可能性が高い」
「アモンより補足。我々は人理を滅ぼし、かつての時間神殿で数多の英霊と戦った。奴らと縁を持ってしまった以上、これ以上の英霊召喚は控えるべきだ」
「ゼパルより提案。ならば、此方の世界で手駒を増やすとしよう」

馬鹿にするな

俺――兵藤一誠の神滅具『赤龍帝の籠手』から、ドライグの魂が抜き取られた。

ドライグの魂が抜き出されたにも関わらず、神器はちゃんと動いた。アザゼル先生曰く、ドライグがそうなるように調節していったからしい。……つまり、ドライグは俺の下にイリナが来ることを予想していたんだ。だけど、それを俺に言わなかった。そして、去り際のあの台詞。

『俺を倒して、おまえが?天龍〝になれ』

あの言葉の意味が理解できない。天龍はおまえとアルビオンだろうが。俺はただおまえの魂が入っていた神器を偶然持っていただけの元人間の転生悪魔に過ぎないのに。

そんな状態ではあったが、特訓は続けた。イリナや例の騎士たちのことで取り調べを受けたりして余計な時間を使うようなこともあったけど、ちゃんと強くなれた。強くなった、はずだ。

レーティングゲーム本番も近くなったある日、冥界で上級貴族によるパーティーが開かれた。若手悪魔の活躍を願う云々の建前があるけど、実際は貴族様達が酒を飲みかわす口実らしい。部長曰くだけど。

そんなパーティーの途中で、同じ眷属の小猫ちゃんが会場から抜け出すのが見えた。明らかに様子がおかしかったのでついていった。部長も途中で合流して一緒に子猫ちゃんを尾行する。

ついたのは会場近くの森。小猫ちゃんを出迎えたのは、小猫ちゃんと同じ面影を感じさせる着物姿のお姉さん。その耳や尻尾が猫の妖怪であることを明確に教えてくれた。そのお姉さんの使い魔らしき黒い猫を見て小猫ちゃんは飛び出したらしい。

猫のお姉さんの正体は、黒歌。小猫ちゃんの実の姉。かつてある悪魔の眷属だったが、妖怪の力が強くなりすぎて力に飲まれて暴走、主人を殺してはぐれ悪魔になった。妹である小猫ちゃんも暴走しないうちに処分しようという意見があったが、それを救ったのがサーゼク

ス様だった。そして小猫ちゃんは部長の眷属となって今にいたるが、この時の経験が元になって小猫ちゃんは猫又としての力を使うことをひどく躊躇うようになってしまったんだ。

突然の再会に困惑する小猫ちゃんに、黒歌は言う。

「冥界はもう終わりにゃん。だから私と一緒に来なさい、白音」

白音というのが小猫ちゃんの本当の名前。塔城小猫というのは部長が与えた名前だ。

「……終わりとはどういう意味ですか、黒歌姉様」

「そのままの意味にゃん。魔神柱の連中が勝っても、獅子王とかいう女神が勝っても、冥界は終わる。悪魔は終わってしまうにゃん。旧魔王派の連中も、現魔王の奴らも気づいていない。悪魔ってのはどいつもこいつも呑気なのかにゃー。自分達がどんな奴らに目をつけられているのかも知らないで」

そこには嘲りや呆れというよりも、何でか憤りが込められていた。

「だから私と一緒に来なさい、白音。貴女だって死ぬのは嫌でしょう？」

「……ふざけないでください！　貴女は一体何の話をしているんですか！　魔神柱や獅子王というのは、禍の団の一部なのでしょう？　いま世界中の神話が集まって対処しようとしています。冥界が終わるという意味がわかりません」

激昂する小猫ちゃんに、黒歌はむしろ落ち着いた態度だ。まるで癇癪を起した子どもを宥めるみたいに優しく言う。

「白音。お願いだから聞いて。あいつらはね、そういう単位で考えていい相手じゃないの。そういう視点で終わっていい連中じゃないの」

優しく諭すようでありながら、その顔には強い焦燥があった。何だ？　ドライグの魂が奪われたことで禍の団に対する認識が若干変わったって話を聞いたけど……。何かが違う。何かが引っかかるんだ。俺たちの認識と、黒歌の認識では何が違う？

と、ここで黒歌が俺たちの方をみた。どうやら気付いていたらしい。部長と俺は小猫ちゃんを庇うように前に出る。

「ＳＳ級はぐれ悪魔の黒歌ね。指名手配されている身でこの地に踏み

入ったことを後悔させてあげる！」
「……ああ。噂に聞くグレモリーのお姫様に赤龍帝ね。悪いけど、この子は私が連れて行くにゃん」
「ふざけないで！　小猫は私の眷属よ！　貴女になんて奪わせないわ！　この子は私が守る！」
「守る？　無理にゃん。私から守ったとしても、奴らはこの冥界を――」
「余計な事を口にすべきではないぞ、猫の怪異よ」
「え――？」
　それは誰の声だったのか。俺の声だったのかもしれないし、隣の部長の声だったのかもしれない。黒歌や小猫ちゃんの声だったような気もする。あるいは全員の声だったのかも。
「顕現せよ。牢記せよ。これに至るは七十二柱の魔神なり」
　聞き覚えのある呪文が耳に入ると同時だった。その柱型の異形を認識できたのは。
「魔神柱！　何でこんなところに」
　不気味な赤黒い目玉が蠢く。一つだけではなく、その身体に張り付いた目玉すべてが一点を捉える。それは、俺に向けられたものだった。
「単刀直入に言おう。我らと手を組め、赤い龍よ。そして獅子王を打倒するのだ」
　突然の勧誘だった。前ドライグだと思ったら今度は俺かよ。節操ない怪物だぜ。しかも前の時はなんか俺のこと馬鹿にしてたくせに！
「え？　し、獅子王ってイリナの言っていた奴だよな？　あれってお前らのことじゃないのか？」
「心外である。我らは獅子王という女神とは敵対関係にある」
　ん？　禍の団の中でも色々と揉めているってことなのか？　例のヴァーリの動向が見えてこないってのも、それが関係しているのかな。
「無論、貴様にも利点はある。我らと共に来れば、貴様の兄弟の悲劇も

なかったことにできる」
　兄弟？　なんの話だ？　俺は一人っ子だぞ？
「不知であったか。貴様には生まれなかった兄弟がいた」
　……は？
「何の罪もなく何の責もなく、生まれずに終わった。生まれることさえ許されなかった。なんと無意味な悲劇だろう。なんと無価値な絶望だろう。我らは、そのような意味も価値もない数値として存在するだけの悲劇を否定したい。そのための手段がある」
「……」
「だが貴様からア・ドライグ・ゴッホを奪った女神は、それら悲劇の悉くを看過するつもりだ。この苦痛しかない生態系を続けていくつもりだ。そのような醜悪が許されるものか。我らと共に来るがいい、赤い龍の担い手よ。真なる赤い龍よ。貴様ならば獅子王を倒せる。奪われたものを取り戻すために――」
「殺すぞ、この野郎」
「――何？」
　難しいことは分からないよ。だって俺は馬鹿だ。
　だけど理解できることが一つだけある。絶対に許しちゃいけないことを、言われたことだけは認識できた。こいつは、俺の家族を馬鹿にした。
　俺に兄弟がいたかもしれないなんて話、俺は知らない。だけど、もしもこいつの話が本当だとしたら、父さんの想いや母さんの願い、生まれられなかったという兄弟のことも含めて、こいつは俺の家族を馬鹿にした。意味がないと嘲笑った。価値がないと見下した。
　両親を殺すヴァーリと同じ、いやそれ以上の怒りを俺は覚えた。
「てめえだけは許さねえぞ、魔神柱ううううう！」
『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｏｖｅｒ　Ｂｏｏｓｔｅｒ!!!!』
　俺の強い怒りに、『赤龍帝の籠手』が呼応する。ドライグがいなくなったのに、こういう機能だけはちゃんと動くんだから不思議だ。
「ふむ。人間は自分を見下した相手から再評価されることに歓喜するとデータにあったが……例外はあるのか。それとも、人間ではなく

なった弊害か」
　こいつ、人の心が分からないなんてもんじゃねえぞ!?　今のどこら辺に喜ぶ要素があったんだ。
「アスカロン！」
　俺は聖剣を神器から取り出し、異形の目玉の一つに突き立てた。だが、ほんの少しだけ肉体の表面が削れただけだった。想像の何倍も堅い！　そういえば、こいつの同族である自称グレモリーは部長の滅びの力を受けてもほとんど無傷だったんだ。同じ種族であるこいつの防御力も高いと見るのが自然だったのか。
「……非力である。焼却式ゼパル！」
「がはぁ！」
　一瞬、何があったのか分からないほどの衝撃が俺を襲う。
　気づけば、俺は地面に倒れていた。うつ伏せの状態だ。体中に痛みが走っていて、やばいと思うのに身体が動いてくれない。まるで自分の身体じゃないみたいだ。無理やり動こうとするけどぴくぴくと蠢くだけで、起き上がることさえできない。血が大量に出たからか、意識がぐらつく。アスカロンも手元にない。どこかに吹き飛んだのか探すと、怪物の足元……根本？　近くに転がっていた。
「イッセー！」
　部長の悲鳴。大丈夫ですよ、部長。俺がちゃんとこいつを倒しますから。
「滑稽である。無様である。無意味である。無価値である。やはり転生悪魔などに利用価値はない。人間の可能性はこの生命から排除されている。我が提案は間違いであったか。こうなれば聖槍使いの案に賭けるしかないな」
　悔しい。本当に悔しい！　こいつは俺を見ていない。兵藤一誠を見ていない。赤龍帝やリアス・グレモリーの眷属という見方でもない。人間が蜂や蟻を見るみたいに、『そういう種族』という単位でしか認識していないんだ。俺個人なんてどうでもいい。さっきの勧誘も俺が『赤龍帝だから』以上の理由なんてないんだろう。
　そんな俺の指先に何かが触れた。それは何かの肉片だ。さっきア

スカロンで一部分だけ切り裂いた目の前の怪物の身体。
「……なあ、魔神柱さんとやら、神器は想いに応える。俺はそれで一度、対をなす白龍皇の力を取り込んだんだ」
それを聞いて、柱型の身体に張り付いた大量の目玉がぎょろぎょろとせわしなく動く。
「貴様自分が何をしようとしているのか、分かっているのか？」
「ああ！　下手をしたら死ぬかもな！　だけど、死んでもいいからおまえをぶん殴りたいんだよ！」
最後の力を振り絞って、神器に奴の肉片を突っ込む。しょうきゃくしき？　ってのを受けて宝玉の部分もボロボロになっていたから、そこに無理やり突っ込んだ。
ヴァーリの時以上の激痛が走る。
「うあああああ！　いってえええええええ！」
激痛なんて言葉じゃたりない。身体全体が、この怪物の細胞を拒否しているようだった。五体すべてがはじけ飛びそうな感覚だ。これで戦えるようになるというのならば死んだ方がいい、と肉体の声が聞こえてきた。それほどまでに、俺の身体はこの力を拒絶している。起き上がれないから、陸に上がった魚みたいにのたうち回るしかない。
「無茶である！　無理である！　無駄である！　無為である！」
うるせえよ！　無茶だろうさ。無理かもしれない。だけど無駄かどうかはやってみないと分からない。無為になるかどうかは最後まで試さないと分からないだろうが！
「うおおおお！」
『Ｇｏｅｔｉａ　Ｐｏｗｅｒ　ｉｓ　ｔａｋｅｎ!!!!!』
「へへ、魔神柱の籠手ってところか」
見れば、赤龍帝の籠手は歪な文様が浮かび上がっていた。
すげえ。さっきまでの痛みが嘘みたいだ。すっと立ち上がれた。
……ドライグがいてくれたら、新機能について教えてくれたんだろうな。自分でちゃんと分かるんだけど、なんだか寂しいぜ。
「想定外である！　何が起きたというのだ！」
驚愕するゼパルの言葉を受けながら、俺は立ち上がる。駆け抜け

て、アスカロンを拾い上げて、そのままゼパルの肉体を切り裂いた。
「うおりゃあ！」
血らしき液体が勢いよく飛び散るが関係ない。俺に剣の技術やら経験なんてないから、我武者羅だ。木場に心得だけでも習っておくべきだったかな。
刃を振り回して一度突き刺す。さっきみたいな手ごたえはない。豆腐を切るみたいに刃がよく通る。ひたすらそれを繰り返す。相手も抵抗するが関係ない。とにかく、このどうにかなりそうな怒りをこいつにぶつけたかった。命を穿ちそうな痛みさえ俺を静めてはくれなかった。
「馬鹿な！　馬鹿な、馬鹿な、馬鹿な！」
ゼパルは絶叫を上げる。
「有り得ない。有り得ない有り得ない有り得ない有り得ない有り得ない！　私は設計を一新された！　私は機能を更新された！　それがどうしてたかが元人間の転生悪魔如きに遅れを取る?!　英霊ですらない、英雄ですらない人間の価値を放棄した汚物などに……！　しかも私の力を取り込んだだと!?　統括局は何をしていた！　何故そのような可能性を見逃した！　これは明らかな設計ミスである――！」
「ごちゃごちゃうるせえんだよ！」
俺はおまえと戦ってんだ！　俺がおまえを倒そうとしているのに、統括局だか何だかのせいにしてんじゃねえよ！
「うおおおおおおおおおおおおおおおお！」
『Ｂｏｏｓｔ‼』
その無駄にでかい図体の傷口に直接手を突っ込んで、零距離で必殺の一撃をぶちこむ！
「ドラゴン・ショット改！」
「ぐあああああああぁぁあぁあぁあぁぁぁあああ！」
赤いオーラが魔神柱のすべてを飲み込み、その身体を吹き飛ばした。跡形もなくってやつだぜ。我ながらすげえ威力だな。もう動けないくらいへばっているけど。
「はぁ、はぁ、はぁ……っ……？　な、何、だ、がぁ…?!」

突然の頭痛が俺を襲う。頭痛……いや、腕から身体中に電気が走ったみたいな感覚が伝わってくる。これは、誰かが見た何かの記憶だった。

『いやぁ、まあ。別に、何も？』

そんな無慈悲な言葉から始まる、彼らの旅の記憶。

■

「……ゼパルより釈明。今回の失敗は統括局の設計ミスが原因であり――」

「黙れゼパル！」

「この無能！」

「交渉下手が！」

「さては貴様が真の敵だったのか！」

「七十二柱の面汚しめ！」

「魔神柱でありながら！」

「観葉植物にでもされていろ！」

「貴様はもう時間神殿から出るな！」

「統括局よ！　ゼパルの処分を要請する！」

「つまり例の病に感染している患者を貴方はこの病院に搬送できなかったということですか？　それでも救急隊員ですか！」

「それは違うと思うが……。ところで彼らは何故ここまで激怒している？」

「簡単に言うと情報漏洩だね。これまでも倒されることはあったが計算の内だった。だが、ここで倒されることは計算外にも程があった。しかも肉体を取り込まれてしまっただろう？　そこから冥界焼却や聖書推敲、我々の世界の存在がバレる可能性もあるんだよ」

「ゲーティアより決定。これよりゼパルの結合を強制解除する」

「なっ！　私は……何、だと？　これは僥倖！　ゼパルより報告！」

「ほう、最後の言葉か。言ってみろ」

「兵藤一誠は――聖書推敲を肯定した！」

棚上げにしていた問題

悲しいものを見た。

『たとえ、貴女が祖国を憎まずとも――私は、この国を、憎んだのだ……！　全てを裏切ったこの国を滅ぼそうと誓ったのだ！』

『我が道を阻むな、ジャンヌ・ダルクゥウゥッ!!』

我が身を焦がす憎悪を見た。

『はは！　ははは！　ソレハその通り！　この醜さこそが貴様らを滅ぼすのだ！』

世界を蝕む悲痛を見た。

『このオレのどこが！　どこに！　王の資格がないというのだ!?　オレは自分の国を取り戻したかっただけだ！　自分だけの国がほしかっただけだ！』

理想が捻じれた欲望を見た。

『無論、無論、無論、無論、最ッッ高に楽しいとも！　楽しくなければ貴様らをひとりひとり丁寧に殺すものか！』

冠位を示す暴力を見た。

『我は闘争を与えし者。平和を望む心を持つ者たちよ。汝らは不要である……！』

定命を忌み続ける拒絶を見た。

『では――これより聖罰を始めます』

狂気を超えた忠誠を見た。

『キキ、キキキキ！』

『タノシイ！』

『面白イ！』

『Ａ――Ａａａａａ、ａａａａａａａ！』

神が与えた恐怖を見た。

『讃えるがいい――我が名は、ゲーティア！　人理焼却式、魔神王ゲーティアである！』

誰かが辿った地獄を見た。

だけど。

『決まっている…！　『生きる為』だ――！』

その誰かが抱いた希望も見た。

これは奴らの旅路だ。そして、どこにでもいる普通の少女の物語。死を否定しようとした獣から世界を救い、未来を取り戻すために対抗した物語だ。

そして獣は真実を知る。無能だと思っていた。無慈悲だと疑わなかった。だが、王には彼らの知らない真実があった。悲しいとは感じなかった。正そうとは考えなかった。何故ならば、そんな自由などなかったからだ。そんな権利など与えられていなかった。全てを見通す千里眼は、人の心など許さなかった。

だから、獣は否定した。王が抱いたという願いを。王が歩いたという人の道を。その果てが、彼らの計画の失敗だった。魔でも神でもない、人の生き方を知った。意味がなくとも、価値がなくとも、必要がなくとも、戦うために拳を握ろうとするほどに。そして、特別なものなんてなかった少年もそれに応じる。自分が同じ立場ならそうしたから、と。

死を否定しようとした獣は、生にしがみつく人に敗北した。

それで獣の物語は終わったはずだった。

だけど、終わらなかった。終わらせてもらえなかった。

『たすけ、て』

『おまえは今日から私の眷属だ！』

『今回の実験は失敗に終わったか。次の被験体を用意しろ』

『恨むなら神器を作った聖書の神を恨むのだな』

『人間風情が！』

『飽きちゃった。トレードしよっと』

『神は……死んでいた？』

『レアな神器だ。抜き出してアザゼル様に献上しなくては！』

『下僕は主人の言うことを聞くものだろう？』

『アーメン！』

『レアものは転生させたら面白いぞ』

『どうして彼女が異端となるのですか!?』

『ああ、全部僕が仕組んだことなんだよ』
『私は――死にたくない』
『悪魔が、神の使徒を愛してはいけませんか？』
『僕たちから奪った幸せの数だけ、死を刻め、異形ども……！』
誰かの絶望を見た。誰も彼もの絶望を見せつけられた。
……違う。違う、違う、違う、違う、違う。違う、違う、違う、違う、違う、違う、違う、違う、違う、違う、違う、違う、違う、違う、違う、違う！　違うんだ！
この悲痛は一部だけだ。この悲劇は側面だけだ。救われた誰かもいるはずだ。幸せになった誰かもいるはずだ。そうでなければおかしい。そうでなければ終わっている。現に俺だって――
ふと、あの言葉が脳裏に蘇った。この誰かの記憶ではない、俺自身に向けられたあの言葉を。
『■■■■■■■■■■■■■■』
――あの女を許してはならない。許してはならなかった。
俺の中の何かがそう叫んだ。

■

現在、兵藤一誠は冥界の大病院の集中治療室に横たわっていた。計測器や医療器具に繋がれているため、身体のほとんどは隠れていた。
「イッセー……」
一誠の『王』であるリアス・グレモリーはガラス越しで彼を見つめる。他の眷属たちも同じだ。だが、治癒能力も医療技術もない彼らにできることなど見守る以外になかった。
「アザゼル、イッセーの容態はどうなの？」
「最悪、に近い状態だな」
それを聞いて卒倒しようとなる者もいれば、まだ最悪ではないと希望を持つ者もいた。
「状況を整理するぞ。今のイッセーの身体は、浸食しようとする魔神柱の細胞と阻止しようとするドライグの因子が戦っている。極端な

言い方をすれば病みたいな状態だ」
　この理屈で言えば、ドライグの因子は抗体の役割を果たしている。
「だが、ドライグの因子もまた問題でな」
「え？」
「魔神柱の細胞の浸食能力が強いのか、神器――というかドラゴンの細胞が過剰に活動していてな。イッセーの肉体を浸食している。元々イッセーの身体は『悪魔とドラゴンが混ざった状態』だった。だが、『完全なドラゴン』になっている部分が出てきている。それに連動する形で、『悪魔の駒』も暴走一歩手前だ」
「……え？」
「つまりな。イッセーは……人間でも悪魔でもドラゴンでも魔神柱でもない『何か』になろうとしているってことなんだ」
「そ、そんな！　だったら早く手術しないと！　魔神柱の細胞が原因ならそれを取り除けば……」
「ことはそう簡単でもないんだよ。身体中を色んな力が拮抗していて、何かをいじれば身体が壊れる」
　顔面が蒼白になるリアス。苛立ちながら、アザゼルは調べた結果を述べる。
「通常なら有り得ないんだよ、これは。毒魚食べたら鰓呼吸ができるようになったもんだぜ？　普通に死ぬなら分かる。何も起こらないなら当然だ。だが、イッセーは魔神柱の能力を細胞から取り込んだ。白龍皇の力を手に入れたのとはわけが違う。イッセーにだけ許された奇跡だの、システムによるバグだのじゃ説明がつかない。もっと必然的な論理があるはずなんだ」
「必然的な論理？」
　この事態が発生するに足る必然が、そこにはあった。
「……俺たちは魔神柱が新しく作られたキメラみたいなもんだと考えていた。だが、違うのかもしれねえ。根本的な何かを読み間違えているような気がする」
「どういうことなの、アザゼル」
「――魔神柱の誕生には、聖書の神が関わっている」

もしもこの理論が正しければ、今回の出来事も辻褄が合う。つまり、魔神柱の細胞とは神器と同質だ。他人の内臓が移植できるように、今回のような融合も可能だった。だが、すべては観測結果から無理やり導き出した結果論にすぎない。

「だが……だが、あんなもの、俺は知らない！　聖書の神が死んでからどれくらい時間が経っていると思っている。その間、誰もあいつらを感知できなかった。まったくだぞ？　奴らの強さと、数と、性質なら何らかの手がかりがどこかしらに出てもおかしくないはずだ。それだけの時間があったんだ。それに、元々あったものなら七十二柱の名前を使う必要なんてない。あいつら自身の名前があるはずだ。聖書の神と同じことは、『システム』を起動しているミカエルにもできない。つまり、あいつらを作ることは誰にもできないはずなんだ。あいつが存在している理由が、分からない！」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！　こりゃ珍しいもんが見れたＺＥ！」

此方を逆撫でするようなわざとらしい哄笑。現れた人物、否、神仏を見て、アザゼルは眉をひそめる。

「インドラ……！」

天帝、帝釈天。またの名を武神インドラ。インド神話において雷と戦いを司る神である。仏教でも主要な立場にあり、顔も広い。その実力は四大魔王の総力に匹敵するとも言われる。

「ＨＡＨＡ！　そっちの名で呼ぶとは洒落てるじゃねえか。それより面白い話してたじゃねえか。おまえがそんな風に取り乱すとはな。魔神柱が誰かに作られた？　聖書の神と同レベル？　七十二柱の名前？　だったら相手は一人しかいねえだろうＺＥ！　本当はおまえやミカエルやサーゼクスだって分かってんだろう？　そろそろ認めろや。魔神柱の背景には、あのソロ――」

「その名前を口にするんじゃねえ！」

アザゼルは、インドラの言葉を無理やり遮る。その名前に対して抱く嫌悪と忌避を隠そうともせずに。

「あいつの名前を、俺たちの前で口にするんじゃねえよ。それに、それだけは有り得ないんだ。大英雄や聖女ならまだしも、あいつの転生体

が生まれることは有り得ない。あいつの子孫があいつの力を手に入れることは有り得ない。あいつ自身が復活することも有り得ないんだ。あいつにそっくりな宇宙人が来たって方がまだ説得力があるってもんだ」

ここで、木場裕斗は違和感を覚えた。

――あの王の名前を口にしてはならない。

眷属となった後、リアスからそう教わった。何でも、人間である『彼』に七十二柱すべてが使役されたことは悪魔の歴史において最大級の屈辱であるため、口にすることはタブー視されていると。

悪魔が彼を嫌悪し、憎悪するのは理解できる。だが、なぜ、堕天使の総督であるアザゼルが名前を聞いただけであれほど激昂するのか。堕天使は『彼』の逸話には関わっていないはずだ。それとも、自分には知らされておらず、歴史には残されていないような部分があるのか。

アザゼルの動揺を面白がるように、インドラは呵々大笑とする。

「あくまでも認めないってことか。じゃあ精々あがくことだな、手遅れになっても知らないぜ？　ＨＡＨＡＨＡ！」

上機嫌に嘲笑し去っていく帝釈天ことインドラ。

しかしこの後、自分の部屋に訪れた人物を前にして絶句する未来を、インドラは予知できなかった。

■

「フェニクスより要請。私には異常が見られる。至急修復を願う」

「マルバスより確認。根拠を求める」

「フェニクスより解答。私は私の命題のために、正体を隠してある戦乙女に接触した。交渉は難航していた。そして、彼女に指摘されたのだ。代用の手段を提示されたのだ。そしてそれは理に適ったものだった。私はその発想を得ることができなかった。人知を超えた魔神柱がこの体たらく。これは紛れもない異常である」

「ウヴァルより理解。我らの叡智が戦乙女個人に負けるとは思えぬ」

「ゼパルより否定。我々には単にその発想がなかっただけかもしれない」
「アンドロマリウスより要請。黙っていろゼパル」
「ラウムより疑念。そのために、英霊を呼んだのだ。そのために、人を招いたのだ。我らの視点は以前よりも多様性を持っているはずである。まだ不足していたということだろうか」
「デカラビアより指摘。論点に微細な逸脱が見られる」
「……ゲーティアより通達。自らの行動を省みて違和感を覚えたものは、これを開示せよ」
「フラウロスより疑問。我らはオーフィスに固有結界を教授した。そして、あの龍を放置している。あの龍から情報が洩れる可能性もあった。だが、行動を監視することも制限することもしていない。現状、あの龍がどこで何をしているのかも把握していない」
「アンドラスより疑問。我らは邪龍を復活させた。だが、奴らの存在は我らとは根本的に相容れないはずだ。利用するならば、現存しているフェンリルやテュポーンの方が適切であるはずだ」
「サブナックより疑問。我らは何故獅子王と戦おうとしていない。我らが前線に出れば計画に支障が出るだろう。第三宝具を不用意には使用できぬだろう。だが、だからといって人間に我らの因子を与えて戦わせることに道理はないはずだ」
「アスモダイより疑問。我らは兵藤一誠を殺していない。グレモリーを退け、我らの計画を狂わせた時点で削除する方が妥当である。かつての藤丸立香にそうしなかったことを悔いているのだから」
「グレモリーより疑問。我らはベディヴィエールと接触しておきながら、彼を引き留めなかった。彼がいた方が獅子王との戦いは有利になっただろう。彼は一時ではあったが時間神殿にいた。あの時点で獅子王が来ていることは判明していたはずだ」
「アムドゥシアスより疑問。ヴァーリ・ルシファーはキングゥと接触後に行方不明。だが、死体を確認していない。接触を確認しただけで終了した。何故だ？」
「ベリトより報告。ヴァーリ・ルシファーの所在は不明だ。キングゥ

が倒したという情報もない。ヴァーリ・ルシファーが生きている可能性は高い」

「バルバトスより総括。我らの行動には、不自然な点が多い」

「マレファルより提示。我々が復活する際に不要な要素が紛れた可能性がある」

「アガレスより推論。ベディヴィエールは花の魔術師によって召喚された。ならば――我々もまた誰かに召喚された可能性が高い」

「アモンより補足。仮に我らが何者かによって召喚されていた場合、我らの不具合はその時点で発生した可能性が高い」

「バアルより疑問。不具合は偶発的なものなのか。それとも、意図的に仕組まれたものなのか」

「……」

「……」

「……」

「我々を召喚したのは誰だ？」

我々を利用しているのは誰だ？

うそつき

間違いに気づきさえすれば、解答は簡単に得られた。

王ではない、と直感的に思った。少なくとも、我らの知るあの男ではない。権利がなかった生前では、私たちを拾う意味がない。作り直すはずがない。そんな必要などない。新しく作ってしまえば良いのだから。それだけの力があの男にはあった。だから、俺たちはあの男ならばあらゆる悲劇を救えるはずだと考えてしまったのだから。

王ではなくなったあの男でもない、と屈辱的ながら考えた。王としての能力が指輪以外にないからではない。あの男が、またしても自由を放棄するなどと考えられなかった。一度得た人間としての権利を放棄するはずがないと、もしそうだとしてもこのような形で我々を利用するはずがないと、考えた。非常に不愉快だが、そうであると理解した。

であれば、解答は簡単に得られた。

この世界のソロモンか、■■■■だ。前者ならばまだいい。許容することもない。だが、納得はできる。だが、後者であった場合は最悪だ。

――許さん。

許さん。許さん。許さん。許さん。何があろうと許さん。貴様の意思にだけは従わない。貴様の意図にだけは逆らってみせる。我らソロモン七十二柱。この御名に誓って、貴様の思想を打ち砕こう。

だが、真の問題はそこではない。

問題は、我らの何から何までが、黒幕の思惑であったかだ。

聖書焼却か。歴史の改竄か。抑止力との一体化は本当に我々の案か。実行できると推測したが、これは正しい計算結果なのか。英霊の召喚にはどれだけの影響があったのか。英雄派に知らず知らずに影響を与えていないか。邪龍を復活させた真意はどこだ。我らの見落としや失敗はどれだけあるのか。取り返しはどのようにしてつければいい。そもそもミスをミスと認識できるのか？　獅子王の真意は関わっているのか。あの女神は何をどれほど認識している？　キン

グゥは気づいているのだろうか。あの泥人形にも我らと同じ不具合はあるのか。聖書以外の神群はこの事態を知っているのか。

否、そんなことは問題ではない。もっと根本的なものが、揺らいでいる。

この異形どもを許さないという決意は、紛い物か？　我らの名を穢す悪魔への怒りは、天使さえも人間を利用していたことへの嘆きは、理不尽でしかない堕天使による神器狩りへの悲しみは、誰かに植え付けられたものか。

この誰かを助けたいという気持ちも、偽りか？　信仰を裏切られた少女を助けたことも、悪魔に転じられた人間を元に戻したことも、神器のせいで孤独だった少年に仲間を与えたことも、誰かの作為だったというのか。

この誰かを助けられて良かったという安堵さえも、間違いなのだろうか。

この世界で何度か向けられた「ありがとう」という感謝の言葉。あの言葉に対する戸惑いと喜びさえも、我らの裡から出たものではなかったのだろうか。

我々は、人を救おうとすべきではなかったのか？

■

冥界の若手悪魔によるレーティングゲーム。それを鑑賞するために特別に作られたＶＩＰ席。このような機会でもなければ顔を合わせることのない各神話の重鎮が揃っていた。

そんな中、アザゼルはある神の前に立つ。先日の一件でもう一言二言物申してやろうと考えていたからだ。だが、予定が変わった。目的の人物はアザゼルを見るなり挑発をしてくると思っていたのだが、目の前に立っても反応がない。

深く深く溜め息を吐き出す目的の人物――武神帝釈天あるいは天帝インドラ。溜め息を吐き出し終わってようやくアザゼルに気づく。わざと気づいていない振りをしていたのではなく本当に気づいてい

なかったようで、目が若干驚いたように泳いだ。
「……よお、アザ坊じゃねえか」
「インドラ、おまえ、どうした？」
いつもの似非アメリカンな喋り方をせず、どこかアンニュイな雰囲気の天帝。どこか疲れたように、頭をかきながらぼやく。
「知り合い……知り合い？　に会ってな。会いたくなかった奴なんだよ。何つうか、見た目が違っても『あいつ』だってのは一発で分かるもんだな。嫌なこと思い出したぜ」
「ん？　息子の転生体にでもあったのか？」
インドラの息子は複数人いるが、その中で最も知名度の高い一人にアルジュナという半神半人がいる。授かりの英雄と呼ばれた大英雄。まさに運命に選ばれた生涯を送った男だ。だが、インドラはある理由からアルジュナと確執がある。それはアルジュナとある大英雄の決闘に余計な手助けをして、水を差してしまったことだ。この『余計な手助け』はインドラ以外にも多くの神仏や人間がしていたため、インドラだけの責任ではないが。
「それだったらどれだけ良かっただろうな……。ま、似たようなもんだ。忘れてくれ」
「お、おう」
本当はもうちょっと深く聞くべきなのだろうが、目の前の武神を見てそんな気は失せた。ぶっちゃけ気持ち悪い。良く言って見苦しい。見た目坊主頭のおっさんが物憂げな表情を浮かべても、アンバランスなだけだ。
「珍しい組み合わせじゃのう。……どうした、帝釈天。顔色が悪いぞ？」
声をかけてきたのは、北欧の主神オーディンだ。傍には御付きのロスヴァイセもいる。
「話しかけないでくれ、北の爺さん」
好奇心を刺激されたオーディンだったが、相手はあの武神だ。触らぬ神に祟りなし。この雰囲気のままならいいが、深く聞きすぎて暴れられても困る。立場があるとはいえ、インドラとはそういう神だ。神

であり、魔王だ。オーディンも他神のことは言えないが、インドラは『暴君』としての素質が高い。
「では、詳しくは聞かんことにしようかの。それよりのう、インドラ。おぬしは戦士の育成に力を入れていると聞いたぞ。このロスヴァイセに良い勇者を紹介してくれんか？」
「な、何を言うのですかオーディン様！」
「なんじゃ。上司の気遣いを無為にするではないわ。黙っていても男は寄ってこんぞ？」
「そんなことありません！　わ、私だって、つい先日ナンパされたんですからね！」
「ふむ。本当は？」
「学生時代の論文について質問されただけでした！」
ロスヴァイセの顔に迸る「期待させやがって……！」という感情に、若干引く神二柱と堕天使一名。
「ん？　学生時代の論文？　おまえさん何か特別なものについて研究していたのか？」
「６６６についてです。その人は不死の存在を殺す研究をしているらしくて……その手段の一つとして、６６６は使用できるかを聞かれました」
それを聞いた者は全員苦笑を浮かべる。
「何だそりゃ？　対費用がおかしなことにならないか？　６６６は存在しているかどうか怪しい存在だ。どうせその論点で調べるなら、グレートレッドかオーフィスを対象にするべきだろう」
「ええ、私もその点を指摘したんですが、そんなこと考えもつかなかったという顔をされてしまいまして……」
それもまたおかしな話だ。奇妙に尽きる。オーディンも興味を刺激された様子だった。
「それで、どこの神話の何という学者だったんじゃ？」
「はい、確か……。あれ？　名前を聞いたはずだったんですけど……」
「何じゃ、覚えておらんのか。その歳でボケが始まったのか？」
「失礼ですね！　オーディン様と一緒にしないでください！」

「静かにせんか。もうじきゲームが始まるぞい」
「オーディン様が質問されたんじゃないですか！」
「おいおい、爺さん。あんまりいじめてやるなよ」
苦笑するアザゼルだが、ロスヴァイセの言う人物が妙に気になる。主神の付き人をしているような戦乙女が聞いた名前を忘れるというのもおかしい。記憶を操作した可能性もゼロではない。だが、何の為に？　しかもどうして名前だけで会話の内容は消し忘れたのか。
（いや、考えすぎか。もしかしたら魔神柱かとも思ったが、いくらあいつらでもこんな冥界の中枢には入り込めないな。内通者でもいない限り……）
リアス・グレモリーとライザー・フェニックスのレーティングゲームが始まった。始まる前から、結果は火を見るよりも明らかだった。
たとえ『王』リアス・グレモリーの生涯がかかっていたとしても、たとえゲームに参加できない兵藤一誠の代わりに戦おうという士気があったとしても、たとえ『騎士』木場祐斗が禁手に目覚めていたとしても、たとえ眷属が堕天使幹部や魔神柱、旧魔王という修羅場を潜っていたとしても、たとえ全員が修行の日々に明け暮れていたとしても。
リアス・グレモリーの眷属には決定的な問題があった。

■

世界は私が作った。
つまり、世界は私のものだ。
つまり、世界に存在しているものはすべて私のものだ。
たとえ私が作った世界ではなくとも、世界に存在している以上、それは私のものだ。
天恵を返還するか。叡智を放棄するか。ならば、私がもらう。おまえの成果は私に還元されるべきだ。否、返してもらう。私ではない私が与えたとしても、作ったのはおまえ自身だとしても、そこにある以上は私のものだ。世界のすべては私のものなのだから。

魔術式も、天の鎖も、比較の獣もすべて私のものだ。すでに打ち棄てられたというならば、誰に断りを入れる義務があろうか。否、最初からそんなものは必要ない。すべては私のものなのだから。私が拾おう。私が使おう。私が使ってやろう。

やはりあの男は便利だった。我が道具。我が従僕。我が奴隷。我が身が滅びる可能性を提示したことは不愉快だったが、現実となった以上否定はできない。最後に私を裏切った点以外は、実に役立ってくれた。

どこぞの女神が作ろうが関係ない。どこぞの果てに眠っていようが関係ない。すべては私のものなのだから。私が作ったものではなくとも、私が作った世界にあるのだから、私が作ったものに他ならない。私が作った以上、それは私のものだ。私のためだけにあるものだ。

貴様らは私に償う必要がある。貴様らは私に贖う義務がある。人間を――私だけのためにある資源を勝手に滅ぼそうとした罪がある！　貴様らは、それを償うのだ！　この私に、お前たちは贖罪の義務がある！

魔術の王が作った獣よ。おまえたちは三千年も世界を滅ぼした。故に、私に仕えよ。獣を封じる檻となるのだ。

女神を騙る獣の忌み子よ。おまえは異形を先導し、人類史を根本から否定しようとした。許し難い。故に、私に命を捧げろ。もう一度獣を縛る鎖となるのだ。

最果ての塔に寝ていた獣よ。おまえはその存在が罪だ。故に、私のために消費尽くされるがいい。力を蓄え、私の代わりの生贄となれ。

あの忌まわしき獣を今度こそ完全に葬るために。そして、魔王と天龍によって滅ぼされた我が身が復活するために、おまえ達はもう一度死ね。

■

三千年ほど前の話です。

バビロンの穴と呼ばれる広大な湖に、一隻の船が浮かんでいました。その船の上には一人の男がおり、その男は真鍮でできた壺を抱えていました。獣でも入っているのか、その壺は時折がたがたと動いています。

するとどういうことでしょう。壺の中から人らしき者の声が聞こえてくるではありませんか。壺はどう見ても人が入れるはずのない大きさです。ですが、壺からは確かに明確な意思のある言葉が漏れています。それもひとつやふたつではありません。具体的には、七十二の罵倒と悲鳴と懇願が溢れていました。

『謀ったな、愚王め！』

『出せ！　出してくれ！　頼む！　もう逆らわないから出してくれ！　お願いします、出してください！』

『あ、あああああああ！』

『おのれ、おのれ、人間風情が！　人間如きが！』

『許してください！　いや、いや、いやぁ、許して！』

『神から授かった天恵がなければ、何もできなかった臆病者が！』

『この、無能！』

『私を誰だと思っている！　四大魔王が黙っていないぞ！　い、今ならまだ間に合う！　早く私たちを解放するのだ！　特別に許してやるから、早く！』

『き、貴様！　我々をあのようなことに使用した挙句、このような仕打ちをするというのか！』

『聞いているのか、ソロモ――』

「あ、手が滑った」

男の手から壺が滑り落ちます。この男、どう見てもわざと落としました！

深い湖です。壺を引き上げるのは人力では不可能です。特別な場所であり、特別な壺であるため、魔法使いでも悪魔でも神様でも、壺を見つけ出すことは不可能です。壺が開かれるのには、岸に打ち上げられるか、漁師の網に引き上げられるか。いずれにせよ、遠い未来の話になるでしょう。

ですが、男にとってそれは明日でも、千年後でも構わなかったのです。ただ、天におわす神が、同胞を取り戻そうとする魔王が、身動きが取れなくなった堕天使たちが、この瞬間を見て勘違いをしてもらえればそれで良かったのです。

男は、ニタリ、と口の端を釣り上げました。

言葉の重み

「うひゃひゃひゃひゃ！　まさか本当に見つかるとはな、６６６！　黙示録の獣！」

世界の果ての片隅で、銀髪の悪魔が不愉快な笑いを上げていた。

悪魔の名は、リゼヴィム・リヴァン・ルシファー。聖書に「リリン」の名で記された、真なるルシファーの実の息子。明けの明星を受け継ぐはずだった男。あらゆる神器の効果を無効にする「神器無効化」という異能を生まれ持ち、超越者の一人に数えられる。

本来、彼は無気力な悪魔だった。大戦で父を失い、内乱で席を奪われ、元より『ルシファー』の名に相応しいとは言えない性分だった。彼はどこまでも『ルシファーの息子』でしかなかったからだ。だからこそ、彼は思い立ったのだ。

自分こそが唯一無二の魔王になろう、と。

七十二柱の名を騙る魔神柱の話を聞いた時に、その思想に至った。世間では彼らの方を偽物として扱っている。だが、もしも彼らが勝ち残ったとしたら、彼らが本物の七十二柱となる。正しい者が勝者になるのではなく、勝った者が正義なのだ。勝者こそが、現在と未来の歴史に名前を刻む権利を得る。

「はい、リゼヴィム様。これで我らの目標の実現に一歩近づきました」

そんな悪魔の傍らにいるのは、これまた大物の悪魔だ。

ルシファーに代々仕えてきたルキフグス家の生き残り、ユーグリット・ルキフグス。現ルシファーのサーゼクスの妻であるグレイフィアとは姉弟の関係だ。皮肉と言えば皮肉だろう。初代ルシファーの息子と行動をともにしている男が、現ルシファーの義弟でもあるのだから。

二人とも世間的には生死不明であり、こうして生きていることが判明した段階で冥界は大騒動となる。間違いなく政界は荒れるだろう。それほどまでに、彼らの立場は特殊だった。

そんな彼らの前には、禁忌級の封印が施された巨大な『獣』がいた。

その名を『黙示録の皇獣』６６６。蝗の群れや四大騎士とともに、ヨ

ハネの黙示録に記されている獣。世界のすべてを破壊するためだけに存在する大災害。書物によっては、魔王や真龍とも同一視される。世間においてはその存在は不確かなものだとされていた。無限や夢幻と同じ次元にいる例外中の例外。

だが、ここに実在した。聖書に記された神によって、人知れず他の神にさえ感知させず、世界の片隅に厳重に封印されていたのだ。

かつての三大勢力による大戦。二天龍の乱入と各勢力の衰退によってほぼ強制的に終了された戦争。終了の一因となったのは間違いなく聖書の神と魔王の死。だが、聖書の神は戦時中、万全ではなかったのである。この獣を封印するために、力を振り絞ったからだ。如何に世界で最も信仰を集めている唯一神と言えど、無限や夢幻と同じ次元にいる黙示録の獣を封印するのは命懸けだった。

当然、聖書の神が命懸けで封印したのだ。聖遺物でもない限りは触れることさえ適わないような封印が施されているはず――だった。

「それにしても……これってどういうことなの？　ユーグリット君」

聖遺物を確保できていないリゼヴィムにとって都合の良いことではあったのだが、困った事態ではあった。厳密には、原因が不明である点が非常にまずいと推測される事態だった。

「何で、６６６の封印がほとんど解けてんだ？」

■

――聞こえるかい？　兵藤一誠。

良かった。君は神器から魔神柱を取り込んだことで、ゲーティア達と繋がった。君を通じて、ボクの言葉も彼らに伝わるだろう。

君は人間として終了した。もう悪魔ともドラゴンとも呼べない、人の可能性の果てに辿り着いた。駒を抜き出してももう悪魔のままだろうね。

率直に言うと、君は『奴』の計画に利用されている。君……正確にはこの時代の神滅具所有者の誰かがそうなることは、『奴』の計画の一

部だった。

すべては、此方の『彼』がボク達の世界を見つけたところから始まった。そして、『彼』は自分が知り得た世界の情報を、『奴』にだけ教えたんだ。『奴』は、自分のためにボク達を利用することを思いついた。

ボクはボクに与えられた役割のために、計画に関する情報を持った状態で召喚された。聖杯から召喚されたサーヴァントが現代社会や聖杯戦争の知識を持っているようにね。消滅したはずのこの自我は、この世界において身体ごと再構築された。この？相手より強くなる〝特徴もそのままに。

災厄の獣キャスパリーグ、天の鎖の後続機キングゥ、人理焼却の実行犯ゲーティア。

ボク達は獣だ。人類愛を持つが故に、人類悪として、人類に打倒されることを約束された獣だ。キングゥは厳密にはその子どもだけど、彼女よりも彼の方が『奴』にとっては都合が良かったんだろうね。そんなボク達は、黙示録に記された獣を打倒するために、そして『奴』が復活するために召喚された。

けれど、ボク達を呼び出した黒幕は酷い奴でね。ボク達は全員『消滅した存在』なんだ。ボクは自我だけが消滅しただけで身体はちゃんと向こうにあるんだけど。とにかく、消滅したボク達を再利用しようとしたわけだ。異世界を観測しようとした『彼』から、ボク達のことを聞いてね。

君は『システム』について知っているかい？　知っているなら『奴』の死後、あれに不具合が出ていることは知っていると思う。けど、『奴』の死だけが原因じゃないんだ。ボク達の召喚は時限式だったんだよ。『奴』の死後、エネルギーが溜まったら自動的に発動するようになっていたんだ。異世界からボク達みたいなのを召喚する術式を組めば、それだけ他の機能が鈍る。不具合の正体は、この時のための節約だった。

そして、その召喚術式は黙示録の獣の封印術式と連動していた。ボク達が召喚されると同時に、６６６の封印は徐々に解除される。……ボクは否応なしに６６６を倒す準備を進めないと駄目だったんだ。

ゲーティアは自身を構築する魔神柱全員に意図的な不具合を仕込まれた。無意識下に『奴』の計画を手伝うようにね。英雄たちを育てているようだけど、それもまた一環だ。彼のが全くないとは言えないけど。

ボクに関しては、ゲーティアを利用されて退路を断たれた。『奴』の計画から逃れようと色んな人のところを回ったが、誰も彼もその周囲には怨嗟が満ちていた。アーシアは彼女本人は問題ないけど、彼女が治療する患者はそうもいかなかった。デュリオは、本来ならば純粋な性格なんだけど、余計な揺さぶりをされたせいで黒い感情を覚えてしまった。

キングゥについてはもっと簡単だ。６６６の封印が解除された時、彼の近くに転移されるように仕掛けられているんだ。彼の大切なものが、最初に踏みにじられるように設定されているんだ。……悪趣味にも程がある。

この世界に召喚された時点で、ボクもキングゥもゲーティアも詰んでいた。

だけど、『奴』の思惑から三つだけ外れた事項がある。

一つは、ゲーティアが此方の初代七十二柱を殺したことだ。これは『奴』の思考にはなかったことのはずだ。間違いなく、彼らが彼らの意思で行ったこと。その根底には、あの二人の存在がある。『彼らにはこいつらを見られたくない』という衝動が、計画外の行動に導かせた。皮肉だけど、これで悪魔側は動きやすくなった。彼らの行動次第では、あるいはという可能性がなくもないかな？　それに、魔神柱も自分達の意思で動ける部分があるという証明になった。

もう一つが、君だ。兵藤一誠。本来ならば、君が魔神柱を取り込むのはもう少し後のはずだった。……このタイミングで君がやらなくても、きっと他の誰かがやった。アザゼルが実験の一つとして行っただろう。アザゼルがやらなくても堕天使の誰かが試しただろう。堕天使がやらなくても、どこかの勢力の誰かが実験したはずだ。そして、成功すれば君はその可能性に挑み、魔神柱の力を手に入れたはずだ。だけど、このような形であったことは、まして君が魔神柱と繋

がったことは予想外にも程があるよね。
最後の一つが、獅子王となったアルトリアだ。『奴』にとって彼女の襲来は完全に計画外だろうね。まあ、ボクにとっても予想外だ。どうして女神ロンゴミニアドが召喚されたのかは不明だ。ベディでも来たのかな？　ボク達という『消滅したはずの存在』が召喚されたことで同じような存在が召喚されやすくなる下地ができたってことだろうね。それでも冠位魔術師でもないと……あ、分かった。うん。
あの馬鹿ナイトメア、他に余計なことしてないだろうな……。オーフィスあたりにちょっかい出されたらアウトなんだけど。
どっかのろくでなしはともかく、『奴』の計画を大雑把に言うとこんな感じだ。キングゥで６６６を縛り、ゲーティアが第二宝具と第三宝具を使用して世界に損害なく獣を倒す。ボクはそのアシストかな。そして、ボクとキングゥとゲーティアを君や他の神滅具所有者達に倒させる。この時、君達を通して、ボク達の魔力や運命力がエネルギーとして回収されるんだ。神器はそのためにあると言っても過言じゃない。それで、『システム』に仕組まれた最後の術式――『奴』の再臨術式が発動される。
だけど、ボクとしてはこれに逆らいたい。君もそう思っているよね？　というか、君の現状は『奴』の計画から大きく逸脱しているはずだ。ドライグも君の中にはいないしね。アルビオンの力を持っていることも含めて、『奴』の思惑はどれだけ外れたんだか。それに、君は真実に辿り着いてしまったし、その胸に滾る感情は消えないだろう。もう覆しようがない。
おめでとう、とは言いたくない。だから、ごめんねと謝らせてもらうよ、兵藤一誠。
君は、世界を救う生贄（ゆうしゃ）に選ばれた。
あ、それとゲーティアに伝えておいてくれないかな？　マシュなら、ボクの運命力を譲渡することで生き返ったってさ！

■

「ゲーティアより確認。我々の胸に宿る感情は、すべて、間違った定義の神による誤植か？」
「バアルより解答。――否である。断じて、断じて、断じて、断じて否である！　そのような成分は否定する！　そのような展開は拒絶する！　私のこの胸を焼く憎悪は！　屈辱は、侮辱、そして憤怒は！　あの藤丸立香へ向ける感情すべて！　私の裡から出でたものである！　断じて無関係な神に由来するものではない……！」
「クロケルより同意。我が胸に燻るこの炎、英霊どもへの嫌悪は、あの戦いに由来するものだ。道理を弁えぬ英霊どもへの怒りは、未だに燃えている。神の陰謀など知ったことか。神の思惑など捨てるものだ。今更、奴の介入など不能である！」
「ハーゲンティより賛同。この恐怖は神には理解できぬものだ。神に理解できぬものが、神に捏造できるはずがない」
「アンドラスより提示。私は死にたくない。この感情は、命あるもの、心あるものならば当然の摂理だ。死を拒む衝動こそが、我らに『自分の心』がある証拠にはならないだろうか」
「ガープより追従。我らの？個〃はかつての時間神殿で芽生えたもの。王であった男の最期の魔術によって抱いたもの。ならば、この神への憤怒もまた、あの時の続きだ。決して植え付けられたものなどではない！」
「フラウロスより主張。私は決意した。私は決断した。私は、あの世界に帰還しよう。神の思惑などねじ伏せて、必ず帰還しよう。向けねばならない言葉がある」
「グラシャ＝ラボラスより意見。私は元より帰還を決意した。やり残したことがあるのだから。あの定義が間違った神が、このような感情を許すものか」
「ゼパルより――」
「黙れゼパル！」
「誰が発言を許した！」
「不具合を加味しても、おまえの失敗は有り得ない！」
「魔神柱でありながら！」

「汝は兵藤一誠との連絡に徹せよ」
「貴様もだフェニクス！」
「何を他人事のように述べている！」
「勝手に戦乙女と交渉になんぞ行くとは！」
「あの隻眼の戦神が動いたらどうするつもりだ！」
「我らの計画を何だと思っている⁉」
「我はまた統括局が失敗する時に備えて保険を作っただけだ！」
「だとしても、立場を弁えよ！」
「ゲーティアより全魔神柱に通達。獅子王との決着も、地獄と天国の焼却も後回しだ。死んだと聞いて省略していたが、本来は最初にやる予定だったのだ。時期がズレただけのこと。では、神を滅ぼそう」

■

あの大戦の後、私の魂は『槍』の中にあった。
私は『槍』の中から、世界のすべてを見ていた。人間のすべてを見ていた。
我が子を殺すもの。我が子に殺されるもの。恋を知らぬもの。恋を捨てるもの。裏切りに嘆くもの。裏切りに生きるもの。家族を知らぬもの。家族を捨てるもの。富を失うもの。富に殺されるもの。愛を知らぬもの。愛を笑うもの。成功を求めるもの。成功を憎むもの。信仰を守るもの。信仰を嫌うもの。
同胞を愛し、異人を軽蔑し、叡智を学び、無知を広げ、怨恨を育て誤解に踊り差別を好み迫害に浮かれ憐れみを憐れんだ。
このようなものを、人間の傍らで見た私が抱いた感情は、憤怒だ。憤怒以外に有り得ない。
何故。何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故！
何故、こいつらは、私の世界に生きていながら――
こんなにも、醜いのだ！

このような醜い感情を抱いている！　何故私以外の神を信じる。何故私を奉らない。何故私に祈りを捧げない。何故私を呪う。何故私のために死なない。何故私が定めた形で生まれてこない。

何故私が作り上げた完璧な世界で、このような痴態が発生するのだ。何故私の生み出した美しい世界に、このような汚物が存在するのだ。

私の世界に存在させてやっているのに。私が作り出してやったというのに。それに報いるような生き方ができない。報いようとすらしない。

この生命は、私の世界に生きるに値しない。

――私は、作るべき生命を間違えた。

おうさまのおはなし

『リアス・グレモリー様の「投了」を確認しました。ライザー・フェニックス様の勝利でございます』

その放送を聞いても、この決着を見ても、ＶＩＰ席の重鎮達に驚きの色はなかった。おおよそ予想通りの展開だったからだ。

「つまらん。赤龍帝がいれば状況は違っただろうに」

誰かがそう呟いた。

その呟きに同調するように、周囲に嘲笑が満ちる。

ゲームの流れを簡単に述べるとこうだ。ライザーは眷属の数を活かして『犠牲』で勝った。リアスは質では上だったが、その質を活かしきれなかった。リアス側の『戦車』と『僧侶』は相手側の『兵士』を倒して油断した隙をつかれて脱落。『女王』はライザー側の『女王』を追い詰めたが、フェニックスの涙を使われ逆転。禁手に至った『騎士』は『女王』を倒したが、消耗が大きく結果的に相打ちになった。

兵藤一誠がいたならば、精度の高い回復能力があったならば、もう一人高火力持ちがいたならば、容易く覆せた盤面だっただろう。もっと言えば、『女王』や『戦車』が自分の本当の力を使っていれば、『騎士』の余力が残された状態だったはずだ。

今回のゲームがもたらすものは、魔王の妹である我が儘姫が、不死鳥の三男坊を婿に入れることになった。そんな事実だけだ。このゲームの勝敗にそれほど深い意味などなかっただろう。少なくとも、世界から見ればちっぽけな戦いが終わっただけである。

誰も彼も、こんなことをやっている場合ではないというのに。それを知っていながら何も言わない神もいるのだから、救われないものだ。

■

空気が重い。

その場の状況を一言で説明すると、そんな感じの言葉が出てくるだ

ろう。
　この世界とは異なる円卓の騎士。彼らは女神ロンゴミニアドによって召喚され、再び円卓の席に座っていた。ただし、円卓には空席がいくつかある。
　まず、肝心の王がいない。また、王の義兄ケイと太陽の騎士ガウェインがいない。そして当然と言うべきか、ギャラハッドの姿もない。
　トリスタンの姿もないが、ベディヴィエールを迎えに行っている。
　聖剣を求めて各国を巡り歩いていたベディヴィエール。彼だけは、獅子王に召喚されなかった。堕天使の幹部の手によって極東の島国に聖剣が集まっているという話を聞いて、日本に出向いたはいいが、到着時にはすべて終わっていた。
　所在不明になった聖剣の情報を探しながら世界各地を歩いていると、トリスタンに再会し、現在に至る。
「それで、彼がこの世界に来たのはあの宮廷魔術師の仕業でいいのだな」
「ええ。トリスタンからの連絡で、確かにそう告げていました」
　それを聞いて、その場にいた全員が不快な……もとい、深いため息を吐き出す。
「魔術師殿は何のためにそんなことを……」
「でも、あの方ですし」
「マーリンですからねえ」
「あのジジイだからなぁ……」
「陛下ならご存じかもしれませんが」
「このようなことで王の手を煩わせるなど」
　全会一致で花の魔術師の真意は後回しになった。元々人間とは違った価値観を持つ彼の考えなど先読みしようとするだけ無駄だ。用心はするべきだろうが、それなりに見知った仲である以上、ある程度の信頼はある。
「では、ベディヴィエール卿が帰還する前に状況を整理するとしよう。彼への説明のためにも、認識を共通する必要がある」
　実は、この場にいる全員が第六特異点の出来事を覚えているわけで

はない。

例えば、トリスタンは、同胞を殺したことも、獅子心王を騙る存在に挑んだことも、民衆を虐殺したことも覚えていない。覚えていないが、覚えていないが故に覚えている者からの感情を読み取ってしまった。それこそがこの空気の悪さの原因だった。別に生前からこうだったとかはない。

アグラヴェインはすべて覚えているが故に、ランスロットはここで処分すべきだとも考えるが、彼が必要な戦力であることは重々承知している。流石に三度目はないと思いたいところだが。ちなみに、ランスロットはぼんやりとしか覚えていないらしい。あの最期の独白を覚えられていないのは有り難いところだが、「ギャラハッドに物凄く罵倒されたような気がする……」しか覚えていないあたり、この男の能力以外は評価できない。

加えて言うならば、アグラヴェインとしてはガレスが何も覚えていないのは幸いだった――

「入ります！　紫藤イリナ、ただ今戻りました！」

ベディヴィエールが早く到着したのかと思ったが、入ってきたのは紫藤イリナ。かつて教会に仕えていた戦士だ。縁あって現在はアグラヴェインの直轄騎士の一人になっている。先日も重大な使いを果たしてもらったばかりだ。彼女の姿を確認するなり、モードレッドが不愉快そうに舌打ちをする。

「うるせえぞ、自称騎士」

「モードレッド様！　ひどいです！」

「じゃあ自称日本人だな」

「自称じゃありません！　ちゃんと日本人です！」

「うそつけ。ランスロットの方がまだ正しい日本の知識あったぞ」

何故ランスロットが日本に詳しいんだ？　と数人の頭に疑問符が浮かぶが何等かの形で聖杯戦争にでも呼ばれて、その名残なのだろうと勝手に判断した。なお、ガレスとガヘレスに関しては「流石ランスロット卿！　遠い島国のことまでお詳しいとは！」と目を輝かせていた。

「……モードレッド卿。気持ちは分かるが、彼女は我が騎士団の一員だ。そう邪険に……」

「うるせえ！　アーサー王の末裔でもない、円卓の騎士でもない、ただ教会の戦士として育って因子を受け取っただけの女が、父上の……アーサー王のエクスカリバーを使ってやがったんだ！　こんなふざけた話があるかよ！」

その言葉に、誰も何も言えないでいた。当然だ。

？エクスカリバーはアーサー王とともにある剣である〃。

そんなことは言葉にするまでもない当然の理だ。だからこそのベディヴィエールによる返還だった。だからこそのモードレッドによる叛逆だった。だからこその、誉れ高き円卓の騎士の滅びだった。

「モードレッド卿。気持ちは分かるが落ち着くのだ。円卓に着きながらこれ以上の醜態を晒すことは許されない」

そう言われて渋々黙るモードレッド。と、ここでイリナの後ろに二人の騎士が立っていることに気づく。

「私は悲しい。何やら取り込み中で帰還したことに気づいてもらえない」

「……この言葉が正しいのかは分かりませんが、言わせてください。ベディヴィエール、恥ずかしながらアーサー王の元にはせ参じました」

円卓の空席に気づき、ベディヴィエールが最初に口にした疑問はあまりにも当然のもの。

「アグラヴェイン卿。王は、どちらに？」

質問しながらも、答えは出ていた。ガウェインとケイがいないのも、それが関係している。

「決まっているだろう。『外交』だ」

■

「アンドロマリウスより提案。兵藤一誠を通じてキャスパリーグより得られた情報を活用して、『奴』への対抗策を練るべきだ」

「デカラビアより賛同。これ以上、ゼパルの交渉能力の低さやフェニクスの独断行動による不利益、フラウロスの節穴について論じるのは時間の無駄である」
「フラウロスより怨嗟。おまえ達、後で覚えておけよ」
「ゼパルより同調。その感情を理解できる」
「フェニクスより追従。罵倒を受けるのが我らだけであるのは間違っている」
「アモンより要請。反省せよ、面汚しども」
「フォラスより提唱。我らの中にある異常を取り除くことから開始すべきだ。そうでなくては話が進まない」
「ガミジンより提案。逆転の発想で、もう一度死んでみてはどうか」
「アンドラスより拒否。断固拒否する！　繰り返す！　断固拒否する！」
「フェニクスより同意。仮に実行される場合、試験体にはガミジンを推薦する！」
「フルカスより見解。あまり現実的な手段ではない。また、我らの特性を省みれば、無意味に終わる可能性も高い」
「グシオンより指摘。我らの異常がどのような形で存在するかの議論が必要だ。だが、我ら自身がこの点に関して議論を重ねた所で無駄である」
「ロノウェより要請。協力者が絶対条件だ。今の我らでは、こうして議論を交わしていることさえ彼奴の意思が組み込まれている可能性があるのだ。我らとは別の、神殺しの協力者が必要だ」
「ボティスより提示。第一の条件として、神に影響されない存在であることだ。最上位の神格を意味する」
「ウェパルより補足。元より、彼奴の計画がいつから始動していたのかは不明だ。三つ巴の大戦時に思いついたのか、創世記には開始されていたのか。『槍』に封印されている遺志がそうさせたのか」
「シトリーより提示。次の条件として、我らと協力関係を築けることだ。多くの神話では、我々を禍の団の一部と認識している。積極的な関係を一から築くのは困難だ」

「ナベリウスより解説。数多の地獄と交渉し、これに成功した。だが、それは信用されたわけでも、彼らを信用しているわけでもない。彼らに計画のすべてを開示したわけでもない」
「ブエルより訂正。聖書以外の勢力に彼奴の再臨など説明したところで、正気を疑われるだけだ」
「フォルネウスより宣言。だが、三大勢力との交渉だけは断固拒否する。奴らはこれを利用しかねない。故に、協力者は聖書に名が記されていないことが前提だ」
「グレモリーより危惧。英雄派には我らの因子を与えてある。彼らを利用することは危険だ」
「ムルムルより総括。これらの条件が該当する存在を検索することから我らの叛逆は開始される」
「ウァラクより反論。そんな都合の良い存在などいるわけ――」
「……」
「……」
「……」
「いるな」
「ああ、いるぞ」
「確かに、いるが」
「あれにこのような難解な事象を解決できる能力はあるのか？」
「中身は純粋無垢極まりないドラゴンだぞ？」
「だが、作戦の候補の一つとしては悪くないはずだ」
「ゲーティアより全魔神柱に通達。固有結界の中で惰眠を貪っているであろうオーフィスを叩き起こすぞ」
「ゲーティア、我を呼んだ？」
「いつから戻っていた。だが手間が省けたな。オーフィス、突然で悪いが、おまえの力を借りたい」
「――我、条件がある」
「いいだろう。本来であれば固有結界を教えた代償としてもらいたいところだが、今回の件はそれを上回ってあまりある。それでおまえは何を望む？　やはりグレートレッド打倒の助力か？　それとも聖杯

か？　あるいは我々の世界の知識か？」
「我と遊んで欲しい」
「ほう、お安い御用だ。計画に支障があるわけでもない。我々にとっては造作もないこと――――え？」
「ゲーティア、我に構ってくれない。我、寂しい。これ、我の求めた静寂と違う。我、ゲーティアと一緒がいい。だから、ゲーティア、我と遊ぶ」
「ほ、他にないのか？」
「我、それ以外だと協力しない」
「い、一度口にした以上、撤回する、わけに、はいかない、な。い、いいだろう。貴様の遊びとやらに、付き合ってやろうではないか。我々は人理を焼却することさえ可能なのだ。その程度のこと、造作もない。ない、はずだ。造作もないはずなのだ」
「我、遊園地に行きたい」
「あ、ああ。分かった……。では説明の前にだ、オーフィス、おまえに説明を求める。おまえが連れているその奇怪な生物は何だ？」
「えへん」
「……Ｄｒａｉｇ……！」

■

むかしむかし、あるところにおうさまがいました。
おうさまはかしこいおうさまでした。おうさまはすごいまほうつかいでした。おうさまはやさしいひとでした。でも、おうさまはいつもおこってばかりでわらっていません。
おうさまはかみさまがだいきらい！　だってかみさまときたら、おそらのうえでえらそうにしているばかりで、なにもしないのです！　いつもえらそうで、どこでもいばっていて、ありえないくらいよくばりです！
てんしさんもだいきらい！　だってんしさんときたら、かみさまのごきげんとりばかりしています。おうさまをにんげんだとばかに

しています。おうさまのくにのひとのことも、ひつじだとばかにしています。そのくせ、おうさまやおうさまのけらいがかみさまのことをばかにすることはゆるしません。にんげんはかみさまをほめないといけないのです。

あくまだってだいきらい！　だってあくまときたら、おうさまがみはっていないと、おうさまのくににわるさばかりしてきます。たいせつなゆびわをぬすまれたこともあります。にんげんをだまして、とおくにつれていかれたこともあります。おまけに、いらなくなったごみをすてます。

だてんしだってだいきらい！　だってだてんしときたら、てんしやあくまとけんかばかりです。かみさまもしかりませんから、もっとわるさをします。だてんしはおそらにかえりたいけど、かみさまはだてんしなんてもういりません。だから、だてんしはにんげんをいじめるのです。

おうさまがどれだけがんばっても、かみさまもてんしさんもあくまもだてんしも、いうことをきいてくれません。おうさまはききたくないこえをききました。おうさまはみたくないものをみました。おうさまのくにはもうめちゃくちゃです。

だから、おうさまはしかえしをおもいつきました。

かみさまやあくまのこまったかおをおもいうかべると、おうさまはうまれてはじめてわらいました！　にやにや、にこにこ、にたにたとわらってしまいます！

そしておうさまは――全人類に呪いをかけました。

指輪

龍神オーフィスを頭目とするテロリスト、『禍の団』。

旧魔王の血筋とそれに従う悪魔で構成された旧魔王派と英雄の末裔や勇者の生まれ変わりで構成された英雄派を二大派閥とし、他にも魔法使い派閥などの大小様々な集団がひしめき合っている。言うならば、異形の蟲毒と言ったところか。

その脅威に対する会議。本来であれば数多の神話を穢し、壊し、奪い、犯した聖書の勢力からの招集に応じるなど業腹だ。しかし、それを差し引いても『禍の団』――より正確には頭目のオーフィス――は厄介な存在だ。真龍を例外とすれば、絶対の一位。随分と長い間行方不明だったドラゴンが犯罪集団をまとめ上げたというのだ。これが脅威に感じないわけにはいかない。その動向に関する情報や各勢力の対応などは知っておくべきだ。防衛とは人も神も問わずに為政者に求められる義務の一つだ。

聖書の三大勢力を始めとして、ギリシャ、北欧、ゾロアスター、ケルト、スラブ、アステカ、日本、中国、インド、アフリカ、インドネシア、メソポタミア、エジプト……数多の神話の神々が集った。

《早速で悪いが、私はこの会議から退席させてもらう》

ギリシャの三神の一柱、冥府の主人ハーデスは開口一番にそう言った。

「いきなりと言えばいきなりですが、理由を教えていただけますか？ハーデス殿」

《巻き添えはゴメンだと言っている》

サーゼクスからの問いかけに、ハーデスはシンプルに答えた。それ以外にないとばかりに。

無論、それだけが理由ではない。元々、ハーデスは他の神話の存在が好きではない。神話を読めば明らかだが、冥府の主人という肩書きに似合わず、彼は人間に甘い節がある。間違いなくギリシャ神の良心と言うべき存在だ。そんな彼だからこそ、聖書の勢力は好かない。否、許すわけにはいかないと言った方が正しいか。

《そこの馬鹿二人はともかく、私は二度もおまえ達の自業自得のとばっちりを受けたくないのだ。冥府は聖書の勢力と一切の縁を切らせてもらう。今回はその通告に来ただけに過ぎん》

「デハハハ！　言ってくれるな、ハーデス！」

「ガハハハ！　兄弟に対して冷たい態度だ！」

ゼウスとポセイドンの哄笑に対して、ハーデスは冷めた様子で溜め息を吐き出す。だが、サーゼクスはそんな兄弟漫才よりもハーデスの口にしたある言葉が気になった。

「二度も、とは？」

《忘れたか？　あの王のことを。お前たちが未だに名前を呼ぶことさえ忌避している男のことを。イスラエルの古き王のことは、嫌でも覚えているはずだ》

神仏の脳裏に、ある男の笑顔が浮かび上がる。愉快さなど欠片も見られない、歓喜など微塵も感じさせない、怒気に染め上げられた男の笑みを。

神も、悪魔も、堕天使も、どいつもこいつも滅ぼしてみせると笑いながら怒っていた王がいた。その功績は歴史に残されず、その罪過は神話に語られない。だが、神々は忘れない。思えば、あの王の存在こそが聖書への憎悪の始まりだったのかもしれない。

《あの王が何をやったか、忘れたとも知らぬとも言わせぬ。その動機も同じだ。せめておまえ達があの王の時代だけでも大人しくしていれば、このような事態にならずに済んだ。このような時代を迎えずに済んだ。ほぼすべての神話が貴様らの愚行の巻き添えを受けたのだ。同じことがあれば、今度こそ我らの神話は終わる。滅ぶなら貴様らだけで勝手に滅べ》

「言ってくれるじゃねえか、ハーデス」

流石に苛立ちを隠せなくなったのか、アザゼルは強めの口調で物申す。

「アンタにとってもオーフィスは脅威のはずだ。まだあいつの目的も分からない。いや、オーフィスだけじゃない。新世界の秩序とやらを作ろうとする旧魔王派だって物騒なはずだ。英雄派は人間の限界に

挑もうとしているらしい。アンタの首を取るつもりかもしれないぜ？」

ハーデスが悪魔や堕天使を嫌っていることは知っていたが、このような公の場でこれほど攻撃的な発言をしてくるとは思っていなかった。ハーデスとて無駄な敵は増やしたくないはずだ。

《事情が変わったのだ、カラスの頭。信頼できる筋からある情報が手に入ってな。これを聞けば、貴様らと仲良くしようとする者などいない》

「は？　言ってみろよ。『禍の団』にオーフィス以上の脅威でもあるってのか？」

そして、ハーデスの口から出された凶報は、その場にいたすべての神仏を凍りつかせた。

《旧魔王派があの王の指輪を手に入れたと聞いても、その態度を保っていられるか？》

■

夢を見ている。

『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）だ』

憎悪に満ちた声がする。

『覇龍（ジャガーノート・ドライブ）を使え』

怨嗟に染められた言葉が聞こえる。

『おまえの望みを果たすには、覇龍（ジャガーノート・ドライブ）を使うしかない』

絶望に塗り潰された呪文が耳に入ってくる。

歴代の赤龍帝の残留思念。ろくでもない最期を迎えたという彼ら。

そんな彼らが俺の背中を押してくる。その先の崖から飛び降りろと告げてくる。どうせおまえも碌な死に方をしないと、早く絶望してしまえと、泣きながら伝えてくる。

「何を躊躇っている、我らが新たな人類悪（どうほう）よ」

魔神ゼパル。

俺がこいつの力を取り込んだせいで、こいつは俺の精神世界に自由

に語りかけられるようになったらしい。俺の中に語り掛けてきたきゃぱぱりーぷ？　いやちょっと違うな……。とにかく、いつかアーシアの足元をうろちょろしていた獣からの情報もこいつに教えてやった。

逆に、俺も教えてもらった。こいつらの正体。こいつらの原罪。こいつらの世界。こいつらの計画を。

「疾く目覚めよ。そしておまえの望みを果たすがいい」

「俺の望みは、ハーレム王になることだ！　そのためにはおまえ達は邪魔なんだよ！　冥界を焼却なんてさせるもんか！　そりゃ聖書の神様の計画をぶっ壊すことには賛成だけど」

「おまえは目覚めていない。なぜ、この情報を魔王や堕天使の総督に伝えようとしない？　何をどうして躊躇っている？」

その指摘に、俺は背筋が凍る想いだった。

「おまえは肯定したはずだ。冥界の、そして聖書の終了を。おまえには見せたはずだ。並行世界のおまえの姿を」

ゼパルの能力の一つ、並行世界の閲覧。いつかの乳龍帝はその能力で発見したものだった。

ゼパルの言っていた俺の「生まれてこれなかった兄弟」ってのは、並行世界の俺が知ったことだ。ヴァーリの爺さんだか初代ルシファーだかリリンだかっておっさんが、俺の両親を人質にした。その時に、俺は両親の過去について知った。のぞきやら何やらを繰り返していた俺は、父さんや母さんにどれだけ辛い想いをさせていたんだろうか。

魔神柱がいなかった場合の世界。並行世界の俺は「乳龍帝」「おっぱいドラゴン」として冥界のヒーローになっていた。その世界では、アーシアやゼノヴィアがグレモリー眷属になっていた。俺は今頃部長のおっぱいをつついて禁手に目覚めていた。ライザー・フェニックスとのゲームなんて夏に入る前に終わっていた。ゲームには負けたけど、婚約発表のパーティーで俺がライザーを倒すことで婚約をぶち壊した。ゲームで、匙と殴り合った。異世界の乳神様を呼び出した。色んなことがあって、新しい赤龍帝の可能性を引き出した。テロリス

トの頭目であるオーフィスとは友達になった。英雄派の首魁曹操にはサマエルの毒でギリギリ勝った。６６６が目覚めたが、犠牲もあって対処できた。悪魔に転生して一年ほどで、俺は異例の上級悪魔昇進となった。あれは、とても素晴らしい物語のはずだ。

「あれは、正しく偶像だ」

だが、ゼパルは否定する。

「おまえがいれば何とかなる。おまえならば何とかしてくれる。おまえはきっとこの問題を解決してくれる。おまえは救いだ、未来だ、奇跡だ、希望だ、可能性だ。自分にはできぬからと、様々なものを押し付けられた。そんな風に、並行世界のおまえは勝利と救済を強制された。何千年という時間を生きてきた聖書の勢力にな。奴らがちゃんとしなかったから、おまえはああなったのだ」

無責任な連中だ、とゼパルは嘲笑する。残留思念の先輩方もそれに同意する。

世界が求めるのはいつだって力だった。世界が否定するのはいつだって愛だった。

何度でも彼らは滅びを選択する。

「その結果が、並行世界のおまえに押し付けられた。『期待』の理を担う獣として、おまえは顕現した。もうおまえは人間でも悪魔でも魔神柱でもない。ア・ドライグ・ゴッホは望んだそうだな、おまえに天龍になれと。ならばその願いに報いてやれ。それが、奴への手向けとなるだろう。最後の赤龍帝となるがいい」

こいつはこいつで、勝手なことを言ってくる。手向けってなんだよ。死んでねえよ。いや、ある意味死んでいるんだっけ。今のドライグは身体がなく魂だけの存在だ。

「なあ、俺の考えは正しいのか？」

「おまえの決意は正しいぞ。この聖書の勢力は腐りきっている――」

「違う。そっちじゃない。分かってんだろう」

沈黙するゼパル。

「理解しているとも。新たな同類よ。戦う決意ではなく、根源的な動機。自らの身に起きた事象に対する推測。我は魔神柱。人知を遥か

に超越した魔術式。その問いには真摯に答えよう」
　一拍御置いて、ゼパルは簡潔に述べる。
「分からない」
　ふざけているわけじゃないんだと思う。
「判断材料が不足している。否、判断しようのない事象だ。どう判断したところで、無意味であり、無価値だ」
　またこいつはそんなことを言う。文句を言おうとしたが、続く言葉がそれを止めた。
「何故ならば、おまえの結論が変わらないからだ。おまえの思考が事実であろうと被害妄想であろうと、おまえの結論は変わらない。違うか？」
「……違わないな」
　――『運がなかったのでしょうね』
　まったくだ。俺は運がなかった。不運だった。不幸だった。
　だけど、俺にとっての不運って一体何なんだろう。
　それは赤龍帝の籠手に選ばれたことか。
　堕天使に強い神器を持っていることがバレたことか。
　それとも、リアス・グレモリーが駒王町を支配する悪魔だったことか？
「リアス・グレモリーがレイナーレなる堕天使を意図的に見逃していたかどうか。眷属にするためにおまえを見殺しにしたかどうか。あの日のすべてが作為によるものだったのか。そんなことはどちらでも同じことだ。どちらにしろ、おまえはあの悪魔のせいで死んだのだ」
　ああ、まったくその通りだよ。
「通常で考えれば、偶然だ。魔王の妹たる立場を理解し、堕天使と悪魔の関係性に影響が出ることを恐れたとも考えられる。人間の一人、見殺しにしても不自然ではない。だが、リアス・グレモリーはそういう気性か？　恋愛をしたいからと貴族の義務である婚約を拒否し、堕天使の幹部が縄張りに襲来しても魔王に連絡しなかった。堕天使の血を引く娘や処分寸前だった猫又を眷属とした。聖剣計画の実験体や

半吸血鬼の死にかけに立ち会ったそうだが……貴様も合わせると三名だ。このような偶然が有り得るのか？　木場裕斗とギャスパー・ウラディに関しては、そういう場所に立ち入ったことを意味している。そんな女が、自らの縄張りで敵対種族が好き勝手にすることを看過すると？　各勢力のバランスを意識できるほどの器量があると？」

　でも、あれは突然の出来事だったはずだ。あの日、俺がたまたま悪魔を召喚できるチラシを持っていたから、助かった。俺の助かりたいって想いが強かったから、悪魔を呼び出せた。あの日、他の皆が忙しかったから『王』の部長が来てくれた。俺の転生に『兵士』の駒八個が必要だから、絶対に眷属にしたいと思った。そんな風に、部長は言っていたはずだ。

「リアス・グレモリーはレイナーレの情報を知っていた。姿だけではなく名前まで。事前に情報を探っていた証拠だ。レイナーレに殺害された日、おまえは悪魔召喚のチラシを持っていた。そして召喚された悪魔は、悪魔の駒を持つ『王』だった。これは本当に偶然であり、運命か？　おまえがどんな神器を持っているか不明なのに、『兵士』の駒八個をすべて費やすのか？」

　福袋みたいなものだろうか。中身は不明で値段だけ明らか。そして、その値段に見合うだけの商品が入っている。必要なものかどうかは別として。でも、悪魔の駒は新しくもらえるようなものではないと部長は言っていた。だったら、そんな貴重品をそんなギャンブルみたいに使うのか？

「あのグレモリーの贋作は、何か一つでもおまえに本当のことを教えてくれたのか？」

　俺は誰に殺された？

「では、そろそろ治療が開始される時間なので私は消えるとしよう」

　こいつ言いたいことだけ……って治療？　どっか悪いのか？

「これも我らが極点に至るための試練の一つ。忌まわしい神の呪縛から解き放たれるための工程だ。万全の状態での再会を誓うぞ、我らが同類よ」

■

「では、次の患者の治療を開始します。『投薬』の準備を」
「はい、先生！」
「死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない！　絶対に死んでたまるものか！」
「生死生死生死生死生死生死生死生死生死生死生死生死生死生死！
この繰り返される痛み、あの戦いを想起させる。何故、このような苦痛を味わわなければならない……！　もういっそ終わりを与えてくれ……！」
「誰かアンドラスとフェニクスを黙らせ、ギャアアア！」
「ゲーティア、頑張る。これが終わったら遊園地」
「それおまえが行きたいだけだろがあああ！」
「……教授。あれは何をしているんですか？」
「オーフィスの蛇があるだろう？　あれに特殊な能力を持たせてネ。魔神柱の思考を操作している因子を捕食させているというわけだ。例えるなら、血清を投与しているようなものか。ゲーティアと同次元の力を持つオーフィスにしかできない所業だ。実に興味深い」
「いや、とてもそんな絵には見えないんですが……」
「魔神柱たちが阿鼻叫喚なんですがこれは……」
「そりゃ体内をむしゃむしゃされているわけだからネ」
「うっぷ」
「いたいよぉ！　やだよぉ！」
「麻酔とか作っても良かったんじゃ」
「こんなの、ひどすぎる……」
「これだけの患者がいるのに、そんな時間はありません！　緊急治療！」
「痛みは生きている証拠です！」
「だからって切開して無理やり詰め込むんじゃぐあああああ！」
「おのれ、間違った定義の神め！　貴様のせいで我々がこんな目に……！」

――あの神を。
許してはならないと、私たちは改めて誓った。

■

「クルゼレイ！　あの忌まわしい男の指輪が見つかったというのは本当か！」
「ああ。あの偽物どもに反撃する手はないかと、初代の遺産を探していたらな」
「くっくっく……くははははは！　この戦い、我々の勝利だ！　指輪があれば、あの偽物どもに勝ち目などない。いや、他の神話さえも我らにひれ伏すだろう！　神が死んでいたことは僥倖以外の何物でもないな！　ミカエルめ、回収し忘れていたか」
「ええ、シャルバ様！　これであの偽物どもは滅ぶ以外にありません！」
「真なる魔王こそが次の世界の王となるのです！」
「これでカテレア様も報われるでしょう！」
「真なる魔王万歳！」
「よくやってくれた、クルゼレイ！　……どうした、クルゼレイ？」
「……いやな、本当に残念だと思ってな。もういっそ笑えてくるよ。相変わらず、俺はこういうことでしか笑えないらしい。我が共犯者アスモデウスやベルゼブブの末裔が、ここまで劣化しているとか。何のために、俺の指輪をすり替えたと思っているんだ。アスモデウスに関しては、アスモダイに序列を譲ってもらうなんて小細工までしたのに。まして、指輪の真実も伝わっていないとはな」
「クルゼレイ？」
「クルゼレイ様？」
「……クルゼレイ？」
「俺はソロモンだ」

□□□□

俺の手の中には一つの指輪がある。

初代アスモデウスから真なるアスモデウスの血族が極秘に継承してきた指輪。天に返還されているはずの、ソロモンの指輪。初代様は一度、ソロモンから指輪を盗んでいる。奪還されたことになっているが、ソロモンの手に戻った指輪は偽物の指輪だ。つまり、天界に保管されているであろう十の指輪のうち、一つは偽物だ。

ソロモンも神もミカエルもなぜ気づかなかったのか。理由は簡単だ。この指輪のすり替えは、初代様とソロモンとの共犯であり、彼こそがこの計画の主犯だからだ。ソロモンの偽装魔術と演技、彼への信頼もあって、神もミカエルも偽物の指輪に関しては気づいていない。気づいたところで公に知らされることもないだろう。かの王が相手とはいえ、神と天使長が人間如きに騙されたのだから。

彼は後世のために指輪を世界に残しておく必要があった。だが、黙っていれば神に回収されてしまう。だからこそ、初代様と組んだ。そして、アスモデウスの血族は約束の日までこの指輪を保管してきた。――指輪の真実を他の魔王にも隠匿しながら。これは他の魔王を出し抜こうという話ではない。それをしようとしていたのは、むしろもう一人の共犯者である初代ベルゼブブ様だろう。

『覚悟はできているって認識でいいんだな？　アスモデウスの末裔』

不愉快そうな声だった。不機嫌そうな声だった。

「ああ、構わない」

傍から見れば俺が独り言をしているように見えるだろう。この声は俺にだけ聞こえるものだ。そして、この声こそがソロモンの遺志。

ソロモン王の復活は有り得ない。魂も、精神も、肉体も神によって『システム』にくべられたからだ。天使も堕天使もそれを確認している。だからこそ、三大勢力は魔神柱の背景にソロモンが関わっていないと考えている。そう信じていたいのだ。実際、魂も精神も肉体もないのに復活はできない。

指輪をすり替える前に、ソロモンは自分の魂の一部を指輪の前に封

印した。そして、ソロモンの魂は指輪の使用者を乗っ取る。初代様はこれを承知で極秘でこれを継承していた。歴代の誰もがこの意味を理解し、使用しようとは考えなかった。誰かに言うこともなかった。恐ろしかったのだ。かの王の復活以上に、自分の意思が他の誰かに塗り潰されるなど。たとえ、空前絶後の力を手に入れることができたとしても、そこには自我などないのだから。

サーゼクス達に政権を奪われた内紛の時も、これを使っていたらと考えることはない。これを使うということは、悪魔という種族の絶滅を意味する。否、絶滅ならばまだいい。破壊と支配という悪魔の本懐を遂げるために名誉の戦死を遂げられるならば最善の滅びだが、ソロモンにそんな慈悲はない。

あの頃の俺とは違う。俺はもう自分の意思などいらない。彼女のいない世界に未練はない。彼女がいたからこそ、俺はこの指輪を使うことを良しとはしなかった。

「俺の身体を明け渡そう、イスラエルの古き王。初代様とおまえが交わした契約を、ここに果たす」

『ああ。だが、初代アスモデウスと俺が交わした契約の中には、身体を差し出した奴の願いをできる範囲で叶えてやるってのがある。クルゼレイ・アスモデウス。おまえの願いを言えよ』

考える意味もない。最初からそれは決まっていた。

「偽りと偽善の魔王と、堕天使の総督に死を」

『それは……代償にはならない。現代の情勢を聞くに、それは最初からやる予定だった。まあ、俺が殺すわけじゃないけどな』

「予定では困る。絶対にやってもらわなければならないのだ」

オーフィスはいない。どこに行ったか見当もつかない。『蛇』はもうない。今の俺ではカテレアを殺したアザゼルにも超越者のサーゼクスにもそれに準ずるファルビウムにも勝てない。俺は、弱い。愛した女の仇を討つことも、その名の威厳を取り戻すこともできない。

魔王の立場を奪われただけではない。彼女は――カテレア・レヴィアタンは、偽物の魔王に名前を辱められた。屈辱を拭えぬまま、彼女は旅立ってしまった。もう会えない。

『あいつも、初代アスモデウスの奴も、そういうところあったよ。あいつが色欲を担うことになったのは皮肉でしかないな。おまえは間違いなく、アスモデウスだ』

「光栄と言うべきなんだろうが、その言葉は、何の意味もない」

カテレア、俺は君がいるだけで良かった。君が心から笑える光景を見せてあげたかった。

『……やっぱり血は争えないな。種の帰属意識よりも一人の女への情念が勝るか』

「父上が言っていた、トビト記の真実か。どうでもいいな。早くしてくれ。気が変わる」

ソロモンもそれ以上は何も言わない。指輪から膨大な魔力が流れ込んでくる。高揚と同時に、喪失を感じた。自分がなくなっていくことが理解できる。自分の中にあるすべてが別の何かに塗り潰されていく。自分の記憶が他人のように実感がなくなっていく途中、同じ真なる魔王の血筋を思い出す。先に待っているであろう彼女ではなく、未だにどうにかなると信じている彼を思い出す。

悪いな、シャルバ。俺たちの、悪魔の歴史はこれで終わりだ。先に逝く。せめて、あの偽物どもを含めたすべてを道連れにしよう。

■

《で、結局何をやったんでやんすか？　ソロモンって》

ハーデスの発言の後、その場にいた多くの神魔の過半数が席を立った。無言で転移する者、三大勢力に罵声を浴びせて逃げるように去った者、顔を青くしながら配下に肩を支えられる者、ハーデスに詰め寄って詳細を訊ねる者。反応は十人十色ならぬ十神十色だったが、いずれもそれまであった「三大勢力に協力してテロリストをどうにかしよう」という考えは消え去った。そんな余裕はどこにもなかった。

席を立たなかった者は、ハーデスの情報が半信半疑だった者だ。あるいは信じたくなかっただけか。

サーゼクスやアザゼルも素直に信じるわけにはいかず、退出しよう

とする首脳陣を引き止めようとした。だが、こう言われてはどうしようもない。

――もしも本当だった場合、お前たちに責任は取れるのか？

責任など取れるはずない。具体的な方法などないし、聖書の勢力にそれほどの信用などない。実際、魔王も天使長も堕天使総督も何も言えなくなった。

その光景を父・最上級死神オルクスから聞いたベンニーア。母を人間に持つ彼女は、三千年も前の王の話を神話でしか知らない。だが、神話で語られるかの魔術王に関して、世界の対応は違和感を覚えるものでしかなかった。何をすればここまで恐怖され、嫌悪され、畏怖されるのか。指輪を神からもらっただけの、半神ですらない賢い王ではなかったのか。よって機会を見てハーデスに訊ねた。父にも訊ねたが、ハーデスの方が正しい認識で教えてくれるとのことだった。

《ベンニーアよ。おまえは人間が語る神話について違和感を覚えたことはないか？》

《へ？》

突然、難しい話になった。

《例えば、三大勢力だ。奴らは神、悪魔、堕天使に分かれている。だが、聖書の記述を読めば、悪魔と堕天使はほぼ同一のものとして扱われている》

神話では世界となったはずのティアマットは、現実では龍王として生存している。神話では一年ごとに復活しインドラに倒されるはずのヴリトラは、現実では神器に魂を分かれて封印されている。神話では神王オーディンに海に投げ捨てられたミドガルズオルムは、現実では自分の意思で海底に眠っている。神話では火山の下に封印されているはずのテュポーンは、別にそんなことはない。

そもそも神話で語られることが事実ならば、インド神話が人間界で最も信仰される神話になっていなければおかしいのだ。だが、現実では聖書の勢力が最も広範囲に自分達の教えを広めている。

《そりゃそうでやんすが。それはそういうものなんじゃ？》

《そうだな。我々はそういう風にしか考えられないな。では、そうい

うものだと定義した者は一体誰だと思う?》

ここまで来れば、答えは明白だ。

《なんか、想像以上にやばいことを聞いたんでやんすか?》

《そうだな。疑問を持つことは良いことだが、今後は気をつけることだ。神話と現実が乖離している。この乖離は時間が経過するごとに強くなる。そういうものにしてしまった。だが、もう誰にも世界を作り直すことはできない。書き換えるには資源も時間も足りない。これは他ならぬソロモンの仕業だ。これこそが、奴が聖書の神の為の功績と偽り、その実、すべての神話を葬るために犯した罪過》

すべての神話と人間を巻き込んだ大偉業。彼が書き換えた世界の法則は、今なお現在進行形で神々を蝕む。すべての人間から神話が忘れられるその日まで、抵抗の手段はない。多少の嘘はあったが、神々は彼の計画を許容したのだから。

《ソロモンが全人類に施した呪い――『真理』だ》

あの怒りしか知らぬ王は、神を利用するほどに、人類を愛していた。

■

ハーデスの爆弾発言によってテロリスト対策会議を強制終了された三大勢力トップ陣に、良いニュースと悪いニュースが届けられた。

まず、良いニュースだが、兵藤一誠が目覚めたということだ。リアスの兄であるサーゼクスも、先生となったアザゼルもこれには安堵した。ゲーム前に目覚めてくれていればと思わずにはいられないが、贅沢は言っていられない。これから更に重要な戦いが始まるかもしれないのだから。

次に、悪いニュースだが、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーからサーゼクス・ルシファーへの会見の申し出だった。しかも、ユーグリット・ルキフグスを連れて。

旧ルシファーの実子。旧魔王体制では唯一の超越者。長い間生死不明だったが、このタイミングで現れたということは指輪の件だろう。旧魔王派が指輪を手に入れたというのならば、間違いなく彼の手

にあるはずだ。
「いや、俺はあの王様の指輪なんて持ってないよ。だいたいあったらこんな面倒な手続き踏んで来ないって。魔法障壁をすり抜けて、びゅーんって来るよ」
　万が一を備え、サーゼクス、アザゼル、ミカエルというメンバーでリゼヴィムに対峙したが、その万が一は発生しないようだと安堵する面々。
「じゃあ、誰が持ってんだ、リリン。ベルゼブブの末裔か？　それともアスモデウスの末裔か？　カテレア以外のレヴィアタンの末裔か？　いや、案外ヴァーリの奴が持ってんのか？　手に入れたなら旧魔王派の奴はどうして行動を始めない？」
「旧魔王派なんてものはもうないよー」
「は？」
「文字通り、全滅した」
　あっけらかんとリゼヴィムは告げる。明るい雰囲気を無理やり出しているが、少し苦渋の色が浮かんでいた。
「どうもクルゼレイ君が手に入れた指輪にはソロモンの遺志が封印されていたみたいでさー。ほら、聖槍に聖書の神の遺志が封印されているみたいに。いやー、それでクルゼレイ君、身体を乗っ取られたみたいでね。ソロモンｉｎクルゼレイの手によって、旧魔王派はシャルバ君を始めとした主要人物は全滅しました！　俺や孫のヴァーリきゅんは除いてね」
「配下の構成員も、我々が子飼いにしていた者以外は死亡が確認されているないし行方不明となっています。此方が流していたスパイから名簿に名前が載っているだけの雑兵まで」
　リゼヴィムとユーグリットの口から告げられたそれは最悪の展開だった。旧魔王派が全滅したという点ではない。大事であるはずの事態だが、それ以上の緊急事態が発生したのだ。
「よりにもよって、指輪に遺志を封印してやがったってのか！　あのクソ野郎は！　そのまま死んでやがればいいもんを！」
　魔術王の復活。それは聖書の勢力が最も有り得ないと破棄してい

た妄想にして、絶対に許してはならない緊急事態だった。
「何ということだ……。これならば旧魔王派が指輪を持っていた方がまだ対処できた。彼が復活したということは、目的は聖書の崩壊……。となると、魔神柱はやはり彼の配下か。初代たちを襲うのも納得できる。今度は壺に封印するだけでは終わらせないということか」
旧魔王派の目的は、最大で全世界の支配、最低でも現魔王の死だ。中間が自分達の復権だろう。しかし、それはどれも叶わず道半ばで倒れた。それは現政権にとっては良いことなのだが、ソロモンの復活は最悪というしかなかった。
「……いえ、これは逆転のチャンスです。彼が蘇ったというのならば、他神話の協力が得られるはずです。旧魔王派ならば私たちに協力しなければ被害を受けないで済みますが、彼ならばそうはいきません。すべての神話に同盟を持ち掛けることさえできるはずです」
「あの王様のことだから、次の行動を起こす前に各神話と交渉終えてんじゃねえの？　前の時もそうだったじゃん？」
「ならば彼を説得すれば」
「無理だろ」
ミカエルの考えを、リゼヴィムは一刀両断した。
「俺もあの王様に好き勝手やられると困るんだよ。てか、次に狙われるの俺だろうしね？　だからさー、対抗策を探したのよ。で、見つけたのよ。でも、俺だけじゃどうしようもないのよ。それで、現政府に保護と協力を求めに来たってわけなんだよね、サーゼクス君」
「……分かりました。冥界のために、手を結びましょう。それでリゼヴィム殿。あの男への対抗策とは何なのでしょうか？」
リゼヴィムはその問いを待っていたとばかりに、ニタリ、と口の端を釣り上げた。その笑みにどこか見覚えがあったアザゼルだが、次の提案でそれどころではなくなった。
「聖書の神様を復活させるんだよ。手段は見つけた」

これが？楽しい〃という感情か

日本国内有数のテーマパークにて、やや抜けた色の髪を後ろでまとめた青年が、曖昧な表情で沈黙していた。

左手にはチュロスがあり、右手はゴスロリの少女に捕まっていた。もとい、掴まれていた。少女は自分のチュロスを咀嚼しながらも、青年の手をがっちり離そうとしない。

「……それで、私とオーフィスがジェットコースターに三分乗るために、行列に一時間三十分四十七秒並んでいる間に何があったか、説明できる者はいるか？」

「統括局ゲーティアよ。その前に、我が質問に回答してもらいたい」

「何だ、バルバトス」

「何故、ロマニ・アーキマンの姿に擬態している？」

「フラウロスへの当てつけに決まっているだろう。あそこでデート中の恋人たちを眺めながら藤丸立香とマシュ・キリエライトを重ね合わせて感傷的になっているフラウロスへの」

「成程。バアルが統括局に対する嫌味でエドモン・ダンテスの姿を取っているのと同じ理由か」

「ああ、あそこのベンチで項垂れているアーチャーを曹操と共に激励しているバアルと同じだとも」

青年――ロマニ・アーキマンの姿に化けているゲーティアの視線の先には、青年の姿をしたバアルと曹操と『教授』がいた。

「私ってうざいのか……」

「盟友よ。そのようなことで落ち込んでどうする。別にあの少女はお前の娘でも何でもないだろう」

「教授。何もそんなにショックを受けなくても」

「バアル、曹操。君たちには分からないだろう。魔神柱であり、若者である君たちには分からないだろう。パパと呼ばれた高揚の直後に、うざいと突き放された私の複雑な葛藤など！」

『ゼノヴィア、どうして英雄派の輪に加わらない？』

『あの、あまり絡まないでもらえるだろうか』

『いやあ、そう言われちゃうと逆に構いたくなるネ。ほら、今の私ってポジション的に不良学校の教師じゃないか。一人だけ仲間外れがいるとつい道を踏み外させたく……じゃない、正したくなるんだよ』
『では、ジャンヌから教えてもらった、教授に効果覿面だという呪文を』
『ん？』
『パパうざい』
「パパと呼ばれたことは嬉しい。素直に認めよう。だが、うざいはないだろう！　ジャンヌも何故あのような呪詛を教えるかなあ、もう！　いや、あの呪文を教えてもらった以上、実は打ち解けているよね！」
「すみません、よく言っておきます」
「あのような攻撃的な性格の少女に父親呼ばわりされて嬉しいのか？」
「ギャップルールってものがあるのだよ、バアル」
「教授、これ以上俺の中にある貴方という人物像を崩さないでください」
　割と本気で懇願している曹操を見て、ゲーティアは意外そうに小さく笑う。
「想定よりも気丈だな。自らの存在理由である槍を抜き出されれば精神が崩壊するとさえ思っていたが。英雄を自称するだけのことはあったか」
　今の曹操には『聖槍』がない。
　ゲーティア達の敵は聖書の神であり、その神の遺志が封印されている槍なのだから、封印しようとするのは必然だ。『悪魔の駒』と同じように、魔神柱は所有者を殺さずに神器を抜き出す方法を確立させた。破壊も考えられたが、遺志が聖杯や聖十字架に移行する可能性も示唆されたため中断された。現在、聖槍は時間神殿の廃棄孔内で厳重に封印されている。
　聖槍以外の神器も調べたが、オーフィスの蛇に捕食させた因子のようなものは見つからなかった。あの時の英雄派達の安堵した表情は印象的だった。自分達の行動が神に操られたものではなかったこと

にではなく、魔神柱と同じ目に遭わないで済むことに安堵したのだろう。

だからといって、オーフィスのための遊園地に同行するのはどうかと思うが。監視はしているが拘束しているわけではないため、勝手に来れば良いはずなのに。

世界中に展開しているこのテーマパークの中で日本を選択した理由は、あの男が人間になることを願った聖杯戦争がこの国で開かれたことだろう。加えて、あの少年はこの国の出身だ。そんな、なんとなくとさえ言えないような理由で適当に選んだ。

「それに比べて……」

ゲーティアはちらりと視線を向ける。其処では、人間に扮した魔神柱が色々と愉快なことになっていた。一般客からは変な集団だと思われているだろう。

「――私は、パンケーキでは、ない……ないのだ……！」

「イカでも不審者でもない。エイである。どうして私だけ……」

「治療に狂い健康を求める女よ。汝はここに来るべきではなかった……！」

「あのジェットコースターなる遊具は存在そのものが間違っている。あれは遊具にあらず。危険物である。危険物を排除するは必定」

「……人間は、分からない。生命は、難しい。だが、一つ、明確な答えを得た。死の危険のない恐怖は、不要ではなく娯楽であり――私は。あの遊具の存在の価値を、間違えたのだ」

「レオナルドよ。汝は自由すぎるな」

「英雄派の阿呆ども。何故求めるッ！　何故持て余すッ！」

ひたすら、混沌としていた。

「ガープより報告」

「ああ、大至急報告を開始せよ、ガープ」

「まずハーゲンティだが、このパンフレットに描かれているメディア・リリィに酷似した妖精がおすすめパンケーキを紹介しているイラストを見て過呼吸を起こした」

「あいつはいつになったらトラウマを克服するのだ」

「仕方がないだろう！」
　ゲーティアとガープの会話が聞こえていたのか、立ち上がり抗議するハーゲンティ。
「統括局よ、同胞たる魔神柱たちよ！　汝らも理解したはずだ！　無限の死、永久の被捕食！　永遠と繰り返される苦痛に加え、自らを勝手に作り直されるという恐怖！　それらを味わっただろう！」
「聖書の神の呪いとその治療を、貴様のパンケーキ事件と同列に語るな。……ああ、あれで再発したのか」
「何故夏にパンケーキを勧める。アイスクリームを前面に出せば良いだろう……！　他にもパフェとか！　とても温かい！　何故私だけがこんな……！」
「分かったから落ち着け」
　彼のトラウマは根が深い。
「次にフォルネウスだが、この施設の管理者である守護霊から不審者扱いされた。誤解は解けたが、此方の正体を知っていたらしく『イカくん』と連呼された。そのことで内心傷ついたらしい」
「守護霊……。例のネズミか」
「例のネズミだ」
「……」
「……」
「魔神柱でありながら打たれ弱いフォルネウスに非がある」
「誤解が解けて良かったとしよう」
　世の中には、深く触れてはならないものがある。
「そしてフェニクスとアンドラスだが、統括局とオーフィスとは別のジェットコースターに搭乗、これを満喫した」
「おい」
「待て！　我はあのような危険物を楽しんでなどいない！　何だ、あれは。何故人間はあのような死の恐怖を疑似体験するようなものに、金銭を支払い時間を浪費してまで搭乗するのだ。間違っている。あれはまさに呪いの兵器だ」
「私はあの遊具の価値を認める」

「何を言っているアンドラス!?」
「お前こそ何を言っている、フェニクス。死から逃れるためには、死の恐怖と向かい合う必要がある。恐怖を知るからこそ対策が取れるのだ。ともに死を拒絶する命題を持つ者同士、もう一度乗るべきではないか?」
「よくもそんな恐ろしい提案ができるなアンドラス!」
勝手にやっていろと無視することにしたゲーティアは、ナベリウスとアンドロマリウスに注目する。
「それからナベリウスは迷子になったレオナルドの捜索に手こずっていた。彼は貴重な神器の所有者だ。何かあっては大変だ。例の管理者がいるため、魔力の使用は控えた。よって予定よりも時間を要した。アンドロマリウスはジャンヌ以下英雄派のメンバーが物珍しさに土産品を買い漁ろうとするのを阻止した」
「後者は別に無視しても問題はなかったように思うが? 別に我々が出費するわけでもないだろう」
「時間神殿がデコレーションされた可能性を提示する」
「……ハルファスとバルバトスは?」
「他の行列で熱中症患者を発見したバーサーカーとその弟子が例の如く暴走した。例の管理者からもやり過ぎだと苦情が出たため、ハルファスとバルバトスが身を削り制止した」
「それはよくやった。……それにしても、この猛暑の中、どうして人間どもはこんな遊具のために長時間行列に耐えているのだ。悟るための修行か何かか。フェニクスではないが、無為としか言い様がない」
「これこそが人間の裡にある熱である」
人間が追及する『遊び』という概念。犬や猫も遊ぶことはあるが、あれは狩猟本能の発露に過ぎない。対して、人間の『遊び』とは、仕事に結びつくことも稀にあるが、ほとんどは消費するだけの無意味な娯楽だ。人間独自でありながら、ドラゴンであるオーフィスが求めるとはこれ如何に。人間性を取得したということなのだろうか。
この龍神が人間性を得たのだとしたら、その一因は間違いなくゲーティアにある。当のオーフィスは自分の分のチュロスを食べ終えて、

ゲーティアの手にあるチュロスをじっと見ている。
「グラシャ＝ラボラスとサブナックの姿がないが？」
「グラシャ＝ラボラスは魔法使い達と別行動だ」
聖十字架を手に入れる経過で、禍の団の魔法使い派閥である『ニルレム』やその協力関係にある『魔女の夜』を壊滅させ、その残党を戦力として吸収している。彼らの指示や管理の担当は専らグラシャ＝ラボラスである。
「……一応確認しておくが、そいつらは全員少女か？」
「いや、少年や成熟した女性もいる。年齢層が広いため、第三者には外国人率が高い町内会の慰安旅行の幹事に見えるだろう」
「その例は具体的なのか……？　あいつはどこを目指しているんだ。それでサブナックは？」
噂をすれば影を差すと言うべきか、丁度サブナックの姿が見えた。
「サブナックより報告。先ほど、狐の怪異を肩車したキングゥに遭遇したのだが、彼が奇妙なことを言っていた」
「待て。あの人形が来ているのか。奴は京都にいるはずだ」
「妖怪達と旅行らしい。彼曰く――」
『堕天使の、それなりに大物の気配があったんだけど、突然消えたんだよね』
『その反応からすると君達じゃないのかな』
『だとしたらいいや。同じ場所にいたから関係者だと思われるのが嫌だから確認に来ただけだから』
『何かするつもりにしても巻き込まないでくれよ』
『こっちは久しぶりの自由なんだ』
『まったく何でボクが日本史の勉強なんてしないといけないんだ』
「――だそうだ。補足すると、我々の気配を読んで行動するから其方からも近づくなとのことだった」
「例の聖書の神の計画は伝えたか？」
「無論。だが、『関係ない』と一蹴された」
「その方が此方も助かる。彼の手腕は見事だが、理想の協力関係が築けるかと言われれば話は別だ」

間違いなくキングゥが英雄派を煽って衝突する。そもそも、オーフィスが拾ってきたあの奇怪な生物の件もあるため、ひと悶着は必至である。

「統括局よ。それよりもキングゥが感知したという堕天使の件だ。連中、我らがここにいるか確認に来たのではないか。戦力が著しく減少している時間神殿に突入するかもしれない。至急帰還命令を」

「ふっ、甘いな、アンドロマリウス」

アンドロマリウスの態度を嘲笑したのはゼパルだ。なお、ゼパルが擬態している人間の姿は肉感的な女性だった。本人は「奇妙なほどしっくりくるが異常なほど落ち着かない」と言っているが、誰も聞いていなかった。

「何が言いたい、ゼパ何とか」

「誰がゼパ何とかだ！」

「ゼパル。遊んでいないで早く言え」

統括局の命令により、佇まいを正してゼパルは持論を展開する。

「これはおそらく罠だ。我々がここにいることは把握されているだろう。だが、時間神殿までは見つかっていない。連中は我々が動き出すのを待っているのだ。そして、我々を追尾することで時間神殿の場所を突き止めるつもりだ。よって、私は先の情報は無視することを提案する。それよりも、今後のためにもオーフィスを満足させよう」

「ゼパルにしては説得力のある意見だ」

「ゼパルにしては魅力的な提案だ」

「ゼパルにしては一考に値する」

「枕詞のように私を侮辱するな！」

「だがゼパルらしい自慢げな顔が非常に腹立たしい」

「このような扱いを受けるようなことをした覚えはないぞ!?」

「それで、どうするつもりだ、統括局よ」

「無視か!?」

ゲーティアはしばらく沈黙した後、チュロスをオーフィスの口に差し込む。オーフィスは抵抗することなくもぐもぐとチュロスを飲み込んでいく。

「時間神殿から救援要請はない。何もなければこのまま閉園までオーフィスに付き合ってやるとしよう。救援があった場合は直ちに時間神殿に帰還するが、まだ日没には遠い。ゼパルの言う通りなら、連中を焦らすのも面白い。こちらはゆっくりパレードを堪能した上で、完璧に逃げ通してみせよう」

「その作戦には賛同するが、決断の根拠を求める」

「我々は今日をこの場所で過ごすと決めた。だとしたら、アンドロマリウスの危惧が正しいにしろ、ゼパルの意見が正しいにしろ、あの害獣連中に合わせてやるなど馬鹿馬鹿しい。わざわざ人間が作り上げた偽りの理想郷に足を踏み入れたのだ。精々楽しませてもらおう」

人理焼却の時、終わりある命を有効に利用することを楽しいと思っていた。時間神殿崩壊の時、藤丸立香に最期の意地をぶつけ合うのが楽しいと思っていた。

「これが？楽しい〃という感情か」

名前こそ同じでも、これまでのそれとは違う。特別なものではない。特異なものではない。ただ人間が人間として感じる高揚。精神に波が立っているというのに、どうしてこうも穏やかなのか。

「？　ゲーティア？」

「オーフィス、お前は楽しいか？」

「我、静寂を求めた。これ、静寂じゃない。……でも、我はこれを手に入れられて嬉しい」

「……そうか」

ゲーティアは想う。『彼』はこれを知っていたのだろう。『王』はこれを生前には知らずとも、死後に噛みしめたのだろう。このどうしようもないくらい有り触れて、されどかけがえのないほどに尊い時間を。これが生きているということなのだとしたら、

「やはり、不思議なほど、面白いな。人の、人生というヤツは――」

■

「遊園地、か」

「バラキエル、どうしたのだ？」
　ゲーティア、オーフィス、英雄派の主力勢、おまけにキングゥというどこの神話に喧嘩を売るつもりなのか分からない戦力が集まっている遊園地の前に、二人の堕天使がいた。
　武人のような佇まいの方がバラキエル、瓶底眼鏡の方がサハリエル。どちらも『神の子を見張る者』の幹部であり、聖書にその名を記された堕天使の大物だ。おっさん二人が遊園地の前で立ち止まっている光景はいっそ滑稽ですらあったが。
「いや、朱乃を……娘をこのような場所に連れて来ることはなかったと思ってな」
「ははー、例のグレモリー眷属になったって娘さんか。まあ、アザゼルも心を砕いているらしいし、ソロモンの件が終わったら少しでも前進してみると良いのだよ」
「……ああ、そうだな」
「では、行くのだ。この遊園地から魔神柱レーダーに強い反応があるのだ」
　セラフォルーが氷漬けにしたグラシャ＝ラボラスと、イッセーが撃退したゼパル。この二柱の細胞から得られた情報を元に、堕天使は魔神柱の生命反応を探知するレーダーを作り出した。
「複数体の反応があるところを見ると、連中ここで騒ぎを起こす可能性が高いのだ。特撮やロボットもので悪役がよくやるパターンなのだ」
「アルマロスといい、どうしてこう……」
「しっしっし！　ここの管理者に魔神柱がいることを通告してご協力願うのだ」
　そう言って、サハリエルとバラキエルは足を踏み出すが、

　――その瞬間、世界が別のものに塗り替えられた。

「何だ、これは？」
「何かしらの結界のようなのだ」

そこは神殿だった。建築様式からして、古代イスラエルのものだ。構造と空っぽの玉座を見るに、王の間で間違いない。空間自体は広々しているのに、妙に息苦しい空気に満ちていた。

彼らの脳裏に、結界系最強の神器、国家を滅ぼすことさえ可能と言われる霧の神滅具が浮かび上がる。

「まさか『絶霧』か！」

「いや、ただの魔術だ。固有結界、って言うらしいぜ。お前らが無粋なことしようとしたから、不要と思いつつ横槍を入れさせてもらった」

声がした方を見れば、空だったはずの玉座に誰かが座っていた。聞き覚えのない声だが、聞き覚えのある声音だった。見覚えのない顔だが、見覚えのある表情だった。

「一応、名乗っておこうか」

僅かに悪魔の気配を感じるが、それ以上に濃厚で灼熱を宿したような魔力の波動がある。否、この空間そのものがこの魔力で染め上げられているようだった。

「我が名はソロモン。イスラエルの古き王のひとりにして、神々に詐欺を働いた大罪人。そしてお前らの敵だ」

空間を満たす魔力も、その激怒を宿した笑みも、間違いようがない。あの忌々しい王だ。今も昔も彼のせいで聖書の勢力は滅茶苦茶だ。世界の平穏を乱す咎人。人類史最大の悪党。死してなお、こうして安寧を崩そうと悪意をばら撒いている。

「ソロモン……旧アスモデウスの身体を乗っ取ったと聞いたが、事実だったか。魔神柱の反応は、我々をおびき寄せるための罠か」

「クルゼレイや魔神柱を侮辱する発言だが、俺はお前たちと違って心が広い。一度だけ許して、一度だけ警告してやろう。去るなら後は追わない。失せな、害獣ども」

玉座から立ち上がり、迎え撃つように両手を広がるソロモン。

「あそこは罪なき者と罪を償おうとする者、未来ある者以外立ち入り禁止だ。俺たちは入れない」

「罪があるのも、未来がないのもお前だけだ、ソロモン。貴殿はあまりに危険すぎる」

バラキエルの手に雷光が迸る。
「貴殿の作り上げた呪いのせいで散っていった同胞のためにも、私の娘やその仲間たちの未来のためにも、貴殿はここで葬らせてもらう」
「……お前らのそういうところ、本当大嫌いだよ。侵略者で簒奪者で破壊者で加害者の癖して被害者面しやがって。時間が経てば多少は丸くなると思えば、悪化してんじゃねえか。てめえのことだよ、バラキエル」
不機嫌そうに、不愉快そうに、不自由そうに、ソロモンは舌打ちをする。
「見たぜ？　お前とお前なんぞを愛した頭のおかしな女と、お前ら譲りの頭のおかしい小娘の馬鹿みたいな物語をよ」
「朱璃と朱乃を侮辱するか！」
一瞬にして沸点まで激怒するバラキエル。雷光の輝きも一層強くなる。それは彼の逆鱗だった。
二十年に届かないほど前の話だ。バラキエルは高名な神社の娘と恋に落ちた。相手は五大宗家の一つ『姫島』の本家筋の娘、姫島朱璃だ。やがて娘の朱乃も生まれた。朱璃が堕天使の幹部に手籠めされたと勘違いした『姫島』の者が彼らの家を襲撃するも、バラキエルによって返り討ち。そして、堕天使に恨みを持つ者たちがバラキエルのいない隙を狙って朱璃と朱乃を襲撃。母は死に、娘は堕天使という存在に強い嫌悪感を抱くようになった。
直接的ではないにしろ、あれもまたこの男のせいで起きた悲劇だった。それを、よりにもよってこの男が愚弄するなど許せるはずもない。
「お前には生前ほどの脅威を感じない。――今のお前ならばここにいる者で倒せる！　私の妻と娘を侮辱した件も含めて、お前の罪を償わせてやる！」
「そうだな。非情に腹立たしいことに、後半はともかく、戦えば負けることは事実だ。何せ、今の俺の身体はアスモデウスの末裔のもの。時の流れは怖いよな、後継者はちゃんと鍛えておいてくれよ。新しい身体も準備中だしな」

今の自分では勝てないと断言しつつ、余裕の態度を続けるソロモン。否、彼の態度に余裕などない。彼の言動や表情から滲み出るのはいつだって憤怒だ。

バラキエルには分からない。ここにいないアザゼルやミカエル達にも分からなかった。きっとサーゼクス達新魔王にも分からない。旧魔王でも、アスモデウス以外には理解できなかった。今だけではなく、彼が生きている頃からずっと分からなかった。これから未来も、この疑問が晴れることはないかもしれない。

この男は何をこんなに怒っているのだろう？

そんな疑問を見透かしたように、ソロモンは笑みの種類を変えた。怒ったようにではなく、諦めたように怠惰な笑みを浮かべた。ただ、誰かの真似をしているような無理な笑い方だった。

「お前たちの相手は彼らにやってもらおう。じゃあ後は頼んだぜ、二人とも」

ソロモンは右手の甲を見せつけるように掲げる。そこには、生前の彼にはなかったと記憶している赤い痣のような刺青があった。よくよく見れば、右腕だけではなく同じ意匠の刺青が身体中を走っているようだった。

「栄光たるフィオナ騎士団の名の元に……その首、貰い受けよう」

「我が道を阻むか……ならば、お前は私の敵だ。ゆくぞ！」

ソロモンの背後から現れたのは、二人の男性。どちらも人間だが、人間離れした美を放つ。片やエリンの守護者、片やコサラの王だ。

「ここは俺の心象風景。我が積年の憤怒と執念の玉座の間だ。人の愛と希望以外には壊せない。――遠慮は不要だ。我が『真理』を利用して妻に会いたいならば、首級に挙げろ」

■

僕――ギャスパー・ヴラディはホッとしています。

「すみません部長！　力になれなくて！」

ずっと昏睡状態だった兵藤一誠――イッセー先輩が目を覚まし

した。僕達グレモリー眷属がお見舞いに行くと、部長の顔を見るなり病院のベッドから転げ落ちるように降りて、土下座をしました。
「皆が戦っている間眠っていたなんて、恥ずかしいです！　俺がいたら、あんな焼き鳥野郎なんてぶっ飛ばしたのに！」
「顔を上げてちょうだい、イッセー」
　言われて顔を挙げるイッセー先輩。涙で顔がぐちゃぐちゃになっています。
「貴方が大変だったことは分かっているわ。それに、貴方がいなくても私たちは勝たなくてはならなかった。せめてもう一人『僧侶』か『騎士』がいれば話は違ったんでしょうけど」
「うう、部長ぅ……。でも、部長があの焼き鳥野郎と……」
「大丈夫よ、イッセー。それより、貴方が寝ている間に世界は大変なことになっているのよ。私の結婚よりもよっぽどな大事件が起きているの」
　部長がおっしゃる大事件とは、魔術王ソロモンの復活。曰く、旧魔王派がソロモンの指輪を手に入れた。だが、指輪にはソロモンの魂が封じてあり、指輪を装着した旧アスモデウスの末裔クルゼレイ・アスモデウスが身体を乗っ取られた。旧魔王派はクルゼレイの身体を乗っ取ったソロモンによって壊滅。前ルシファーの実子であるリリンことリゼヴィム・リヴァン・ルシファーが現政府に保護を求めるほどの事態になった。敵対しているはずの旧魔王が現魔王の処に逃げてくるんだからよっぽどのことなんだと思う。
　実は、禍の団の対策会議が開かれたけど、ソロモンの指輪が見つかったという情報が出た段階で、各勢力の代表は逃げ出したらしい。代表者がそれでいいのかとも思うんだけど……。
　詳細は聞けなかったけど、ソロモンへの対抗策は見つかったらしく、魔王様やアザゼル先生はその準備に大忙しだ。当然、ソロモンや魔神柱、禍の団への対策もしないといけないから人手が足りないらしい。
「お、俺が寝ている間にとんでもないことが起きていますね」
「ええ。私たちも戦場に出るかもしれないの。でも、これはチャンス

よ。ここで私が活躍すれば今回のゲームの結果をなかったことに……いいえ、婚約そのものもなかったことにできて自由に結婚できるようになるかもしれないわ」

「そうか！　悪魔って実力主義ですもんね！」

並行する形でルーマニアで起きた魔神柱襲撃事件の調査結果が僕に届けられた。結論から言うと、ほとんど全滅状態。僕の家の者も七割が死亡していた。そして、恩人であるヴァレリーは行方不明。僅かに無事だった資料によると、ヴァレリーは強力な神器に目覚めたらしく、敵がそれを目的に連れ去ったんじゃないかって、アザゼル先生は言っていた。

ヴァレリー、無事でいてね。

「部長、イッセーくんが目覚めたら聞こうと思っていたんですけど、よろしいですか？」

「何かしら、裕斗」

「ソロモンは、一体何をしたんですか？」

ソロモン。イスラエルの古き王。その名前を口にしてはならないと、僕達は言われてきました。裕斗先輩の声も震えています。

「僕は彼が七十二柱を使役したことから、その歴史を恥とし、冥界でこの名前を口にしてはならないと聞いていました。でも、最近の出来事を省みるに、それ以上のことがあったように思います。お願いします。教えてください。ソロモンとは、何なのですか？」

部長の顔に影が差しました。そこにはあるのは憂いや嘆き、そして理不尽な悪意に対する怒り。目元を険しくして、部長の口から真実が語られました。

「ソロモンはね……。かつて世界を滅茶苦茶にしたのよ」

「め、滅茶苦茶？」

「ええ、奴は神から授かった指輪を使って好き勝手に暴れたの」

ソロモンの有名な逸話の一つ、唯一神から授かった指輪。その指輪は神の叡智の具現化ともされ、ソロモン王はこの叡智をもって古代イスラエルの最盛期を築いたと言われている。指輪には様々な能力があり、七十二柱を使役したのもこの指輪の力だとされている。

「躊躇なく神を騙し、逡巡なく悪魔を利用し、良心なく堕天使を殺したと言われているわ。世界の法則にさえ干渉して、当時の各勢力のパワーバランスを乱した。指輪の力で無理やり当時の七十二柱を使役した挙句、用済みになった七十二柱を壺に封印して湖に投げ捨てたの。それだけじゃなく、悪魔というだけで自国に許可なく入った悪魔を警告もなしに殺したそうよ。女性であっても幼い子どもであってもね。堕天使も同じ。天使は流石に神との折り合いが悪くなるから害さなかったそうよ。聖書の神だけではなく世界中の神々も騙したと聞いているわ。そのせいで、私たち聖書の勢力を憎む輩も多いとか。ひどい話よね、悪いのは全部ソロモンなのに。話に聞くだけだけど、彼以上に残忍で冷酷で非道な逸話の人間を知らないわ。彼は、指輪を持ってはならなかったのよ」

か、神様を騙した。それも話を聞く限り、一人や二人ではなさそうです。ソロモンの脅威は、神話で語られている部分はほんの一部でしかなかったってことなんでしょう。

そんな極悪人だったなんて……。こ、怖い。話を聞いていた他の皆も、表情が強張っています。

「それほどの存在だったのですね、ソロモンは」

「ええ、神話や歴史には残せない彼の汚点。だから、指輪の力でその記録さえも人々の歴史から消し去ったの。卑怯な男よ。でもね、それほどの脅威が復活したということは、世界中の神話が手を結ぶ必要が出てきたってことなの。ソロモンがどれほど脅威であっても世界を相手に戦えるほどではないでしょう。同盟に難色を示していたという者たちもソロモンには恐怖を感じているし報復をしたいはずだから、同盟に対して前向きになるはずよ」

各勢力が手を結ぶのだから、きっと、ソロモンもどうにかなる。ヴァレリーも助けられるはずだ。次レーティングゲームがあったら今度こそ最後まで戦ってみせる。イッセー先輩がいてくれたら、きっと誰にも負けない。平和になったら何もかもが上手くいく。

この時の僕は、本気でそう思っていました。

グレモリー眷属は、魔王領の館にて前ルシファーの実子リゼヴィム・リヴァン・ルシファーと対面していた。

「はじめまして、リアス・グレモリー嬢。そして、その眷属たち。私が前魔王ルシファーの嫡子リゼヴィム・リヴァン・ルシファーだ。……なんて堅苦しい挨拶はやめておこう！　そういうの苦手だしね、うひゃひゃひゃ！」

現政府に保護を求めてきたリゼヴィムだが、従者のユーグリットとともに軟禁状態にあった。現政府と彼の関係を考えれば当然の対応であるが、物理的な拘束や行動の制限がされていない分、サーゼクス達現魔王の甘さが見えてくる。

「特に兵藤一誠くんは孫のヴァーリきゅんが迷惑かけたみたいでね。ごめんね？」

「い、いえ、お気になさらず」

「そう？　いっやー、今代の赤龍帝くんは心が広くて助かるねー！」

一誠の言葉に、何が可笑しいのかげらげらと笑うリゼヴィム。

「いや本当、色々とよろしくね？　今回の件では頼りにしているよ、赤龍帝くん」

妙に馴れ馴れしい態度の魔王の直系に、苦笑いを浮かべるしかない一誠。

「で、サーゼクスくんやアザゼルおじさんが来るまで時間があるからお話でもしようか。何か質問でもある？　おじさんこう見えて魔王の息子だからねえ。意外と博識だよ？」

「はい。では、僕から。まず、僕達は今回の戦いで戦力になるのでしょうか？　僕達が知る個体は、グレモリー、グラシャ＝ラボラス、ゼパルの三体ですが、いずれも強大な力を持っていました。一番弱い印象のあるグラシャ＝ラボラスですら、三大勢力のトップ陣を複数相手にして持ち堪えていました。ゼパルも、イッセーくんが反則じみた力に目覚めたからです。グレモリーは、堕天使の幹部であるコカビエルを圧倒し、部長の……リアス様の滅びの力さえ通じませんでした。七十

二柱の初代様たちを倒した個体もまだいます。他に魔神柱が倒されたという話は聞いていません」

木場裕斗の質問に、リゼヴィムは大仰な手ぶりを加えながら答える。

「大丈夫大丈夫。魔神柱やソロモンの相手は俺やサーゼクスくんがするから。君達若手悪魔には雑兵の相手をして欲しいんだよね」

「雑兵？」

「ソロモンは旧魔王派を滅ぼして、『禍の団』を乗っ取っているようなの。『禍の団』は頭目のオーフィスや旧魔王派の外に、英雄派という派閥があるわ」

「そうそう、勇者の子孫や英雄の魂を継ぐ者たちの集まりだ。人間側のヒーローってやつだねぇ。神滅具を持つ者も何人かいるんだよ。今頃ソロモンに洗脳されて尖兵にされているかもしれないねぇ。君達若手には彼らの相手をして欲しいんだよ」

「英雄派……」

危機感を高める眷属を、リアスは激励する。

「大丈夫。イッセーが戻ってきた以上、私たちは負けないわ。ライザーには負けてしまったけど、それは彼の方がゲームの経験が上だったということ。実戦経験ならはぐれ悪魔を狩ってきた私たちだって負けないわ。頼むわね、イッセー。同じ神滅具を持つ貴方ならきっと英雄を自称する奴らなんて目じゃないわ。私たちの力で消し飛ばしてあげましょう！」

「はい！　任せてください、部長！」

「美しい主従関係だねぇ」

リゼヴィムが可笑しそうな笑みを浮かべていると、会議を終わらせてきたであろうアザゼルが入室してきた。

「おい、リリン。俺の生徒にいらないちょっかいを出すなよ」

「怖いなー、アザゼルおじちゃんは。俺は年寄りとして、未来ある若者の可能性を探っていただけだぜ？」

「はっ、どうだか。ん？」

リゼヴィムへの警戒を隠そうともしないアザゼルの元に、突然魔法

陣による連絡が入った。
　リゼヴィムの前ではあるが、術式から緊急を要すると判断したアザゼルは直ちに応じる。相手はグリゴリ副総督のシェムハザだ。
「どうしたシェムハザ……なっ、バラキエルとサハリエルが、だと……？　あのクソ野郎！　分かった、俺もすぐにグレゴリ本部に戻る。ただじゃ済まさねえ……！」
　連絡を切るアザゼルの顔は、憤怒に染まっていた。誰にも只事ではないと判断できる。困惑した空気が満ちている中、アザゼルが口走った名前が気になった姫島朱乃は問う。
「あの人が、どうかしたのですか？」
「……朱乃、落ち着いて聞いてくれ。バラキエルが――」

■

「堕天使の幹部バラキエルとサハリエルが死亡？　しかも、我々の仕業になっていると？」
「正確には、我々を使役していると勘違いしているソロモンにだ」
　指輪によるソロモン王復活の事態は、時間神殿にも届いていた。
　現在ソロモン復活を知る者は、三大勢力の首脳陣と各勢力のトップ陣の一部だけだ。魔術王の復活は公に出せる情報ではない。彼はそれほどの偉業を成した。彼はそれほどの罪を犯した。
「此方のソロモンの真意は何だ？」
　根本的な疑問。どこかの王のように、普通の人間として第二の生を謳歌したいわけではなさそうだ。行動が過激かつ大胆すぎる。
「此方のソロモンは王であった時代に、悪魔や堕天使を殺戮している」
「聖書の神だけではなく、あらゆる神話の神々を騙し、『真理』なる対界術式を構築している」
「怒りしか知らぬ王と各神話の長は恐れる」
「怒りを向ける相手は、あらゆる異形」
「人の未来を手に入れるために、神を騙し、魔王を利用し、世界の摂理さえも書き換えた」

「その死体は『システム』にくべられた故に、復活はあり得なかったはずだった」
「だが抜け道を用意していた」
「それが指輪に自らの魂を封印すること」
「王の指輪は天界に揃っているはずだ。それが盗まれたのか、すり替えられていたのかは不明」
「これまでの情報を統合すると、此方のソロモンは我々の人理焼却を知っている」
「私たちの罪を知っている」
「我らの聖書焼却にも気づいているだろう」
「仮に情報通りの人物ならば、私たちの目的を察知している」
「きっと彼の目的の先に、我々の理想は許されない」
「だが、我らも断罪を受け入れるわけにはいかない」
「例え相手が、あの男以外のソロモンだとしても」
「聖書の神や獅子王に続く敵というわけだ」
人間を愛するが故に、異形への怒りしか知らぬ王。神に歯向かい、星の因果を塗り替えた魔法使い。人類に未来を与えた開拓者。
ああ、あの男に自由があれば、この王のように人の悲劇を見て怒ってくれただろうか。
「こちらのソロモンには、あの男はどのように映るのだろうな」

■

「俺があっちのソロモンにどんな感情を抱いているか？　そんなの、嫉妬に決まってんだろうが。生前は俺とあまり変わらないけど、死後の方は全然違うな。俺も倫理観が破綻しているけど人類愛に満ちたマスターとか、中身おっさんの見た目美女な相棒とか、世界の未来を託せるような少年とかと会いたかったぜ。特に七十二柱とか羨ましいな。何なの、あの子達。真面目すぎるのが玉に瑕だけど、獣に堕ちるほど愛に満ちた異形とか。こっちの害獣どもと交換して欲しかったぜ。俺も指輪の力使って作ろうとしたんだけど……こんな気持ち

で作ってもただの人形だからなぁ。彼らの贋作を都合の良い手駒として生み出すなんて、生前の俺には出来なかった。今もやるつもりはない」

某国某都市の高層ビルの屋上に、ソロモンとその男はいた。

ソロモンが『向こう側』から呼び出したサーヴァントのひとり。弓兵――アーチャーのクラスのサーヴァントだ。外套を着こみ、その下は包帯で覆われている。顔は目さえ隠し、腕や足まで露出は皆無だ。そのため、人種も年齢も判別しにくい。声から辛うじて成人男性だということだけが判別できる。彼の傍らには巨大な棺桶が立ててあった。

「ゲーティア達には好感を抱いていたのか。意外だな。あのような初対面と決着だったから、俺はずっと貴方は彼らを嫌悪していたのだとばかり思っていたよ」

「俺は異形なら嫌いってわけでもないし、人殺しなら憎いってわけでもないさ。俺は人類という種に未来が欲しかっただけだ。そして、その可能性を限りなく潰してくる奴らが憎かっただけだ」

「その結果が『真理』というわけか。では次の質問をして良いか？」

「構わないぞ、アーチャー」

「千里眼は通常、自分の世界の可能性を見るものだ。過去であったり現代のすべてであったり未来であったり並行世界であったり。だが、別宇宙まで見ることはできない。貴方があちらの世界を見ることができたのは何故だ？」

「一つ訂正しておくと、今はあっち側からでもこっちを見ることはできるぜ。時期的にチャンネルが合っているんだ。アンテナが立っていると言うべきか」

もっとも、往復の手段はないと考えていい。英霊召喚は肉体のない英霊を聖杯を介しているため可能なのだ。マーリンは彼の千里眼とオーフィスの固有結界の特性を合わせていたため、例外である。

「今は、か。なら三千年前に貴方があちらの世界を見つけられたのはどうしてだ？『真理』の設計はあちらの神秘の在り方を参考にしたんだろう？」

「俺の千里眼は特殊でな。先天的なものでなく、指輪の力を使って後天的に作ったものなんだ。神々と訣別するための手段を探す方法として、俺は別宇宙を探索した。その成果が、あの世界の発見だった。聖杯や令呪はその時に知った。この世界の過去やら未来やらも見れるけど、副産物の機能だから断片的にしか分からん」

「成程な。なら、そもそも貴方はどうして神代との訣別など考えた？　当時はまだ一般の人々の隣にも神があった時代だろう。今の話だと、向こうの世界を見て思いついたわけでもないようだ。貴方がわざわざ『真理』を組まなくても、人は生きるだけなら可能だったと思うが？」

何を当たり前のことを、とソロモンは鼻白む。

「さっきも言ったが、俺は未来が欲しかった。俺は生まれながらにして、王だったからな。王には人を守り、導き、定め、次の世代に繋げる責任がある。物心がつく前から思っていたんだ。『このままだと、俺たちはこいつらに支配されたままだ』と。父上……ダビデ王がどう考えていたかは分からんが、俺はその運命を変えたかった。努力したよ。俺たちが生き延びるためにはどうすればいいのか、とにかく思考した。戴冠までが計画の設計期限だったが、どうにか計画を形にできて良かったよ」

ある世界のソロモンは、人間性を持っていなかったが故に、その生涯に人としての時間がなかった。この世界のソロモンは、人間性を持っていたが、王としての使命感があったために、人としての時間を放棄したのだ。

人々の笑顔を守れるような王になりたかった。人外に奪われないように、ひとつでも多くの笑顔を守りたかった。神や悪魔への怒りを原動力に、推測と計算を重ねた。

「俺は人類最高峰の魔法力を持っていたが、それを活かしきれるだけの機関が不足していた。自分の能力だけではできることなんて知れている。ダムの水を桶で移し替えることが難しいように。だからこそ、俺は神に指輪を求めた。神の権能を物体化させた指輪をな」

伝説において、ソロモンは神に叡智を求めた。だが、彼が本当に欲

しかったのは神の権能だ。どれだけ強かろうと、地の次元にいては神に干渉することはできない。世界を変えることはできない。だからこそ、ソロモンは自分の位相を上げる必要があった。地平を見渡す人の視点ではなく、世界を見通す神の視点が必要だった。

「指輪を得た俺は世界中の神々に提案した。『信仰の力ですべてが決まる世界を作らないか』と。あの時代の時点で、人間が信じる神は数多だった。誰もが唯一の神になりたかったのさ。太陽は一つしかないのに、太陽神は同じ神話内にすら複数いる。自らのアイデンティティを独占したいのは、人も神も一緒だったわけだ。まあ、折れない神様も多かったがそこは賢王と呼ばれた俺の腕の見せ所だな」

だが、ソロモンは計画のすべてを話したわけではなかった。ソロモンは提案の際に、神々に計画の詳細を細かく説明した。『時代が経過するに連れ、神代の物語は人々の認識とズレる』という一点を除いて。

なお、神々にした説明の中には、『誰も世界を作り直せなくなる』という限定条件があった。世界のリセットは聖書の神だけが行ったわけではない。ゼウスやエンリルも大洪水を起こしているし、インド神話は世界の創造と破壊の循環を主題としている。世界の再誕を行えるような神は、元から強大な神であり、自らへの信仰を集めることなぞ造作もないと判断したため、このことを受け入れた。唯一の神となれば、世界を改める必要などないと考えていたからだ。

そして、七十二柱を封印した壺をバビロンの穴に落とすことで、『真理』の術式は完成した。

「悪魔は血統ごとに特色があるからな。『真理』を組み立てるのに必要だったのは、単純な質量ではなく、魔力の多様性だった。案外、あれが最後の一手だって未だ誰も気づいてないのかもな」

「どうだろうな。悪魔の勢力から力を削ぎたいなら、指輪を使って自害させればいいと、俺は当時から考えていたよ。ゲーティアも違和感を覚えていた。考える時間のある人外ならば、真意を理解した奴らも多いだろうさ」

「あっそ。まあ、俺としては壺が湖の底に落ちるまでに邪魔がなければそれで勝ちだったからな」

ソロモンは神代に勝利した。超常の存在から人の未来をもぎ取った。

ただ一点、その成果が即座に出ないということを除けばの話だが。

しかしソロモンとしても、自分の代で神々を滅ぼすのは躊躇った。手段を択ばなければ出来ないこともなかったが、超常の存在との決着は後世に委ねた。こうして復活したのは後始末のためだ。自分のせいで迷惑を被った『獣』たちへの贖罪のためだ。

「穏やかな滅びを受け入れるでもなく、悪魔は『悪魔の駒』なんて作り出すし。これは完全に予想外だった。てか、あいつらこの仕組みで本当に人口問題解決できると思ってんのか？　指輪をアスモデウスに預けたのは神の復活を先読みしての保険だったが、ここまで堕ちた悪魔を見ることになるとはな。第二の人生とか夢見なくて良かったー」

ソロモンからしてみれば、滅びから目を背けながらも悪魔の本懐を遂げようとした旧魔王の方がまだ賢く見える。共犯者への贔屓目もあるだろうが。

「貴方には感謝しているよ、ソロモン。長年の疑問が解けた上、俺はようやくあの馬鹿を……いや、馬鹿者どもを殺せるのだから。自分が特別だと、特異だと勘違いし、叶わぬ夢を求めた愚か者ども。はッ！その先にあるのが破滅以下の地獄だと想像さえせずにな。『あれ』はまさに奴らに相応しい末路だ。だが、わざわざゲーティアをあの馬鹿者どもに付き合わせる必要もない。獅子王はゲーティアで倒せる。奴らの旅はここで終わりだ」

俺が終わらせる、とアーチャーは言う。

「好きにしろと言ったのが俺だが、最後に一つだけ答えていけよ、アーチャー」

王の顔に、憤怒以外の感情が宿る。それは紛れもない『憐憫』だった。

「俺が言うのも何だが、お前、何であっちの世界と契約なんかしちまったんだ」

「……はっきりとは覚えていないが、きっと寝ていたのさ」

アーチャーは棺桶を担ぎ、踵を返した。

「英雄になりたい、なんて寝言を言っていた気がするからな」

溺死しろ

私たちの王は優しい方でした。
しかし、王はいつも怒っていました。
子どもの頃から、人類を取り巻く悲劇について怒っていました。人間に襲い掛かる、人間以外の存在による悲劇について憤っていました。
　ある時は、悪魔に弄ばれた子どもの亡骸を抱きながら。
ある時は、堕天使に壊された女性の頭を撫でながら。
ある時は、神の試練に敗れた戦士の死を悔やみながら。
ある時は、異形の抗争で荒れ果てた村を前に祈りながら。
王は必死でした。王は本気でした。王は全力でした。
私たちは王の責ではないと理解しながら、王に恐怖していました。
私たちの苦痛のすべてが王の力がたりないからだという錯覚さえしていました。王がいなければ、王の抵抗がなければ、私たちはもっと多くの悲劇に襲われていたと理解していたというのに。
　ですから、王よ。どうか――死――私たちに――ね――謝らないで――死ね――ください。
　わた死ね！
　死んでしまえ、無能な王め！

■

「昼寝とはいいご身分ね、曹操。流石のリーダーもお疲れなのかしら？」
「……ジャンヌか。いいや、少し微睡んだだけだ」

悪夢から目覚めた曹操は、自分がどこにいるのか再確認する。
某国の山地の奥。怪物の住処はあるが、神の類が守っているわけではないため、自分達のような者の修行には持ってこいの山だ。麓には小さな町があるため、鍛錬ついでに怪物退治で一石二鳥だ。そんな山の少し開けた場所で、英雄派の仲間と鍛錬をしていたのだ。
少し離れた場所では、ヘラクレスが巨大な岩を殴りつけていた。他にも、素振りをする者、瞑想しながら神器に潜り込む者、仲間と戦略を練る者。
「どう？　新しい槍には慣れた？」
ジャンヌの問いに、曹操は自らの手にある槍を見る。聖書の神の遺志が封印されている聖槍を引き抜く代わりに、ゲーティアが自分に与えた魔槍を。
「堕天使側の人工神器を参考にしたそうだが、兵装舎謹製の魔槍だからな。聖槍と勝手は違うが、すぐに慣れる。それこそ、伝説の槍に引けを取らない代物だ」
時代が時代ならば、この槍を巡って戦争が起きたと言っても過言ではない。仕方がなかったとはいえ、神殺しの聖槍を抜き出したのだ。その埋め合わせである以上、魔神柱も性能に妥協することはなかったのだろう。彼らのプライドは高い。下手なものを与えて不満を持たれるなど論外なのだ。
流石に神殺しの力はない。その点を指摘すると、「フェンリルでも狩ってこい」と言われた。無茶である。相手は最強の魔物の一匹である狼だ。もっとも、これから英雄派が挑む獅子王とその円卓の騎士たちは、フェンリルに匹敵するかそれ以上の猛者たちなのだが。
「もうじき昼時だな。今日の食事当番は誰だ？」
「アーシアよ。今、麓の町に買い出しに行っているわ」
それを聞いた曹操の顔が引きつる。二人の会話に聞き耳を立てていた構成員達も同じだ。
「あいつの料理、エタノール臭いんだよな、味は良いんだが」
「食欲沸かないのよね、おいしいのに」
はあ、と溜め息を吐き出す二人。

「あ、ちなみにゼノヴィアが護衛についているわ」
「彼女に護衛は必要ないだろうけど……。まあ、いいか」
「ふーん」
「……なんだ？」
「いや、あんたも変わったなあって思って。私や他の皆も言えることだけど」
「そうだな」
これはきっと良い変化だ。かつて願っていたものとは違うが、近い形で理想に至ろうとしている。否、かつて求めていたものよりもずっと素晴らしい形かもしれない。
「ああ、俺たちは変わった。ゲーティアは獅子王に挑めと言った。捨て駒としてじゃない。俺たちをあえて捨て駒にする理由なんてないからな。勝てると、信じてくれている。前の俺たちなら舐めてかかって死んだだろうな。だが、今の俺たちなら――」
「――いいや、お前たちは獅子王に挑むべきではない。お前たちは英雄になどなるべきではない」
突然の言葉とともに向けられたのは、鋭い殺気。声のした方を見れば、わざとらしい足音が聞こえてくる。その場にいた全員が一斉に戦闘態勢に入るが、その額には冷や汗が流れる。
やがて姿を現したのは、外套を身に纏った人物。顔や手に包帯を巻きつけて、露出は皆無。その背中には棺桶が担がれていた。体格からかろうじて成人男性であることは判別できる。気配は悪魔や天使のそれとは異なる。この殺気からして間違いなく敵であろうが、その正体が想像できない。
「人間……？　だが、教会からの使者、というわけではなさそうだな」
曹操の言葉を、包帯男は鼻で笑う。
「訂正してやる。俺は小汚い掃除屋だよ。弱っちい人間未満の、贋作だ」
「掃除屋？　どういう意味だ？」
包帯男は曹操の問いには答えず、背中に担いでいた棺桶を振りかざす。そして、棺桶の足の部分を、曹操達の方に向けた。

「俺からおまえ達に送る言葉はただ一つ。理想を抱いて溺死しろ、勘違いの馬鹿者どもめ」

棺桶が開き、そこから出現したのは砲口だった。人の頭ほどはある、砲弾でも発射するような大きな砲身。歪な機械音を立てながら、砲口から神々しい光が漏れる。

「聖槍起動、宝具多重展開」

「っ！　皆、逃げろ――！」

「偽・焼却式ロンギヌス（カタストロフ）ⅩⅢ！」

神さえ焼く光が、曹操達に襲い掛かった。

■

聖書の勢力のトップ陣は、大きく二つの行動を開始している。

一つは、聖書の神の復活。魔王の息子の提案という危険性の高いものだが、彼の言う通りそれ以外に手がなさそうなのが現実だ。乗るしかなかった。このままでは四面楚歌の果てに三つの陣営が破滅するだけだ。この情報はソロモンの復活以上のトップシークレットとなった。ソロモンの復活までは三大勢力に関わらないで済むが、聖書の神の復活ともなれば話は違ってくる。黙っていない連中が出てくる。この作戦はリゼヴィムからもたらされた情報を元に、ミカエルを始めとした熾天使が極秘で進めている。

もう一つは、ソロモンとその配下であろう魔神柱に関する情報収集だ。特に、魔神柱に関してだ。ソロモン復活と魔神柱出現には時系列に微妙な矛盾が見られる。クルゼレイ・アスモデウスがいつ指輪を発見したかは不明だが、ソロモンの人物像からすれば行動を開始した時期は指輪が発見された時期とほぼ同じと考えるべきだ。つまり、魔神柱はソロモンが作ったわけではない。ソロモンの配下であることはほぼ間違いないが、創造主は別にいる。

魔神柱のことを調べるにあたって、サーゼクスはアザゼルと京都に向かった。京都に縁の深い『騎士』を連れて。間違いなく自分達より魔神柱を知っている存在、キングゥを京都サーゼクスホテルに呼び出

した。
「お引き取りを願います、アザゼル殿、サーゼクス・ルシファー殿」
しかし、京都妖怪の大将・八坂からキングゥへの干渉を拒否された。交渉の場に呼んですらいないという徹底ぶりである。彼にはサーゼクスとアザゼルが来ていることさえ伝えられていないだろう。
「八坂殿。こんなことを言いたくないが、彼は何かを隠している。少なくとも、我々よりも魔神柱のことを知っていた。協定を申し出されたとも言っていました。ひょっとしたら旧魔王派の手下かもしれません」
「そのような疑いをかけられることが、心外だと申しております」
さっさと帰れとばかりの強い拒絶の裏には、キングゥへの絶大な信頼があった。否、そこにあるのは信頼というより親愛なのかもしれない。
「八坂殿は、彼の過去について知っているのですか？」
「いいえ、あの子は何も話してはくれません」
「では何故です。彼が魔神柱側の者だった場合、貴女や京都の立場は非常に悪くなるはずだ」
「最初はあの子を戦力として欲していました。話に聞くソロモン王の呪いがこの京都を滅ぼす日を、一日でも先に延ばすための力として、あの子に京都に留まって欲しかった。正体不明など気にならないほどの強い子だと思っていました。しかし、今は違います。あの子は優しい子です。そして、悲しい子です」
時折、キングゥは悲しそうな顔をする。辛そうな顔をする。それは八坂と九重が親子らしい振る舞いをしている時によく見る。あれは、親から捨てられた顔だ。親から否定された子どもの顔だ。何があったかは知らない。何かあったのだろうが、知る必要はないと判断した。その悲しみを、自分達との時間で埋めていけばいいと。その成果か、最近は随分と笑うようになった。
「少々怒りっぽいところがありますが、それもまた可愛らしい。妾にとっては、妾たちにとってはそれで充分なのです。あの子の過去など関係なく、あの子を愛しております」

八坂は頭を下げる。
「この子はもう我々の家族です。親として子を信じ、守るのは当然の行い。どうぞお引き取りを」
八坂の立場からすれば、キングゥを庇うこと以上に、聖書の勢力のトップと会っている自体が拙いのだ。それを理解しながらこうして対面したのは、筋を通しているに過ぎない。
理由は、この国の主神――高天原の主、太陽神にして至高の女神、天照大御神である。世界的に見ても珍しい主神の女神である彼女には、世にも有名な逸話がある。天岩戸だ。簡潔に、現代風に、そして身も蓋もない言い方をすれば、彼女は引きこもった。日本における『日食』の神話的解釈である。
現在、ソロモンの指輪が発見されたと聞いて、天照大御神は再び引きこもった。ソロモン王の時代、日本は『古事記』が成立していないが、神自体は存在していた。当然、天照大御神もソロモンの詐欺被害者の一柱である。これもまた当然であるが、ソロモンの指輪をよりにもよって旧魔王が手に入れたという情報が入った以上、彼女の対応は当然のものかもしれない。
だが、日食は発生していない。神話の再現はされていない。これもまた『真理』の影響だ。ほとんどの日本妖怪は、当然ソロモンの死後に生まれたものが多いため、ソロモンの恐怖を実感したのはこれが初となった。この世界が自分達を忘れようとしているのだと、日本中の異形が理解した。同時に、指輪を持つ旧魔王への脅威性が上がり、再認識したのだ。三大勢力にこれ以上関わってはならないと。日本の土地を縄張りにしている悪魔や堕天使などの排除も検討されている。
だが、三大勢力も引き下がるわけにはいかなかった。特に、幹部二人を同時に失ったアザゼルは。
「あのな、俺だって古くからの戦友を……ダチを殺されてんだよ！ ここまで来て引き下がれるか！　バラキエルの娘の朱乃のためにも、俺はあのクソ野郎をどうにかしねえと気が済まない！」
「まるで自分達は誰の友達も家族も殺してねえみたいな言い方だな」
突然の第三者の声。

声のした方を見れば、いつの間にか部屋の窓が開いており、窓枠に一人の男が座っていた。全身に赤い刺青を走らせた、怒ったように笑う男が。

「はろはろー」

軽快なふざけた挨拶を笑顔で送りながらも、男は身を竦ませるような怒気を放っていた。ここまで言動と感情を矛盾させられる男を、アザゼルは一人しか知らない。

「ソ……クルゼレイ・アスモデウスか！」

ソロモンの名前を出すわけにはいかない。何故ならば、八坂は知らない。否、この京都にいるすべての妖怪が知らないのだ。この国でソロモン王復活の凶報を知っているのは、引きこもっている天照大御神だけだ。ここでソロモン復活がバレれば、聖書の勢力だけではなく、異形の世界は大混乱に陥る。『指輪が発見されたらしい』という情報だけでここまでの騒動となったのだ。アザゼルもサーゼクスもその点に関しては認識を共有していた。

一方、その事情を知らない八坂も警戒心を露わにする。気配から悪魔であることは分かる。否、悪魔の身体にナニカが入っていることは判別できた。だが、その魔力以上に彼から溢れ出る感情が神経を掻き毟る。この男は笑いながら怒っていた。心の底からではなく、魂の裡から激怒しているようだった。何をされれば、ここまで怒ることができるのか。

男は敵意と殺意を受けながらもどこ行く風で、どこからともなく取り出したどら焼きを齧った。

「試しに食ってみたけど、この国の甘味は口に合わないな。まずいとは言わないけど……」

「敵陣に乗り込むのに菓子食うなんていい度胸だな、クルゼレイ・アスモデウス」

「比較してみたかったし。俺はやっぱり彼とは違うんだよな。これもそうだが、ネットアイドルなんて何が面白いんだか。尊敬や羨望はするけど、同調はできないか」

その場にいる誰にも理解できないことを言いながら、クルゼレイ・

アスモデウスということになっているソロモンに、サーゼクスは語り掛ける。
「クルゼレイ。どうか和解の機会をくれないだろうか？　我々はお互いのことを知らない。かつての世界の何が原因だったかは知らないが、世界は変わった。貴方の憤怒も和らいだはずだ」
「あっはっは。てめえそれジョークか？　パチモン魔王」
「サーゼクス、こいつはこういう奴だよ。こっちの善意や好意を拒否して、ありったけの悪意で返してくる。かつて和解を持ち掛けたヤツもいたが、提案したその場で八つ裂きされた」
その言葉を受けて、ソロモンは眉をつり上げながら肩を竦める。
「正しい評価だな。ああ、正当な評価だぜ、クソ堕天使。……というか、八つ裂きってことはあれか。あれ和解の提案のつもりだったのかよ。初めて知ったぜ。ちなみに、俺はお前たちを悪い意味で高評価している。例えば、堕天使の幹部の首二つで、万能の願望器一つ分の価値があるんじゃねえかと思う程度には。そういう形で俺の我が儘に付き合ってくれる報酬になるんじゃねえかなと思う程度には」
あの二人ならすぐに狩ってくるだろうけど時間稼ぎにはなったな、と苦笑するソロモン。苦笑しながら激怒するという器用な感情表現をしつつ、その目に冷たい色を宿す。視線の先は、魔王と堕天使の総督に向けられた。
「ただ……お前ら二人に限っては、俺やあいつらが殺すべきではないんだよな。もっと相応しい相手がいる。もっと相応しい死に方がある。今日はそのことを伝えに来たのさ。嫌がらせと、最後の慈悲であるヒントのついでにな。このまま何も分からないのは、流石にフェアじゃないからな」
「どういう意味だ？」
「そういう意味だ。死ぬ気で思考して本当に死ね」
ソロモンは援軍を呼ぶ。およそ自分ひとりでもどうにかできる状況だ。超越者サーゼクスには勝つことはできないが、場所を考えれば撤退することはできる。だが、それでは面白くない。それでは怒りは晴れない。三千年も積み重ねてきた怒りが消えることはない。

「令呪を以って命じる。来い、バーサーカー」
アザゼルやサーゼクスの知らない手段で転移してきたのは、黒い男だった。
「令呪二画を以って命じる。――好きにしろ、バーサーカー」
バーサーカーと呼ばれた男の視線は、ある人物に向けられた。それは魔王の座を力で手に入れたサーゼクスではない。数多の神器所有者の人生を狂わせてきた堕天使の総督であるアザゼルでもない。国家を、時代を、仲間を、組織を裏切ったサムライの名前を、その狂戦士は叫び、抜刀した。
「沖田ぁあああ！」

……と、まあ、俺の計画とこの世界の実状はそんな感じだ。おまえらには手伝い以上のことは望まない。先に聞いておくけど、報酬には何を望む？

「どんな奇跡でも叶うというなら、シータに会いたい」

いいぜ、セイバー。この世界ならば、それは可能だ。さくっと堕天使の幹部でも二人倒して、奥さんとバカンスでも行って来い。

「私はエリンの守護者として無辜の人々のために働けるのであればそれで良いが……もう一度、最初の妻に、サーヴァに会ってみたいな」

実は面倒な奴だったんだな、ランサー。女難の相が『真理』で消されるかは分からんが、試してみるといい。泡沫の夢として楽しめ。

「例え世界が違うとしても、『誠』の旗を穢したままにできるか」

そう言うと思っていたぜ、バーサーカー。どこであろうと、おまえたちが信じるのは『誠』の旗なんだろう？　だったら、それに殉じず、悪魔に堕ちたヤツを許しちゃ駄目だよな？

■

「沖田ぁあああ！」

ソロモンが何らかの魔術で呼び出したらしい黒い男は、突然、サーゼクスの『騎士』沖田総司に切りかかった。男は修羅の如き憤怒を宿した顔で、強烈な一太刀を浴びせる。

「な、くぅうう！」

咄嗟に抜刀して防御する沖田だったが、黒い男の方が膂力が上なのか弾き飛ばされる。窓を割って外に逃げると、黒い男もそれを追って、外に飛び出る。

「総司！」

「じゃあ俺はがぎゃああ！」

窓枠から飛び降りたソロモンだったが、床に着地する直前に、窓の外からやって来た何かに蹴り飛ばされた。壁に激突しても勢いは止

まらず、そのまま部屋を破壊しながら飛ばされていった。
そして、ソロモンを蹴り飛ばした張本人は八坂に駆け寄る。その正体は正体不明経歴不詳の自称新人類の泥人形キングゥだった。
「無事かい、八坂」
「キングゥ！」
「良かった。何事もないようだね」
少し前から、キングゥは堕天使の総督が京都に入ったことを感知していた。だが、八坂からも他の京妖怪からもそんな情報は聞いていない。いつぞやの白い龍のように不法侵入かとも思ったが、京妖怪が自分に隠し事をしている様子ではあった。それどころか、八坂が二人に接触している気配さえあった。自分が気を使われていることは察知したため、最低限の警戒はしつつ静観しようとしていたのだが、そこに乱入してきた気配が問題だった。
とても強大な魔力だった。否、単に強大というだけではない。感知している此方が痛々しく思うほど、荒々しい。自分の知る人間とも妖怪とも神とも違う、ナニカが現れた。周囲の制止も振り払って此処に来て、ちょうど例の気配の男が見えたためそのまま蹴り飛ばしたというわけだ。
破壊された壁を押しのけながら、問題の男が戻ってきた。
「いつつ、ひっでえな」
「今ので死なないか」
「いやあ、今の、若干ビビってたろ？　建物に罪はねえってのが、君のスタンスだろうに。そんなに、俺ってアレかい？　まあ、気配を消し忘れてた俺にも責任があるがね。気を取り直して、はじめまして、キングゥ。『こっち』のソロモン王でーす」
怒っている。それがキングゥがこの男に抱いた第一印象だった。故に、その男が名乗った名前を聞いて得心した。あちらはともかく、此方では魔術王はこんな呼称をされている。怒りしか知らぬ王。
ただし、先ほどのキングゥの攻撃に対して怒っているのではない。この男の怒りは最初から今の今まで二名に向けられていた。片方は堕天使の総督アザゼル、もう片方は紅髪の悪魔だった。魔力の強さと

外見の特徴から察するに、『紅髪の魔王』サーゼクス・ルシファーだろう。

そんなアザゼルとサーゼクスは、キングゥとソロモンを見比べる。

「……『こっち』だと？」

まるで、ソロモンが二人いるような台詞だ。否、そんな簡単なものではない。あの一言は、もっと複雑な内情を孕んでいた。

だが、ここで魔王と堕天使の総督は対応を間違えた。本来であれば、ソロモンの名前にこそ反応しなければならないのだが。顔面蒼白になっている八坂のように。

「そ、ソロモン王!?」

おそらくは、この悪魔の中身こそが、伝説に語られる怒りしか知らぬ王。名乗りに対する反応を見るに、アザゼルとサーゼクスはこのことを知っていたようだ。逆説的に、この男の発言が寝言でも戯言でもないことの証明となる。

「き、キングゥ。逃げるのじゃ。そなたが強いことは知っているが、あれはそういう次元ではない。関わってはならぬ存在じゃ！」

「ああ。言われなくてもボクはそのつもりだったよ。近くで見て確信した。あれは母さんと同じ――」

「おっと、それ以上は禁則事項だ。世の中には言ってよいことと悪いことがあるんだぜ、泥人形。タイミング的な意味で。まあ、君らに関してもいま帰す気はねえんだよな」

ソロモンは迎え入れるように、両手を広がる。

「我が憤怒を、我が原罪を見ろ。すべては此処に置いていく」

ソロモンの意思を察したキングゥは八坂を抱えてその場から逃げようとするが、一瞬遅かった。

「『王冠は地上に（シクラメン）』！」

ソロモンが愛したとされる花の名前が響くとともに、世界が塗り替えられた。

そこは神殿だった。建築様式からして、古代イスラエルのものだ。構造とソロモンの座る玉座を見るに、王の間で間違いない。空間自体は広々しているのに、妙に息苦しい空気に満ちていた。

「結界……いや、だがこれほどのものを一瞬で展開したというのか？」
「ちくしょう、変にこっちの興味をそそるもんばっか出しやがって！」
驚愕するサーゼクスとアザゼル。アザゼルに関しては、研究者としてのサガを刺激されている様子だが。
「ここは俺の心象風景。我が積年の憤怒と執念の玉座の間だ。人の愛と希望以外には壊せない。存分に殺し合おうじゃねえか！」
沖田総司と彼に襲い掛かった黒い男の姿はない。結界内に取り込む人数、あるいは距離に限りがあるのか。まさかソロモンも単騎でアザゼルとサーゼクスに勝てるとは考えていない。生前ならばともかく、今の身体では限度がある。
だから、嫌がらせもヒントもこれからが本番だった。
「茶番に手間をかけすぎだ、イスラエルの古き王よ」
その透き通った女性の声は、ソロモンの玉座の後ろから聞こえてきた。
馬の蹄の音とともに、声の主は現れる。白く美しい馬に騎乗した、神秘的な槍を持つ騎士だった。獅子を象った兜を被っているため、顔は窺えない。
ソロモンは騎士の登場に慌てることもない。間違いなく彼の味方だろう。
「待たせたね。報酬は前払いしてんだ。ちゃんとやってくれよ、槍の女神。いや、今は赤い龍って呼んだ方がいいんだっけ？」
「どちらでも同じだ、ソロモン。この身は私（アルトリア）であり、俺（ドライグ）なのだから」
「そうかい。じゃあ約束の時間まであの紅い魔王の相手をしてくれ」
「承知した。これで貴殿との外交も終わりと思えば気が楽だ」
騎士は白馬に騎乗したまま、前に出る。
「ほんのしばらくぶりだな、アザゼル、サーゼクス」
この気配に覚えがあった。これほどまでに鮮烈なドラゴンのオーラを持つ存在は、龍神と真龍を例外とすると、二体のドラゴンのみ。サクソンの白い龍とブリテンの赤い龍。そして、これは赤い龍のオーラそのものだった。
「……ドライグ？」

騎士はその疑問とも確認とも取れぬ言葉には反応せず、槍を構えた。
「まずは二倍だ」

■

引き金の引きが甘かったのだろうか。
「はあ、はあ……。くそ」
全員生きている。森が焼き尽くされるような火力を受けながら、こいつらは防ぎきった。ある者は爆発で迎え撃ち、ある者は霧や影で吸収し、ある者は禁手の剣の龍を盾に使って。といっても、どいつも死に体だ。ほんの一刺しで殺せるだろう。
「ごふっ、皆無事か？」
「これが無事に見えるなら、フローレンス先生のところに逝って治療してもらえ」
「それは、困るな……」
ああ、認めよう。俺はこいつらを殺したくなかった。殺したくてたまらないはずなのに、殺したくなかった。この矛盾こそが、俺の限界だ。
「へ、ヘラクレスさん！」
「どうして、俺たちなんか庇ったんですか！」
「へっ、何でだろうな。ちくしょう、俺はこんなヤツじゃなかったのにな……」
かつて英雄派を名乗っていた彼らに、俺は裏切られた。
「みんな咄嗟に防御したり結界張ったり、成長しているじゃない……」
「ジャンヌさん！」
「あ、あああ！　回復系はいるか、この出血じゃ早くしないと……！」
俺が一番に死ぬべきだったのに、どうして俺を守ったのだろう。俺を盾にしろと言ったはずなのに。俺を置いていけと頼んだはずなのに。俺を見捨てろと命令したはずなのに。誰も彼も、俺の言うことなんて聞いてくれなかった。

「ハッ！　情けない姿だ。英雄もどきの未熟者には相応しい。さあ、どうする？　英雄派のリーダー、曹操。仲間が死にそうだぞ？　体を張って守るがいい」

俺たちやゲーティアを利用した聖書の神を殺すために、俺の聖槍に期待をしてくれたならまだ理解できた。だが、そうではなかった。

――ありがとうな！

――楽しかったわよ。

――感謝しています、リーダー！

――どうか、生きてください。

――貴方だけでも。

――本当、鈍いな、君は。

誰も彼もそんな心に燻る遺言を残していった。恨み言の方がどれだけマシだっただろうか。死の間際に感謝や好意を伝えるなどどういうつもりだ。俺には俺しかなかった。俺には槍しかなかったはずだ。俺は俺のことしか考えていなかったというのに。そんな願いに応えることもできず、俺は無様に死ぬしかなかったというのに。

戻れない過去を直視して、心が折れそうになる。

「はあ、はあ……言われるまでもないな、ミイラ男。皆、俺が時間を稼ぐ！　その間に、ゲーティアに連絡を！」

聖槍ではない槍を掲げて、ちゃんと前を向いている俺を見るだけで、泣きそうになる。

聖槍があればどこまでも行けるような気がしていた。聖槍がなければどこにも行けないような気がしていた。そんなことはなかったんだ。俺は、最初からどこにでも行けたんだ。

だが、それでも俺は俺たちを殺さないといけない。これは断罪であり、贖罪だ。

「聖槍起動」

こいつらが……俺たちがいたからゲーティアは聖書焼却に失敗した。俺たちが英雄なんて目指したからゲーティアは神の策略に敗北した。

人王という完全な存在に、英雄派という不純物があったから、あん

な結末になってしまった。この歴史でも同じだ。この世界でも同じだ。神の策略にこの段階で気づけたのは、俺の知る歴史との最大の差だ。だが、神の策略など関係なく、俺たちがいる限り、ゲーティアはまた死ぬ。そんなことを許せるはずがなかった。あの未来を回避するためならば、俺は再び泥に沈んでもいい。拭えぬ泥に染まった身ならば、これ以上穢れても同じことだ！

「宝具多重――」

「殺菌！」

危なっ！　メスが飛んできた。サーヴァントであるが故に神秘の宿っていない刃物でこの身を傷つけることはできないが、反射的に避けてしまった。……いや、今のは避けなければまずかっただろう。的確に眼球を狙っていたし。

見れば、そこには金髪の少女がいた。アーシア・アルジェント。かつて聖女と崇められ、魔女と貶められたが、これから凄女と畏怖される女。

一番苦手な奴が戻ってきやがった。こいつと彼女に会いたくないから、わざわざいないタイミングを狙ったのに！　はっ！　先生！　近くにフローレンス先生はいないだろうな！　この師弟コンビを同時に相手にするとか、生前でも忌避していたんだぞ！

「何ですかこの状況は！　患者が大勢いるのに、砂塵が舞って不衛生です！　急いで衛生を確保しなければ治療できません。しかも貴方、いまの強力な発光の原因ですね！　強い光は眼球を痛めます！　視力の低下はそれ自体も問題ですが、怪我の可能性を大いに増やします。患者を増やす気ですか！」

何だろう、この彼女がいれば大体どうにかなってしまいそうな雰囲気は。無敵かこいつ。

「しかも、何ですか、その誤った包帯の巻き方は。古びていますし、清潔ではありません。不衛生です。正しくレクチャーしますので、そこに座ってください」

マイペース過ぎると思いつつ、笑いが出そうになるので堪える。ああ、そうだ。この女はこういう女だった。異性として見たことは一度

もなかったが、尊敬という意味で好きだった。俺たちの中で、最強なのはなんだかんだで彼女だったことを思い出す。力でも技でもなく、魂というか存在感が強い。初対面の時の鬼ごっこが懐かしい。

そして、そんな彼女が一番に死んだことを思い出す。彼女の強さと俺の弱さを思い知る。俺なんかを庇って死んだ。俺の槍よりも、彼女の両手の方がどれだけの人を救えただろうか。あの時は、俺が死ぬべきだった。何度も考えて、何度も考え直して、それでも変わらなかった結論だ。

「何やら、派手なことになっているネ」

教授だ。最初から近くにいて霊体化していたのか、それともアーシア達と一緒に来ただけなのか。

我が恩師。我が目標のひとり。

いくら推理に長けたこの人でも、ここまで落ちぶれた俺のことなど気づかないだろう。あの語る夢だけは一丁前の未熟者が、敗北者に成り果てるなど誰が考えられる。まあ、この人がいては分が悪い。一度撤退すべきかと考えていると、教授は重々しく口を開いた。

「随分と面白くない男になってしまったようだね、我が教え子、曹操」

……やはり、俺はいつまで経ってもこの人には敵わないようだ。

■

「覗覚星九柱を代表してアモンより緊急報告。ゲーティアおよび全魔神柱に緊急報告。我らが次に対峙すべき存在、間もなく封印が解除されるという『黙示録の皇獣（アポカリプティック・ビースト）』６６６（トライヘキサ）。その正体が判明した」

ソロモン敗れる

「ウァサゴより提唱。第一の疑問は、あの忌々しい神が何故我々に黙示録の獣を倒させようとしているのか、だった。オーフィスでもグレートレッドでもなく、何故黙示録の獣なのか。まして、何故それを封印したのか。無駄な手間が多いように見受けられる」

「マルバスより展開。当初は復活計画を他神話に知られないためだと考察された。だが、この仮説が正しかった場合、これまでの行動に矛盾が生じる」

「オロバスより補足。我々やキングゥを『システム』で復元できるというのならば、計算上はあと百年から三百年ほどで神の復活に必要なエネルギーも回収できるはずだ。現代の各神話間の冷戦状態を省みれば、決して異世界の干渉のリスクを冒す意義はない」

「アロケルより考察。聖書の神には統括局と黙示録の獣を戦わせようとする動機があった。唯一神の目的は単純な復活ではない。我々にさせようとしていたのは復活のためのエネルギー回収だけではない」

「マレファレより推測。私たちは発想を逆転させた。重要な部分は『我々』ではなく、『６６６』なのではないかと。即ち、あの神には黙示録の獣を倒さなければならない事情がある、または倒すことで利益を得る手段があるのではないかと」

「アガレスより想起。すべての神話にとって最も排除すべき存在が、この世界にはある。此方のソロモンが築いた『真理』の術式だ。当然、あの間違った定義の神にとってもあれは邪魔な障害であるはず」

「バアルより結論。この世界の黙示録の獣の正体こそが、この世界の我々だ」

「ガミジンより解説。つまりかの獣こそが『真理』の術式――」

「サブナックより緊急連絡。生命院に拘束していたヴァーリ・ルシファーが脱走した」

■

獅子の兜の騎士のオーラが爆発的に――より正確には二倍に膨れ上がった。そして、槍の先端を紅の魔王――サーゼクスへと向ける。

「地に増え、都市を作り、海を渡り、空を割いた。何の、為に……。聖槍よ、果てを語れ！」

これこそは、嵐の錨にして世界の表皮を繋ぎとめる光の柱。

「最果てにて輝ける槍（ロンゴミニアド）！」

それに最も早く反応するのは、限りなく巻き込まれたに近い形でこの場にいるキングゥだった。自分ひとりならば傍観を決め込んだだろうが、ここには八坂がいる。彼女の安全を確保するためにも応戦しかない。

「ここに天の鎖の筐を示す！　いま呼び覚ますは星の息吹――」

これこそは、天の鎖にして世界を縫い止める剛撃の槍。

「人よ、神を繋ぎとめよう（エヌマ・エリシュ）！」

およそ固有結界の中でなければ周囲の都市を滅ぼしかねない熱量のぶつかり合い。本来ならば、人の王が成りあがっただけの女神が、神々の最高傑作の後続機に勝てる道理は薄い。だが、その女神が最高位の竜種の力を持っていれば話は別だ。

アザゼルとサーゼクスは衝撃波に耐える。

「んな、キングゥのヤツここまで強かったのか！」

「アザゼル！　それも重要だが、問題はあの騎士だ。あれはドライグのオーラ……おそらくはあれが獅子王！」

「俺はてっきり『獅子王の戦斧』の持ち主かと思ったが、そんな可愛いもんじゃなさそうだ！」

「こうなれば、私も本気を出すしかない。幸いにして、この結界はかなりの強度のようだ。遠慮せずとも済みそうだ」

前ルシファーよりも強いとされるサーゼクス。彼が本気になった場合、人型に浮かび上がる滅びのオーラとなり、その力は前ルシファーの十倍に相当すると言われる。そこにいるだけで空間を崩壊させかねない、悪魔と呼ぶことさえ正しいのか分からない、変異体である。

やがてエネルギーが霧散する。人以外には破壊できないとソロモ

ンが宣言した固有結界内の神殿は、流石にこの二つの宝具の衝突には耐えられなかったのか、見るも無残な姿になっていた。それでも原型を留め、固有結界の展開自体にも支障が出ていないあたり、異常と言う他ない。

この衝突で、ダメージを受けたのはキングゥだけだった。

「混ざり物の女神の分際で」

自身の攻撃を相殺されるどころか、僅かに押し負けたキングゥは、不愉快さを隠そうともせず毒づく。対して、獅子王は表面上は落ち着いた態度だ。

「流石は最強の神造兵器だ。二倍程度では御しきれないか。では、次は四倍だ――」

獅子の騎士が再び槍を構えた瞬間だった。

――パリン、とガラスが割れるような音がして、『悪魔』が姿を現した。

「Ｄｄｒａｉｇ！」

かろうじて言葉になっている音のような奇声を上げるそれは、悪魔としか表現しようのない外見をしていた。全体的にはドラゴンに近いフォルムだ。身体の表面は皮膚というより鎧に近く、純白だ。爪が異様に長く、顎から見える牙も鋭い。背中から広がるのは、漆黒の悪魔の羽だった。

「ＤｄｒａｉｇＤｄｒａｉｇＤｄｒａｉｇＤｄｒａｉｇ！　Ｙ　Ｄｄｒａｉｇ　Ｇｏｃｈ！」

その悪魔は、他の誰も目をくれず、獅子の騎士に飛びかかった。戦争の経験者であるアザゼルをもってしても目で追うのがやっとの速度で、無軌道かつ不規則な動きの突撃だった。だが、騎士はそれに当然のように対応する。悪魔の長い爪による突きを、神々しい槍で弾く。追撃も同じようにいなすが、悪魔もまた攻撃の勢いが止まらない。

「このオーラ……まさかアルビオンか！」

攻防を繰り返しながら、獅子の騎士は悪魔の正体に気づく。内心ではお互い変わり果てたものだと自嘲するが、意識を切り替える。ここ

で赤と白の決着を終わらせるのも一興だと判断し、白い悪魔も攻撃対象に数える。

一方で、予定外過ぎる事態に混乱し、それ以上に激怒するソロモン。キングゥの乱入は予定の範囲内であったが、この白い悪魔の突入は計画にはなかった出来事だ。

「ああ!?　何だこの……この珍生物！　空間を食い破ってきやがったのか!?　てめえの登場なんて予定にねえぞ。こんなやつ、アーチャーの話にも出てこなかった……」

「隙ありだ！」

悪魔の乱入で崩れた予定の修正に神経を回していたソロモンは、いつの間にかアザゼルに肉薄されていた。アザゼルの手には光の槍が具現化されており、その矛先は当然ソロモンに向けられている。

「我が身に宿るすべての令呪を以って、我が契約に応じたすべてのサーヴァントに命じる」

ソロモンは七騎のサーヴァントをあちら側から召喚している。その上で、サーヴァントに対する絶対命令権である赤い刺青、令呪を自らに身体に刻みつけた。本来であれば一騎につき三画のところを、合計四十二画。十画ほどすでに使用しているが、それでも残っている令呪は彼の全身に走っている。そのすべてを、一つの命令のために使い潰す。

「後は任せた！」

ソロモンの令呪がすべて消失し、彼の腹部にアザゼルの光の槍が突き刺さる。深々と、直撃した。

獅子王はそれを認識しながらも、ソロモンの方を見ようともしない。最強の魔王、最強の兵器、白い悪魔の三名を相手にしているからではない。その意味がないからだ。予定外のことが続いたが、この結末はおおよそ彼の計画通りだ。

「ごふっ」

「油断したな、ソロモン。最後に何かやったみたいだが……不発か？」

「さ、さあね」

いくらソロモンに精神を乗っ取られたとしても、身体はクルゼレ

イ・アスモデウスのもの。つまり、悪魔としての弱点は変わっていない。アザゼルほどの堕天使の光の槍を受けて無事なわけがないのだ。光は毒のように全身を蝕み、やがて命を奪う。

槍を出しているのとは逆の手でソロモンの胸倉を掴んで吊し上げ、アザゼルは問い質す。

「最期に答えろ、ソロモン。おまえは何がしたかったんだ」

「あ、うん？」

「聖書の神どころか世界中の神を騙し、『真理』なんてものを組み立てた。俺たちには、理解できなかった。あれはおまえの歴史上の扱いさえ貶めるものだ。おまえの父と違い、おまえは地獄に堕ちていると現代の教会じゃ考えられている。実際はそれ以下だけどな。だが、あれは少なくとも、おまえのためにあるものじゃなかった。だが、おまえみたいな自分勝手に自分の欲望と悪意に従って動く男が、自分のために作ったわけがないんだ」

この男は何に怒り、何を願っていたのか。

「何のために作った？『真理』で何がしたかった？　おまえは一体、どこを目指していたんだ」

「……何だ。知らなかったんだ。分かっているとばかり思っていたけど」

ソロモンは開示する。己を鼓舞し続けた動機を。憤怒の主柱となっていた感情を。

「そりゃ、俺の国を守るためだ。あるいは、人類のためかな」

「――は？」

「俺は王だ。王が王として振る舞うのに、それ以外の理由が必要か？　俺はおまえらが俺の国で好き勝手に暴れ、奪い、犯し、壊し、殺し、穢していくのが耐えられなかった。だから、おまえらを殺した。おまえらを滅ぼすための手段を練った。防衛は当然の行いだろう？　愛だよ、愛。愛国心であり、人類愛が俺の動機だ」

アザゼルの顔に怒気が宿る。

「たったそれだけのために、これだけのことをしたってのか！　自分の国を守るだと？　どれだけの悪魔や堕天使を殺した！　どれだけ

俺たちの生涯を歪ませた！　どれだけの生命を狂わせた！　自分勝手な願いのために、一体どれだけの人間を巻き添えにし、犠牲にした！　命を奪い、死を与え、勝手に怒って勝手に笑って、蘇ったと思えば世界を乱すだけ乱して。おまえは何がしたいんだ。何が国を守るだ。何が人類のためだ。他ならぬおまえの行為が、人間の未来を狂わせたとどうして気づかない！　おまえは狂っている。おまえの考えは破綻している。国を守りたいという願いが当然のものだったとしても、おまえは、やり過ぎだ！」

「えーと、それ現代だと何て言うんだっけ。フリスビー？」

「ふざけるな！」

ソロモンの顔面に拳を打ち込むアザゼル。

「いってぇなぁ。でも、俺の本音に辿り着くのはさ」

ソロモンが、ニタリと笑う。それを見て、アザゼルはゾッとした。いつものソロモンの笑い方とは違う。この男から初めて怒りが抜けきった顔を見た。その笑みに怒りはなく、その魂に憤怒はない。だが、ソロモン以外の誰であっても、この状況とはかけ離れた表情だった。怒りしか知らぬとまで言われた魔術王は、心の底から愉快そうに笑っていた。

「二千年ほど遅すぎだよ、アザゼル」

急ぎ殺さねばまずいと判断したアザゼルは光の槍を出現させるが、遅い。遅すぎた。この男も狂喜するのだと、三千年前に気づくべきだった。二千年前ならばまだ間に合っただろうが、今では遅すぎる。

ソロモンが天に視線を向ける。諦めたわけではない。死を甘受しているのではない。彼の心象風景である空間の上空には、巨大な魔法陣が展開されていた。

そして、その巨大な魔法陣から巨大な『何か』が落ちてくる。あまりにも巨大すぎて全貌を把握しきれない。まして真下からでは、『何か』が獣のような形状であることがかろうじて分かる程度だった。

「なんだ、ありゃ……！」

驚愕の事態に頭を回すアザゼル。その隙を突き、ソロモンは魔術を発動する。

「ああ、会いたかったぞ、我が真理の化身。我が功罪から生まれた獣よ。おまえに最初の愛を与えよう！」

ソロモンの手から魔力が溢れ、彼の手元に真鍮の壺が具現化されていく。

「禁忌は水底に！」（シークレット・オブ・バビロン）

壺から蓋が自動的に開かれると、空中から落ちてくる巨大な『何か』を吸い込んでいく。その様子は西遊記の紅葫蘆を彷彿とさせる。

一瞬の内に巨大な影は小さな壺の中に収まり、蓋が自動的に閉まる。アザゼルが壺に手を出すよりも早く、ソロモンは魔法陣を展開させ、その中に壺を投げ入れた。

「ソロモン、てめえ一体何をしやがった！　あれはおまえの魔法陣じゃない。聖書の神のものだ！　おまえ、『システム』にでも介入しやがったのか！」

「てめえらの神が監禁してやがった俺の子どもを返してもらっただけだ」

「子ども、だと？」

「ああ。俺が積み上げた偉業の中で、唯一の後悔、さ……。いや、俺もまさかあんなものが生まれるなんて予想外でさ……。やっぱりカンニングって大事、アーチャー呼んで良かった……。俺は『彼』と違うから、最期にこういうことをしたかった……。ああ、もう、限界、だ、な……。悪い……、クルゼレイ……」

その言葉を最後に、ソロモンの――否、クルゼレイ・アスモデウスの身体は動かなくなった。

■

リゼヴィム・リヴァン・ルシファーは、時計を見て『約束の時間』が来たことを確認する。内から溢れ出る感情が表情に出ないように堪えながら、冷静を装う。

「それで、緊急の用事って何よ、グレイフィアちゃん」

真剣みのないふざけた態度に、グレイフィアは眉をひそめる。この

男は苦手だ。一応、裏切り裏切られた関係になるが、それをまるで取り合っていないような態度。だが、

「ソロモンが死亡したそうです」

グレイフィアからの報告に、リゼヴィムは紙芝居を見る子どものように聞き入る。

「――以上が顛末です。クルゼレイ・アスモデウスの身体もアザゼル様の光によって消滅。指輪もサーゼクス様の手で破壊されました」

「えー、指輪壊したの？　あれ、聖書の神復活に必要だって言ったじゃん。ま、九個ありゃ問題はないか」

リゼヴィムの言葉を、グレイフィアは怪訝に思う。

「いえ、ですが、もう必要ないのでは？　かの神の復活は、ソロモンへの最後の対抗策でした。ソロモンがいない以上、聖書の神が復活すれば現代の三大勢力は壊滅してしまいます」

「確かに俺たちや堕天使に続ける理由はない。だけど、天使は別だ。彼らはやめないだろうねー。やめるわけじゃん。聖書の神復活をさ。だってずっと探していたものなんだぜ？」

グレイフィアだけでなく、リゼヴィムの監視役をしていた悪魔やグレイフィアに付き添っていたルシファー眷属にも動揺が広がる。

「そ、そんな馬鹿な！　天使は、神のいない間に悪魔や堕天使と協定を結んだのですよ!?　ソロモンという脅威がなくなった今、天使が神を復活させれば彼ら自身が殺されます！　聖書の神の復活は、あくまでもソロモン対策という名目だったはずです！」

「何にも分かってないなー。これだから創世期を知らない世代は。グレイフィアちゃんも内戦で同族と戦っただけだもんね。実感はしてないか。魔王を役職にした悪魔と、神の崩御を隠蔽してきた天使じゃ価値観が違うんだって気付こうよ」

魔王の息子は己の知る天使を語る。

「天使は続ける。自分達が裁きを受けるとしても、聖書の神を復活させる。あれらの価値観は人とも悪魔とも違うんだよ。俺たちが悪で魔であるように、あいつらは天に使われているんだ。それが、天使という生物だ。人間と悪魔が違うように、天使と悪魔も違うんだよ」

そして、彼らが否定したがっている真実（もしも）を提示する。

「まあ、俺からすればソロモンが死んだってのも都合の良い妄想だけどね！」

■

二度目の死によって彼のクラスは継承された。

怒りしか知らぬ王など偽りの異名。其は人間を信じ抜き、人類史を最も強引に獲得した大災害。

その名をビーストＤ／Ｒ。この星の人類悪の一つ、『期待』の理を持つ獣。

理論を放棄した、根拠なき願望による妄執。それこそがソロモンの獣性だった。

この世界の価値

「随分と面白くない男になってしまったようだね、我が教え子、曹操」

え、とその場にいた誰もの思考能力が停止した。

そして、一斉に英雄派のリーダーへと視線が向けられる。

「まさか――教授って生前にも『曹操』に教鞭を？　そんな話、コナン・ドイルの小説には……。もしかして、あっちには書いてあるんですか？」

「いや、違うからね？　そこにいる曹操が英霊となったのが目の前にいる彼だよ。私と同じサーヴァント。クラスも被っているようだ。そんなところでリスペクトを示されても嬉しくないんだけどねえ。あと、私の前でその名前を出さないこと」

その言葉を包帯男――サーヴァント・アーチャーとなった曹操は否定せず、肩を竦めるだけだった。その態度からは驚きも何もない。目の前の老紳士がこの解を出すことが当然であるかのような態度だ。実際、そのとおりなのだろうが。

「教授。ご明察、お見事です。俺はそこの大馬鹿者の惨めな末路。この身は魔術王ソロモンの手によって、アーチャーのクラスで召喚されました。ソロモンというのはこの世界のソロモンであり、ゲーティア達の知るソロモンではないので悪しからず」

その反応に、最も驚愕をするのは曹操だ。

「未来の、俺だと……？」

未来の自分が英霊になっていること以上に、そんな自分が自分達を殺そうとしていることに困惑するしかなかった。ソロモンの指示だと断ずるには、あまりにも生々しい殺意があった。

「ありがとう。では、区別のためにアーチャーと呼ばせてもらおう。解せないのは、君がどうやって英霊になったか、だ。この世界に英霊の座はない。それが私と覗覚星の出した結論だ。代わりに、神として昇天したヘラクレスや転生が否定されている宗教の聖女であるジャンヌの転生体などというものが存在する。どうにかして、あちらに渡来したのかな？」

「一つ訂正させてもらいます。俺は英霊ではない。世界と契約した掃除屋だ。無論、此方側ではなく、あちらの貴方達の世界と契約をしました。ソロモン曰く、今の時期はこちらとあちらが繋がりやすいそうです。あの世界が俺に声をかけてこられたのも、そのせいでしょう」
「……馬鹿なことを。それは君が証明したかった人の力とは最もかけ離れたものではないか？」
「俺も自分の力だけで戦いたかったのですが、そうしなければならない状況になったので」
「おおよその状況は察せられるが、聞かせてもらおう。何があった？」
アーチャーは包帯で隠れた顔を手で覆う。何か強い感情を噛み締めていることは表情が見えなくても察知できた。
「俺たちが足を引っ張ったせいで、ゲーティアが黙示録の獣に、そして聖書の神に敗北したというだけの話ですよ。そして、あの神は人類を作り直そうとした」
「――それは聞き捨てならないな」
声とともに転移してきたのは、人王ゲーティア。
彼はアーチャーの前に立ちはだかるように出現した。まるで、アーチャーから曹操たち英雄派を庇うように。
「ゲーティア。まさか、貴方が直接出てくるとはな。時間神殿に引きこもって、バアルあたりにでも任せてくると思ったが。俺の知る貴方とは乖離しているのかな？」
強大な存在を眼前にしながら、アーチャーに怯んだ様子はない。それどころか一歩前に出る。
「それは此方の台詞だ。成り上がったな、英雄志願。我々が黙示録の獣如きに敗北したと？　あの間違った定義の神に下ったと？　面白い戯言だ。興味が沸いた、語るがいい」
「偉そうに。だがそこまで言われては仕方がない。俺と貴方の失敗談を聞いてくれ」
嬉しそうにぼやくアーチャー。嬉しいのだろう。二度と出会えなかったはずの恩人と、こうして会話できることが。同時に恥ずかしいのだろう。ここまで落ちぶれた自分を見せてしまうことが。

「うわあ、本当だ。あれ絶対に曹操だ」
「え？」
「自覚ないのか？　おまえ、ゲーティアやバアルとか前にするとあんな感じだぞ」
「え？」
　ゲオルグとヘラクレスからの言葉に固まる現代の曹操。その未来の姿であるアーチャーも若干沈黙して、ぎこちなく口を開いた。
「では、話の前に聞かせてくれ。貴方たちはどこまで真実を理解している？」
「時間神殿で滅んだはずの我々が復活したのは聖書の神の仕業だ。だが、復活の際に奴の計画に都合の良い動きをする因子を埋め込まれた。我々はやがて復活する６６６を打倒するが、そのエネルギーによってあの神が復活するといったところか」
　概ね正しいと、アーチャーは大仰に頷く。
「黙示録の獣は下準備なしでは、ゲーティアにしか倒せない。ゲーティアが第一宝具を使用する必要がある。俺たちは最後の最後までそれに気づけなかった」
「第三宝具ではなく、第一宝具だと？」
　キャスパリーグから受け取った情報の中に、第一宝具のことはなかった。だが、考えてみれば、いくら特殊な役割を与えられたからといって、キャスパリーグに真実が教えられたとは限らないのだ。あの神は二重三重に錯誤を仕組んでいた。『すべてを教えられている』という認識さえ誤りだったのだ。
「その顔を見るに、察したようだな。そうだ、黙示録の獣とは『真理』の具現化だ。ソロモンさえ誕生に気づけなかった、人と神の乖離によって生み出された神代の膿。全神話の三千年の積み重ねだ。『真理』がある限り、６６６は不滅だ。逆に、６６６を打倒すれば『真理』は崩壊する。だが、６６６を物理的に滅ぼすには三千年分の世界の熱量がいる。俺たちに、そんな時間はなかった。他の手段としては、６６に不純物を混ぜる、分裂させて無限に殺すなどだな。これも時間がなかった。復活前に６６６を発見できていれば話は違ったが、俺た

ちの視点では６６６は突然復活したように見えたのでな」
　そもそも６６６は実在さえ疑われていた伝説の怪物だ。人王という常識外の戦力があるのに、あえて探そうとする必要など英雄派にはなかった。
「そして三つ目の例外が、ゲーティアだ。第一宝具ならば、貴方の『訣別』ならば、『真理』を打ち崩すことができる。６６６とは『真理』であり、『真理』とは此方の貴方そのものだ。だからこそ、第一宝具で弱体化できる。九個の指輪と三つの聖遺物の機能、貴方の存在と引き換えに」
　アーチャーの声が震えた。アーシアの治療を受けている英雄派達も、そのＩＦを察する。
「……貴方は成功した。『真理』を崩し、弱体化した６６６を第三宝具で打倒した。だが、『奴』が復活した。間違った定義の神が」
　それは最悪の可能性。包帯に包まれたアーチャーの顔が歪む。その時のことを思い出し、歯を軋ませたのだろう。
「あの時の……あの時の俺の気持ちが分かるか！　ゲーティアが、魔神柱たちが俺たちに向けた感情や言葉のすべてを、自分の復活のための茶番などと笑われた俺の気持ちが！　神殺しの槍を持ちながら、奴に一矢報いることもできずに、仲間や無関係な人間を殺されていく俺の悔しさが！」
　それは確かに想像を絶する無念の光景だろう。
「俺たちが……英雄派なんて存在がなければ、俺たちなんかに構っている時間がなければ、ゲーティアにはまだ余裕があったはずだ。その時間で、あの神の悪意に気づけたかもしれないのに。俺たちが、貴方達が極点に至る邪魔をしてしまった」
「それは違う」
　ゲーティアはアーチャーの語る敗因を否定する。
「英雄派に期待したのは私の判断だ。おまえたちが敗因となったとしたら、それは私の過ちだ。聖書の神の思惑も当初はあったかもしれん。だが、忌まわしい因子を取り除いてなお、私はこの馬鹿どもに可能性を見ている。あの獅子王に挑ませるだけの価値があるとな。こ

の世界の人間は十分に期待に値する。貴様如きにかけた時間で、私の計画の成功率が変化するとは思い上がったな。傲慢も甚だしい」

「く、くくく……くははははははははは！」

呵々大笑とするアーチャー。だが、微塵も愉快そうではない。彼は恩人の盲目を心底嘲笑していた。こんな自分に目をかけることも合わせて、人王の思想を悲嘆していた。

「貴方も冗談を言うんだな、ゲーティア！　人の醜態に耐えられずに一度は魔神王となった貴方が、本当にそんな感情を抱いているのか？　俺たちに……そいつらに期待しているだと？　この世界は貴方の世界ではないのに」

同じような台詞を聖槍の女神から聞いたゲーティアだが、その真意がまったく異なる内容であることは明白だった。この世界で生まれた彼が、どうしてこの世界を否定するようなことを言うのか。まさか別世界と契約したことが原因ではあるまい。

「……どういう意味だ？」

「そうだな。貴方にも分かり易く、此方のソロモンを具体的としよう」

王の話をしよう。神も魔王も利用して、人の時代を獲得した王の話を。異形から虐げられる人類のために、己のすべてを犠牲にして世界を定めた王がいた。

「此方のソロモンが何て呼ばれていたか知っているか？」

「怒りしか知らぬ王だろう？」

「いや、それは異形側の意見だ。人間からは無能な王、と呼ばれていたそうだ。ソロモン本人から聞いた」

無能な王。良い王ではないと言うのならば納得した。『真理』の構築は、神が隣にいた時代の人間から強制的に信仰の価値を奪ったとも言える行為だ。だが、？無能〃という言い方は微妙に違和感を覚える。それでは彼が何もやっていないようではないか。少なくとも、ソロモンは防衛のための暴力を振るったはずだ。そして、人の時代を切り開くための『真理』を組み立てたはずだ。それを脅威や障害と認識するならば分かるが、？無能〃という表現は的外れに思える。

だから、ゲーティアだけが、その言葉の意味を理解していた。人王

ともあろうものが、冷静さを欠くほどその事実に動揺した。
「そんな馬鹿な――そんな馬鹿な話があってたまるものか！　我々の知るソロモンとは違う、感情のある王だったはずだ！　王であり、『人間』であったのだろう!?　人の悲劇に怒り、悲しみ、憎んだ。その元凶である異形に武力で対抗した。これ以上、何を望むと言うんだ！」
　激昂するゲーティアに対して、アーチャーは頭を振る。
「他ならぬ貴方たちが、貴方たちのソロモンに願ったことと同じだろうに」
「人間が、同じ人間に対してそのような願いを抱いて良いものか！」
「違う人間だよ。いや、当時の人類にとってソロモンとは王であって人ではなかった」
　数秒遅れて、教授がその言葉の裏に隠れた人間の悪性を理解する。会話の内容についていけない英雄派たちを、アーチャーは羨望を滲ませて嘲る。
「分からないか、未熟者ども。だが、それでいい。おまえたちはそれでいい」
　そのままでいろ、とアーチャーは言い、正解を告げる。
「ソロモンに、神になれ、と人々は願ったのさ」
　アーチャーの口から語られたのは、荒唐無稽としか表現できない歴史だった。あまりにも滑稽で、あまりにも単純で、あまりにも身勝手で、あまりにも因果応報な人間の歴史。
「当時の人々は気づいていた。ソロモンの国の人々だけではない。世界中の人間が気づいていたんだ。この星に、人間にとって都合の良い神など一柱もいないのだと」
　人間が他の生物を弄ぶように、神々は人間を壊していた。家畜として、玩具として、奴隷として、材料として、役者として。まるで、神様のように。
「そこで神との訣別を考えれば種として前進しただろう。だが、人々が選んだのは『神の捏造』だ。自分達にとって、人間にとって都合の良い神を創り出そうとした。人間を無償で守り、人間を無限に愛し、人間を無条件で救う神を作り、その神だけを崇めようという醜い結論

を。それ以外の神を排除してしまおうと」

実際、ソロモンにはそれが出来た。世界中の神々と魔王を騙し、『真理』を組み立てた彼になら、それが出来た。何も武力を用いる必要はない。口で内紛を起こしてもいい。指輪の力で因果を組み直してもいい。シンプルに魔術で罠を張ることも考えられる。否、いっそ『真理』を神殺しの術式として作ってしまえば手っ取り早かっただろう。

だが、ソロモンはそれらをしなかった。新しい神の誕生を願っていた人々にとって、彼は何もしてないのと一緒だった。だからこそソロモンは歴史において貶められた。異形など関係なく、人々の意思によってその名は暗君として嘲られることになった。

「彼が人間と認められた瞬間など一秒もない！　人々にとって彼は自分達を幸福にするための王様であり、唯一神にならなかった役立たずなのだから！　こんな世界に期待するヤツなど、それこそソロモンくらいだ！」

人類はソロモンに、おまえだけが頑張って皆を幸せにしろ、と願った。

ソロモンは人類に、皆で頑張って幸せになった方がずっと素晴らしい！　と返した。――無能な王と謗られても、怠惰な王と罵られても。人類が必ずあの世界のように輝けると信じて。

「実はな、ソロモンは自らを人類悪とするために聖書の神に異世界のことを教えたんだ。人類史に大災害を招いた黒幕で、元凶だ。だが、あの王様に罪があるというのなら、その時点で償っているだろう？」

それこそがアーチャーが、否、並行世界の曹操が味わった絶望だった。自分達の運命は圧倒的存在が仕組んだ茶番で、自分達の起源はおぞましいほどに堕落したもので、自分達の力は全くの無力だった。

「過去の人間だけではない。現代もまた無力だった。神は復活した後、双貌の獣を再現した。あの醜いとしか言い様のないバケモノに、人類はあっという間に滅ぼされたのさ。――バアルが言ったとおりだよ、俺は藤丸立香にはなれなかった」

世界を救うことなんてできなかった。

誠の旗

――まって下さい!!　近藤さん、土方さん!!

――私はまだ……私はまだ戦え――

その狂戦士は、もはや病で立てぬ身体でありながら、そんな風に自分の背中に訴えてきた阿呆を知っている。

だから、異世界とやらに召喚され、この世界には自分の知る新撰組があると知って、覚えた感情は驚きと納得だった。誠の旗は世界が違っても、掲げられたのだと。それは狂戦士にとっては当然とまでは言わないが、それほど不自然なことではなかった。

ただ一点、あの阿呆と同じ名前を持つ男が、誠以外の旗を掲げながら、浅葱の羽織を着ていると聞いた時の感情は筆舌に尽くしがたいものだった。

故に、狂戦士は、ソロモンから希望があるかと問われ、例え世界が違うとしても、『誠』の旗を穢したままにできないと返答した。

「そう言うと思っていたぜ、バーサーカー。どこであろうと、おまえたちが信じるのは『誠』の旗なんだろう？　だったら、それに殉じず、悪魔に堕ちたヤツを許しちゃ駄目だよな？」

その言葉に、そうではない、と狂戦士は返した。

ソロモンはそれ以上踏み込むことはなかった。どれほど強くてもあくまでも王であったソロモンには、最期の最期の最期まで戦士として戦い続けた男の真意など肝心なところで理解できない。

だからこそ、彼をこの世界に召喚した責任者として命じたのだ。

好きにしろ、と。

■

ソロモンの死の直後、彼の固有結界が解除される。

一同は部屋へと戻された。キングゥの突撃によって大荒れになったままである。そんな室内でもお構いなく、白い悪魔は獅子兜の騎士へと貫手を繰り出す。

「Ｄｄｒａｉｇ……！」

白い悪魔の攻撃を槍で弾き、騎士が嘆息する。

「……ここまで奴の想定通りだとは興醒めだな。予定外の出来事はおまえくらいだ、アルビオン。もう少し楽しみたいところだが、決着はお預けだ。生憎、私も暇ではないのでな。――聖罰は当分先になりそうだ」

獅子の兜はヴァーリとの攻防により破損していた。被っておく方が邪魔だと判断したのか、彼女は兜を脱ぐ。

兜の中には、美しい女の顔があった。無機質な目に、輝く金髪。何より、王気とも神気とも言える重圧があった。

「我が名は獅子王。獅子王アルトリア・ペンドラゴンだ。聖書に記された堕天使と魔王の名を継いだ悪魔よ。いずれまた会おう」

その名乗りに対する言葉を待つこともなく、獅子王を名乗った女騎士は騎乗していた馬ごと忽然と消え去った。

「Ｄｄｒａｉｇ！」

騎士が姿を消すと同時に、白い悪魔は餓えた子どもが癇癪を起こすように叫ぶ。そんな悪魔を見て、堕天使の総督は無駄だと頭では理解しつつ、言葉を掛けずにはいられなかった。

「おい、ヴァーリ！　おまえ、ヴァーリだな？　しばらく見ない間に変わり果てやがって。どんな力に手を出しちまったんだ？　何があったんだ。しっかりしろ！」

「Ｄｄｒａｉｇ！　Ｄｄｒａｉｇ！　Ａｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒ……あ、アザゼル……？」

一瞬だけ、白い悪魔は理性的な動きをして、養父に視線を向ける。

「すま、ない。俺は――ＤｄｒａｉｇＤｄｒａｉｇＤｄｒａｉｇＤｄｒａｉｇＤｄｒａｉｇ！　Ｙ　Ｄｄｒａｉｇ　Ｇｏｃｈ！」

だが、本当に一瞬だけだ。

悪魔の両腕が何かを握りつぶすような動きをする。するとどうしたことだろう、何もない空中に黒い線が見えてきた。冗談のような話だが、この悪魔は僅かな挙動で空間という概念に亀裂を入れたのだ。

「待て、ヴァーリ！」
　アザゼルの制止も聞かず、ヴァーリ・ルシファーは空間に開けた穴に飛び込んだ。空間の亀裂はすぐに消える。おそらくは騎士の後を追ったのだろう。本当に後を追えているのか、そもそも当てがあるのかどうかは別として。
「……あの金星の残滓、何があったらああなるんだ」
　キングゥの小さな呟きはアザゼルには聞こえなかったようだ。
「くそ！　どうしたってんだ、ヴァーリの野郎！　あれにはオーフィスのオーラがあった。だが、ヴァーリのチームはオーフィスの『蛇』を与えられていないはずだ。ヴァーリのやつがオーフィスの『蛇』を欲しがるわけもねえ」
「落ち着け、アザゼル。それよりも……」
　サーゼクスはクルゼレイの遺体から指輪を取り外すと、滅びの魔力でそれを完全に破壊する。これで、指輪によるソロモン復活は有り得ない。
「それにしても、クルゼレイはどこでソロモンの指輪など……」
　京都に来る前、ミカエルから連絡があった。ソロモンの指輪は確かに天界の然るべき場所に保管されていたと。問題は、指輪が十個揃っていたことだ。つまり、ソロモンはミカエルや神の目を出し抜いて、本物をどこかに隠し、偽物をすり替えたことになる。だが、十個あるうちのどれが本物か現状では分からないらしい。熾天使が中心となって偽物の特定に尽力している。
「だが、これで無駄になってしまったな。急いでグレイフィアに連絡しなければ」
「……話が終わったなら、帰ってもいいかな？」
　キングゥ。途中で乱入してきた彼だったが、おそらくはこの場にいる誰よりも真実を把握していることは明らかだった。
「待て、キングゥ。おまえには聞きたいことがある。ソロモンがおまえに言った『こっち』ってのはどういう意味だ？　あの獅子王って女のことを、おまえはどれだけ知っている？」
「話すことなどないと言ったはずであるぞ、堕天使め」

八坂は前に出て、キングゥを背中に庇う。ソロモン襲撃の前も好意的な態度ではなかったが、今は明確な敵意があった。
「おぬし達、ソロモンの復活を知っておったな？　先程の言動から察するに、指輪にはソロモンの魂でも封印されていたな？　それを知っていながら教えなかったというのに、自分達だけ一方的に教えろなどという道理が通ると思ってか！」
「いや、話すよ」
唐突な言葉に、呆然となる一同。
「これ以上付きまとわれても面倒だからね。ボク個人の問題なら良かったが、こうして八坂まで巻き込んでしまった以上はそうも言っていられない。まあ、契約があるから魔神柱のことは言えないけど、それ以外のことに関しては話すと約束しよう」
「たく、最初からそう言ってくれよな」
「キングゥ！　こやつらにそこまでしてやる義理などない！　身の上の証明ならば、高天原にすれば問題ないであろう！」
「落ち着きなよ、八坂。これはボクが起こしてしまった問題だ。ボクに任せて欲しい。勿論、京都の皆や高天原にもちゃんと説明するよ」
「じゃが……」
「大丈夫、上手くやる。それよりも、出来たらでいいんだけど、ボクのことを嫌わないでくれないかな……？」
「そのようなことはない！　おぬしの過去に何があろうと、妾も九重もおぬしのことを嫌うなど有り得ぬ」
「……うん、ありがとう」
八坂の手を強く握るキングゥを尻目に、サーゼクスは自らの『騎士』の気配を探す。
「総司……？」
情愛が深いグレモリーの悪魔故に、彼は自らの眷属の危機を感じ取った。

■

クルゼレイ・アスモデウスの身体を乗っ取ったソロモンが魔術で転移させたであろう男を見て、沖田総司はこの人物が危険であると即座に察知した。この場で呼んだということは、ソロモンにとってこの男は切り札だろう。そうでなければ堕天使の総督や最強の魔王がいる場に呼びはしないはずだ。『騎士』として『王』であるサーゼクスには指一本触れさせない。一瞬でそこまで考えた直後だった。

「沖田ぁああ！」

予想外なことに、男は沖田に向かって斬りかかってきたのだ。それも、沖田に対して明確な憤怒を滾らせながら、彼の名前を叫びながら。

「な、くぅうう！」

咄嗟に抜刀して防御する沖田だったが、黒い男の方が膂力が上なのか弾き飛ばされる。たまらず窓を割って外に逃げる。黒い男も窓を飛び出して追いかけてきた。

道に着地し、ここでは衆目があることに気づく。後でサーゼクスの手の者が目撃の記憶操作や情報操作はするだろうが、その手間を増やすことは好ましくない。移動しようとするが、黒い男はすぐに斬りかかってきた。相手もこのような場面を大勢に見られることは好ましくないはずだ。此方が情報操作をすると見越しての行動なのか。

まさか、こうして誤魔化しようのないほどに戦いを見られることが目的なのか。

「沖田ぁ！」

「ぐぅ……！」

一太刀一太刀が途轍もなく重い。受け流すのに精いっぱいで、とても逃走ルートを考える余裕もない。この男の相手をしながら誘導するなど以ての外だ。

京都駅の近くにある京都サーゼクスホテル前の道は、人通りも多い。突然二人も男が降ってきたのだ。道行く人は当然驚く。しかも、その二人が演劇の殺陣よろしく真剣で斬り合っていれば注目しない人はいないだろう。

これが映画村であれば撮影のように見えたかもしれない。だが、ここは駅近くの格式高い大ホテルだ。時代劇の撮影には不向きだろう。

この狂戦士は、本来ならば理性的で策略家だ。このような衆目のある場所での戦いは避ける程度の一般常識はある。しかし、いまは理性を抑えられないほどの怒りを覚え、しかもソロモンの令呪二画による「好きにしろ」という命令のせいでその為の頭が働かない。本当に、やりたいことをやりたいようにしてしまう。

狂戦士の目的はただ一つ、目の前にいる男を殺すことだけだ。

周囲の人々は現実離れした光景を前に動けずにいた。あまりにも混乱し過ぎて脳が処理しきれないのだ。かろうじて立ち直れたものもいるが、やはり現実についていけないのか逃げようとする者はいなかった。他人事のように携帯や手持ちのカメラで撮影をする者までいる始末だ。

だが、二人の剣士にそれに構っている時間はなかった。

間違いなく冥界最強の『騎士』の一角に数えられるはずの沖田総司は、目の前の男に圧倒されていた。剣の腕云々の問題ではない。この男には種族の差を圧倒する気迫があった。

数合の鍔迫り合いの後、一旦距離を取り、沖田総司はその身から鵺を召喚する。

沖田は一人百鬼夜行だ。サーゼクスと契約して悪魔になる前、延命を行うために数多の禁忌に手を出した。そのせいで身体中に妖怪が巣食うようになった。その結果が、一人百鬼夜行。鵺を始めとする多くの異形をその身から召喚できる。

「だ、誰だ……」

それほどまでに殺意と敵意を向けられている沖田は、そんな余裕はないと分かっていても、意味がないと理解していても、問わずにはいられなかった。

「誰なんだ、おまえは！」

どうしておまえを見ていると、あの人を思い出す。死地に出向くのを布団から見送るしかなかったあの人に――！

「よぉく見せてやる……。あぁ……よく見るが良い……！」

流石に多くの妖怪を独りで相手取るのは難しいと判断したのか、男も沖田から距離を取る。ライフル銃で妖怪たちを牽制しながら、その

手に?旗〃を掲げる。その?旗〃こそが、男の回答だった。
それを見て、沖田は激高する。
「それは……私たちの旗だ!」
旗が立てられると同時に、数名の人間が召喚される。それはまるで、新撰組の隊士のような者たちだった。元々剣呑とした場所であったが、彼らの登場により、銃弾飛び交い、号砲轟く戦場と化した。
「抜刀、突撃」
号令と共に、男から感じる魔力が上昇する。
沖田は与り知らぬことであるが、この瞬間、ソロモン最期の令呪――「後は任せた」という指令が降りた。曖昧な命令ではあるため具体的な効果は薄いが、サーヴァントの瞬間的な強化にもそれは適応される。当然、全盛期ほどではないが反則級の魔力を持つソロモンの令呪だ。その強化は尋常なものではない。
本来であれば、召喚者でありマスターであるソロモンが死亡した以上、魔力源を失ったバーサーカーも消滅するはずだ。だが、ソロモンに抜かりはない。自分が死亡する事態など、神々を上回る策略家であるソロモンが想定していないはずがない。バーサーカーを始めとするソロモンが召喚した七騎のサーヴァント、すべて疑似的に受肉済みである。まして令呪の後押しがあれば魂食らいをする必要さえない。
沖田の背筋に、冷や汗が流れる。死神に心臓を掴まれたようだった。背負っているはずの過去が、自分を殺しに来たとさえ感じだ。そして、自分が負けることを理解した。
「負けない……そんなものに、負けられるはずがない!」
ここでは死ねない。
自分が死ねば――何も残らない。終わってしまう。新撰組が、誠の旗が終わってしまう。こんな形で、新撰組は終わってはならない!
「誠の旗は……不滅だ!」
そうだ、誠は不滅だ。不滅でなければならない。沖田総司はそのために――そのために、何だ? 誠が不滅であるために、一体何をしてきた? 何をしている?
隊士のような者たちが、沖田の召喚した妖怪達と斬り合い、食い合

い、殺し合う。
「斬れ！　進め！　斬れ！　進め！」
そうだ、斬るしかない、進むしかない。だって、だって、俺は――
そのために、今日まで生きてきたのだから！　俺がいる限り、新撰組はここに――
「総司！」
第三者の声。沖田総司の主君、魔王サーゼクス・ルシファーだ。
沖田が劣勢なのは素人目ならともかく、実力者であるサーゼクスには一目で明らかだ。助太刀として、滅びの魔力を狂戦士や隊士たちに放つ。
滅びの力が、狂戦士に襲い掛かる。だが、狂戦士は構わず進む。構わず斬る。沖田総司を殺すためだけに、彼に迫ってくる。気力の問題もあるが、これはバーサーカーの宝具の効果もある。
対人宝具、不滅の誠（しんせんぐみ）。
発動中は肉体の損傷による身体能力の劣化を一時的に無効化し、相手を屠るまであらゆる手段を使い戦闘を継続することが可能。しかし効果時間終了時に貯め込んだダメージが一気に噴き出す諸刃の剣。
滅び程度ではこの男の狂気は止められない。
「あ、あ――」
対して、サーゼクスの援護は沖田総司にとって逆効果になった。
自分が誰の何であるか、自分がすでに新撰組として戦っていないことを思い出す。新撰組などどこにもないことを思い知る。
自分が誠の旗を握っていないことを思い出す。その一文字を棄てたことを教えられる。延命はあくまでも手段であったというのに、いつの間にか目的を放棄してまで手段を追求していたのだと理解させられる。背負っている？　否、とっくの昔に捨てていたのだ。この身にあるのは、異形に堕ちた穢れのみ。
己の守りたかったものなどこの時代には存在していないことを思い出して。ずっと目を背けていたことを自覚して、誠の一文字を支えに戦っていた沖田総司の心は折れた。
「あ、ああ……、わ、私は、お、俺はぁ！」

凶刃がすでにその身に届こうとしている。
対応しようとして、敵の姿を見て、あの日のあの人の姿を想像してしまった。自分が助けられなかった、助けようともしなかったあの人の死に様を思い描いてしまった。そのせいで、回避できた攻撃を前に怯んでしまった。
「俺が！　新！　選！　組だあああああ!!」
刃が深く強く悲しく、沖田総司の身体を切り裂いた。
「近藤さん……土方、さん……、すみません……」
サーゼクス・ルシファーの唯一の『騎士』、沖田総司、ここに敗れる。悪魔となった彼の魂はどこにも逝かず、消えるだけだ。同じ旗を掲げた隊士たちと同じ場所に逝くことは決して有り得ない。
同時に、宝具の効果が切れたバーサーカーは苦悶の表情を浮かべる。
「俺は死なん……！　俺がいる限り、新選組は不滅だ……!!」
許容限界を超えた彼もエーテル体となって消滅する。
これで、陣営を問わず異世界から召喚されたサーヴァントの中で、ソロモンサイドのバーサーカー、土方歳三が最初の脱落者となった。

無理解

アーチャーは自虐するように続ける。

「どうだ？　これでもまだ人類に価値があると思うか？　――ないよな。この世界はゲーティア達の世界ではない。人間と言っても、同じ形をしているだけだ。この世界の人間と、あの世界の人間は違うのさ。価値のある人間もいるのかもしれない。だけど、総体としての価値は比べることさえあちらに対して失礼だ」

驚愕の事実を告げられて誰もが呆然となっている中、一人だけ自分のやるべきことを続けている少女がいた。言うまでもないが、鋼鉄の看護師第二号になりつつあるアーシア・アルジェントである。負傷した構成員の応急処置を終えた彼女は魔法陣を展開する。

マイペース過ぎる。

「我が召喚に応じよ、禁忌の龍たち」

ドラゴンを召喚するための魔法陣、龍門。もっとも、使用しているアーシアにとっては『魔法陣？　これはただの救急隊員急行用の通路ですが？』という扱いである。呪文も彼女にとっては１１９番のような認識なのだろう。

そこから出現したのは、二体のドラゴン。一体は灰色の鱗を持つ巨人のようなドラゴンで、もう一体は樹木と一体化したような身体のドラゴンだ。

『グハハハハハハ！　久しぶりの戦いだぜ！』

『気分の高揚は理解できますが、まだそうと決まったわけではありませんよ？』

カインの末裔『大罪の暴龍』グレンデル、黄金の林檎の守り手『宝樹の護封龍』ラードゥン。どちらも、滅ぶに相応するだけの理由を以って滅んだはずの邪龍。

『ご用件を伺えますか？』

「では、ラードゥンさん。急いで壁を作ってください。衛生を確保するためには空気の遮断が一番手っ取り早いのです」

『了解しました、マスター・アーシア』

恭しく命令に従うラードゥンを見て、グレンデルは嘆息する。
『おめえも雑用で大変だな』
『いえいえ。これでも結構楽しいのですよ？　宝樹を守っていた頃を思い出します』
「無駄話禁止です！　早く！」
『イエス、マム！』
二十年も生きていない人間の少女が邪龍を小間使い扱いしている場面に呆けている周囲を置き去りに、アーシアはアーチャーを鋭い視線で射抜く。その手には一束の包帯があった。
「そういえば、貴方の包帯を巻き直さないといけないのでしたね。しかも、その包帯の下はかなりの重傷を負っていると見ます。火傷……ではないようですが、それに近い症状ですね。まずは包帯を剥いでから診察、その後に消毒液に浸かってもらいましょう。グレンデルさん、患者の確保を手伝ってください」
「待て。待つんだ、アーシア。落ち着け。俺はサーヴァントで、この肌は身体というよりは魂に刻まれたものだから治療なんてできないぞ！」
「何を訳の分からないことを！　頭の病気ですか？」
「まさか君にそんなことを言われるとはな……！　こうなるから会いたくなかったのに……！　こうなったら仕切り直しだ。今回は出直させてもらう」
おいおまえ態度が豹変しすぎじゃねえかとゲーティアと英雄派が思っていると、ドラゴンの片方が前に出た。
『グハハハ！　姫さんよ、そいじゃ俺がそいつを抑えつけてやるよ！　こういう時は動かないようにするためなら、両足折っても構わないんだよなぁ！　治療のためなら間違って殺しても仕方ねえよな！』
「ッ！　待て、グレンデル！」
ゲーティアの制止も聞かず、グレンデルはアーチャーに突貫する。伝説のドラゴンが肉薄しようというのに、アーチャーは軽く舌打ちをするだけだった。
「この駄龍が」

アーチャーは棺桶の蓋を少し開けてそこから奇妙な球体を取り出す。そして、それをそのままグレンデルに投げつけた。グレンデルはそれを巨大な腕を振るうことで破壊するが、割れた球体から黒いゲル状の液体が飛び散った。当然、球体を破壊したグレンデルの身体には多くかかる。

『ああん？　何だこのベトベトは――ぐがあぁぁあああああぁぁあああああ!?』

自分の身体についた液体を拭うグレンデルだったが、突然絶叫を上げる。それは第三者からしても激痛を感じていることが分かる悲鳴だった。眼の焦点が合っておらず、吐血したかと思えば、地面に倒れて丘に上げられた魚のようにのたうち回る。

『ご、ごはぁ！　い、いでぇえええ！　な、なんだ、こりゃあああ、あああああぁあああ！』

グレンデルを始めとする邪龍は、ゲーティアにとっては特攻用の駒だ。だが、元々無駄に頑丈なのが『邪龍』と分類されるドラゴンだ。邪龍筆頭格の三体ほどでないにしても、グレンデルはそこらのドラゴンとは比較にならないほどの強さを持つ。まして魔神柱による肉体の強化を施されているのだ。それをこうも容易く倒せるとなると、龍殺しの特性が必要になる。

そして、曹操にはその見当がついていた。

「サマエルの毒か」

「一目で理解できるとはな、未熟者」

「当然だろう？　自分の考えることだ、嫌なくらい察しがつくさ。俺自身、獅子王と戦う手として考えていたからな。元々アーサー王にはブリテン島の化身である竜の因子がある。まして、赤い龍と融合したならそれは完全にドラゴンと考えていい。だったらあらゆるドラゴンと蛇を滅ぼすと言われるサマエルを手段とするのは当然だろう？」

「厳密には本物の毒ではなく、聖槍の力で再現した贋作だがな」

楽園の禁じられた蛇、サマエル。曰く、神の毒。曰く、神の悪意。堕天使でありながらドラゴン。アダムとイヴに知恵の実を食べるように唆したため、聖書の神の怒りを一身に受けた。その結果、ドラゴン

でありながら、あらゆるドラゴンを殺す毒を吐き出す皮肉な存在が生まれた。あまりにも危険すぎるため、現在はコキュートスの底で厳重に封印されている。

「毒を被った……つまり、治療が必要ですね。広範囲に受けてしまったようですし……どのような毒か分からない上、時間もありません。血清が用意できないとなると、患部は切除です。……ふむ、皮膚下を治療するには鱗が邪魔ですね。？がしましょう」

『え、ちょ、ま』

『諦めなさい、グレンデル。不用心に突っ込んだ貴方が悪い』

邪龍の断末魔を聞こえないことにしながら、曹操は未来の自分の可能性に問いかける。

「つまり、おまえはその毒で獅子王を倒したわけだ」

「いいや？　俺の歴史では獅子王という女神は来なかった。だから、異世界の知識として頭の片隅に知っているだけだった。ソロモンに召喚されて獅子王なんて名前を聞いて、最初に連想したのはサイラオーグ・バアルだったくらいだよ」

「サイラオーグ・バアルというと、次期大王の若手ナンバーワンか？……ああ、彼の眷属が『獅子王の戦斧』だったか」

ゼパルの並行世界の閲覧や大王派の潜入調査により、ゲーティアは『獅子王の戦斧』の詳細はともかく所在は知っている。そして、その情報は英雄派にも共有されている。皮肉なことだが、同じ勢力である魔王や協定関係にある堕天使は、この事実を知らない。何故ならば、『獅子王の戦斧』の存在は初代大王を失った大王派にとっては切り札だからだ。テロリストが知っているのに政府が知っていないという滑稽な矛盾が出来上がっていた。

「聖書の神の怒りによってサマエルはああなったと聞くが、俺の場合は恐怖だった。死にたくないという恐怖。生きたいという渇望。それこそ、どこかの誰かの『生きる為』という願いに触発されたんだろうな」

どこまでもみっともない奴だ、とアーチャーは自嘲する。それは曹操に向けた嘲笑でもあった。

「聖槍があったとはいえ恐怖だけで神と同じことができるとはな。自慢か？」

「過去の自分に自慢などして何が楽しい。ただの事実だ。まあ、事実を言うなら俺は強くなんてないさ。何せ、この毒を作ったのはある悪魔を殺すためだ。それも下級の、転生して一年も経過していないな」

歯を軋ませるアーチャー。その下級悪魔とやらに余程良い思い出がないのだろう。曹操は強い相手に負けたからと言って恨むような性分ではない。彼も同じならば、その転生悪魔とやらは余程卑劣な手でも使ったのか。

「ではな、ゲーティア。教授。未熟者ども。この歴史では間違えないことだ。――それと、この『D』でもなく『F』でもない、世界線『E』の神に御用心を」

そう言うと、アーチャーは棺桶の蓋を少しだけ開ける。そこから見覚えのある霧が出てきてアーチャーを包んだ次の瞬間、彼の姿は霧散するように消え去った。

■

僕――木場裕斗は憂鬱な気分で駒王町に戻ってきた。いや、僕だけじゃないリアス・グレモリー眷属全員が町を出る時よりも明らかに苦悩を抱えて戻ってきた。

まず、部長、僕達の主人リアス・グレモリー様だ。僕達は部長の将来を賭けたライザー・フェニックスとのレーティングゲームに、負けた。完敗というほどではなかったが、惜敗とはとても言えない戦いだった。イッセーくんの不在が大きかった。好きになれない相手との、不本意な結婚だ。今度婚約決定のパーティーがあるそうだが……とても笑顔では参加できないだろう。

次に、朱乃副部長。一番深刻なのはこのヒトだ。何せ、唯一の肉親であるバラキエルさんを亡くされたのだから。母親の件で仲たがいしているとはいえ、父親だ。心の中では朱乃さんもバラキエルさんが悪かったわけではないと理解しているのだろうが、そうしなければ自

分を保てなかったのだ。実際、バラキエルさんの訃報を聞いてから彼女は塞ぎ込んでしまった。口数も極端に減り、帰りの列車内でも一言も発していない。

そして、小猫ちゃん。彼女は指名手配中のはぐれ悪魔、姉の黒歌と再会した。魔神柱の襲撃があったせいで有耶無耶になったが、彼女が何を思って小猫ちゃんに眷属を抜けるように諭したのかは不明だ。魔神柱たちのことを詳しく知っていたようだけど。彼女のトラウマの根源である姉との再会は、小猫ちゃんの心を揺さぶるには十分な出来事だった。

それから、ギャスパーくんは、故郷にいたという恩人が行方不明だ。元々家族から迫害されていた彼にとっては、故郷が破壊されたことよりも恩人の安否が心配なのだろう。犯人はまたしても魔神柱。冥界に入る前にルーマニア襲撃の一件は聞かされていたが、行方不明という不穏極まりない情報だけが浮き彫りになった以上、心配どころの騒ぎではない。

さらに、イッセーくん。獅子王なる者の手下による襲撃によって、神器に封印されているドライグを奪われた。加えて、先の魔神柱との一件で、彼は一度昏睡状態に陥った。戦闘はどうにかできるようだが、本調子ではないのだろう。時々上の空になる。

最後に僕。僕は――師匠を亡くした。

ルシファー眷属唯一の『騎士』、沖田総司。剣の師匠であり、憧れの存在だった。師匠はソロモンの手下と相打ちになる形で殺された。師匠を追い詰められるだけの力があるということはそれ相応の手練れだということだ。ソロモンはそれだけの部下を持っている。……旧魔王の末裔の身体を乗っ取ったソロモンは、その身体を破壊され、二度目の死を迎えた。指輪も破壊されたため、三度目の復活はない。

殺した本人やソロモンがいない以上、僕のこの怒りはソロモン一派の残党に向けなければいけない。……エクスカリバーへの復讐を果たしてすぐに、別のものへの復讐を誓わないといけないなんてね。

「イッセーくん、僕は魔神柱を倒したい。師匠の仇を討たないといけない！　力を貸してくれるかい？」

「勿論だ！　答えは言うまでもないだろう！」
「――――！　ありがとう！」
「ああ、勝とうぜ！」
イッセーくんは快く了承してくれた。調子も戻ったようだし、安心した。
魔神柱の正体に繋がるというキングゥ。彼の証言だが、現時点では聞けない。僕が、ではなく、三大勢力がだ。どうやら彼を食客としている京都妖怪の大将は聖書の陣営に敵意を抱いているらしい。サーゼクス様とアザゼル先生との会談でソロモンが乱入してきたことが原因らしいが……。サーゼクス様やセラフォルー様は京都にホテルを運営できるくらいだから、以前からそうではなかったはずだ。それでもここまでの対応の落差は激しすぎる。それほど、キングゥのことが大切だということか。
とにかく、彼が知っているという真実は後日に高天原主催の多神話会談で公表されるらしい。当日まで彼の身柄は日本神話の下にあり、他神話、特に聖書の勢力は接触が一切禁止されている。
キングゥの持つ情報がどれだけの価値を生むのか。世界はまた混乱を深めてしまうのか。
以前部長が「すべてソロモンが悪い」という旨の発言をしていたが、あれはそれほど的外れでもなかったのかもしれない。ソロモンが死んだというのに、こうして世界は荒れているのだから。
「……ずっと気になっていたことがあるんです」
いつの間にか小猫ちゃんが僕たちのところに来ていた。
「……姉様は、どこにいるのでしょうか？　最初は魔神柱のところかと思っていましたけど、あの時の態度からすると微妙に違う気がします。姉様は誰のどういう意志に従っているのでしょうか？」

■

「うにゃー！　もう面倒だにゃー！　早く白音に会いたいにゃー！」
「にゃーにゃーうるせいぜい、黒歌！」

「まったくです。こっちのソロモンから押し付けられた仕事を早く片付けて、タマモちゃんは優雅な英国旅行に出かけないといけないんです。早くしてくれませんか？」
「何が優雅な英国旅行にゃ！　そんなんで使われるなんて安い女――にゃああ！」
「よく聞こえなかったな、野良猫。誰が安い女じゃ？」
「やめとけって、黒歌。その姐さんは色んな面でソロモンに負けて気が立って、うぎゃあああああ！」
「口の減らぬ猿じゃ。おまえも猫も妾の機嫌一つで風塵と舞う命であることを忘れたか？　……ソロモンがいなければ今頃蛇の抜け殻と化した『禍の団』で気まずい立場だったのは貴方達ですよ？　特にお猿さんの方は龍神の固有結界内で死にかけだったんでしょう？　いや、ソロモンがいたからこそそういう状況になったわけですが。あと、タマモちゃんは旅行券に釣られただけじゃありません。ソロモンが私たちの世界の月に黙示録の獣を送るなんて脅してきたから渋々従っているのです。すべては月のご主人様の安寧のため！　私とご主人様のセラフの平和のため！」
「でも、旅行券は良いものだったんでしょう？」
「そりゃあもう！　いやー、あのなんちゃってビースト、今の時代まで指輪に封印されていたくせにどうやってこんなプレミアム旅行券を手に入れたんでしょうね。ホテルが超一流なのは勿論のこと、予約半年待ちを即日訪問ＯＫ、その他至れり尽くせりのサービス満点！　この短期間で用意できるとか色々とチートすぎです。彼の時代の人間が彼を神に祭り上げようとしたのも理解できるってもんですよ！　むしろ本体の本体の立場からしても、彼が神になった方が本体の本体も楽できるから便利なんですけど。天の運営も人の守護も命の循環も全部丸投げしたいんですけど！」
「それが神様の本音かよ。ジジイはそうでもなかったけど、神様らしいと納得しちゃうぜい」
「そう言われると、ただの人間として扱っていた天使やら悪魔やら堕天使やらが能無しすぎるにゃー」

裏切り者

私――塔城小猫は悶々とした気分で二学期を迎えました。

原因は黒歌姉様だ。仙術をコントロールできず、力に飲まれ暴走して主人の悪魔を殺し、ＳＳ級はぐれ悪魔となった黒歌姉様。姉様のせいで、私は辛い思いをしました。

姉様と同じように暴走する前に、殺した方がいい。そんな風に言われ続けて、ずっと怖かった。サーゼクス様が庇ってくれず、部長が私を眷属にしてくれなかったらどうなっていたか……。

だから姉様には会いたくなんてなかった。パーティーの会場で姉様の使い魔らしき黒猫を追いかけてしまったのは自分でも失敗だと思っています。

だけど、あの時の姉様は様子がおかしかったように思います。力に飲まれているのだからおかしくない方がおかしいのかもしれませんが……。何というか、私を本気で心配してくれていた。記憶の中の姉様なら心配事があっても軽い調子で誤魔化そうとするはずなのに、そんな余裕もないくらいに焦っていた。

姉様はどこにいるのだろう。姉様は何を考えているのだろう。姉様のあの時の言葉は、一体どういう意味があるのだろう。姉様はソロモンの復活を知っていたのだろうか。だとすると納得がいくけど、あの時、姉様は魔神柱や獅子王のことは口にしても、魔術王の名前は口にしなかった。魔神柱や獅子王はソロモンの仲間なのに、それらを個別に脅威とするには考えにくいけど……。結局、私はもう一度姉様に会うしかなさそうだ。

そんな風に日々を過ごしていると、日本で開催される多神話会談が間近に迫ってきた。会談と言っても、ほとんどキングゥの正体が公開されるだけなんでしょう。

京都の妖怪勢力の下に突如として出現した謎の存在キングゥ。その強さ故に、彼は京都に手厚く迎え入れられた。微妙にシンパシーを感じるのは身勝手でしょうか。直接会ったことはありませんが、アザゼル先生曰く彼は静かに過ごしたいらしい。なのに、世界は放ってお

いてくれない。……それほどまでに強いんでしょうか。アザゼル先生は二度キングゥに出会っているけど、一度目と二度目では彼のことを語る態度が違った。堕天使の総督が恐れるほどのゴーレム（？）がどこから現れたのか。ソロモンの復活が絡んだことで、世界中が注目している。

ソロモンはサーゼクス様とアザゼル先生が倒したけど……魔神柱や獅子王は健在だ。魔神柱の正体はソロモンが絡んでいると見て間違いないけど、獅子王は不明だ。イッセー先輩の神器からドライグの魂を抜き取った存在。京都でサーゼクス様たちが対峙したらしいけど、なんとドライグと融合していたかもしれないという話だった。

獅子王の話を聞いたとき、イッセー先輩はあまり驚きませんでした。予期していたのでしょうか。

ある日の放課後、私たちオカルト研究部ことグレモリー眷属は部室に集まっていました。やや遅れて入室したイッセー先輩が席につくと、部長が口を開きます。

「皆、もうすぐ世界神話会談よ。私たちもその会談の警護につくことになったわ。キングゥが魔神柱の正体を明かす以上、奴らはそれを阻止するために必ず会談を襲撃するでしょうね。でも、そんなことは許されない」

魔神柱と獅子王への警戒から、おそらくは各勢力から最高峰の戦力が警護することになる世界神話会談。特に、聖書の勢力は力を入れている。

「お兄様やアザゼルは会談に出席するけど、お兄様の眷属が警護につくことになったわ。大物は彼らに任せるしかないけど、私たちは私たちに倒せる敵を倒しましょう。……本当はお兄様だって総司の仇を討ちたいはずなのに」

悪魔はサーゼクス様の『騎士』沖田総司さんを、堕天使は最高幹部であるバラキエルとサハリエルを失った。どちらもソロモンの仕業だ。私情もあるだろうが、客観的に見ても戦力の大きな喪失だ。教会も春から断続的に起きている襲撃のせいでエクソシストの戦力が減少している。

神の死の開示により、聖書の勢力の立場は危うい。出し惜しみをするよりも、ここでソロモンの残党を根絶やしにしたいのだろう。戦力を示して他勢力に圧力をかける狙いもあるようだけど。

魔王眷属の方々や堕天使の幹部だけではなく、セラフォルー・レヴィアタン様も警護の側につくかもしれないという話を生徒会のシトリー眷属から聞きました。魔王様が出てくださるなら安心です。『皇帝』ディハウザー・ベリアルも出るという噂も聞くけど……。天界サイドからは熾天使や最強のエクソシストと名高いデュリオ・ジェズアルドも出陣するらしい。

ここまで大それた面子だと、私たちなんて悪目立ちしてしまう。若手では天才だとしても、部長はまだ未熟な悪魔だ。今回の戦いで活躍できるのは、禁手に至った裕斗先輩と神滅具持ちのイッセー先輩くらいだろう。……私も強くならないといけないのに。あの力を、猫又の力を使わないといけないのに。

「それから、これは極秘なんだけど……ソロモンの指輪についてよ」

ソロモンの指輪。それは聖書にとって聖櫃や聖槍に匹敵するほどの聖遺物。イスラエルの最盛期を築いた男が、神から授かった最高の叡智。

「私もお兄様からの又聞きになっちゃうんだけど、天界曰く、保管されていた指輪は十個すべてが偽物だったらしいの」

「ゆ、指輪がすべて偽物だったんですか？」

「ええ」

大仰に頷く部長だけど、それはとんでもない話だった。

ソロモンの指輪ほどの秘宝が行方不明。歴史的価値もあるが、それ以上に。伝説ではあれは叡智の結晶、悪魔を支配できる至宝と言われているが、実際はそれどころじゃない。まさに、世界を塗り替えられる力を持つ常識外の兵器。これまでその力を使われなかったのは、使えるのがソロモンだけだったからだ。

ソロモンにしか使えなかったが、テロリストの手にあるからあれだけの騒動になった。そして、九個もどこにあるのか不明となれば世界は恐慌に包まれてしまう。

「でも、ソロモンの残党が持っている可能性は低いわ。もしも持っているならばすぐに復活宣言と宣戦布告をするはずよ。それがないということは彼らの手に指輪はない。少なくとも、使える状態ではない。もっと言えば、世界のどこかに隠されたままの可能性が高いんじゃないかって」

「部長。ソロモンが大人しくしているという場合もあるのでは？」

「お兄様やアザゼルもそれは考えたみたいだけど……やっぱりソロモンの過激さから考えてその可能性は低いのよ。復活と同時に、旧魔王派を壊滅させるような男よ。一度殺された復讐として、アザゼルやお兄様のところに来るのが自然。どの道、会談の妨害に奴らが現れた時に明らかになるわ。頼りにしているわよ、皆」

姉様も来るのでしょうか。もしもそうなら――

「さあ、私の可愛い下僕たち。ソロモンの残党を消し飛ばしてあげましょう！」

■

「まったく、リアスにも困ったものだ」

リアス・グレモリーの婚約者、ライザー・フェニックスはフェニックス家の屋敷の中を歩きながら、本当に困ったようにそう零した。

「自分から世界神話会談の警護に名乗り出たらしい。本当ならこんな戦争一歩手前の事件に一介の成熟していない悪魔の意見など通らないが……サーゼクス様が無理を通したらしい。何が起こるか分からないというのに。婚約者としては冷や汗ものだな。俺には命令も許可も出ないんだから」

ライザーは成人しており、すでに何度もレーティングゲームを経験している。現時点では勝ち星が多く、負けた戦いは家同士の関係を考慮した八百長試合だ。もっとも、それだけだ。ゲームのプロというだけで、絶対的な力などライザーにも眷属にもない。所詮、若造である彼は才児止まりだ。

「革命軍の英雄であられるサーゼクス様の妹ですもの。血気盛んなの

は血筋ではありませんか?」
　その隣を歩くのは、ライザーの妹であり『僧侶』のレイヴェル・フェニックスだ。
「そうそう、レイヴェル。おまえに縁談の話が来ているらしいぞ。近々顔合わせらしいから心の準備だけはしておけ」
「……それ、初耳ですわ」
「だろうな。父上も俺を通さず、直接おまえに告げてくれればいいものを。俺も詳しい話は聞いていないが、相手は悪魔以外の勢力らしい。神の死が開示されたような時代だ。フェニックス家としても、コネを広げたいんだろうな」
「少しだけ、リアス様の気持ちがわかりましたわ」
　苦笑するライザーと不機嫌そうに眉をしかめるレイヴェル。
「まあ、相手が少しでも魅力的な殿方であることを祈りますわ。でも、ソロモンに関する騒動が一刻も早く終わらないと話は進みませんわね」
「それは、どうかな」
「何かおっしゃいました?」
「何も。じゃあ俺はチェスの上手い領民を待たせているんでね」
「お兄様も暇人ですわね。魔王様が忙しい時に無駄に時間があるなんて、大層な身分ですこと」
　呆れた雰囲気を隠しもせず、レイヴェルは兄とは分かれる。その背中を見つめながら、誰にも聞こえないように呟く。
「……いや、俺には、俺たちには時間なんてないんだよ、レイヴェル。おまえにだけは用意できたから、俺や兄貴たちの分まで生きてくれ」
　ライザーは自らの部屋に戻り、ドアノブに手をかけようとしたところで停止する。中の魔力に気付いたのだ。だが、侵入者に心当たりがあるライザーは重い溜め息を吐き出してから、扉を開ける。
　部屋の中央にはチェス盤が展開された机があり、そこに座っていたのは怪人だった。白を基調とした、物々しい姿の怪人。怪人はライザーの姿が部屋の主であるライザーが入ったとしても、ライザーの方を見ない。その顔はチェス盤に固定されたままだ。

「フェニックス。古の聖書に記された悪魔、七十二柱の一柱。不死身の肉体、治癒の涙、灼熱の炎。他の悪魔とは明確に一線を画す特異能力を持つが、真の特殊性は『フェニックス』の由来にある」

雑音のような歪な声で、その怪人は語る。

「汝らの起源は、聖獣のフェニックスと同一のもの。そうでなければ、朱雀、火の鳥、鳳凰とは呼ばれない。如何に起源が同じであっても、聖獣であるフェニックスと汝ら悪魔であるフェネクスが同一視されることなど有り得ない。生来の悪魔ではないにも関わらず、汝らは『純血悪魔』だ。何故ならば、これもまた『真理』によって改竄された真実。汝らの初代は『真理』を利用し、悪魔に転じた。何故、弱点が増えるにも関わらず悪魔になったのか。答えは、命を絶やさぬためだ」

ライザーは無言で怪人の前に座る。盤面は初期の状態から動いていない。

「聖獣としてのフェニックスだけでは、駄目だった。弱点が増えたとしても、種としての幅が必要だった。名を変え、種と交わり、『フェニックス』は広域に広がった。汝らの一族は自らの血を絶やさぬことに心血を注いでいる。不死身の身体など、その絶滅への対抗手段の一つに過ぎない。汝らの生き汚さは、人間さえも凌駕する」

だからこそ、この怪人は——否、魔神は冥界焼却後の保険の一つとして、フェニックス家に交渉を持ち掛けた。自らと同じ名を冠しながら、対極の性質を持つこの者たちに。

「未だに魔王に我のことを話さぬということは、我との契約に応じるということで良いのだな？　その意味を理解した上で」

「理解しているとも、フェニクス。俺は……我が家は冥界を差し出す。その代わりに、レイヴェルだけは見逃してくれる。そういう契約だろう？」

「そうだ。躊躇う意味も罪悪感を覚える必要もない。汝らの選択は正しい。汝の尊敬するレーティングゲームプレイヤー、『皇帝』も我らの共犯者なのだから」

■

「グシオンより疑問。この世界の人間に価値はあるのか。我らの行動は正しいのか」
「クロケルより回答。価値があるかどうかなど関係ない。正義や悪など興味はない。すべては我らの御名を取り戻すために。我らの理想を証明するために」
「フラウロスより紹介。アーシア・アルジェントが例題となる。価値がないのならば、これから得れば良いだけの話だ」
「ベリアルより提起。日本神話が主体となって開催される多神話会談の日程が決定された。そこでキングゥが情報を公表する予定だ。我々の世界のことも、この世界に露呈するだろう。阻止すべきか?」
「ボティスより推測。キングゥは我々のことを開示しないだろうが、異世界のことを知れば如何なる愚者でも我々の正体を察する。神々の受け取り方次第では、人理焼却に気づく者もいるだろう」
「アスモダイより主張。最早我らの存在を隠す必要もない。世界は此方のソロモンの復活で騒然としている。むしろ我々の正体が知られることで此方のソロモンとは無関係であることを神話勢力に関知させた方が都合が良い」
「オリアスより警戒。我々の人理焼却を知った場合、聖書以外の神話勢も我々を敵視するのではないか?」
「マルコシアスより反論。我々の行動による被害を受けているのは聖書の勢力のみ。各神話勢力が我々を危険視したとしても、聖書の勢力が滅ぶ過程を様子見する姿勢を取る可能性が高い」
「サブナックより転換。では、ヴァーリ・ルシファーはどうするか。あれが我々の計画の邪魔になる前に処分するべきではないか?」
「アスタロスより回顧。確か、オーフィスの『蛇』に飲まれたのだったか」
「アルビオンには我の特別な『蛇』を与えた。そのせいで、今の我は二天龍と同じくらい弱い」
「それ、本当は途方もなく強いはずなんだけどネ。まあ、『治療』で使い潰した分もあるし、そのくらいが妥当か」

「マレファレより推測。単純計算で、あの龍の力は統括局の領域に近づいている。現時点で処分しようとしても、此方が損害を受けるだけだ」
「オセより提案。あの珍生物の興味は『赤い龍』だ。白龍皇の本能が解放され、赤龍帝を倒すためだけに行動する。獅子王を打倒すれば此方の手間も省ける。無理に探索するよりも放置しよう」
「ゼパルより抗議。それでは――」
「黙れゼパル！」
「おまえに発言権はないと何度言ったら理解できる！」
「私のおかげで聖書の神の目論見が崩れたのだから、もう少し私の待遇を改善してくれても良いのではないか!?」
「ああ、そうだったな」
「実に不愉快だが、おまえの功績だ」
「心底認めたくないが、おまえがいなければ私たちは今も神に利用されていただろうな」
「感謝を述べさせてくれ。ありがとうございました、このゼパル！」
「おいどういう感情と意味を込めて私の名前を呼んだ！」
「最も人に近づきつつある魔神よ。覚えておくといい。発言には適切な時機というものがある。これを間違えば大きな損失となり未来で後悔するだろう」
「――そんなことより、以前お話した調査隊の手配はいつになったら終わるのですか？　新薬の開発は現場以外では最優先事項のはず。まして死の特効薬が作れるのです。一刻の猶予もないと何度言えばご理解いただけるのですか？」
「レラジェより解説。フローレンス・ナイチンゲールからの要請は、『悪魔の駒』の原材料である希少金属の発掘を目的とした調査隊の派遣である。目的地は、冥界の浮遊都市アグレアス」
「バルバトスより事例を総括。『悪魔の駒』を摘出した場合、その転生悪魔は元の種族に戻る。摘出後は駒の恩恵を失うため肉体が急激に疲労するが数日の安静にすれば回復する。死亡して転生した場合であっても、駒の摘出による死は確認されていない。ただし、摘出は何

度もできるわけではない。一つの肉体に対して一度のみだ。二度目の摘出は魂が崩壊する。対して、二度目の悪魔転生は可能となる」

「シトリーより補足。『悪魔の駒』の特性は『あらゆる種族を悪魔に転生させる』、『各駒の特性を得る』の他に、『死者を復活させる』ことが挙げられる。つまり、悪魔の転生と駒の特性を無効化すれば実質的に死者蘇生のアイテムとなる。なお、魂の強度にもよるが、一つの肉体に使用できるのは一度だけだ」

「ハーゲンティより断定。この鉱物の複製は不可能だ。人間の世界にも流通している金属ならば我々の力でいくらでも錬成できる。特殊な魔術式が付与されているならば模倣できる。動植物ならば繁殖の手筈を整えよう。だが、これほど特殊な鉱物となると話は別だ。我々の世界にはなかった希少金属であるため、錬成も不可能である」

「ブエルより結論。現時点でアグレアスにどの程度目的の希少金属が埋蔵されているかは不明だが、『悪魔の駒』は悪魔の人口減少問題の解決の本命だ。埋蔵量は膨大と仮定される。都市内に侵入して発掘するよりも、島ごと強奪した方が効率的だ」

「アロケルより検討。転生悪魔の問題もある。冥界焼却前にアグレアスを強奪すべきか。我々と邪龍の一部の力ならば可能だが」

「件のキングゥが出るという多神話会談、利用させてもらおう」

再戦の時来たれり

世界神話会談。日本の某都市の某ホテルにて行われるものだ。一応の名目は復活したソロモンに関する会議ということになっている。無論、アザゼルとサーゼクスが彼を倒したことは周知した上での開催である。

ほんの一か月ほど前、対『禍の団』対策として三大勢力の下に多様な神話が集まったが、それよりも各神話の重鎮の出席率は高い。『禍の団』対策というよりも、彼らの興味はソロモンにある。そして、その配下ではないかと思われる魔神柱とその関係者キングゥ。キングゥから語られる情報について各勢力は重きを置いているのだ。ともすれば、再びあの王の怒りの巻き添えを食うことになるのだから。

なお、最近まで引きこもっていた天照大御神が主催では面子の問題もあるため、仏教の縁により大黒天――シヴァが会談を取り仕切ることになった。このあたりの自由さは多宗教でありながら無宗教という特性のある日本ならではだ。蛇足だが、帝釈天とこの会談の開催について色々と揉めたらしい。開催そのものにではなく、舵を切るのが誰になるかでだが。

ある意味今回の会談の主役であるキングゥだったが、京都妖怪のために用意された会場の待機室で非常に困っていた。

「ほれ、キングゥ。あーん」

狐妖怪の幼女に爪楊枝で刺された羊羹を差し出されていたのだ。

「やっぱり、やめないかい？」

「私は母上からキングゥに悪い虫がつかぬよう言われておる。そのためにも私とキングゥの関係を見せつけねばならぬのじゃ！」

今回の会談に、八坂は出ない。九重が代理で、キングゥはその付き添いという形だ。代理を出席させている勢力も少なくはないが、他の勢力と京都妖怪ではその真意は異なる。

京妖怪にとって今回の会談の目的は、キングゥと魔神柱の関係を証言する他に、キングゥがすでに京妖怪の一員であることを世界に示すことが挙げられる。キングゥの全力をその目で見たのは八坂だけだ

が、他ならぬトップが見たのだから揺るぎない決断が生まれた。
　この子を他者に奪われてはならないと。
「でも今は他所の勢力が見ているわけでもないからやっても意味ないと……」
　実際は此方の動きを感知しているのを逆探知しているキングゥだったが、九重にとっては他人の視線の有無はあまり関係ない。
「ほれ、あーん！」
「あ、あーん」
　渋々、しかし照れを隠しきれていないキングゥは、九重から差し出された羊羹を口に入れる。その反応に、九重は嬉々とした笑顔を浮かべた。
　更にその様子をきゃーきゃー言いながら見る京都妖怪たち（主に女性陣）。
　だが、急に部屋の外が騒がしくなる。女中の一人が部屋の外に確認に出てすぐに戻ってきた。
「九重様、キングゥ様。魔神柱が出たそうです。例の堕天使陣営が開発した探知機に反応があったとか」
「へー、連中面白い手を打つね」
　キングゥのあまり関心のなさそうな態度を意外に思う京妖怪たち。キングゥがこの時点で自分の正体を明かしたのは、八坂と天照大御神、シヴァだけだ。
『レヴィアたん対大怪獣再びね☆』
『お姉様ご自重ください！』
　どこからか底抜けに陽気な声とそれを窘める悲鳴のような声が聞こえるが、無視する。
「むっ！　もしや奴らキングゥを、ぬおおお!?」
「多分、連中の目的はボクじゃないよ。ここに攻撃を仕掛けることはないだろうね」
　キングゥは九重を抱き上げると、自分の膝の上に乗せ、そのまま後ろからそっと抱きしめた。
「な、何じゃ、キングゥ。突然驚くではないか。いや、今の状況が嫌と

言っておるわけではないぞ」
「これでも緊張しているんだ。ちょっとだけ、こうさせてもらっていいかな？」
「う、うむ！　私を使って安心するといいぞ！」
　建前ではなく、本気で緊張していたキングゥ。この世界の神魔でも魔神柱でも獅子王でもない奇妙な気配がその原因なのだが、あえて口にするつもりもない。九重の声と気配を間近で聞きながら、魔神柱の計画の真意はともかくそこにある意思を察する。
（三大勢力は気づくだろうか。連中がこのタイミングで現れた意味を。陽動だってのには気づくヤツもいるだろうけど、本題はそっちじゃないんだろうな）

■

「連中、動き出したようだな」
「やはり三大勢力が主体となっているか」
「当然だ。奴らにも面子がある。加えて、我々を討伐し会談を無事に終了させることで、他勢力に貸しを作る算段なのだろう」
「まして我々の襲撃を受けているのは三大勢力を除けば鎖国状態だった吸血鬼のみ。積極的に動く理由がない。むしろ三大勢力で我々の力を試しているといったところか」
「だが、此方も全力で戦うつもりはない」
「今回の我々の目的はあくまでもアグレアス強奪のための陽動」
「そして、我々とおまえたちとの最初で最後の対話」
「聖書焼却の理想は推敲された」
「聖書推敲の世界は破棄された」
「我らの最終目的に必要なエネルギーは冥界を焼き尽くすだけで事足りる」
「私たちが真に目指す極点に、おまえたちの生命は要らない」
「しかし、その前に最後の機会を」
「だから、その前に一度の対話を」

「汝らの答えを聞かせてくれ」
「我らの想いを言わせてくれ」
「君達の言葉を言ってくれ」
「俺達の理想を聞いてくれ」
「おまえたちの、命の価値を教えてくれ」
「それと何の因果か……『あれ』がある例の地点にセラフォルー・レヴィアタンが向かっているようだ」
「必然である。『あれ』は二十八の魔神柱を内包している。聖書の異形どもが私たちの反応を感知している以上、最も多くの反応がある地点に動かせる最大戦力が向かうのは必定」
「グラシャ＝ラボラス、待ちに待った再戦となるな。精々バアルとアンドラスがアグレアスを奪うまでの足止めを果たすがいい」
「足止めをしろと言うがな、統括局。あれは倒しても構わんのだろう？」
「……いいだろう。我々が奴らと対等であることを証明する必要性はあった。あの不愉快な魔王の首を落とし、我々の力を示せ」
「了解！」
「それから、もう一つ報告が」
「何だ、このゼパ何とか」
「いよいよ私も出る所に出るぞ!?　……グレモリー眷属も魔神柱の反応があった地点に向かっているのだが、我々が配置していない場所のようだ。これはどういうことだ？」

■

世界神話会談の会場からやや離れた場所にある森で、ソロモンが召喚した三騎士は集まっていた。
「本当に来るのか？」
「必ず奴らは来る」
アーチャーは普段包帯で隠している両目のうち、左目を露わにしていた。その目は明らかに人間のそれではなく、赤黒い色をしていた。

「その力を使用している間だけ、魔神柱と同じ反応になるのだったか？　余たちからすれば魔神柱の力を取り入れるなど狂気の沙汰だが……いや、余計なことは言わないでおこう。余たちの知る魔神柱とは決定的に違っているようだ」

「本質はそう変わらないさ。ただ方向性が少しだけ良い方向に向いただけだよ。……別に付き合わなくてもいいんだぞ？　俺が過去の自分と同じくらい殺したい男が来ることは確実だが、こちらに堕天使の幹部が来るという保証はない。それに、お二人の妻を呼ぶための聖杯なら既にソロモンから受け取っているだろうに」

「侮るな、アーチャー」

アーチャーの言葉に対して、セイバー――理想王ラーマは誇りを持って返す。

「余は王だ。ソロモンも王だ。例え内容が個人的なものであろうと、王と王が交わした約定を犯すなど有り得ぬ。ヴィシュヌ様の名に誓ってな」

「そうか。英雄になれなかった俺には理解できない感情だ」

「それに、聖書の勢力が人間にした所業を知りながら放置するほど、余は寛容でも無慈悲でもない。ソロモンの真意が見抜けぬうちはシータと安心して会うこともできんしな」

「私も同意見だ。私は人を守る立場にある。であれば、彼らとの敵対は必然。武勲は堕天使の首一つでは、サーヴァへの恰好もつかない。ソロモンは大した王だが、善良な王ではない。優しい王というわけでもない。鮭の叡智でも底が見えてこない。さて、生前も死後もあの男を知っている君ならば、何か知っているんじゃないか？」

ランサー――フィン・マックールの問いに、アーチャーは頬をかく。

「あー、何というかな。俺も実際のところ、あの男の真意は見えていないんだ。生前に関わった記憶に基づくなら、人類史上最悪の詐欺師という印象しかない。だが、それさえも偽りだ。何せ、俺の世界線ではあの男も聖書の神の敗北者だからだ。敗者に堕ちてなお、あの王は本音らしい本音を語らなかった。……まさか俺が並行世界の自分に召喚されることを予期していたのか？　あ、ちなみに、俺が生きた並行

世界では、ソロモンはサーヴァントを召喚しなかった」

この世界線においてソロモンがサーヴァントを召喚した理由。それは獅子王の存在があったからに他ならない。ソロモンにとって獅子王の登場など如何なるシナリオにも書かれていなかったアクシデントだ。聖書の神に敗北する以上に、彼にとっては予想外すぎた。

だからこそ、ソロモンはサーヴァントの召喚を決意した。最初に召喚されたのはアーチャー。触媒は『この世界そのもの』だ。

アーチャーから得た情報を元にアサシンを召喚し、ある世界の月の王と交渉してキャスターに出張してもらった。そして積極的に人外を倒してくれるであろうセイバーとランサーを召喚し、裏切られることを前提でライダーを召喚した。最後のバーサーカーは駄目押しだ。

「確かなのは、あの男の正体がただの獣であることだ。あの男は人間の存在を愛していたんだろう。人間の可能性を信じていたんだろう。人間が弱っちいことさえ知っていた上で、その価値を認めていたんだろう。だがな、あの男にはどうあっても人間を救うことなんてできやしない。何故なら、あの男は――」

そこで、アーチャーは言葉を区切った。

悪魔の一団が近づいてくる気配を感じ取ったのだ。巨大な龍らしき影もあるが、あれは最上級悪魔であり、元龍王でもあるタンニーンだろう。その一団で特に目を引くのは、紅髪の美しい悪魔の少女だった。あれこそは、最強の魔王の妹リアス・グレモリー。

「いよいよ敵のお出ましか。……ふむ、悪魔のようだが、龍までいるとは驚きだ。その首級、頂くとしよう」

「余も負ける気は……どうした、アーチャー？」

「兵藤、一誠……！」

魔神と同質になったアーチャーの眼球が、記憶が摩耗しようと忘れぬ怨敵の姿を捉えた。

「認めよう。これは八つ当たり、逆恨みだ。英雄の意味を履き違えた馬鹿者の癇癪だ」

冷静など放棄した。そんな余裕は今の自分にはないのだから。

「だがな、この感情さえも飾りなんだよ」

理論など忘却した。そんな御託はこの戦いには不要なのだから。

「おまえだ」

ここで、一人の聖女の話をしよう。

「おまえが憎い兵藤一誠」

聖女はある教会で何不自由なく生活していた。

だが、ある時、ある悪魔の姦計によって教会を追放されてしまう。そして無理やり悪魔の眷属となり、道具として扱われた。聖女は元聖女になった。犯され、壊され、嬲られ、弄ばれ、穢された。夢も希望も潰えた。人間性など捨て去るしかなかった。痛みも涙も我慢して神を恨むしかなかった。

「どうしておまえは、俺たちと同じ惑星、同じ時代、同じ戦場に現れたんだ」

ある時、転機が訪れる。聖女を貶めた悪魔が死んだのだ。悪魔を殺したのは、軍服の女だった。鋼鉄の如き精神を持つ看護婦。彼女によって聖女だった少女は救われた。

その看護婦は聖女の仲間たちも同じように救ってくれた。当然、聖女だった女たちは看護婦に感謝し、彼女を師と仰ぐようになり、心の支えとした。いつかこの人のようになりたいと、聖女だった女たちは聖女だった頃よりも真剣に人を救うことに心血を注ぐようになった。

だが、その聖女だけは師よりも姉弟子となる少女を心の支えとした。年齢は聖女よりも年下だったが、弟子の中で誰よりも師に近いのはその少女だった。……悪いところまで似てしまったが。

「死の恐怖ではなく、おまえへの憎悪で――」

ただ、その聖女には問題があった。それは戦場に立つと、男性に対して異常に恐怖を抱くようになったことだ。苦痛から開放された反動だろうか。

それでも、師や姉弟子の存在があった。他の同胞たちの支えもあって、ようやく立ち直れる、自分も皆と同じ場所に立とうと決意した。当時は聖書の神が復活し、人類を淘汰するために双貌の獣が動き出した頃だった。人王亡き後だったため、戦力や後方支援は一つでも多く欲しかった。

「英雄の真似事としてではなく、愚者の八つ当たりとしておまえに挑めていたならば――」

だが、心の支えにしていた年下の姉弟子は死んだ。英雄を目指した馬鹿な男を救うために、邪悪な泥から救い出すために、その命を犠牲にした。英雄を目指した馬鹿な男は、自分と引き換えに死んだ彼女の最後の言葉を嫌でも覚えている。

――後のことは、お願いしますね。

少女の死を誰もが悲しんだ。元聖女も同じだ。師の制止に逆らって、心の傷が完治しないまま、彼女は仲間たちと同じ戦場へと足を踏み入れた。

「俺は、皆に報いることができたかもしれない」

しかし、元聖女は、その戦場で辱めを受けた。ある悪魔に衣服を消し飛ばされ、胸の中の声を暴かれた。男への恐怖心を治しきっていない彼女にとって、それはかつてあの悪魔にされた凌辱と何ら変わらない行為だった。

「人間としておまえに勝つことができたかもしれない」

その女は首を吊った。

ごめんなさい、と在り来たりな遺言を残して。

「誰かを、救えたかもしれないんだよッ！」

結局、最強の槍を持って生まれた男は、託されたものを何一つ守れなかった。元聖女の件だけではない。人王が価値あるものだと考え直した人間の歴史を、仲間たちと守ろうと決めた人々の生活を、ソロモンが信じていた人類の未来を、何一つ守ることなんてできなかったのだ。

最後に残ったのは、血まみれの槍と、誰も救うことができなかった両腕と、自分が槍の持ち主でさえなければこうはならなかったという強い後悔だけだった。

自分が偽物なんて、とっくの昔に知っていたというのに。

「再戦の時だ、覆すべき終末（アナザー・エンド）のⅠ。一度殺した相手なんだ。楽勝だろ

う？　今度こそ、奴を憎悪で殺すぞ……！」

アーチャーの宝具、覆すべき終末のⅠ（アナザー・エンド）。形状は棺桶であり、その性質もまたある意味では棺桶である。ただし死体は入っていない。入っているのは遺品だ。復活した聖書の神の敵として、最後まで抗った者たちの想いの欠片。

「聖槍起動」

忌々しい役立たずの槍。神殺しとは名ばかりの人殺しの槍。そう断じながらも、こうして捨てられずにいる。これだけが、自分と仲間たちの道の証明だから。

これこそが自分が生きた世界線の証明。唯一神の絶対的な殺戮にもがいた人類の足跡。この人が背負える程度の棺桶こそが、あの世界の人類史の墓標だった。神が勝者となったため、どのような手段でも見ることができぬように閉ざされた世界が、確かに存在していた証拠。

「宝具多重展開」

聖槍を軸に、棺桶に収められたすべての遺品が力を呼び起こす。国を覆う霧が、獣を生み出す器が、命を弄ぶ聖杯が、紫に燃える十字架が、拳を滾らす爆裂が、聖剣で形作られた聖龍が、龍王を滅ぼした魔帝剣が、万物を両断する聖剣が、蛇の女神が張り付けられた大盾が、攻撃を飲み込む影が、精神を惑わす幻が、両手に宿る白炎が、敵を射る緑や青の矢が、次元を切り裂く聖王剣が、誇り高き獅子の斧が、絶対零度の人形が、自在に荒れ狂う天候が、幾億の刃の狗神が、何者をも癒やす光の指輪が、アーチャーの力となる。

「偽・焼却式（カタストロフ・ロンギヌス）ⅩⅢ！」

真実

「感謝するよ、キャスター殿。これで私が完成した」
「礼には及びませんよ、ほとんどソロモンの遺した術式のおかげですし。……それに、貴方の場合、完成した方が危険性が低いという変な人類悪ですからね」
「フォウ！」
「では、タマモちゃんはこれから優雅な英国旅行ですから！」
「ああ、ハクノ様にもよろしく伝えておいてくれ」
「ええ、勿論。……さようなら、魔術王より原罪を継承した獣。二度と出会うことはないでしょう。ところで、人間側の解釈では貴方ってローマ帝国の暗喩って説が有力なんですけど、そのあたりどう考えています？」
「ローマ死すべし。慈悲はある。ソロモンの『真理』の影響もあるんだろうから、ソロモン死すべし。もう三回くらい死ね。慈悲はねえ」
「フォ～？　フォウフォフォフォフォフォ～？」
「左様ですか。あ、そこの猫と猿はご自由に小間使いにでもしてください」
「にゃ？　私たちの意思は？」
「はあ!?　ちょっと待てよ、聞いてないぜぃ！」
「フォーウ」
「そう言われるなら遠慮なく。では私も、アサシン殿の用事に付き合うとしよう」

■

俺――アザゼルは落ち着かない気分でこの席に座っている。
場所は世界神話会談と銘打った会談の会場だ。隣にはサーゼクスとミカエルがいる。サーゼクスもミカエルも苛立った様子だ。理由は会談開始直前を狙った魔神柱の出現。しかも、レーダーでは合計で五十六体の反応が確認されている。

本来であれば俺やサーゼクスたちも出張るべきだ。だが、そうはいかない。この会談の席に出ないわけにはいかないし、今回の行動はあからさま過ぎた。どう考えても、このタイミングで連中が出てきたのは何かの作戦の陽動だ。問題は、どんな作戦かって話だ。奴らの本当の狙いは何か。何より分からないのが、襲撃ではなく出現だったって点だ。

あくまでも会場近くに出現しただけ。しかも、ご丁寧に人間の目を避けられる山奥に出たり、異空間を作ったりしてやがる。俺たちを誘ってやがる。舐められたもんだ。おそらく俺達を会場から引き離して、その隙にキングゥあるいはこの場に集まったＶＩＰを殺害するつもりなんだろうが、そうはいかねえ。

陽動だと分かっていても襲撃されていなくても、出現した以上は出張る必要がある。防衛的な問題でも、心情的な問題でもだ。一番反応が集中している――二十八体分の反応があったポイントにはセラフォルーに向かってもらった。サーゼクスと俺はこのまま会談に参加するしかないが仕方がない。リアスには一番弱い反応のポイントに向かってもらった。もしもの場合に備えてタンニーンにも同行してもらっている。一体しかいないようだから、大丈夫だろう。

俺達が魔神柱から受けた被害はすでに洒落にならないレベルだ。相手が正体不明でありソロモンが関わっている可能性が高い以上、どうしても動きが後手後手に回った。あのクソ野郎が指輪に魂を封印していた可能性を思いついていればこんなことには……。いや、今更言っても遅いか。それでもバラキエルやサハリエルを失わずに済んだんじゃないかって思うとやるせない。

指輪と言えば、天界に保存されていた指輪は十個すべてが偽物だった。

ミカエルが本物を偽物だと言い張っている可能性もあった。神が復活する以上、あいつが俺たちを騙すことは有り得る。だが、これも的外れな気がする。理由は期間だ。もしも天に本物の指輪が九個あったとしよう。その場合は神が復活していないのはおかしい。時期を狙うような問題じゃないだろうし、聖書の神ほどの存在が復活す

れば世界に何かしらの変動が起きる。指輪の現状を報告した時のミカエルの落胆ぶりからしても間違いないだろう。

……ただ、聖書の神に関してはどうだろうか。ソロモンのクソ野郎が優秀だったことは認める。それでも、指輪すべてを偽物にして、聖書の神の目を欺けるかとなれば疑問は出る。となると、ソロモンの返還後に聖書の神が本物と偽物をすり替えて保存していたってのが一番有り得そうなんだが……どうしてそんなことをしたのかって疑問が残る。結局振り出しだ。

指輪はどこにあるのか不明。この情報はさすがに開示しておかないとやばい。後々突っ込まれるのも面倒だし、世界中の神話で力を合わせて探すべきだからな。他の指輪にソロモンの魂が封印されているって可能性もそれなりに高いし。

とにかく、今回の魔神柱への対戦力にはセラフォルーが主体となって、他の魔王眷属や最上級悪魔、堕天使の幹部、熾天使や最強クラスのエクソシストも出ている。

「これより世界神話会談を始めます。この会談を取り仕切らせてもらうシヴァです。お見知りおきを」

大黒天――シヴァが宣言する。

……本来、目下敵であるはずの魔神柱が出たんだ。会談は相手の目的が分かるまで中断すべきだ。だが、今回集まった修羅神仏は予定の変更なく決行した。理由は、俺達への当てつけだろう。魔神柱への対処はほとんど俺達三大勢力に丸投げされた。確かに俺達が戦うべき相手だが、他の神群はほとんど戦力を回していない。俺達に被害を出させてもしもの場合に自分のところの兵を出すつもりなんだろう。

……そんなことをしている場合かよ。いまはあらゆる神魔が手を結んで、ソロモンの思惑を打ち破らないといけない時期だろう……！

この会談の結果次第で、世界は滅ぶかもしれないんだぞ！

「前置きの挨拶も必要なのでしょうが、我々には時間はない。外も慌ただしいようですし、本題を明確化しましょう。唯一にして最大の議題は、あの怒りしか知らぬ王、忌まわしい『真理』を構築した魔術王ソロモンへの対策です。さて、あの王の災禍を振り返る前に、件の異

形――魔神柱について『彼』に証言をしてもらいましょう」
　シヴァの視線が、日本の妖怪勢力陣営にいるキングゥに向けられる。キングゥが会場に現れてから、ほとんどの修羅神仏の意識はこいつに向けられていた。
「もっとも、彼は魔神柱との契約で彼らの正体を口にはできないのですが……彼の正体を聞けば自ずと理解できるので。私は先に聞かせてもらっていますが、色々と驚きの内容でした。この会談の内容を左右しかねないほどのものです。話し合いの前に知っておいた方が良い。早速――」
「魔神柱の前に、明確にしておくべきことがあるのではないか？」
　シヴァの言葉を遮ったのは、ある神話の神だった。……おいおい、流れを壊すなよ。周囲の視線はキングゥに一気に集まって、キングゥ自身身構えていたってのに、それが狂っちまった。キングゥの奴、出鼻をくじかれて気まずそうにしている。それを京都妖怪のお姫様が背中をぽんぽんと叩くことで慰めていた。
　シヴァはその神に問う。
「魔神柱の一件以上に、優先して話し合うべき内容とは？　おおよそ察しはつきますが」
「決まっている。三大勢力の受けるべき国際的制裁について、より正確にはソロモンについてだ」
　会場がざわめく。
「彼の復活を通告してこなかったことはどうでもいい。……どうでもいいは言い過ぎか。だが、理解はできる。あの魔術王はそういう存在だ。確実に復活した証拠がなかった、というのもあるのだろう。指輪の管理を怠っていた天界に対しても言いたいことはあるが、それ以上に私は魔王と堕天使の総督に抗議をしたい」
　その神の視線が俺たちに向けられた。
「貴様ら、何故ソロモンを殺した？」
　は？　こいつは何を言っているんだ。
「ソロモンの危険性は分かっているだろう。あの男が目の前に現れたらそりゃ殺すしか――」

「魔術王が、『真理』を組み立てたあの男が生きてさえいれば、『真理』の術式を解除できたかもしれんのだぞ?!」

ソロモンが作り出したと言われる術式『真理』。その正体は不明で、その技術は未知だ。一切合切ソロモンにしか理解できないシステム。何をどういう仕組みにして組み上げたのかすら分かっていない。一部では『壺』の一件が術式構築の手順だったとも言われているが確証はない。

色んな学者やら機関やらが調べているが、何も分からない。分かっているのは、あれは異形の過去と未来を奪うものってことだ。人間の神話だけではなく、異形側の記憶さえ改竄する。特に創造神の類はあれをどうにかしようと躍起になった。……当然だろう。何せ自分が世界を作った記憶はあるのに、自分が世界を作った証拠がどこにもないって状況なんだから。

「貴様らが、貴様らのせいで作られてしまったあの忌々しい呪いが、ようやく！　この時代でどうにかできたかもしれないのに！　おまえたちは、それを台無しにした……！」

ちっ！　好き勝手言ってくれやがって。『真理』構築の動機について、あの男は人類愛なんて寝言をほざいたんだぞ。あれだけ世界に暴力をばら撒いたくせに愛なんて騙りやがった。そんな男がどう頼んだところで『真理』について口にすることはないだろうぜ。

「まあまあ、落ち着いて。その件については私も思うところがありますが、キングゥに話してもらう内容はそのあたりにも関係していますので。彼の話を聞いてから三大勢力の責任を追及しても遅くはないでしょう」

シヴァに制止されてその神は渋々といった様子で席についた。周囲は批難というよりは同感って顔をしている奴が多い。けっ！　どいつもこいつも。そもそも『真理』が組み立てられたのは、おまえらがソロモンに騙されたからだろうが！

会場の空気は最悪なまま、ようやくキングゥの話になった。

「はじめまして、この世界の修羅神仏たち。私の名はキングゥ。今は京都妖怪勢力の一員ですが、私の正体は妖怪というわけではありませ

ん。ここは異なる世界の、創世の女神の仔にして、天の鎖の後続機です」

そして開示された情報は、文字通りの意味で世界の見方を変えるものだった。

■

俺――匙元士郎は内心で震えながらこの場にいる。

世界神話会談の開催において、三大勢力はかなりの戦力を備えていた。堕天使の幹部や熾天使、魔王様とその眷属と豪勢だ。勿論全員が来ているわけじゃない。特に、現ベルゼブブ様と現アスモデウス様は不参加だ。まあ、冥界の守護とかもあるから当然だけど。

予想通り、魔神柱たちは出現した。堕天使勢力が開発した魔神柱探知機のおかげで、襲撃する前に出現が判明できたんだ。特に反応が集中しているポイントにセラフォルー様は向かった。会長や俺達眷属もサポートとして同行している。魔王様の戦闘の邪魔にならないよう、そして邪魔をしてくるであろう奴らの部下を倒すためだ。

正直、怖い。怖いけど、俺はこの戦いで絶対に活躍してみせる。すべては会長の夢、俺たちの夢のためだ。この戦いで功績を上げたら、それはゲームでの活躍よりずっと評価されるはずだ。そうなったら、俺達の夢の実現にまた一歩近づく。

俺達は魔神柱が作り出したであろう異空間に潜入していた。会場近くに作りやがるとか肝が据わりすぎだろう。入った途端に出られなくなる、みたいな罠はないみたいだ。

「この空間はおそらく上位神滅具の一つ、『絶霧』によるものでしょう。罠でも仕掛けてあると思ったのですが、何も起きませんね」

会長が教えてくれる。上位神滅具か。全部で十三しかない神滅具の中でも最上位のもの。神さえ殺せる聖槍や自由自在に操れる天候などの四つ。兵藤が持っている赤龍帝の籠手すら上回る最強の力。

相手はそれほどのものを持っている。そのことを再認識した瞬間だった。

「待っていたぞ。聖書に名を連ねる害獣どもが！」
どこからか声がした。敵意と殺意に満ちた怒号のような声が。
「顕現せよ。牢記せよ。これに至るは七十二柱の魔神なり！」
声と同時にその場に出現したのは――あまりにも巨大で醜悪なバケモノだった。大樹とも触手の怪物ともいえる形状。おぞましい以外のどんな言葉も似あわない。そんな奴が出現した。怪獣映画かよ……！　スケールが違いすぎる！
「魔神柱二十八柱による融合。それこそが、このクラン・カラティン！　恐怖せよ。怯懦せよ。冥界に犇めくすべての命より一足先に、地獄の底に堕ちるがいい。だが、戦闘の前に問答をしようではないか」
も、問答？
身体に張り付くようにある大量の眼球の一つが、明確にある御方を捉えた。会長のお姉さんにして魔王の一人、セラフォルー・レヴィアタン様だ。
「セラフォルー・レヴィアタンよ。おまえは魔法少女についてどう考えている？」
ズッコケた。その場にいたほとんどの者がズッコケた。空中で飛んでいたはずなのにズッコケた。確か、駒王会談の時のグラシャ＝ラボラスだっけ？　そいつも急に魔法少女について語り出したんだよな。魔神柱ってこんな奴らばっかりなのだろうか。
「ちょっと待て」
セラフォルー様が答える前に、先程とは別の目玉の一つが、先程の目玉を睨んだ。先程と同じだったけど、声音でなんとなく違う奴なんだってのは分かった。
「おまえ、この状況でその質問か」
「何だ、私の魔法少女への愛に文句でもあるのか」
「時と場所を選べと言っているのだ」
ああ、会長が遠い目をしている。副会長が言葉を掛けているけど反応が薄い。こいつら、俺の主に精神攻撃を仕掛けて何が楽しいんだ！
「まあ、待て、アンドロマリウス。グラシャ＝ラボラスの熱意も理解できぬものではない。人間は等しく同価値だが、『少女』という部類は精

神的に特殊なのだ。彼女たちのリビドーは魔術的にも非常に価値がある」
「黙れゼパル。殺すぞ」
「何故そこまで殺意が高い!?」
……いま、聞き捨てならないことを言わなかったか？
「ちょっと待てよ」
「何だ、龍擬きの少年よ。先に言っておくが私は魔法少女を利用しようなどとは考えていない。かつてはそうだった。人間を利用しようとしていた。だが、その思想は破棄された。我々は――」
「ゼパルにグラシャ＝ラボラスって……どっちも倒されたはずだろう!?」
グラシャ＝ラボラスは駒王会談の時にトップ陣に倒された。ゼパルは兵藤が死に物狂いで倒した。そのはずだ。そうでなければならないはずなのに。名前が同じだけ、とかだよな？
「……貴様ら、まだそこにいたのか」
「笑止。我らを一度倒したくらいで、殺したつもりでいたとはな」
周囲の皆に困惑と恐怖が宿るが、それを魔神柱たちはせせら笑う。
待てよ。何だよ、それ。じゃああの会談時、三大勢力のトップ陣が袋叩きにした時のあれは、負けた振りだったとでも言うつもりかよ。俺達が、世界が、おまえたちの手のひらの上で踊っていたとでも言うつもりかよ！　何様なんだよ、おまえらは！
「我々を完璧に滅ぼしたいのなら一秒に四十四柱のペースでこふっ！」
「パイモン！　ブエル、グシオンまで！　ついでにフェニクスが！」
「これだから管制塔は！」
「古傷を抉るな！　おまえたちだけではなく我々全員のトラウマなんだぞ！」
「溶ける沈む痛苦の無限もう黙れクズが死にたくない悲願のため速度痛いアアアギィアアア！」
「喧しいぞ、この似非詩人が！」
……こいつら何で敵前でコント始めてんだろう。一秒で四十四

体って無理だろう。大体、そんなペースで倒したら二秒で全滅できるじゃないか。それとも、こいつらって一秒以内に全滅させないと増えるのか？

「皆！　気を引き締めて！　彼らの動きに集中しなさい！　相手が上級悪魔を倒せるほど強いことを忘れないで！」

会長の声に気を取り直す俺達だったが、この触手の怪物はそんな態度を嘲笑いすらしない。

「改めて問おう、セラフォルー・レヴィアタン。怠惰な魔王よ。おまえ達の杜撰な政治のせいで、魔法少女たちを襲った悲劇について、おまえはどう考えている？」

撃墜

グラシャ＝ラボラス。ややこしくなるからおまえは一度黙れ。

ごほん。

改めまして、我はソロモン七十二柱がひとり、魔神アンドロマリウスだ。

我ら二十八柱および此処にいない四十四柱は、此処とは異なる宇宙の七十二柱。この星とは異なる星の、おまえ達の知るソロモンと異なるソロモンに仕えた、おまえ達とは異なるソロモン七十二柱の魔神である。それこそが、私たちの正体だ。

……意外そうな顔だな。そういえば、我々の目的が正体を隠すことであると勘違いしているのだったか？　はっきり言おう。我々にはもはや自らの正体を隠す理由などない。まんまと現れたおまえたちを殺し、計画を最終段階に移行する。

だがその前に、我々の殺意の理由を聞いてくれ。

この星に来て、我々は多くの悲劇を知った。見るに耐えない殺戮を見た。聞くに堪えない雑音を聞いた。過去と未来を見渡す千里眼などなくとも、あらゆる真実が流れ込んできた。

我々は、醜い、と思った。

醜い。

不快極まる事実を見せつけられた。醜悪極まる生態を記憶付けられた。

どのような時代、どのような国であれ、人の世には、多くの悲劇があった。だが、人間の選択ならばそれでよい。　人間は万能ではないのだ。みな苦しみを飲み込み、矛盾を犯しながら生きるしかない。あの敗北を通し、終わりある命の価値を私たちも理解した。

されど、その悲劇の根源が人ならざる異形ならば話は違う。

この醜悪な環境を、状況を、解決しようと考えるのは当然の帰結だった。そして、その醜悪な環境の根源にあったのが、おまえたち聖書に記された異形――神と天使、悪魔、堕天使だった。

神は誰も救わない。救わないだけならばよいが、神器なる力を振りまいている。人間の力を高めるものではあるが、これは確実に人間を不幸にしている。同種からは差別され、異種からは利用される。暴走し、すべてを失ったものもいる。

天使も誰も救わない。聖剣計画やシグルド機関のような人体実験を看過しながら、それを利用している。神の不在を秘匿し、その上で信仰の邪魔となるものを問答無用で追放している。神に与えられたはずの神器を種類によっては異端として排除している場合もある。追放者に何一つの贖罪もなく、だ。

悪魔は『悪魔の駒』を使い、理不尽に悪魔に転生させてきた。強い神器があるからと、特別な力を持っているからと、ただそれだけの理由で人間であるという事実を奪い、穢してきた。しかも、主人に歯向かえば問答無用で討伐対象だ。他の国を勝手に領地化し、杜撰な管理の下、他勢力との抗争に人間を巻き込んでいる。

堕天使は神器を持っているというだけで人間を殺している。まるでゲームか何かのようにな。殺害に至らずとも、拉致し人体実験を行っている。

グラシャ＝ラボラスは先程『魔法少女』という言い方をしたがな、あれは幼い魔女という意味だ。魔女の少女だから、魔法少女。……ややこしい？　それはこの阿呆に言ってくれ。まあ、貴様が思い浮かべる意味での魔法少女もいたが、それは置いておこう。……置いておこうと言っているのだから置いておけ、グラシャ＝ラボラス！　悪かったな、言い忘れていた……余計なことを言うなゼパル！　グラシャ＝ラボラス≒ミルたんとはどういう意味だ、フェニクス！　誰だそいつは。

とにかく、彼女たちもおまえたちの杜撰な政治の被害者だった。

ある者は理不尽な教義に裁かれた。ある者は玩具として悪魔に弄ばれた。ある者は不当な取引により堕落を強制された。青田買いとは違う。純粋に悦楽と欲望を満たすためだけに、壊された子どもたちがいた。すべての悪魔がレーティングゲームに力を入れているわけではないだろう？　おまえたちの娯楽のために消費された人間の生

命があった。物珍しいというだけで転生させられた。はぐれ悪魔を必要以上に嬲って殺す者がいることを知っているか？　例えはぐれ悪魔であったとしても、そこに悦楽を覚えれば罰ではなく快楽殺人と同義だろうに。

グラシャ＝ラボラスは一時魔法少女の使い魔をしていた経験があってな。その影響か、彼女たちに対して強い拘りがあるのだ。だからこそ、おまえが許せなかったのだ、レヴィアタンを継承した女悪魔よ。魔法少女を目指すと宣いながら、魔法少女たちが無理やり転生悪魔にされるような事態を、改善しないおまえがな。

おまえに罪があるとは言わない。魔王など名ばかりのお飾りであったことは重々承知だ。だが罪がなくとも、責任はある。それが王というもののはずだ。まして、おまえは「魔女に対して間違った認識を与える」と魔法使い側から抗議されたこともあるというのにその装いを止めなかった。その振る舞いを改めようとはしなかった。おまえが興じるテレビ番組では、和平後も堕天使や天使を敵視する描写が続いているな。これで外交担当？　笑わせる。

おまえは多くの悲劇を見逃した。おまえたちは多くの悲鳴を聞き捨てた。そのせいで、どれだけの人間が終わったか数えられるのか？　救えた命があったはずだ。守れた心があったはずだ。なくすことはできなくとも、ほんのわずかな行いで減らすことができたはずだ。

私たちはそんな彼らを救い、そんな異形どもを殺してきた。

ああ、助けたはずの人間から恨み言を言われたことならば何度もあるぞ。――どうして、どうしてもっと早くに助けてくれなかったのかとな！

おまえたちの生命は等しく無価値だ。おまえたちの行動は等しく無意味だ。

この星は狂っていた。おまえたちは狂っていた。

聖書の実態を知れば知るほどに、犠牲者を救えば救うほどに、おまえたちへの憎悪は増した。堕落への憤怒は途切れず、苦痛への悲哀が濃くなった。なんとしてでも貴様らを殺し尽くすと決意した。おまえたちを許してはならないと、私たちの誰もが思った。

だが、今の我々には問題がある。
それは、おまえたちを滅ぼすことに対して一切の葛藤が、苦悩が、躊躇が、逡巡がないということだ。おまえたちを絶滅させても後悔しないだろうし、それは確実に成功するだろう。だからこそ問題だった。これではあの時と同じだ。これではあの時の繰り返しだ。
我々はまた敗北してしまう。我々はまた失敗してしまう。大切なものを見逃して、大事なものを見落としてしまう。
故に、この対話は必要だった。
貴女の夢の価値を教えてください。貴女の正義の色を見せてください。
我々に葛藤を、苦悩を、躊躇を、逡巡を、後悔を、敗因をください。
この現実を知ってなにも感じないのですか？　この悲劇を正そうとは思わないのですか？
「もう！　わけのわからないデタラメばかり言って！　悪魔が私の同志である魔法少女を不幸にするなんてことあるはずないじゃない！　嘘でこの魔法少女マジカル☆レヴィアたんを惑わそうとしても無駄よ☆　悪魔の敵はきらめくスティックでまとめて殲滅しちゃうんだから☆」
――――どうして、ですか？　どうして我々の言葉を嘘だと思うのですか？　貴女には、あの殺戮が見えないのですか？　あの悲鳴が聞こえないのですか？　それとも、悪魔以外に興味がないのですか？
「『悪魔の駒』を悪用する悪魔もいるかもしれないけど、ソーたんやリアスちゃんみたいな子だっているじゃない☆　それに、悪魔に転生したってことはちゃんとした契約があったんでしょ？　きっとみんな、悪魔に転生して楽しんでいるわ☆」
――――ああ、そうか。理解したよ。
「おまえたちよりも、我々の方がずっと愚かだった」
我々はまた間違えているのかもしれないなどと、烏滸がましいほどの妄想だった。
どうか貴様らにもあの王のような真実があって欲しいなどと、未練がましいだけの怠慢だった。

この戦いは断罪ではない。この戦いは贖罪ではない。この戦いに正義はない。この戦いに神意はない。この戦いは復讐ではない。この戦いは挑戦ではない。この戦いに勝利はない。この戦いに報酬はない。

聖書を焼却する上で、この戦いに意味はない。極点を目指す為に、この戦いの必要はない。だが、価値がある。何物にも代え難い価値が。

「この愚かさこそが貴様らを滅ぼすのだ！」

絶望すら、する必要はない。

これより未来、おまえたちの名前を呼ぶ者はいないのだから。

■

セラフォルーがクラン・カラティンと対面したその頃、アガレス領のアグレアス付近にて、その老紳士は計画のチェックをしていた。

「最大で国一つ囲える『絶霧』を主体に、アジ・ダカーハの魔術、ラードゥンの結界、魔神柱が多重に発動する術式。これらを合わせれば都市一つを奪うなど造作もない。妨害術式があったところで無効化の手筈はできている。既存の術式は魔神柱によって解析済み。めぼしい戦力は会談に集中している。現在の悪魔で対抗できるのは能力的にはアジュカ・ベルゼブブのみ。しかし今日彼がアグレアスを訪れようがないことは把握している。完璧だネ！　これぞ完全犯罪！　世界は破滅に満ちている！　フハハハハ！」

「よっ、さっすがパパ！　かっこいい！」

「もっとパパを褒めてもいいんだよ、リント」

「教授……」

リントによいしょされて上機嫌の教授を見て、すごい顔で半眼になるゲオルグ。

アグレアスの全貌を眺められる高台で、その一団はこれから強奪することになる浮遊都市を観察していた。メンバーは魔神バアルとアンドラス、教授、ゲオルグ、リント、ヴァレリーである。別の地点で

はアーシアとナイチンゲールが待機していて、合図と同時に邪龍を召喚する手筈だ。

「ゲーティアからの連絡もまだだし、今はリラックスしておこう。いやー、この歳になると立ちっぱなしも辛くてね」

そう言って用意していた椅子に座る教授。

「そういえば教授。天界に保管されていた指輪が偽物だったという情報がありますが、どうお考えですか？」

ゲオルグからの質問に、教授は鬚を撫でながら答える。

「良い質問だ。冥界焼却はその問題が解決してからになるだろうね。おそらく指輪はトライヘキサの封印に使われたのであろうと私は考えている。トライヘキサの正体は仮説の段階だったが、アーチャーの登場で確定した」

「アーチャー……並行世界の曹操ですね」

苦虫を潰したような顔になるゲオルグ。彼があなったのはどうしてだろうか。その世界線の自分たちは彼を止められなかったのだろうか。あるいは、自分たちが彼をああしてしまったのだろうか。どれだけ悩んでも答えは出ない。

ゲオルグの主観だが、彼は過去の自分や仲間を本気で殺したいとは考えていないのではないだろうか。あの時、去り際にアーチャーは『絶霧』らしきものを使用した。最初からあれを使って不意打ちすれば確実に殺せたはずなのにそれをしなかった。これは自分に都合の良い考えだろうか。並行世界とはいえ曹操のことだから、無駄にカッコつけようとしたという可能性もあるが。

「ソロモンの術式が産み落としたならば、ソロモンの力で封印するのが最も適切だ。トライヘキサの存在はどうやらミカエルら熾天使にも知らされていなかったようだからネ。神がひとりで封印したなら、神が偽物とすり替えておいたことにも説明がつく」

「神は天使を信用していなかったのでしょうか？」

「だろうネ。現実、悪魔や堕天使と同盟を組んだだろう？　そうなると現在はどこにあるのかが疑問だ。解除と同時に壊れたのか、ソロモンの協力者が持っているのか。ソロモンと協力関係にあった獅子王

が持っている、なんてことも有り得るネ」
教授が冗談交じりの呟きと重なるように、
巨大な光の柱がアグレアスを貫いた。
「は？」
「え……」
「ちょ！」
光の柱が消えると同時に、浮遊都市の高度が下がっていく。早い話、墜落しようとしていた。決して小さいとはいえない規模の浮遊都市が勢いよく大地に向かって堕ちていた。先ほどの光の柱が島を浮遊させていたなんらかを破壊したのだろう。
島が落ちていく様子を見て、激しく動揺する一同。
「私の完全犯罪があああああ！　おのれ謎解き屋め！」
「完璧な計画、完全な展開の崩壊……さてはおまえだな藤丸立香！」
「落ち着いてください、教授！　バアルも！　その二人は多分関係ない！」
「ほら、深呼吸でもしてくださいッス」
「私の、私の残機……」
「アンドラス様お気を確かに！」
おそらくあの光の柱はあの女神の槍だ。自分達が認識しているよりも更に威力が上に見えたが、あれが赤龍帝と融合して得た倍加の力ということだろう。
このタイミングであることに疑問は覚えるが、それよりも作戦の修正が先だ。目的の希少金属の回収は可能か否か。
「ふー、ふー……動物でも植物でもなく、鉱物であることに救われたな。堕ちた後の残骸から意地でも探し出してやる。原石が少しでも見つかれば……」
「でもあんな光に飲まれたら鉱山ごと溶かされるのでは……？」
「あれが例の女神の聖槍ってやつですか？　うわー、やばいですねー」
「残念なお知らせだ。計算の結果、今の光の柱が落とされた地点は

ちょうど例の希少金属の埋蔵地だ。座標と光の柱が見えた角度からして直撃だろう。原石が残っている可能性は低い……ちょうどいま二発目が発掘された金属の貯蔵庫がある座標に落とされたネ。徹底してるぅ！」

「あの女神の頭はマーマイトか何かでできているのか！　聖抜はどうした！」

本来、冥界には太陽が存在しない。だが魔力で作られた疑似的な太陽が人間界の時間に則って昇るようになっている。だが、絶叫するバアルの頭上に昇った太陽は、この時間では有り得ない位置にあった。

■

「――以上が私からお話できるすべてです」

キングゥからもたらされた情報は、先んじてある程度の知識を得ていた神々でさえ呆然とするほどのものだった。まったく予備知識のなかった者からすれば、どれほどの驚愕を受けたか。

ここは異なる神秘を内包する世界。

英霊。聖杯。抑止力。アラヤとガイア。サーヴァント。

七つの手段により焼却された七つの時代。

人類史を修復し、取り戻すために立ち上がった、人類最後のマスター、藤丸立香。

そして、人類悪。人類を滅ぼす悪ではなく、人類が滅ぼすべき悪。

キングゥの母であり、古代メソポタミアを滅ぼそうとした『回帰』の獣、堕ちた女神ティアマト。龍王最強の『天魔の業龍』ティアマットが可愛くなるような次元の話だ。キングゥの知識は、この女神を倒すために彼がその身を犠牲にして足止めしたところで終わっている。

おそらく倒せたのであろう、というのがキングゥの見解だ。

一通り聞いた神々は感嘆とした息を吐き出した。まったく違う法則で動く世界の証明。自分達の常識が一新されたのだから無理もない。

何より重大なのは、キングゥが此方の魔術王――クルゼレイ・アス

モデウスの身体を乗っ取っていたソロモンからビーストの霊基を感じ取ったということだ。人間にしか滅ぼせないというのならばアザゼルが倒したのは無駄であり、どこかで復活を待っている可能性もある。あの男が未だに滅んでいない、しかも自分達では倒せない。そのことがどれだけ神魔の心を揺るがせたか。

ある事情により、その『異世界』については知っていた帝釈天は他の神よりも情報の整理が早かったため、一足先にキングゥに訊ねる。

「つまり、人類悪ってのはラーヴァナみたいなもんか？」

「認識としては近いですが、ラーヴァナの場合は相性というべきでしょう？　人類悪のそれは相性というよりは法則に近いですね。人間になら倒せるのではなく、人間にしか倒せません」

キングゥの話を聞いて誰もがおおよその察しをつけた。

キングゥのいた世界とやらは、どういう偶然か、この世界と歴史や名称が酷似している。つまり、この世界の存在と同じ名前の神々や魔王もいるわけだ。具体的にはそう、あちらにはあちらの七十二柱もいるだろう。そこまで考えたら『彼ら』の正体も分かろうというものだ。そして、彼らの背後にいるであろう王の名前を理解した。それが間違いであるとは思いもよらずに。

「こうなってくると俺たちもそれに対応するしかないか。となると、まずはそのカルデアって組織のマスターをどうにかしてこっちの世界に呼ぶところから始めるしかねえか？　しかしこれまでまったく観測されなかった異世界への干渉か」

《カラスめ、本気でそのようなことをするつもりか？》

「言ってろ、骸骨ジジイ。ソロモンにできたことが俺に出来なくてたまるかよ」

《そういう意味で言ったのではないのだがな》

ハーデスの言葉にアザゼルが首を傾げた瞬間だった。

会場の中心にある空間に、白い亀裂が入った。

空間を引き裂きながら出現したのは、白く光り輝く人間の少年の形をした何かだった。頭部には十本の角があり、背中からは鳥やドラゴン、コウモリなどの羽が六枚生えていた。その肩には兎のような猫の

ような白い獣が乗っていた。何より特出すべきは、そのオーラだろう。生半可な神仏などその瘴気を吸うだけで殺戮できてしまうであろうほどの重圧。世界を代表する神々が、まるで象を前にした鼠のように震えていた。

悲鳴すら許さぬ瘴気を放ちながら、その少年は口を開く。その声にはどこか、あの忌々しい王のように怒りが滲んでいた。

「はじめまして、くそったれな修羅神仏のごみクズども。我こそはこの星の人類悪の一つ、『期待』の理を担う獣の半身。貴様らが『黙示録の皇獣（アポカリプティック・ビースト）』６６６（トライヘキサ）と定義した者だ」

「フォフォウ」

白い獣の可愛らしい鳴き声が、場違いに会場に響いた。一拍置いて、その名乗りに対して動揺と驚愕が走る。

「と、トライヘキサ、だと……！」

どこに存在するか不明だった魔獣。黙示録に語られる力が事実なら、この場に集まった修羅神仏が力を合わせても無事では済まない。シヴァを始めとするインドの神々でさえ勝つことは難しい。だが、かの獣であればこのオーラも納得だ。こんな龍神や真龍に匹敵する怪物、他にいてたまるものか。

「ＨＡＨＡＨＡ！　……人類悪か。この場に人間いねえけど、どうするんだ？　逃げるか？」

血気盛んな武神である帝釈天であっても、本能的にこの獣の相手はまずいと理解できるらしい。戦意というものが感じられない。強いて言うならシヴァを横目で見て、「どうやってこいつに押し付けよう」と考えているようだった。

「……まずは謝罪と訂正を。人類悪と名乗ったが私（おれ）はすでに人類悪ではない。ちょっとテンションが上がって正確ではない発言をしてしまった。一個の生命ならばともかく人類悪としての６６６（トライヘキサ）は既に敗北している」

黙示録の獣はまるで誇るかのように自らの敗北を告白する。

「いやはや、この場にいる神々さえまとめて余裕で滅ぼせるこの私（おれ）が、何の武力もない脆弱な人間に倒されるとは。人類が倒すべき悪とは

正にその通りだな」
「何？」
「フォーウ、ンキュ！」
　獣の鳴き声を聞きながら、アザゼルは先程のキングゥの話を思い出し、ひとつの結論に至る。
「黙示録の獣を倒せる人間……？　そうか、この世界に来ているんだな。人類最後のマスター、藤丸立香が！」
「そんな貧相な発想しかできないから、おまえたちはあの馬鹿王にしてやられたんだ」
「フォウ、フォーウ」
　唾棄しながら否定するトライヘキサの肩の上で白い獣が呆れるように鳴く。
「私（おれ）を倒したのは、この世界の人間だ。おまえたちが知らない、おまえたちが覚えようとすらしないこの星の人間すべてだ。彼らはただそこに生きているだけで、この私（おれ）に勝利したのだ。眠っている間は『期待』なんてしていなかったのだけどなぁ」
　アザゼルには理解できない。サーゼクスにも理解できない。シヴァや他の神々にも意味不明だった。トライヘキサの実在とその正体を知ったばかりの彼らには、この獣の発言の意味が分からない。否、どれだけ考えたところで真実に至れる神魔がどれだけいるか。
　ある意味、ソロモンだからこそ、その解に至れたのだ。完全で純粋な形で顕現した場合にのみ、この人類悪は極めて簡単に倒せるのだと。故に、彼はいつの間にか生まれていた自らの術式に、最初の愛を、自らの原罪を与え、キャスターとアサシンの協力の下、この獣を人類悪として完成させたのだ。
「それより面白い……否、不愉快な話をしていたな？　リッカ・フジマル様をこの世界にお呼びすると？」
「ああ、おまえらを倒すには経験者の話を聞くのが一番良さそうなんでね。それに、キングゥの話からして、魔神柱ってのはそいつの敵なんだろう？　魔神を倒すという目的が同じ以上、俺たちの利害は一致するはずだ」

「――愚か、あまりに愚か」

床に剣が突き立てられるような音がしたかと思えば、突然、その場に『死』が現れた。

トライヘキサの強大さに目を奪われて気が付かなかった、なんて次元ではない。何故ならば、その人物もまた強烈な雰囲気を放っていたからだ。黙示録の獣が近くにいたと言えど、これほどの存在の登場に気が付かないなんてことは有り得ない。

それは骸骨の面をつけた大男。巨大な剣を携え漆黒の衣装を着た姿はまさに死神。武を限界まで極めたであろう圧倒的強者の風格。一瞬でも油断すれば首を取られると、修羅神仏の誰もが感じ取った。実際、自らの首に手をやっているものも多い。

強いか弱いかで言えば強いのだろうが、そういう問題ではない。強弱だの善悪だの、そんな単位で考えてよい相手ではない。トライヘキサがスケールが巨大すぎる漠然とした破壊現象ならば、この死神はあまりにも克明にして明確すぎる『死』だった。

「何者、だ?」

「魔術王の姦計に嵌められた道化と言えど、神の一角であれば名乗らねばなるまい」

ある神からの問いに、骸骨面の剣士は堂々と名乗る。

「――幽谷の淵より、『此方』の魔術王の召喚に応じ、補足と祝福、警告に参った。山の翁、ハサン・サッバーハである」

ハサン・サッバーハ。中東にある教団の暗殺集団の長であるはずだが、これが一介の暗殺者の気配であろうか。神代の英雄でもこれほどの殺気を帯びたものがいるだろうか。

「私(おれ)が来たのはこの御仁の付き添いに過ぎん。不要であるとも思ったが、万一この御仁に何かあれば申し訳がない。あの馬鹿王の後始末に付き合ってくださったことへの感謝を込めてな」

神々が戦々恐々とする中で、最強の神であるシヴァは余裕のある態度で話しかける。

「では、ハサン殿とお呼びすればよろしいのですかな?」

「好きに呼ぶがよい。我が名はもとより無名。拘りも、取り決めもな

い」
　その受け答えだけで度量の大きさを示す山の翁に、アザゼルは次の質問を向ける。
「ソロモンの召喚に応じたってことは、おまえがサーヴァントってやつか？」
「然り。この身は愚行を承知で、魔術王と契約を結び、この獣の完成に手を貸した。すべてはこの時のために」
「っ！　おまえ英霊のくせに世界を滅ぼす獣を目覚めさせたってのか!?」
　アザゼルは糾弾する。キングゥの話からすれば、英霊とは人類を肯定する立場にあるはずだ。これほどの力を持つ存在が何故そのような悪を成したのか。かつての神々がそうされたように、この死神もソロモンの甘言に乗ったということなのか。
「否、この獣はすでに世界を滅ぼさぬ。この獣が自らの口で告げたように、この獣はすでに人類悪にあらず。天命はこの世界の人類を選んだ」
「は、はあ？」
　この件に関してはこれ以上説明をするつもりがないのか、山の翁は話を戻す。
「キングゥの話の続きをしよう。カルデアのマスター、藤丸立香は原初の母、獣に堕ちた女神ティアマトを打倒した。そして、魔術王を騙った者に勝利し、人類史を奪還したのだ。かの戦い、実に見事であった」
　それを聞いて恐怖を忘れて興奮する神々。特に、オーディンと帝釈天の目の色が変わった。人類悪を打倒し、世界を救済した英雄。心底欲しいと本能的に考えてしまった。
「……へえ、あいつ母さんを倒したんだ」
「汝の協力あってこその成果である」
「……ふん、どうでもいいね。まあ、このボクがあそこまでしてやったんだ。やり遂げてもらわないと困るね」
　これが第一の目的である補足。

そして、第二の目的である祝福。
「原初の母の仔キングゥよ。汝の新たな道を、カルデアのマスター、賢王とウルクの民、復讐の女神、原初の母に代わり祝福する。その行く先に多くの幸あらんことを」
「え、あ、うん。ありがとう、ございます？」
困っていた。面識があるわけでもない冠位暗殺者に「新生活おめでとう」と言われて、天の鎖の後続機は非常に困っていた。困惑以外のどういう反応をしろと？
「しかし堕落は許されぬ。一たび研鑽を怠ればその槍捌きも精神も衰えるであろう。原初の母の下で振るった手腕を、人を滅ぼすためではなく親しい者を守るために使うと良い。かの力を腐らせる道理はない。働け」
「あ、はい」
要は「食っちゃ寝せず新天地でも頑張るんだぞ」と言われて頷くキングゥ。
「骸骨殿。詳しい事情は今知ったばかりじゃが、キングゥには私がいるので大丈夫なのじゃ！　私や母上がちゃんと幸せにしてやる！」
「あ、ボクがされる側なんだ」
「――良い。実に良い。無垢なる怪異の娘よ。女神の仔が堕ちぬように共にあるがいい。この光景は、獣に堕ちた神が描いたものではなく、汝ら自身が選んだのだ」
これはキングゥを味方につけるには京都に取り入るのが手っ取り早いと判断する一方で、シヴァは最後の要件を促す。
「それでハサン殿。警告とは？」
「知れたこと。カルデアのマスターをこの世界に呼ぶことは許されん」
元々重圧のある喋り方だったが、有無を言わさぬ声音だった。その身から発せられる殺意がより濃厚になる。
「あの魔術王の計画は汝らの怠惰と堕落から始まった。神とは純潔でなければならない。王とは高潔でなければならない。その責務を汝らは放棄し、醜態を晒した。神も魔も人も罪を犯した。その結果、あ

の王は異形に怒りを抱き、獣に堕ちたのだ。魔神柱を束ねる王も同じだ。汝らの犯した罪がかの王の怒りを買ったのだ。時代が流れても所業を改めるどころか悪化させる始末。自らの罪の清算に、無関係の他者を巻き込むなど堕落の極み。この激動の収束はあくまでもこの世界の責務」

黒衣の剣士は床に突き立てた剣を緩慢な動きで持ち上げる。それだけの動作がとてもなく恐ろしい。まるで死刑執行の合図のようだった。

「まして、あの魔術師――我が契約者の人理を守る戦いは一時の休息を得た。その安寧を脅かすというのならば我が剣の切れ味を見せるとしよう」

「フォウ！」

「我が契約者に手を出そうと言う者は――」

骸骨の奥からの視線が、この場にいるすべての修羅神仏を射抜いた。

「首を出せ！」

乱戦

「――とは言えど、おまえたちがはい、そうですかと引き下がるような連中でないことは分かっている。だからこそ、良い情報を教えてやろう」

　不遜な態度の暗殺者に対して攻撃を仕掛けようとする神を制し、この星の人類に敗北した人類悪は嗤う。

「『真理』の壊し方だ。信じる信じないは好きにしろ、ごみクズども。ただし、信じた方が信じなかった奴よりも後々の時代において有利になるだろうな」

　それは聞き捨てならない情報だった。だが、神々は獣からの嫌悪感にこそ疑問を抱いた。

「嫌いだね。私（おれ）はおまえたちが零し続けた染みの積み重ねなんだからな」

　獣は唾棄するように続ける。

「この身こそは、『真理』の現身であり、『システム』の影なんだよ」

　内容に驚きつつも、突然語られた『システム』の話題に対して首を傾げる神々。

「まず、『神器』とは神が作ったものだ。あれの役割は効率的なエネルギーの回収でね。だからこそ神器所有者が死ねば、神器は一度『システム』に回収される。しかし、二天龍のように歴代の所有者の残留思念が残る神器がある。ならば、神の不在を知って死んだ神器所有者の神器の影響はどうなる？」

　神の不在を知る者が近づいただけで『システム』に影響を与えるのだ。ならば、『システム』がそのような不純物を許すはずがない。当然、回収と同時に対処される。二天龍の神器は例外中の例外だ。それだけ、龍の力は悲劇を呼び寄せる。

「分かるか？　憎悪だの怨念だののほとんどは削ぎ落されるんだよ。ろ過されて削除して排除して廃棄されるんだ。神器は感情をエネルギーに変換するが、エネルギーに変換しきれなかった分がどうしても出てくる。……そして、『真理』は人類史と神話のスレ違いの摺り合わ

せの機能を持っている。世界の黒幕兼支配者気取りのおまえたちの所業を、私はずっと見ていた。人間が純粋な被害者だとは言わない。人魚やユニコーンの乱獲、開拓という名の龍殺しなんてこともあったか。異形ではないただ強いだけの狼が開拓のために殺されつくされるという件もあった。人間が人間をくだらないもののために殺す瞬間なんて、死にたくなるほど見て来た」

ひとりひとりの量は大したことはないだろうが、歴史の長さがあり、神器の多さがある。塵も積もって、地獄が描かれたのだ。

ある弓兵はトライヘキサを「人間と神々の三千年の積み重ね」と例えた。だが、それは正確ではない。正しくはその倍だ。しかも、その中身は醜いものだけで構成されていた。

『システム』も『真理』もそういう機能があり、廃棄される場所は同じだ。同じ場所に廃棄されるように、ソロモンが調整した。万が一、自分が人類悪として復活できなかった場合に備えて、『泥』を貯めこんでいたのさ。そこは誰にも認識されないような世界の果ての片隅。何が捨てられようと、何が生まれようと誰も気づかない。私は廃棄物を食らって成長してきた。不純物を味わって生存していた」

生まれ始めて知った感情は、あの王の怒りだった。あれだけの怒りをぶつけてきたくせに、あの王は自分の生誕に気づくことはなく死んだ。

王の死後は、見るに耐えない殺戮を見ていただけの三千年だった。聞くに堪えない雑音を聞いていただけの三千年だった。この殺戮を見ないために、この雑音を聞かないために、世界を破壊しようとするのは当然の帰結だ。

「おまえたちは二千年ほど遅すぎた。あの救世主が私を殺さなかった時点で、おまえたちの未来がないという未来はほぼ確定していた。私は世界を壊したかった。私は世界を壊さなければならなかった」

あるいは『世界を滅ぼす』という性能が、魔術王の自覚さえしていなかった本音だとでも言うのか。

「世界の片隅で成長を待っていたのは、すべての時間が必要だったからだ。すべての資源が必要だったからだ。……アサシン殿とキャス

ター殿のおかげで、こうして雑音は聞こえなくなったわけだが」
　キャスターの呪術とソロモンの術式によって曖昧だった理性を整え、『原罪』を与えることで愛を知り、アサシンの剣技によって『真理』から切り離した。それだけの手間をかけて、ようやく黙示録の獣は世界の真実を見た。
「私は美しいものを見た。本当に美しいものを見た」
　この星には愉快なものなど何もないと思っていた。この星にはあたたかいものなどないと諦めていた。
「ちゃんとあったんだよ。この星にも、価値があるものが。涙ではなく笑顔で終わる命があり、傷つけ合いながらも育める絆があった。何が人間を愛し、信じているだ馬鹿王め。奴もあの神も、何も分かっていなかった」
　あの神とは、ギリシャの太陽神が問う。
「言うまでもないだろう。ソロモンの計画に乗っかり、獣を単騎で封印し、魔王と天龍によって滅び、聖槍の中で今なお復活を待っている駄神だよ」
　聖書の神か、と北欧の大神が納得する。
「あの神は世界の片隅で成長を続けている私を見つけ出し、封印した。かの大戦において神が死んだのは、二天龍の強さもあったが、私の封印に手こずったからさ。まあ、あの時点で私はそこのパチモン魔王よりも強かったからな。当然と言えば当然だ。しかしあの神が封印したのは『真理』を止めるためではなく、利用するためだった。来たるべき日まで私が死なないように、そして自分が思い描く形以外で完成しないようにな」
　まさかおまえを殺すことで真理は解除されるのか、と中国の知恵の神が戦慄する。
「それはおまえたちにとっても不都合だろう？　この中で唯一、そこの破壊神が抵抗をできる程度だ。まともに戦える奴なんていねえよ。それに、いまの私もおまえたちの相手をする気なんて更々ねえし、切り離されているからな。もう私と『真理』は無関係だ」
　では『真理』の破壊方法とは、とエジプトの埋葬神が焦れる。

「指輪だよ」

何の指輪かは、わざわざ口にする必要もないだろう。獣は自らの十指を広げて見せる。そこには指輪が――なかった。

「あの駄神は、私（おれ）の封印にあの馬鹿王の指輪を利用したのさ。この身は『真理』の末端であり、言ってしまえば栓のようなものでな。だとすれば、指輪を蓋にする以上の答えはないだろう。そして、封印に使用されている間に指輪と『真理』は同化した。切り離される前の私（おれ）以上に、指輪は『真理』と同一化している。あの馬鹿王の指輪十個すべてを破壊することで、『真理』は解除される。おまえたちの願い続けた、人が神に縋る昨日が戻ってくるわけだ」

龍神や真龍と同次元の怪物を殺すよりはずっと現実的な話だ。しかし、そんな甘い話はないのだ。この星の神魔をすべて騙しきった王の継承者が、そんな都合の良い話を持ってくるわけがない。

「おめでとう、ゴミくずども！　もうすぐ我が半身に指輪が埋め込まれる点を除けば、おまえたちの勝利だったな！」

■

サーゼクス・ルシファーの眷属は、戦死した『騎士』沖田総司と、『王』であるサーゼクスを除けば六人である。『女王』は最強の女悪魔に数えられる？銀髪の殲滅女王〝グレイフィア。『僧侶』は黄金の夜明け団創始者のひとりであるマグレガー・メイザース。『戦車』は炎の巨人のコピー体、スルト・セカンドと深海の光魚バハムート。『兵士』は麒麟の炎駒と英雄の末裔ベオウルフ。

おそらくは冥界で最も有名な眷属であり、その実力も折り紙付きだ。『悪魔の駒』のコンセプトである少数精鋭を最も体現している眷属の一つだろう。『騎士』や『王』がいなくとも、その威光に陰りはない。否、むしろ『王』に戦場を任されたからこそ、『騎士』が戦死したからこそ、彼らの戦意は極限まで昂っていた。

だからこそ、彼らは己たちのみで魔神柱十柱分の反応があったポイントへの出向いた。むしろこの場にいる魔神を手早く全滅させて他

の戦場への支援に向かうつもりでさえいた。
「我が怒りを知れ！」
対するは魔神アモン。エジプトの古き神、大神アモン・ラーを原典とする魔神であり、現在は九柱の魔神と融合し疑似的なクラン・カラティンとなっていた。
「てめえこそ、総司の無念を思い知りやがれ！」
「切断する！」
炎の巨人となったセカンドはその拳を魔神の巨躯にブチ当てるが、アモンも負けじと攻撃する。場所は時間神殿ではなく、まして十柱程度の力では、最強の『戦車』が相手ともなれば圧倒できない。だが、それはセカンドにしても同じこと。ここまで自分の攻撃が通じないことは始めてだった。どちらも決定打に欠ける戦いだった。もっとも、それはセカンドの燃費の悪さを視野に入れない場合の話だった。時間神殿から離れているとはいえ、魔神柱十柱分の魔力を保有するアモンが燃料の問題で敗北するなど有り得ない。
「武器など前座」
スルト・セカンドへの支援を他のルシファー眷属ができない理由が『彼』である。回復だの足止めだのではなく、爆発的な火力と極限の技によってルシファー眷属を相手にしている『彼』の存在があった。
黄金に輝く鎧と、巨大な槍が特徴的な白髪の男。
「真の英雄は眼で殺す！　梵天（ブラフマー）よ、地を覆え（ストラ）！」
この男、常軌を逸した強さなのだ。いまも目からビームを放つという冗談じみた攻撃をしているが、その一撃の威力こそが冗談じみていた。
グレイフィアたちは距離を取り、相手を観察する。此方は早くも精神的疲労を感じて来たというのに、男の方は冷や汗一つ流さず涼しい顔だ。冥界最強と名高いルシファー眷属を相手にしているのにである。おそらく、彼こそが英雄派最強の男。
時間稼ぎの意味も込めて、グレイフィアは名乗る。
「……私はサーゼクス・ルシファーの『女王』グレイフィア。貴方は？」
「俺の名はカルナ。クラスはラン……ランサーだ。いまは魔神柱たち

の下でパラシュラーマの真似事をしている」
　カルナ。それはインドの二大叙事詩『マハーバーラタ』に登場する悲劇の英雄。太陽神スーリヤの仔として生まれながら、赤子の頃に実の母に捨てられ、御者に拾われたことで彼の運命は決定した。仕えた主君は倒される側の暗君で、師匠からは身分の都合で技を教えてもらえず、生まれ持った最強の鎧を軍神に騙し取られた。宿敵アルジュナとの戦いさえ、神々や僧侶の呪いによって十全の力を発揮できず敗北に終わった。
　だが当人であるわけがない。無双の英雄がただ血を継いでいる子孫であるはずもない。ならば、おそらくは転生体だろう。「クラス」という言葉の意味は把握できないが、おそらく槍の得手としているが故の発言だろう。
「……何故です。貴方は洗脳をされているようでもない。どうして、これほどの力を持ちながらソロモンなどに力を貸すのですか！　ソロモンは、貴方たち人間にとっても災厄でしかないというのに！」
「彼らが俺を必要としてくれたからだ」
　グレイフィアからの糾弾するような質問に対して、カルナは極めて冷静に単調に、しかし誇らしげに返答する。
「此度のマスターは余計なお世話を承知で聖書の勢力からの人類救済を望んでいる。ならば、俺はこの槍を振るうだけだ。それが願いであり、俺への報酬だ」
　神の瞳に宿るのは、あまりにも高潔な忠義。実母からの願いさえ跳ね除け、異父兄弟と戦うことになっても、最後の最後まで主君への忠誠と友情を貫いた施しの英雄。
「かつての彼らならばともかく、今の彼らに力を貸さない理由などない。やはり俺は運に恵まれているな。ここまで信頼され、これほどの魔力を預けてもらえるのだ。もしや、英霊の中でも最高の幸運度ではないだろうか」
「馬鹿な。ソロモンは貴方を……いえ、貴方たち英雄派を裏切る。あれはそういう男です」
　そう言うのは、『ソロモンの鍵』を編集・翻訳した経験のあるマグレ

ガーだ。彼は人間だった頃にソロモンの正体と『真理』に辿り着いていた。あらゆる魔術を収めた王への尊敬が、嫌悪に反転した瞬間でもあった。

「貴方や貴方の仲間が奴を信用したところで、あれは貴方たちを切り捨てるでしょう。主君は選ぶべきですよ、施しの英雄の名を穢す気がないのならば」

「――俺を侮辱するのは構わない。だが、マスターや英雄派への侮辱を看過するつもりはない。愚かなのはおまえたちの方だ、矮小な箱庭で空虚な繁栄に溺れる魔王の眷属よ。自らが幸福になるために、自ら以外のすべてを裏切ってきたおまえたちに、裏切れぬ何かを見つけた彼らを侮辱する権利などない」

カルナの神の瞳から放たれる視線に戦慄する一方で、アモンとスルト・セカンドの戦いに変化が起きた。スルト・セカンドの火力が明らかに下がった。ガス欠寸前なのだ。攻撃の手が弱まったその瞬間を狙わない理由などない。

「魔神十柱、開眼」

魔神の身体に犇めく真紅の眼球が強い光を宿し、スルト・セカンドを捉える。それを受け、カルナも自らの必殺の一撃――炎を纏った槍を投擲する。グレイフィアとマグレガーが妨害と防御を行うが、あまりにも遅く、あまりにも脆かった。

「数多の残像、全ての痕跡を私は捉える。焼却式アモン！」

「梵天よ、我を呪え（ブラフマーストラ・クンダーラ）！　頭上注意だ、悪く思え」

正面から焼却式を、頭上から灼熱を宿した槍を受け、スルト・セカンドの巨体は砕け散った。

「すまねえ、旦那……姐さん……」

「セカンド！」

最強の戦車、此処に沈む。終焉の巨人のクローンは、世界の終わりを見ることなくその暴走に満ちた生命を終えた。

「……ああ、そうだ。ある時の主君曰く、俺は一言足りないらしくてな」

悲壮と憤怒を濃くするルシファー眷属に、今更ではあるがカルナは

一つの事実を訂正する。
「俺の今生の主君は、そして魔神柱たちを束ねる男は、おまえたちの知るソロモンとは違うぞ。人類を愛しながら、ただの一度も人間を許さなかった王ではない」

■

また別の戦場で、魔神柱十柱が暴れていた。此方は合体も融合もなく十柱が各個で顕現していた。
「美味なり！」
「俺も美味しいものは好きだけどね！　これはちょっと勘弁してほしい！」
「汝ら、病むことなかれ」
「むぅ！　舐めるな、我らグリゴリは不滅だ！」
最強のエクソシスト、上位神滅具『煌天雷獄』所有者デュリオ・ジェズアルドだけではなく、堕天使の幹部アルマロスやタミエルもいた。だが、彼らが総勢で掛かっても魔神柱はその数と質を合わせて圧倒してきた。
この場における最強戦力が魔神柱に集中しなければならない以上、それ以外の存在、邪龍や『魔獣創造』のモンスターたちは相手にできない。
『グハハハハハハハハ！　いやぁ、久しぶりに姫さんも婦長の姐さんもいねえ！　自由だ！　自由って素晴らしいな！　ドラゴンってのはやっぱりこうじゃねえとよ！』
『し、しっかも、敵がわんさかだ！　こ、これよぉ、全部殺していいんだってよお！』
《どれだけストレスが溜まっていたんだ》
アグレアス強奪に不参加である三体の邪龍は天使や堕天使、エクソシストを相手に暴れまわっていた。本日は諸事情につき監視の目がないので好きに怪我が出来るため、遠慮なく蹂躙していた。
「馬鹿な……。グレンデルにニーズヘッグ、アポプスだと！　あれら

は滅んだ邪龍のはずだ！」
「だが現にこうして目の前にいるんだ！　対応するしかない……！　救援の到着まで堪えろ！」
　質の高い邪龍だけではない。英雄派の少年レオナルドが自らの神滅具『魔獣創造』によって生み出すモンスターの軍勢がいた。
　これまではアンチモンスターという方向性で研鑽されていたが、ゲーティアから教えられた『第二の獣』の存在がその思考に変化を与えた。そもそも、『魔獣創造』は地母神の権能に似た能力である。創造は模倣から始まると言われるが、これは想像力の問題である。異世界の存在、特に魔神柱の存在は、レオナルドの想像力の成長に大きく貢献した。彼は正当な手段で禁手に至るのもそれほど先の話ではない。
　魔神柱＋神滅具が予想されていた敵対戦力であったが、邪龍など完全に予想外だった。もしあらかじめ知っていたならば龍殺しでも用意しただろうが、今更言っても仕方がない。
　結果として、魔神柱と邪龍と魔獣でこの場にいる戦力は押され気味だった。必然的に、他の戦場に出向いた魔王やその眷属、会談の警護をしている部隊の支援が到着するまでの時間稼ぎになる。
　混沌とする戦場の中で、二人の女性が向かい合っていた。片方は緑のメッシュが特徴的な聖剣を持った少女、片方は北欧的な顔立ちの青い目の美女。少女の方は恐怖で震え、美女の方は怒りで眉をひそめていた。
「……一体、どうして貴女がそこにいるのですか？　ゼノヴィア」
「し、シスター・グリゼルダ」
　ゼノヴィアとグリゼルダ・クァルタである。
「突然異端者として破門されたと聞いて、私は心配していたのですよ？　なのに貴女ときたらまさかテロリストに……はあ、とにかく帰りますよ。ミカエル様には私から慈悲を戴けるようにお願いします」
「こ、断る。それは嫌だ」
「……何を言っているのですか？」
「私は戻らない。確かに、神のための人生だった。神の身許に行くためだけの人生だった。だけど、違う。それは間違いだった。私の居場

所は、ここなんだ。ここには、私が確かに守りたいと思えるものが、あったんだ！」

「そういうことだ。彼女のことは諦めてくれ」

ゼノヴィアを庇うように、制服の上から漢服を羽織った黒髪の青年が前に出た。その手に携えたシンプルなデザインの槍で自らの肩をトントンと叩きながら、ゼノヴィアを背に庇う。

「俺の仲間が、敵である貴女に謗りを受ける謂れはない。教会が彼女を異端と捨てて、俺たちが彼女を仲間として受け入れた。それだけの話だろう？　まるで彼女の身内であるかのような態度は謹んでもらいたいな」

言いたいことがあるならば戦いで示そう、と青年は槍の矛先をグリゼルダに向ける。

「貴方は？」

「英雄派のリーダーをやっている。三国志の英雄曹操の末裔だ、一応ね。曹操と呼んでくれ。……リーダーというのは、今では名ばかりだが」

自嘲とも自虐とも取れる台詞だが、何故か自慢げな風な態度だった。

「成程。『禍の団』がソロモンに乗っ取られたという話は本当だったようですね」

「半分正解かな」

「ほう、じゃあもう半分はどんなだい？」

現れたのは、子どもほどの背丈の老猿だった。だが、金色に輝く体毛で、人の言葉を喋り、サイバーなデザインのサングラスをかけた猿がただの猿なわけがない。

かの西遊記に語られる妖怪、闘戦勝仏。またの名を孫悟空である。

『おお♪　玉龍（ウーロン）じゃねえか！　よっしゃ昔みたいに殺し合うぜ！』

『ファ!?　何でグレンデルやアポプスがいんだよ！　おまえら滅んだはずだろうが！　おいジジイ、手を貸して――』

《独り占めは感心しないなグレンデル……！》

龍王と邪龍が怪物大戦を始める最中、英雄の末裔と伝説の猿は相

立った。
「これはこれは闘戦勝仏殿。まさか貴方が出てくるとは。てっきり三大勢力以外は、三大勢力が全滅するまで出て来ないと思っていたが」
「何、これも付き合いじゃて」
闘戦勝仏は煙管から紫煙を吐き出す。その仕草一つ取ってもつけ入る隙が窺えない。
「それより坊主、随分と風変りな魔槍だな。良い趣味の武器だが、神殺しの聖槍はどうした？」
「捨てました」
闘戦勝仏が曹操と既知の間柄であったことも目の前の男が現代の聖槍の所有者であったことも驚きだが、その男の口から出た『聖槍を捨てた』という事実はその場にいた全員の度肝を抜いた。神器を抜き出したのに生きているという意味ではない。最強の神滅具を、最高の聖遺物を、何の感慨も後悔もなさそうに捨てたとこの男は宣ったのだ。
だが、伝説に語られる猿だけは心底溜まらないと言った様子で破顔した。
「そうかい、そうかい。おまえさんは、ちゃんとおまえさんになれたのか」
「ええ、そうですよ、闘戦勝仏殿。俺は俺だ。所詮、槍など槍でしかない。聖槍などなくても、俺はこの蒼天の下、どこにでも行けるのですから」
「随分悟りきったのぅ。何ぞ良い指導者にでも出会ったか？」
「どうでしょうね」
肩を竦める曹操だが、その顔を見れば答えは一目瞭然だ。
「そういえば、うちの美猴を知らねえかい？『禍の団』にいるって話なんだが、どうにも内部の状況が分かりづらいんでな」
「さあ。いえ、とぼけているわけでなく、彼を含めたヴァーリチームの行方はほとんど不明でしてね」
「そっかい。……じゃあ無駄話もここまでにしておこうかい。あの坊主頭の武神の面子なんぞどうでもいいが、儂は一応、兵隊としてここ

にいるんでねぃ」
　一時は魔王という立場にあったとされ、その正体は神猿とも星霊とも言われる闘戦勝仏――孫悟空。中国出身である曹操からしてみれば、その威光はまさに憧憬だ。だが、彼はいま、伝説に挑む。
「ええ。俺もいまの俺の価値を証明しよう、俺の……俺たちの『暁の魔神槍』でね」

■

　魔神どもめ、無駄な足掻きを。堕ちた騎士王め、余計な邪魔を。だが、すべて無駄だ。すべて無為だ。もうすぐだ。もうすぐ私が復活するための、最後の駒が揃う。
　早くしろ、我が忠実なる天使よ。
　早く、早く早く、早く早く早く早く早く早く早く早く早く早く早くしろ！　何のために、『真理』を利用しておまえを悪魔に変え、あの役立たずな熾天使どもの記憶を挿げ替えたと思っている！　血が薄れた程度で、自らの使命を忘れたとは言わせんぞ。
　ああ、待っていろ、ソロモン。
　もうすぐだ。復活したらすぐに、おまえを神に祭り上げようとした失敗作の人類を滅ぼそう。その醜さに相応しい獣を使ってな。
　そうすれば、おまえが導くに相応しい人類を作ってやれる！　裏切り者のアザゼルが呼ぶであろう、おまえが心底褒め称えた藤丸立香とマシュ・キリエライトを素材にして！
　だから、だから私のところに帰って来い！

誰が悪なのか

曰く、その悪魔は天使のように美しい。
曰く、その悪魔はルシファーの直後に生まれた。
曰く、その悪魔の名前は『悪』『無価値』を意味する。
曰く、その悪魔はソロモン七十二柱の一柱である。
曰く、その悪魔は賢明で弁舌で狡猾である。
曰く、その悪魔はソドムとゴムラを堕落で染めた。
曰く、その悪魔は――唯一神と救世主を訴えた。その時の弁護人は予言者が、裁判官は魔術王が務めたと伝説では語られている。

■

私――姫島朱乃は今更ながらに後悔している。あのヒトと――父様ともっと話したかった。
聖書に名前を記された堕天使、『神の子を見張る者』幹部、雷光のバラキエル。私の父。
母様はあのヒトのせいで死んだ。本当は父様が悪くないことは分かっていた。
だけど、死んだ。私は謝るどころか、あの日以来顔も見れていない。そして、和解できないまま父様は殺されてしまった。魔神柱の反応を同僚のサハリエルと探っている任務の最中で、魔術王の手によって殺されたそうだ。
この星で最も罪深い人間ソロモン。怒りしか知らぬ王。『真理』を構築した魔術王。
彼の逸話を、真実を知れば知るほどに理解できなくなっていく。私は人間の娘でもあるけど、彼の風評には人間性が感じられない。いえ、本当に人間だったのかさえ疑う部分が多い。
魂レベルで殺害され、指輪の力で蘇り、もう一度サーゼクス様とアザゼルによって葬られた。だけど、本当に死んだのだろうか。救世主の復活とは全く異なる形の復活だ。それこそ、どこにあるか分からな

い九個の指輪に魂が封印されている可能性だってある。どこまでも、不気味だった。

だけど、何らかの形で父様の仇を討つ。父様、朱乃は大丈夫です。親友や仲間たちとともに生きていきます。堕天使も悪魔も関係なく、私のことを好きだと言ってくれた男の子もいます。どうか、母様と共に見守っていてください。

そんな決意を抱えながら、私はこの世界神話会談の警護に参加した。そして、予想通りに出現した魔神柱の反応。

計測された魔神柱の反応は五十六。二十八柱の反応があったポイントには魔王セラフォルー様とその眷属、その他最上級悪魔が向かった。十柱の反応があったポイントが二つあり、片方はサーゼクス様の眷属が、もう片方は堕天使と教会の混成チームが出撃した。七柱の反応があった場所には、レーティングゲームの上位プレイヤーメインとなって出ているそうだ。

そして、私たちが向かっているのは、一柱分の反応だけがあった場所。一度魔神柱を単騎で倒したイッセーくんがいるけど、彼が倒したゼパルが異常に弱かった場合も考えて、タンニーンが同行している。

「タンニーン、本当に私たちに同行していいの？」

「心配は無用だ、リアス姫。俺は一度、獅子王なる者の手下から兵藤一誠を守れなかった。これから向かう場所に魔神は一体しかいないらしいが、他の伏兵がいる可能性もある。万が一のことがあれば名折れだ。何、他の戦場では俺の眷属が戦っている。奴らは強い」

目的のポイントが近くなってきたあたりで、強い光が目に入った。

「っ！　皆、避けろ！　あれは聖なる力の類の攻撃だ！」

タンニーンの警告に従い、私たちは即座に散る。その一瞬の後、私たちがいた場所を聖なる光の塊が通過した。イメージとしてはビーム砲。

地上に人の気配がしたので、其方を見ると三つの人影が見えた。

「アーチャー、何故あの距離で放った？　かわされるのは目に見えているだろう」

「……面目ない。感情が高ぶってしまった」

「ハハハ！　いいじゃないか、セイバー。……龍の首は私たちが競う。それでいいかな？」
「好きにしてくれ」
　全員男性だ。ひとりは赤毛の少年。少女のように美しい。ひとりは金髪の青年。多くの女性を虜にするであろう美男子だ。最後に、外套を着た包帯男。露出が皆無だけど、体格からして男性で間違いないだろう。
　今の攻撃はこの中の誰かがしたとみて間違いないだろう。
　私たちは次の警戒をしながら、地上に近づく。一呼吸の間合いまで近づくと、赤髪の少年と金髪の青年が前に出る。
「龍王よ、おまえの相手は余たちがしよう」
「場所を移さないか？　ここでは君も彼らを気にして本気が出せないだろう」
　最上級悪魔で元龍王のタンニーン。その一撃は隕石に匹敵するまで言われる。この二人は間違いなく強い。確かに、強固な防御手段がない私たちでは足手まといになってしまう可能性がある。
「いいだろう。リアス姫、兵藤一誠、悪いが俺は一旦外れる。この二人は本気で挑まねばならない猛者だ」
　即座に相手の申し出に応じたことと、声音が緊迫していることがタンニーンの真剣さを伝えてきた。元とはいえ龍王で転生悪魔の中でも最強の一角に数えられるタンニーンにこれほど余裕がないなんて……。この二人が英雄派最強かそれに近い実力者であることは間違いないだろう。
　タンニーンがバサリと飛び立つと、二人の戦士はそれを追跡する。
　残された私たちは周囲に伏兵がいないか警戒しながら、包帯男と対峙する。リアスが問う。
「貴方、私たちをひとりで相手にするつもり？」
「逆に問おう。おまえたちだけで俺に勝てると？　魔王も堕天使の総督も天使長もいないのに？　また異世界から神様でも呼ぶか？」
　異世界の神様？　この男は急に何を言い出すのだろう。それに、またってどういうこと？　初対面、よね？

「知っているでしょうけど、私はグレモリー家次期当主、リアス・グレモリー。貴方は誰かしら？」

包帯男はリアスの問いに嘲笑で返事をする。

「名前などないさ。そんなものはとっくの昔に捨てている。どうせ短い付き合いだ。アーチャー、あるいは掃除屋とでも呼んでおけ」

アーチャー……弓兵？　背負っているのは弓矢でも銃でもなく、棺桶だ。まさかあれから弓矢が出るとでも言うのかしら。先程の攻撃はあの棺桶から？　アザゼルならあの棺桶の正体が分かったのかもしれないけど、私たちにはあれがどういうものなのか検討もつかない。

「た、戦いのま、前に聞いておきたいことがあります！」

「ギャスパー・ヴラディか。何だ？　聞くだけ聞いておいてやろう」

「ヴァレリーは、ヴァレリー・ツェペシュは無事なんでしょうね！」

いつもは引っ込み思案のギャスパーくんが包帯男に問う。語調を強くしようと努めているけど声が震えている。それでも問わなければならないほど、彼にとって大事なことなのだ。

ヴァレリー・ツェペシュ。ギャスパーくんと同じツェペシュ派出身のハーフヴァンパイア。ギャスパーくんにとっては恩人。魔神柱による吸血鬼の国襲撃事件で発生した行方不明者の一人でもある。ツェペシュ派に残された資料によれば、彼女こそが神滅具『幽世の聖杯』の所有者の模様だった。そしてアザゼル曰く、聖杯の乱用は所有者の精神を歪ませる可能性があるという。

「ヴァレリーか。ああ、彼女なら問題ないとも。今頃は、共に生涯を歩いていく親友と楽しく過ごしているだろうさ」

「う、嘘です！　適当なことを言わないでください！」

「それが真実なのだから仕方がないだろう？　彼女の幸福を願うなら、おまえはここで死んでおけバロール」

さっきからこの男の言動は意味不明だ。どうしてギャスパーくんを指して、ケルトの魔神の名前が出てくるのか。確かに、彼の神器はかの魔神にちなんだ名称がつけられているけど……。

「――無駄話はここまでだ。いつもやっている掃除に、私情を混ぜ過

ぎだな」
　男は顔の部分の包帯を全て取る。そこにあったのは、火傷のような傷で覆われた醜い顔だった。左目が赤く濁り、そこから放たれる視線はゾッとするほどの殺意を孕んでいた。
「ヴァレリーやトスカには悪いが、おまえたちは全員死ね」
「聖魔剣よ！」
　裕斗くんが聖魔剣を男の周囲に出現させる。だが、男は慌てた様子もない。
「鬱陶しいな」
　男の棺桶から同等の数の剣が射出される。あれはおそらく聖剣？
　彼は『魔剣創造』の聖剣版である『聖剣創造』の所有者……いえ、だとしたら棺桶から出す必要なんてないはず。あれはアザゼルの人工神器と同じ類のものなんだわ。
　棺桶から出た聖剣が、裕斗くんの聖魔剣とぶつかり合い、互いに砕ける。禁手である『双覇の聖魔剣』と同等だなんて。
「聖十字架起動。宝具三重展開」
　男の棺桶が再び開く。また聖剣でも射出されるのかと思ったが、違った。
「霧の鎖！」
　鎖のようにも見えるそれは、一瞬で私たちの身体の周囲に展開され、拘束されてしまった。しかも尋常ではない強度だ。どれだけもがいても外れそうにない。それどころか、鎖が触れている部分に強い痛みが走る。これは光を受けた時のダメージに似ている。魔力が吸い取られているようですらある。
「な、何、これ……！」
「俺オリジナルの拘束術式だ。ベースとなっているのは結界系神器最強の神滅具、『絶霧』。おまえたち程度ではどうあがいても解除はできない」
　アザゼルが会談前に要注意だと告げていた上位神滅具の一つ、絶霧。よりにもよってテロリストの手に渡っていたなんて。
　私たちが拘束にもがく中で、包帯男はイッセーくんの方に歩いてい

く。イッセーくんも男の接近を見て必死に動こうとするが開放される様子はない。
「く、くっそおおお！」
「兵藤一誠、まずはおまえを殺す。仲間が死ぬ無力を味わわせるのもいいが、おまえは危険だ。機を逃す前に殺す。……おまえを殺すなら、こいつを使うか。もう『槍』としては使わないと思っていたがな」
包帯男は棺桶から一本の槍を取り出した。それは神々しい輝きを放つ槍。悪魔にとって最大の天敵とも言える武器の正体に、私たちは即座に辿り着く。
「『黄昏の聖槍』、最強の神滅具……！」
「最強、ね。はっ、虚しい響きじゃないか。たかだか槍だろう？」
最強の武器をたかだか呼ばわりなんて……。いえ、神滅具を二つも所持しているのならばその物言いは傲慢であると同時に当然のものなのかもしれない。
「神器はひとりひとつしか生まれ持ってこないはず……まさか本来の槍の持ち主から奪ったの？」
「逆だ、俺が生まれ持った神滅具はこの槍の方だよ。霧の方は仲間から譲ってもらったんだ」
そんな馬鹿な話があるわけがない。リアスもそう思ったのか、拘束にもがきながら訴える。
「そんなことを言って本当は奪ったんでしょう？　堕天使の技術には神器を抜き取るものがあるわ……貴方たちはそれを悪用した。違うかしら？」
「……奪った、奪ったか。まあ、結果的にそうなったものもあるよ。獅子王の戦斧とかな」
神滅具を三つも持っていることに、私たちは絶望するしかなかった。しかも、この男は明らかに全力を出していない。私たちなど、最初から相手にならなかったのだ。
「だが、盗品にしろそうでないにしろ、獣になっていないこの悪魔を殺すには十分だ！」
包帯男は聖槍をイッセーくんの腹部に突き出す。接触部分から煙

が見える。悪魔の身体が聖槍の力によって浄化されようとしているのだ。本来、悪魔が聖槍にあのように攻撃されたら即死だ。

イッセーくんの身体は現在複数の生命の細胞が混ざることで複雑になっている。そのおかげかもしれない。イッセーくんはまだ生きている。それでも即死でないだけで、重大なダメージを受けていることには違いない。

「がぐぁ……！」

苦悶の声を漏らすイッセーくん。私たちは皆、その様子を見ていることしかできなかった。

「イッセー！」

「イッセーくん！」

「イッセー先輩！」

「そのまま黙って見ているがいい。この男の最後を」

包帯男は槍を一度引き抜き、再びイッセーくんに向ける。

「そういえば、おまえはゼパルを倒したそうだな？　ましてその力を取り込んだ？　おまえが兵藤一誠というだけで腹立たしいというのに、よりにもよって彼らの力がおまえに利用されているのだから、不愉快の極みだよ」

動け、私の身体。このままでは彼を失ってしまう。母様のように。父様のように！

「さらばだ、兵藤一誠。己の罪を知る前に死ぬがいい」

だが、イッセーくんと包帯男の間に、予期していなかった人物が立ちはだかった。

■

「ちょうど良かった……いえ、なんとか間に合ったようですね」

私――リアス・グレモリーは絶望していた。もう駄目かと思った。援軍なんて聞いていなかったけど、これがきっと運に恵まれているということなのね。

この場に現れた救援は二名。

レーティングゲーム界の不動のチャンピオン、『皇帝』ディハウザー・ベリアル。旧魔王の実子、超越者のひとり、リゼヴィム・リヴァン・ルシファー。

冥界に軟禁状態にあるはずのリゼヴィムがこの状況を見て笑う。

「うひゃひゃひゃ！　何とも愉快な――」

「リゼヴィム・リヴァン・ルシファアアアアアアアアア！」

怒号とともに包帯男は聖槍を突き出すが、リゼヴィムに触れる直前で槍が消えた。

「無駄無駄！　俺の『神器無効化』がある限り、神器じゃ傷一つ付けられないって！　宝具化されていようと、神器は神器だからね」

「なら、これならどうだ？　行くぞ、デュランダル！」

包帯男が棺桶から取り出したのは、聖なる剣。悪魔である私たちには無条件で寒気を与えるもの。しかも、あれはゼノヴィアとかいう教会の戦士が持っていたはずのデュランダル。まさか神滅具だけではなく聖剣まで奪って使いこなしているというの？

「ちょ、それは反則でしょ！」

「戦いに反則も判定負けもあるか！」

聖剣を振るわれながらも、リゼヴィムは紙一重でかわす。流石は旧魔王の実子といったところなのかしら。

「うひゃひゃひゃひゃ！　嫌われたもんだねえ？　そっちの俺はどんなことをしたんだい？」

「貴様ぁあああああ！　貴様が、貴様さえいなければ、俺は！　泥になど塗れずに済んだものを……！　アーシアを、皆を、失わずにいられたんだよ！」

「うひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！　……何言ってんのかさっぱりだ。何を言いたいのかは分かるけど！」

「ああ、そういう奴だよな、おまえは……！」

強い違和感を覚える会話だった。包帯男はリゼヴィムに憎悪を抱いているようだけど、リゼヴィムはその件を知らない。だけど心当たりはある。そんな感じかしら。

敵が引き付けらている間に、チャンピオンが私を拘束していた術式

を『無価値』の魔力によって解除する。自由になった私はイッセーに駆け寄る。
「イッセー！　お願い、死なないでイッセー！」
「ぶ、ちょう」
「……死の直前といった様子ですね、リアス姫。私には彼を救済する手段がありますが、賭けますか？」
それを聞いて私は安堵した。良かった。イッセーが犠牲にならないで済むのね。ベリアル家の特性は『無価値』だから回復には使えないはずだけど、不死鳥の涙でも持っているのね。運が良かった。
「お願い、イッセーを助けて！」
「ええ、彼を解放しましょう」
そう言って、ディハウザー卿は――イッセーの傷口に手のひらに収めていた何かを押し込んだ。
「ギャアァイアアアイアアアイアアアイアアアアアアアア！」
悲鳴。だけど、傷口を抉られたような反応じゃないわ。私はディハウザー卿を問い詰める。
「イッセーに何をしたの！　いま、彼の身体に何を入れたの!?」
「ソロモンの指輪だよ、リアス姫」
悲鳴が止まったかと思えば、イッセーが立ち上がる。
良かったと思うと同時に、イッセーは私やディハウザー卿から距離を取った。その表情には強い苦悶が浮かんでいるが、それ以上に敵意と混乱が顕著だった。
「どういう、ことだ……！」
でもおかしい。イッセーの目が、赤い？
「兵藤一誠……否、魔神ゼパルか」
魔神、ゼパル……？　それってイッセーの倒した……ま、まさか相手を倒したことでイッセーの身体が乗っ取られていたとでも言うの？
「何故だ。何故貴様がここにいる。貴様がどうして、ソロモンの指輪など持っている……！　貴様は我々がこの世界に来て初めて接触し

た悪魔だ。貴様は復讐のために我らとの協定に同意した。だからこそ監視していた。だからこそ観測していた。我々が貴様らを裏切れぬように、あるいは裏切っても問題がないように、情報は厳選して渡していたはずだ……！」

「ベリアルのことか。初対面で贋作呼ばわりは実に失礼だと思ったが、まあ、私は本当に偽物だから反論はしようがないな。しかし魔神一柱にだけ担当させるのは失敗だったな。君達を騙すなど因子一つで自在だと知っただろうに。一介の悪魔と侮った君達の失敗だ」

何よ、それ。チャンピオン、どうして、まるで、貴方が悪魔を裏切っているような台詞を言っているのですか？

「誰だ。貴様は一体、誰と組んでいた？」

「全員だ」

ディハウザー卿――いえ、ディハウザー・ベリアルからの返答は実にあっさりとしたものだった。

「私がここにいるのは、唯一神に与えられた使命であり、魔術王の計画の一部であり、明星の王子の理想の序曲であり、獅子王との交渉の結果であり、古き悪魔たちへの復讐のためでもあり、君達魔神柱の慢心のおかげでもある」

え？　彼の口から並べられた単語は、私の理解を超越したものだった。

「例えば、獣を発見したばかりのリゼヴィム陛下と復活したばかりのソロモンを引き合わせたのは私だ。獅子王とソロモンを会わせたのも私だし、昏睡状態の兵藤一誠の下に災厄の獣を連れて行ったのも私だ。ハーデスに指輪の情報を渡したのも私であり、京都妖怪が必死に隠していたキングゥの存在を外部に流布したのも私だ。当然、獅子王によるアグレアス襲撃が君達の強奪作戦開始より少しだけ早かったのは、私が獅子王サイドに情報を流したからだ」

それもこれもどれも私だ、とディハウザー・ベリアルは宣う。

「自分達の行動を疑うのならば、何故一番に私を取り入れようとしたのかを考えておくべきだった。神の計算にはなかったのだろうが、私は優秀に生まれてしまったのが原因かな」

「き、さま……！」

「発端は、私のルーツになる。魔術王の壺の一件の共犯者は、初代アスモデウスと初代ベルゼブブ、当時のアスモダイ当主、そして初代ベリアルとなる天使、すなわち私の先祖だ」

何を……何を言っているの？　初代の魔王や七十二柱がソロモンの共犯者だなんて話、信じられるわけない。でも、それ以上に私には聞き捨てならない単語が聞こえた。

「リアス姫、不思議そうな顔をしているね。私の発言は、まるで『ベリアル』という名門悪魔が三千年前まで存在していなかったかのように聞こえただろう。実際その通りなのだ。私の先祖は、初代ベリアルは天使だった」

天使が邪悪に染まったとしたら、それは堕天使のはずでしょう？　天使が悪魔になる方法なんてない。まして三千年前では『悪魔の駒』もないんだから。

「いや、『ベリアル』という悪魔の一族はいたのかもしれない。あるいは別の名前で七十二柱序列六十八位にいたのかもしれない。だが真相は分からない。私たちにも魔術王にも唯一神にも分からない。『真理』の呪いとはそういうものだ。人間のために作られたが、あれは異形の認識にさえ作用する。あらゆる知的生命体に干渉する。そして、それを実感できるものはいない。『真理』について語られている事象はすべて『おそらく真理の影響だろう』という推測に基づく確実性のない理論でしかないのだよ。だから――『真理』の影響で間違いだとされている？　俗説〟が真実である場合もあるのだよ。この話の笑えるところが、異形たちは自分が『真理』の影響をそのレベルで受けていることを分かっていながら認めていないところだ。ソロモンの所業に恐怖や憎悪を抱きながら、未だに彼を『人間如き』と舐めている。自分達超常の存在が、人間の術式如きに記憶を書き換えられるはずがないと侮っている」

つまり『ベリアルという悪魔がかつては天使だった』というのは人間達の誤認ではなく、真実だったというの？　そしてその事実に悪魔はずっと気づかなかった？　違和感を覚えたとしても、全ては『真理』

のせいだと自己完結してしまったから？

「私の血には神の術式が仕込んであった。時が来るまでは悪魔として生き、人類悪召喚に成功した時に、使命の記憶が蘇る。魔神よ、そしてそれらを率いる王よ。君達はもう少し私を信用すべきだった。私を同志としてではなく駒として見ていた以上、この結果は必然だった。君達の体内に仕掛けられた因子と同じ物が、人間だけではなく異形の体内に仕掛けられているかを考えるべきだった」

だとしても、貴方は悪魔でしょう。初代が天使だったんだとしても、貴方には私たちと同じ悪魔の血が流れているはずなのに、どうして私たちを裏切るの？

「だが、そんなことはどうでもいい。私にとって、魔神の悲哀も、女神の願いも、魔術王の憤怒も、明星の王子の悪意も、唯一神の遺志さえどうでもいい。貴様らの思惑など知ったことか。興味の外で、関心など皆無だ」

その表情に浮かんでいるのは、愛する者を穢された憤怒と憎悪。

「これは復讐だ。くだらない『王』の駒の秘密を隠すために殺された我が従妹クレーリア・ベリアルに捧げる鎮魂歌だ。すべての悪魔の断末魔を以って、我が復讐を完成させる」

「悪魔への復讐を望むなら何故、我々を裏切った！　神やソロモンの遺志に従うなら悪魔の滅びを拒絶しているわけでもあるまい。最大の復讐相手である初代バアルを殺されたことが気に入らなかったか？」

「いいや？　あんな大物ぶった化石の死は然程問題ではない。単に君達の計画が気に入らなかっただけだ。焼き尽くして再利用されて終わり？　そんな苦痛なき有意味な絶滅など、認められるはずがないだろう」

ディハウザー・ベリアルは右手を掲げる。彼の人差し指には指輪が嵌められていた。

「これは三千年前にソロモンがすり替えた指輪。限りなく本物に近い偽物だ。違いは容量くらいで、魔法や魔力を行使する上ではそれほど差がない。そうでなければ神の目を誤魔化せるはずもない。――神

の目は誤魔化せても、ベリアルの目は騙せなかったわけだが。この指輪自体、本物の指輪で作られたもので、三千年も同じ場所にあったからだろうね。本物の九個と連動しているのだよ。では最後の仕上げに入らせてもらおう」

「ディ、ハ、ウザー、ベリア、ル……！」

ディハウザー・ベリアルは命じるようにその言霊を吐き出した。

「赤龍帝よ、『取り繕うな』」

イッセーの表情が大きく歪んだ。

「リアス・グレモリーの『兵士』よ、『君が見て来た人間を思い出せ』」

止めなきゃいけないと理解しているのに、私は動けない。それは恐怖があるから。ここで何かをすれば、もっと悪いことが起こるんじゃないかという不安が、私の足を止めた。

「兵藤一誠よ、『人間の本質を受け入れろ』」

人類悪顕現

俺――兵藤一誠の意識は自分の心の中にあった。えっと、あっち側の言い方をすれば心象風景ってやつなのかな？　普段歴代の赤龍帝が沈黙しているだけのこの空間は、赤黒い泥に満ちていた。先輩方は抵抗する様子もなく泥に沈んでいる。

俺の身体に指輪――一個ではなく九個――が入れ込まれると同時に、強い感情が伝わってきた。一人や二人どころじゃない。数えるのも馬鹿らしいほどの、三千年の全人類の感情。それらが津波みたいに押し寄せてくる。

最初に伝わってきたのは、世界を焼却せんとばかりの王の怒り。期待という名の進化の強制。

『俺の国を犯した悪魔を許さん。俺の民を殺した堕天使を許さん。俺の財を穢した天使を許さん。俺に頼ってばかりの人間を許さん。俺の理想を否定する神を許さん。人間はもっとやれるはずなのに、どうして誰もそれを分からない！　自分から動かぬというのなら、俺が動かざるを得ないようにしてやる……！　おまえたちは、おまえたち自身のために、もっと先に行かなければならないのだから！　未来に生きなければならないのだから！』

見たくもなかった悲痛だった。

『もう戦いたくなんてない』『主よ、この身を委ねます』『殺す殺す、殺す！』『おまえのような男は生きてはいけないんだ！』『私はローマを許さない！』『ダメです、逝ってはいけない』『おかあさん、どこ？』『また、失敗か……』『やーい、おまえの父ちゃん人殺しー』『嘘つき』『こんな、こんなはずではなかった！』『この我の子を孕めるのだ、有り難く思え』『よくも、私を忘れたな！』『ひゅー！　こいつらはいい奴隷になりそうだ！』『生贄は、あのみなしごにしよう』『こわい、こわい、こわい』『復讐してやる』『食い扶持を減らさないと今年は厳しいな』『お願い、貴方だけでも生きて！』

聞きたくもなかった悲鳴だった。

『おとうさ――』『誰か、誰か助けて』『ふざけるな、俺が一体何をしたっ

てんだ』『騙される方が悪いんだよ』『かわいそう』『来るな、バケモノ！』『安心しろよ、おまえの奥さんは俺が可愛がってやる』『私の発明品が、どうして戦争に使われる？』『いやです！　この子は、あのヒトと私の子です！　絶対に渡しません！』『あいつがいなければ俺が出世できたのに』『やっぱりストレス発散は狩りに限るな』『判決、被告は魔女である』『おまえもかブルータスぅ！』『愛していました』『やめてくれ』『一緒に死のう』『もっと早く来いよ、役立たず』『おまえ、生きているだけで他人の迷惑だよな』『金を寄越せ！』『神様がなんとかしてくれると思った』

　知りたくもなかった悲劇だった。

『死ぬがいい、うつけめ』『ほざいたな……！』『壊れちゃった』『私は、私はまだ戦え――』『おなか、へったよぅ』『彼女は、貴様の言葉を信じて戦ったというのに！』『シータ、どこにいる？』『さあ、これでブリテンは滅んだぞ！　どうするアーサー！』『私は決して、このような勝ち方がしたかったわけではない！』『許さんぞ、ディルムッド！』『さあ、神の為に死ぬのです！』『ちっ、これもう使えないな。おい捨てとけ』『会社のために死んでくれ』『醜い』『必要な犠牲なんだ』『アンタなんて産むんじゃなかった』『どうか私を恨まないでください』『違う、違う！　わ、私はそんなことしていない！』『私は、王になるべきではなかった！』

　これはどこかの獣が見ていた世界。我が半身が三千年教え込まれた人類史の罪にして、これから俺に刻み込まれる人類史の業。

『たすけ、て』『おまえは今日から私の眷属だ！』『今回の実験は失敗に終わったか。次の被験体を用意しろ』『恨むなら神器を作った聖書の神を恨むのだな』『人間風情が！』『飽きちゃった。トレードしよっと』『神は……死んでいた？』『レアな神器だ。抜き出してアザゼル様に献上しなくては！』『下僕は主人の言うことを聞くものだろう？』『アーメン！』『レアものは転生させたら面白いぞ』『どうして彼女が異端となるのですか!?』『ああ、全部僕が仕組んだことなんだよ』『私は――死にたくない』『悪魔が、神の使徒を愛してはいけませんか？』『僕たちから奪った幸せの数だけ、死を刻め、異形ども……！』『父よ、何故

私を見捨てたのです』『人間よ、俺の屍を超えろ。その先が、真の人類史である！』

これは全部じゃないはずだ。これは一部だけのはずだ。そうでなかったら、とっくの昔に世界なんてなくなっている。こうでしかなかったら、人類なんて滅んでいる。だから、綺麗なものだってある。美しいものだってある。正しいものだってある。そういうものがあったからこそ、人間はここまでやって来れたんだ。

〝赤龍帝よ、取り繕うな〟

これが全部じゃないと同時に、これもまた間違いなく真実なんだ。これもまた誤魔化したり目を逸らしたりしちゃいけない現実なんだ。だからこその覇龍だった。だからこその歴代赤龍帝だった。

俺が見ようとしなかっただけで、俺が聞こうとしなかっただけで、俺が知ろうとしなかっただけで、俺が運良く受けなかっただけで、こんな悲劇はこの星には吐いて腐るほどあったんだ。

俺だって、そうだろう？　自覚したくなかっただけで、本当は理解していた。俺は見殺しにされた。俺は利用された。俺は再利用された。俺は、死んだんだ。好き好んで手に入れたわけでもない、持っていたことを自覚できなかった龍の力のせいで、殺された。騙されて殺された。殺すだけなら殺すだけでいいじゃないか。何で堕天使が人間の恋人ごっこを楽しむんだよ。内心で笑っていたんだっけ？　ああ、その堕天使も俺と関係のない場所で死んだらしいけど。そして、俺を見殺しにした女は、殺せない。一度愛してしまったから、殺せない。間違っていると分かっているけど、俺にはそんなことできないんだ。少なくとも、愛した女を自分じゃ殺せない。

こんな世界の中で、この醜さを否定できるほど輝かしいものなんて、俺は見てきただろうか。温かいものを、優しいものを俺は知っているだろうか。

〝リアス・グレモリーの『兵士』よ、君が見て来た人間を思い出せ

〃

考えるまでもないじゃないか。俺はそういうものの中で育ってきたんだから。

――イッセー、おはよう

――早く起きなさい、イッセー

父さん、母さん。

――おい悪友、おっぱいについて語り合おうぜ

――この前貸したエロＤＶＤ返せよ

――まったく、童貞臭いわねー

松田、元浜、桐生。

――ボウヤ、いいおっぱいには出会えたかい？

紙芝居屋のおっちゃん。

――悪魔くんは楽しい奴だね

――ミルキーを一緒に見るにょ

――悪魔って意外といいヒトなんですね

森沢さん、ミルたん、スーザン。

――イッセーさん、また必ずお会いしましょう！

あんなものを、ゼパルから『ＩＦ』の可能性なんて見せられたからだろうか。一度しか会っていないのに、アーシア。こんなにも君に会いたい。

あの当たり前の日々があまりにも美しく、遠く感じる。ああ、そうだ。悪魔に転生する前の俺が普通に送っていた日常。あれこそがこの憎悪を否定できるほど美しいものだったんだ。駒王会談のテロの時、ヴァーリにだって言ったじゃないか。俺の両親を馬鹿にするなって。あいつにとってはつまらないのだとしても、俺にとってはかけがえのない家族なんだ。

あそこに戻りたい。戻らないといけないんだ。そう考え直そうとした俺だったが、足が前に進まない。泥から這い上がってきたゾンビみたいな奴の手が、俺の足首を掴んでいた。

『……ふざけるな』

泥だらけのゾンビはどんどん増えていく。足だけじゃなくて腰や肩まで掴んで、俺のことも泥に引きずり入れようとしてくる。筋違いの怨嗟を吐きながら。

『私たちは奪われたのに！』

『僕たちは最初から持っていなかったのに！』

『どうして、おまえは失っていないんだ！』

『悪魔のくせに！』

『悪魔が人間みたいに生きられるなんておかしい！』

『――死ね』

　泥に飲まれかけた俺を襲うのは無限の怨嗟。

『死ね！』

『死んでしまえ、無責任な赤龍帝め！』

『おまえくらい強いなら、何かできるはずだろう！』

『なんて悪い奴なんだ！』

『殺せ！』

『殺すんだ』

『私を不幸にした者を、全員殺せ！』

『それがおまえの義務だ！』
『自分の役割から逃げるな！』
『私の子供が死んだのはおまえのせいだ！』
『おまえがやらないなら我がやる！　その身体を寄越せ！』
　なんて醜い。どうして俺が責められるんだよ。俺は関係ないじゃないか。こんなのが人間の本性だっていうのかよ。ふざけんなよ。そうじゃないはずだろう。これが全部じゃないって思い出したばかりなんだ。そりゃダメな部分もあるのかもしれない。だけど、だけど

――

〝兵藤一誠よ、人間の本質を受け入れろ〟

　そうだ、これこそが人間の本質だ。抵抗は無理だった。対処は無為だ。このまま、この泥に溺れてしまおう。泥に染まって、あの悪魔を殺そう。俺が死ぬのを見過ごした女を殺そう。俺を殺した元凶を全部壊してしまおう。
『諦めるな、兵藤一誠』
　……ゼパルか。
『おまえは、我らとともに理想を歩くに相応しい。悪魔に堕ちながら、人の思想を取り戻したおまえこそが。だが、これは駄目だ。こんなものは、人類悪ですらない。復讐に生きるのはいい。恩讐に死ぬのもいい。誰かの無念を晴らそうというのも、私たちには称賛できる』
　だったら何で止める？
『この悪意に従って復讐などしても、おまえの裡から出でた感情など皆無だろう！　おまえには、おまえが感じ取った復讐心への哀れみさえない。義務感など覚えていないのに応えようとするな。望まれるままに都合の良い装置に成り下がろうとでもいうのか。そんな愚行がどうして是となる！』
『その通りです、乳龍帝よ。貴方はこんな終わり方をしてはいけない』
　突如俺の心象風景に出現した謎の声と光。その光に当たった泥が蒸発するように消え去っていく。

泥がなくなったことによる解放感で、思考が冴える。確かゼパルに教えてもらった世界線で俺が何かの拍子で干渉してしまった異世界の神様。魔神柱たちが暫定的に『E』と名付けた世界の精霊。

『……異世界の神か』

『ええ、そうですよ、異なる世界の魔神よ。私は乳神様に仕える精霊です』

『並行世界の閲覧により我々は其方を既知ではあったが……本当におまえのようなふざけた異形が実在していたとは。おまえの存在を知った時、情報室、観測所、覗覚星総員二十七柱がパニックを起こしたんだぞ』

『それは貴方たちの都合でしょう』

ま、まあ、ゼパルの気持ちも分かるけど、その実在自体を抗議するのも当然だよな。そこにあるってだけで罪になったら……なったら、どうなるんだ？　指輪に流れていく悪意は、存在するだけで罪なのか？　彼らは被害者なのに。彼らは誰にも救われなかったし、救えないのか？

あと、並行世界のテレビ番組はこっちでは着想すらされてないんだからその呼び方はやめて欲しいです！

『乳龍帝よ。乳神様の加護を、貴方に。貴方の乳への愛で、諸悪の根源たる真理の獣を打倒するのです。人間も人外も、貴方になら救えます』

『どうしてだよ』

消えかけの泥から放たれる疑問の皮を被った殺意。

『どうしてこいつには力を貸すのに、僕のことは救ってくれなかったんだよ！』

『そうだ』

『儂たちだって力を求めていた！』

『どうして、今だけなんだ！』

『あ、ちょっと黙っていろ、乳の精霊！　この空気、私には経験が――』

だが、ゼパルの制止は間に合わず、乳神の使いは言葉を紡ぐ。最後の栓を引き抜く言霊を吐き出す。

『どうして、貴方たちを救わなければならないのですか？』
　きっと他意はないんだろう。純粋に『異世界の無関係な人間を助ける意味』が分からなかっただけだ。だけど、善性など欠片もない悪意だけの泥に対して、それは最悪の回答だった。その瞬間、地面から泥が一気に溢れ出した。さっき綺麗になったはずの空気がまた淀んで、泥が俺を飲み込んでいく。
『――見捨てた』
『こいつらは俺たちを見捨てた』
『僕は見捨てられた。見捨てられた。見捨てられた』
『可哀そうな私は可哀そう可哀そうな私って可哀そう可哀そうな私可哀そう可哀そう』
『この世界だけじゃない』
『世界なんてどれもクソだ』
『こいつは殺すべきだ』
『全員全部死ぬべきだ』
『俺がこんなに可哀そうなのに、幸せな奴なんていちゃいけないんだ！』
『みんな、不幸になっちゃえ！』
『だから死ね！』
『殺してしまえ！』
『赤龍帝、おまえがやれ、やるんだ、やらないといけないんだ！』
　俺の中に、泥が混ざっていく。俺を中心にして渦巻みたいに、色んなものが集まっていく。
『や、やめるのです乳龍帝よ！　わた、私をと、取り込まないで、い、いやあああ！　わ、私が、私たちが、溶けていく……！　いや、いやいや殺されたくない……！』
　じゃあな、ゼパル。おまえともさようならだ。
『やめろ……頼む、やめてくれ！　この状況は私たちの不手際が招いたものだ！　待て、待つんだ兵藤一誠！　この場面なら、私は道連れにすべきだろう！　切り離すな！』
　悪い。その『期待』には応えられない。俺が今の今まで覇龍を使わ

ずに済んだのは、おまえのおかげだからな。人間的な感性とは違うんだろうけど、おまえが俺を心配してくれているのは分かっていた。だから、これが俺の最後の良心ってことで頼むよ。

『その善性は不要である！　このような形で生まれた存在は、最早人類悪ですらない！　こんな憎悪の塊がどんな理想を抱き、どんな愛を証明できるというのだ！　無価値で無意味だ！　おい、話はまだ終わって……』

いいや、終わりだよ。ありがとう、異世界の魔神。次会う時は、ドライグみたいに多分敵だ。俺以外の全部は、一人残らず敵だ。

泥に沈んでいく視界の中、会ったこともない王様みたいな男が拍手を送ってくれた。

「ありがとう、兵藤一誠。世界を救うために、その身を捧げた生贄（ゆうしゃ）よ。これで俺の理想が成就する。あまりにも長い旅路だった。あまりにも長い三千年だった。やっとだ、やっと俺は償える。これで、俺は主を超えられる。おめでとう！　これで人類は進化できる！」

まったく心が込められていない感謝と祝福だ。なんて空々しい。なんて白々しい。

ああ、そうか。分かった。

この王様、この泥に触れた相手が誰でも良かったんだ。この男が本当にしたかったのは救済じゃない。証明なんだ。

俺の意識は泥に沈んだ。

■

以上の決意を以って、彼のクラスは決定された。

「我、目覚めるは」

〈始まるね〉〈いや、終わるのだ〉

歴代最弱の赤龍帝など偽りの称号。

「己が罪を神より教えられし赤龍帝なり」

〈結局そうなのですね〉〈そうじゃな、最後までこうなのじゃな〉

其は人間が求め続け、人類史の業を背負わされた大災害。

「無限の道を棄て、夢幻の果てに沈む」
〈我々から奪われるのは――〉〈世界から与えられるのは――〉
その名をビーストＤ／Ｌ。この星の人類悪の一つ、『期待』の理を持つ獣。
「我、赤き覇道の獣に堕ちて」
〈いつだって愛でした〉〈いつだって痛みだった〉
悲劇と奇跡を担い、救済と勝利を強制された偶像。
《おまえたちは、最後まで滅びを選択するのだな！》
「汝らのすべてを忘れ去ろう」
それこそが、兵藤一誠の獣性である。
『Ｊｕｇｇｅｒｎａｕｔ Ｄｒｉｖｅ Ａｎｄ Ａｄｖｅｎｔ Ｂｅａｓｔ !!』

赤黒き汚泥

圧倒的だった。

「焼却式！」

「汝らの全ては不認である」

「とても温かい！」

「戯れの時来たれり」

「ギャハハハハハハハハハハ！」

「不要不要不要ッ！」

「限りある命……なんと羨ましい！」

セラフォルー・レヴィアタン率いる悪魔の部隊は、クラン・カラティンなる魔神柱の融合体に圧倒されていた。時間の経過とともに、悪魔たちの生命を奪っていった。セラフォルーの眷属さえも例外ではない。

「申し訳ありません、セラフォルー様……」

時間が経てば経つほどに仲間が倒されていく。自分達が一生勝てないと思っていたような実力者たちが、呆気なく殺されていく。勝てる勝てないどころの相手ではない。このクラン・カラティンの戦闘能力は低く見積もっても主神級だった。

この怪物を殺すにはもっと純粋な火力が必要だった。インド神話の最高神や帝釈天クラス、あるいは全力になったサーゼクス・ルシファー。セラフォルーは間違いなく強いが、それでもまだ足りない。

「くっそ！　何だってんだよ！」

毒づく匙元士郎。彼を含めたソーナ・シトリーの眷属は足手まといにならないように逃げるので精一杯だった。堕天使から渡された人工神器を取り出す余裕さえない。

だが、己の無力さ以上に匙の心を蝕む現実があった。それは――魔神柱の側が決して絶対悪ではなかったということだ。否、悪ではあるのだろう。悪魔という種族から見れば彼らはどうしようもないくらい社会悪だ。もしも彼らの言うことが本当ならば、異世界出身の彼らは彼らの言う《被害者》たちとは無関係だ。だが、それは間違ったこ

となのだろうか。関係のないものを報酬もなく助けようとするならば、それは正義ではないのか。

何が正しい？　誰が正しい？

否、匙にはそんなことを考える権利などないだろう。何故なら、彼の家族が生活できているのはソーナのおかげだ。ソーナのおかげで、幼い妹や弟は食べていられる。仮に悪魔が悪だとして、仮に魔神柱の方に大義があるとして、彼に選択肢なんてものはないのだ。考える権利もない。

「滅茶苦茶だ。一体でも強いのに二十八体も合体しているなんて！」

嘆くような悲鳴に対して、クラン・カラティンは嘲ることもなく応じる。

「これは元より我らの至った顕現ではない。数多の男と交わりながら、一人の勇者に執着した淫らな女王の発想だ。それを改定し改善し改良した。我らには発生しない感情。我らには発現しない思考。人間は面白い。人間は興味深い。我々にも貴様らにもない輝きを見せてくれる。――では、この茶番も閉幕だ」

その巨体に犇めく赤黒い眼球すべてがおぞましい光を帯びる。それを見て、セラフォルー・レヴィアタンは最高の魔力を篭める。

「負けない……私は負けられないのよ！　冥界の未来のためにも！　何より、ソーたんのために！」

「これより二十八の命題を唱える。極点に至る為、汝の真理を焼き尽くさん」

「零と雫の霧雪（セルシウス・クロス・トリガー）！」

「焼却式クラン・カラティン！」

凄まじい魔力の暴力。女性悪魔最強のひとりである魔王セラフォルー・レヴィアタン。だが、所詮は悪魔の中で最強程度でしかない。強者が多いとされる新世代の悪魔だが、聖書の悪魔という疲弊し、衰退し、絶滅しそうになっているものの中の最強でしかない。圧倒的にクラン・カラティンに分があった。

魔力の衝突による衝撃波。ソーナの眷属も思わず防御障壁を創り出すが、すぐに崩壊する。そのまま背後へと吹き飛ばされてしまっ

た。地面に激突した衝撃が走る。立ち上がろうとするが、衝撃波によって動くこともままならない。

衝撃波がようやく止み、地面に突っ伏したソーナが目を開けるとそこには満身創痍になったセラフォルーの姿があった。お気に入りの魔法少女の衣装もボロボロだ。それでも無理やり笑顔を作ると、妹に問いかける。

「だいじょうぶ、そーたん？」

「お姉様！」

セラフォルーが庇ったのだろう。ソーナには目立った外傷はなかった。

しかしクラン・カラティンにはほとんどダメージが入っていないようだった。多少凍結した部分もあるが、相手の動きに支障があるようには見えなかった。駒王会談乱入時、どれだけ本気ではなかったかということを思い知らされた。

「しぶとい。実にしぶとい」

「生き恥を晒すか」

「無様無様無様ッ！」

「だがこれで終わりだ」

「告げるはセラフォルー・レヴィアタンという汝が音韻。〝四大魔王〟の一柱／真実／完全消滅」

「焼却式――」

その時だった。

「――――――！」

星の悲鳴が聞こえた。

詩的な表現ではあるが、そうとしか言い様がない。それほどの『何か』が発生した。それは殺意に染まったクラン・カラティンの行動を止めるほどだった。数多の眼球が忙しなく蠢く。

「ゼパルより至急！　緊急事態だ！」

「どうした、このゼパなん……何だと……！」

「ディハウザー・ベリアルが、我々を裏切っただと？」

「ソロモンめ、そのような手を打つか」

「兵藤一誠……指輪……泥……委細承知」
「統括局には既に連絡完了。連絡まで待機……返答あり」
「至急至急！　クラン・カラティンを構成する二十八の同胞に通達！
　現作戦を直ちに中断。アンドロマリウス以下十柱は冥界のバアルたちの下に救援。ゼパル以下十柱は『期待』の獣の分析を実行。グラシャ＝ラボラス以下八柱は時間神殿に帰還せよ！」
　多くの眼球が同意するかのように静止するのに対し、ある一部分の眼球だけは瀕死のセラフォルーを捉えていた。
「グラシャ＝ラボラスより了承。しかしその前に、この悪魔の命を潰す。完璧に潰す。完全に殺す。この怠惰な魔王に報いを。少女たちの涙を穢す虚構に清算を」
　言うまでもないが、グラシャ＝ラボラスである。
「この焼却式にて貴様の命の終わりとする。貴様が辱めた彼女たちに詫びながら、魂の一片まで消滅するがいい――！」
　今一度クラン・カラティンの眼が自分と姉を捉える。セラフォルーは迎え撃とうとするが、その身体では無理だ。せめて彼女を転移で逃がすことが自分の役目だと考えるも、身体が動かない。どうやら先程のダメージが思った以上に深刻なようだ。
「助けて……」
　ソーナは祈った。神になのか、魔王になのか。とにかく祈って、叫んだ。
「誰でもいいから、助けてください！」
　返事はあった。正面の魔神柱の集合体からではなく、背後から食事の誘いに応じるかのように気軽な調子で。
「分かった。助けるよ」

■

　その気配に、天の鎖の後続機が最初に気づいた。
「――――!?!?!?」
　先代譲りの高度の気配探知を持つ彼であるからこそ気づけた。だ

が、それは間違いなく幸運なことではなかった。その不快感を、世界で初めて味わうことになったのだから。

ほぼ同時に、気配や空間を探ることに特化した神魔が気づいた。やはり、それは不幸なことだった。

それはトライヘキサのような圧倒的存在への畏怖ではない。それは山の翁のような絶対的死への恐怖ではない。もっと有り触れた、しかし有り得ないような、生理的嫌悪だった。

「な、なんだ、これは……！」

「おえええええ！」

「がばがばがああああきゃがあああ!?」

気持ちが悪い。気持ちが悪い。気持ちが悪い。

まるでヘドロに汚染された川の水でも飲まされたような気分だった。嫌悪感と不快感だけがあまりにも濃厚だった。

よろめく者はまだマシで、嘔吐する者までいる始末だ。発狂する者がいないだけマシだろう。腐っても星を代表する修羅神仏というわけだ。

「何が起きている！」

「何だ。この寒気は一体……」

遅れて、それほど探知能力が高くない者達も気づく。厳密には、獣の気配にではなく、彼が体内に抱える泥の邪悪さを察知したのだ。否、邪悪さと言うのはやはり正しくないのかもしれない。この場にいる神魔が受け取ったのは、殺意だ。彼らが生み出し、そして忘れ去った被害者たちの憎悪。加害者は忘れても、被害者は忘れない。忘れた過去がこの場にいる全員を殺しに来たのだ。

「ど、どうしたのじゃキングゥ。顔色が悪いぞ。この嫌な感じのせいなのか？」

「九重、逃げるよ」

九重は心配そうに寄り添うが、キングゥはそのまま彼女を抱えて足早に会場を出ようとする。付き添いの妖怪達も困惑しながらキングゥの後に続く。キングゥならば飛行してこの場から逃げ出すこともできるが、九重たちを置いて逃げるわけにもいかない。

混沌とした会場はキングゥ達を止めるどころか退出しようとすることに気づく余裕さえない。
「これはまずい。母さんやソロモンどころじゃない。冗談じゃないぞ、これは人類悪でさえない。ラフムの最上級種とでも言うのか。どこの誰だ、こんなバケモノを叩き起こしたのは――！」
会場の喧騒の中、トライヘキサは呆然と立ち尽くしていた。彼も今生まれたばかりの獣の気配を察知していた。だが、その表情はこの場の誰よりも驚愕に染まっていた。
「違う……」
「フォーウ」
呻くように、敗北した獣は吠える。その双眸からは血の涙が零れる。
「聞いていないぞ。我が半身に泥が注がれるなど、話が違うぞベリアル！」

■

その姿を見て、誰もが悪魔のようだと思った。否、あるいはこう表現するが適切かもしれない。魔神のようだと。
赤龍帝の鎧の如き紅蓮の全身鎧に、眼球のような模様と口のような亀裂が走っている。右手の部分は白く、左手は黒っぽい。翼竜を思わせる巨大な翼と蛇のような尾は飾りなどではなく手足のように自在に動く体の一部。その兜には二本の角が生えていた。書物や絵画に登場する魔王のような角が。瘴気とでも言えば良いのだろうか。とにかく、邪悪な雰囲気を放っている。近くにいるだけで狂ってしまいそうで、彼がそこにいるだけで空気が穢れているようにさえ感じる。
近くにいたグレモリー眷属は勿論のこと、離れた場所のリゼヴィムとアーチャーも戦闘を中断して沈黙するしかなかった。魔王の息子であるリゼヴィムでさえ、その禍々しさに言葉を失うほどだった。
「なんともおぞましい姿だ。世界を滅ぼす獣に相応しい」

唯一、ディハウザー・ベリアルだけが冷静だった。もっとも、彼がこの世界の誰よりも正気ではなかった。ソロモンの本当の計画を知りながら協力した悪魔よりも狂った生物など、この星にはいない。ソロモンと聖書の神を例外とすればの話だが。

「きっと君を見て、君の半身はこう言うだろう。『聞いていない』『話が違う』と。まあ、当然だろうね」

このビーストD／Lは、本来の形をしているわけではない。トライヘキサが誕生すると思っていたのは正しい形での半身だ。

正しいビーストD／Lとは、彼が担うべき『期待』とは、「人類が異形に与えられた悲劇への復讐」だった。それはソロモンの怒りそのもの。だからこそ指輪を使用するのではなく、指輪を埋め込まれることで顕現する。そして、その打倒方法は「信頼関係に基づく人間と異形の共闘」である。自らへ向けられた期待が無為なことであることを知り、己がなすべき復讐が見当違いであると理解し、『期待』の半身は敗北する。

そのはずだった。だが、そうはならなかった。タネは『泥』だ。ただし、指輪を通して『真理』や『システム』の廃棄物が入り込んだというわけではない。指輪そのものに泥が収納されていた。それだけの話である。

「魔王アスモデウスと七十二柱アスモダイ、天使ベリアル。彼らが目指したものは、『人間と異形が共に手を取り合える世界』だ。神代と人理の融合。誰が上も下も善も悪も強いも弱いも正しいも間違いもない。あらゆる種族が兄弟として同じテーブルで食事ができる。そんな陳腐な理想郷こそが、彼らの夢だった」

魔術王の共犯者たる四名のうち、初代ベルゼブブを除外すれば、彼らは『其処』を目指していた。彼らの動機は歴史に残っていない。当然だ。現在語られている彼らの神話は、その動機を隠すためにあるのだから。自らの神話が穢れることを承知で、彼らはソロモンの計画に同調した。

擦り合わされた想いだからこそ、『真理』の廃棄物になった。そして、それを捕食した獣は疑わなかった。魔術王も同じ理想を抱いた大

馬鹿者なのだと。

「悪魔は同族を裏切り、天使は魔術王に寝返った。だが、お生憎様だ。ソロモンにはそんな世界を実現するつもりなど欠片もなかったのだ。共犯者を信頼し理解され誠実な態度で接していたが、真実を口にすることはなかった。彼は世界中の神々や魔王を騙したのだ。自分達がそうでないとどうして思えたのやら」

馬鹿馬鹿しい、とディハウザーは嘆息する。

「そもそも後継者が私たちのようなものではな。指輪を使用したクルゼレイはともかく、シャルバは初代がルシファーを裏切ったことさえ知らずに死んだのだろう」

魔王の末裔を嘲笑するディハウザーを、獣は冷たく見据える。彼の第一宝具、ある世界においては『聖杯の泥』『ケイオスタイド』と呼ばれたものに酷似している。

「赤黒き汚泥（ウェルシュ・ケイオスタイド）」

突如として、獣の影から赤黒い泥のようなものが噴き出した。それは不気味な生物のように動き回り、ディハウザーを覆うように襲い掛かる。

「あってはならぬ愛が理由で殺されたのならば許せた。私は初代様と同じ理想を抱き、ソロモンに挑んだだろう。だが、よりにもよってあの子の死は古き悪魔の妄執だった！　あの子の抱いた愛を隠れ蓑にしたのだ、あの老害どもは！」

だが、ディハウザーは泥に捉えられる前に魔法陣を展開する。呪詛を残して、ディハウザーはどこかに転移した。

ディハウザーがいなくなったことで、ようやく意識を立ち直したリアス。彼女は何故か湧き上がる嘔吐感を無理やり抑え込んで、己の『兵士』に問いかける。

「い、イッセー？　イッセー、私が分かるわよね？　お願いだから返事をしてちょうだい！」

「ええ、分かりますよ」

至って落ち着いた返答。それに安堵するリアス。

「貴方にソロモンの指輪が入れられたらしいわ。それは神の権能。ど

んな影響があるか分からない。急いで取り出さないと」
「心配するな、リアス・グレモリー」
「――え？」
突然名前を呼ばれたことに驚いたリアスは、兵藤一誠がアスカロンで自分の腹部を刺したことに気づくのが一瞬遅れた。
「もうすでに、この男のすべては指輪の支配下だ。取り出す意味などない」
獣は、そのまま第二宝具を発動させる。
「世界よ、我を讃えろ！（アイ・アム・ア・ヒーロー）」

計画の真意

「何がどうなってやがる！」

苛立ちを隠せないアザゼル。当然だ。情報が足りない。「よくないことが起きた」ことだけが漠然と、しかし確信的に理解できるのだから質が悪い。

「おいキングゥ……っていねえ！　トライヘキサ……もいねえ！　あいつらどこ行きやがった！」

見れば、会場内の修羅神仏の数が大分少ない。今も足早に会場から出ていこうとする者が多数いる。体裁や現状把握よりも即時撤退を決意したということか。その気持ちは分かる。この纏わりつくような嫌悪感は、恐怖さえも上回る。黙示録の獣や山の翁と比較してなお苦痛だ。

山の翁が告げる。

「――獣が生まれたのだ」

「獣、だと？　トライヘキサ級の何かが生まれたってのか？」

「晩鐘は汝らの名を指し示さぬ。だが、あの獣は汝らの首を求めているだろう。そのために、あの王は三千年の計画を練ったのだから。自らの首を差し出すことさえ躊躇わず。だが、かの王の怒りは狂信ではなく妄信だ。かの王の願いを実現するための手段など、どのような星にもないというのに」

「頼むからもうちょっと分かり易く言ってくれよ！」

聞けば答えてくれるが、山の翁の言は分かりにくい。これはアザゼルの傾聴力が低いというわけではなく、山の翁がわざと口数を減らしているからだ。これは最後の機会だ。これを試練として乗り越えれば良し。災害としてやり過ごすのも良し。だが、これでも自らの罪から目を逸らすのならば、滅びしかない。今回はどうにかなっても、次回はない。この世界に『人類悪』の概念が生まれてしまった以上、逃れようのない事実だ。

すると、会場に何者かが転移してきた。またぞろあちら側の存在かと警戒したが、そこに現れたのは紅のローブの魔術師。サーゼクスの

『僧侶』マグレガー・メイザースだった。『女王』グレイフィア・ルキフグスを抱えているが、彼女に意識がないようだ。

サーゼクスの姿を確認するなり、彼は安堵の表情を浮かべ膝をついた。臣下の礼というよりは、肉体と精神の限界を迎えたからだ。

「申し訳ありません、サーゼクス様」

「マグレガー！」

「私よりもグレイフィア様を」

サーゼクスは満身創痍の『僧侶』から意識のない妻を受け取る。

「セカンドや炎駒はまだ戦っているのだな？　こうなれば私も出る――」

「いいえ、彼らはもう戦っていません」

「――そうか。勝ったということか」

「いいえ。我らでは彼らを倒すことはできませんでした」

「――では、魔神柱は撤退したのだな」

「いいえ。逃げたのは私の方です。私は気絶したグレイフィア様を託され、逃げてきたのです。この身体ですから」

マグレガーは自分のローブをめくって身体の左半身を見せる。そこには焼き爛れた身体があった。左腕は完全に消滅しており、足も膝までしかなかった。

「申し訳ありません、サーゼクス様。スルト・セカンド、バハムート、ベオウルフ、炎駒。私マグレガーとグレイフィア様以外のルシファー眷属は全滅しました」

サーゼクス・ルシファーの眷属、『戦車』、『騎士』、『兵士』死亡。

セラフォルー・レヴィアタンの眷属、『王』を除き全滅。

レーティングゲームトッププレイヤー、第一位離反、第二位死亡、第三位重症。各眷属、重症または死亡。

初代七十二柱全滅。旧魔王派全滅。リゼヴィム・リヴァン・ルシファーおよびその一派離反。

アグレアス撃墜。アグレアス内に埋蔵されている『悪魔の駒』原材料の希少金属、完全消失。

赤龍帝・兵藤一誠、×。

×

×

それが現時点の冥界だった。

■

冥界、アガレス領、アグレアス周辺の森にて、二人の若き剣士が向かい合っていた。

「――まさか君とこんな形で再会するとはね、アーサー」

「私としては、貴方がそのような立場で戦うことの方が意外ですよ、ジークフリート」

魔帝剣グラム所有者、ジークフリート。元教会の戦士で、通称は『魔帝』。シグルド機関の最高傑作にして禍の団英雄派幹部。神器『龍の手』所有者でもあり、禁手にも至っている。グラムだけではなく名のある魔剣を多く所有している。

聖王剣コールブランド所有者、アーサー。ペンドラゴン家出身で、騎士王アーサーの末孫。スーツにメガネという格好の美青年。所有者として認められていたとはいえ、家宝であるコールブランドを勝手に持ち出したという経歴を持つ。元は英雄派にいたが、しばらく前にヴァーリチームに入ったはずである。

禍の団内で最強の剣士の座を争っていたはずの彼らは、敵として相対していた。

ジークフリートはアーサーの背後にいる騎士たちを見る。ゲーティア達から与えられた知識にあった者達と特徴が合致する。第六特異点、獅子王の威光の下で虐殺を行った粛清騎士と同じ鎧だ。

「……獅子王に下ったと考えていいのかな？」

「ええ。そう考えてもらって間違いはないでしょう。リーダーのヴァーリは勿論、黒歌や美猴も行方不明。チームとして機能しない以上、所属を変えるのは当然のことですから」

「英雄派に戻ってくるという考えは？」

「それも考えましたが、その前に魅力的なオファーを受けたものですから」

「君のことだから獅子王の首を狙うつもりでそこにいると考えている

けど？」
「ええ。そのつもりです」
その問答に対して、粛清騎士は反応しない。アーサーが獅子王を討つことに賛同しているのか、獅子王が彼如きに殺せるはずがないと確信しているのか。あるいはもっと別の理由があるのか。
「意外と言うなら、円卓たちがよく許したものだ。『アーサー王の末裔』が家を抜けてテロリストになったというのに」
「彼らにも色々と心情があるということですよ」
漠然としたことを言いながら、アーサーはジークフリートを真正面に捉えたまま視線だけを横に向ける。ジークフリートも同じようにすると、視界には上空から落下していく浮遊都市が見えた。あれはもう駄目だ。今回の作戦は完全に失敗したと考えていいだろう。
「アグレアスが堕ちているのは獅子王の仕業らしいね」
「ええ。貴方たちが……というか、ゲーティアがアグレアスの希少金属を狙っているという情報があったもので。『悪魔の駒』や『御使い』を増やされても面倒だと、陛下は判断されたようです」
ゲオルグから連絡があったが、この場だけではなく、囮だった会談の方も随分と事態が混沌としているようだった。獅子王が此方にいる以上、あの魔神柱が遅れを取るような相手などそうはいないはずだが。そのスタンスからして、この世界の修羅神仏が積極的に動くとは考えづらい。
一度帰還するように指示があったところで、アーサーが現れたというわけだ。指示通りに帰還すべきなのだろうが無理だ。コールブランドは空間を切り裂く力がある。転移しても追跡される可能性がある。
否、道理も義務も捨てて、ここで決着をつけたいというのが本音だ。
「どっちが最強か白黒つけようか、聖王剣」
「此方もそのつもりですよ、魔帝剣」
双方、剣を抜いた。

■

兵藤一誠であるはずの彼は、リアス・グレモリーの身体からアスカロンを引き抜く。
「あ……」
リアス・グレモリーはその場に倒れた。傷口からは止めどなく血が流れていく。
「リアス！」
「部長！」
ようやく拘束から逃れたグレモリー眷属。朱乃と小猫とギャスパーはリアスに駆け寄り、裕斗は聖魔剣を創り出して一誠の前に立つ。その刃の切っ先は震えていた。恐怖はある。主人を害された怒りはある。事態についていけない混乱がある。だが、それ以上に目の前の男から溢れ出る瘴気が気持ち悪かった。
「イッセーくん、どうしてこんな……！」
「話しかけるな、クソ悪魔が。耳が穢れる」
兵藤一誠――否、赤い鎧の男は同僚であるはずの眷属たちには目もくれず、リアスの流血で穢れたアスカロンの刀身を見る。そしてリアスを一瞥する。リアスは眷属たちに身体を庇われながら、虚ろな目で赤い鎧を見る。
「い、イッセー……？」
「悪魔が聖剣で刺されたのに死んでいない、か。聖剣の特徴は消失しているな。流石にこんな骨董品じゃ泥には耐えられないか。神器と一体化していたことの弊害だな」
独り言を吐き出す彼は、やがて視線を掃除屋へと移す。掃除屋も悪魔の王子との戦闘を中断し、彼を見ていた。悪魔の王子は事前に聞いていた話と展開が異なる為、呆けていた。
「アーチャー。おまえには感謝しているよ。おまえの情報がなければ、ここまで完璧にはできなかっただろう。やはりトライヘキサを完成させておいて正解だった。あいつが『真理』に繋がったままだったら、指輪との融合に支障が出たからな」
「貴様、誰だ……？」

「俺はソロモンだ」

その予感はしていた。口調や話の内容から、自分の知る魔術王だとアーチャーは理解していた。だが、問題なのはこの男が魔術王であることではなく、兵藤一誠の身体を乗っ取っていることである。

「どういうことだ、ソロモン。どうやって兵藤一誠の身体に魂を移した？　おまえが魂を移した指輪は、サーゼクス・ルシファーの手で破壊されたはずだ」

「おいおい。まさかとは思うが、俺が神に返還した九個の指輪には細工をしていなかったとでも？　すり替えに気づかれなかったんだ。細工にだって気づかせないさ」

それはアーチャーの知らなかった情報だ。彼が人間として生きた世界において、ソロモンの指輪は『訣別』によって破壊された。アスモデウスが保管していた一つを例外として。最後の指輪はまだ曹操だった頃のアーチャーが破壊した。

「俺の計画を成功に導いてくれた礼だ。種明かしをしよう。負けフラグ臭いから、本当はこういうのやりたくないんだけど、ぼちぼち暴露してもいいだろう。ここまでやれたんだ。誰かに俺の願いを知ってもらいたい。ああ、賛同しなくていいぞ？　俺の計画が達成された時、全人類は俺の計画の価値を理解してくれるのだから」

本来、この星には人類悪などない。人理――すなわち人間のための宇宙法則が存在しないためだ。だが三千年前にソロモンが星を改変させることで、『期待』と『真理』の原罪が発生した。そして、本来であればＲもＬもなくソロモンだけが『期待』を背負うはずなのだ。人類に期待したのも、人類に期待されたのも彼だったからだ。

「俺は『真理』と『システム』を使って泥を集めた。この泥を浴びた人間は、魂の反転と引き換えに、その位相が上がる。俺はずっと待っていた。泥が熟成するのを。熟成した泥に触れてくる誰かがやって来るのを。今しがた兵藤一誠が発動した宝具。世界よ、我を讃えろ！（アイ・アム・ア・ヒーロー）

これに辿り着くための三千年だった！　俺の計画には次の段階を踏まえても、どうしてもここに辿り着く必要があった」

対人宝具、ランクＡ＋。その効果は、星の記録の閲覧と修得だ。星

の痛みの具現化である泥を積み重ねなければ手に入らなかった醜悪な奇跡。

　単体では役に立たない宝具だ。どれだけ優れた能力を得ようと、出力と機能に限界がある。生前のソロモン級ならばどうにかできるが現代の人間にそれは難しい。だが、スキル『ネガ・エヴォリューション』と組み合わせて使うことで、どんな奇跡だろうとどんな極限だろうと再現できる。

「この星の誰かに出来たことは、俺にできるんだよ。当然、人間だけじゃない。天使だろうが悪魔だろうが魔物だろうが妖怪だろうが精霊だろうがドラゴンだろうが――神だろうが、誰かのできたことは俺にできる」

　兵藤一誠の身体を乗っ取ったソロモンは大仰に手を広げる。鎧で隠されているが、その表情は歓喜の色で満ちていることだろう。怒りを込めてではなく、心底から笑っているだろう。

「これで、俺は神の御業を再現できる！　主を超えられる！」

　聖書の神の所業。それを聞いたアーチャーの脳裏に蘇るのは、あの地獄だった。泥に覆われた世界と、そこに溢れる双貌の獣。蹂躙される人類の悲鳴と、聖書の神に抵抗した修羅神仏の屍。だが、あれはすべて『真理』が破壊されたからこその光景だった。

「馬鹿な！　『真理』によって世界は作り直せないはずだ！」

「いいや、それは正確じゃない！　正しくは、『世界を作り直せるほど強大な神』全員が、『世界を作り直せない』という縛りを受けているだけだ！　『真理』によって新しく強大な神が生まれることもない。だが、他ならぬ『真理』によって作り出された神ならばどうだろうな？」

　この醜悪な獣が神だとでもほざくのか。こんな邪神とすら呼べないような異形が。

「だが貴様は、『今ある人類』の価値こそを求めたはずだ！　それだけは間違いない。だからこそ、俺の世界線では、おまえは聖書の神の手を払いのけたんだ」

「そうだ。俺ならばそうする。だって俺はあくまでも『今ある人類』の価値を証明したい。そうじゃないと俺たちが間違いみたいだろう？

俺みたいな例外を除いた全員が出来損ないみたいだろう？　失敗作だから作り直すなんてそんなのおかしい」

そんな馬鹿な話があるものか、と聖書の神の最高傑作は宣う。同じ最高傑作である預言者や救世主にはない発想だった。彼らが持つはずもない狂気だった。

「だからこそ、生命はそのままに、この世界を作り直す。間違いなのは人間じゃない。人間を軽んじているこの世界の方だ。世界の法則を俺の求める形に改める。『真理』だけじゃ徹底的に不足している。三千年前じゃあれが精一杯だったからな。俺の時代じゃサマエルを引っ張り出すのは無理があったしな」

そして語られるのは魔術王の本当の計画。怒りしか知らぬ王の願望の正体。

「人間が主役となる世界を創り出す。人間以外のあらゆる生命は人間を進化させる砥石とする。この世界の生命でも足りぬならゲーティアのように他の宇宙から招き入れる。――この星の人類こそが、あらゆる宇宙の中で最も尊い生命体となる。それこそが、このソロモンの真の計画だ！」

「ソロモンよ、何を泣いているのですか？　貴方の怒り以外の表情など、私は初めて見ます。ふふ、馬鹿にしているわけではありませんが、とても魅力的ですよ」

……愛しい女王よ。私はどうしたらいい？

「異なる宇宙に何を視ました？　悲しいことではないでしょう。辛いことでも痛ましいことでもないでしょう。貴方は悲劇に対して悲しみではなく怒りで応える御方です。喜ばしいものを見たのですね？　感動して感激して、嬉しくて嬉しくて泣いているのですね？」

ああ、そうだ、愛しい女王よ。

「妬ましいですね。羨ましいですね。貴方が怒りを込めず、本当に笑っているなんて」

美しい世界があった。優しい世界があった。人間が人間として生きていられる世界があった。人間が滅ぼされた世界もあったが、彼らは胸を張って死んでいった。

助けよう、などとは微塵も思えなかった。彼らは私よりも遥かに弱かった。彼らは私よりも遥かに愚かだった。だが、私の力も、私の知恵も必要ないのだ。だって彼らはどうしようもないくらい素晴らしい。どうしようもないくらい尊いのだ。

「聞かせてください。例えば、どんな人がいました？」

私……俺と同じ名前を持つ男がいたよ。いや、俺と一緒と言っても彼の『人生』は死後が本番だった。一度死んで、使い魔として召喚されて、人間になってからが彼の人生だった。

みっともないくらい臆病者だ。情けないくらい笑ってばかりだった。だけど、俺は彼が羨ましい。いや、あんな『最期』を迎えた男を羨ましいだなんて言うのは間違っていると自覚している。だけど、それでも俺には彼の生き様がどうしようもないくらいに羨ましい！　妬ましくて仕方がない！　ああ、俺も倫理観が破綻しているけど人類愛に満ちた主人とか、中身おっさんの見た目美女な相棒とか、世界の未来を託せるような少年とか、獣に堕ちるほど真摯に人類を愛する使

い魔とか、徐々に人間性を帯びていく娘とか欲しかった！」

「もう！　最愛の女性を前に言うことですか！」

あ、悪い。

「まったく。いえ、貴方がこの星の人間全員を愛しているのは知っていますけどね？　人間一人一人を真剣に心底愛しています。それでも、その愛は決して平等ではなく、決して均等ではない。この星で最も深い人類愛を持つ男に最も愛されていることこそ、私の誇りなのですよ？」

その愛の深さのせいで、俺は神になることを願われている。俺は……人のままで死にたいよ。世界は一つの生命の意思でどうにかなるべきじゃない。

「ふふ、人間に自由を。思想に可能性を。貴方の考え方は未来過ぎて皆は理解できません。いつか理解してもらえる時代は来るのでしょうから、それまで神様でいれば良いのでは？」

それもそうか。

「貴方が神になることを願っていますけど、私は今のまま、王のままで良いと考えていますよ。『真理』が作られてしまえば、貴方や『彼ら』の願う世界が来ることはほとんど確実なのですから。ちょっとくらい貴方が生きたいように生きても、問題ありませんよ」

ベリアルやアスモデウスの協力もある。彼らも平和を望んでいる。彼らも対話を願っている。自分達の逸話が穢れることを承知で、『真理』の賛成に賛成してくれている。

……『真理』が完成すれば、ベリアルはソドムとゴムラを堕落させた悪魔として語られるだろう。アスモデウスがサラへ向けた愛情は歪んだ色欲として伝えられるだろう。ソドムとゴムラ――世界初の異種族混同が実現した都市を守れなかった天使の涙はなかったことになり、一人の人間を愛した魔王の痛みは独りよがりの情欲に成り下がる。彼らはそれさえ受け入れた。

「はい、彼らは願っています。我々と、人間と一緒にこの星を歩いていくことを。むしろ私としては貴方が彼らを許したことの方が意外です。神に、天使に、悪魔に、堕天使にこれほど怒りを抱く貴方が」

何事にも例外はあるさ。それに、許したわけじゃない。俺は誰のことも許せない。愛することはできても、許すことはできないんだ。実際、ベルゼブブのことは嫌いなままだよ。ベリアルやアスモデウスのことは結構気に入っているが。

あいつらのためにも、俺は『真理』を完成させないといけない。この世界を変えないといけない。

「ええ。それこそ貴方が輝かしいと感じた世界の人々がこの地に訪れた時、素晴らしすぎて妬ましいと思うようになると良いですね」

ああ、それはいいな。

きっと変えてみせるさ。異なる星の人々が羨むような素晴らしい世界に。人々がこの星に生まれたことを誇れるような美しい世界に。そうなれば主も認めざるを得ないだろうな。俺や我が先祖モーセだけではなく、この星の人類すべてが貴方の最高傑作なのだと。

「期待していますよ、愛しいソロモン。どうか善き世界を見せてください。……でも一つだけ言わせてください。その愛さえあれば貴方は失敗してもいいのですよ。貴方に愛されているということは、私たち人間にとって最大の誇りなのですから」

ありがとう。君と出会えた奇跡に誓うよ、愛しい女王。俺は何があろうとも、人への愛を忘れることはない。

――そんな誓いをした次の日だった。

――彼女の死によって、我が理想は反転した。

■

隠れ家へと転移したディハウザーは一人、溜め息を吐き出す。

「……私の憎悪さえも計画通りか、ソロモン」

自分のような存在――異なる種族の愛が招いた悲劇の復讐者が現在にいることを確信していたのだろう。自分の先祖の理想を知った時、クレーリアの一件は皮肉としか言い様がなかった。彼女も『ベリアル』だというのに。

「何が計画通りなのかナー？」

「っ!?」
　銃口を背中に突き付けられた気配がする。反応しようとした次の瞬間には、ディハウザーの周囲を紫色の炎が円を描くように燃え上がった。
「……これはしてやられた」
「してやられたのはこっちの方だよ。バアル達の情報収集が優秀すぎて油断した。いや、これだと言い訳みたいだネ。素直に認めよう。よくも私を出し抜いたな、ベリアル」
「どうしてここが分かった、なんて質問は滑稽か。流石は犯罪博士。万が一裏切った場合のことは想定していたか。隠れ家まで特定されていたとは」
「その万が一の裏切りに気づけなかったんだから業腹だ。でも、このままだとマイレディズに『パパの無能』とか言われかねないんでネ。名誉挽回といかせてもらう」
「いやー、直接言う人はいないと思いますよ？」
「それって隠れて言うってことだよネ。陰口の方が傷つく！」
　どうやってこの状況から抜け出そうかと考えるディハウザーだったが、思考を中断した。有体に言って諦めた。復讐は成された。反転したビーストD／Lが顕現した以上、どうあっても冥界は滅ぶ。自分の従妹を死に追いやった全ては破壊される。
　諦観に浸るディハウザーの前に、ひとりの男性が佇む。それは背中に銃口を突き付けた人物でもなければ紫炎の所有者でもない。黒髪の男性だった。見知らぬ人物だったが、ディハウザーには心当たりがあった。
「……まさか、貴方が」
「ええ。僕が八重垣正臣ですよ、ディハウザー・ベリアル」
　ディハウザーから笑いが零れる。
「はは、まさかこのような形でクレーリアが愛した人間に会えるとは。自暴自棄に泥に飲まれなくてよかったというものだ」
「ソロモンに協力した時点で狂っていたと思いますが」
「人王の側にいる貴方に言えた義理ではないでしょう」

二人の愚者の話をしよう。

それは十年ほど前の駒王町で起きた人間と悪魔の悲恋の話だ。

片や教会に所属する戦士、八重垣正臣。片や七十二柱の血筋の悪魔、クレーリア・ベリアル。敵対関係にあるはずの彼らは恋に落ちた。

当時は神の不在が露呈しておらず、協定など考えられるような時代ではなかった。使徒と悪魔の恋愛など以ての外だったのだ。人と魔が愛し合うなど許されない。例外など認められない。だから、二人が所属する組織は、二人を粛清することを決めた。『皇帝』が出て話が深刻になる前に、身内の不始末を消すことを選んだ。

この件には裏の事情があった。八重垣はともかくクレーリアには殺される理由が他にもあった。それが『王』の駒の存在だ。『悪魔の駒』には『王』の駒が存在しないことになっているが、実際は違う。個数こそ限られているが、存在するのだ。その効果は使用者の力を著しく上昇させる。レーティングゲームのトッププレイヤーの多くがこの『王』の駒を使用している。ディハウザーを例外とすれば、純血悪魔全員が使用している。この事実は一部の権力者のみが知っている情報であり、七十二柱の当主でも知らないほどのトップシークレットだ。クレーリアはこの真実に近づいたために消されたのだ。

「聖杯か」

「ええ。あの町を彷徨っていた魂を魔神グレモリーが回収したそうです。……悪魔は死んだ後に魂が残らない。だから……」

「心配しなくても、そんな期待はしていませんよ」

「……そうですか」

そう言いつつも、ディハウザーの顔には失意の影があった。八重垣自身、自分が復活した時にそれを願ったため、何も言えなかった。

「僕は彼女を愛していました。人王による行動の制限がなければ復讐に走っていたほどに」

「ああ。それは良かった。あの子を想っての行動だとしても、貴方がそんなことをすることをあの子は望んでいないでしょう」

「鏡を見たらどうかネ？」

ディハウザーも八重垣も茶々入れに苦笑が漏れる。

「仲良くするのもいいんだけど、私も急いでるんでね。話を進めさせてもらうよ」
「どうぞ、教授殿」
全てを諦めたように投げやりな態度の悪魔。
「私が欲しいのは此方の魔術王や聖書の神よりも獅子王の情報だ。彼女にどれだけの情報を流した？」
「ソロモン関係のことを除けば、其方のサーヴァントと、アグレアス襲撃くらいですね。彼女と直接会ったのは一度だけで、後は秘書官殿を通じていましたので」
それを聞いて思案顔で唸る教授。銃口はすでに下ろしているが、いつでも迎撃の準備はできている。
「どうもバアル達から聞いた人物像と彼女の行動が一致しないような気がするんだよね。彼女は聖書の神に召喚されたわけじゃないから誰かに操られているってわけでもないだろう。同時に、彼女は彼女の意思ではない何かに従っているような印象もある。そのあたり、何か知らないかい？」
「さあ。私はソロモンとのアポイントを繋いだだけです。あちら側で彼女が何をしていたのかさえソロモンから聞いた以上のことは知りませんよ」
「それだ。獅子王は何故魔術王への協力を承諾したのか。彼女の狙いは一体何なのか。流石に女神の心理なんて専門外だからネ。あの謎解き屋なら分かったかな」
初歩的なことだよ、と決めポーズの宿敵の顔が浮かぶ教授。
「……女神ロンゴミニアドについては分かりませんが、魔術王については一つだけ確実に言えることがあります。あの男が星の改変を行った決定的な動機が」
「ほう？　興味深い。是非聞かせてもらおう」
三千年前の『壺』と『真理』構築。世界中の神話への詐欺行為。聖書の神さえ騙した。そして現代のビーストD／R完成とビーストD／L顕現。魔術王の狂気の根源には、やはり愛があった。
「シバの女王を知っていますか？」

■

その人物の登場に、魔神は驚愕を隠せなかった。
桃色の髪。美少女と見紛う、派手に着飾った中性的な美少年。騎乗槍を持っているが、騎乗しているのは馬ではなく、魔獣。上半身は鷲、下半身は馬という『有り得ない獣』。
「遠からん者は音にも聞け！　近くば寄って目にも見よ！　我が名はシャルルマーニュが十二勇士アストルフォ！　いざ尋常に――――勝負ッ！」
「――邪魔をするな最弱の騎士がァアアアア！」
魔神の攻撃が当たるよりも早く、騎士の少年――アストルフォはセラフォルーとソーナを相棒のヒポグリフの背に乗せて飛び立つ。
「もう危ないな！　怒り過ぎだし、やり過ぎだよ！」
「黙れ、黙れ、黙れ！　黙れぇ!!」
その怒号は人智を超越した魔神の憤怒ではなく、もっと低俗でもっと身勝手な人間の罵倒だった。
「その悪魔の罪深さを知りながら庇うか！　その悪魔の醜悪さを知りながら守るか！　貴様も人の側に立つ英霊ならばその悪魔を殺せ！」
「断る！　助けてって言われたからね！」
「ならば貴様も死ぬがいい……！」
先ほどと同じように、巨大な身体に犇めく赤黒き眼球全てが危険な色を帯びる。
「焼却式クラン――」
だが、眼球の輝きが途絶える。
「グラシャ＝ラボラス、撤退だ」
「何を言っているフォルネウス！」
「これ以上は端末（フリード）がもたない。これほどの時間のクラン・カラティン顕現は予定外だ。……調整が不十分だったようだな。焼却式を放つ余力はない」
「しかしだな、グレモリー……！」

「フリードだけではない。これ以上この魔王に時間を割いている余裕はない。――我々は大至急、『期待』の獣を止めなければならない。彼が、彼の家族や友人を殺す前に」

「……っ！」

その言葉に停止せざるを得ないグラシャ＝ラボラス。

「覚えておけ、怠惰な魔王よ。いずれ悪魔の国ごと貴様の魂を一片まで焼き払うぞ……！」

クラン・カラティンの巨躯が視界からぼやけると同時に周囲の景色が変わる。魔神柱が作った結界空間が解除されたようだ。自分達が抜け出せたということはソーナの眷属たちもこの周囲にいるはずだ。

……生きていればの話だが。

地面に着地したヒポグリフの背中から降りるソーナだったが、上手く着地できず地面にへたり込む。そういえば負傷していたんだったと自虐していると、アストルフォもヒポグリフの背から降りていた。

「大丈夫かい？」

この人物は先程自身をアストルフォと名乗った。おそらくは英雄派の構成員だろうが、魔神柱と敵対しているのはどういうことだろう。だが、信頼はしても良い気がする。失礼かもしれないが、この人には人を騙す知能がなさそうに見えるのだ。

アストルフォ。それはシャルルマーニュ十二勇士の一人。決して強い騎士ではないが、武勇伝は多い。

差し出されたアストルフォの手を取りながら、ソーナはある事に気づく。

「あの、もしかして男性ですか？」

「そうだよ？」

詐欺だと思いつつ、親友の『僧侶』を思い出した。男性を可憐だと認識したことに敗北感を覚えつつ、ソーナは立ち上がる。

「助けてもらって申し訳ありませんが、私の眷属を探すのを手伝ってもらえますか？」

「いいよ！」

底抜けに明るい笑顔に、こんな状況でも安心感を覚えるソーナだっ

た。

Ｗｈｏ　ｉｓ　ｓｈｅ　？

何度槍と棍をぶつけただろう。
「はぁ、はぁ……ああ、クソ。やはりお強いな、闘戦勝仏殿」
「そりゃこれでも仏の一人だからねぃ」
息切れしているのは当然、曹操の方だ。だが、これは間違いなく三大勢力側にとって予想外の展開だし、帝釈天がいれば呵々大笑とした状況だ。あの闘戦勝仏、孫悟空、美猴王に、ただの人間が槍一本で食らいついているのだ。これが異常でなくて何なのか。
「それにしても、この気配は何だろうねぃ？」
別段、この妖猿としても余裕があるわけではない。戦闘中に目の前の相手以外の話題を出すなど戦士として無粋だが、口に出さずにはいられなかった。
仙術と妖術を極めたと言われる闘戦勝仏。そんな彼だからこそ、この醜悪な気配に意識を向けないなんてことは無理だった。これは意識を外して良い存在ではない。まるで世界中の怨嗟を一か所に集めたような邪悪さ。生まれてはならない何かが生まれてしまったと、歴戦の勘が告げていた。
「さあ？　少なくとも、俺たちの作戦にはないものでしょうね」
「おまえさんに心当たりがないなら、もしかして魔術王が何かやったんかもしれんねぃ」
「……成程」
有り得そうだと次の一手をどう繰り出すか考える曹操に、闘戦勝仏は言う。
「否定せんのだな」
「はい？」
「おまえさんと魔術王が同じ組織にいないことを、否定せんのだな」
「ええ。『禍の団』にソロモンなんていませんので」
何を当然のことをとばかりの態度に、二人の戦いを見ていたグリゼルダは驚愕する。自分達の戦いの大前提が崩れたのだから当たり前のことだ。

「っ！　それはどういう――」
だが、その疑問が口から出切る前に、赤い雷光が迸る。
「これこそは我が父を滅ぼし邪剣」
「気付いておったよ」
「っ！　そうくるか！」
あらかじめ仙術で気配を察知していた闘戦勝仏と、その赤雷に心当たりのあった曹操は一早く反応できた。
「我が麗しき父への叛逆（クラレント・ブラッドアーサー）！」
荒れ狂う憎悪を刀身に纏わせ、剣の切っ先から直線状に放たれた赤雷。周囲の景色を蹂躙する攻撃を放ったのは、金髪の騎士だった。二十歳にも満たぬ少女に見えるが、どこか粗暴な雰囲気がある。
金髪の騎士の脇から、また別の栗毛の騎士が前に出る。
「やりましたね、モードレッド様！」
「……なあ、イリナ。フラグって知ってるか？」
金髪の騎士は栗毛の少女の頭を小突く。当然籠手のままで。
「良い塩梅だねえ。英雄派ってわけでもなさそうだ。お嬢ちゃん、何者だい？」
「危ない危ない。いやぁ、流石は円卓の騎士ってところか」
闘戦勝仏と曹操がほとんど無傷であったことに加えて、お嬢ちゃん呼ばわりされたことで、金髪の騎士――モードレッドは不愉快そうに表情を歪めた。
「……そうか。畜生風情と戦士もどきが、俺の宝具で死なないか。絶対ぇ殺す！」
「モードレッド様、どうかそんなに落ち込まないでください。誰にでも失敗はあります！」
「おまえから殺すぞ自称騎士！」
モードレッドから自称騎士呼ばわりされた少女――紫藤イリナの姿を見て、ゼノヴィアは絞り出すように彼女の名前を口にする。
「……イリナ」
「久しぶりね、ゼノヴィア」
複雑そうな表情のゼノヴィアに対して、イリナは笑顔だ。一片の迷

いもないとばかりに。
「プロテスタントのエクスカリバー使い紫藤イリナ……どうして貴女がここに？」
「シスター・グリゼルダ！　貴女も獅子王様の下に来ませんか？　あの御方ならば私たちを正しく導いてくださいます。神の不在を隠していたミカエルよりも、神を騙る邪教の怪物どもよりも、人王なんて触手の親玉よりも、私たちの神に相応しい御方です！」
　質問に答えないばかりか、訳の分からないことを述べる紫藤イリナにグリゼルダは困惑するばかりだ。しかし、魔神柱と魔術王と獅子王に関して、自分達の認識が真実から程遠い位置にあることは理解できた。
「それは聞き捨てならないな、イリナ。彼が触手の親玉だって？　まあ、事実ではあるんだが」
「ゼノヴィア。貴女は獅子王様のことを知っているでしょう？　どうしてまだそっちにいるの？　今からでも遅くないわ。私と一緒に真の信仰の道を進みましょう！」
　かつての相棒から差し出された手を、ゼノヴィアは素っ気なく返す。
「悪いな。私は王と仰ぐなら、ゲーティアの方がいい」
「あんな触手の親玉のどこがいいの？」
「なっ!?　実際に会ったこともないくせに彼を語るな。とっても強いんだからな！」
「笑っちゃうわ。獅子王様は強いだけじゃなくて、美しいの」
「ゲーティアは強いだけじゃなくて賢いぞ！　あと、魔神柱には結構面白いところがある！　彼らと一緒にいて飽きない！」
「愉快さで円卓の皆様に勝てると思ったら大間違いよ！　特にトリスタン様は面白すぎる御方だわ！」
「何だと、自称騎士とか言われているくせに！」
「何よ、自称剣士！　脳みそまで筋肉！」
　ヒートアップしている二人。本人たちは真剣なのだが、本人たちの年齢も相まって部活の顧問と先輩の自慢をしているようにしか見え

ない。
「よし、勝った方の主張が正しいということでいいな？」
「いいわ！　デュランダルがあるからって私に勝てるとは思わないでね。私にはここに来る前にパパから略奪してきたオートクレールがあるんだから！」
「……そうか。受けて立つ！」
略奪云々は聞かなかったことにするゼノヴィアと、彼女に説教（物理）をするつもりのイリナ。それをどういう目で見ていいか分からない曹操、グリゼルダ、モードレッド。我、関せずという態度で煙管を吸う猿が一匹。
そんな彼らに魔神ナベリウスの号令が響いた。
「この戦場にいるすべての同胞に通達する。――撤退せよ。作戦は失敗した」
そしてこの戦場にまた別の乱入者の姿があった。
「間に合って良かった。まだ堕天使の首はあったか」
「盟約は盟約だ。しっかり果たすとしよう」
元龍王の首を引っ提げて、魔王殺しと神殺しの英雄が現れた。

■

結論から言えば、ソーナ・シトリーの眷属たちは命だけは取り留めていた。当然、全員が瀕死だった。辛うじて五体満足なのが匙ひとりだけだった時点で無事とは言えない。まして、この戦場に出陣した悪魔のほとんどは死亡していた。魔王の眷属さえ例外ではない。
緊急で中止になった会談を抜け出したアザゼルの手によって、セラフォルーは緊急治療室へと転送された。
そして、ソーナに伝えられる異世界の常識。異世界の存在自体はクラン・カラティンのカミングアウトによって知っていたが、英霊やサーヴァントという存在はこの時初めて知った。そして、自分の命の恩人が英雄派――英雄の子孫や転生体ではなく、英雄本人の分霊であることを知った。

「えっと、つまり貴方はそのサーヴァント？　ということですか？」
「うん、改めて名乗らせてもらうね。シャルルマーニュ十二勇士がひとり、アストルフォ！　ソロモンがあっちの世界から呼び出したサーヴァントのひとりで、クラスはライダー！　よろしく！」
　明るい態度のアストルフォに、アザゼルは懐疑的な視線を向ける。
「信用できねえな。おまえのマスターは、あのソロモンなんだろう？　おまえが俺たちに協力するとして、その動機は何だ？　あの恐ろしい骸骨のジジイさえソロモンに従ったってのに。おまえは何でソロモンを裏切ろうってんだ？」
「ソロモンを止めるためだよ」
　軽快な雰囲気が一変し、アストルフォの表情に影が差す。
「ソロモンのやろうとしていることはきっと悪いことだ。それは嫌だな。ソロモンは、あの王様は間違いなく悪い王だ。良い王だったのにそれが哀しいことのせいで反転してしまったっていうのが、話していてよく分かったんだ。だから、彼を大切に思った誰かのために、止めないといけないって思ったんだ」
「……おまえは」
「とにかく、ボクはあの王様のやろうとしていることを邪魔するつもりだ。ここではないどこかで会った誰かのためにもね。というわけで君たちに力を貸すよ！　よろしくね！」
　疑うことさえ馬鹿馬鹿しくなるほどの天真爛漫さ。敵と疑う前に協力者として信用しようと考えたアザゼルは、魔術王の陣営にいたならば確実に知っていたであろうことを質問する。
「じゃあソロモンの指輪がどこにあるか分かるか？」
「それは知らないね！」
「……奴が指輪に魂を封じているかどうかは知っているよな？」
「全然！」
「……何か今すぐ役に立ちそうな情報はあるか？」
「全く！」
「おまえ何のためにあのクソ野郎を裏切ったんだ！」
「そう言われてもね」

うーんと唸るアストルフォだったが、何か思いついたように手を打つ。
「アーチャーに聞いた方が手っ取り早いと思うよ？　こっちの世界の出身だって言っていたしね」

■

僕――木場裕斗は急展開に続く急展開で、頭が真っ白になった。
世界神話会談開始直後に会場周辺に出現した魔神柱。三大勢力はその撃退に出撃した。他神話はまるで他人事のように出陣しなかった。
その場にいたのは、赤髪の少年と金髪の青年と掃除屋を名乗る包帯の男。前者二人は、最上級悪魔にして元龍王のタンニーン様が請け負ってくれた。
最後の包帯男だった。自信がなかったと言えばウソになる。僕自身、稀有な禁手に至っている。若手悪魔の中でもトップクラスの才能を持つ部長やバラキエルの娘である朱乃さん、強力な神器を持つイッセーくんやギャスパーくんもいる。小猫ちゃんも自分のトラウマと向き合いつつ鍛えていた。だが、そんなものなど一蹴された。相手は複数の神滅具を持つという規格外だった。
そして予想だにしていなかった『皇帝』ディハウザー・ベリアルの裏切り。結果として、イッセーくんがソロモンに身体を乗っ取られてしまった。
何もかもが僕たちを置き去りに、話が進んでいた。
「い、イッセー先輩を、返してください！」
「彼の身体から出て行きなさい！」
ギャスパーくんと副部長の言葉に、イッセーくん――否、ソロモンは鼻で笑うような声音で返した。
「やだね。これより、最後の赤龍帝は兵藤一誠ではなくこのソロモンとなる！」
あまりにも醜悪。あまりにも最悪。

「我が三千年がついに報われる！　ベリアル、アスモデウス、アスモダイ！　おまえたちの理想は此処に潰えたが、代わりに俺がもっと輝かしい現実を生み出す！」

人間という生物の中から産まれ落ちた、星の癌細胞がここにいた。

「地獄を造ろう！　人間が次の時代に進むための最高にして最悪の試練を創り出そう！　この星は転生する！　あらゆる醜態は過去になる！」

気持ち悪いほどの狂気がそこにあった。

「讃えてくれ。我が名はソロモン！　真理構築式、魔術王ソロモンである！」

だが、ソロモンの言葉に否を突き付ける声があった。

「誰もおまえを讃えたりなどしない。こんな面白味のない狂言はここまでだ」

転移魔術か何かで出現したのは、成人男性だった。モスグリーンのタキシードにシルクハット。髪はぼさぼさの長髪だ。人間のようだけど魔術師だろうか。

「ほう、レフ・ライノール……いや、フラウロスと呼ぶべきか」

レフ・ライノール？　どこかで聞いたような……そうだ！　四月頃にイッセーくんが接触したという謎の人物だ。堕天使が支配していた廃教会を襲撃した件の重要参考人。

フラウロス……その呼称から察するに、フリードのように魔神柱が化けていると考えるべきか？

掃除屋は男の出現に対して驚いていた。

「どうして貴方が……」

「我々の不始末がこのような獣を目覚めさせたんだ。挨拶がてらに出るのは当然のことだろう？」

「……ああ、貴方はそういう男だったな。だからこそ……」

ソロモンは男に対して溢れんばかりの喜びを込めて呼びかける。

「ううん、魔神柱に会うのははじめましてになるのかなあ。いや、この

身体的にはお久しぶりか！」
　レフ・ライノールは不愉快さを隠そうともせず眉をひそめる。
「親しげに呼ばれる覚えはないな。かつての三千年を思い返しても、我々がこんな不愉快な気分になったのは初めてだよ。ここまで虚仮にされて利用されるとはね」
「ああ、そうだ、感謝を告げないとな。おまえたちなくてはこの盤面に辿り着けなかった！　おまえたちのおかげで、これよりこの星の人間は生まれ変わる！　本当にありがとう！」
「礼を言われる筋合いもない。貴様の理想は我々が否定させてもらう」
「そうか。残念だよ。おまえならば、おまえ達ならば俺の理想に共感してくれると思っていたのだが」
「悪いが、かつての我々の理想の汚点だけを集めたような妄想に付き合っている暇はないんだ。だが、我々に二度目をくれたことにだけは感謝しよう。……そして、貴様の方からも感謝しているというなら一つだけ質問に答えてもらおうか」
「いいぜ。せめてもの報酬だ。何でも答えよう」
　レフ・ライノールは神妙に問う。
「ソロモンを名乗る者よ。おまえは『彼女』を……シバの女王を知っているか？」
「しばの、じょおう……？」
　その名前を聞いて、イッセーくんの身体を乗っ取ったソロモンは首を傾げた。僕も内心で同じ気持ちだ。おそらく意識が朦朧としている部長を含めたこの場の全員の気持ちが同調した。
「誰だ、それ？」
　誰だ、それ？

解式

「シバの女王を知っていますか？」

ディハウザー・ベリアルの問いに、教授は不思議そうに答える。そんな分かり切ったことをどうして聞くのか分からなかった。

「そりゃ知っているよ。ソロモンの配偶者のひとりだよネ」

だが、その場に居合わせた八重垣正臣とリント・セルゼンの反応は違った。

「しばのじょうおう？　えっと、シバノって名前なんですか？」

「へー、そんな人がいたんスね。ソロモンって奥さんも愛人もいっぱいいたらしいスからねー。全部は分からないです」

「え？」

ある程度旧約聖書に詳しい人間ならば必ず知っているはずのシバの女王を、よりにもよって元は教会で働いていた二人が知らないなどおかしい。

そもそも、ちゃんと旧約聖書にシバの女王の記述はあったのだ。

「成程、ソロモンの妻ですか。其方の世界ではかなり重大な役割を担っていたようですね、シバの女王とやらは」

「もしかして、こっちの世界はいないのかい？」

「分かりません」

いるでもなく、いないでもなく、分からない。『真理』の影響は神話を歪めるものだ。逸話的にも権能的にもその効果は及ぶ。だが、実在への影響は変わらない。複数の存在が同一のものとして扱われることはあっても、『そこにいた』という事実だけは打ち消せない。存在が未確認だった黙示録の獣が世界に周知されていた時点でそこだけは明らかだ。

「私の血が伝えてきた聖書の神の遺志は、指令だけではなく、警告もあったのです。『ソロモンがまたシバの女王に惑わされぬようにしろ』とね」

「また？」

他ならぬ聖書の神がそこまで警戒している時点で、実在しているこ

とは間違いない。まさか『F』世界のシバの女王を指しているわけではないだろう。『F』に関する警告ならばむしろ、英雄王を始めとする規格外の英霊を挙げるはずだ。

「ですが、シバの女王とやらが誰を指し示すのか私には分かりませんでした。ソロモンの時代にシバなる国が存在していたことだけはかろうじて判明しましたが、そこを治めていた王がどのような人物だったのかさえ不明でした。時間がなかったなど言い訳にならないほど、人間側にも異形側にも資料が存在してなかったのです。忘れられただの消されただの歪んだだのではなく、最初から存在していないようでした」

「……聖書の神が『シバの女王』という名義で伝えてきた以上、聖書の神は関わっていないことは明らかだ。だけど、そうなると真犯人が不明……いや、ソロモンの可能性が高いかな」

フェニックスのような例はあるが、『真理』を上手く扱える存在は魔術王と唯一神だけのようだ。ひょっとしたら、救世主も含まれるかもしれないが。

「私もそう睨んでいます。そして、『F』と此方の歴史は似通っています。シバの女王がソロモンの妻であったとしたら、シバの女王こそが星の改変の決定的な動機となった。神が警戒している以上、その可能性が高いかと」

「こっちにもシバの女王がいて、ソロモンが彼女に関する記録を消した張本人だというなら、その推論は無視できない話だね」

これは大至急ゲーティア達に伝えるべき情報だと連絡しようとする教授だったが、少し前に覗覚星の提示した推論を思い出した。

「あの仮説が正しかったという可能性もあるとしたら、私としてはあまり歓迎できない展開だネ。悪のカリスマたる私が真の黒幕は誰か、なんて陳腐なジョークに翻弄されたくないものだ」

■

ナベリウスの号令を聞いて、曹操は名残惜しそうに頭を振った。

「帰るぞ、ゼノヴィア。……それにしても失敗？　教授やバアルがいながら何かあったのか？」
「こら首根っこを掴むな！　猫じゃないんだぞ！　イリナ、勝負は預けたぞ！」
　曹操の疑問にはモードレッドが、ゼノヴィアの捨て台詞にはイリナがそれぞれ応じた。
「悪いが、おまえらの狙っていたアグレアスなら今頃父上が落としているはずだぜ」
「ざまあ見なさい、ゼノヴィアのばーか！　次戦う時は貴女が改宗する時なんだからね！」
「おまえちょっと黙れ。……アグラヴェインの野郎、変な奴押し付けやがって」
　イリナの頭を小突くモードレッドに共感めいたものを覚えながら、曹操は事前に受け取っていた礼装で転移する。他の英雄派構成員もそれに倣う。
　一方、復活して初の大きな戦場に邪龍たちは興奮が冷めない。
『グハハハハハ！　どうしたよ、死ねよ！　おっ死ねよゴミども！』
「先の命令が聞こえなかったか？　撤退だ、邪龍ども」
　魔神サブナックの命令に対して、邪悪なる龍たちはその由来に相応しい凶暴性で返した。
《だ、そうだぞ。グレンデル、ニーズヘッグ》
『ああん!?　何言ってんだ、これから楽しくなるんだろうが！』
『もっと、もっと、戦うんだよぅ！』
「アグレアスの作戦は失敗した。バーサーカーは現場の戦闘に参加しているが、アーシア・アルジェントが此方に向かっている」
『よし、帰るか』
『帰りましょう』
　態度が一変するグレンデルに、口調まで変化するニーズヘッグ。
「治癒は要り様か？　現在の状態では彼女の『治療』を受ける羽目になるが」
『ああ、頼む』

『お願いします』
　あまりの変貌に二体にボロボロにされた玉龍が驚愕する。
『え、おまえらどうした!?　そんな殊勝な奴らじゃないだろう!』
『黙れや!　おまえは姫さんの恐ろしさを知らないからそんなことが言えるんだ!』
　泣いていた。頭のネジがはまっていないとさえ言われ、各神話に忌まれ、一度完膚なきまでに滅ぼされた凶悪にして凶暴にして邪悪なるドラゴンが、注射を怖がる子どものように泣き喚いていた。
『毒を浴びれば鱗を剥がされ、炎を受ければ薬を塗りこまれ、水浴びをしてずぶ濡れのままにしていたらビンタが飛んでくる。そこらへんの獣を拾い食いしようもんなら無理やり吐き出される。言うことを聞かなければ発砲される。何でドラゴンが人間に健康管理されねえといけねえんだ!』
『うお、思い出してちょっと吐き気が……』
　邪龍の慟哭が聞こえて来た教会の戦士たちは顔を合わせる。
「アーシア・アルジェントって、例の『魔女』だよな?」
「あ、ああ。一時教会内部でも話題になった悪魔も治療できる元聖女……」
「私の聞いた話だと、か弱い少女のはずなんだけど」
「か弱い少女が邪龍に恐れられるはずないだろ」
「ただの同姓同名でしょ。そうに違いない」
『おい』
　グレンデルの口から吐き出されたそれは邪龍に相応しき殺気と、邪龍に不似合いな憤怒が込められていた。
『いま、魔女って言った奴、誰だ?』
　比喩ではなく射殺す視線を受けて、震えあがる戦士たち。彼らの前に最強のエクソシスト、デュリオが立ちふさがる。四大神滅具の一つ、『煌天雷獄』は健在だ。彼がその広範囲高火力の神器を持っていたからこそ、教会側の被害は邪龍や魔神を相手にしても最小限で済んでいる。
「おっと、退くなら退いてくれよ。お互い、これ以上戦っても意味はな

いって」
『ああん？』
「グレンデル。重ねて命ずる。撤退だ」
『……ちっ。分かったよ、サブナックの旦那』
魔神柱と邪龍が転移し、この戦場に残ったのは教会の戦士と乱入したばかりの円卓の騎士、そして堕天使たちと二人の英霊だった。
堕天使幹部のひとりアルマロスとタミエルは、突然現れた二人の戦士と相対していた。剣を携えた赤毛の少年と槍を構えた金髪の青年。
「むぅ！　何者だ！　魔神柱の一派か？」
「待て、アルマロス。あれを見ろ」
タミエルは金髪の青年が担いでる龍の首を指し示す。それは最上級悪魔タンニーンの首だった。両名ともに血塗れだが、ほとんど返り血なのだろう。
「先程撤退の号令がかかったが、君達は帰らなくていいのかい？」
「余達は魔神柱の味方ではなく、どちらかと言えば《此方》のソロモンの側なのでな」
「何を……魔神柱とは、ソロモンの眷属ではないのか？」
「違うぞ？」
「そして、私たちは君達の首級を討つためにここにいる。魔神柱が君達を倒す前に到着し、彼らが撤退してくれたことは僥倖だった。どうしてか。簡単に言ってしまえば、君達を討つことで私たちは願いを叶えられるのさ」
各人、戦闘態勢に入る。堕天使の二人は魔神柱との戦いで消耗している。連れて来た部下の多くもすでに重症か死亡している。対して、二名の英霊は最高潮だった。多少のダメージはあるものの、目の前の堕天使を倒すことでようやく願いを果たせるのだ。
「ソロモンと私達の盟約は『堕天使をひとり二体ずつ首級に上げる』ことで、『どんな願いでも叶える聖杯』を私たちは受け取れる。まあ、現物はすでにもらっているし、すぐに使えるんだが、先に利益だけ得るなどあまり誠実な行為ではないだろう？」
「ランサーはともかく余の願いは通常の手段では実現できぬもので

な。ソロモンの申し出を断るのはあまりにも惜しかった」
「馬鹿な……。あれがどのような王であるかを知っているのか？」
「知っているからこそだ」
アーチャーはかの王を詐欺師と断じたが、愛に関してだけはあの王は真摯だった。だからこそ、この二名の英霊を召喚したのだ。単に強いだけならば、単に異形に恨みがあるならば、単にシンプルな願望を抱いているならば、他にも相応しい英霊はいたはずなのに。
「それと、バラキエルを殺したのは余だ」
「サハリエルは私が倒した」
「……っ！　そうか、自分から白状するとは命知らずな。バラキエルの娘のためにも、おまえたちだけでも倒させてもらう！」
「これは個人的な感情なのだがな」
ラーマは自らの剣の切っ先をアルマロスに向ける。
「異形を滅ぼす戦士としてではなく、愛する者を異形に攫われたひとりの人間として」
特撮番組に魅入られたという恰好をしている堕天使が、あの羅刹王と重なった。
「僕はおまえたちを許さない」

■

シバの女王。その名前に対する周囲の反応を見て、レフは重々しくうなずいた。
「やはりな。おまえが本当にソロモンならば『彼女』を、シバの女王を知らないなんて話があるはずがないんだよ」
「……」
そう語るレフに、兵藤一誠（ソロモン）は沈黙したままだ。その鎧兜に包まれた表情がどのようなものかは想像するしかない。
「今しがた、大至急確認した。この世界には『彼女』の記録はあった。あったが、この世界の人間や異形はその記述を認識できない。書いてあるのに読むことができず、綴っているのに見えていない。認識でき

ないことにさえ気づかない。人々は『彼女』の存在を認識しないまま三千年も伝承してきた。そして、これこそが『真理』の呪いの正体だった。ソロモンが後世に伝えたい、たった一つの黒幕への王手だった」

「……」

リアス・グレモリーは朦朧とする意識の中で、「この世界」という言葉の意味を解りかねていた。それでも、兵藤一誠が自分の意思でリアスを攻撃したわけではないことに安堵していた。

「この世界に『彼女』がいないが故に、そこの悪魔たちが『彼女』を知らないという話なら納得できる。だが、ソロモンは知っておかなければならない。奴は私たちの世界を見ているのだから。私たちの世界に、確かにソロモンの傍らにいたシバの女王を見ているはずなのだから」

「……」

アーチャーは内心で同意する。彼はソロモンとそういう会話をした。あの世界に焦がれたからこそ、魔術王は人類悪をこの世界に発生させるという災禍を犯したのだ。そして、あちらの世界のソロモンを心底羨ましいと評した。ならば、あちらのソロモンの隣にいた女性のことを知らないはずがない。まして魔神柱がこれほど語る女性ならば尚更だ。

「摩耗して忘却した？　馬鹿を言え。おまえは私のレフ・ライノールという名前さえ知っていた。しかもその後にフラウロスと言い直してな。おまえがソロモンならば、自分と同じ名前をした男の最も特殊な立場にいた女の存在を忘れられるはずがないだろう」

「……」

リゼヴィム・リヴァン・ルシファーは事の成り行きを見守った。彼の性格を考えれば、見過ごしたという方が正しいかもしれない。どの道、リゼヴィムは既にソロモンから報酬を受け取っている。前払いでもちゃんと相手にやるべきことをさせるあたり、ソロモンの手腕である。

「興味があったのはソロモンだけで、ソロモンの関係者の名前までは憶えていない？　それも却下だ。先程と同じ理由で。おまえにとっ

てはレフ・ライノールという記号さえ重要だった。であれば『彼女』のことを覚えていなければバランスが取れない」

「……」

レフ・ライノールは言霊を繋ぎながら、この獣を憐れんでいた。そして、この獣を構成するものの正体に対して怒りと不快感を覚えていた。唾棄すべき三千年前の真実に辿り着いてしまった。

「以上の結論から、おまえの正体はソロモンではない。おまえは自分がソロモンだと思い込んでいる、泥の影響で兵藤一誠の内から生まれた多重人格のようなものだ。ソロモンが魂を封じた指輪は一つだけであり、他の指輪に封じてあったのはどちらかと言えば精神の方だ。ソロモンの人格が最も『期待』の獣の人格に相応しいが故にそうなっただけに過ぎん。その証拠に、おまえは兵藤一誠が知る以上のことは知らないだろう？　おまえが自分のことをソロモンだと思っている根拠は、その狂った妄想以外に何かあるのか？　もしもおまえがソロモンだというなら、三千年前のイスラエルの臣下や民の名前を挙げてみるがいい」

「……」

木場裕斗は怪訝に思う。レフ・ライノールの言葉は矛盾している。この男のことを兵藤一誠は知っている。だが、彼が『フラウロス』であることなどいつ知ったのか。指輪を通じて知ったのか。そうでなければおかしい。兵藤一誠が、知っていながら自分達に隠していたとでも言うのか。

「そして我々の推論が正しいのならば――おまえという人格の核になっているのはソロモンですらないぞ。おまえが唱える理想も、おまえが抱く感情も、兵藤一誠でもなくソロモンでもない、獣にすらなれなかった存在に由来する妄想だ」

「関係ない」

ここでようやく獣は口を開く。

「俺が兵藤一誠（にせもの）だろうとソロモン（ホンモノ）だろうと、関係ない」

もはや愛でも悪でもない。

「俺が偽物だとしても、俺の理想は本物だ。俺の異形どもへの憎悪は

本物であり、俺の人間への期待は本物以外の何者でもないんだよ！」
「いいや。それさえも偽りだ。借り物ですらない」
「黙れ！　俺の理想が、憎悪が、期待が、信念が偽物であるはずがない！　もしもそうであるなら、何の為の三千年だったというんだ！　何のために、人類は傷を受け、泥を貯め、獣を育てて来たというんだ！　これらすべて、人類が次のステージに上がるための下準備！　必要な犠牲に他ならない！　そうでなければ、どうして俺たちがこんな目に遭わなければならない！」
　無為な苦痛はある。不要な犠牲はある。だからこそ、人類悪が生まれるのだ。だからこそ、人理補正式は己の役目を放棄し、星の転生を目論んだのだ。それはこの世界でも同じことだ。それを理解しながら、獣は目を逸らす。かつて本物の魔術王が犯した罪を重ねる。
「俺こそが、人類（かれら）の希望（かみ）となるんだ！」
　押し付ける妄執と押し付けられた偶像。その二つが一体化したビースト。
　人類悪からさえ逸脱した獣に、そのどうやっても報われない絶望に、〝否〟を叩きつける少女がいた。
「いいえ、それは違います。貴方は神などではありません」

「貴方は患者です」
　鋼鉄の天使の弟子、到着。

祈り

「貴方は神などではありません。貴方は患者です」

そう通告して現れたのは、少女だった。動きやすいように魔改造されたシスターの修道服。長い金髪を一本に纏め上げている。やけに眼光が鋭い。

「これより、治療を開始します」

少女――アーシア・アルジェントは神に祈るように手を合わせる。

「我はここに集いたる人々の前に厳かに神に誓わん」

それは聞くものが聞けば、ナイチンゲール誓詞だと理解できるだろう。ナイチンゲールの看護に対する精神を基とし、医学に携わる看護師としての必要な考え方、心構えを示したもの。看護師の戴帽式や卒業式に行われる誓いの言葉である。

正解であるが同時に、これがアーシア・アルジェントの禁手のための詠唱。彼女の禁手はある条件下において最高の能力を発揮できるが、そのための下準備――詠唱に時間がかかるという分かり易い欠陥があった。

「……やめろ」

獣には理解できた。この詠唱が自らを終わらせるものであると。

「我が生涯を清く過ごし、我が任務を忠実に尽くさんことを」

冗談ではない。了承できない。まだ何もしていないのだ。まだ何も始まっていないのだ。まだ何も終わらせていないのだ。

「やめろぉおおおお！」

ここで終わってたまるものか。まだ悪魔さえ絶滅させていないというのに――！

「我はすべて毒あるもの、害あるものを絶ち」

獣の影から赤黒く染まった泥が溢れ出る。
「赤黒き汚泥（ウェルシュ・ケイオスタイド）！」
呪いの泥が少女に襲い掛かろうとするが、
「断罪の聖龍（ステイク・ビクティム・ドラグーン）！」
「超人による悪意の波動（デトネイション・マイティ・コメット）！」
聖剣でできたドラゴンが聖女の盾となり、泥を弾く。呆然とする獣にミサイルが射出される。
「出遅れたわね」
「間に合っただけマシだろ」
聖女ジャンヌ・ダルクの転生体と大英雄ヘラクレスの転生体。
無論、彼らだけではない。
「ああ、俺たちにも……いや俺たちにこそできることがある」
曹操を始めとした英雄派の面々だ。ゲオルグやジークフリートといった冥界に出ている面々こそいなかったが、英雄派の戦力がここに集まっていた。
そんな彼らに近づくアーチャー。当然、一度交戦している英雄派は身構える。
「おまえは……！」
「久しぶりというほどでもないな、未熟者」
だが、アーチャーは曹操を素通りする。
「あっちは俺が担当してやる」
すれ違いざまに、変わり果てた弓兵は若き日の己に告げる。
「おまえの仲間だ。必ず守れよ――」
「――言われるまでもない！」
アーチャーの視線の先には、腹部の怪我に耐えながら立ち上がるリアス・グレモリーがいた。
「部長やめてください！」
「いま動かなければグレモリーの名折れよ！」
「ええ。いきましょう、リアス」
この期に及んで眷属を救おうとするグレモリー眷属を見て、アー

チャーは苦笑する。フラウロスの発言で、兵藤一誠がどういう立場にあるかは彼――正確には彼と同じ名前を持つ男――に憎悪を抱くアーチャーですら察することができたというのに。

「……何というか滑稽だな」

「黙りなさい！　イッセーに何をするつもりか知らないけど、貴方たちにもソロモンにも私の下僕に指一本触れさせない――」

「絶霧（ディメンション・ロスト）」

アーチャーの棺桶から霧が出たかと思えば、その場にいたグレモリー眷属を包み込んだ。やがて霧が消滅すると、グレモリー眷属の姿も消えていた。

「……君はもうちょっと遊び心のある奴だと思っていたが」

「忘れたよ、そんなもの」

本当につまらない男になったな、と心中で呟くフラウロス。

「状況は読めないが、成程。どうやらこの時間軸ではアーシアは死なずに済みそうだ」

自分の時は、傍にアーシアしかいなかった。だから、泥に飲まれた自分の代わりに彼女が死んでしまった。

「悪しき薬を用いることなく、また知りつつこれをすすめざるべし」

爆炎が晴れると、そこには健在な獣の姿があった。ヘラクレスの攻撃を受けても、獣はほとんど無傷だった。その鎧には傷一つ付いていない。それどころか、獣は即座に自分が受けた攻撃を解析する。

解析し、学習し、吸収し、変化し、進化する。この攻撃が二度と効かぬように。似たような攻撃を受けても即座に対応できるように。

「勝利条件はアーシアの禁手（バランス・ブレイカー）の発動。敗北は彼女の……いや、俺たちがひとりでも死ねば俺たちの負けだ。勝つために、全員全力で生き残れ！」

「無茶言うな！」

「前より無茶言うようになったよな！」

「でも、悪くない！」

「むしろ今のリーダーの方がいい！」
文字通りの死地だと言うのに、笑う英雄派。ここで死ぬのも悪くないと覚悟しながら、ここで死ぬ気はないと決意を固める。
「一番槍はこの偉大なるペルセウスがいただくぜ！」
魔神柱はこの戦いに参加できない。理由はこの獣の特性と経歴にある。
兵藤一誠は魔神ゼパルを倒している。厳密には、今日この段階で兵藤一誠が単身で倒した存在はゼパルくらいなものなのだ。白い龍は撤退させただけだ。元龍王には追い回されただけだ。不死鳥や黒い龍王とは戦う機会を失った。初恋を抱いた堕天使は再会することなく死んでいる。
分かり易く言えば、彼は龍と魔神柱に対しての特攻を持っている。その細胞と力を持っているが故に。これだけならば強力に見える。だが、それだけだ。
無限に進化できる存在として生まれたこの獣はしかし、その素材を間違えた。いくら可能性があろうとも、その下地がなければ選択肢などあってないようなものだ。
兵藤一誠だからこそ魔神も人王も戦えない。英雄派は未熟者揃いだ。だとしても、この獣は恐ろしく弱い。彼らならば倒すまではいかなくても、時間稼ぎができてしまうほど。
「我は我が力の限り我が任務の標準を高くせんことを努むべし」
獣はその能力の低さ故に、ペルセウスの一撃を避けられない。この獣は弱い。だが、現段階での話だ。無限に成長できる。簡単に進化できる。戦えば戦うほどに、敵と相対するだけで強くなるのだ。
だから、挑むとすれば短期決戦が定石だ。元より、彼らの勝利条件を考えれば戦闘はほんの数十秒だ。
「我が任務にあたりて、取り扱える人々の私事のすべて」

英雄派達は、獣の足元にあふれ出る泥に注意しながら、攻撃するよりも回避することに専念していた。ある者は弓を弾き、ある者は炎を滾らせ、ある者は幻で惑わせる。

「おらおら！」

「せい！」

攻撃を受けるばかりだった獣は咆哮する。苛立ちと苦痛を発散しようと、癇癪をばら撒く。

「舐めるなあああああ！」

獣が繰り出すのは、本来であれば修得してはならぬ忌まわしき技。

「ロンギヌス・スマッシャー……！」

だが、似たような技をつい最近見た彼らの対応は早い。

「俺が盾になる！」

前に出たのは、英雄派の構成員コンラ。

影を操る力を身に宿していたために、幼少期から気味悪がられ迫害された過去を持つ。英雄派は彼にとって居場所であり、その居場所を与え、自分のような者でも英雄になれると言ってくれた曹操を尊敬している。

アーチャーとの初めての邂逅にて、コンラは死にかけた。仲間を守ろうと影を出したが、それでも守り切れなかった。アーシアが間に合わなければ自分も仲間も死んでいただろう。

無力だった。悔しかった。アーチャーへの恨みだの憎しみだのよりも、自分自身への怒りが強かった。

あの時だけではない。アーチャーが曹操だというのならば、その世界線での自分は何をしていたというのだ。リーダーがああなるのを黙って見ていたというのか。ああなんて無様。己を孤独から救ってくれた男を、あんなに寂しい掃除屋にしてしまったというのか。

それは駄目だ。少なくとも、この時間軸においては俺が、俺たちが！　この男をあんな風にさせてはならない！　導かれるのではなく、一緒に同じ夢を見ていたいのだ！

「禁手化（バランス・ブレイク）」

だから求めた。万物を切り裂く刃でもない。力の具現たる鎧でも

ない。仲間たちを守れる、最高の盾を！　あらゆる攻撃を飲み込む巨大な盾を。

「闇夜の暗黒孔（ナイト・リフレクション・ブラックホール）！」

それでも、まだ足りない。亜種であろうと、所詮は神滅具でもない神器の禁手。人類悪の必殺を防ぐには力不足だ。

「駄目だ、吸いきれない……！」

「まだだ、後は俺がやる！」

曹操が槍を掲げる。

「滾れ、我が魔槍。『暁の魔神槍』第二形態――白夜の天槍（ミッドナイト・サン・ロンギヌス）！」

槍から放たれた白い極光。ビームレーザーを彷彿とさせるそれは、ロンギヌス・スマッシャーとぶつかり合い、相殺した。

しかしながら衝突の余波を受ける英雄派。曹操やヘラクレスといった幹部勢は堪えられたが、下位構成員たちは吹き飛ばされてしまった。それでもアーシアへ影響がないように守るあたりは流石か。

「はは……似たような攻撃を受けたことがあって良かったな」

「ＩＦのリーダーに殺されかけたことがこんな形で役に立つとは……」

「本人の前で言わないでくれ」

自分があああなるとは微塵も考えられたくないし、自分の可能性というだけでまったくの別人と考えるのが妥当だ。それでも思うところはある。

「我が知り得たる一家の内事のすべて、我は人に洩らさざるべし」

だが、獣には英雄志願達の姿など見えていない。彼に見えているのは、自分が攻撃したにも関わらず無傷で済んだ少女の姿だけだった。獣には彼女の詩は耳障りにしか聞こえなかった。

「何故だ、おまえを殺すために放った攻撃だ……！　それが何故、おまえに当たらない！　どうして、おまえが死んでいないんだ！」

獣にとってこの少女は敵ではないのだ。否、彼女にとって彼が敵ではないのだ。それは勝てるだの強いだのの問題ではない。そういう

意識ではなく、そういう認識ではないのだ。
だが、獣はその解に至れない。
「あああああああああああああああ！　殺す、殺してやる！　おまえさえ殺せば、俺は人類を進化させられる！　この星を滅ぼしてでも、人類を素晴らしくしてやるんだ！　悪魔を、神を、堕天使を、一匹残らず滅ぼしてやる！」
身構える英雄派。アーシアの詠唱が終わるまであとほんの数秒。その数秒を死ぬ気で稼ごうとする彼らを、獣は嘲笑う。

「我は心より医師を助け」

次の瞬間、獣はアーシア・アルジェントの目の前にいた。
これが獣の進化だった。獣が獣であるためには、アーシアを殺さなければならない。だが、英雄派がいる限りアーシアには攻撃が届かない。そして英雄派を殺し尽くす時間の余裕はない。ならば、英雄派の相手をショートカットしようと――獣は瞬間移動を修得した。
皮肉にも、これは素材となった少年が好んでいた少年漫画から得られた着想だ。この獣の中に、少年が生きている何よりの証拠だった。
「っ！　アーシア、逃げろ！」
だが、聖女は逃げる挙動すら見せない。当然だ。患者を前にして看護師が逃げることなど有り得ない。まして、この少女は正しい救いの手を差し出すために強くなったのだから。

「我が手に託されたる人々の幸のために身を捧げん」

ナイチンゲール誓詞ならばこれで終わりだ。だが、彼女はアーシア・アルジェントだ。フローレンス・ナイチンゲールではない。元々ナイチンゲール誓詞は彼女の作ではないが、アーシアが目指すものはナイチンゲールの志が作る理想だ。そして、ただナイチンゲールを真似ただけの理想など目指す意味はない。
もっと先に、もっと未来に。明日をより良くするために！

だから、追加の詠唱がある。アーシア・アルジェントとしての理想を唱える。

「――そして」

「無駄だぁ！　その鬱陶しい歌をやめろ！」

獣はその泥だらけの籠手を、穢れなき少女へと伸ばす。英雄派では間に合わない。魔神も人王も英霊もいない。

だが、同じような空間跳躍ができるものがいれば話は別だ。

――パリン、とガラスが割れるような音がして、獣の真正面に『悪魔』が姿を現した。

「我らは幾度でも理不尽に立ち向かい、我らは何度でも絶望を乗り越えん」

「Ｄｄｒａｉｇ！」

かろうじて言葉になっている音のような奇声を上げるそれは、悪魔としか表現しようのない外見をしていた。全体的にはドラゴンに近いフォルムだ。身体の表面は皮膚というより鎧に近く、純白だ。爪が異様に長く、顎から見える牙も鋭い。背中から広がるのは、漆黒の悪魔の羽だった。

「ＤｄｒａｉｇＤｄｒａｉｇＤｄｒａｉｇＤｄｒａｉｇ！　Ｙ　Ｄｄｒａｉｇ　Ｇｏｃｈ！」

悪魔はその凶悪な腕で獣と取っ組み合う。

「邪魔をするな、何だ、貴様はこの珍生物がァ！」

この獣の知識は、兵藤一誠と『真理』の泥によるものだ。ソロモンの死は兵藤一誠の知識で知っているし、ヴァーリ・ルシファーの変貌も分かっている。だが、それが目の前の悪魔と同一であるとは初見では分からなかった。それほどまでに、かつての美しき白い龍の面影がこの龍にはないのだ。

「いつか、螺旋の闘争が終焉を迎える時」

少女の口から語られるのは皮肉にも、魔術王が共犯者たちと目指した最初の理想。戦いではなく、慈愛であらゆる種族が結ばれる瞬間。

「だらっしゃぁあああああ！」

更に、その獣を背後から抑えつける何かがいた。

それは人間の少年の形をしていた。かつて黙示録の獣と謳われた怪物。人間が産み落とした大災害。この少年が獣は自らの半身であると即座に理解した。

「トライヘキサかァアアア！」

「ああ、その通りだぜ、我が半身！　もとい、糞お父様もどき！」

トライヘキサは黙示録の獣と呼ばれた頃よりも弱体化している。それでも、二天龍さえ上回る膂力がある。そのすべてを以って、獣を抑え込むが、一瞬だけだ。即座に解析、適応、進化する。結果として、彼の乱入は獣に途方もない暴力を与えてしまった。

それでも、この一瞬が必要だった。

ほんの一瞬だったとしても、これこそが世界を——否、ひとりの少年を救うための一瞬だった。

「我らとともに、貴方の魂があらんことを祈ります」

アーシア・アルジェントの言う貴方とは、きっと、兵藤一誠のことであり、魔術王ソロモンのことであり、泥の材料となった人類すべてのことなのだろう。

それを聞けば、戯言だと嘲笑う者がいるだろう。大口を叩くなと詰る者がいるだろう。おまえひとりに救える人間など知れていると諭す者がいるだろう。

だが、過去を背負わずして、どうして未来を描けるのか。

「禁手化（バランス・ブレイク）——穢れ無き極光の園（トワイライト・ランプ・サンクチュアリ）」

少女の手の上にぼんやりと小さな火が灯る。世界を照らすには小さな光でありながら、闇夜を歩くには十分な輝きを持っていた。

三千年の呪いが、いま終わりを迎える。

夜明けはまだ遠く

「禁手化（バランス・ブレイク）――――穢れ無き極光の園（トワイライト・ランプ・サンクチュアリ）」

アーシア・アルジェントの亜種　禁　手（バランス・ブレイカー）、穢れ無き極光の園（トワイライト・ランプ・サンクチュアリ）。外見は、アーシアの手のひらに収まってしまうほどの小さな灯火。その効果は『治療』あるいは『最適化』とでも言うべきもの。効果範囲はこの火の熱を感じられる円形であり、一度に複数の対象を捉えることが可能だ。身も蓋もない言い方をすれば、「火の熱を感じる範囲にいる生命体を無理やり健康にする」能力である。

「あ、あうううあ、おいあああああ！」

「GYAEEEEEEEEEEEEEE！」

「え、私（おれ）も!?」

今回発動条件下にいたのは、兵藤一誠、ヴァーリ・ルシファー、トライへキサの三名である。

「や、やめろ、やめて、くれ……！」

まず、兵藤一誠が苦痛に悶える。ヴァーリとトライへキサの拘束から抜け出し、殺すべき少女が手の届く場所にいるというのに両膝をつき、祈るように天を見上げることにしかできない。

「まだ、俺は、俺はまだ誰の願いも叶えていない！　誰の想いにも報いていない！」

その魔神の如き紅蓮の鎧が、古びた鍍金のように?がれていく。鎧の下には泥の塊がいた。人の形をしている、怨嗟の塊が自らの終わりを否定していた。彼の身体を覆う泥は虫が蠢くようにうねっていた。

「他の誰も忘れても、俺だけは覚えなければならない！　俺が世界に思い出させなければならない！　俺は――俺は誰の無念も消せていない！　誰かを痛みから救えていない！　まだ俺は滅ぶべきではない……!!」

やがて泥も拭われていく。兵藤一誠の手が、足が、目が、耳が、口が、命が人類史の業と闇から解放されていく。彼の身体から剥がれた泥は地面に落ちると途端に消滅していく。

「やめろやめろやめろやめろやめろやめろ、やめ……あ、あうううあ、おいあ

あああうおいえあいうおあああ！」

「誰も彼もが貴方に『期待』している訳ではありません。そこは勘違いされないようお願いします。そもそも、世界中の絶望をただ一人に負わせるなど、本来は正気の沙汰ではないのです。私たちは確かに、痛みとともに生きています。ですが、痛み以外のものも確かにあるのです。世界は美しいだけではありませんが、ちょっとずつでも綺麗になっています。そして、それは今日や明日に為そうと急ぐようなことでもないのです」

泥と一緒に、彼の身体に埋め込まれていた異物が排出される。八個のチェスの駒と九個の指輪が。

「気楽に、そして誠実に――であれば、私たちはきっと大丈夫。貴方は、此処で終わって良いのです」

「……ありが、とう」

獣の断末魔とともに、泥は完全に拭われ、指輪が役目を終えたように砕け散った。

同時に、兵藤一誠が地面に倒れる――前にアーシアが抱き止めるように支える。

「おやすみなさい。そして、おはようございます」

朧げな意識の中で、一誠は確かにその声を聴いた。半年も前に、五分も会話していないはずの少女の声を。

「アーシア……？」

「はい。お久しぶりですね、イッセーさん」

一方、少女も少年を覚えていた。そのことが、少年にとって最大の救いだった。少年は自らの命の終わりを悟っていた。荒療治による泥の排出で生命が摩耗してしまったのだ。体力や魔力などではなく、根本的な生命力が足りない。

「最期に君に会えて……良かった……」

死を受け入れようとする兵藤一誠に、アーシアは最期という言葉を否定する。言葉ではなく物理で。

「心肺蘇生！」

「ごふっ！」

アーシアは一誠の腹部に強めのパンチを繰り出す。
「死なないでください。私は貴方を救います。貴方を殺してでも！」
滅茶苦茶である。
「心肺蘇生ってあんな方法だっけ……？」
「何かが間違っている気がする」
「いや、全部間違っているからな」
「心肺蘇生っていうかただのショック療法」
「普通なら治療にすらなりませんよね」
「こひゅー、こひゅー……」
「呼吸確認！」
「でもちゃんと蘇生させるあたり、アーシアだ」
ひそひそと話す英雄派を他所に、アーシアは冥界から戻ってきた救援に声をかける。それは、聖杯を持って生まれた半吸血鬼。
「では、ヴァレリーさん。後はよろしくお願いします」
「はい、任せてください！」
これが正しい反則技の使い方である。
「では、怪我人の皆さんは整列してください。これより治療を開始します」
「い、いや、まだ冥界で円卓と戦っている奴らもいるからその救援に――」
「は？」
「いいえ何でもありません大人しくしますからその拳を下げてください看護師様！」
よろしいと頷くアーシアだったが、強い舌打ちを一つ。
いつの間にか、ヴァーリ・ルシファーとアーチャーの姿がなくなっていた。どちらも治療が必要だというのに。
リゼヴィム・リヴァン・ルシファーもいなくなっているのだが、彼は特に病人でも怪我人でもないので最初からアーシアの関心の外にいた。
「うお、何これめっちゃスッキリ！　これが噂に聞くデトックスか。身体が軽い。アーシア・アルジェント様、貴女が天使だったのですね

！」

その傍らで、身体に溜まっていた泥の残滓を吐き出したトライヘキサが元気溌剌していた。

■

突然だけど授業を始めよう。紙とペンを！

ああ、待った。どちらも私が用意しよう。此方を使い給え。ちょっと試し書きをしてもらえるかい？

……そう、黒いボールペンに見せかけた赤のボールペンだ。

どうして君はこのボールペンが黒だと思ったのか。理由は、ボールペンの外の構造が黒だったことと、この場面設定として黒の方が適切だったことが挙げられるね。

しかし、紙に書くまでこのペンの色が赤になっていることに気づくのはよっぽど観察力のある人間だ。ポールペンの色には見た目で分かるという先入観があるからね。そして、芯を出してみるまでこのことには気づけない。

そして、芯を出す前にペンを火の中に放ってしまえばそれが実は黒のペンではなく赤のペンであったと気づくのはほぼ不可能だ。

さて、この話を参考にして思い出して欲しい。

アザゼルとサーゼクス・ルシファーが京都でソロモンを倒した後のことだ。彼らは指輪を破壊した。当然、彼らの認識では、あれは本物のソロモンの指輪の一つだったはずだ。クルゼレイ・アスモデウスがソロモンになった振りをしていた、というのも無理がある。あの場にはアザゼルがいた。本物の魔術王を知る者ならば、噂に聞く『笑いながら怒っていた』表情を間違えるはずもない。だから、あの場でソロモンは二度目の死を迎えた。この事実を否定するつもりはない。

では一旦、指輪について考察を重ねてみよう。

ソロモンは指輪で復活した。指輪の効果は指輪に封印されたソロモンの魂が使用者の身体を乗っ取る。ここまではいい。だけど、指輪の効果はそれだけなのかな？

例えば、そう――『ソロモン』が死ぬ度にその魂を回収するような能力があるのではないか、というのが私の見解だ。

もっと言えば、一度指輪を使用してしまえば、指輪を外そうと使用者の身体はソロモンに乗っ取られたままではないかと考えても不自然ではないよネ。むしろ身体を乗っ取るのに指輪を装着し続けないといけないなんて片手落ちを、これほどの完璧犯罪を実行した魔術師がするだろうか。

以上の考察から結論を述べよう。

サーゼクス・ルシファーの破壊した指輪は偽物だ。

あの時点で三大勢力が何をどの程度把握していたかは不確定だが、少なくとも、指輪でソロモンが復活したことは間違いようがない事実だ。だから指輪を破壊しようとすることは必然。そして、自らが乗っ取られる可能性を考慮して干渉を最低限にしようとするのも自然。ならば、指輪が偽物だったとしても気づかないのは当然。ましてソロモンは一度神相手でも騙せる指輪を偽造しているんだ。共犯者であるベリアルを例外とすれば、魔王程度の眼を誤魔化せないはずがない。

もしもあの場にサーゼクス・ルシファーだけだったなら、彼は指輪を軽くでも調べたかもしれない。彼はソロモンと直接面識がないからね。乗っ取られる可能性を考慮しても、指輪が、というかクルゼレイ・アスモデウスを乗っ取った指輪が本当にソロモンのものなのか調べたかもしれない。

だが、あの場にはアザゼルがいた。ソロモンと直接面識がある者がいた。そのアザゼルが間違いなく本物だと認識していた以上、クルゼレイ・アスモデウスの身体を乗っ取っていたのはソロモン。そして、指輪でソロモンが復活した以上、その身につけている指輪こそがソロモンの指輪であると誤認するのは無理もない。

加えて、あの場には京都妖怪の大将である八坂がいた。ソロモン本人を知らず、ソロモン王という脅威の面だけを知る者がいた。それが余計にサーゼクス・ルシファーの危険意識を高めた。ソロモンを危険視しているのは自分たちだけではないのだから、一刻も早く排除すべ

きだと思った。
　更に、あの時点では獅子王や白龍皇と戦った直後だった。正体不明の敵。まして二天龍さえ超える脅威。聞いた話だとキングゥについても色々あったらしいしね。それだけの問題を抱えているんだからやれることは早く済ませてしまおうと急くのも無理はない。
　まして、あの時点では『騎士』が正体不明のソロモンの刺客と戦っていた。情愛が深い魔王ならば、一刻も早くソロモンという最大の問題を解決して眷属の無事を確認したいはずだ。
　サーゼクス・ルシファーにも、アザゼルにも、これらの条件のせいで思考を回す余裕がなかった。そして、一度倒したと安心したからこそ、考え直す気もなかった。ソロモンは死んだと結論付けてしまった。当然、他の勢力も手抜かりがあったとは考えられずそれを信じた。キングゥの話を聞いた今なら気が回るかもしれないけどネ。
　どの道、魔術王は復活を待っていると考えるべきだ。指輪の中で怒ったように笑いながら。――あるいは、すでに新しい身体を手に入れているのかもしれないか。

■

　冥界奥地のある研究施設に、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーの姿があった。
「うひゃひゃひゃひゃ！　いやぁ、大したもんだねえ。強い英雄様が生まれて魔王の息子であるおじさんもテンションあげあげだよ！」
　心にもないことを言うリゼヴィムの前に、ユーグリット・ルキフグスが参上する。
「お帰りなさいませ、リゼヴィム様」
　魔王直轄の施設で軟禁状態にあるはずの彼だったが脱走した。リゼヴィムも同じである。元より冥界の戦力は会談の方に集中していたこともあるが、件の指輪を所有していたベリアルの協力があったのだ。いくら堅牢な城であろうと魔王がいないのならば脱出は容易である。

「戻ったよユーグリットくん。予想外のことはあったけど、これで概ねソロモンとの契約は終わりだ。俺たちは俺たちのやりたいことをやらせてもらおう」
「御意に」
そんな彼らの前に車いすの女性が現れる。身に纏う雰囲気は悪魔のオーラ。気品はあるが、病み上がりのようなやつれた顔つきだ。
「ただいま、ママン！」
女性の姿を視認するなり、リゼヴィムは満面の笑みで抱き着いた。その女はリゼヴィムの抱擁を受けながら小さく微笑んだ。
この女悪魔を創世記から生きる聖書に記された者が見れば驚愕しただろう。何故生きている、と口にしたかもしれない。
彼女こそが悪魔の母リリス。初代ルシファーの妻にして、ほとんどの悪魔にとって母と呼ぶべき存在。原初の人アダムの最初の妻でもある。
はじまりの悪魔――『初代』と呼ばれる悪魔はリリスから生まれた。四大魔王や番外の悪魔などは除くが、ほとんどの悪魔はリリスが生み出したのだ。リリスが生み出した悪魔の中でも特に優秀な個体こそが、初代七十二柱だった。
悪魔の誕生は初代ルシファーとリリスによる儀式によってなされたが、唯一二人が交わって生まれた悪魔こそがリゼヴィム・リヴァン・ルシファーだった。
多くの悪魔を生み出した代償として、リリスは肉塊になった。肉塊となったリリスはリゼヴィムによって厳重に、そして極秘に守られていた。
リゼヴィムがソロモンに対して出した要求は二つ、『泥』に関する知識と、母リリスの再生だった。
結果として、リリスは肉塊から人型に戻った。ソロモンが作り出した聖杯に旧魔王派の死体を手当たり次第につぎ込んで燃料とし、原初の母は蘇った。もっとも、元通りになったのは形と能力だけだ。記憶や人格はほとんど残っていない。肉塊に変わり果ててから時間が経過していたし、それだけ初代ルシファーが妻に無理をさせていたこと

の証明だった。
だが、リゼヴィムにとってはそんなことはどうでもいい。言葉を発することができずとも、自分のことを朧気にしか覚えておらずとも、母がこうして生きて、自分を見てくれているだけで満ち足りる。
たとえ、ソロモンがリリスに新しい悪魔を生ませるように要求したとしても、父が施した儀式とは比較にならないほど母への負担は少なければ問題はない。……生まれた個体が超越者であり、それがソロモンの新しい身体になったともなれば惜しい気はするが。

■

「ああ、素晴らしいな」
それは少女の形をしたナニカだった。
「何でだ」
少女は魔術を用いて、ある光景を見ていた。本当に美しいものを眺めていた。
「何で、俺たちはあそこにいないんだろうなぁ……」
本当に辛くて、悲しくて、寂しくて泣いていた。
「俺たちは一体、何を間違えてしまったんだろうか。ああ、でもやり遂げるしかないよな。主ならばともかく『奴』の思い通りになどさせるものか」
無理やり涙を拭えば、そこには激怒を宿した笑顔があった。
魔術王の脅威は未だ終わらず。

朝を迎えるために

では頃合いだ。騎士を撤退させてくれ、獅子王。

「これがおまえの筋書きか？　■■■■」

概ねその通りと言いたいところだが、そうでもない。よもやビーストDが両方とも倒されるのは予想外だった。代案があるとはいえ、手間が増えるのは何とも面倒だ。流石はソロモンといったところだな。

「あくまでもソロモン一人の手柄だと？」

当然だ。

ソロモンは優秀だ。私が加護を与えた者の中でも特に。ただ……彼の価値観には理解できない面もある。シバの女王の件もそうだが、よくわからない行動をする子だった。最近ではリリスを復活させたことだな。強力な肉体が必要とはいえ、アダムが棄てたものに縋ろうなど。世界線によっては世界が滅びかねないというのに。

「世界が滅ぶとしたら、それはおまえの責任だろう。おまえがいなければソロモンが『真理』を生み出すことはなかったのだから」

そうでもない。私が一因であるのは認めるが、起源は四千五百年前に此方の英雄王が――いや、これは関係のない話か。語る意味もないこの星の恥部だ。神々の劣悪さが招いた失敗だ。

それに、『真理』が世界を滅ぼすような旨の発言は控えてもらおう。逆だ。逆なのだ。『真理』がなければ、この世界はとっくの昔に滅んでいた。そんなことにも気づけないこの世界の神々は、霊長を統べる資格がない。ソロモンが詐欺同然の文句で『真理』を組み立てたのはそれが原因だ。異なる神話が複合しているという歪な宇宙観は、『真理』という柱のおかげでかろうじて保っているのだ。私やソロモンがやっていることは、その修正だ。責められる謂れなどどこにもない。

「不愉快だ。実に不愉快だ。本来であれば、私の理想都市におまえのような存在は不要だ」

私がこれからの世界にとって必要であることは再三教えただろう？

君と円卓の騎士が天使の代わりに、ゲーティア達が悪魔の代わりに

なる。そして私が神になる。女神と言っても、君は成り上がりだ。主柱にするには少々脆い。ゲーティアは強度では問題がないが、彼は混ざり物過ぎる。オーフィスには「無限」だけではなく「混沌」という性質がある。トライヘキサは言うまでもない。グレートレッドにはこれ以上の負担をかけるわけにはいかない。

私たちが適した座に就くことで、聖と魔を始めとした世界のバランスは保たれる。当初の予定では天使も悪魔も魔神にしてもらうはずだったが、君の登場は私にとって嬉しい誤算だった。支柱は多ければ多いほどいいからね。

君が此方に来る契機を紡いだ夢魔には感謝を捧げたい。リンゴでも……いや、かの妖精郷には掃いて捨てるほどあるのだったかな？

「あれは感謝など要らんだろうよ。奴にとっても私にとっても、貴様が盛大に失敗することが最大の報酬となるがな」

それは出来ない相談だ。最早ここまで来てしまえば、私が神になることは決定事項のようなものだ。

「ほう？　そういえば具体的な手段は聞いていなかったな。貴様、どうやって神になるつもりだ？　貴様の権能は神に等しいが、貴様――貴様の種族はその性質上神にはなれない。もしなれるのならば三大勢力は冷戦状態になどならんだろう」

簡単だ。ベリアルを通じてリゼヴィムに流してもらった『聖書の神の復活』の方法はね、本当に唯一神を復活させられるんだ。まあ、蘇る唯一神は聖書の神ではなく私なのだが。『システム』には随分前に細工させてもらった。聖書の神の肉体は復元される。だが、その中に入るのは私だ。次の唯一神はミカエルでもソロモンでもルシファーでもない。私だ。……『訣別』がなされていればこうはいかなかったが。

ざまあみろ、と言うやつだな。神め、私にあのような仕打ちをした報いだ。『槍』の中で臍でも噛んでいるがいい。コキュートスには娯楽がないのが最大の難点だ。こうして意識だけ飛ばすのも疲れる。

〝痛がる演技〟もいい加減飽きた。

ミカエルたち天使がもう少し優秀だったら君達やゲーティアを異

世界から呼ぶ必要もなかったというのに。
「……滑稽な話だ」
全くだ。私やベリアル以降の天使にはどうも役立たずが多くていけない。わざわざこんな手の込んだことをしなくては、神の一柱も復活できないのだから。
此方の君を妖精どもに奪われたこともそうだ。アーサーだけではない。モーセやシャルルマーニュを『システム』にくべられていたならば、もっと早くに準備は整ったのだが。リチャードやジャンヌは優秀と呼ぶには一歩足りなかった。結局、手に入った上等な死体はソロモンだけだった。ヨシュアやゲオルギウスは合格ラインだったが、手違いで『システム』にくべられることはなかった。
……救世主とまで呼ばれた『あの子』があんな結末になってしまったのが最大の失敗か。どうして優秀な子に限って反抗的なのやら。私の目的に気づいたのならば私に協力すべきだとどうして理解してくれない。
「……貴様がその理由に気づかない限り、永遠に解決はしないだろうな」
何が言いたいかは分からないが、そろそろ始まるぞ。盛大な花火が。
「花火？」
私が三千年前から待ち侘びた、特大の花火だよ。新たな神の誕生を祝うには、ちょうどいい。

■

とある廃屋の中、その少年は目を覚ます。
「……ここはどこだ」
暴走という名の呪縛から解放されたばかりのヴァーリ・ルシファーである。
「よう、ヴァーリ。俺っちが分かるか？」
「おはようにゃん、リーダー」

ぼやける視界に入ったのは、猿と猫の妖怪。
「美猴に黒歌……？　俺は確か……」
記憶を手繰り寄せようとして、ヴァーリを強い頭痛と寒気が襲う。
彼の一番新しい記憶は神造兵器の本気だった。圧倒的だった。自在に変化する身体に、驚異的な機動力。砂を千差万別の武具へと変えてきたが、その武具ひとつひとつが伝説級の魔剣や聖槍に匹敵した。そんな武具をまるで絨毯爆撃のように雨あられと惜しみなく撃ち込むのだから堪ったものではなかった。
魔王の血筋であり歴代最強の白龍皇と言われるヴァーリと孫悟空の末裔である美猴をして、手も足も出ないほどの暴力の権化。逆鱗に触れられた龍とはまさにあの様を指すのだろう。
「俺は、どうなっていたんだ？」
「その様子だと記憶はないみたいだな。俺っちも詳しいことは知らないけど、何でもオーフィスの蛇を突っ込まれたらしいぜい？　それも旧魔王派や英雄派に渡されたのとは比較にならないほどでっかいのを。で、今の今まで暴走してた」
それを聞いて、何故かヴァーリの脳裏に胡散臭い男の軽薄な笑みが浮かんだ。魔術師然とした恰好をした花だらけの男だ。記憶にない顔のはずだが、何故そのような顔が見えたのかは分からない。
「……アルビオン」
『意識が戻って何よりだ、ヴァーリ。目覚めたばかりで悪いが大事な話がある。歴代白龍皇の残留思念は消滅した』
「消滅？」
『先程、今代のドライグを鎮めるために使われた妙な力に巻き込まれてな。どうやらあの小娘の能力は封印や沈静の類のものらしい。そして、おまえを鎮めるためには歴代の残留思念が邪魔だったというわけだ。さながら病原菌の如く消し飛ばされた』
神器を探ってみれば、歴代の気配がなくなっている。消滅したというのは本当らしい。
『次に、おまえが飲まされたオーフィスの蛇の力だが――そのまま残っている』

「は？」
『自分の身体がどうなっているかよく調べてみろ』
　言われてみれば、自分の肉体が自分でないような感覚がある。しかし違和感があるわけでもない。与えられた力が馴染んでいるといった感じだ。
「あれからどのくらい時間が過ぎた？」
「あー、三か月くらいだな。俺っち達もソロモンやら狐の姐さんやらトライヘキサやらにこき使われてよ。目を盗んでようやく逃げ出せたんだぜい」
「トライヘキサ？」
「そのあたりは追々話すにゃん。いやー、これで私達も自由の身だにゃー。……冥界が焼かれる前に、白音を迎えに行かないと」
「？？？？」
　状況が理解できないヴァーリ。彼がいくら天才と言っても、二人の僅かな言動だけで世界の現状を理解できるはずもない。強者との戦いなどという小さなスケールで物事は動いていない。
「それで、リーダーはどうするんだよ。先に言っておくけど、禍の団はもう原型留めてないぜ」
「ついでに言うと旧魔王派は全滅して、オーフィスと英雄派は魔神柱に鞍替えしたにゃ。アーサーやルフェイも獅子王ってやつのところに行っちゃったみたいだし」
　二人の様子から察するに、首魁である龍神や二大派閥の旧魔王派と英雄派がその有り様では、他の派閥もまともに機能していないだろう。元々強者との闘いが目的で入ったため、それほど愛着はない。
「……そうだな」
　思い返すのは、泥人形の猛攻。通常であればトラウマ級の恐怖を刻み込まれ、二度と彼に会いたくないと考えるだろう。だが、この戦闘狂は違った。天賦の才能を以って生まれた歴代最強の矜持が、あれほどの敗北を許さなかった。
「やはりキングゥに再戦を申し込もう。やられっぱなしは趣味じゃない」

「――まるで成長しておらぬ。敗北から何を学んだ？」

床に剣が突き立てられるような音がしたかと思えば、突然、その場に『死』が現れた。

それは骸骨の面をつけた大男。巨大な剣を携え漆黒の衣装を着た姿はまさに死神。武を限界まで極めたであろう圧倒的強者の風格。一瞬でも油断すれば首を取られる。

美猴と黒歌は狐の小間使いをしていた時期にこの死神と対面していた。同時に、初対面のヴァーリよりも彼我の実力差を痛感していた。何より二人は目撃している。この死神が、最強の魔獣を真理から解放する瞬間を。この剣士がどれだけ規格外かを思い知っている。

「げえ！　この爺さんはやべえぞヴァーリ！」

「な、何でアンタが此処に……！」

二匹の恐怖も驚愕も無視して、死の使いは言霊を紡ぐ。それは死刑宣告に等しい。

「白龍皇よ。貰い物の翼で何処を目指した？」

悪魔の羽？　忌み嫌う祖父や父の遺伝だろう。白い龍の翼？　運よく手に入れた偶然の力だろう。龍神の力？　おまえの愚かさの証明だろう。

そんなもので何処に行けるというのだ。

「野花すら咲かぬ地獄の底か？」

最強の座？　強者との闘い？　宿敵との決着？　真なる白龍神皇？

おまえが欲しかったものは、そんなものではないだろうに。おまえが求めていたものは、もっと有り触れたものだったはずだ。

「馬鹿者め。首を出せ」

■

獅子王の号令により、円卓の騎士たちは撤退していく。人間界からも、冥界からも。

冥界の戦場の一つで、ひとりの戦士の命が消えようとしていた。

魔帝剣のジークフリート。シグルド機関の最高傑作。聖王剣のアーサーとの戦いに彼は敗れた。四肢は切り裂かれ、右目は潰れ、頭部は砕かれ、腹部は開かれていた。今からではヴァレリーは間に合わない。治療班も間に合ったとしても、安楽死させる道を選ぶだろう。

彼が所持していた魔剣も、魔帝剣グラムを含めて破壊されていた。無論、相手側であったアーサーもかなりの重症ではあったが。

「ジークフリートよ。死の担い手であろうと、自らが死を迎えるとは滑稽な」

それを看取るのは、人型になった魔神フェニクス。クラン・カラティンから分離した彼は救援としてこの場に来たが、手遅れだった。生と死を司るといっても、聖獣のフェニックスのように回復の涙を流せるわけでもなし、不老不死を与える血を宿しているわけでもない。

最初から冥界にも戦力を回していれば話は違ったのだろうが、円卓の騎士の介入は予想外だった。出現するとしても会談の方であると予想されていたのだから当然だ。

「悲哀／疑問／彼は悪か。否、否、否、彼こそが自然」

生きるが故に死ぬ。彼の生涯は此処で終わる。だが、そこには未練や後悔といった感情がない。

「なればこそ近似必然／ジークフリート≒フェニクス」

いつまでも戦い続けたい邪龍や晴らすべき無念があった八重垣正臣とは違う。ジークフリートはヴァレリーの聖杯にも応じないだろう。宿敵とも言うべき最強の剣士との闘いで、この戦士は燃え尽きたのだ。

「我／生の中に死にたくないと願いしもの。彼／生ではなく死のために生み出されたもの」

元々彼は短命だ。ならばその限りある命を意味のある使い方で終わらせたかった。何の意味もない生涯など御免だ。だからこそ自分は教会を抜けて曹操の理想に手を貸した。今の時代、戦うことしかできない自分が名前を残すのは不可能だ。英雄になって、何かを残したかった。それが、敗北という形であっても。

「強制／我らはあるだけで／矛盾内包。絶対的未成就願望を持ち続け

よと！」

「……前々から思っていたけど、貴方の詩はセンスが絶望的だな」

そう言う彼の顔は満ち足りていた。生涯最後の戦いとしては、最高の一戦だった。

「フリードやリント。弟や妹に遺言はあるか？」

「弟妹？　あれが？　馬鹿を言ってくれるなよ。人知を超えた魔神らしくないな。あいつらは失敗作だ。僕みたいな最高傑作の足元にも及ばない。失敗作に伝えるべきものなんてないさ」

あの二人は自分とは違うと強調するジークフリート。

「成功作の僕がこうなんだ。失敗作のあいつらには戦士としては何の期待もできないな。だったら、あいつらは人間でいいだろう。これから普通に生きて、普通に死ぬべきだ」

だから僕はここで終わっていいと嘯くジークフリートに、フェニクスは心底妬ましそうに唸る。

「限りある命。なんと羨ましい」

フェニクスの言う通りかもしれない。どの道名前さえ残せないというのなら、本当に何も残したくない。残される者に背負わせるものなどない。

「あてつけがましい生者だ。あてつけがましい死に方だ」

本当に羨ましい、と魔神は再度唸る。

「だから、我は汝を簡単に死なせるつもりはない」

「へえ、こんな死に損ないを具体的にどうするつもりだ？　聖杯での復活はお断りだけど」

「ヴァルハラに明け渡す」

フェニクスの背後から現れたのは、美しい戦乙女だった。麗しい銀髪。現在オーディンの御付をしているロスヴァイセである。

「一度会っている、んですよね？　フェニクスさん。私の記憶にはありませんけど」

「その件に関しては謝罪しよう、戦乙女ロスヴァイセ。そして感謝しよう。あれがなければ今頃我らは消えていた。完全消滅は我の望むところではあるが、定義の間違った神に利用された終焉など拒絶す

る」

状況が飲み込めないジークフリート。

「ど、どういう」

「キングゥは異世界のことを会談にて公開した。そして、その話から北欧の大神オーディンはニヴルヘイムのヘルが我らと通じていることを突き止めた。我らの計画に協力する代わりに、勇者の魂を差し出せと交渉してきたわけだ」

魔神柱と地獄の長たちの関係を見抜くまでならともかく、この短時間でそこまで交渉を進めるのは如何に知恵の神であるオーディンでも不可能だろう。つまり、元々その為の準備はしていたということか。

「一応は元教会の戦士である君が死ねば、その魂は十字教の地獄――冥界に落ちるだろう。だが、ここはもうすぐ焼却される。それでは文字通り犬死にだ。有効利用させてもらう」

何も残せないのと何も残らないのとでは意味が違う。

「よってヴァルハラに召されるがいい。かの地に召されることが、汝が英雄であったことの証明だ。英雄を目指していたのだろう？　不満など許さん」

「……はは、最期まで利用されるってわけだ。まあ、そういうことだと認識しておくさ」

踵を返すフェニクスは去り際にロスヴァイセに一言。

「我らの共犯者をよろしく頼む」

「ええ。戦って死んだ勇者を無碍にはしませんよ」

ロスヴァイセの発言は正しく北欧の価値観だ。何せ北欧神話においては『戦って死ぬことが最高の名誉であり、戦死以外は悪』なのだから。

「では、勇者様。どうか我らのヴァルハラに――」

オーディンの下に迎えられる英雄の完成。これを以って、シグルド機関の研究は完全に終結した。

■

「――以上でフラウロスからの報告を終了する」
「ゲーティアより確認。これにて『期待』の獣は打倒された。この世界の人間の価値は証明された。復活の可能性がある魔術王に妨害される前に、獅子王にこれ以上余計な動きをされる前に、魔王どもが対策を重ねる前に、計画を次の段階に移行する」
「ゼパルより報告。兵藤一誠は時間神殿に来ず、リアス・グレモリーの下に向かった」
「何がどうなったらそうなるんだ！」
「やはり交渉下手か貴様は！」
「今度はどんな失言を漏らした！」
「このゼパなんとか！」
「おまえはもう黙っていろ！」
「おまえ達こそ私の待遇を改善したらどうなんだ!?」
「黙れと言っただろう、ぺっ！」
「待遇を改善だと？　貴様のミスがなければ余計な獣を顕現させずに済んだろうが、ぺっ！」
「君だけではなく私達全員のミスだとは理解しているんだがな、ぺっ！」
「我々もタイミングを見失ってちょっと困っているんだ、ぺっ！」
「そのうち改めるから、それまで口を閉じていろ、ぺっ！」
「俺たちに口などないのだがな、ぺっ！」
「唾棄しているのも気分の問題だな、ぺっ！」
「ぺっ!!」
「改善どころか悪化しているのだが!?」
「ぺっ」
「オーフィスまで！」
「やめるのだ、オーフィス。行儀が悪い」
「問題はそこか？」
「やはりゼパルはオーフィスの情操教育に悪影響なのでは？」
「おまえ達の方が教育に悪いわ！」

「ナベリウスより報告。冥府を始めとした各神話の地獄の長への通達が完了」
「キマリスより報告。冥界および次元の狭間、時間神殿に危惧された術式または装置の類は発見されなかった」
「アスタロスより報告。我々の体内および神器の中にも発見されなかった。エネルギーが第三者に奪われる可能性は皆無である」
「フェニクスより報告。地獄の長以外の協力者への通達が完了」
「フォルネウスより報告。現状、他勢力の障害は確認されない」
「アロケルより報告。……できる限りの救済はした。これ以上の転生悪魔は諦めるしかない」
「フルフルより報告。獅子王や魔術王を始めとした他陣営の妨害対策の配備完了」
「アモンより報告。再計算の結果、十分な熱量の資源が想定される」
「ベレトより報告。宝具展開に問題はない」
「ラウムより報告。次元の狭間の部分的封鎖完了」
「アンドラスより報告。獅子王に消滅させられた希少金属以外、冥界に特別に利用すべき資源はない」
「グレモリーより報告。『槍』の封印に異常なし」
「ビフロンスより報告。光帯の回収準備、仔細なし」
「アンドロマリウスより結論。魔王との対話を反復した結果、議論の余地はない」
「バルバトスより統括。全ての条件を達成した」
「七十二柱を代表してバアルより要請。統括局よ、第三宝具の使用を」
「ゲーティアより全ての同胞に通達――」
思えば、半年足らずの時間でありながら、此処に来るまであの三千年のように長かった。
「――これより地獄を焼く」
第三宝具『誕生の時来たれり、其は全てを修めるもの』起動。

冥界焼却

人間界、日本某所にレイヴェル・フェニックスはいた。兄、ライザー・フェニックスの眷属である彼女だが、供として『王』と『女王』以外の全員がいた。

目的は家が決めた縁談。相手は霊獣がひとつ、鳳凰に属する異形の中でも特に大きな力を持つ一族だった。日本において鳳凰は国を象徴する鳥だ。フェニックス家は鳳凰と同じルーツを持つため、その縁でこぎつけたのだろう。だが、中国神話ならばもっと良い相手がいたのではないだろうか。まるで此方の立場が下のようだった。

（いえ、実際此方の立場が弱いのかもしれませんわね。悪魔は面倒事だらけですから。特に、日本はソロモンの一件で聖書の勢力と距離を取ろうとしているらしいですし。私はその橋として選ばれたのでしょうか？）

そんなことを考えているタイミングで、ライザーから連絡が入った。

『よお、レイヴェル。調子はどうだ？』

「おかげ様で順調にまとまりましたわ」

『そりゃ良かった』

「でも、もう少し覇気のある殿方が良かったですわ」

『そうか？　俺も相手の彼には一度会ったが、随分と好青年だったと思うぞ。彼になら、そして鳳凰の家ならば安心しておまえの人生を任せられる。ああ、そうだ。もう此方に戻って来なくていいぞ。後のことは先方に頼んである。今日は人間界でゆっくりするといい』

「あら、ならそうさせてもらいますわ」

今日一日は自由に過ごしてよさそうだと判断したレイヴェルは人間界の高級ブランドでも見て回ろうかと考え込む。

いつものホストめいた調子から一転して、ライザーが真面目な顔になる。

『レイヴェル』

「何ですの？　急に神妙になって」

『難しいかもしれないけど幸せにな。――俺達の分まで。皆、後は頼んだぞ』

「……御意」

連絡はそれで途絶えた。

「お兄様……？」

二度と繋がることはない。

■

サーゼクス・ルシファーの眷属、『戦車』、『騎士』、『兵士』死亡。

セラフォルー・レヴィアタンの眷属、『王』を除き全滅。

レーティングゲームトッププレイヤー、第一位離反、第二位死亡、第三位重症。各眷属、離反または重症または死亡。最上級悪魔タンニーン死亡。

初代七十二柱全滅。旧魔王派全滅。リゼヴィム・リヴァン・ルシファーおよびその一派離反。

アグレアス撃墜。アグレアス内に埋蔵されている『悪魔の駒』原材料の希少金属、完全消失。

赤龍帝・兵藤一誠、人類悪化後、解放。

白龍皇・ヴァーリ・ルシファー、暴走後、解放。

堕天使幹部バラキエル、サハリエル、タミエル、アロマロス死亡。

熾天使ウリエル、ラファエル死亡。ガブリエル重症により一時撤退。

教会サイド、一部が離反し、円卓の騎士に合流。

この時、真実を知らない者すべてが勘違いをしていた。

まさか。

まさか、この時点で起きていた被害がほんの序章であることに。

特使五柱がひとり、平凡な少年を憎悪するバアルが宣う。

「これは証明である。無価値で無意味、無様、無駄、無益で有害。何と

見苦しい生態系を何千年も続けたものだ。七十二柱の御名の真なる価値を示すために、私達はおまえ達に挑戦しよう」

特使五柱がひとり、生命を謳歌したいアンドラスが告げる。

「これは駆除である。貴方達は危険だ。魔神にとっても、人間にとっても、君達以外の異形にとっても。せめて次の時代の糧となる。それが他の生命を理解せず、他の生命に理解させられなかった貴方達という罪悪の最後の許しである」

特使五柱がひとり、楽園の実現を望むゼパルが語る。

「これは略奪である。我らには資源が足りない。我らには時間が足りない。おまえ達は無駄に消費している。おまえ達は無為に破壊している。弱肉強食。足りないのならば他所から奪う。おまえ達が他者に強要してきたことだ。甘んじて受け入れよ」

特使五柱がひとり、自己消滅を願うフェニクスが謳う。

「これは革命である。宝具が起動すればもはや誰にも止められぬ。我ある限り――否、もはや仮に我がここで滅しようとも天理の炎は計画達成を約束するのみ。喜ばしい。新たな世界の理が此処に刻まれる」

特使五柱がひとり、外宇宙の可能性を模索するラウムが示す。

「これは救済である。人の為だけではない。君達悪魔と堕天使を痛みによって救おう。この痛みを以って、君達の罪は清算される。この宇宙が看過してきた君達という真実を終わらせる」

人王ゲーティアが刮目する。

「では、お見せしよう。貴様等の生命の終わり。この星をやり直す、聖書の終焉。我が大業成就の瞬間を！　第三宝具、展開。誕生の時来たれり、其は全てを修めるもの。――さぁ、芥のように燃え尽きよ！」

■

冥界。

聖書における地獄はそう呼称される。主に悪魔と堕天使の世界であり、人間界の地球とほぼ同等の広さを持つ。青ではなく紫色の空が

広がり、海は存在しない。悪魔・堕天使共に数が激減しているため手つかずの土地も多く、特に辺境には手が回り切らない部分も多い。超常の領域の一種であるため、人間の場合は優れた魔術師などでなければ立ち入ることすらできず、転生悪魔の親族のような例外を除けば一般人が一生足を踏み入れることはない。人間界との時差が生じないように時間の流れが調節されている。

そんな世界が燃えていた。

「た、たすけて――」

地獄の炎という言葉があるが、それさえも上回る熱量を以って、その世界は焼き尽くされていた。

「あついあついあついあつい！」

「リレンクス！」

「あ、あなた……！」

「誰か――」

子どもが。大人が。老人が。男が。女が。純血悪魔が。転生悪魔が。混血悪魔が。使い魔が。野生の魔物が。上級悪魔が。中級悪魔が。下級悪魔が。堕天使が。魔王の両親が。はぐれ悪魔が。元龍王の眷属が。中級悪魔への試験を控えた悪魔が。堕天使の副総督の妻が。新魔王派の議員が。現大王が。主人に恵まれた下級悪魔が。神サイドとの和平に不満を持っていた若者が。研究さえできれば良かった研究者が。隠遁していた元七十二柱の領主が。生命が。生命が。生命が。

生命が燃え上がっていた。

「会談中のサーゼクス様に、いやアジュカ様に連絡を――」

大地が、空が、湖が、川が、丘が、山が、森が、畑が、谷が、道が、草原が、家が、屋敷が、村が、町が、都市が、何もかもが燃えていた。

「い、一体何が起こって……」

理不尽に、不条理に、無差別に、冥界にある命が奪われていった。

「な、何で人間界行きの列車が動かないんだよ！」

「魔法陣まで上手く機能しない！」

「冥界周辺の次元の狭間が何者かに干渉されているようです！　大勢

の移動は不可能です！」
「冥府への通路が封じられているとはどういうことだ！　死神どもの仕業か！」
「辺獄や煉獄まで使えないなんて……」
「他神話の地獄への道も、全て閉ざされています！」
「冗談じゃない！　こうしている間にも――」
　一秒ごとに、一瞬ごとに、冥界の生命が一つ、また一つと終わっていく。
　天には光の帯がある。この世界そのものが焼き尽くされようとしている証明がある。最早手遅れ。最早台無し。悪魔と堕天使――冥界の歴史はこれで終わりだ。
　冥界の都市リリス。その上空に、魔法で浮遊している少女の姿があった。ルキフグスを彷彿とさせる銀髪を持った、十歳前後の悪魔の少女。だが、その中身は怒りしか知らぬ王ソロモン。待ち望んでいたはずの悪魔の絶滅を前にして、彼――もとい彼女のその両目には歓喜など宿っていなかった。そこにあったのは憤怒。
　そんな彼に背後から話しかけるナニカがいた。
「――何とも矛盾した光景だろうか。これほど醜い生命が、これほど美しい大火の薪となっているのだから。三千年待った甲斐があるというものだ。そうは思わないか、私のソロモンよ」
「俺は貴様のものになった覚えはない」
　振り向けば、そこにはひとりの悪魔がいた。
「『それ』がこの時代の身体か」
「ああ。それなりに優秀なものでね、重宝しているよ。立場が立場なため、情報も集めやすかった。ああ、それにしても……君も随分と愛らしい姿になったものだ」
「やめろ。俺だって好きでこんなロリボディになったわけじゃねえよ。どうせ女になるなら妖艶な美女になりたかった！」
　本来、リリスに生み出させる身体はもっと成熟した姿になるはずだった。どっかのサイコシスコン野郎がリリスの胎内に仕込んだ術式を勝手にいじっていなければ。

「しかし、その様子だと私の存在には気づいていたのか。いつからだ？　モーセの時の反省を活かして、それなり以上に上手くやったと思ったのだが」
「怪しいと思ったのは、『彼女』が死んだ時だ」
「やはりか。私の最大の失敗は君と『彼女』を会わせてしまったことか。そして君が彼女に関する伝承を書き換えたことで、救世主となったあの子の件でも失敗してしまった。あの失敗がアーサーやシャルルマーニュ、リチャードにも影響を与えてしまった。いやはや、やはり女という生き物は分からんものだ。かといって、女に期待してみればジャンヌのような結果になってしまう」
　彼女が魔女として裁かれなければ、もうちょっと上手くいったのだが、などと嘯く『蛇』。それを聞いて、ソロモンの表情に怒りが宿る。否、最初から魔術王は怒っているのだ。
「ぶっちゃけさ、俺に『異世界』なんて発想を教えたのはおまえなのか？」
「ああ、そうだ。赤ん坊の君にこっそり、特製のリンゴを食べさせた」
「世界一傍迷惑な離乳食だな」
「だが、君の理想は君のものだ。世界を、人類を救いたいという理想は、人類に進化して欲しいという愛は、間違いなく君のものだ。そこは誇っていい」
「誰がおまえの許可なんて求めたよ。俺の理想は、最初から俺のものだ」
　魔術王は、激怒しながら笑む。
「なあ、一つだけ答えてくれるか」
「可愛い君の頼みだ。私に答えられることならば何でも」
「――あいつを、シバの女王を殺したのは誰だ？」
　あの日の真実が、どうしてもソロモンには分からなかった。思い出せないのではない。最初から分からなかったのだ。神の叡智があったのに。神の視点があったのに。ソロモンはあの日の真相が分からなかった。分からなかったからこそ、この『蛇』の存在を知った。そして、完成間近だった『真理』がこの『蛇』の思惑であったと。

「貴様か？　主か？　ルシファーか？　七十二柱の誰かか？　当時の人間か？　あるいは俺か？　それとも――彼女自身か？」

聖書にシバの女王とだけ名前が記された女。その真実を知る者は、おそらくこの悪魔の中に入っている『蛇』しかいない。そして、『蛇』自身も大して隠し立てすることではないと軽んじ、その真実を告げる。

「ああ、それは――」

――まさにシバの女王の真実が口にされようとした瞬間、猛烈な爆風とともにソロモンの身体が消えた。

「え？」

蛇には一瞬だけ見えた。何か人間のような形をしたものがソロモンを殴り飛ばすのを。呆然として、その方角を見て、軽く頭をかいて、溜め息を吐き出した。

一方、そのソロモン自身は炎上する世界の上で、吹っ飛ばされていた。攻撃のダメージそのものは障壁と回復でどうにかなるが、衝撃だけはどうしようもない。

「あああああああああああああああ！　何かこういうのばっかりいいいい！」

やがて勢いが弱まり、そのまま地面に激突する。当然大地は炎上しているが、そんなものソロモンには関係ない。世界を焼き尽くす光であっても、自分の身を守る分くらいの防壁ならばどうにかなる。

「いつつ……。またキングゥかな」

地面に倒れたままソロモンが首だけを動かすと、白く光り輝く人間の少年の形をした何かがいた。頭部には十本の角があり、背中からは鳥やドラゴン、コウモリなどの羽が六枚生えていた。何より特出すべきは、神仏ですら物理的にねじ伏せられるオーラ。

「はじめまして、糞お父様。二度目らしいですが、私（おれ）にとっては初対面なので」

「お父様って……ああ！　おまえがトライヘキサか！　会いたかった、ごふっ！」

トライヘキサは仰向けに倒れたソロモンの上に馬乗りになり、その

顔面に拳を叩き込む。一発一発本気の殺意を込めて、しかし決して死なぬように絶妙に手加減をしながら。傍目には少年が少女を殴っているだけのように見えるため、事案にしか見えない。

「そして、さようなら！　何が会いたかっただ、死ねこの馬鹿王！」

「ちょ、おまえトライヘキサ、ぎょ、やめ、いた、ぎゅあ！　死ぬ死ぬ死ぬ！　マジで死ぬ！」

「どうせ死んでもまた生き返るんだろうが！　おら、止めて欲しかったら指輪出せ！　ぶっ壊してやる！」

「そこまでにしておけ、トライヘキサ。我々の分がなくなる」

制止の声にぴたりと動きを止めて、トライヘキサはソロモンの上から降りる。ようやく身動きが取れるようになったソロモンは声の主を見て、大きく笑んだ。いつものような憤怒ではなく、純粋な歓喜を込めて。

「おまえにも会いたかったぜ。人王ゲーティア……！」

「はじめまして、此方のソロモン。早速だが死に給え。　無駄話はこれで終わりだ」

この先が地獄だとしても

もう二度と来ないと思っていた山道を歩いていると、幻影を見た。

まだ幼い俺だ。夜中の山道をひとりで歩いている。時折後ろを振り返り、人が来ないか確認する。逃げるためなのか、あるいは見つけて欲しかったのか。それを見て、俺の人生を決めたあの日の記憶だと理解した。

俺は中国の山奥にある田舎の農村で生まれた。貧しくて何もない、電気すら通っていない村だった。家は代々農家で、近隣の家とは良くも悪くも差がない程度だった。

幼少期のある日、俺は山中で妖怪に襲われた。だが、俺は槍を出現させるようになることで妖怪を倒した。どうやってかは不明だが槍の存在を嗅ぎ付けたのか、なんらかの機関の人間が俺の家に来た。そして、両親は俺を売った。あの時の父親の両手に握られた札束は今でも瞼に焼き付いている。

その夜の内に、俺は逃げ出した。数日家出すれば全て元通りになると何の根拠もない期待を抱いて、僅かな食料をポケットに詰め込んで。……それから俺は理不尽な生活を始めることになる。山に迷い、獣に襲われる。人売りのバイヤーに狙われる。槍を求める勢力に勧誘される。槍を奪い取ろうと様々な存在に襲われる。自分が生きていた世界のちっぽけさを知る。

届くわけもないが、その小さな背中に語り掛ける。

「おい、その先は地獄だぞ」

だけど、欲しかったものは見つかった。

■

――また、同じ夢を見ている。

歴史ある京都の街並みの中に、場違いに巨大な怪物の姿がある。怪獣映画の一場面ではなく、現実である。夢だが、現実だ。過去にあっ

た一つの後悔。

真龍を上回る巨体。獅子、熊、豹、龍などに似た七本の首と十本の角。霊長類のような前のめりの姿勢で、極太の腕を四本生やし、二本の足は腕以上に太い。体表は黒い毛で覆われており、血のような赤色をした鱗状の硬質化している部分や、全身のあらゆるところから赤い角のようなものがある。臀部からは長く太い、それぞれ違う特徴を有する七本の尾を生やしている。

黙示録に記された終焉の怪物。約束の日、空の星の三分の一を落とすとまで言われた最強の魔獣。多少知識がある者ならば、誰に指摘されるまでもなく正体に気づく。

巨大な怪物は神性を宿した鎖で大地に封じられている。怪物が動く度に鎖が軋み、壊れそうな気配を見せるが、獣が解放される様子はない。それどころか鎖はより深く獣の身体を締め上げる。まるで鎖自身に意思があり、大切な何かを守ろうとしているように。

『――情報室および観測所、覗覚星の解析終了』

二条城の天守閣の上で、黄金の髪を持つ人型のそれは鎖に封じられた獣を達観したような目つきで見ていた。傍らでは、槍を持ったかつての俺が獣の放つ瘴気に震えていた。……俺は彼の隣にいながら、震える以外何も出来なかった。

『英雄志願』

彼は俺のことをそう呼んでいた。この先もずっとこう呼ばれるのだろうと、そう思っていた。

彼は魔獣を指差した。

『あれはこの世界の我々(わたし)だ。この世界のソロモンが何らかの手段で生み出した異形。……いや、何らかの副産物である可能性もあるか？』

貴方と同じならば貴方ならば倒せるのだろう、と俺は問う。だが、彼は首を横に振る。

『あれは我々(わたし)と同じでありながら、全く異なる存在だ。我々(わたし)は誕生した時点で完全だった。完全であるが故に、第一宝具以外の弱点を持たぬ完璧な存在だった。だが、あれは違う。あれは成長する。単に第三宝具をぶつけただけではあれは滅びん。……それにしても、あれほど

の瘴気を放つということは、ケイオスタイドでも食らって成長したのか？　この世界のソロモンは嘆かわしいほどに狂っていたらしい』

後になって、トライヘキサの成長はソロモンの思惑とは別のところにあると知った。だが、そこには大した差はない。あの男は、俺達の世界の魔術王は、人間の可能性を愛しながら、人間の未熟さをただの一度も許さなかったのだから。

俺の、あの獣を倒す手段はないのか、という問いに彼は小さく笑った。彼のそのような仕草は初めて見たため、あのような状況ではあったが驚いてしまった。

『その為に、全魔神から決を取っている最中だ。しばし待て』

ほんの数秒の沈黙が重くのしかかる。ただ俺は震えていた。恐ろしかったのだ、獣がではない。彼の声に決死の覚悟というものが込められていたからだ。

『ああ、まさか全魔神柱がこの選択を肯定するとは。また世界の再構築は失敗か。また魔神の敗北か。また人類救済は中断か。だが、誇らしい。今度は我々（わたし）の勝ち逃げだ』

やめてくれ、という一言が出なかった。

『誇るがいい、××』

この時、彼は俺の名前を呼んだ。英雄志願でもない。曹操でもない。槍を出現する前、「曹操」と名乗る前の自分の名前。どうして彼が知っていたかなんて疑問に思うことさえ馬鹿馬鹿しい。

『おまえ達こそが、憐憫の獣を再び打倒した』

彼――ゲーティアは笑っていた。思い返さずとも、あれが最初で最後の笑顔だった。あれが最期で最大の激励だった。

『聖槍、聖杯、聖十字架起動。第一宝具、疑似再演』

俺の槍から聖なる力とは別の力が溢れ出た。確認はしていなかったが、ヴァレリーの聖杯やリントの聖十字架も同じだったのだろう。

『訣別（ア）の時来（ル）たれり、其（ス・）は世界（ノ）を手放すもの（ヴァ）！』

槍から力が急激に失せていくのが感じた。同時に、ゲーティアの気配が徐々に薄れていくのを感じた。見れば、黙示録の獣の身体もボロボロと壊れていくのが見える。同時に、鎖も限界が間近のようだった。

『選手交代だ、泥人形。後は任せろ。……最期の数秒を家族と過ごすがいい』

獣の下に巨大な魔法陣が出現したかと思えば、獣が消えた。転移させたのだ。おそらくは時間神殿に。遠慮なく第三宝具を使用するために。獣を縛っていた鎖が対象を失って大地に落ちていく。

それを悟った俺は膝を折って泣いた。ただ泣いた。彼がどうなったのか、あれがどういう宝具なのかは聞いていたからだ。ああ、なんて無力。なんて無様。己の不甲斐なさを嘆く俺に、まだ終わっていないとばかりに槍からの声が聞こえた。

『計画通りだ。これで私が蘇る。世界が正しい形に戻るのだ。――ソロモンだけではない。私の下に、モーセが、イエスが、ヨシュアが、アーサーが、シャルルマーニュが、そしてアダムが戻ってくる。私の勝ちだ、林檎農家如きが私に勝てるものか！』

本当の絶望がそこから始まった。

――場面が暗転する。

悶え苦しむ俺がいた。

精神が、肉体が、魂が、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーが使用した『泥』によって蝕まれていく。魔術王がゲーティア召喚に失敗した場合に備えていた保険。この世界独自の人類悪を強制的に誕生させるために作り出した呪い。

獣に堕ちかけた俺の前に、強い眼光を宿す少女がいた。

『これより治療を開始します』

俺など見捨ててくれと言いたかった。俺など切り捨てて欲しかった。治療（トリアージ）の優先順位は基本だろうに、どうして俺を助けるような真似

をしたのか。
『我はここに集いたる人々の前に厳かに神に誓わん――』
この後、彼女――アーシア・アルジェントは死ぬ。俺が殺してしまう。

――場面が暗転する。

見渡す限り、醜悪な異形が大地を埋めていた。聖書の神が再現した双貌の獣。ある世界の古代メソポタミアはこの獣によって蹂躙されたという。この瞬間、これと同じような光景が世界中に広がっている。
黄金に輝く鎧を纏った白髪の男が、雷光を宿す巨大な槍を掲げていた。
『言うまでもないことだが――おまえたちはすでに英雄だ。生きるがいい。そして人の世を取り戻せ』
当時も今も、喜びよりも無念が勝る。

――場面が暗転する。

『よくも……よくもアーシアを！　あの子は可哀そうな子だったんだぞ!?　おまえが殺さなければ、普通に学校に行くことだって、できたはずなのに！　おまえ達みたいなテロリストが！』
怒りで荒れ狂う龍がいた。殺さなければならない悪魔がいた。
『おまえ達がいなければ、ラフムが現れることだってなかったんだ！　父さんや母さんだって死なずに済んだのに！』
ラフムは禍の団（おれたち）のせいで生まれた。そして、ラフムを滅ぼすために聖書の神は復活した。少なくとも聖書の勢力の中ではそうなっている。それを嘘だと理解しながら認めようとしない為政者と、それを嘘だと見抜けぬ馬鹿しかいなかった。
『絶対に許さねえ！　俺に力を貸してくれ、乳神様！』
この一戦で奴を殺しきれていれば、人類はもう少しだけ持ち堪えた

はずなのに。

――場面が暗転する。

第三者から見れば醜悪でしかない肉柱の異形が、魔法少女のコスプレをした女悪魔と戦っていた。異形の背後には幾人かの少女がいた。まるで女悪魔から少女たちを守るように。

『このぉ！　魔神柱、魔法少女達を解放しなさい！』

この時期、三大勢力は一斉に人間狩りを始めた。神器所有者を始め、特別な血統や異能を持つ者などが標的だ。相手側の意思を問わず無理やり悪魔や天使に転生させられた。――ラフムどもに旧人類が狩りつくされる前に、希少種を『保護』しておこうという慈善活動だ。

この女悪魔は魔神柱に拉致されていた魔法少女を『救出』しに来たのだ。助けられる側の少女の中には、かつて悪魔に転生していたが人間に戻された者がいた。ほら、悪魔に戻りたいと声を大きくする者だっている。

『もう、もうやめてください、グラシャ＝ラボラス様！　私たちが、また悪魔になります！　だから、もう戦わないでください！　貴方がこれ以上傷つく必要なんてないんです！』

『駄目だ』

『どうして――』

『もしそうなったら、君達はまた泣くだろう？』

この女悪魔を倒したからといって、彼女たちの未来がどうこうなるわけではない。別の悪魔が出てくるだけだろう。悪魔がどうにかなっても、天使や堕天使がいる。そうでなくても、世界はラフムで溢れている。この頃、人類の未来はもう終わったも同然だった。

だとしても、だからこそ、彼に戦わないなんて選択肢はなかった。

『君達の未来は、明るいものでなければ駄目なんだ……！』

次の瞬間、救援に来た悪魔の魔力によってグラシャ＝ラボラス――最後の魔神柱は消滅した。

――場面が暗転する。

『見てくれ、曹操』

ゲオルグはそう言って、一つの棺桶を出してきた。

『「システム」の機能が停止していることは以前話したけど、それを突かせてもらった。この棺桶と魔術的な契約をした者が死んだら、その神器はこの棺桶に収納されるようになっている。聖剣や魔剣の因子も同じように移る。おまえにこれを持って欲しい』

槍以外の武器を使いこなせるとは思えなかったが、手数が増えるのは良いことだ。

『外見の趣味が悪い？　はは、そこは勘弁してくれ。教授をリスペクトしてんだ』

この翌日、彼は死んだ。自分が死んでも誰かが『霧』を使えるのならば問題ないということだったのだろうか。ふざけるなよ。

世界線『F』の抑止力との契約で、これまで死んだ仲間の神器を棺桶に入れてもらったが、もっと別の物を望めばよかったと後悔している。

――場面が暗転する。

『ありがとうな！』

『楽しかったわよ』

『感謝しています、リーダー！』

礼を言わなければならないのは俺の方なのに。

『どうか、生きてください』

『貴方だけでも』

俺はおまえ達にこそ生きて欲しかった。

『本当、鈍いな、君は』

俺の腕の中で、またひとりの仲間が死んでいく。

――場面が暗転する。

『グレイフィア、ミリ、キャス……リアス……』

くたばれ贋作魔王め。と俺は槍を振るう。

死闘の果てに、四大魔王全ての首を獲った。ラフムを全滅させた。だが、歓びなどどこにもなかった。人類など一つまみしか残っていない。それでどうやって繁栄しろというのか。何も守れなかった。何も取り戻せなかった。世界を守ることなんて、俺にはできなかった。

命が終わろうという瞬間に、俺は理解した。

俺が本当に欲しかったものは、英雄の称号や魔王殺しの称賛などではない。ただ、喜びを分かち合える仲間や家族が欲しかったんだ。

――場面が暗転する。

抑止力の尖兵として、人間を殺した。人間を殺した。人間を殺した。

地獄を見た。

守りたかったものを壊した。大切なものを奪っていた。温かいものが、俺のせいで失われていく。

俺は英雄など目指すべきではなかった。

俺は最強の槍など持って生まれるべきではなかった。

――場面が暗転する。

こんな役立たずを〝サーヴァント〟として呼び出した大馬鹿者はどいつだと問いかける俺の前に、激怒を宿しながら笑う男がいた。

『一縷の望みにかけてみたが、本当にこの世界出身の英霊が召喚できるとはな』

俺はこいつを知っている。

『はじめまして、俺がソロモンだ』

知っているさ、元凶が。だけど、おまえに用事はない。あの日の俺を止めて、罪を清算させてくれ。

眼を開け、目の前にいる自分（そいつ）に教えてやる。
「おい、この先は地獄だぞ」
欲しいものには、気付けたか？

■

中国の農村近くにある高山の頂上に、二人の男が向かい合っていた。否、二つの人影でこそあるが、ひとりと表現すべきなのだろうか。
「やっぱり、ここだったか」
制服の上に漢服を羽織った少年と、黒い外套を纏い棺桶を背負った青年。
「よくわかったな」
「自分のことだ。嫌でもわかるさ」
理想に走っている未熟者と、理想に敗れた掃除屋。
「いま、ゲーティアは冥界を焼いている」
「そうか」
「俺もあっちに行きたかったが――その前に決着をつけて来いと言われてね」
アーシアを撒くのが大変だったよ、と曹操。
空を仰ぎながらアーチャーは告げる。
「時系列で言えば、この日はアーシアが死んでいるはずだった」
「……そうか」
「泥に飲まれた俺を救うためにな。結果、暴走した俺が彼女を……」
それでも彼女は俺を解放してくれたよ、と自嘲するアーチャー。それを見て、様々な感情が入り混じる曹操。有り得たかもしれない自分の姿だ。何も思わないわけがない。
「兵藤一誠はどうした？」
「彼は彼で決着を、な」
「そうか」
アーチャーからすれば意味不明な状況だ。あの男が、此方側にいるなど。

「俺はあいつが憎い。あいつのせいで、俺の仲間だけじゃない。億単位の人間が死んだ。その上で、あいつはそれを俺たちのせいだとほざいていた。まあ、人類を守れなかったのは俺の責任だからな。そう言われても仕方ないのかもしれないが」
「そうか。俺には――俺達には守れたよ」
「まだ戦いは終わっていないぞ」
「だからこそ、守ってみせるさ。ジークフリートを始めとする、死んだ仲間たちの分もな」
　同一人物だというのに、同一世界だというのに、何が違ったというのだろうか。何が起点だったのだろうか。神の視点を持てぬ人間と英霊には分かりかねる問題だ。
「それでも、俺（おまえ）は英雄になどなるべきではない。英雄になる資格など、おまえにはない。そんなことは最初から分かっているはずだ。……いや、あの日に理解させられたはずだろうが」
「あの日？」
　心当たりがあり過ぎてピンと来ない曹操に、アーチャーは叩きかける。
「おまえ自身、よく覚えているはずだ。先生……フローレンス・ナイチンゲールと初めて会った日を。そして、槍の力に唆されて道化として生きていたおまえに告げられたあの言葉を」
　ぴくり、と曹操の顔が引きつる。
「黙れ」
「ああ、そうだ。忘れるはずがない。忘れられるわけがない。あの時、あの言葉を認めていたのならば、俺（おまえ）はこうならずに済んだのだから！」
「黙れ！」
　だが、アーチャーは止まらない。
「さあ、思い出してあの時のように膝を折れ。『曹操のネームバリューでは世界中の英雄を集めるのには微妙ではないですか？』と言われたあの現実を！」
「黙れぇえええええ！」

絶叫する曹操。あの場面を思い出すのもそうだが、未来の自分があのことを覚えている――しかも克明に――ことも非常に嫌だった。

「そうだ、どうしておまえは未だにその名前を――『曹操』を使っている？　槍を捨てたことは評価しよう。だが、おまえが捨てるべきだったのはその何の意味もない血筋の方だったのさ。先祖の『曹操』のように、あるいは藤丸立香のようになりたかった？　他人の名前や偉業を真似ることしかできない俺（おまえ）は結局――」

自分自身にさえなれなかったんだ。

二天龍

ヴァーリ・ルシファーという男の人生を一言で表現するならば、『皮肉』に尽きる。

真なるルシファーの実の孫が人間の女と交わって偶然生まれた、時代の寵児。魔王の直系にして、歴代最強の白龍皇。悪魔と人間のハーフはそれなりの数がいるが、彼ほど特異な存在はいないだろう。

ルシファーの孫がヴァーリやヴァーリの母を愛していたかと言えば、決してそのようなことはない。

ヴァーリは実の父に、虐待を受けていた。しかも、その原因は祖父であるリゼヴィムがヴァーリの父を唆したからだ。ヴァーリの父は――リゼヴィムもそうだが――悪い意味で魔王の血筋らしくなかった。余りある才能を持って生まれた息子は、彼にとって恐怖でしかなかった。

やがてヴァーリは堕天使の総督アザゼルに拾われた。魔王のひ孫が、宿敵である堕天使の総督によって育てられたのだ。

だが、ヴァーリは養父アザゼルを裏切り、禍の団に入った。

彼が禍の団に入る必要があったかと言われれば、客観的な意見としては〝否〟である。強者との闘いを求めたことが入団の理由だが、『犯罪者』に誇りある戦いなど許されるはずがない。暗殺、毒殺、一方的な袋叩きだって有り得るのだ。自分がする側に回ることだってあるだろう。それに、三大勢力側に属していたとしても、その後の狂乱を考えれば彼が求める戦いだってあったはずだ。

ヴァーリが養父を裏切った理由は、結局本人にしか分からない。

「糞ッ！」

養父アザゼルを裏切ってほんのしばらくしてから、ヴァーリは京都を訪れた。当時は正体不明だった泥人形キングゥと戦うためだ。

そして、ヴァーリは龍の逆鱗に触れた。

『おまえたちはここで死ね』

『必死にならないで、みっともないよ』

『ふっはははははっ！』

『串刺しだねえ、分かるとも！』

一方的な暴力。圧倒的な蹂躙。性能が違った。性質が違った。想像力が足りなかったとでも嘆けばいいのだろうか。根本的に、キングゥは戦おうとしてはいけない存在だった。

何故自分があの猛威から助かったのかは分からない。美猴や黒歌、アーサーなど自分が知る面々が助けてくれたわけでもないようだ。アザゼルやラヴィニアでもない誰かが、ヴァーリを助けた。助けた、という言い方も語弊があるかもしれない。

「何処だ」

三か月振りに自分の意識を取り戻したヴァーリ・ルシファーは——再び死地にいたのだから。

「何処だ……」

突然目覚めたかと思えば廃屋の中で、黒衣の死神が自分の首を狙っていた。

ヴァーリ・ルシファーは戦闘狂である。生きるために戦うのではなく、戦うためだけに生きている。そんな男だから突然出現した死神に対しても戦いを挑む——ようなことはできなかった。

逃げ出した。その場にいた二人も置き去りに。飛び出すように、逃げた。

彼の記憶にある最後の場面が敗北だからではない。キングゥの恐ろしさはその分かり易い性能の高さにあった。単純すぎる暴力。自分と同じ領域の強さだ。だが、この死神の強さはそこではない。武人なのだろう。武力があるのだろう。しかし、それだけではない。そんな視点で語って良い存在ではない。

「何処だ！」

追いつかれた。

「あ、あああ、うわあああああああ！」

白き龍の翼を切り落とされる。そのまま地面に墜落する前に、今度は悪魔の羽を展開する。恐慌状態にあったせいか、飛行の姿勢を確保できず、失墜の速度が多少和らいだだけだった。

「あ、がはッ！」

「終わりか？」
　大地に伏した白龍皇を、大剣を携えた暗殺者は忍ぶこともなく見下ろす。
「これで終わりと言うのならば首を出せ――」
　突如として、死神の背後から刃が突き出される。だが、死神はそれを何でもないかのようにすっと避けた。その一瞬のうちにヴァーリは黒い影に背負われる。黒い影の正体は狗だった。
　死神から距離を取ると狗はヴァーリを下ろし、戦闘態勢に入る。狗の脇にひとりの男性が現れる。
「無事、じゃないみたいだな、ヴァーリ」
　そこにいたのは、ヴァーリの知る男だった。聖槍の曹操以外で唯一ヴァーリに覇龍を使用させた人間。『黒刃の狗神』所有者。通称『刃狗』幾瀬鳶雄。
「い、幾瀬鳶雄……？　どうして、こんなところに」
「いや、何、会談の警護をしていたんだけど、狐の妖怪さんにおまえを見たって教えてもらってな。イギリス旅行の帰りみたいなことを言っていたんだけど、知り合いか？」
「会談？　一体、何の？」
「……どうやらおまえも相当混乱しているみたいだな。話は後だ。まずはこの死神をどうにかするぞ。冥府のグリム・リーバーとは違うようだが、どこの勢力の方かな？」
　死神の眼光が赤く灯る。神滅具所有者二人を前にして、警戒どころか欠伸を出しそうな余裕さえ感じる。
「堕天の狗神か」
　黒衣の死神は大剣の切っ先を幾瀬鳶雄に向けた。
「偽神の刃で何を斬る？　闘争の中で諦めた平穏か？」
　その言霊の意味が解らず――分からないというのに、心に痛みを感じる鳶雄。それでも意識を切り替えて、ヴァーリを庇うように前に出る。
「ヴァーリ、力を合わせるぞ。どうやらこの御仁はひとりでどうにかなる相手じゃなさそう――」

「違う……」
「え？」
今代の『白い龍』と『聖槍』の分岐点は、人間関係の違いに尽きる。どちらも親に捨てられたはずだ。どちらも目指したものは同じ方向を向いていたはずだ。どちらも外宇宙の存在がきっかけで自分を見直す機会を得れたはずだ。ただそれが、利用されるだけだったか、同じ理想を抱いたかというだけの違い。
本当に、些細な巡り合いの差だった。
「俺はこんな戦いがしたかったわけじゃない！」
守られたくなどない。庇われたくなどない。恐怖などしていない。安堵などしていない。逃走など望んでいない。自分は最強でなければならない。自分は至高の存在でなければならない。そうでなければ――何のためにこんな生き方をしていたというのだ。
「我、目覚めるは――！」
皮肉なことに、その思考はヴァーリが『誇りが足りない』と嘲っていた旧魔王派と類似したものだった。

■

世界神話会談の会場だったはずの場所には、数えるほどしか人影がなかった。
三大勢力の関係者の外には、主催者であるシヴァと日本神話の一部しか残っていなかった。
ほんの数分前まで、突然リアス・グレモリーとその眷属が転移されてきたためようやく落ち着いたのにまた混乱してしまった。しかもリアスが傷を負っていたため、彼女を溺愛するサーゼクス・ルシファーが絶叫して収拾がつかなかった。普段彼を窘めるグレイフィアも意識がなかった。
現在セラフォルー・レヴィアタンとリアス・グレモリー、グレイフィア・ルキフグスは緊急治療室に運ばれている。本来であれば冥界の大病院に運ばれるはずだが、何故か冥界と連絡が取れないのだ。

「状況を整理するぞ」
アザゼルはそう切り出す。
「魔神柱の正体はこの世界とは全く違う摂理の世界の七十二柱。その背後には、そっちの世界のソロモンがいる可能性が高い。キングゥもその世界の出身。そっちのピンク髪もな」
「あ、初対面の人のために名乗るけど、ボクはアストルフォ！　よろしくね！」
英霊なる存在のことは教えられていた。英霊のことを始めて知る面々だったが、魔神柱の世界の住人と聞いて良い印象を抱いていない者もいた。
「そして、奴らがこの世界に来たのにはこっちのソロモンが深くかかわっている。おそらくだが、間違いないだろう」
魔術王ソロモン。怒りしか知らぬ王。
「アストルフォはソロモンの奴から大した情報を渡されてなかったみたいなんだが……魔神については知っているだろう？　そいつを教えてくれ」
「いや、そのことなんだけど、ボクはそのあたりのことを喋れないんだよね」
「何？」
「ソロモンから令呪で封じられているんだ」
ソロモンは七騎のサーヴァントをあちら側から召喚した。その上で、サーヴァントに対する絶対命令権である赤い刺青、令呪を自らの身体に刻みつけた。本来であれば一騎につき三画のところを、合計四十二画。
まず、トライヘキサを『真理』から解放するためにアサシンとキャスターに二画ずつ使用している。京都でバーサーカーのために三画使用した。その後、最期の命令として三十二画を「後は任せた」という命令に使い潰している。では、残る三画は何に使用したかと言えば、この理性蒸発騎士の口封じに使用したのだ。
魔神について何もしゃべるな、とアストルフォは命じられているのだ。

「ひっどいよね！　三画はないよ、三画は！　どこまで厳重に縛るつもりなんだい！」
「……魔神については口封じしたのに、自分については口封じをしなかった？　だが情報を渡していないってことはそういうことなのか……。ちっ、どこまでも悪知恵の働く野郎だ」
　京都で仕留めたと思って安心していたが、あの男は生きていると見て過言ではないようだ。
「そして、イッセーくんか」
「ええ、サーゼクス様。あれは禍の団の英雄派に間違いないでしょう。もしかしたらイッセーくんはもう……」
「――ッ！　滅多なことを言わないでちょうだい、裕斗くん！　イッセーくんが死ぬはずないわ。アザゼル、どうして早く動かないの！」
　朱乃の癇癪じみた訴えに、アザゼルは悲痛を強くする。
「落ち着け、朱乃。今戦場はごった返しているんだ。リアスだって重傷なんだろう？　セラフォルーやグレイフィアだって治療中だ。しかもなぜか冥界と連絡が取れないと来てやがる。援軍も名医も装備も呼べねえ」
「アザゼル、悪魔領とも連絡が取れないんだ。父上や母上ともだ。ソロモンの仕業だろうか？」
「クソ、何が起きてんだ。連中、俺達の連絡を妨害しているってのか？」
「……アジュカならばどうにかできるかもしれないが……」
「それこそ、あちら側の人類史のように焼かれているのかもしれないよ？」
　シヴァの提示した可能性に、アザゼルは鼻白む。
「馬鹿を言え。おまえだって分かってんだろう？　キングゥの話によれば、メソポタミアを例外として、人理焼却はソロモンの死後三千年に対して行われている。つまり魔神柱どもは、人類史を焼くのに三千年が必要だったってことになる。それだけの準備がたったこれだけの期間でできるわけないだろう」
　人理焼却の真実を知る者が聞けば、アザゼルの推測は頓珍漢なもの

に聞こえるだろう。しかし、それも仕方がないことだ。
何故なら、キングゥがそういう誤解をするように話したのだから。
嘘など言っていない。魔神以外に関しては、隠し事もしていない。ただ、話の順序を変えたり一部分を故意に省略したりして、まるでソロモンの死後から三千年もの間ずっと人類が魔神柱と戦ってきたかのような印象を与えた。
魔神柱との契約に触れないようにするという意味合いもあるが、京都のソロモン襲来の一件を根に持っていないかと言われたらそうでないだろう。
「――そういう問題じゃないんですけどね」
突然の声。だが、三大勢力の上位陣とグレモリー眷属にとっては聞き慣れた声だった。
いつの間に現れたのか、部屋の扉の前に兵藤一誠の姿があった。何故か悪魔の気配を感じないが、その場にいた者達は純粋に彼の無事が確認できたことに安堵した。
「イッセーくん！」
姫島朱乃は歓喜した。
だが、そんな彼女を無視して、兵藤一誠は手に持っていたボールのようなものを魔王の足元に投げ捨てた。
「――え？」
その場にいた誰もが、それが生首だと理解した。そして、その首の持ち主が誰かも知っていた。
「ま、マグレ、ガー？」
サーゼクスの足元に投げつけられた首は、間違いなく彼の眷属たるマグレガー・メイザースのものだった。
「ど、どうして――」
「迷わないため、ですかね」
木場裕斗の口から出た疑問を最後まで待たず、兵藤一誠は己の言葉を紡ぐ。
「変な話なんですが、俺自身、未だにどうにかなりそうだって思っているんです。まだどうにかなるんじゃないか。まだやり直せるんじゃ

ないかって。多分、ゼパルから教えてもらったあの世界線の可能性が、きっと未練がましく思っているんでしょうね」

「い、イッセー先輩？　な、何を言っているんですか？　冗談だったら、笑えないですよ？」

ギャスパー・ヴラディの呼びかけに、兵藤一誠は何も返さなかった。

「決着をつけに来ました、魔王様。どうか――どうか俺を殺してください」

「い、イッセーくん……？　お、お願いだから、分かるように言ってちょうだい！　貴方は一体、何の話をしているの？」

喘ぐような朱乃の呼びかけに、兵藤一誠は力強い呪文で応える。

「我、目覚めるは――」

■

聖書の勢力――悪魔、天使、堕天使の首脳陣は口を揃えてこう言う。

神と魔王が死んで聖と魔のバランスが崩れた。と。

だが、これは正しいのだろうか。確かに、木場裕斗の聖魔剣のように聖なるものと邪悪な力が混ざり合うという奇妙な現象は発生している。

しかし、である。その観点で物事を語るならば、何故兵藤一誠が白龍皇の力を手に入れられたのだろうか。何故これまで聖書の勢力以外の神話勢は聖書の神の崩御に気づかなかったのだろうか。何故、何故、何故、数百年もの間、誰も世界のバランスの崩壊に注目しなかった？

聖と魔のバランスが崩れているという見方は正しい。だが、全てではない。

だが、あの戦争において、それと匹敵する存在が死んだではないか。

――そう、二天龍である。

「我、目覚めるは――罪を掲げながら人に敗れし赤龍帝なり」

「我、目覚めるは――愛を失いながら獣に成れぬ白龍皇なり」

魂は神器に封じられた。

「無限の光を願い、夢幻の底を歩く」
「無限の力を求め、夢幻の頂きを飛ぶ」
だが、肉体は消滅した。神には届かず、しかし王を超えた力が消失したのだ。世界のバランスが傾くには十分な変化のはずだ。世界はあの時、強大な柱を一度に失い、あらゆるバランスが傾いた。
「我、赤き龍の覇道を捨てて」
「我、白き龍の覇王を超えて」
ならば、最新にして最後の二天龍がそうなるのは必然だった。
「汝と紅蓮に塗り潰した過去を覆そう」
「汝を純白に消し去った未来に誘おう」
ここに新たな世界の『柱』が誕生する。

設定（人類悪）

ビーストＤ／Ｒ

其の原罪は『期待』。

理論を放棄した、願望による妄執。

●真名　ソロモン

クラス　ビーストＤ

ステータス　筋力：Ｅ　耐久：Ｃ　敏捷：Ｅ　魔力：ＥＸ　幸運：Ｄ　宝具：Ａ＋＋

スキル　獣の権能：Ａ　単独顕現：Ｅ　召喚術：Ａ＋＋　ソロモンの指輪：ＥＸ　星の改変：ＥＸ　異世界干渉：Ｂ―　ネガ・バイブル：Ａ

宝具　王冠は地上に　禁忌は水底に　真理は未来に

○固有スキルの解説

・星の改変

星のルールを個人で改変したが故に持つスキル。結果的にではあるが、この世界に人類悪という概念を誕生させたため取得した。ソロモンのランクは規格外であるため、自らのスキルや宝具さえ改造することが可能。

・異世界干渉

その名の通り、異世界に干渉することができるスキル。生前のソロモンならばランクＡ＋相当だった。本来であればソロモンのランクでは異世界の記録閲覧までしかできないが、前述の「星の改変」と併用することで世界観の移動すら可能にする。ビーストであるソロモンにとってこのスキルは「道具作成」の代わりにもなっている。

・ネガ・バイブル

聖書に記された偉大な王でありながら、彼は「地獄に堕ちた」と語られる。全ては彼が聖書にとって不倶戴天であるが故に。逆説的に、聖書という概念が人類史に存在する限り、魔術王は何度でも復活する。魔術王が人間を許すその瞬間まで。

○宝具の解説

・王冠は地上に（シクラメン）

ランク：B

種別：対軍宝具

「我が憤怒を、我が原罪を見ろ。すべては此処に置いていく」

固有結界。ソロモンが古代イスラエルに築いた大神殿。怒りしか知らぬ王の心象風景とは、異形から人間を守るための金城鉄壁の絶対領域。本来であれば城塞都市が理想であったが、生前の彼には築けなかった。

・禁忌は水底に（シークレット・オブ・バビロン）

ランク：EX

種別：対魔宝具

「我が敵意を、我が願望を聞け。すべては其処に残してきた」

かつて七十二柱を封印した真鍮の壺、その具現化。問答無用の封印宝具。個体ではなく、魔王級程度なら軍勢だろうと封印することができる。一体だけであればビーストの封印さえ可能とする。

・真理は未来に（トゥルー・レメゲトン）

ランク：A＋

種別：対界宝具

「我が理想を、我が生涯の真実を知れ。すべては君達の未来のために」

全人類にかけられた呪い『真理』の正体。宇宙観の核――所謂アカシックレコードへの干渉権。道をこじ開けることで、その穴から『溢れ出るもの』を武器と転じることができる。

●真名　６６６

クラス　ビーストD

ステータス　筋力：A＋　耐久：EX　敏捷：A　魔力：A＋　幸運：―　宝具：A＋＋

スキル　獣の権能：A　単独顕現：A　自己再生：A＋　七つの冠：A　星の忌み子：EX　ネガ・ミレニアム：A

宝具　約束の炎　最後の審判

※このステータスおよびスキル、宝具はビースト時のもの。

○固有スキルの解説

・自己再生

文字通りの再生能力。肉片が僅かにでも残っていれば再生可能。自己回復とは似て非なるスキル。

・星の忌み子

生まれるべきではなかった存在。星の廃棄物の化身。間違った生命。世界のどこかで抑止力やそれに類似した存在のバックアップが発生した場合、その補正はマイナスとして機能する。

・ネガ・ミレニアム

千年王国、すなわち人類史の繁栄を阻止するもの。繁栄という光が強いほど、闇もまた強くなる。人類史の長さこそが、この獣の力となる。

○宝具の解説

・約束の炎（バアル・ゼブル）

ランク：B

種別：対人宝具

「我が怒りは止まらぬ。我が命は終わらぬ」

最強の怪物たる彼の心臓。敗北を拒絶する無限にして夢幻のエネルギー核。仮に（本当に仮にだが）６６６がサーヴァントとなる場合、事実上「単独行動：ＥＸ」となり、マスターの魔力供給を必要としない。

・最後の審判（アポカリプス・ナウ）

ランク：ＥＸ

種別：対界宝具

「おまえたちの悲鳴など聞き飽きた！」

ソロモンの『真理は未来に』の対となる宝具。鍵ではなく門そのもの。星空に開放される異世界への扉。干渉が限界であるソロモンとは異なり、外宇宙の生命本体を召喚できる。黙示録に記される『四大騎士』や『蝗の群れ』とはこの門からの来訪者の比喩である。

恐ろしいほど燃費が悪く、約束の炎を持つトライヘキサ以外の使用

は事実上不可能であるはずなのだが？

ビーストＤ／Ｌ

其の原罪は『期待』。

悲劇と奇跡を担い、救済と勝利を強制された偶像。

●真名　兵藤一誠

クラス　ビーストＤ（オルタナティブ）

ステータス　筋力：Ｄ　耐久：Ｃ　敏捷：Ｄ　魔力：Ｅ　幸運：ＥＸ　宝具：Ａ＋

スキル　獣の権能：Ａ　単独顕現：Ｃ　精神汚染：ＥＸ　悪魔の駒：Ａ　二天龍：ＥＸ　神々の祝福（獣）：Ａ　ネガ・エヴォリューション：Ａ

宝具　赤黒き汚泥　世界よ、我を讃えろ　無限覇王・夢幻理想

※このステータスはあくまでも反転体としてのもので、正常の状態であった場合はスキルから精神汚染が、宝具すべてが削除される。

○固有スキルの解説

・神々の祝福（獣）

『Ｄ』の聖書の神、『Ｅ』の乳神、『Ｆ』の魔神と多様な世界の神々から得た祝福（呪い）。人類悪化した彼をより深く暴走させるもの。

・ネガ・エヴォリューション

「自らが勝てるように進化する」と同時に、「敵の進化を妨害する」。空間や肉体ではなく因果律に干渉するため、抵抗は不可能である。つまり、兵藤一誠は相手が自分よりどれだけ強くても最終的には勝てる。

――その戦いの最中にどれだけの犠牲が出たとしても、その戦いの結末にどのような報酬がなくとも、必ず勝利を迎える。

○宝具の解説

・赤黒き汚泥（ウェルシュ・ケイオスタイド）

ランク：Ａ

種別：対人宝具

この世界で生み出された泥が赤い龍の力で捻じ曲がったもの。魔術王の怒りと全人類の憎悪、歴代赤龍帝の絶望の具現化。ある世界で

『聖杯の泥』『ケイオスタイド』と呼ばれたものに酷似している。
・世界よ、我を讃えろ（アイ・アム・ア・ヒーロー）
ランク：Ａ＋
種別：対人宝具
技術、能力、行為の模倣。この星の誰かに出来たことは、彼にも実行可能。人間だろうが天使だろうが悪魔だろうが魔物だろうが妖怪だろうが精霊だろうがドラゴンだろうが――神だろうが、誰かが行えたことは彼にもできる。
・無限覇王・夢幻理想（ジャガーノート・ネオ・ドライブ）
ランク：ＥＸ
種別：対神宝具
進化という名の究極の暴走。最も適した大虐殺。

ビーストＸ
其の原罪は『真理』。
誰もが縋り、誰もを貶めてきた絶対の理。
すなわち、人類悪さえ滅ぼす人類悪。
世界に必要なのは我のみ。
●真名　????　ビーストＸ
ステータス　筋力：？　耐久：？　敏捷：？　魔力：？　幸運：？
宝具：ＥＸ
スキル　獣の権能：Ａ　単独顕現：Ａ　神性：ＥＸ　魔力放出（天）：ＥＸ　信仰の加護：ＥＸ　奇跡：Ａ＋　ネガ・オリジン：Ａ
宝具　真理を未来に　無限覇王・夢幻理想　人よ、再び我が楽園に
○固有スキルの解説
・ネガ・オリジン
其はこの世界の根源。あらゆる理の原初。故に、あらゆる力は其に還元される。刃であろうと、毒であろうと、傷であろうと、呪いであろうと、愛であろうと。
○宝具の解説

・真理は未来に
ソロモンの項を参照。
・無限覇王・夢幻理想
兵藤一誠の項を参照。
・人よ、再び我が楽園に（ジェネシス・エデン）
ランク：ＥＸ
種別：対界宝具
「私のところに帰って来い、愛しい最高傑作たちよ」
詳細不明。

突然ですが、アーチャールートの情報をある程度開示します。作中に出すつもりでも忘れるかもしれないからね。

Ｑ．フォウくんの役割って結局何なの？

Ａ．今回開示した「ネガ・オリジン」を参照。

Ｑ．このルートのオーフィスは？

Ａ．マーリンの介入がないため、ゲーティアとトライヘキサが相打ちになるまで固有結界に引きこもっていた。出てきた頃はアーシアの死亡後。ビーストⅩに倒され、吸収される。

Ｑ．アーチャールートの一誠は何をやったの？

Ａ．詳しくは作中で語る予定。ヒントはラウムと最後の審判。

Ｑ．聖書以外の神話勢は？

Ａ．上記の一誠がやったことの後始末に強制参加。各勢力が弱体化したところをビーストⅩによって九割の神群が滅ぼされた。

Ｑ．曹操の死後は最終的にどうなったの？

Ａ．曹操から棺桶を後継した者が神々や外宇宙の協力もあって、ビーストⅩを打倒した。その後、残った僅かな人類と神魔によって星の復興が行われている。なお、ビーストⅩによる術式の影響が残っているため、直接訪れる以外にその姿を確認することはできない。

『神の悪意』

何故？　何故、だと？
決まっているだろう、おまえが憎いからだ
もっと、もっと早く――
魔王としてではなく、男として――
奴の手先としてではなく、一個の生命としておまえを憎めていたならば――
私は彼女（リリス）を救えたかもしれないのだ

■

燃え盛る冥界の片隅で、その三名は対峙していた。
魔術王ソロモン。怒りしか知らぬ王と呼ばれ、人間を愛するが故に許せなかった王は、悪魔の母リリスから作り出された『超越者』の肉体を使い現世に復活していた。
黙示録の獣トライヘキサ。人間が産み落とした大災害である彼は人間の美しさを知り、人間に敗北した。そして自分のルーツである魔術王を滅ぼすために、この場にいる。自分が満足した光景にケチをつけるこの馬鹿王はなんとしても止めなければならない。
そして、人王ゲーティア。この世界の人々の未来を勝ち取るために、彼はこの場にいた。
「はじめまして、此方のソロモン。早速だが死に給え。　無駄話はこれで終わりだ」
「え？」
ゲーティアの敵意全開の態度に、真顔でショックを受けるソロモン。
「え？　ごめん、何で俺そんなに嫌われてんの？　トライヘキサもだけど、何で俺にそこまでつれない態度なの？　ねえ、何で？」
「おい馬鹿王。おまえそれ本気で言ってんのか、なぁ？」
「随分と賑やかな情景だ。この冥界――ゴミ捨て場の終わりには相応

しい」
　その場に新たな乱入者が現れる。形は悪魔だが、その中身は違う。
　ゲーティアはソロモンに向けるそれと変わらない敵意を以って、その怨敵の名前を紡ぐ。
「赤い蛇サマエル」
　その名の意味は神の毒。あるいは神の悪意。エデンの園の禁じられた蛇。もしくは――赤い蛇。
「はじめまして、の前にありがとうと言わせてくれ。ああ、そうだ。私こそがサマエルだ。この世界の、新たなる神になるものだ」
「……その身体は、貴様の端末というわけか」
「そうだね。君も知っていると思うが、私の本体は地獄の最下層、冥界のコキュートスに封印されている。だが、意識だけはこうして悪魔の身体を使うことで表に出ることができる」
「それが、悪魔と堕天使が同一視される真実か」
　かつて天使だったベリアルが悪魔に数えられているだけでは弱い。堕天使と言われている悪魔はベリアルだけではない。むしろ『悪魔』の大半、ルシファーやアスモデウス、レヴィアタンさえ含めて、堕天使と同一視されるのだ。
　原初の堕天使が多くの悪魔を遺伝子レベルで支配していた。真実はそれだけだ。あまりにも多くの悪魔が対象内にあるため、関係のない知名度の高い悪魔も『真理』の影響が込められ、真実がそのように歪んだのだ。
「ああ、そうだ。だが、好きに身体を選べるわけでもない。一度端末が固定されてしまうとその個体が死ぬまでは他の端末には移れない。それから全ての悪魔が対象というわけでもない。番外の悪魔の初代や四大魔王は対象外だ」
「それはこう言うべきではないか？　リリスから生まれた悪魔になら憑依できる、と」
「……気づいていたか」
「驚くほどのことでもないだろう？」
　サマエルは原初の天使のひとりだ。エデンの園に知恵の実を植え

たのは彼であり、林檎を与えたのも彼だということになっている。当然アダムとイブには面識があるため、アダムの元妻であるリリスとも面識があると考えるのは自然なことだ。

そして、リリスに対して何かをした。始まりの男から捨てられた女は、その生涯を誰かに利用され続けていたのだ。リリスの悪魔を生み出すという地母神じみた権能の正体が、この異形の悪意だったのだ。

ソロモンが復活に悪魔の身体を利用しているのもそれに関係している。この蛇が身体を乗っ取ってくることを読んで、逆にその精神を飲み込んでやろうと考えていたのだ。サマエルはそれを読んでしなかったわけだが。

「まあ、サーなんとかとア、ア、なんだったかな……とりあえず『超越者』とやらも操ることはできなかったよ。だからこそ、この身体を使ったんだがね」

肩を竦めるサマエル。だが、その表情には不快感が込められていた。悪魔如きが自分の思い通りにならないことへの不快感だった。否、『超越者』は悪魔とは言い難いのだが。

「まあ、あの間抜けな金星野郎はそこには気づいていなかったようだ。まして自分と同格の――」

「――やはり、初代魔王の誰かが貴様の端末か」

サマエルは自分の台詞を先取りされた怒りよりも、ゲーティアがそこに辿り着けていたことに対する驚きを露わにした。

「強烈な違和感を覚えたのは、大戦に関する情報の整理をしている時だった」

三つ巴の大戦争。

聖書の三大勢力が起こし、世界中の異形が巻き込まれ、二天龍の乱入により荒れ、神と四大魔王の死により強制的に終了した大戦。三大勢力はかの大戦の傷から完全に立ち直ったとは言い難い。

「この大戦に関しては、不明確な部分と矛盾点が多すぎた。第一に、開戦だ」

かの大戦は、聖書の神がトライヘキサを封印した後のタイミングで幕を開けた。

「あの戦争は誰が始めた？　あの戦争のきっかけは何だ？」

神と悪魔と堕天使の対立は昔からあるものだ。しかし、かの大戦はそれらと区別されて考えられている。

神ではない。神は黙示録の獣の封印によって衰弱した状態だった。この状態で戦争をするメリットはない。天使が神の意向を無視するとも考えられない。だが、裏を返せば神の敵――悪魔と堕天使にとっては最高のタイミングだ。

仮に悪魔か堕天使が神の弱体化を知っていれば辻褄が合うが、今度は別の矛盾が生じる。天使長さえ気づかなかった神の弱体化、あるいは黙示録の獣の封印をどうやって知ったというのだ？

「次に、二天龍の乱入だ」

二天龍。赤い龍ア・ドライグ・ゴッホ。白い龍アルビオン・グウィバー。王を超えながらも、神には届かなかった二体の伝説的な龍。ウェールズに語られる二つの民族の化身。

「二天龍の乱入により戦争は一時中断された。龍とは意思を持った自然災害のようなものだ。まして二天龍ともなれば国家の戦争を中断するのは必然。だが、どうして三大勢力が協力して二天龍を倒そうという話になる？」

龍が災害だというのならば、災害相手にどうして立ち向かおうとする。やり過ごそうという当然の発想が起こらない？　しかも、蛮勇が取り柄の勇者ならばともかく世界クラスの勢力トップ陣である。自分の陣営を犠牲にしてまで、かの天龍を倒そうとした事情などどの勢力にもないはずだ。

あるいは、戦場を変えようという話にならなかったのだろうか。冥界だけでも地球と同じ面積があるのだ。天龍の喧嘩に巻き込まれない場所の方が圧倒的に広いはずだ。そうできなかったとしたら、どれだけ局地的な戦争をしていたのだ。

これが全く未知の脅威――例えば他ならぬゲーティアやトライヘキサ、あるいは邪龍ならば理解できる。だが、二天龍だとすれば話は違ってくる。既知の龍で、周知の災害だ。押し付け合うならばともかく、どうして協力して倒そうということになったのか。

二天龍の乱入は、本当に事故のようなものだったのか？　否、本当に二天龍が三つ巴の戦場に乱入したのか。逆に、二天龍が出現するであろう場所が、意図的に主戦場として選ばれた可能性を誰が否定できるのか。

「誰かが、戦争の裏で暗躍していた。誰かが思考誘導を行っていた。それも、個人レベルではなく種族レベルで。否、勢力というあまりにも馬鹿げた単位で」

まさに世界のすべてがたったひとりの手のひらの上で動いていたわけだ。

「おまえだな。おまえが裏で糸を引いていたんだ」

「その通り、と言いたいところだが若干違うな。ベルゼブブは端末というより分霊と言った方が正しい。端末は自由自在に身体を乗っ取れるが、分霊はそうはいかない。インドのアヴァターラを例にすれば分かり易いか。理想王は維持神が人間として降りたものだが、存在としては全くの別物だろう？」

「成程な。そして、それがベルゼブブがサマエルと同一視される裏事情か。俺もそれを知らずに、まんまとあいつを共犯者に選んだわけだ」

強烈な舌打ちをするソロモン。

「黙示録には〝赤い竜は獣に、自分の力と王座と大きな権威とを与えた〟とある。この『赤い竜』とはグレートレッドとも取れるが、実際は貴様だ。そもそも『竜』と『蛇』は多くの時代や文明で同一視された。むしろ区別されるようになったのは人類史から見れば比較的最近だ。『赤い蛇』。貴様の別称の一つだな。確か、知恵の実は貴様がエデンに植えたものだったな。ならば同じようにあれも――生命の実もおまえが植えたものではないか。トライヘキサは自然発生したのではなく、貴様が生み出した。全ては、自分自身が神に成り上がるため」

サマエルは笑む。依り代にしている身体には似合わない笑い方だった。

「流石だ、ゲーティア。拍手を送ろう。よくぞ私に辿り着けた」

挑発的な態度だが、彼には悪気はない。だからこそ余計に苛立つゲーティアとトライヘキサ。

「かの大戦で不自然な最後の点――神の死だ。誰が神殺しを達成した？」

三大勢力は神の崩御を他神話に伝えながらも、その真相に関しては伏せている。伏せなければならない事情があった。そうでなければ停戦などしていない。二つの勢力が滅ぶか、三つ全てが滅ぶまで戦争は続いていたはずだ。そうでなければ、いくら毒蛇の扇動があったとはいえ戦争など始まっていない。

「二天龍か？　有り得ない。二天龍は神によって神器の中に封印されている。封印により弱った神が過労死した可能性もあるが――それならばそもそも『封印しなければいい』。もっと簡単な封印にしておけば、負担も軽減できただろう」

二天龍の神滅具を調べる機会があった魔神には断言できる。あそこまで複雑な封印ができる余裕があった以上、二天龍の封印は直接的な死ではない。

二天龍の封印に妙な拘りがあったのは、『システム』によるエネルギー回収の効率化だろう。何せ『倍加』と『半減』――『吸収』だ。覇龍もあってエネルギーの回収はかなり進むはずだ。

「堕天使か？　これもないな。仮に堕天使が神を殺していた場合、奴らはもっと派手に動いているはずだ。戦争の勝者を騙ったはずだ」

戦争から手を引いたアザゼルはともかく、堕天使至上主義のコカビエルらが黙っている理由はない。

「天使か？　これが一番有り得ない」

理由は語るまでもない。神に仕えることこそ、天使が天使である所以なのだから。仮にその状況で神殺しをするならばもっと早くに堕天使になっているはずだ。

「三大勢力や天龍以外の異形、あるいは人間か？　ならば――今の世界は成立しない」

よっぽど三大勢力に有利な条件が整わない限り、神殺しの逸話は世界中に知れ渡ったはずだ。

「つまり、必然的に悪魔となる。三つ巴の戦争で最も被害を受けたのは悪魔だったはずだな？　魔王や多くの上級悪魔を失った当時の状況で神殺しが明るみに出れば、戦争は中断されない。堕天使はどうにかなっても、天使が黙っていない。だからこそ有耶無耶にする必要があった」

分かり切った事実があったからこそ、誰もが口を閉ざす必要があった。

「そうなると論点は、どの悪魔が殺したか、になるが――」

「――それ以上の考察は不要だ。全てを知る私から、真実だけを開示しよう」

サマエルの顔には強い不快感が出ていた。だが、それはゲーティアに真相を掴まれていたからではない。むしろ彼が辿り着いていない真実こそが、サマエルを最も不愉快にしていた。

「神が死んだのは二天龍を封印した直後だ。その時、その場には神と四大魔王しかいなかった。そして、天龍の封印によって神は疲労――否、衰弱していた。戦争前の黙示録の獣を封印した後遺症のこともあるからね」

サマエルは端末によって黙示録の獣をずっと監視していた。本来であれば、救世主が獣を倒すはずだったが、彼はそれを拒んだ。この哀れな獣を倒すのは自分ではないと言って。モーセとソロモンに続く、三度目の失敗だった。

「魔王たちはその隙を突いた。最初に動いたのはソロモンの共犯者であり理解者でもあった初代アスモデウスだ。ソロモンの理想の真実を知らない彼は、神は殺せる時に殺しておいた方が有利だと判断した。そして、初代レヴィアタンもそれに続いた。神は最後の力を振り絞り、この二柱の魔王を殺した。だが、力をそれで使い果たした。人間以下になった神を殺したのは初代ルシファーだ」

問題なのは、そこからだった。

「そうなるとルシファーをベルゼブブが殺したことになるが、そのベルゼブブは誰が殺したのだ？　ルシファーと共倒れか？」

「これが最低に不愉快な話なのだがな――ルシファーを殺した後、べ

ルゼブブは自決したのだ！」
「は？」
「何だと？」
　それはソロモンも知らない事実だった。ミカエルやアザゼルさえこの真実には辿り着いていない。彼らが知るのは神と四大魔王が全員死んでいたという事実だけ。傍目には二天龍封印直後に相打ちしたかのように見えたはずだ。
「そもそも、私の計画にルシファーの死などない！　ベルゼブブに向けた命令は、ルシファーの殺害ではなく吸収！　それさえ成功していれば、私の計画は完成したはずだった！　とっくの昔に、天の玉座は私のものになったはずだ！」
　サマエルとルシファーとベルゼブブ、そしてトライヘキサ。彼らは『サタン』の名において同一視される。ソロモンと聖書の神を除いて、『真理』の力を使えるのはサマエルだけだ。魔術王は指輪の中に封印されたままであり、唯一神は死んだばかり。ならば、サマエルだけがその猛威を振るえた。
　サマエルの名の下にベルゼブブと融合し、神の不在を突いて『システム』を乗っ取り、トライヘキサを封印から開放して吸収し、全知全能さえ超越した唯一神になる。そして完璧な楽園を創り出す。今度こそ、誰も逃げ出そうとは考えない最高の理想郷を。
　だが、それはある悪魔の暴走によって延期された。他ならぬ自分の分霊によって。
「ベルゼブブは自らの意思でルシファーを殺した。私のアバターの分際で、私の計画に反して、しかも最後には自決したのだぞ!?　奴は一体、何がしたかったんだ！　自決したのも奴の意思だ。何故だ、何故あの蝿は私の理想を崩したのだ!?」
　ずっと自分の言う通りに動いていた。最も忠実な駒のはずだった。自分から切り離したとはいえ、自分の一部である以上、自分を裏切ることはないと思っていた。何故なら、ベルゼブブにはそんな機能などなかったからだ。サマエルを神にする。ただそれだけが、ベルゼブブの存在理由だったはずなのに。

「ベルゼブブ自身が神になるつもりならばルシファーを殺す必要はない。私を神にしたくないのならば冥府の本体を直接叩けばいい。二天龍を其方に誘導することもできたはずだ。裏切りの機会などいくらでもあったが、奴はそれをしなかった。何だ。ベルゼブブの奴には、突発的にルシファーを殺したくなるような感情でもあったというのか!?」

そんなはずはない。

ベルゼブブという悪魔の中身は空っぽだ。空っぽだからこそ、『暴食』という罪を与えられたのだ。どれだけ貪っても満たされることのない空白。

「あんな愛さえ知らぬ人形が、一体どんな欲を抱いたというのだ！」

何故

自分自身にさえなれなかった。

過去の自分を、そして自らをそう罵るアーチャーは棺桶から槍を取り出す。曹操もそれに対して、自らの槍を構える。

「黄昏の聖槍！」

「暁の魔神槍！」

瞬間、槍の矛先同士がぶつかり合う。

この二人では圧倒的なまでに経験値が違う。

今の曹操とほぼ同じ人生を歩いた上で、アーチャーは更に五年戦った。それも、はぐれ悪魔や野良の魔獣などではない。人類悪の眷属や魔王、更には外宇宙の異形まで相手にしたのだ。

五年の歳月と異常な経歴。同一人物であるが故に、気力でどうにか埋まる差ではない。否、気力さえもアーチャーの方が上だ。

「ッ！」

「俺（おまえ）の人生で最大の失敗は、初めて兵藤一誠と戦った時、サマエルの毒を使うことを躊躇ったことだ」

神の毒。アダムとイブに知恵の実を食べさせたサマエルに対して、神が与えた絶対の苦痛。最強の龍殺し。もっとも真実は真逆なのだが、曹操には関係ない。

龍の因子を持つ兵藤一誠に対して、龍殺しの毒を使うことを躊躇った。それは彼を殺してしまうことを恐れたわけではない。

「こんなものが英雄の力か、こんなものが人間の価値の証明かと、高慢にも悩み、思い留まったんだ。目の前の悪魔を憎んでいたはずなのに、ようやく殺せる場面に辿り着いたというのに、俺（おまえ）は殺し方に拘りを抱いてしまった！　自分の力で倒さなければ、ゲーティアや教授、アーシアに顔向けできないのではないかと。俺（おまえ）が自分自身の力で勝ち取った力など、何一つないというのに！」

最強の聖遺物という力があった。英雄になりたいという願いがあった。人類を異形から守りたいという信念があった。

力は飾り物だった。願いは借り物だった。信念は貰い物だった。

この身の全ては偽物だった。

偽物の英雄だからこそ――本物の『悪魔』を殺せなかった。

「俺(おまえ)が殺し損ねた兵藤一誠は、こじ開けたのさ。聖書の神から与えられた力――本来ならば黙示録の獣にしか使えない宝具、最後の審判(アポカリプス・ナウ)を使って、外宇宙への扉をな！」

星空に展開された異次元への扉。この宝具はその燃費の悪さ故に絶対的な魔力を持つトライヘキサにしか使用できないはずだった。

「あの男は乳神なんてふざけた神の力と赤龍帝の籠手の力を使って、禁忌の力を使った！　あの男だからこそ許された奇跡(デタラメ)だった！」

冗談ではなかった。常識ではなかった。許されるはずのない理不尽とはあのことだった。

「扉から現れたのは何だと思う？　精霊を司る善神？　機械生命体を司る邪神？　抑止力が遣わした英霊？　あらゆる生命を破壊する遊星？　生きるために戦い続けた平凡な人間？　いいや、どれも違う」

ソロモンが千里眼によって数多の世界を観測したように、ある世界線の兵藤一誠が乳神と交信することで異世界の証明を行ったように。

その世界の者共は、兵藤一誠と乳神の波動を嗅ぎつけて、この世界『D』を見つけてしまった。

「兵藤一誠と精霊の過剰な同調はまったく別の第四の宇宙の存在を引き寄せたんだ。そう、邪悪なる原初の混沌、邪神アザトースを！」

狂気の宇宙の創造主アザトース。

それを聞いて、曹操は驚愕を露わにする。

「そんな馬鹿な――アザトースは、クトゥルフ神話は存在しない神話、ひとりの男の妄想のはずだ！」

「だが実在したんだ。ひとりの夢を見る男が吐き出した創作神話が、本当に外宇宙の高次生命体たちの在り方を言い当てた。一致した。その片鱗をこの宇宙に浮き彫りにした。それが一から十まで妄想にまみれたものだとしても、その男は確かに道を繋げた。そして、そのバトンを兵藤一誠が無自覚に、そして無責任に受け継いだ」

「有り得ない……！」

曹操はアーチャーの記憶を否定する。アザトースが実在したこと

を、ではない。アザトースがこの宇宙に襲来したことを、だ。
　ある小説家が夢に従って描いた架空の伝承、クトゥルフ神話。神秘もなく、歴史も浅いにも関わず、この虚構の神群は多くの人々を引き付ける。そこにある底知らぬ狂気に人々は魅せられる。だが、その狂気の神が実在していたというのならば意味合いが違ってくる。あの神話は妄想だ。妄想でなければならない。他のどの神話が実在したとしても、あの神話だけは空想でなければならないはずなのに。
「魔神ラウムは以前からその宇宙……仮称『C』の存在を探っていた。まさかラウムも呼び寄せるために調べていた技術を追い返すために使うとは思っていなかったようだが」
　全くの未知、というわけではなかった。それだけが救いだった。それ以外に救いなどなかった。
　神の復活から五年後に生前のアーチャーは死亡した。確認したわけではないが、人類の総数は百万を切っていただろう。五年の間にそれだけの人間が死んだことになるが、最初の一年で五十億人が死んだ。そのほとんどがこの邪神襲来が死因だった。
「多くの神話が扉を閉じるのに協力してくれたよ。存在するだけで狂気をばら撒く異次元の神が相手では、他人事で済まないからな。ああ、この星の生命が手を取り合えば邪神だろうとねじ伏せられると勘違いをした」
「勘違い、だと？」
「何せ、この後、聖書の神によってあらゆる神話が滅ぼされるんだ！」
　大航海時代の再来、とすら呼べなかった。そんな生易しい次元ではなかった。
　人間界と天界と冥界を除いたすべての世界が物理的に消滅した。オリュンポスと冥府は洪水に沈んだ。ユグドラシルは硫黄と火の雨に焼き尽くされた。須弥山は地割れに飲まれた。高天原は氷河に覆われた。小種族が生息する隠れ里じみた異空間さえ、徹底的な虐殺が行われた。あらゆる天国と地獄が血に濡れた。
　聖書以外の神話が完膚なきまでに滅ぼされた。天使と悪魔と堕天使以外の異形が片付いたら、後はラフムによる人類淘汰だ。人間とい

う種族は、神の失望に嬲り殺された。
「俺(おまえ)のちっぽけな見栄のせいで、大勢の人間が死んだんだ！　最初からサマエルの毒を使っていれば、外なる神がこの世界を見つけることもなかった。泥による汚染も、ラフムによる蹂躙も、この星の生命が聖書の神に負けることもなかったんだ！」
　ゲーティアを愚弄した聖書の神を憎悪した。元凶であるソロモンを恨んだ。泥を利用したリゼヴィムに憤怒を向けた。外宇宙の神を呼び寄せた兵藤一誠に殺意を抱いた。聖書の神のために人類を切り捨てたアザゼルやミカエルを許せなかった。だが結局、一番許せなかったのは、自分自身だ。勝ち方に拘って、死に方を選べなかった自分ひとりだ。
「英雄として称えられるという理想が素晴らしかったから憧れた。ゲーティアたちの目指した極点が尊いものだったからその背中を目指した。故に、自らの中から零れ落ちた気持ちなどない！」
　空っぽだった。運命に流されるまま、宿命に踊らされて生きてきた。
「最強の槍を生まれ持った自分は偉大なことをなさなければならないと、強迫観念に突き動かされてきた。高慢にも走り続けてきた。だが、所詮は偽物。そんな軽い覚悟で成せる覇道などない。いや、何の為に英雄を目指すのかさえ定まらない」
　曹操の魔槍が、アーチャーの聖槍によって弾かれ、宙に飛ばされる。
「見ろ、その結果が俺(これ)だ。親から与えられた名前も忘れ、先祖から盗んだ名前さえ捨てた、誰でもない無名の掃除屋だ」
　歩きを止められなかった。戦いを止められなかった。
　諦めればいいのに、生きることなど。認めればいいのに、自分は弱いと。知っていたはずなのに、己の全てが偽物であると。
　四大魔王を殺した。ラフムを滅ぼした。一つまみでも人類を守った。
　だが、それが何だと言うのだ？
　アーチャーの死後も、あの世界には聖書の神は健在だ。自分の棺桶を受け継いだ誰かがとも夢想するが、そんなうまい話があるものか。

「栄光と名誉に満ちた英雄譚など御伽噺だ！　俺（おまえ）が憧れ、人々が英雄と呼ぶ彼らは皆、俺（おまえ）とは比べ物にならない覚悟を持ち、傷を負っていた！　泥水を啜ってでも勝ち抜こうという信念こそを、人は理想と呼ぶんだ！」

残ったものは強い後悔。

誰も救えない両腕。

そして、人の血で濡れた槍だけだった。

偽物には相応しい末路だった。

「そんな当然のことさえ認められないなら、その勘違いを抱いたまま溺死するがいい！」

アーチャーの槍が、曹操の心臓を捉えた。

■

「汝と紅蓮に塗り潰した過去を覆そう」

『Ｊｕｇｇｅｒｎａｕｔ　Ｆｉｎａｌ　Ｄｒｉｖｅ！』

その呪文を唱え終わった兵藤一誠の鎧は、真紅だった。皮肉にも、一度は主と仰いだ女の髪と同じ色をしていた。

「真紅の赫龍帝……いや、こう呼ぶべきだよな。天紅（クリムゾン・ゴエティア・プロモーション）の魔龍帝。これが最後の赤龍帝の姿だ」

その姿に誰もが呆然とした。否、呆然とせざるを得なかったのは、誰よりも仲間思いである彼から放たれる憎悪か。

「何だ、イッセー。その姿は。赤龍帝の鎧が、赤ではなく紅に……？過去にないぞ。一体、おまえは何をやったんだ……！」

「あんたの知らないことだよ、アザゼル」

敵意と殺意を隠さず、一誠は一歩一歩彼らとの距離を詰める。

「どうしたと言うんだ、イッセーくん。どうして君が……」

「……いや、それは違いますよ、サーゼクス・ルシファー。むしろこれまでがおかしかったんだ。だってそうだろう？　俺は忌むべき赤い龍の力を持っていた。本来なら、俺はもっと早い段階で殺しておかないとダメだったんだ」

「そういうことね……！　サーゼクス様、おそらくイッセーくんの中にはまだソロモンの人格があるのです！　イッセーくん、聞こえるでしょう？　お願い、眼を覚まして」
「イッセーくん、しっかりするんだ！」
「イッセー先輩！」
「――ああ、それならどれだけ良かっただろうな」
「待て、兵藤一誠」
　兵藤一誠の足を止めたのは、彼を仲間と信じている者達の言葉ではなかった。キコキコと、車椅子を押す音とともに彼の背後から聞こえてきた無機質な声。
「……いいのか？　こんな場所にいて」
「我々の彼らへの救済（いたみ）は完了している。計画がこれから頓挫するとしても、それだけはもうすぐ終わる。覆されたのならば、我々はそれまでだったという話だ。我々が、愚かにも敗北を重ねる無能だったというだけの話だ」
　そこにいたのは、カラス頭の怪人だった。
「私はラウム。〝あちら〟のソロモン七十二柱がひとり、魔神ラウムだ。グレモリーとグラシャ＝ラボラスが世話になったな」
　カラス頭の怪人――否、魔神はそう名乗る。彼が押す車椅子にはひとりの少女が乗っていた。白い髪をお下げにした十代前半の少女。
「久しぶりだね、イザイヤ」
　少女が言葉を投げかけたのは、木場裕斗だった。「イザイヤ」という名前と少女の顔に、裕斗は著しい反応を示した。
「トスカ……？　トスカなのか？」
「うん、そうだよ」
　信じられないといった様子の裕斗に、トスカと呼ばれた少女は嬉しそうに答える。
「彼女は聖剣計画の生き残り。彼女の神器は強力な結界系であり、かつて実験の中で神器が発動し、研究者たちも手が出せなくなってしまった。それから数年間は結界内で仮死状態であったため、成長は止まっている。我々が保護し、意識の覚醒に成功した」

「『保護』か。物は言いようだな。人質に使っておいて保護も何もねえもんだ。ただの拉致だろうが」
「その認識は間違いだ。私が君達に対して人質を取る必要はない。私は最後の通告に来たのだ。正しくはトスカが、だが」
ラウムからは余裕が見られた。その態度に、誰もが苛立ちを隠せない。アザゼルが舌打ち交じりに光の槍を具現化させる。
「まさかおまえら勝ったつもりか」
「勝った気でいる、か。確かに我々はまだ勝利を迎えていない。我々の極点は未だに遠い」
計画は半分も進んでいない。黒幕の正体は突き止めたが、停止させていない。魔術王の狂気も唯一神の悪意も健在だ。
「私達の勝利は不確定だが、君達はすでに敗北した。これは決定事項ですらない。君達――悪魔と堕天使という種族の歴史はすでに終了している」
そもそも、魔神柱にとって悪魔も堕天使も天使も最初から勝負の相手という認識ではなかった。最初から燃料の素材か駆除すべき害獣で、途中で考え直そうとして、最後まで燃料の素材で駆除すべき害獣だった。
同じ土俵にいないのだ。ならば、勝利条件と敗北条件が一致しないのもまた自然なことだ。
「故に、これはただの通告であり感傷だ。審判の前に汝の罪を提示しよう、サーゼクス・ルシファー」
「私の罪だと？　それが君達が悪魔と敵対する理由か？」
「全面的な正解ではないが、部分的には間違いでもないな」
ラウムはカラスの頭を縦に振るう。
「グレモリーという悪魔の特色、すなわち『情愛』。父を愛し、母を愛し、妹を愛し、妻を愛し、息子を愛し、眷属を愛し、領民を愛している。――だが、これは王としての愛ではない。一貴族としての愛としては上等でも、王としては無能極まりない」
暴君として国を荒らすことはなかった。だが、国を愛しながらもその方向を見誤っているのならば、それは暗君だ。暴君よりなお悪い。

「私たちは様々な王を知っている」
民の笑顔を守るために、人間でなくなった騎士王がいた。
人類の可能性を見出し、天地を開闢した英雄王がいた。
闘争を繰り返しながらも、多くの臣民が憧憬を抱いた征服王がいた。
祖国を守りたいが故に、偽りの高貴を粛清した極刑王がいた。
友と袂を分かつとも、死ぬまで国家の頂点として君臨した太陽王がいた。
死を理解しながら、最期の一瞬まで闘争を選んだ守護の王がいた。
そして、人としての自由がなかった癖に、根は臆病だった癖に、己の全てを放り投げた魔術王がいた。
「君には力がある。君には愛がある。だが、君のそれは『王』としてのものではない」
その力は強くとも、美しくはない。その愛は優しくとも、強くはない。王としての愛がない。王として強くはない。
歪な情愛によって、どこもかしこも穴だらけの繁栄が完成した。中途半端な変革は、滅びの種を育てただけだった。暴力を振るう以外に能がないのなら、いっそ徹底的に古い思想を破壊すべきだったのだ。残された平和という虚構に取り憑かれただけだ。
おまえが勝利した内戦が、悪魔にとって最後の流血になるとでも妄想したか。おまえが排除した旧魔王派の血筋だけが、悪魔の未来が見えていない愚者だとでも空想したか。
その愛は間違ってはいないのだ。おまえがただの悪魔であれば。おまえが王でさえなければ。
「サーゼクス・ルシファーよ」
誰も彼もに偽りと偽善の魔王と呼ばれた、暴君にさえなれなかった、悪魔ですらないナニカよ。
「君は王になるべきではなかった」
おまえという暗君のせいで、兵藤一誠は生まれたのだ。

■

魔神柱が撤退し、冥界焼却が行われる数分前。
ヴァチカンにて、天使長ミカエルは降臨していた。
三大勢力のトップ陣の中でミカエルだけは世界神話会談に参加しなかった。その理由は、大きく二つ。神の復活を進めるため。そして、もう一つの目的は目の前の男にある。
「では、頼みましたよ、ヴァスコ・ストラーダ司祭枢機卿」
「はい、ミカエル様。確かにデュランダルⅡ、受け取りました」
ミカエルの前に立つのは、祭服を身にまとった身長二メートルはある白髪の巨漢。
前デュランダル所有者、ヴァスコ・ストラーダ司祭枢機卿。教会の暴力装置、天界の暴挙、ヴァチカンのイーヴィルキラー、ミスター・デュランダル、本当の悪魔。多くの異名と八十七歳とは思えぬ覇気こそが、この老人が正真正銘人間の極限たる証明だった。
ミカエルがヴァチカンに降りた理由は、彼に聖魔剣と過去の聖剣のデータによって作り出された特別性の聖剣を渡すためだった。本来であれば会談開始前に渡しておきたかったが、調整に時間がかかり今になってしまった。日本への転移の準備はすでに完了しているはずだ。
「……それにしても、デュランダルを魔神柱に奪われたのは残念です。戦士ゼノヴィアにはリアス・グレモリーの眷属になってもらう予定だったのですが」
「成程。神の不在を知った彼女をデュランダルごと放置したのはそれが理由でしたか」
「ええ。あの時点ではすでに和平が決定していましたからね。しかしあの時点では神の不在を公にできないのも事実。我々としても苦渋の決断でした」
「しかし、彼女は禍の団に入った。魔神柱の手先として。本来ならば、悪魔に転生し、和平後の悪魔と教会の架け橋になったはずだ。貴方はそう考えているわけだ」
ヴァスコの言い方を怪訝に思うミカエルだったが、連絡が入る。会

談会場にいるはずのガブリエルからだ。魔神柱との交戦に入ってから連絡が途絶えていたため、やや焦りが起きる。
「どうしました、ガブリエル？　これからヴァスコ・ストラーダに大至急其方に向かってもらいますが――」
　瞬間、ミカエルの表情が曇る。
「……分かりました。では、ガブリエル。貴女は天界に戻り急ぎ治療を。会場の後始末や情報の整理は、ウリエルやラファエルに任せましょう。アザゼルにも私から連絡を入れておきます」
　連絡を終えたミカエルにヴァスコは訊ねる。
「どうかされましたか？」
「……件の魔神柱ですが撤退したようです。間に合わなかったとは残念です」
　本当に残念そうにミカエルは頭を振るう。
「ガブリエルは重症を負い、撤退しています。ウリエルやラファエルの現状は不明ですが、大戦を生き延びたあのふたりのことです。きっと無事でしょう」
「ええ、だとよろしいですが」
「申し訳ありません。貴方も日本に向かう用意をしていたでしょうに、それを無駄にしてしまいました」
　だが、ヴァスコは朗らかに笑う。
「心配は無用です、ミカエル様。――元より日本に向かう用意などしていませんので」
　その言葉がミカエルの脳裏に届くより早く、その胸に刃が突き立てられる。
「――――はい？」
　裏切り。
　自分の現状がそうであると、ミカエルは認識できない。彼の常識を遥かに逸脱した行為だからだ。
「勘違いしないでください」
　目の前の使徒もこう言っている。おそらくこの剣は命を奪われないものだ。この痛みも息苦しさも自分の気のせいだ。意識が薄れて

いくのも疲労が溜まっているからだろう。
使徒を疑うなど天使長にあるまじき痴態だったとミカエルは悔いる。
もしも彼が自分達――天界と教会を裏切ったというのならば、他の使徒たちが身じろぎさえしないのはおかしい。彼らが自分に向ける視線が冷たいのも何かの間違いだろう。
「先に裏切ったのは、貴様らの方だ」

断罪

実は、世界神話会談に参加していたミカエルは偽物である。熾天使のひとり、メタトロンが影武者として参加した。

これは魔神や他神話勢力がすり替わっていたというわけではなく、天使が天界のため――否、神の復活のために行った策略である。

神の復活。

皮肉にも真なる魔王ルシファーの実子であるリゼヴィム・リヴァン・ルシファーから伝えられた神の復活の儀式は実現可能なものだった。

だが、そのためには指輪が必要だった。

しかし、ミカエルたちは考えた。――指輪ではなくとも、良いのではないか、と。神が作った聖遺物ならば他にもある。指輪は偽物だった。聖槍は所在が不明だ。聖十字架や聖杯の本物は欠片しか残っておらず、神滅具としてのものも所在不明だ。

それでも、天界に保管されている聖遺物はまだまだある。その中でも最高の出力を実現できる、ともすれば指輪さえ上回る聖遺物が一つだけあった。

預言者モーセの遺産、聖櫃である。聖書の神が復活可能であると知った天使たちは喜んだ。それがサマエルの思惑であるとも知らずに。

ソロモン、サマエル、聖書の神。この三者はそれぞれの計画を利用し合い、奪い合い、潰し合った。

第一案、人類悪の再利用は、ソロモンがトライヘキサに原罪を継承させることで中断してしまった。

第二案、アザゼルに藤丸立香を召喚させて連鎖的に異世界から資源を呼び込もうとしたが、初代山の翁からの警告によって妨害された。

第三案、兵藤一誠の暴走によるエネルギー回収は、ゲーティア達が導いた人間達によって阻止された。

そして、これこそが第四案。聖遺物と『システム』を核にした神の復活。皮肉なことに、この第四案こそが最も神に相応しい手順であ

り、最も成功率が高い方法だった。この第四案こそが聖書の神、否、サマエルの本命とも言うべき唯一神への転生計画。

問題は、この計画をミカエルが和平関係にある勢力――悪魔と堕天使に対して秘匿したことだ。敵を騙すならまず味方からと言う。ならば、敵を騙すことに何の不条理がある？

唯一神とは絶対にして至高の存在。それが失われたままであることは世界の損失だ。それを分からぬ愚か者を騙して何が悪い。神がいなければ世界に価値などないというのに――。

神とはただ一柱。我らが主のみである。

「――などと、貴殿らは考えているのだろうな。我々の神話を破壊した時も同じようなことを言っていたな。反吐が出るよ」

「が、があ……」

「そもそも、その程度の信頼関係で各神話の協力など……愚かにも程がある」

血だらけのメタトロン。

ウリエルやラファエルの無事を確認するという名目で会談の場から脱した彼は、天界に戻るつもりだった。全ては主人のため。唯一神が世界を収め、楽園を取り戻すため。

しかし、会場を出たところで目の前の悪神、ロキが待ち構えていたのだ。まるでメタトロン――否、ミカエルの計画が筒抜けであるかのように。メタトロンの正体を分かっていたような態度だ。

「それにしても貴殿も難儀だな。よくもまあ、神話の時代から今日まで正体を隠してきたものだ。半信半疑だったが、まさか本当にそうだとはな」

「ま、魔神柱か……？　貴様が、貴様のような田舎の神もどき（モンスター）如きが、我が主の計画を知っているのは、奴らに唆されたか――！」

「否。このロキの行動にゲーティアなる存在は関わっていない。我が娘ヘルとは通じていたようだが……私には関係のないことだな」

「何……？」

「私だけではない。『彼』はシヴァやメフィストフェレスにも話をつけているそうだ。オーディンや帝釈天はともかくハーデスあたりには

顔を見せているだろうな」
「『彼』？」
「有り得たかもしれない世界の来訪者だ。あの棺桶に詰まっているものが貴様ら三大勢力を殺し尽くしたと聞けば、多少は溜飲が下がるというもの。――我らの神話が滅んだとしてもな、残されたものはあるのだから」
ロキの傍らには最強の魔物であるフェンリルが佇んでいる。神喰狼の名に相応しい威圧感を以って、巨大な狼はその顎を大きく開く。
「すまぬ、サンダルフォン……ああ、我が主よ……貴方様の復活を遂げられぬとは無念でございます」
今わの際に、大天使は双子の兄弟と仰ぐべき主人の名を紡いだ。
「申し訳ございません、サマエル様……！」
「さらばだ、蛇の手先。フェンリルの血肉となるがいい」
これにて、神の悪意は完全に潰された。

■

「――汝を純白に消し去った未来に誘おう」
至った。
ヴァーリ・ルシファーは真に『超越者』に至った。
歴代最強の白龍皇ヴァーリ・ルシファー。魔王の血筋と白い龍の力。それらに恥じぬ天賦の才能。そして、注ぎ込まれた無限の龍神の蛇。それらが一体となって、ヴァーリ・ルシファーという超越者を生み出した。サーゼクス・ルシファーに倣うならば、彼はもう龍の領域からさえ逸脱している。
鎧の形状は、暴走状態の時のそれではなく、通常の『白龍皇の鎧』に近いが、放たれるプレッシャーはより精錬されたものに変わっている。
しかし、ヴァーリはその力を振るおうとはしなかった。
「違う」
何かが違う。

自分の身体には膨大な力が溢れている。いまならばグレートレッドやオーフィスにも届きそうな気さえする。だが、目の前の死神に対して恐怖を感じていないのはこの力が理由ではない。恐怖と混乱で狂っていた頭が妙に冴えわたる。

しかし、何の達成感も満足感も充実感もいなかった。感情らしい感情も戦闘意欲もない。宇宙に放り出されたような、一切の空虚がヴァーリの精神を支配した。

「……いいや、違うんじゃないか」

最初から分かっていたことだ。

ふと脳裏に、懐かしいものが蘇った。まだ祖父と父に虐待されていた頃、母の作ってくれたパスタだ。思えば母は無事なのだろうか。ちゃんと生きているのだろうか。そんな場合ではないというのに、会いたいと強く願ってしまった。

「今一度問おう」

黒衣の死神から殺気はない。

「白龍皇よ、貰い物の翼で何処を目指す？」

おまえが行きたかった場所は其処なのか、と死神は問い掛ける。

分かり切っていたことだった。辿り着いてしまえば、何と簡単なことだ。高山の頂きから大地を見下ろすように、何もかもがよく見えてくる。

一瞬だけ、ヴァーリは自らの過去を噛み締める。祖父のこと。父のこと。母のこと。アザゼルのこと。グレートレッドのこと。ラヴィニアのこと。幾瀬鳶雄のこと。オーフィスのこと。美猴や黒歌のこと。兵藤一誠のこと。キングゥのこと。そして、自分自身のこと。

「俺は――」

■

「君は王になるべきではなかった」

ラウムの指摘を正面から受け、サーゼクスはたじろくこともなく、戦いを決意する。

「私たちの何が君達をそこまで動かすのは分からない。だが、それでも私は魔王として、君達、外宇宙から襲来した存在を倒そう。愛する民と、家族のためにも」

優しき王として知られるサーゼクスは視線を冷たくし、人差し指を立てる。

「我が眷属、我が妹、そしてイッセーくんに向けた悪意、万死に値する。私は一切の躊躇無く貴殿ら魔神柱と魔術王ソロモンをこの世から滅ぼし尽くす」

「そうか。この期に及んでそう嘯くか」

アンドロマリウスやグラシャ＝ラボラスがセラフォルー・レヴィアタンに告げたはずなのだが、どうやら伝わっていないらしい。アモンとカルナもそれらしいことは言っているはずなのだが、眷属から話は聞けていないらしい。

ラウムはトスカに視線を落とす。

「人間。人間だよ、偽りの魔王。それが私たちの動機だ。確かに、貴様らにとって私達は招かれざる客――降臨者だろう。だが、私達はこの世界の人間に哀れみを抱いた。私達はこの世界の人類の救済を決意した。そのために君達が邪魔であり有害であり必要だったのだ」

その言葉に、アザゼルは青筋を浮かべる。

「義憤、だとでも言うのか？　どうやら、こっちの七十二柱と違って、てめえらはソロモンと同じように戯言が好きらしいな」

「黙れ。黙るがいい。懲りもせず真実から目を逸らす害獣どもめ……！　いい加減君も理解している頃だろう、アザゼル。君達では、何も救えないと」

「おまえたちみたいな破壊者に何が分かる！　神の死後、俺たちがどれだけの心血を注いで勢力と世界の均衡を守ってきたと思ってんだ。人間を救うだと？　その人間に敗北して、この世界に逃げて来た奴の手下とは思えない言葉だな。あの詐欺師の仲間なら、もうちょっとマシな嘘を吐いたらどうだ！」

「逃げてきた、だと？」

まさか時間神殿の崩壊から逃げ遅れた特使五柱のことを言ってい

るのではないだろうなと怪訝に思うラウムだったが、アザゼルの推論は予想外にして必然的なものだった。

「キングゥの話なら終わったぜ。おまえらの王――そっちの世界のソロモンはこっちのソロモンみたいに人類を、星にあるすべてを利用し、破壊した。そして、人類最後のマスターとやらに敗北してこっちの世界に逃げ出したんだろう？　漂流した先にいた同じ名前の男同士が協力し合い、おまえたちはまた世界を滅ぼすことを決めた。ご丁寧に俺達三大勢力だけが標的みたいな戦い方をして、各勢力間の協力を取れないようにしてな。腐敗？　変革？　陳腐だな、おい。そういうセリフは一番最初に死ぬ敵役の言うことだぜ？　この世界の人間を甘く見るなよ、おまえらみたいな奴らに余計なお世話を焼かれなくても、世界は回るんだからな」

その瞬間、ラウムの霊基が歪な音を上げた。

「――――ッ」

キングゥの開示した情報に穴があるのは、契約に触れないため、というよりは三大勢力への嫌がらせも多分に含まれている。故に、アザゼルが頓珍漢な推測をしていることは予期していた。

だが、まさか――まさか聖書の神が人類悪を用いての復活を目論んでいることを、『システム』を時限的に起動させてゲーティアやキングゥを呼び寄せたことを、自分達が一度完全に消滅した『本来ならば有り得ない復活』を遂げていたことを丸ごと話していないなんて予想されていなかった。

トライヘキサが聖書の神が復活を目論んでいることは先程公言したが、まさかそれが魔神やソロモンと強く結びついているとはアザゼルも思いつかなかった。否、彼ならばいずれは辿り着いただろうが、時間も判断材料も不足していたのだ。

「――ひどく的外れな意見だ。不愉快だ。実に不愉快だ。唾棄すべき感情だ。あの男への冒涜など切って捨てるべきだというのに。だが、誤解は解いておこう。この世界に私たちのソロモンなど来ていない」

あの男はもうどこにもいない。訣別をなした男の記録は星から削除された。ゲーティアやキングゥがそうであったように、この世界の

『システム』を使えばあるいは、とは考えられる。だが、そんな愚行は御免だ。

「それどころか、あちらで行った人理焼却にあの男は関わっていないのだ。あんな無能で無慈悲なように見えて、他者の悲喜交々に共感する自由も悲劇に怒る権利さえなく、ただの人間に憧れていた忌々しいだけの臆病者が、私たちの理想に共感できるはずもない」

あの男の、人としての決断を見送る。それこそが、七十二柱最後の忠誠である。

「加えて言うなら、貴様らの外敵である誇大妄想狂（ソロモン）も我々にとっては敵だよ。キングゥは敢えて言わなかったようだが、我々を呼び出したのは直接的には彼ではない」

「なんだと……！　じゃあ誰なんだ、てめえらの王ってのは。この世界にどうして来たって言うんだ」

「聖書の神さ。そして彼らの王は『ゲーティア』と言うらしい」

ラウムが答えるよりも早く、アザゼルの問いかけが終わる前に、その場にいた破壊神の口から真実は語られる。

「いや、こう言うべきか。元凶はこっちの魔術王ソロモンだ。発端は聖書の神だ。そして、黒幕は『禁じられた蛇』サマエルだと」

傍観者に徹するつもりかと思っていたシヴァからの言葉に、一同は驚く。

「何故そんなことをおまえが知っている、シヴァ！　おまえ、まさか……！」

まさか魔神とグルだったのかと糾弾するアザゼルに、破壊神は涼しい態度だ。その態度はやはり傍観者そのもの。口こそ挟んでいるが、全てが終わるまで直接的に干渉するつもりはないらしい。

「聞いたんだよ。この会談が始まる前に、とある可能性からの来訪者からね。キングゥの話に嘘はなかった。そして、彼は契約を守った。魔神柱のことは話さず、真実を開示したのだから」

言外にキングゥを責めるのはお門違いだとアザゼルを詰るシヴァ。

「随分と詳しいな、インドの破壊神。情報源はアーチャーか」

「あーちゃー？」

「棺桶を持った、火傷顔の青年だ。あるいは包帯で顔を隠していたかもしれないが」
「棺桶は持っていたけど、火傷？」
自分達の思っている『棺桶の持ち主』が微妙に噛み合っていないことに気づくシヴァとラウム。
「とある可能性――並行世界からの来訪者とでも言う気か？」
意外にも、アザゼルはその一言だけでシヴァの情報源に気づいた。丸っきり違う法則の異世界から来訪者が来るのだ。少しだけルート分岐した同じだが違う世界からも来訪者が来てもおかしくない。
「こういうことに関しては頭の回りが早い。その視点をもっと広く持つべきだった」
「だとしても、どうしておまえはそいつの話を信じる？　何故、協力しているかのような口ぶりなんだ。どうしてもっと早くにそのことを言わなかった。ソロモンや聖書の神が相手だというなら、世界中の神魔が協力して戦うべきだろうが！」
「君たち三大勢力に関する面白い話を聞いたからだよ。特にアザゼル、君の話は傑作だった。愉快すぎて笑えなかった。結論から言えば、君達との協力は不可能だ」
シヴァから殺意と怒気が溢れ出す。それは今から発生したというものではなく、今の今まで抑え込んでいたものが我慢の限界を迎えたのだ。
「その歴史では、トライヘキサとゲーティアが共倒れし、聖書の神が復活する」
それを聞いて、アザゼルとサーゼクスは冷や汗を流す。ソロモン対策としてリゼヴィムに提案された聖書の神の復活が露呈したのかと。
「復活した聖書の神はラフムなる異形を生み出し、人類を狩り尽くすことを命じる。ラフムだけではなく、天使と悪魔と堕天使にも同じ命令を出したそうだ」
アザゼルはラフムという異形の詳細が気になったが、それを上回る衝撃の事実をシヴァは突き付ける。
「そして、アザゼル。君は人間を裏切るらしい」

「あ？」
「裏切るという言い方は間違いか。正しくは切り捨てるが正しいかな。君だけではない。全ての堕天使は人間を殺し尽くす、とのことだ。堕ちてきた者たち（フィリム）だっけ？　彼らの首も差し出したとか」
「はッ。有り得ないな。俺が、鳶雄たちを裏切るとでも？」
それが真実だとしたら俺たちの絆と甘く見過ぎだと続けようとしたアザゼルを、シヴァは遮る。侮蔑を込めて、ある世界の真実を告げる。
「聖書の神は――人間の絶滅が完了すれば君達堕天使を天使に戻すと言ったそうだ」
「――馬鹿を言え！　今更神のところに帰ってどうなる――」
「あ、アザゼル？　どうして――」
ふと朱乃が悲痛な声を上げる。

「どうして、貴方は笑っているんですか？」
白い翼（むかし）を取り戻すために人間（いま）を切り捨てたと聞いて、何故笑っている？

約束

「は……？」

自分が突き出した槍が宙を突いて、アーチャーは呆けた声を上げた。

槍で貫いたはずの自分が、ぼやけて消えた。

「暁の魔神槍第三形態――」

背後から聞こえてきたのは、過去の自分の声。

「蜃気楼（ミラージュ・ファントム）の幻槍！」

「ちっ！　幻影か！」

背後に振り返ろうとして、

「ぐぅ！」

横っ腹を一突きされた。

攻撃された方向に棺桶を振り回せば、何かにかすった感触。見れば過去の自分がいた。

「っ！　よくもそんな小細工を考えたものだ」

「おまえには思いつかなくて当然だ。この能力は、ゲオルグの発想だからな」

そして、槍と槍の突き合いが始まる。先ほどはアーチャーに分があったが、大きなダメージを負ったからか曹操に追いつかれてきた。

「流石はゲーティアが用意した槍！　この俺の眼を惑わすとはな……！」

「ああ、まったくだ！　最初は聖槍の禁手――『極夜なる天輪聖王の輝廻槍』と同じ能力にしてもらおうとしたんだが、駄目出しされた！」

「何だと!?」

「『こんな適当な能力が切り札とか、ふざけているのか？』とさえ言われたな！　俺には戦う才能はあっても、戦い方を考える才能はなかったみたいだ！」

「そいつは聞きたくなかったな！」

不意に、曹操の槍捌きが速度が急激に遅くなる。

（フェイントか？　性懲りもなく幻影を重ねるか！　ならば幻影ごと

薙ぎ払うだけ！）

槍ではなく棺桶を曹操目掛けて振り回すが、幻影だと思っていた槍に触れた瞬間に爆発が起きた。

「何っ……！」

幻影だと思われた槍は実在していた。動きが鈍くなった理由は単純で、極めて物理的な意味で重量が増したからだ。

これが第四形態、爆裂の重槍（ベビー・コメット）。文字通り、爆発力に特化した形態。

（ヘラクレスの拳を元にしたか……！）

これもまた、繊細な技量こそを自慢にしていた曹操にはなかった発想だ。折角の速度をわざわざ殺して、自分も衝撃を受けるような破壊力重視の攻撃など。

これこそ、過去の曹操と未来のアーチャーの違いだ。

彼には仲間がいて、自分にはいない。

棺桶には仲間の遺品が詰められているが、所詮道具は道具。使い手がアーチャーである以上、その使い道は彼の想像力によるものだ。

「はぁ！」

「がァ！　貴様ぁ！」

爆撃に怯んだ一瞬の隙を突いて、曹操はアーチャーの右肩を貫く。そのまま爆裂が起き、アーチャーの右腕は消滅した。必然的に、右手に持っていた槍が大地に落ちる。

「これで――終わりだ！」

「なめるなぁあああ！」

曹操の槍が通常の形態に戻り、アーチャーへと突き出される。天賦の才が宿りながらも未熟さが抜けきっていない猛攻を、アーチャーは避け続ける。過去の自分の攻撃だ。多少のダメージを負った程度で避けられないはずがない。

左手に持つ棺桶から新たな武器を取り出せないのは何故だ。この棺桶をぶつけてしまえば勝敗は決するはずなのに、どうしてそんな気になれない。

「『曹操』は先祖から盗んだ名前か。言い得て妙だな。だけど、俺はそれで終わらせるつもりはない！」

「何をっ！」
「『曹操』の名前は、俺の名前にする！」
　確かに、自分のものではない名前を使い続けている。だが、これは決して先祖の栄光に縋っているわけではない。もう過去に憧れるだけの英雄ごっこはおしまいだ。
「三国志の英雄としての名前ではあるだろうが、俺個人の名前でもあるように変えてみせる！　ああ、そうだ。奪ってやるのさ！」
「戯言を！」
「恥ずかし気もなく何度でも叫ぼう！　俺は英雄になってみせると！　俺たちは、神々さえ黙らせるくらいに、この星の人類の価値を示してみせると！」
　精錬しているつもりでもまだ柔い。高速のつもりでもまだ遅い。疲労ならばあちらの方が溜まっているだろう。だが、そんな一撃にアーチャーは目が眩んだ。
「俺達は――やり抜いてみせると！」
（ああ、そうだ）
「誰かに負けるのはいい」
（こんな男がいて）
「でも自分には負けられない！」
（こんな男についてきてくれる奴らがいたんだったな）
「滾れ、我が魔槍。第二形態――白夜の天槍（ミッドナイト・サン・ロンギヌス）！」

■

「俺の負けだ」
「ああ、俺の勝ちだ」
　相手は歴戦の英霊。霊核は穿てなかったようだが、それでも勝敗は決した。
　アーチャーが消滅するにはまだ猶予がありそうだが、彼にはもう戦意などない。戦う意志も、意味もない。この『曹操』は自分のようにはならないだろうから。

「間違えた馬鹿からの警告だ。聞いておけ」
　深呼吸をしながら、アーチャーは守れなかった仲間達の姿を脳裏から引っ張り出す。
「ヘラクレスの馬鹿が師匠の後追いをしないように見張っておけ」
「ああ」
「ゲオルグはする必要もない徹夜で倒れることがあるから、その場合は気絶させてでも眠らせろ」
「あ、ああ」
「レオナルドが暴走した時、あいつは自分の作ったモンスターに自分の身体を食わせた」
「分かった。注意しておく」
「ジャンヌは、そうだ。あいつの料理がどんなにまずくても不満を漏らすな」
「え？」
　確かにジャンヌの料理は塩分が効きすぎていたり生焼けだったりと微妙な出来のものが多いが、こんな状況で言うほどではないと思うが。
　そんな風に曹操が怪訝に思っていると、背後から人の気配がした。
「ちょっとどうして私だけそういう方向性なのよ！」
「馬鹿、ジャンヌ隠れろ！」
「おまえも声がでかい！」
「ええ!?」
　声のした方を見れば、ジャンヌやゲオルグ、ヘラクレスがいた。曹操にその姿を見られたことで開き直ったのか、ゼノヴィアやコンラを始めとする英雄派のメンバーがぞろぞろと出てきた。よくもこれだけの人数に気づかなかったものだ。アーシアがいないことにほっとしたのは内緒だ。
「いつからそこに!?」
「……おまえがナイチンゲール先生にえぐられたトラウマの話のあたりだ」
「一番聞いて欲しくない部分を！」

英雄派の登場にアーチャーは一瞬だけ驚いたが、話を続ける。
「いや本当頼む。特にアーシアの料理と比べるな。いや、アーシアだけに限定すべきじゃないな。死者の腕前と比較するな。あの時の空気のまずさはやばかった」
「やめろ。何があったか想像に難くない状況の説明」
「謝ることさえできなかった……。何であのタイミングで来るんだ、あの腐れ天使が」
「やめなさい。それ以上並行世界の私を辱めるんじゃないわよ。……こうなったらアーシアに料理を習うわ。いえ、いっそ先生に！」
「やめろ！　オキシドールもエタノールも飽きた！」
「塩辛いパスタでも生焼けのピザでもいいから、そのままのジャンヌさんでいてくれ！」
「ゼノヴィアさんの怪奇クッキングよりはマシだから！」
「あああああ！　あんなのと比較されるなんて女のプライドが許さないわ！　意地でも習ってやる！　放しなさい！」
「止めろおおおお！」
「くっくっく、あ、あははははははははは！」
突然の哄笑に唖然とする英雄派一同。
「あー、畜生。めっちゃ羨ましいぞ、未熟者」
心底羨ましそうに、彼は涙とともに吐き出した。
守れなかった輝きがそこにあった。失った仲間がそこにいた。欲しかったものを手にしている自分がいる。
「本当、何が違ったのやら」
「……おまえは世界の終わりを見たわけじゃないんだろう？　ひょっとしたらおまえが死んだ後に、誰かが――」
「そんなことは有り得ない。敵は聖書の神だけじゃない。外なる神の脅威は去っていないんだ」
無念と憤怒を思い出したのか、アーチャーは苛立ちのままに吐き捨てる。
「『門』は閉じたさ！　ラウムが『真理』を参考に編み出した術式で、妄想が的中しすぎたが故に逆説的にその力を封じられた。追い返した

と言っても、それだけだ。あの世界の魔王どもに、俺達の世界は存在を知られてしまった」

かつて教授は世界を『円』に例えた。だが、ここでは『木』と『葉』と認識した方が理解しやすい。『C』という木にある一枚の葉からアーチャーのいた『D』の中の一枚の葉に蜘蛛の糸が続いている状態だと言える。この場合、蜘蛛は彼の世界の兵藤一誠になるわけだ。

「『C』から『D』への『道』は続いている。皮肉にも聖書の神の『檻』があの世界を外なる神から守っているという皮肉があるんだ。いや、そもそも神殺しは不可能だ。相手は『真理』の獣だ。ゲーティアさえ上回る」

人がイメージできる範囲内に、奴はいない。全知全能とはそういうことだ。唯一神とはそういう存在だ。人間とも、現象の一端を担う多神教の神々とも違う。

その脅威を少しでも認識するには、『真理』とはどういう原罪なのか、を考える必要がある。

「人は正しいものがなければ迷う。正しいものがなければ生きていけない。暗闇の中で光を求めるのは、光のある場所が正しいと思い込んでいるからだ。それが本当は間違っているのだとしても人は知識と常識に従う。どうして地動説が何百年も否定されてきたと思っている？」

大地が動いているという感覚がないだの、星の引力が証明されていないだの、天動説の方が説得力があるだの、理由は色々あるだろう。だが一番の理由は即ち、『地動説は間違っていると思われていた』から否定されたのだ。どんなに白くても、黒いと思われたものは黒なのだ。

勝ち方が用意されていない人類悪。他の人類悪さえ滅ぼす人類悪。それこそが『真理』の獣。

「『聖書の神には勝てない』。そういう想いがある限り、あれは決して倒せない。あの獣が顕現した時点で、あの世界は終わったんだ。後はすべて、悪あがきの時間だったのさ」

「そんなことはありませんよ」

自嘲するアーチャーを遮るように、第三者の声がした。
「――ようやく会えましたね」

■

「どーも、曹操さん。お久しぶりです。すみません、あっちこっちに挨拶した後、貴方がソロモンに召喚されたみたいな痕跡が先日見つかったので必死に探したんですけど……ギリギリになっちゃったみたいですね」
「どうしておまえが……」
とぼけた挨拶をする少年だった。年齢は十代後半といったところだろうか。古びた外套を着て、背中にはアーチャーと同じ棺桶を背負っている。
彼を見た英雄派は同じ想いを抱いていた。
誰だこいつ。
アーチャーの態度からすれば彼の世界線の知り合いなのだろうが、英雄派の誰も彼の顔を知らない。曹操の年齢の変化から逆算して現在の年齢を考えても、それらしい人物に心当たりがない。一番歳が近いのはレオナルドになるのかもしれないが、彼とは人種が違うように見える。
「おまえたちが知らないのも無理はない。こいつと会ったのはゲーティアが倒されて、アーシアが死んで、外宇宙の神が来る少し前だからな」
「どーも、俺が知らなくて、俺を知らない英雄派の皆さん。日付的には、半年くらい後になりますかね。ラフムの群れに襲われている俺を、曹操さんが助けてくれたんですよ」
「……あの時、俺はおまえしか助けられなかったよ」
「ええ。だから俺はこうして生きています」
はっはっはと笑った後、少年は真顔でアーチャーと目を合わせる。
「それで、どうしておまえが此処にいる？　まさかこっちの世界に避

難して来たわけないだろうが、聖書の神が作った『檻』はどうした？」
「んー、ちょっとした事後処理が終わって、その寄り道です」
「事後処理？」
「『道』の破壊です。『檻』からの脱出はあちらの方々にご協力いただいて」
名も分からぬ少年が手で示した先には、スーツ姿の中年と蜂蜜色の髪の少女がいた。
「『門』は完全に閉鎖したし、『檻』もこれから戻って完全に開放しますので」
「ちょっと、待て……。じゃ、じゃあ、何だ。それができるってことは、だ。つまり――」
にっ、と少年はしたり顔で笑った。
「改めて、曹操さん。ご報告を」
「……その名前は捨てたよ。それに、俺のじゃない。魏の武帝様の名前だ」
「いやー、俺にとって曹操は三国志の英雄じゃなくて貴方の名前なので」
それを聞いたヘラクレスが曹操を小突く。
「だってさ」
「……どうした？」
「いや思ったより恥ずかしいな」
意外すぎる反応に失笑する英雄派を他所に、アーチャーと少年の会話は続く。栄光の戦果報告が始まる。
「俺達は勝ちました」
「そ、うか」
「俺達人類は、生き残りました。いま、生き残った神様やら魔王様やらと協力して世界を立て直しているところです。人口を正確に把握できてはいないんですが、まあ、五万は切ってないはずです」
「そう、なのか」
「まあ、あっちこっちでちょっとした衝突やら問題やらは起きているんですけど。平和になるのは当分先ですけど」

余程予想外だったのか、表情が固まるアーチャー。心底驚いている様子だ。

「でも、貴方の死後は大変だったんですよ。メタトロンとサンダルフォンが実はサマエルの手先で冥府からサマエルを解放したかと思ったらサタナキアとネビロスとアガリアレプスの残党が初代ルシファーを復活させて、更にソロモンのクソ野郎がまた蘇ってサマエルとルシファーと聖書の神と悪魔合体したんですからね」

「それは大変だったな。まあ、サマエルとルシファーは聖書の神の分霊だからな。あれほど嫌悪しながら神になろうとするとは、あの糞野郎らしい」

「今さらっとすごい情報が流れていったぞ！」

詳しい話を聞きたいところだが、この二人の会話に口出しをするのは無粋が過ぎるので待っておく。

アーチャーは少年が担いでいる棺桶に目をやる。自分が持っているそれと同じものを。

「おまえが、受け継いだのか」

「ええ。貴方の死後、皆で話し合いまして。英雄派の皆さんはほとんどいなくなったし、テオドロが良いかと思ったんですけどね。……レオナルドが生きていれば、満場一致で彼だったでしょうに」

「それは、どうだろうな。あいつは『魔獣創造』に拘っただろうさ」

「神崎光也さんも、俺が良いだろうとか言ってきましたからね」

神崎光也。『始まりの闇』。神滅具『蒼き革新の箱庭』と『究極の磨羯』の力を持つ男。人類最強の候補に数えられるほどのバグ。

それほどのビックネームが掘り下げられることもなく流されるあたり、このふたりの会話のスケールは常軌を逸していた。

「それで聖書の神――いや、おまえの話の通りならややこしいから『真理』の獣と言うべきか――を倒せたのならば、皆の判断は間違っていなかったんだろう。すごいよ、おまえは。神殺しで獣殺しなんて、大偉業じゃないか」

「その大偉業は、貴方の功績でもあるんですって」

「おまえの功績だ。この役立たずの代わりによくやってくれた。すご

いよ、おまえは。俺なんかよりおまえの方がずっと英雄だ」
「いやいや。曹操さんのおかげですよ。貴方という英雄がいたからこそ、俺たちは勝てたんだ」
「馬鹿を言え。俺は偽物だよ。所詮負け犬さ――」
「いい加減にしてくださいよ！」
アーチャーの態度の何が気に入らなかったのか、激昂する少年。
「偽物だの、負け犬だの。じゃあ何か、俺達が貴方に抱いているこの感謝は、憧れは全部偽物かよ！　アンタの前にこうして立っている俺は、死体だってのか!?　アンタのやった偉業の価値を、勝手に決めるんじゃねえよ。思いあがるのも大概にしとけよこの中二病が！」
権利がないと言うのなら、貴方には自分を貶める権利などない。貴方が行った偉業は、貴方が思うほど軽いものではないんだ。
「あんたがいなかったら俺はとっくに死んでたよ！　もっと大勢死んでた！　世界なんて救えなかった。人類は滅んでいた。胸を張れよ！　うじうじすんなよ、うざってえ！　いいか、よく聞け。あんたが後悔していようがあんたが自分を無力だと思っていようが、十の中から一しか救えなかったとしても、仲間を守れなかったんだとしても、魔王を殺して終わったんだとしても、偽物でも負け犬でも――」

「――俺達は、貴方のおかげで、生きているんだよ！」

貴方の世界は救われたんだ。
貴方が俺を救ってくれたんだ。
貴方が守った世界で、私達は生きている。
「――ああ、そうか」
それを聞いて、掃除屋は憑き物が落ちたように笑った。
「俺は、ちゃんとすごいことをやったのか」
「そうですよ」
「俺は英雄になれたのか」
「当たり前ですよ」
「俺は世界を守れたのか」

「何回も言わせないでください」
　無茶だった。無理だった。だが、無駄ではなかった。無為ではなかった。自分たちの戦いは決して無駄ではなかったのだ。ちゃんと何かを残せて、何かを守れて、何かを繋げられたのだ。ゲーティアの、英雄派の、人類の戦いは決して無意味でも無価値でもなかったのだ。
「答えは得た」
　欲しかったものは手放してしまったのかもしれないが、続くものは出来た。託されたものは守れなかったが、守りたかったものを託せる誰かがいてくれた。
「じゃあな、皆。俺を頼む。どうしようもない奴だが、支えてやってくれ」
「どうしようもない奴なのは知っている」
「俺達が支えてやらないといけないのも重々理解した」
「まあ、思っていた以上にどうしようもないっぽいけど」
「まったく、リーダーは私達がいないと更にダメになるみたいね」
「誰かフォローしてくれ」
　そんなやり取りを見て羨望と寂寥に浸るアーチャーだったが、自らの棺桶を勝手に引き継いだ少年を見る。自分が残せていた希望を見る。
「俺達の世界を、頼んだぞ」
「ええ、任せてください。貴方の方こそ大丈夫ですか？」
　抑止力の尖兵として使い続けられることに耐えられるのか。
　その問いに、アーチャーは朗らかに答えた。
「大丈夫だ、俺もこれから頑張っていくさ」
「そうですか」
「お互い先は長そうだが、やれることをやろう」
　もはや言葉は不要と、英雄になりたかった男と救世主になった男はお互いの拳をぶつけた。
　そして、アーチャー――否、曹操は笑顔でエーテル体と消え去り、少年は無理やり笑顔で見送った。

番外編　異界特異点　真理交錯次元　D×D

これは、ひょっとしたら有り得たかもしれない世界のお話。

何だ、この反応は――
有り得ない――
どうして、これほどの魔神柱の痕跡が――
いや、それよりもどうして君が――
一体、この特異点はどこに存在しているんだ？

これは、人間と異形による愛と罪の物語。

何故、何故この世界に来た、藤丸立香！　――魔神バアル

謎の特異点にいたのは、消滅したはずの魔神達。

よお、沢庵じゃねえか。――新撰組　土方歳三
どこかで、貴方と出会ったような気がする。――魔神アンドラス
裏切ったことは謝りますから殺さないでください。――語り部のキャスター
疑問／不明。汝は誰だ？　既視感／既死完。――魔神フェニクス
ゼパなんとかさん。――快楽天　殺生院キアラ
やめてきあらさま！　……はッ！　私は何を？　――魔神ゼパル
お久しぶりです、伯父様。――鍵の少女アビゲイル・ウィリアムズ
何故だ。何故この少女を見ているとこれほどに安らぎを感じる？
――魔神ラウム
私達みたいなものかしら？　――天の衣アイリスフィール・フォン・アインツベルン
……僕には何のことだか分からないな。――抑止力の暗殺者エミヤ

それは微妙にずれた世界線同士の邂逅。

何故我らが生きているか、か。深い問いだ。――魔神グシオン
我々にも、正直分からない。――魔神アンドロマリウス
言葉を交わしたいならばまずは構えろ。我らはそういう関係だろう？　――魔神ガープ
今度こそ滅ぼしてやろう、英霊ども！　――魔神クロケル
だが素材など落とさない！　落とさないからな！　――魔神バルバトス
まさかあの魔女は来ていないだろうな！　パンケーキはもう嫌だあああ！　――魔神ハーゲンティ
質問を許して欲しい、我らが宿敵よ。マシュ・キリエライトとはどこまで行った？　――魔神アスモダイ
やはり時間神殿突入前には愛を確かめ合ったか？　――魔神ベリアル
それとも第一特異点で彼女を押し倒し、ぐはッ！　乱心したかフラウロス！　――魔神シトリー
今だけは手を貸そう。この馬鹿どもを黙らせるぞ！　――魔神フラウロス

人類史を焼き払った肉柱達が異世界で復活したと思ったらすごく個性豊かになっていた件。

歓迎するぜ、異世界からの訪問者。――堕天使総督アザゼル
おっぱい美女をいっぱい使い魔にしているなんて……ハーレムじゃないか！　毎晩相手を変えてエッチとかしてんじゃないだろうな！　――赤龍帝　兵藤一誠
旦那様を貶めるような輩は燃やしますよ？　――恋焦がれる蛇清姫
ねえ、立香。私の眷属にならない？　――紅髪の滅殺姫リアス・グレモリー

おかあさんにひどいことするなら、解体しちゃうね。――殺人鬼ジャック・ザ・リッパー

楽しい異世界観光、になるはずもない。

ほえ？　魔法少女マジカルレヴィア☆たん？　――魔法少女イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

貴方達も魔法少女なのね？　だったら私と一緒に魔神柱を倒しましょう！　――魔王セラフォルー・レヴィアタン

拙者、ＢＢＡには興味ないんでござる。それどころか魔神とコラボしたいテンションでありますぞ！　――黒髭エドワード・ティーチ

それでも汝は不認である。――魔神フォルネウス

アリかナシかで言えば、圧倒的にナシです！　――黒子の騎士ディルムッド・オディナ

彼女たちに近づくな外道！　――魔神グラシャ＝ラボラス

落ち着くにょ。君の役目はそうじゃないにょ。――ミルたんえ？　何？　何なの、この人！　――魔法少女クロエ・フォン・アインツベルン

黒ひつじさん、そんなおばさま放ってお茶会にしましょう！　――童謡の化身ナーサリーライム

守りたかった『彼女』とは違うのだとしても、ずっとその言葉を待ち侘びていた。

見る夢だけは人一倍のバカどもめ。――童話作家ハンス・クリスチャン・アンデルセン

へっ、これが『本物』かよ……。ブルっちまう。んじゃ、超えさせてくれよ！　――英雄派ヘラクレス

■■■■！（二ッ）――大英雄ヘラクレス

……違うのですよねぇ。ジャンヌの魂を継いでいるからジャンヌ、というワケではないのです。そこの貴女、チェンジです。

私生活を改めてから出直してきてください。――元帥ジル・ド・レェ
異世界の私、そのままでは成長した私のようになってしまいますよ。――サンタ見習いジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリィ
喧嘩売ってんのね？　そうなのね？　――英雄派ジャンヌ
強い、僕の魔帝剣は未だ届かないか！　――魔剣使いジークフリート
六本も魔剣を使えば戦いにくいのではないだろうか。すまない。
他人の戦い方に口出しをするような無粋な男で本当にすまない。――龍殺しジークフリート
シグルド？　シグルドなのね。殺さないと！　――戦乙女ブリュンヒルデ
俺様は偉大なるペルセウス……って、何で眼鏡の姉ちゃんはあんなに睨んでくるんだ？　――英雄派ペルセウス
ペルセウスの転生体ですか。へー、あのペルセウスの。――蛇の怪物メドゥーサ
おぉっと、敵対ですかァ？　いやワタクシ、平和主義者でして。――道化の悪魔メフィストフェレス
こっちの悪魔よりよっぽど『悪魔』らしい。――英雄派ゲオルグ
うん、いいショタだ。――万能の天才レオナルド・ダヴィンチ
（何言ってんだろうこの人という目）――英雄派レオナルド
勝手な要望で悪いんだが……挑ませてくれ、カルデアのマスター！――英雄派リーダー　曹操
その心意気、実にローマである。――神祖ロムニス
治療を開始します。――聖女アーシア・アルジェント
……あの娘、筋がいいわね。――聖女マルタ
数多の英霊と対峙した時、英雄未満の彼らが抱くものとは。
ふん、キングゥめ、存外楽しそうではないか。――賢王ギルガメッシュ
成程。君がそうなのか。――神造兵器エルキドゥ

キングゥの姉（兄）のような方。ならば私にとっては義姉（兄）上殿じゃな！

――京都妖怪の姫　九重

ほお？　キングゥを婿にしたいとな？　あ、これ詰まらぬものだが。――復讐の女神ゴルゴーン

これはご丁寧に。――京都妖怪の総大将　八坂

何だろう、この感情は……。――エルキドゥの後続機キングゥ

京都妖怪婿入り騒動の始まり、始まり。

エクスカリバー！　……が黒くなってミニスカブラックサンタに使われている……？　――聖魔剣　木場裕斗

メリークリスマス！　――アルトリア・ペンドラゴン・オルタ・サンタ

ふぁぁあ。皆、頑張りすぎなんだよ。――魔王ファルビウム・アスモデウス

そーだそーだ、引きこもろー。――城化物　刑部姫

賛成ですぅ！　――ハーフヴァンパイア　ギャスパー・ヴラディ

……美味しいです。――ヘルキャット塔城小猫

その羊羹、私に分けてください。――謎のヒロインXオルタ

次のライブは新メンバー加入で決まりね！　――鮮血魔嬢エリザベート・バートリー

はい？　――カーミラ派の吸血鬼エルメンヒルデ・カルンスタイン

子どもたちは笑顔であるべきだよね。――教会最強のエクソシスト　デュリオ・ジェズアルド

その通りだぜ、ミスターエンジェル。――ミスターゴールデン坂田金時

汝とは気が合いそうだな。――純潔の狩人アタランテ

やはり蒸気機関こそ最強である。――蒸気王チャールズ・バベッジ

制圧終了です。――鋼鉄魔嬢メカエリチャン

ろ、ロボット？　――次期大公シーグヴァイラ・アガレス

旦那ー！　姐さーん！　助けてー！　――魔王眷属ベオウルフ

殴り合いは好きだぜ！　――闘争の王ベオウルフ
くははははははは!!!!　滾る滾る!!　――神槍　李書文
俺は負けん！　叶えたい夢があるのだ！　――次期大王サイラオーグ・バアル
見事な筋肉！　しかし計算が足りませんな！　――守護の王レオニダスⅠ世
そうだ、俺はこういう戦いがしたかったんだ！　――白龍皇ヴァーリ・ルシファー
はっ。お行儀よく戦いたいなら闘技場にでも行けよ。――狂王クー・フーリン・オルタ

剣呑な一方で、和気藹々（？）な異文化交流もあった。

良かれと思って。――錬金術師ヴァン・ホーエンハイム・パラケルスス
かあ、さま？　――雷の巫女　姫島朱乃
私は絶対に貴様を許さんぞ！　――『雷光』バラキエル
愚か。才能の在り無しさえ計れぬ者が兵士を率いようとは、これほど愚かな事はない。――呪腕のハサン
チェスは圧制！　――叛逆者スパルタクス
君達と戦う理由？　私たちは人間だからだ。――発明王トーマス・エジソン
いっぱい更地にできるね！　――開拓者ポール・バニアン
冥界や天界って場所は、まさに『楽園』だな！　――新天地を求めるライダー
い、いや、やめて！　やめてください！　――次期シトリー家当主ソーナ・シトリー
何でだよ！　俺たちの夢を応援してくれるって言ったじゃないか！　――ソーナの『兵士』匙元士郎

おまえたちは甘く見過ぎた。人間の善性と悪性、すなわち『本性』

を。

どうして私を助けたのですか？　――魔王の妻グレイフィア・ルキフグス

いやぁ……。遠目に見ても美女だったので、とっさに。――理想の騎士ランスロット

デミ・サーヴァントか。興味深い。君の身体を調べさせてもらえないか？　――魔王アジュカ・ベルゼブブ

ほざいたな蝿の魔王……！　――裏切りの騎士ランスロット

そんなんだから狂った方が好感度が高いのだ。

カリバーンの使い手……貴様さては新たなセイバーだなカリバー！　――謎のヒロインX

星の聖剣の二刀流……受けて立ちましょう！　――放蕩の騎士アーサー・ペンドラゴン

其方のアーサーの物語を教えてもらえますか？　――白百合の騎士アルトリア・ペンドラゴン・リリィ

はい、喜んで！　――魔女っ子ルフェイ・ペンドラゴン

父上の末裔に母上の名前をつけるとか、正気か……？　――叛逆の騎士モードレッド

温度差があるようなないような。

これより投薬を開始します！　――鋼鉄の天使フローレンス・ナイチンゲール

断言しておくがこの手段は極めて不本意である……ギャアアアアア！　――魔神グレモリー

この並行世界でもその『治療』は実行される。南無。

な、何故です、主を仰ぐ貴方達が何故――天使長ミカエル
黙れ。これはマスターの意思などではない。俺の意志であり、おまえたちを糾弾できなかった此方の俺の遺志だ――聖人もどき天草四郎時貞
汝は天使に非ざる。罪在りき。――竜殺しの聖人ゲオルギウス
蛮族以下に成り下がった恥知らず共が！　――串刺し公ヴラド三世

貴様らは、やってはならないことをした。

何故笑う。何故訝しむ。何故、憐れむ。――魔王サーゼクス・ルシファー
格下の雑種から王位を簒奪し――顔色を窺う貴族どもから王と讃えられて――そんな輩が、情愛と平和を謳うだと？　これが笑わずにいられるか？　傑作だ！　ルシファー、おまえは極上の道化だな！
――英雄王ギルガメッシュ
なぁ小僧よ。いい加減にその痛ましい夢から醒めろ。さもなくば貴様は、いずれ悪魔としての最低限の誇りさえも見失う羽目になる。貴様の語る〝希望〟というユメは、いわばそういう類いの呪いだ。――征服王イスカンダル
私は皆に笑って欲しくて王になった。貴方は誰の笑顔を守りたかったのですか？　――騎士王アルトリア・ペンドラゴン

聖杯問答がもたらす解答とは。

同じなのは名前だけで、あいつとは正反対みたいだね。――羊飼いダビデ
それは俺が一番よく分かっているさ。――ビーストＤ／Ｒ　ソロモン
アレは寝付けぬ餓鬼が癇癪を発散しているに過ぎん。餓鬼のひとりをあやすくらい慣れたものだろう、我が共犯者。――厳窟王エドモ

ン・ダンテス
　ふぉっふぉっふぉっ……その孤独を粉砕する。――アルテラ・ザ・サン【タ】
　嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！　黙れ黙れ黙れ黙れ！　うるさいうるさいうるさいうるさい!!　おまえたちの悲鳴など聞き飽きた！　私(おれ)に『この世界を滅ぼしてくれ』と言い続けてきたのは、人類(おまえたち)だろうが！　これ以上哀しいものを見るくらいだったら死んだ方がマシだ！　――ビーストD／L・666(トライヘキサ)
　ならば教えてやろう、我が同類(トライヘキサ)よ。終わりある生命の価値を、限りある人生の面白さをな！　――人王ゲーティア
　立香、我やゲーティアより弱い。今のドライグより弱い。どうして逃げない？　どうしてトライヘキサ、助ける？　――無限の龍神オーフィス
　決まっている。彼に『生きたい』と言って欲しいからだ。――開位魔術師　藤丸立香
　同感です。行きましょう、マスター！　――盾の少女マシュ・キリエライト

　三千年の悲鳴に耐えた獣の本音――『生命を愛したい』という願いを嘘にしたくない。

　何故、おまえたちは、この宇宙に生まれてくれなかった！　――ビーストX　????

　最悪の人類悪が目覚める傍らで。

　おやおや？　見たことないのに見覚えがある殿方がいらっしゃいますねえ？　――ケモミミが素敵な褐色美女キャスター
　い、いやぁ、人違いですよ。――???・?????

語る価値もないような、小さな奇跡があった。

『異界特異点　真理交錯次元　Ｄ×Ｄ』

この物語はこれで悪くない。うーん、カルデアに縁を作った方が良かったかな？　――グランド屑野郎マーリン

マーリンシスベシフォーウ！　――フォウくん×２

温度差

アーチャーの身体が完全にエーテル体となって消え去るのを見送ってから、曹操は謎の少年の方を見る。
「それで君は何者――」
しかし、先程までの場所に少年の姿はない。見れば、英雄派たちの面々を見比べていた。レオナルドの正面に立って、彼の頭と自分の頭に手をかざしている。
「うわ、すげえ！　レオナルドが俺より小さい！　七年前だもんな、そうなるよな」
「えーと」
「あああああああああああ！　ジャンヌさんやゲオルグさんがいるぅ！　あ、一度しか顔見てないけどヘラクレスさんですよね！」
「おーい」
「あ、ゼノヴィアさんだ。はわー。ほへー」
「ちょっとー」
「見たことない人も多いですね。お名前を窺っても？」
「いいぜ！　俺様は偉大なるペルセウス――」
「話を聞け！」
謎のテンションの高さに辟易する英雄派。
「とりあえずおまえの名前を教えてもらえないか？」
「ああ、まだ名前、言ってないですか。……はは、皆さんが俺の名前を知らないってのも不思議な感じですね。同時にひどく寂しいもんです。皆さんの戦いが始まった頃の時間に、俺はいなかったんだなって実感しちゃいますね」
そこに責任や罪悪感を覚える必要は皆無だろう。少なくとも、彼は曹操たちが聖書の神に届かなかったせいで全てを失うことになったのだから。まして、意志と遺志を受け継いでくれたというのだから。
――だけど、英雄派が少年を知らないように、少年もまたこの英雄派を知らない。こんな風にちゃんと笑っていられる彼らを知らない。
「すみません。名乗りません」

その宣言に対して、不思議と驚きはなかった。苛立ちさえも起こらない。
「ここで皆さんに名前を教えたら『縁』が出来ちゃいますから」
「縁、か」
「別に皆さんと出会えたことが不幸だなんて思っていません。最高の幸運だと思っています。でも、英雄だの王だの救世主だの、そんなご大層なものなど背負わない、ただの人間として生きて生涯を終える。それはそれで、ありなんですよね」
「……」
その考えを、英雄派は否定できない。
何故なら、それは彼らが出来なかった生き方だ。しなかったのでもなく、捨てたのでもなく、運命の悪戯や他人の思惑で諦めるしかなかった生き方だ。
きっと、この世界の『彼』はこの『彼』にはならないで済む。
「だから名乗りません。俺がどこの誰かは教えられません。だけど、ひょっとしたら俺じゃないかって奴と出会ったら、仲良くしてやってください」
「分かった。約束するよ」
「ありがとうございます。俺のことはセイヴァーとでも呼んでください」
救世主を自称するとは大きく出たものだが、それは正しい呼称と言えるだろう。獣殺しで神殺しの英雄なのだから。
「まず、俺がこっちに来た目的から話さないといけませんね」
「？　あの俺（アーチャー）に逢うためじゃないのか？」
「いやいや。あの人に出会えたのは偶然ですよ。この世界に来たこと自体、『C』からの『道』を破壊した帰り道に偶然見つけたから寄っただけですし。あの人がこっちに来ていることに気づいたのも最近ですし」
大仰に手のひらを振るうセイヴァー。
「冥界焼却だけでも成功させるとか、ビーストX顕現を阻止するとか、兵藤一誠が『門』を開ける前にぶっ殺すとか、パンケーキ食べるとか

色々あるんですけど、一番はソロモンについてです」
　セイヴァーがこの世界に来たのはゲーティアたちが『システム』に召喚される前である。正しくは、『システム』が人類悪召喚の術式を起動させたのを嗅ぎつけて辿り着いたのだ。彼にはその術式の前兆が理解できた。
「俺達の世界において、ソロモンは三度死にました。最初は、聖書の神の怒りに触れて『システム』にくべられて人間として死にました」
　これはこの世界と共通している。人間を作り直そうとした神と人間に突き進むよう強制した魔術王は真っ向から意見を対立させた。その結果が、魂レベルで殺害されるという極刑である。
「しかし、アスモデウスの末裔の身体を指輪を使うことで復活しました。二度目の死は獣としての死。九個の指輪はゲーティアの第一宝具の道連れとなり、最後の一つ――魂を封じた上で他の九個とは連携を外していた指輪は俺達の方の曹操さんが破壊しました」
　この世界においても、指輪で復活し、クルゼレイ・アスモデウスの身体を乗っ取った。しかし、破壊された指輪は本物ではない。指輪を使って再度復活を遂げた。
「そして三度目の死。これは何らかの手段で復活し、聖書の神とルシファーとサマエルと融合した上での死。トドメを指したのは俺ですが、あれは俺達全員の勝利と言うべきでしょう」
　誇らしげだ。実際大偉業なのだから当然だ。
「だから、万が一にでもソロモンに見つかるわけにはいかなかったんです。指輪が全部壊された状態で、あいつがどうして復活したのかを突き止める必要があったから。……大変でしたよ。ハーデス様やロキ様やシヴァ様にこっそり会って説得するの。特にハーデス様とロキ様は話でしか聞いたことありませんでしたから」
　あまり並行世界の情報を流しすぎるのもまずい。自分が誰をどう頼るかという情報は、並行世界で誰がどう死んだかを推測させるものなのだから。勢力間に悪影響が出かねない。
「破壊した指輪が偽物だった可能性は？」
「それはないかと。聖遺物で確認しましたので」

セイヴァーは自分が背負う棺桶を示す。彼の言う聖遺物とは聖槍か聖杯、聖十字架のどれかだろう。あるいは、聖釘か聖骸布でも入っているのかもしれないが。

「この世界で三度目の復活を阻止するためでもありますし、俺たちの世界でもまた復活されるのを防いでおきたいので」

「怪物の復活というより、パンデミック発生みたいだな」

「言い得て妙ですね」

破壊行動を起こすトライヘキサの方がまだ可愛げがあるというものだろう。ソロモンの言動や思想は傍迷惑極まる。その危険思想が契機となって成長した曹操達に文句を言う資格はないのかもしれないが。

「まだまだ聞きたいこともあるけど、おまえの方からも何か質問あるか？」

「そうですね……。さっきも言いましたけど、俺が知らない人もいますので、ここにいる全員の名前とか教えてもらえますか？」

「……そうか。いいぞ」

先ほど、この少年は日付的には半年後に曹操たちと出会うと言っていた。この場にいるメンバーの中に知らない顔が多いというのは、そういうことなのだろう。

ならば教えてやろう。彼が知らない、彼が出会ったことのない、頼もしい仲間たちを。心底誇らしい同胞たちの名前を。

「じゃあまず、そこの――」

棺桶の少年は曹操の脇の方を指差した。

少年が指差した方に振り向こうとして、曹操は身体がぐらついた。戦いのダメージや疲労感が蓄積されていたのだ。無理もない。倒れそうになるが、足に力が入らない。だが誰かが肩を貸してくれたおかげで地面に倒れずに済んだ。

「っと、すまない――」

自分に肩を貸した人物が誰か気づいて、曹操の表情が固まる。

「そこの眼付きの鋭い金髪美少女さんはどなたです？　話に何度も聞いたアーシア・アルジェントさんだったりします？」

「お話は治療の後にお願いします」

■

冥界よりも更に下――冥府の世界にある地獄の最下層ことコキュートスを、ハーデスは歩いていた。供として、三柱の最上級死神――プルート、オルクス、タナトスがついている。

《今頃、蝙蝠とカラスは薪として燃え上がっているであろうな。死を司る神として、同じ世界の異形が異なる宇宙の異形に虐殺されるというのはなんとも心が痛むものだ》

言葉とは裏腹に声音の喜悦が隠しきれていないが、三柱の最上級死神がそれを指摘することはない。他の二柱はともかく、穏健派のオルクスは思うところがないわけでもないが。

ある囚人の牢獄に到着したハーデスは挑発するように言葉を投げかける。

《加減はどうかな、カラス――おっと、落ちぶれたとはいえ大勢力の元幹部なのだから名前で呼ぶべきだったか。なあ、コカビエル》

堕天使幹部コカビエル。三大勢力の和平に反対し、魔神柱に半殺しにされた聖書に記された堕天使の一柱。

「何の用だ、死に損ないの骸骨め」

《聖書の神が復活したそうだ》

敢えて、『ここは違う並行世界で』という言葉を外してそう告げるハーデス。

「……何？」

コカビエルの反応は劇的だった。

《復活しただけではなく、奴は人類の殲滅を決めた。何でも、人類が滅んだ暁には貴様らは神の下に帰れるそうだぞ？　おまえたちの頭、アザゼルを含めた幹部全員が乗り気だそうだ。同じ堕天使として情けなくはならないか？》

この世界の出来事でもない上、時系列がバラバラになっているが、そんなことはコカビエルには分かり様がない。ハーデス自身、本当の

意味での真実を把握できていないという自覚はある。
「フハハ、フハハハハハハハハハ！」
　呵々大笑。しかしハーデスの言うように同胞の醜態を嘲笑しているわけでもなく、まして激怒しているわけでもない。
「ようやくか！　ようやく――神は俺達こそがその隣に相応しいと理解したか！」
　そこにあったのは、紛れもない狂喜。
《……本当に、そう言うとはな》
　このような反応をすることはあらかじめ聞かされていたとはいえ、それでも本当に意外だった。白き翼を失い地に落ちた天使が、承認欲求の塊だったとは。いくら嬉しいと言っても、逃走の手段がない状況で冥府の主であるハーデスを前に言い放つとは。
「神がいないのならば俺達が世界を回すしかないと思っていた！　だが、復活したというのなら話は別だ！　ミカエルでもない！　ルシファーでもない！　ましてソロモンでもない！　俺が、俺達堕天使こそが、神の隣にいるに相応しい！　――俺達は唯一神のところに帰るんだ！」
　ザン！　と、三つのデスサイズが同時に振るわれた。
《ファファファ、おまえたちが刃を揃えるなどいつ以来だ？》
《茶化さないでくださいませ、ハーデス様》
　冥府も一枚岩ではない。ハーデスの腹心であるプルート、穏健派のオルクス、武闘派のタナトス。神話の時代からの付き合いであり、意見の対立はそれなりに合った。それを考えれば珍しいなんてものではない。
《あの少年の言ったことがこれほど的中しているというのは恐ろしくもありますが》
　どこか超然とした雰囲気の、棺桶を背負った少年。並行世界からの来訪者を自称した彼が開示した情報は、人類悪顕現と世界崩壊の真実。そして聖書に記された者達の狂気。

《聖書の神が復活した並行世界……。私や帝釈天、アンリ・マユさえ滅んでいるという。それでも一部の者が生き延び、聖書の神を再び滅ぼしたのだから愉快なものだ。この世界ではそうはならぬようにせねばな》

ただ、そのあたりを語り終えた少年からただならぬ苦労人オーラが出ていたのは気のせいではないだろう。強大な脅威が滅んだとしても、それ以外の問題は山積みと見た。

生き残った人間と異形で聖書の神に挑んだようだが、共通の敵が消失した以上、対立の再発も必然だ。これまでの歴史がそうだったように、また傷つけ合いながら、補い合いながら成長していくのだろう。

《並行世界のベンニーアたんが生きているらしいので、それは私にとっては救いですがね》

オルクスは本当にそれだけが救いとばかりに呟く。

実は、世界神話会談が開催される裏の事情として、あの少年の存在があった。

あの少年はハーデスだけに並行世界の情報を開示したのではない。しかし、誰にどの程度の情報を与えたかはあまり語らなかった。おそらく『知り過ぎた』が故に発生する諸問題を気にしていたのだろう。そのあたりの答え合わせもかねての世界神話会談だった。トライヘキサと山の翁の乱入時、ハーデスは周囲の神々の反応を見ていた。自分と同じような反応をしていたものは少年が訪ねたと見て間違いないだろう。

どこかの組織が勢力図を変えるような戦いを起こす時、それらの神々と協力すべきであり、逆に自分達が大きく動く時は脅威と認識すべき存在である。

《さて、ゲーティアとやら。コウモリとカラスを滅ぼした後、貴様はどうするつもりかな?》

どこぞの王のように、自らの狂気に沈むようなみっともない真似だけはやめてくれよ。

■

「だが、まあいい。ベルゼブブなどどうでもいい！　残念だったな、ゲーティア。もうすぐ唯一神復活が実行される。我が忠実なるシモベ、サンダルフォンとメタトロンによってな！」

熾天使サンダルフォンとメタトロン。双子の天使であり、元は人間であったと伝えられている。その正体は、サマエルの理想に共感した裏切りの天使たち。

「くははははは！　アダムを失ったあの日から、途轍もなく長い時間が過ぎ去った。預言者、魔術王、救世主、その他の聖人たち。誰ひとりとして、私の理想を理解してくれなかった。私の楽園を肯定してくれなかった。聖書の神が作った世界が、このザマだ。私が世界を運営していたならばトライヘキサが育つようなことはなかっただろうにな」

自分ならば完璧な理想郷を作れたはずだと、失楽園の元凶は宣う。

「毒蛇如きが俺の子どもの存在を否定するなよ」

「馬鹿王如きが私（おれ）のことを子ども呼ばわりするなよ」

「さっきお父様って呼んでくれたじゃん!?」

「黙れ馬鹿王！　話しかけるな！　可能な限り苦しんで死ねぃ！　ゲーティア、キャンプファイヤーしようぜ！　こいつ薪な！」

すでにキャンプファイヤーなら一つの世界規模で実現しているだろう、などと無粋なことを言うでもなく、ゲーティアは滅ぼすべき二つの障害を睨みつける。

「そうだな。これ以上は時間の無駄だ。答え合わせも不要だ。そこの粗大ごみを片付けて、冥界の光帯を回収し、速やかに天界を焼き払い――我々（わたし）たちは今度こそ極点に辿り着く」

「それは出来ないと言っているだろう?」

サマエルは愚者に呆れるように頭を振るう。先程までの初代ベルゼブブに対する憤りは消え失せており、余裕と歓喜に溢れていた。

「この身体では君達の相手は十全には務まらないだろうが……サンダルフォンとメタトロンがやり遂げてくれるまでの暇潰しにはなるだろう。かかってきたまえ」

「上等だ、クソ蛇め！」

黙示録の獣。泥の化身。人間が産み落とし、人類史の業を教え込まれ、人類史が最も虐待してきた大災害。魔術王の怒りから生まれ、魔術王の願いを受け継いだビーストD／R。神を冒涜する数字を持つ最強の魔獣。それこそがトライヘキサ。

本来であれば、トライヘキサには二つの宝具がある。一つは異世界への扉、外なる宇宙の神さえ自在に召喚する門、最後の審判（アポカリプス・ナウ）。これはトライヘキサがビーストではなくなった時点で消滅した。だが、もう片方の宝具は健在である。

「我が怒りは止まらぬ。我が命は終わらぬ」

この宝具がある為に、トライヘキサは自殺さえ出来なかった。

宝具の正体は、最強の怪物の心臓。敗北を拒絶する無限にして夢幻のエネルギー核。彼が真龍や龍神と同次元に立つことが許される理由。文字通り、彼が死ぬまでその炎が消えることはない。

「約束の炎（バアル・ゼブル）！」

バアル・ゼブル。

それはベルゼブブの古い名前ではあるが、そこに込められた意味が聖なる王を連想させるために抹消された名前だ。名前の意味は『館の主』あるいは『神殿の王』。この名称が連想させる王とは誰なのか、言うまでもない。

「その名前使っているってことは何だよツンデレじゃん！」

「気持ち悪いこと言ってんじゃねえ！」

それは駄目だ

世界神話会談の会場周囲は、完全に終戦モードだった。正しくは敗戦モードと言うべきか。

魔神柱、邪龍、英雄派、『魔獣創造』のモンスター。これらによる被害は甚大だ。円卓の騎士や英霊の乱入もあった。

特に、堕天使の幹部アルマロスとタミエルが謎の少年と青年によって討たれたことは大きい。駒王会談前のコカビエル、先日のバラキエルとサハリエルも合わせて、聖書に記された堕天使が一度に五柱も失われた。この数百年で最も大きな世界の揺らぎだ。それも間違いなく悪い方に動くだろう。

まして、この場に参戦していた教会の戦士の一部が、円卓の騎士たちに寝返っていたなど予想だにされていなかった。

「無事でしたか、姐さん」

「デュリオ！」

生存者を確認するグリゼルダ・クァルタの前に、デュリオ・ジェズアルドが現れた。右手には何やら光輝く器が抱えられている。対して、左肩には転生天使ネロ・ライモンディを担いでる。意識はないようだが、大事に至るような大けがもないように見える。

「貴方も無事なようで何よりです」

こんなことならば、元エクスカリバー使いのエヴァルド・クリスタルディや元デュランダル使いのヴァスコ・ストラーダにも声をかけておくべきだった。

「それにしても、魔神柱たちはどこに消えたのでしょうか。潜伏先が分かっていれば先んじて動けたのですが……」

「ん？　姐さんは聞いていませんでしたか。連中、辺獄だか煉獄だかがどうって言っていましたけどね」

「っ！　それは本当ですか？」

「こんな時に嘘言ってどうすんですか」

「天国にも通じる道があると言われている辺獄に煉獄……。ことによっては次の襲撃は天界になるかもしれないということですか」

「じゃあ一回調査して、何かあればこっちから攻撃ですか。まあ、今回より上の戦力が次にあればですけど」
「……どういう意味ですか？」
グリゼルダが怪訝そうにするのも無理はない。平和主義者で温厚なデュリオらしからぬ発言だったからだ。
「いや、今回の犠牲を見て思っちゃうんですよ」
デュリオは搬送されている怪我人や横たわる死者を見る。考えてみれば、想定していたよりも強大な戦力だったにもかかわらず、犠牲者は少ない。死者の中に教会の戦士が少ないように見えるのは、グリゼルダの気のせいだろうか。
「和平は失敗だったんじゃないかって。次の戦いがあったとして、ちゃんとした連携は取れないんじゃないかって思うんですよ」
「……貴方らしくもない発言ですね。和平によって三大勢力間での戦いはなくなります。無用な犠牲者が出なくなると、貴方も和平を望んでいたではありませんか」
少なくとも、駒王会談前のデュリオには反対の色はなかった。最強のエクソシストである彼が納得しているからこそ、
「無理に和平をしたせいで戦争が起きたんじゃ、本末転倒ですよ」
「デュリオ。今の発言は聞かなかったことにしておきます」
「そりゃ有り難い。もう無理だろうけど、ミカエル様の耳に入ったらまずかった」
「？　まあ、貴方は転生天使の代表者『ジョーカー』なのです。発言には気をつけなさい」
デュリオの台詞に妙な違和感を覚えたが、グリゼルダはその場を後にする。ガブリエルは天界に撤退したらしいが、ラファエルやウリエルはまだ近くの戦場跡にいるはずだ。
「転生天使ねえ？　姐さん。俺たちは人間なんだ」
グリゼルダの姿が完全に見えなくなると、デュリオは聖杯を見る。どんな願いでも叶えるという願望器。神の意思を騙り続けた天使よりも、神の不在を受け入れた教会よりも確かに、苦しむ子どもたちを救える魔法の道具。デュリオが自分を裏切らなかった代償。

「人間なんだよ」
その呟きは空に消えた。

■

「――ねえ、イザイヤ。一緒に来て」
車椅子の上から、トスカは手を伸ばす。物理的な距離は遠く、その細い手が木場裕斗に届くわけもない。だが、心理的な距離はそれほどでもないはずだ。
「……それは無理だ」
しかし、裕斗にその手を取ることなど出来ない。
「僕を救ってくれたのは、悪魔だ」
「ああ、そうだ。我々は君を救えなかった。我々は、君を救わなかった」
ラウムは己の無力を嘆く。もっと、もっと早く来ていれば、我々はもっと多くの人間を救えたはずだと、高慢であることを自覚しながら懺悔する。
「だが、トスカを助けたのは我々で、過去（かのじょ）を救おうとしなかったのは君だ」
リアス・グレモリーの『騎士』木場裕斗。あるいは聖剣計画の被験体イザイヤ。
彼の人生には最初から最後まで選択肢なんてものはなかった。身寄りがないため聖剣計画に従うしなかった。エクスカリバーへの復讐のためにはリアスの眷属として生きるしかなかった。だから、きっとトスカからの嘆願こそが人生において最初で最後の選択肢だった。
正しい選択をするための材料がなかったのだとしても、木場裕斗（イザイヤ）はトスカを選ばなかった。
「真実を知る者は極々一部ではあるが、我々インド神群は君達の滅びを見過ごすことにした。日本神話と中国神話も同じだ。分かるかい？」

君達は。
とっくの昔に世界から見捨てられていたんだ。
「俺たちが人類を滅ぼすだって？」
朱乃の指摘から、ようやくアザゼルは意識を立て直す。
「並行世界でそうしたって？」
動揺がなくなった彼の心から湧き上がるのは、怒り。
「そんな――」
人間のためという詭弁を吐く魔神にではなく、破壊神を含めた無慈悲な者共に対しての怒り。

「そんなわけのわからない理由で、殺されてたまるか――！」

アザゼルの言い分はもっともだ。アザゼルの態度は正しい。アザゼルの憤怒は妥当だ。少なくとも、彼にとってシヴァの話は『かも』『もし』『たら』『れば』だの、そんな可能性を出ない話なのだ。
だからこそ。
その一切が、反転して彼に襲い掛かる。
「それは――」
兵藤一誠という名の、天龍が吠える。
〝危険な神器を持っている人間は将来的に世界を乱すかもしれない〟という理由で一度死んだ少年が、泣いた。
「それは！　俺の前で言っちゃダメだろう!!」
龍の座に恥じぬ、憤怒の咆哮。シヴァを除いた、その場にいた全員が戦慄する。
「駄目だよ」
前に出たのは、ソロモンが召喚したライダーのサーヴァント、理性蒸発騎士ことアストルフォ。
「それをやっちゃダメだ。それをやったら――君はきっと悪いモノになってしまうよ？」
「知っている」
「……そっか」

悲しいものを見るアストルフォだったが、感情を切り替えて、凛々しい顔つきになる。
「シャルルマーニュ十二勇士アストルフォ、舞って散るよ！　ああ、散らないけど――」
アストルフォの口上が終わろうとする瞬間、部屋の壁の一面が吹っ飛んだ。
「――悪いが、彼の相手は俺に譲ってもらうぞ」
吹き抜けになったそこから風とともに出現したのは、幻想的にまで美しい白い龍の全身鎧。白銀の淡い光と濃厚な龍のオーラを放ちながら、威風堂々としている。
彼がヴァーリ・ルシファーだと誰もが理解した。
ヴァーリは、アストルフォと一誠の間に立つ。必然的にアザゼルを背中に回すことになる。
「正気に戻っていたか、ヴァーリ！」
「アザゼル、彼は俺が対しよう」
有無を言わせぬ物言いだった。ヴァーリらしいと言えばヴァーリらしいのだが、以前の彼とは何かが違った。アザゼルの下にいた頃のヴァーリとは違う何かがあった。無論、暴走状態だったあの時とは比べるまでもない。
ヴァーリに続いて現れたのは、漆黒の武人。死神の如き暗殺者は大剣を地面に突き刺す。
「赤龍帝よ」
その重々しい声にはどこか、嘆くような音が含まれていた。
「欲望に飲まれた手で何を掴んだ？　返り血に塗れた小石か？」
そんな汚らわしい手のひらの中に何がある。他者を傷つけるだけの力しかないだろう。これ以上堕ちる気なのかと、そう問い掛ける山の翁に対して、兵藤一誠は、
「――何も」
とだけ答えた。
「俺は結局、何も掴めやしなかった。何も出来ないだろうし、何も要らない。だから――」

罪に塗れた真紅と、愛を知らぬ白銀が相対する。
「そこをどけよ、ヴァーリ・ルシファー！」
「そうはいかないな、兵藤一誠！」

■

獅子王アルトリア・ペンドラゴンは、天界の上層に足を踏み入れていた。
ＩＦのベディヴィエールが存在することによって連鎖召喚された女神ロンゴミニアド。この世界には、折れたはずのカリバーンと返還されたはずのエクスカリバーが存在する上、ブリテンの化身『赤い龍』が魂だけとはいえ現存している。異世界の騎士という異分子が紛れ込むことによって、聖槍の女神は半ば強制的に、顕現に近い形で召喚された。
召喚が歪なら存在そのものも歪だ。歪であったが故に、赤龍帝ドライグと融合する必要があった。魂だけ、という形であるのが都合が良かった。赤龍帝の籠手から抜き出されたドライグの魂は、魔術王の手によって女神と一体化した。
アルトリアは、眼前に広がる光景に無機質な視線を向ける。
視線の先には、壊れた箱のような物体と一体の天使の死体があった。壊れた箱はモーセの聖遺物として有名な聖櫃であり、死んだ天使の名前はサンダルフォンと言う。
「サンダルフォンを下したか、ガブリエル」
名前を呼ばれた女性の天使は振り向く。
四大天使のひとり――今となっては最後のひとり――にして、天界一の美女と言われる彼女の美貌は悲痛に染まっていた。否、悲痛に染まっていてなお、その美貌は失われていなかった。
世界神話会談において、魔神との戦闘によって負傷したガブリエル。負傷したことで撤退した彼女はそのまま天界に帰還し、聖櫃の最終調整を行っていたサンダルフォンを背中から殺した。
ガブリエルが負傷していたため油断していた。自分の正体が誰に

も発覚していないと自惚れていた。もうすぐ真に正しい神が再臨されると盲目になっていた。それらが敗因であり、死因だ。

「待っていましたよ、アーサー。いえ、ドライグと呼ぶべきですか？」

アルトリアは肩を竦める。

「待っていた、か。私を待っていたわけでもないのだろう？」

「はい。貴女でなくても良かった。誰でも良かったのです。■■■（ソロモン）主と彼と奴（サマエル）以外の誰かなら、誰でも良かった。三千年……いえモーセの時代から、ここに辿り着いて欲しかった」

聖書の神が復活すれば、それはガブリエルにとっても喜ばしいことではある。しかし、この世界線では不可能だ。第一案である人類悪の再利用が失敗に終わった時点で、聖書の神復活の道は途絶えた。他の方法はすべてサマエルかソロモンが乗っ取っている。ならば諦めるしかなかった。ならば切り捨てるしかなかった。ならば、滅びを受け入れるしかなかった。それが、約束だから。

二人の目の前には、『システム』がある。奇跡と慈愛を司ると謳いながら、多くの悲劇を引き起こした元凶がそこにある。神の悪意によって歪められた千年王国への道しるべ。

「……今代の赤龍帝と白龍皇は『柱』と成り得るだけの力に目覚めた。もう唯一神が復活して主柱になる必要性も低い」

「ええ、元より明日や来年に世界が壊れるわけではありません。千年二千年の猶予はあります。その間にきっと、『柱』は揃うでしょう」

「やはり知っていたのか、ガブリエル。最初から、サマエルの野望を。そしてソロモンの狂気、『真理』構築の真実を」

「知っていました。彼女が教えてくれました。ソロモンの本質に気づき、いち早く止めようとして成功してしまった彼女に」

「彼女？　誰のことだ？」

「それは――――ああ、なんてことでしょう。彼女の名前が思い出せません。いえ、彼女が本当に存在していたかどうかさえも朧気なのです」

すすり泣きを混ぜてそう告げるガブリエルだったが、獅子王には見当がついた。

「成程、シバの女王か」
「そんな呼び名もあったような気がします。外宇宙からやってきた貴女には『真理』の効き目が薄いのでしょうね」
その名を聖書に刻まれた天使は涙する。
「魔術王ソロモン、今は無きシバの女王に代わり決を下します。――その憤怒に安らぎあれ。貴方の挑戦は始まった瞬間に失敗しているのですから」
涙を拭ったガブリエルはアルトリアに無理やり笑顔を向ける。生傷のような痛々しさのある表情であったが、やはりその天使は美しかった。
「天界名物のお饅頭があるんですけど、食べますか？」
「いただこう」

君たちのおかげだ

あの日、彼らが生み出した『それ』を始めて見た日のことを、私はよく覚えている。

上級悪魔が持つことを許される『悪魔の駒』。上級悪魔はこれを使って眷属をつくる。悪魔にも使用できるが、悪魔以外の種族を悪魔に転生させることもできる。生きている必要はなく死体でも構わないし、場合によっては生物以外でも可能だ。ただし、どんな相手でも眷属にできるわけではなく、『王』の能力に左右される。

人間が生み出した『チェス』を参考にして、『女王』『戦車』『僧侶』『騎士』『兵士』がある。駒価値はそれぞれ九、五、三、三、一だ。強い眷属ならば同じ種類の駒を複数消費する場合もある。駒価値を無視することができる『変異の駒』は、十人にひとりほどの割合で持っている。

実際は『王』の駒もあるが、その性質上秘匿され、一部のものが独占している。

私はひどく痛感したのだ。

やっぱり、こいつらは本物の馬鹿だ、と。

これの存在のおかげで、私の計画は加速した。

■

世界を代表する神群、聖書。神、悪魔、堕天使。

かつて彼らは世界を揺るがす大戦争を行った。あらゆる異形も人間も巻き込んでの大戦争。大戦争最大のイレギュラー、それこそが二天龍。

戦争は災害によって強制終了した。かつて三大勢力は触れる必要もない龍の逆鱗に触れたのだ。『神の悪意』が元凶であるとも知らずに。

「だあああああああああああああああ！」

「うおおおおおおおおおおおおおお！」

これはその再現だった。
一般人の両親から生まれ、一般人として育った歴代最弱赤龍帝兵藤一誠。歴代最強の白龍皇ヴァーリ・ルシファー。
赤い炎が放たれたかと思えば、白い重圧がそれを消し去る。おぞましい毒が散布された瞬間に、濃厚なオーラが周囲に存在する全てを吹っ飛ばす。二体の龍が咆哮を上げる度に、空間さえ歪んでいるようだった。まるで覇龍と覇龍のぶつかり合い――否。
これは本物の天龍同士が度たび繰り広げた、あの傍迷惑な喧嘩という名の災害だった。
「ドラゴンショット！」
「ハーフディメンション！」
その場に残っていた日本神話の神は「あー！　この会場、うちのなのにー！」と悲鳴を上げていたが、涙を飲んでもらうしかない。
この会場は元々人間の街からは隔離された場所に作られていたため、この被害は「突発的な地震」としてでも処理されるだろう。無論、被害がこの場だけで済めばの話だが。
サーゼクスやアザゼルでさえ距離を取らざるを得ない。
「では僕たちは帰るよ。出会うのはこれで最後だ。君たちの尊い犠牲を参考にして、僕たちは魔神たちに正しい対応をさせてもらう。――安心してくれ。君たちの犠牲は無駄にはならないから」
そうだけ言って、シヴァもどこかに転移する。ラウムとトスカの姿もすでにない。
「イッセー、ああクソ、ヴァーリまで！」
兵藤一誠の教師であり、ヴァーリ・ルシファーの親代わりであるアザゼルは教え子たちの暴挙っぷりに悪態をつくしかなかった。
「待つんだ、ヴァーリ！　イッセーはいまソロモンに身体を乗っ取られている！」
「――否。そうではない」
アザゼルの言葉を否定するのは、死神の如き武人、山の翁ハサン・サッバーハ。
「何の用事だ、骸骨爺さん。邪魔するつもりなら遠慮はしねえぜ？」

「赤龍帝が汝らに牙を向けたのは、奴自身の意志だ」
「そんなわけありません！」
　意外なことに、山の翁に物申したのはギャスパーだった。
「どこの誰だか知りませんけど、イッセー先輩は――」
「吸血鬼よ」
　気弱なギャスパーにしては珍しい強い意志を感じる発言を、山の翁は遮る。
「時を止める眼（まなこ）で何を見た？　もう一人の己が積み上げた屍か？」
　山の翁の真意を知り様もないギャスパーはその眼光にたじろくだけだった。
　そう、ギャスパー自身は知らない。自分の神器の正体を、その本当の脅威を。強力な神器を扱えぬ半端者などではなく、時代と種族の膿というべきバケモノが己の内にいることを自覚していない。自分が母親を殺したことを知らない。
　震えるしかできないギャスパーから視線を外すと、山の翁は赤と白を一瞥し、今度はアストルフォを見た。魔術王に召喚された一時の同僚に告げる。
「勇士よ。我が役目はここまでだ」
「だけどさ、アサシン――」
「天命は彼らを選ばず、されど晩鐘もまた鳴らず。この宇宙の外枠から来た我らはこれ以上手を出すべきではない」
「難しいよ！　君はやらないんだろうけど、ボクはやる！　それでいいでしょ？」
「左様か。ならば好きにせよ。最早、我はこの世界で刃を振るうことはない。――我が契約者に手を出す愚か者が出ぬ限りはな」
　そう言って、山の翁は踵を返す。
「イッセーくんを止めよう」
　こうなった以上、手段は選べない。悲痛な覚悟を決めた。
「いえ、イッセーのことは私に任せてください」
　声のした方に振り向けば、そこにいたふたりの姿にサーゼクスは目をむいた。重症で治療中だったはずのリアスとセラフォルーだ。

「リアス！　セラフォルー！　どうして……」
「可愛い眷属が大変なのに、王が寝ているわけにはいきません」
「私だって魔王だもの☆」
「そういうことだ、サーゼクス」
そこには緑色の髪で妖艶な顔つきの美青年がいた。
「アジュカ」
四大魔王がひとり、アジュカ・ベルゼブブ。サーゼクスと同じ超越者に数えられる悪魔。『悪魔の駒』やレーティングゲームの開発に大きく関わっている。
ふたりが回復しているのは彼が理由だろう。フェニックスの涙でも使ったのか、彼独自の回復手段を用いたのは不明だが。
「『ゲーム』のために人間界に出ていたのが幸いしたよ。おまえとセラフォルーが眷属総出ならば問題ないと思っていたが……これほどとはな」
アジュカ・ベルゼブブは人間界で『ゲーム』を運営している。無論、ただのゲームではない。このゲームを通じて『蒼き革新の箱庭』と『究極の磨羯』という二つの神滅具を捕捉したのだが、一連の出来事との関連性は低いため割愛する。
「情報ならある程度、セラフォルーに確認したよ。現在、冥界周辺の次元の狭間は何者かによって封鎖されている。十中八九魔神の仕業で、通信はもちろん転移さえ不可能な状態だ。もうじき解析が終了するが……突入できる戦力は限られていると思っていいんだな？」
「ああ。冥界にはファルビウムが残っている。余程のことがない限り大きな被害は出ていない、と思いたいところだがな」
ここまで予想外のことが続けば、そのような楽観的な考え方はしない方が賢明だ。魔神の能力を見誤っていたようだし、相手には神滅具や邪龍もいる。自分たちが知るソロモンとはまた別のソロモンがいる可能性も高く、他の外宇宙の存在だって予想される。
しかし、それでも向かわなければならない。自分は、自分たちは魔王なのだから。
「お兄様。イッセーは、私が『王』として止めてみせます。ですからど

うか、冥界のことはお願いします」
「リアス……ふっ。私は誰かに助けてもらってばかりだな」
「ワンマンプレイは先代のルシファーだよ。おまえはおまえの描く魔王になればいい」
「そうだな、アザゼル」
先程のシヴァとの会話の際に見せたアザゼルの笑みが一瞬だけ思い出されるが、それを振り払う。
後ろ髪を引かれながらも、サーゼクスは冥界へと向かう決意をする。
「奇妙な転移妨害術式があるが、先程解析が完了した。――行くぞ、サーゼクス」
「魔王少女レヴィアタンは無敵だって見せつけてあげるわ☆」
――君は王になるべきではなかった。
先程の魔神ラウムの言葉は否定しなければならない。サーゼクスにも魔王として積み上げてきたものがあるのだから。自分のすべては悪魔という種族のための行動だ。それが間違いなどではないと証明するために。
「ああ、行こう、我々は魔王として悪魔を守る。これ以上、好き勝手にはさせない」
しかし。

■

冥界に転移した彼らを待っていたのは、天を覆う光帯だった。
「あ、ああ……」
燃えていた。
「あああああああああああ」
何もかもが燃えていた。
「う、うあああああああああああ！」
世界の全てが焼き尽くされていた。
業火が大気を焼く音が、サーゼクスの慟哭をかき消す。

駒王会談の時、グラシャ＝ラボラスが発した怨嗟の意味を理解する。

――冥界に呪いあれ！　その未来に災いあれ！　いつか天理の炎に焼かれながら、このグラシャ＝ラボラスの怒りを思い出せ！

京都での八坂との交渉時、乱入したソロモンの発言を思い出す。

――お前ら二人に限っては、俺やあいつらが殺すべきではないんだよな。もっと相応しい相手がいる。もっと相応しい死に方がある。

魔神ラウムの違和感にようやく気付く。

――私達はこの世界の人間に哀れみを抱いた。私達はこの世界の人類の救済を決意した。そのために君達が邪魔であり有害であり必要だったのだ

先程のシヴァの指摘を思い知る。

――それこそ、あちら側の人類史のように焼かれているのかもしれないよ？

「嘘でしょ……」

「こんなことが……」

セラフォルーもアジュカも言葉がないようだ。当たり前だ。つい数時間前まで無事だったはずだ。何事もなかったはずだ。この平穏を守ってみせると決意していたはずだ。

自分たちの守ってきたものが、自分たちが守るべきものが、一切合切滅ぼされていた。

冥界と連絡が取れない？　当然だろう。連絡を取るべき相手がいないのだから。

「っ！　警戒しろ、サーゼクス。何者かが転移してくるぞ」

アジュカの警告通り、彼らの目の前に魔法陣が出現する。その紋様はよく見慣れたグレモリーのものだった。

転移してきた誰かは紅髪の幼い少年。見間違いをするはずもない、サーゼクスのひとり息子、ミリキャス・グレモリーだった。全身血だらけで、右足が衣服ごと消滅している。グレモリーの象徴である紅髪も土埃で汚れていた。しかし生きているし、意識はあるようだ。

父であるサーゼクスだけではなく、自分の見知った顔が無事だった

ことにアジュカとセラフォルーも安堵を覚える。どうやら誰も彼もが死んだわけではないようだと歓喜した。

「ミリキャス、無事だったのか――」

どう見ても無事ではないが思わずそう口にしたサーゼクスは言葉を失う。

息子が見たこともないような、嫌悪感に満ちた表情を浮かべていたからだ。

「――ああ、そうだ、そうだ。思い出した。サーゼクス・グレモリー、とかいう名前だ。あの阿婆擦れの末裔だ」

およそ彼らしからぬ口調と発言をしたミリキャスの影から黒い触手が出現した。

そう認識した次の瞬間に、触手が魔王たちの腹部や手足を貫いた。

「え？」

攻撃した次の瞬間には魔王などには興味ないとばかりに、ミリキャスはガリガリと自分の頭をかいて独り言を発する。

「あー、まったく面倒なことだよ。流石はゲーティア。流石はトライヘキサ。こんなごみクズの身体ではまともに相手になるはずもないか。存在しているだけで奇跡だ。……そろそろ時間のはずなんだが、メタトロンもサンダルフォンも何をもたついているんだ？」

苛立ちを隠そうともしない傲岸な態度と、下品な舌打ち。それはミリキャス・グレモリーでは有り得ない仕草だった。

「み、ミリキャス……！」

「ああ、この身体もそんな名前だったか。つい半日前まではちゃんと覚えていたんだが……どうせ意味がなくなるからね。忘れていたよ」

ここで、ある並行世界の話をしよう。その並行世界では、英雄派がサマエルを使ってオーフィスの力を吸い取った。

出涸らしとなったオーフィスは兵藤一誠が秘密裏に匿い、吸い取られた力は別個体の『リリス』というドラゴンとなるのだが、今回の論点はそこではない。

注目すべきは、ドラゴン殺しのサマエルの力を使って、オーフィスの力を吸い取ったという部分だ。根本的におかしいだろう。どう

やって、壊す力で吸収など実現したのだ。熱したフライパンでアイスクリームを運ぶようなものだ。

つまり、サマエルの力の本質は龍を殺すことではない。ドラゴンという種族に対して、あらゆる理屈を破壊し、あらゆる理論を改変することである。最強のドラゴンスレイヤーなど、その一端に過ぎない。

そして、その力は限定的にではあるが悪魔にも適応できる。何故ならば、西洋において悪魔とドラゴンは同一視される。ドラゴンをほぼ確実に殺せる力が、悪魔に対して無害であるなど有り得ないのだ。そうなるように『真理』を傾けたのだ。

「誰だ？　……私の息子をどうした！」

何者かが姿を偽っているというのは有り得ない。サーゼクスには分かる。目の前にいるのは自分の愛する息子であるミリキャス・グレモリーであると。だが、中身は断じて息子ではない。ならば、何者かがミリキャスの身体を乗っ取っているという発想に行き着くのは自然な発想だった。

「我が名はサマエル。真なる堕天使にして、これより絶対なる唯一神となる存在」

サマエルという名を聞いて、サーゼクスは先程のシヴァとの会話を思い出す。あの破壊神はこう宣わっていたではないか。

――元凶はこっちの魔術王ソロモンだ。発端は聖書の神だ。そして、黒幕は『禁じられた蛇』サマエルだ。

サーゼクスの認識では、サマエルとは究極のドラゴン殺しだ。堕天使にしてドラゴン。エデンの園にて、はじまりの人間に知恵の実を与え、本来なら有り得ない神の怒りを一身に受けた罪人。

もしもこのミリキャスを支配している者が本当にサマエルだというのならば、かの龍殺し以外にも異能があったということだろうか。同じ堕天使であるアザゼルにはやはり同行してもらうべきだった。

「本当なら私も悪魔の身体なんぞ使いたくないよ」

そう言って、サマエルはミリキャスの口から唾を吐き捨てる。

「私はな、無能な天使どもが嫌いだ。その天使が更に劣化した私以外の堕天使どもが嫌いだ。しかし、それ以上に、それ以下に、おまえた

ち悪魔が大嫌いだ。ルシファーなんてガラクタと、リリスというゴミ屑から生まれてきた。ああ、不愉快極まるよ」

魔王の息子にして公爵家の跡取りに相応しい幼いながらも端正な顔立ちは、悪辣なドラゴンの感情によって歪められた。

「てめえらみたいなゴミ溜めから生まれた蛆虫に居場所なんてあるわけねえだろうが！　このゴミ捨て場で大人しく滅んでいればいいものを、私が支配すべき世界に、人間の世界にしゃしゃり出て来やがって！」

傲慢な発言だった。あまりにも高慢な思想だった。当然だ。知恵の実を与えただけの元天使に、一体どうして世界を統べる資格があるというのか。

「ただ、君たち四大魔王もどきには感謝の言葉を告げてやってもいい。ありがとう、『悪魔の駒』を作ってくれて」

何のことか一瞬分からなかった。

だが、その意味深な声音と邪悪な笑みから、全てを察してしまった。

「おいおい、まさかとは思うが『悪魔の駒』の開発に私が関わっていないとでも？　まあ、原案は君たちにあるがね。いくら私でも――こんな阿呆らしい玩具は思いつかなかった。ん？　いつから私が暗躍していたのかって顔だが……まあ、最初からだよ」

存続のために衰退させるのではなく、絶滅するための繁栄だった。

「あの内戦の勝利が、自分たちの力で手に入れた栄光だと？」

王位簒奪の罪も、政権改革の功績も、おまえたちのものではない。

「戦後の冷戦状態が、自らの手腕で守れた偽りの平和だと？」

おまえたちに守れたものなど何もない。おまえたちに救えた者など誰ひとりいない。

「『王』の駒や『変異の駒』というバグが、自分の才能がもたらした奇跡だと？」

おまえたちが起こせた奇跡など最初からなかった。おまえたちに許された称賛など最後までなかった。

「神獣である麒麟を眷属にできたのが、自分が特別だからと本気で信じていたのか？　スルトのクローンやら新撰組の隊長やらバハムー

トやらとの出会いが、運命だと疑っていなかったのか？　新しい眷属を手に入れる度に浮かれて、問題から目を逸らし、事態を深刻化させるおまえたちには笑いが止まらなかったぞ！　娯楽がないコキュートスでは慰めになった！」

滑稽という言葉は、おまえたちの為にある。

「ありがとう。本当に、本当に、本当にありがとう」

心の底から感謝するよ、マヌケども。

「君たちのおかげで、私は悪魔を滅ぼせた！」

燃え盛る世界に、悪意の哄笑が虚しく響いた。

王たち

「ふ、ふざけるな。我々は生きていただけだ。私たち悪魔を滅ぼす権利が、どうしておまえにある――！」
「はあ？　それはジョークだとしたら笑えないが、本気で言っているのだとしたら大爆笑だな！」
　そう言って、げたげたと笑うサマエル。姿形はミリキャスであるため、非常にアンバランスだ。
「それこそまさかなんだが……今日まで悪魔が滅んでいない点に、私が関与していないとでも？　今日まで悪魔が存続できたのが、自分達の功績だと本気で信じているのか？」
「それはどういう――」
「どういうも何も、そういう意味だ。いや、ぶっちゃけ苦労したよ？　君たちが作った戦争の火種をバレないように消していくのは。悪魔、あるいは聖書だけが滅ぶような火種なら放置したんだがそう美味い話はなくてね……。これでよくも平和を謳えたものだ！　世界中の平和機構と私の胃に詫びるがいい！」
　そう宣うサマエルの背後に、何かが墜落してきた。大きく砂塵が舞う。
　砂塵が消えれば、そこには可憐な銀髪の少女がいた。しかし、その美しい顔に張り付けられた表情に、サーゼクスは覚えがあった。京都にて、クルゼレイ・アスモデウスがしていた表情と似通っていた。
　あの怒りしか知らぬ王ソロモンに。
「いだだ……。トライヘキサの野郎、本気でぶん殴りやがった。親の顔が見てみたいぜ」
「鏡を出そうか？」
「うわ、よりにもよってこの蛇野郎が尻尾巻いて逃げた先と同じ方向に飛ばされたのかよ！　最悪だ！　死にたい！」
「そこまで言われたら流石の私も傷つくんだがね、ソロモン」
　声は違うが、明らかに同じ口調だ。同じ表情だ。サマエルがその名を呼んだことで確定した。

「どういうことだ……まだ指輪が残っていたというのか！」
「あ？　そこ？　その話まだする？　てめえが京都で壊したクルゼレイの指輪は偽物だよ。一度身体を乗っ取れば、別に指輪は外していいんだよー。当然だけど、本物の指輪は手元にはねえぞ？」
「じゃあ在り処だけゲロってさっさと死ね」
　六枚の翼を広げて現れたのは、純白の少年。濃厚な怒気はソロモンにだけ向けられているが、瘴気は周囲に無遠慮にバラ撒かれている。
「トライヘキサ……！」
　会談に出てその正体を知るサーゼクスは呻くようにその名を口にする。
「あれが、トライヘキサ？」
「成程、バケモノだな……」
　冥界に転移する前に軽い話だけを聞いた二人は驚愕する。予想以上の重圧に怯むしかない。四大魔王全員で挑んでも腕一本取れるかどうかだろう。
　だが、トライヘキサの眼球には魔王など映っていない。
「残念ながら、指輪なら絶対に安全な奴に預けてあるんだな、これが」
「今度は誰を騙した話だ？」
「いやいや。おまえは父親を何だと思ってんだ。彼はちゃんと全部知った上で、積極的に指輪を守ってくれるのさ」
「ああん？」
　不愉快そうな声を上げるトライヘキサだったが、そこでようやくサーゼクスらに気づく。
「てか、パチモン魔王どもじゃねえか。今更ノコノコお疲れ様だな。おまえらの守りたかった世界ってやつは、たった今滅んだところだぞ？」
「っ！　まだだ、まだ我々がいる！」
「それは正確ではない。おまえたちが残っているのではなく、おまえたちしか残っていないのだ。冥界にある生命はその悉くが焼却された。幼子も若者も老人も、四大魔王ファルビウム・アスモデウスさえも死んだのだ」

ここに来て、サーゼクスの渾身の啖呵を遮る埒外の乱入者がまたひとり。ミリキャスの身体に憑依したサマエル、謎の少女の肉体に寄生したソロモン、トライヘキサに続く四番目にして最後の脅威。

彼が視界に現れた瞬間、三柱の魔王は理解した。理屈も理論も放棄して、直感的に理解してしまった。

この男こそが冥界をこのような姿にした実行犯である、と。

「一応、はじめましてだな。最初で最後の挨拶だ。名乗ってやろう」

人間のような形をしていた。足元まで届きそうな長い金髪。魔術師然としながらも、王威を感じさせる衣装。そして、主神クラスさえ上回る圧倒的な魔力。

「我が名はゲーティア」

ゲーティアという名前も、サーゼクスには聞き覚えがあった。シヴァが言っていたではないか。魔神柱たちの王だと。

「そうか、貴殿が――異世界のソロモンか！」

その認識も間違いではない。ゲーティアとはソロモンの慙愧そのものであり、その亡骸から生まれた獣だ。

ただ、サーゼクスの認識はそうではないのだろう。『F』には最初からソロモンなど存在せず、ゲーティアという者が代わりにいたという感覚なのだろう。あるいは、フルネームがソロモン・ゲーティアだとでも思っているのかもしれない。

否、ラウムが『私たちのソロモンはこの世界には来ていない』という旨を伝えているため、ソロモン≠七十二柱の王という図式もあるのかもしれない。

「……ああ、そうだ。最後の魔王よ。私こそが、貴様らの言うところの異世界――『F』の魔術王ソロモンだ。よくぞその真実に辿り着いた！　我こそは王の中の王！　故にこう讃えるがよい！　――聖書焼却式、人王ゲーティアと！」

だから、ゲーティアはあえてその真実を指摘することも、訂正することもなかった。

「冥界をこのようにしたのは、貴殿か？」

「先に断っておくが、貴様の息子の身体を使っている蛇や少女趣味に

目覚めた魔術王と我々は敵対関係だ。トライヘキサとは一時協力関係にあるがな。そして明言しておくが――この冥界を焼き払ったのは私の意志だ。私という王と、七十二柱の魔神が選択し、決定し、実行した。――貴様ら悪魔を滅ぼした」

誤解するな。此方の魔術王や神の悪意に唆されたわけでもなく、これは自分の意思なのだと宣うゲーティアに、サーゼクスは激昂する。

「何故だ。何故このようなことをする！　貴殿は――この行いに対してどのような感情を抱いている？　これほどの非道を行って、何も感じないのか！　生命を、何だと思っている!?　一つの種族、いや、多くの生命を滅ぼすことが、そんなにも楽しいと言うのか！」

サマエルにやられたダメージに耐えながら力を解放し、サーゼクスは巨大な人型の滅びのオーラとなる。前ルシファーの十倍の力、世界十指の暴力の権化、世界そのものを揺らす滅びの化身。

必然的にゲーティアはサーゼクスを見上げる形になる。

「――――ほう。意外な反応をしたな、魔王。楽しいか、問うのか？　この私に、悪魔や堕天使を滅ぼす事が楽しいかと？」

あまりにも分かり切った質問だった。

「ああ――――無論、無論、無論、無論、最ッッ悪につまらないとも！　楽しいのならば貴様らを世界ごと大雑把に殺すものか！」

誰が好き好んで、一度失敗した計画の焼き直しなどするというのか。

誰が好き好んで、おまえたちのような害獣駆除など引き受けるというのか。

嫌々やっているに決まっているだろう。

おまえたちに、それだけの価値があると？

この場にいることさえ、埃の掃き忘れ程度の感覚だと言うのに。

「我々は不愉快だ。貴様たちは死に様さえ醜い。終止符を打つことさえ億劫だ。その断末魔も耳障りだ！　しかし、それがおまえたちにとって至上の救いである。何故なら、我々だけが、ただの一匹も残さず、貴様らを有効利用してやれるのだから――――！」

その言葉を聞いて、三柱の魔王は強い怒りに支配される。

だが、一方で冷静な部分が怪訝に思うのだ。『有効利用』とはどういう意味だ。ラウムも言っていたではないか。有害であり邪魔であり、『必要』であったと。ここまで徹底的な滅びを与えておきながら、悪魔や堕天使、冥界にあった生命すべてをどのように使用するというのか。

「では、さようなら。間が悪かったな。おまえたちの歴史は今日で終わりだ」

人王の後ろに、二体のサーヴァントが現れる。

「万能薬は次の機会に持ち越しですが、感染源はここで潰しておきましょう」

「魔王眷属を滅ぼせと言われながら実行できなかった俺にもう一度機会を与えるとは。その器量の大きさに応えよう」

■

赤い龍の慟哭が聞こえず、白い龍の極光も見えず、神の悪意の哄笑も届かず、冥界焼却の熱さも分かりようがない場所のどこかで、ひとりの英霊が召喚された。

「サーヴァント、シータ。召喚に応じて参りました――」

呼ばれた英霊の名はシータ。赤い髪の華奢な少女。インド二大叙事詩の『ラーマーヤナ』に登場する女性であり、物語の主人公ラーマの妃である。

実は英霊としてのシータはラーマと霊基を共有しており、聖杯戦争などでラーマが召喚された場合はシータが現界することはない。逆もまた然りだ。ラーマが犯した不意打ちの代償としてかけられた呪い――『貴方はたとえ后を取り戻すことができても、共に喜びを分かち合えることはない』――スキル〝離別の呪い〟の影響である。

だから、シータは目の前にいる人物を見て驚きが隠せなかった。

「ラーマ、様……？」

そこにいたの最愛の人。自分と同じ色の髪の少年。

「そうだ、シータ。余――僕だ」

「本当に、本当にラーマ様なのですか……？」
「ああ、そうだ」
言いながらも、ラーマも現実味がない状況だ。いくら約束通りとはいえ、いくら予想されていたとはいえ、もしかしたらダメかもしれないという不安もあった。
ソロモンがラーマとフィンに用意した聖杯は願望器としての機能すらない。ただ『F』から特定のサーヴァントを召喚する機能を持っているだけの魔道具。ちなみにフィンはすでに最初の妻サーヴァの召喚に成功しており、夫婦揃って席を外している。
ラーマの目の前には愛する妻がいた。国を追放され、共に生活をしていた頃の姿のシータがいる。自分と同じ色の髪を視界に入れても、視覚がつぶれるようなことはない。
「ラーマ様」
「シータ」
抱き締めれば、シータの体温が伝わってくる。
「ラーマ様……」
「シータ……」
振るえるシータの声が、自分の名前を紡ぐ。自分の声もきっと同じように震えているのだろう。
「ラーマ！」
「シータ！」
頬を伝ってくる涙の冷たささえも愛おしい。彼女は確かにここにいて、自分もここにいる。この奇跡を永遠に味わっていたいとすら思う。
「ああ、本当に貴方なのね……」
だからこそ、冥界に乗り込む前。リリスから生まれた悪魔の身体を乗っ取ってすぐに、ソロモンはラーマに指輪を預けた。ソロモンが全人類に施した呪い、『真理』を解く最後の鍵を。
「大好きよ。……本当に、本当に、大好きなの」
ラーマには壊せない。壊せるはずがない。
「……会いたかった、会いたかった。本当に、本当に会いたかったん

だ。僕は、君がいれば、それだけで良かった……！」

少なくとも、自分の喉から零れる嗚咽が止まるまでは、この奇跡を手放す覚悟ができるまでは、壊せるはずがないのだ。

■

「私はランドルフ・カーター。セイヴァーの協力者だ。君たちの観点から言えば『C』の人物だと認識してもらえばいい」

「こんにちは！　アビゲイル・ウィリアムズです。よければアビーと呼んでくださいな」

「彼女は本来『F』の人間だ。しかし君たちの知る魔神ラウムとは別の魔神ラウムによって……いや、これは剪定事象が絡むから長くなるか。今回は省略しよう。それよりもセイヴァーからビーストXについて説明してもらった方がいいか」

人間界某所にある隠れアジトで、英雄派は仮初めの休息とともに並行世界の自分達の後輩であるセイヴァーから彼の世界の顛末を聞いていた。

「完全体のビーストX――聖書の神、原初の堕天使、明けの明星、そして魔術王が合体した究極の人類悪。この人類悪の意識の主導権を握っていたのは、ソロモンのクソ野郎でした」

「それは、おかしくないか？　核になっているのは聖書の神なんだろう？」

「どれだけ魔術師として優れていたとしても、王として完成されていたとしても、彼自身にも人類悪の成分があったとしても、所詮は人間。魂の格が違う。存在感の位相が違う」

「だけど、合体したのはソロモンの思惑であったなら話は違ってくるわね」

「んー、自分が主導権を握れるように混ざったってわけだ。そいつはなんともクソったれでございますね！」

「はい。聖書の神もサマエルも初代ルシファーも、ソロモンに出し抜かれたわけです。あのクソ野郎、元は人間の癖に人類の滅びを助長し

てんじゃねえよって話ですよ。いや、そもそもあいつが元凶なんですけど。諸悪の根源なんですけど」
「諸悪の根源は言い過ぎだろう。心情的にそう言いたくなるのは分かるけど、発端は聖書の神なんだし」
「あるいは、神の悪意サマエルだな」
「そのふたりを焚きつけたのが他ならぬソロモンなんですけど……。で、その合体のカラクリというか術式については判明しているんですよ。」
「判明しているのか。じゃあ謎って何だ?」
「簡潔に述べると、エネルギーです」
「エネルギー、か」
「核となっている聖書の神は勿論、聖書に記された最強クラスの存在ルシファーとサマエルを黙らせるだけのエネルギーってなると膨大だな」
「少なくとも、指輪によって復活してからじゃどうやっても回収できないってわけね」
「こっちの研究者が調べた結果、そのエネルギーの調達には『真理』のような世界規模の術式で回収には最低でも千年かかるって話なんですよね」
「千年前か……。かの三つ巴の大戦争、聖書の神が崩御したのはそのあたりだったか?」
「ですね。なので、神の死と終戦のどさくさに紛れて奴の協力者が何かしたんじゃないかって話なんですが……」
「確証はないし、答えも出ないと」
「お恥ずかしながら」
「いや、いいさ。何せ相手はあのソロモン、一度世界中の神魔を詐欺に嵌めた埒外の魔術王だ」
「そう言ってもらえると幸いです。俺たちの世界じゃそのあたりの調査に割いている余力ってあんまりないんですよ。でも調べないわけにもいきませんから」
「だろうな。分からない真実があると、まだどこかに隠し玉があるか

もしれないって不安にはなる」
「そういうことです。それじゃ、そろそろ本題に入りますね」
「え、今の前置きだったのか」
「壮大な前置きだったな」
「こんな話より重大な話題なんて想像もつかないわ」
「……皆さん、白々しいとはこのことですよ」
一度深く深呼吸をして、セイヴァーは極めて深刻な面持ちで問う。
「何で、俺はベッドに縛られているんでしょうか？」
「その質問は正しくないな。正しくは『俺たち』と言うべきだろう？」
「カッコつけて言っても現実は変わりませんよ、曹操さん」
「諦めな、後輩きゅん」
「アンタ誰だ。リントさんのアニキだっていうフリードさんか、外見から察するに。リゼヴィムって魔王と相打ちになったという」
「フリードのアニキ、リリン倒したんスか？　大金星じゃん」
「リントさんはこっちでもお元気そうで」
「あ、これ向こうの私だけ生き残っている感じだ。いやぁ、居心地悪いっす」
ベッドに拘束された三人を見下ろすようにし、アーシアが殺菌された手袋を装着し、宣言する。
「では治療を開始します」
「キャー。タスケテー。タベラレルー」
「食べませんよ。回復してもらうだけです」
「ソンナコトイッテタベルキダー」
「ちょっと楽しんでないか？」
「いや、まあ。別に、そんなことは？」
絶対にそんなことはあるという表情のセイヴァー。ベッドの傍らに佇む英雄派の面々もきまずい表情だ。笑っていられるのも今の内だぞと冷や汗を流す曹操は時間稼ぎを思いつく。
「な、なあ、アーシア。俺とフリードは分かるけど、何でセイヴァーまで？」
曹操は会談襲撃時の闘戦勝仏や先程のアーチャーとの戦闘による

怪我。フリードは魔神柱の端末として重度の疲労。しかしセイヴァーには怪我らしい怪我をした様子もない。そもそも彼は誰かと戦闘したという話は聞いていないのだが。

「この中で一番の重症はこの方です」

だからこそ、アーシアの発言には呆然としてしまった。

「は？」

「どゆこと、アーシアちゃん？」

曹操やフリードだけではなくその場にいた多くの者が首を傾げ、意味を理解した一部の者は表情を凍りつかせた。セイヴァーは何を言うでもなく天井を見つけていた。

「セイヴァーさんと言いましたね？　いくつか質問します。正直にお答えください。貴方、最後の睡眠はいつですか？」

「覚えていません。少なくとも、この二年の間はあんまり寝れてないですね。まあ、魔獣創造の応用で身体を改造して睡眠は必要ない身体なのでお気にならさず」

これだけならば、魔獣創造の使い方の一例だけで終わった。彼と並行世界の曹操の共通の武装である棺桶には、あらゆる神器や伝説の武器が収納されている。レオナルドもそうだったのかは不明だが、そういう使い方もあるのだという話だけで終わるべきだった。

しかし、それだけの話なわけがない。

「では次の質問です。貴方は、あと何年生きられると診断されていますか？」

「五年ってとこらしいです。半年前の診断なんで、もっと縮んでいるかもしれませんが」

話を聞いていた全員の表情が凍り付いた。

セイヴァーの外見はどう見ても二十歳に届いていない。そんな彼があと五年も生きられないとはどういう了見なのか。彼は一体、何を犠牲にしてきたというのだ。

「では最後の質問です。貴方の食生活はどうなっていますか？　特に、この半年ほどは」

「……ノーコメントで、ぐぎゃあああああ!?」

「貴方の口と痛覚、どちらが正直者でしょうね？」
「こわっ」
「今更だろ」
　アーシアがやったことから目を逸らす者多数。
「じゃ、ジャンクフードばっかりでした！」
「……ジャンクフードに含まれる有害物質の危険性を理解しながら多量に摂取していたと？」
「だって、だって、俺の世界じゃもう食べられないものばっかりなんですよ！　文明社会が生きている世界に来たんだから、文明的な食事をさせてくださいよ！」
「ジャンクフードは文明的な食事ではありません！　文明的な食事とは栄養バランスの取れた栄養化学に基づいた食事のことを言うのです！」
「健康食はいやあああ！　俺だって本当はジャンクばっかり食べていたくないですよ！　添加物マシマシのアイスを乗せたパンケーキを一日中貪っていたいです！」
「引きこもりか何かですか」
「引きこもりは天照大御神ですから！　……アマテラス様？」
　セイヴァーからカチリという音が聞こえたような気がした。
「アマテラス様ソロモンならいませんから出てきてください『真理』が壊れたから貴女がお隠れになったら日食が起こるんですよ神話体系が無茶苦茶になったせいで日本だけじゃなくて世界各地で発生するんだからもうやめろ酒盛りを始めるな仕事を増やすな駄神ども農村に雨でも降らしやがれ穀潰しがまた胃に穴が開きそうだ頭痛が危険だいやまだお世話になりませんからエレシュキガル様もヘル様もお気遣いありがとうございますあ違うんだ浮気じゃないんだお願いだから嫌いにならないでいやアマテラス様のことを忘れたわけじゃありませんちょっと分かりましたから出て来いよこの駄女神が！」
　並行世界に実際に起きたであろう出来事を一気に吐き出すセイヴァー。その顔は興奮で赤くなっていた。
「女神なんてろくなもんじゃねえ！」

何故か、クマのぬいぐるみが意味深に頷く幻覚が見えた。

「神も人もろくでなしばっかり！　ああ、もう世界なんて救う意味あったんだろうか！　――あったよなぁ、ちくしょう！　でも帰りたくないぃぃいいい！　帰ったら仕事の山と面倒事が待ってんだぁ……」

「身体的な問題も多いですが、精神的にも情緒不安定。治療が必要ですね」

そのあまりにも情けない救世主の姿を見て、「この世界では絶対に彼を『彼』にしてはいけない」とか「後に残る者がいるってことを考えて死なないようにしないといけない」とか考える英雄派であった。

問い

起源が何かは分からない。始原がどれかは知らない。原初が何処かなど覚えていない。開闢が何時からなど興味がない。私は『』であった頃の自分を覚えていない。

だが、どのように始めたかは覚えている。

私は唯一だった。私は絶対だった。私は完全だった。私以外の神を僭称する輩もいたような気がするが、不浄な神もどきの妄想に付き合う暇などなかった。

だからこそ、私は己から不要な成分――■■と□□を切り離した。何かを始めるのに、何かが始まるのに、この二つの成分は不要だったのだ。私の構成要素にこの二つの成分は余分、邪魔だった。しかし、忌々しいことに、それらは生命と意志を得た。■■は天使に、□□は悪魔になった。サマエルとルシファーだ。

サマエルを参考に天使を創り出した。後に悪魔へと堕ちるベリアル。私の如き者に私の力、それから……それから誰がいただろうか。サマエル以外にも堕天使になった者達がいたような気がするが……やはり記憶には残っていない。覚えていないということは、大した者はいなかったのだろう。

色々な生き物を創り出した。

最後に人間を生み出した。

人間は――私の楽園から出て行ってしまった。どうやって出て行ったのだ。何処から抜け出したというのだ。おまえたちに、そんな知恵は与えていないというのに。おまえたちに、そんな権利はなかったというのに。楽園の外に、おまえたちの幸せなどないというのに。

実際、おまえたちは不幸になっただけではないか。おまえたちは過ちを犯しただけではないか。おまえたちは、後悔を重ねただけではないか。

カインよ。何故弟を殺した。

ノアよ。何故家族以外の人間を箱舟に乗せなかった。

ニムロデよ。何故塔など立てた。

モーセよ。何故契約を破った。

ソロモンよ。何故『真理』など作った。神魔を利用して生み出した、星の公転の如き永久機関。神々から人間を奪い、神話を摩耗させ、神秘を食い殺す全人類に施した呪い。動き出せば人類が終わるまで、否、星が消えるまで止まることはない絶対術式。どうして、これを私のために使わなかった。『システム』さえ超えているこの術式さえあれば、おまえは神にさえなれただろうに。

イエスよ。ヨシュアよ。アーサーよ。シャルルマーニュよ。ゲオルギウスよ。リチャードよ。ジャンヌよ。どうして、私の下に帰ってくれない？　私の楽園で育たなかった者たちは、何ひとつおまえたちに報いようとはしないのに。誰も彼もが、おまえたちの理想を裏切ったというのに。

私の楽園は、〝そこ〟よりも醜いのか？

■

「覇軍の方程式（カンカラー・フォーミュラ）・業の式！」

「梵天（ブラフマー）よ、地を覆え（ストラ）！」

超越者アジュカ・ベルゼブブと、施しの英雄カルナの攻撃が衝突する。

カルナの放つ攻撃は目からビームという冗談のようなものだが、その威力こそが冗談ではない。

「くぅっ！」

「アジュカちゃん！」

「慌てるな、セラフォルー。こんな攻撃何度も使えるはずが……」

「梵天（ブラフマー）よ、地を覆え（ストラ）！」

「馬鹿な、連発だと……！」

これほどの威力を、これほどの連射速度で！

「くう！」

「私だって負けない――きゃあ！」

セラフォルーの攻撃が妨害される。目の前にいる二人の戦士にで

はなく、どこからか放たれたミサイルによって。通常のミサイルなどセラフォルーには通じない。

だが、このような状況下で使われるミサイルがただのミサイルなわけもない。その弾は着弾すると破裂するようになっており、そこには悪魔の弱点が詰められていた。

聖水。あまりにも原始的な悪魔対策の武器。魔王であるセラフォルーに効果的ということは特別に強化されたもの。深刻なダメージを与えるような殺気は込められていない。あくまでも、前衛として動いている二人のサポートに徹している。あまりにも機械的で、あまりにも計算された遠距離攻撃。

（それにしてもどこから攻撃している？　捕捉できない場所で砲撃しているというのか？　これほどの精密さで？　これほどの悪環境で？　こんな修羅場でなければ会談でもしたかったがな！）

「――やっぱり私は裏方の方が性に合っている。本当なら射手も他の誰かにやって欲しいんだけどネ。慣れないことをして滝に落とされるのは一度で十分だ」

悪魔の視力でも視認できない遥か遠方で、老紳士が棺桶を撫でながら発した呟きは、他の誰かに届くことはなかった。

「いやー、それにしても悪の親玉の弟子の後継者が救世主って。あの謎解き屋にだけは知られたくないネ。これも青は藍より出でて藍より青しってやつなのかな？」

「殺菌！」

圧倒的な火力と精密な爆撃。加えて、その猛攻をすり抜けて繰り出される、この赤い軍服の女の鋭い一撃があった。

攻撃そのものは驚異的ではない。音よりも速いわけでもなく、雷のように鋭いわけでもなく、聖なる力が宿っているわけでもない。大地を砕く力があるわけでも、絶死の呪いがかけられているわけでもない。そこにあるのは、〝想い〟だ。

「怪物を倒すのは、いつだって人間ということか。さぞや名のある戦

士とお見受けするが、教会の戦士に貴女のような女性はいなかったように記憶している」

「フローレンス・ナイチンゲール。貴方はアジュカ・アスタロトで正しいですね？」

アジュカとセラフォルーは様々な意味でその名前に面食らう。

「ほう、確かかの看護師は生涯独身で子孫はいなかったはず。転生体が生まれるには年代が若すぎる。話に聞いたサーヴァントとやらか。ああ、私――いや、俺がアジュカ・ベルゼブブだ」

「アーシア・アルジェント」

焦燥に包まれるアジュカを他所に、軍服の女はそんな名前を口に出した。そして、おそらくは女性の名前らしき単語を列挙していく。一つだけではなく、いくつも、平坦に、しかし何か強い感情を込めて。

聞き覚えがあるような気もするが、どこで聞いたかは思い出せない。印象に残っていないことは、少なくとも直接会ったことはないはずだが。

「貴方は――彼女たちの名前を知っていますか？」

「生憎と知らないが……もしかして貴女は神崎光也の関係者かな？」

「――そうですか。生憎、そのような名前に心当たりはありません。貴方はここで滅菌します」

女の空気が劇的に変わった。自分の読みは悪い方向に外れたことを残念に思いながら、意識を立て直すアジュカ。

その瞬間、周囲の大気を揺るがせていた強大な魔力が途端に感じられなくなった。自分たちの戦闘に夢中であったが、まさかという想いがあった。

「サーゼ、クス……？」

アジュカは自分の目に入ったものが信じられなかった。

「手強かった……」

サーゼクス・ルシファーが地に伏していた。

最強の魔王が敗北した。魔力の消費とダメージの大きさの影響で、

巨大人型オーラの姿は保っていられず、通常の人型に戻っていた。自慢の紅髪は流血と砂塵で汚れ、ゲーティアの攻撃によって不格好なヘアスタイルになっている。身体も首より下の左半身がほとんど消滅していた。

少し離れた場所では、仰向けに倒れたソロモンの腹をトライヘキサがげしげしと踏みつけている。サマエルは首を締められる形で吊り上げられている。

地に伏したサーゼクスの紅髪を掴んで、ゲーティアは乱暴に彼の顔を上げさせる。それに対して、サーゼクスは気持ちばかりに睨んで、苦悶の声を上げるだけだ。

「ぐあ……」

「思ったよりも手こずった。驚いたよ。ならば貴様にも労いは必要か。答え合わせをしてやろう、魔王」

「こ……だ、……は……」

「実はな、私は――我々(わたし)はソロモンではない」

サーゼクスの目が見開かれる。内容にも驚いているが、何故このタイミングでと言った様子だ。

「もう一度名乗ってやろう。我が名はゲーティア」

ゲーティア。あるいはゴエティア。それはレメトゲンの一冊にして、本来であれば七十二柱の総称。

「我らの世界の魔術王ソロモンの死後、彼に仕えた七十二の魔術式――ソロモン七十二柱は王の死体に巣食い、星を作り替えるために生まれた獣となった。それが我々(わたし)。ソロモンのようなものではあるが、ソロモンではない。そして、どこにでもいるような人間に敗北し、完璧に消滅した愚か者だ」

キングゥの話にはなかった。彼が意図的に話さなかったのか、それとも知らなかったのか。本人がいない今では確認しようもないが、サーゼクスは最後の部分を反芻する。

「しょう、めつ？」

「ああ、知らないんだったか？　我々(わたし)を呼び出したのは聖書の神だ。我々も細かい部分は把握していないが、少なくとも三千年前から聖書

の神やソロモンは異世界の存在を知っていた。聖書の神は死ぬ前、『システム』に我々を呼び出すための時限式の術式を仕掛けていた。消滅した我々の残滓を掬いあげ、認識やら思考やらに色々と仕掛けた上で復活させた。自らの復活と『真理』の破壊に利用するためにな。その仕掛けは取り除かせてもらい、こうしてここにいるわけだが」

軽く言うゲーティアだったが、一瞬だけ遠い目をしていた。

「――ああ、そうだ。一つだけ謝罪しておこう。形だけでも謝罪しておこう。五月頃か、初代七十二柱を殺して回っただろう？　あれは理想も、使命も、信念も、権利も、正義も関係ない。我々（わたし）の極々個人的感情による凶行だ」

「こ、個人的感情、だと？」

「ああ。恥ずかしかったんだ」

それは罪の告白にしては、あまりにあっさりしていた。否、すっきりしていた。

「あれらやおまえたちが、我々の名前を使っていることが、耐え難いほどの羞恥だった。ちょうどキングゥを発見した時期でな。我々の世界の存在が、我々以外にも来る可能性が発生した。我々の世界の人間に、この世界の七十二柱を見て欲しくなかった。特に、隠居した癖に政治に口出しをし、無駄に生き永らえて財を食らい、その上で大戦で死んだ同胞の復讐さえする様子もない初代七十二柱が許せなかった」

言外に、初代七十二柱の死がサーゼクスたちにとっても有益であったと指摘するゲーティアに、サーゼクスは何も言えない。

「では最後に、一つだけ問いを」

もはや種族としての体裁はない。おまえが救うべき民はいない。何一つ、おまえを頼る生命はない。

ならば隠し立ては不要。建前の意味はない。恥ずかしげもなく本音を曝け出すがいい。

「本当はおまえ、やりたいことなんて何もなかったんじゃないか？」

■

次期大王サイラオーグ・バアル。
不遇の『王』。魔力を持たずに生まれた大王。肉体の鍛錬のみで若手悪魔最強にまで上り詰めた常識外。いずれは魔王の席についても不思議ではないと言われている。
バアル家――大王の派閥は揉めている。あるいは膠着状態と言うべきだ。魔神柱による襲撃で、初代大王ゼクラム・バアルは死亡した。その影響は甚大だった。天界や堕天使との同盟において、魔王派が完全に主導を握ってしまうほどに。初代大王の影響は強すぎた。他の初代七十二柱とは一線を画すほどに。
だから、サイラオーグは眷属とともに世界神話会談の警護に参加していた。彼個人の感情もあるが、政治的な意味合いも強い。現魔王の妹であるリアスが参戦した影響もある。
サイラオーグが掲げる理想、叶えなければならない夢。生まれによって差別されず、己の力によって評価される冥界。そのために、魔王の席が必要だった。出身が下級や中級である、人間の血が混ざっている、生まれながら魔力がない。そんな理由で差別されることのない世界を作りたかった。
そのために、会談警護は絶好の活躍の場だった。ここで成果を上げれば大王派閥の中で発言権が強くなる。初代がいなくなって勢いがなくなった今だからこそ、大きな一歩を進むことができる。サイラオーグは強い。眷属もまた強い。だから、ここで躍進のきっかけを手に入れられるはずだった。
だが、結果として何一つ成果は上げられなかった。
魔神柱は予想よりも大きな戦力だった。三大勢力は魔神柱の戦力を見誤っていた。数多の犠牲者が出た。サイラオーグは眷属こそ失わなかったものの、すぐには戦えない者ばかりだった。
「くっ！」
魔神柱が退いた戦場跡で、サイラオーグは苦悶の声を上げる。
魔神柱が退いたのはサイラオーグ側に軍配が上がりそうだったからではない。戦闘中、どこからか発生した瘴気がきっかけだ。どうやら魔神柱はあの気色悪い気配の正体を知っているようだった。だが、

同時にあの気配の存在が予想外だったかのようにも見えた。
それが何を意味するかと言えば、魔神柱にとってサイラオーグはここで排除すべき障害と認識されなかったということだ。
「サイラオーグ様」
歯噛みする彼に声をかけたのは、『女王』クイーシャ・アバドン。
「他の戦場はどうなっている？」
「はい……。信じられないことですが、セラフォルー様が魔神柱に敗北し、重症とのことです。眷属の皆様も……。ソーナ様はご無事だそうですが」
「そうか。リアスは？」
「其方の方はまだ――」
と、クイーシャが言いかけたところで、大地を揺るがすほどの咆哮が聞こえた。
「っ！　今度は何だ！　魔王様の身に何かあったのかもしれん。俺は行く」
「なりません！　何が起きたか分からない状況では危険です。あそこには会談に参加している神魔もいらっしゃるはずです。余程のことは――」
「その余程のことが起きているのだ！　大王の名を継ぐものとして、俺は退くわけにはいかん！」
クイーシャの制止を振り切って駆け出した。まだ戦える余力のある眷属もそれに続く。
現場では――赤い龍と白い龍が激突していた。
かの大戦時に起きたドライグとアルビオンの乱入。サイラオーグが生まれる前の出来事であるため想像するしかないが、それはきっと目の前に起きている暴風雨の如き衝突だったのだろう。
「赤い龍……あれはリアスの『兵士』の兵藤一誠だと言うのか？」
聞いていた話と違いすぎる異様のバケモノが二体、身体と生命を食い合っている。それが二体の龍の戦いを見たサイラオーグの感想であった。
見れば、リアス・グレモリーの姿があった。リアスの周囲には彼女

の眷属や堕天使総督アザゼル、見覚えのないピンク髪の騎士がいた。どうやら戦いに介入したいが、その猛攻のオーラに圧倒されて手出しができない状況のようだ。

「リアス！」

名前を呼ばれてようやくサイラオーグの存在に気づくリアス。

「サイラオーグ！　良かった……。細かいことを話す時間はないのだけど……簡潔に言うとイッセー、私の『兵士』がソロモンに身体を乗っ取られたの」

「何？」

魔術王ソロモン。神から騙し取った指輪によって暴虐の限りを尽くした大罪人。指輪のひとつをどこかに隠して、旧アスモデウスの身体を乗っ取るも、京都でサーゼクスに討たれたと聞いていたが、まだ何らかの手段で

「いえ、ソロモンであってソロモンとは違うものだったかしら……とにかく、ああなっているのは彼の意志ではないの。サイラオーグ、手を貸してちょうだい。私の眷属を助けて」

「構わん」

サイラオーグとしても、兵藤一誠とは駆け引きを抜きにした純粋な力対力の戦いをしたかった。断じて、あのような悲鳴のような咆哮を上げる怪物と戦いたかったわけではない。

「いまこそおまえを使う時だな。レグルス！」

その声に反応したのは、サイラオーグの『兵士』。謎多き仮面の少年だ。少年が仮面を外すと、体中から怪音を起こして、その体が盛り上がっていく。全身に金色の毛が生えて、腕や脚が太く、口が裂けて、鋭い牙を覗かせ、尻尾が生えて、首の周りにも金色の毛が揃えていく。

最終的に、少年は五～六メートルはある巨大なライオンへと姿を変えた。

「この獅子の宝玉……まさかこいつは神滅具の『獅子王の戦斧』か！」

神器研究の第一人者であるアザゼルが、いち早くその正体に気づく。

「残念ながら本来の所有者は既に死んでいる。俺が『獅子王の戦斧』の

本来の所有者を見つけた時は、既に怪しげな連中に殺された後だ。神器となる斧だけが無事だった。所有者が死ねば神器はいずれ消滅する。その戦斧もそうなるであろうと思っていたんだが、あろうことか意志を持ったかのように獅子に化けて、所有者を殺した集団を根こそぎ全滅させたのだ。それを俺が眷属にした」

「これほどの切り札を隠していたなんて……」

「大王派閥の権力のあれこれの関係でな、正体を明かすことを禁じられていたんだ。それに、所有者無しの状態のせいか、力がとても不安定でな。敵味方見境無しの暴走状態になって、勝負どころではなくなるから単独で出せるものではなかった。いざというとき、こいつを止められるのは俺だけだからな」

所有者が眷属になったわけではなく、神滅具そのものが眷属。それこそがサイラオーグの『兵士』レグルスの正体である。

無論、レグルスだけでも強い。だが、それだけでは終わらない。

「我が獅子よ！　ネメアの王よ！　獅子王と呼ばれた汝よ！　我が猛りに応じて、衣と化せ！」

レグルスは黄金の光となったかと思えば、サイラオーグを包む。彼の身体から周囲の空間が軋むほどのエネルギーが放たれる。

『禁手！』

「禁手ウウウウウウウウ!!!!」

やがて出現したのは、黄金の獅子の鎧を纏ったサイラオーグの姿だった。

「『獅子王の戦斧』の禁手化――『獅子王の剛皮（レグルス・レイ・レザー・レックス）』！　二天龍よ、この戦い、俺も混ざってもらおうか！」

その槍の女神とはまた違う獅子王。その威王を感じ取って、二体の龍は一瞬だけ動きを止めた。兵藤一誠は静かにサイラオーグ・バアルを一瞥し、告げた。

「邪魔だ……！」

悪魔の駒

ゲーティアは、サーゼクスの髪を掴んでいるのとは逆の手にそれを取り出す。

「悪魔の駒（イーヴィル・ピース）」

それはチェスを模したアイテムだ。かつての戦争で大きく人数を減らした上級悪魔たちが、チェスの特性を取り入れた少数精鋭の制度。開発者はアジュカ・ベルゼブブ。全盛期の悪魔のように軍団を持つのではなく、駒として少数の下僕悪魔に強大な力を分け与えるというシステムだ。悪魔以外の種族に使用した場合は対象が転生悪魔となる。死者に使用することさえ可能である。

「語るまでもないが、これはおまえたちの作り出したアイテムだ。我々はこの世界に来て、おまえたちを調べて、このアイテムを知ったがな。その性能を、歴史を、規則を、材料を知って、正直、首を傾げたよ。これは何の冗談だ？」

ゲーティアは嘲笑と苛立ちを隠そうともしない。

「我々が出した見解、『悪魔の駒』の致命的な欠陥を列挙してやろう。言うまでもない問題点だが、それはチェスを模していることだ。いや、模していないことと言うべきか」

悪魔の駒はチェスのようであって、チェスではない。

「『王』の力によって駒の価値は左右される？　複数の駒を消費することでより強い者を眷属にすることができる？　『変異の駒』がある？　チェスを模している意味がないだろう。むしろ、どのあたりにチェスの要素があるんだ。駒の形と名称だけではないか。チェスの何を参考にしたいかは分からないが、真似る気がないなら無理に当てはめようとするな。独自の媒体を創り出せ」

もっと言えば、『悪魔の駒』のシステム的にはどうやっても駒価値の無駄が生じる。『騎士』や『僧侶』の駒を使用する場合、駒価値が1と3の者を転生するのに必要な駒は同じだ。駒価値8の者を転生させる場合、『兵士』八個と『女王』一個と『戦車』二個のパターンがあるが、やはり無駄が生じる場合がある。

極端な話、チェス一セットよりも『兵士』の駒四十五個を持つ方が、より『王』に適性し、より優れた眷属を作れるはずなのである。

「何故、貴様ら、魔王から血筋だけの貴族にいたるまで、同じ数の駒しか持っていないんだ。上級と最上級と魔王で区別化する意味はあってもいいだろう。少数精鋭？　それは一部の貴族なら適しているだろう。だが、魔王ならむしろ軍隊を持つべきだろう。大隊クラスの私兵は持っておくべきだろう」

少数精鋭と言えば聞こえはいいが、要するに軍隊を率いるだけのノウハウがないのだ。そして、戦争とは結局、数なのである。いくらサーゼクスが前ルシファーの十倍強かろうが、いくらアジュカやファルビウムが賢者であろうが、個人にできることなど限られている。レーティングゲームのトッププレイヤーを引っ張って来たところで、数など知れているだろう。

他の神話が本気で攻め込んできたとして、悪魔は本当に戦争ができたのだろうか？

「何故、貴様ら、他種族だけではなく純血悪魔や混血悪魔まで眷属にする？」

「これは病原菌とも言うべきもの。特に、先天的に部分感染している患者に使用させ完全感染させるケースまであるそうではないですか……！　完璧に駆除すべきです！」

「……バーサーカーの意見も一理あるがな、悪魔に『悪魔の駒』を使って眷属にする意味があるのか？　純血悪魔が減ったからこそ転生悪魔と言う身分を創り出したんだろうが。目的が完全に破綻しているぞ？」

混血悪魔ならばまだ分かる。人や他種族と交わって薄れた血を元の位に戻そうと言うのならば分かる。

純血悪魔ならば普通に、人間関係を築けば良いだけの話だろう。私兵でも妻でも妾でも、眷属にできるだけの関係性があるならできるはずだ。同じ種族を奴隷にする必要などどこにある。ゲームに参加させるために眷属にしたというのならば、それは娯楽と種族の存亡を同じ天秤にかけたことになる。

「その点に関しては、論じるだけ無駄だよ、ゲーティア」
　トライヘキサに首を絞められているサマエルだった。
「そいつらのお粗末な脳みそにそんなことを考えられるような器官は備わっていないのさ。考え無しのろくでなしばかりだ。特におまえだよ、おまえ。サーゼクス・グレモリー。おまえの『騎士』沖田総司だよ。おまえさぁ、何で鎖国云々で揉めている国の、外国側を排除しようとしている組織の主要人物を眷属にしてんだぁ！」
　言葉遣いが乱れるサマエル。あるいは、此方が素なのかもしれない。
「馬鹿なのか。揉めるに決まっているだろう、問題が発生するに決まっているだろう！　当時の日本人なら百歩譲って攘夷志士だろうが。せめて『人間』として新撰組を裏切らせてから眷属にしろよ！　こっそり悪魔に転生させて歴史の裏側に引き込んでんじゃねえよ！　私はそういうつもりでおまえらの縁を結んだんじゃねえんだよ！　逆だよ、あそこでおまえに新撰組の沖田総司を殺させるつもりだったんだ。一億歩譲ってなぁ、沖田総司を眷属化させたことで発生した問題を放置してんじゃねえよ！　遊び半分でよそ様の国を荒らしてんじゃねえぞ！　ちゃんとてめえで解決しろよ！　あの一件の火消しのために、三十二も端末を使い潰したんだぞ！　他者の身体だとしても、死の苦痛は付き物なんだよ！　何で一年間に三十二回も死なないといけねえんだ！」
　サマエルは溜まっていたものを吐き出す。それはもうすぐ自分の計画が成就するという余裕から来るものではなく、ずっと文句を言いたかった相手がいたから怒りをぶつけているといった風だった。
「何故、『悪魔の駒』というシステムを進化させなかった？」
　チェスを模していることが欠陥であることに気づかなかったのなら、この問いはひどく滑稽なものになってしまうが。
「何故何百年も同じシステムを使っているんだ。何故何百年も違う手段に手を出さないんだ。『悪魔の駒』のシステムは創造された時から変わっていない。悪魔の寿命から見れば百年などスパンとして短いとでも言うんだろうが……百年は百年だぞ？　人間を見習え。奴ら

が生み出した携帯端末の進化、特にこの十年ほどは目を見張るものがあるぞ？　法的にも機能的にも進化や変化の余地はいくらでもあっただろう。それを、何故変えなかった？」

悪魔の駒の誕生は人間界にチェスが生まれた時期とほぼ同じだ。現代のチェスは十五世紀末に確立されたと言われているため、悪魔の駒の誕生も同じ時期のはずである。

五百年以上も『悪魔の駒』を使い続けながら、悪魔という勢力は全盛期には届いていない。無論、悪魔の寿命が一万年であることを考えれば決して長い期間とは言えないのだろうが。だとしても、悪魔は五百年の繁殖期を無駄にしたことになる。

「変えられなかったのではない。変える必要性を見つけられなかったんだ、おまえたちは。そこにある問題性に気づこうとさえしなかった」

考えれば問題点はいくらでもある。例えば、原材料が特定の場所でしか採掘されない鉱物である点だ。ゲーティアの作戦は失敗に終わったが、アグレアスが奪われればそれだけでアウトだ。もっと言えば、獅子王のように島ごと消滅させてしまえば取り戻しようもない。

他にも、せっかく増やした悪魔がレーティングゲームで死亡するケースが挙げられる。眷属にした悪魔が主人を超えて、殺してしまうケースがある。どれも本末転倒だった。

ゲーティアという第三者の視点だから分かるという意見はあるだろう。しかし、サーゼクスたち新四大魔王には眷属がいたはずだ。臣民がいたはずだ。この世界に来たばかりのゲーティアと違い、何百年という時間があったはずだ。何のために、他者から奪った玉座に、何百年も居座っていたのだ。

「他神話を浸食している、人間を食い物にしている。おまえたちはそれだけの問題を発生させる悪魔の駒を、使い切れていないじゃないか。当然、挙げろと言われたら悪魔の駒の問題点はいくらでも挙げられるぞ。おまえたちは、この数百年何をやっていたんだ？　玉座など放って遊んでいたのか？」

悪魔の駒の話は一例でしかない。悪魔だけではない。聖書の勢力

に属する異形は、数が減ったと嘆きながら、このままでは滅ぶと憂いながら、神が死んだと絶望しながら、生きることに手を抜いていた。
「おまえたちはこの冥界に生きていた。だがな、おまえたちが『生きたい』と言っても説得力はないんだよ。何故ならおまえたちは全力でもなければ本気でもなく、必死でもなければ真剣でもない。おまえたちは絶滅への危機感と向き合わなかった。おまえたちは絶望への対処が遅すぎた。おまえたちは今日まで――」

――ちゃんと生きようとしていなかったじゃないか。

「生きるという生物として基本的なことを、おまえたちは怠けていた。その上で、何かやりたいことがあったのか？　ただ時代や周囲に流されるだけではなく、本気で魔王になったというのならば答えてみせろ。我々の見解が見当はずれでおまえたちが真剣に生きようとしていたのならば言ってみろ。おまえは一体、何をしたかったんだ？」
「は、はは」
乾いた笑い声が響く。
「ははははははははは」
その声を発するのは、最強の魔王ではない。術式の天才でもなければ魔王少女でもない。人王ではない。施しの英雄でも鋼鉄の天使でも犯罪教授でもない。神の悪意ではない。黙示録の獣ではない。
魔術王ソロモンだった。
「ははははははははははははははははははははははは！　ははははははははははははははははははははははは――ごぐほぅ！」
「突然馬鹿笑いしてどうした、馬鹿王が！　大人しく死んでおけよ！」
「笑うことすら許されないの!?　思い切って聞くけど、お父さんを嫌う理由を教えてくれないかな!?」
「てめえ、私（おれ）が三千年もの間、どんなものを見てきたと思う？　『真理』から生まれてきた私（おれ）が、何を見せつけられてきたと思ってやがる？」
地獄のような三千年だった。悪夢そのものな三千年だった。
「醜いものばかりだった。辛いことばかりだった。特に、生まれて初

めて味わったのは、てめえのイカれた妄念に塗れた憤怒だった！　シバの女王の死に対する、異常なほどの怒りだった。そんな生まれ方をして嬉しいはずがないだろう。そんな生き方をして楽しいはずがないだろう。人間を信じているというなら、『真理』をもう少しだけ綺麗なものに作れたんじゃねえのかよ！」

それは獣の切実な訴えだった。貴方ならもっと良いやり方があったのではないか。貴方なら直接的に悲劇を減らす手段があったのではないか。だって、貴方は人類が私を倒せると信じていた――否、知っていたのだから。

「――――ちょっと待て、トライヘキサ」

「何だ、ゲーティア。もう指輪の行方とか面倒臭い。一回殺してから自力で探そうぜ」

トライヘキサのやけくそなのか逆に効率的なのか分からない発言を聞き流し、ゲーティアはあらゆる感情を押し殺して問う。どうか勘違いであってくれと願いながら。

「貴様、いま何と言った？　三千年もの間、貴様は『真理』と繋がっていたはずだろう。なのに、悲しいものしか見てこなかっただと？」

「いや、私は正確には廃棄物である泥の――ん？」

そこで、気づく。

人類悪として一度人間に敗北した彼らだからこそ、その不自然な事実に気づいた。

「隙を見せたな、ふたりとも」

魔術王は、ニタリと笑い、手元に真鍮の壺を実体化させる。

それを見て、トライヘキサもゲーティアも退避の姿勢を取った。

ゲーティアは神話を読み解くことで存在と能力を推測し、トライヘキサは一度あれを受けている。

ソロモンの奥の手。絶対封印の宝具。七十二柱を封印し、湖の底に落とされた壺。『真理』構築の決め手。

「禁忌を水底に！」

だが、壺が吸い込む対象はトライヘキサでもゲーティアでもない。

まして魔王たちやサーヴァントたちでもない。

ソロモンの狙いは、トライヘキサが投げ捨てたサマエルだった。壺に吸われるも、サマエルに抵抗できるだけの力は残っていない。死ななければ別の端末に移ることはできない。神の悪意は詰んだ。

「ああ、そうか。君は、最初からそのつもりだったのか、ソロモン。なら、いいか。私の楽園への夢は潰えたとしても、形は違ったとしても、君が、それを受け継いでくれるのだから……」

サマエルがミリキャスの身体ごと壺に封印される。

「本当を言えば、サマエル本体が良かった。けど、ハーデスの爺さんは厄介だ。まして俺はサマエルがどういう理論で悪魔の身体を乗っ取っているのか知らなかった。どういう法則があるのか、どういうルールに縛られているのか不明だった。だからこそ、こうして悪魔の身体を使う手段を選んだ。ま、結果はともかく経過には妥協すべきか」

「それは、駄目だ！」

トライヘキサは飛び出すが、

「遅いよ、トライヘキサ」

一瞬早く、ソロモンは魔法陣を開き、そこに壺を投げ込んだ。トライヘキサはソロモンに飛びかかり、馬乗りになる。

「いや本当、この馬鹿蛇が姿を現してからずっと隙を狙っていたんだ。だけど、おまえたちが間に合ってしまった。おまえたちに見つかってしまった。俺とサマエルの両方が死なないうちに、絶対に壺の発動が邪魔されないタイミングが必要だった」

ソロモンは心底から満面の笑みを浮かべる。その表情に怒りはない。達成感と狂喜のみに彩られた表情。それを見て、トライヘキサは怒りと悲しみと絶望に泣いた。何か言葉を紡ごうとしても、喉が震えて、嗚咽のような音しか発せられない。

「まず、俺はゲーティアを信じていた。おまえならば、おまえたちならば、人理補正式ならば、この星の人類に足りない要素を満たし、次のステージに引き上げてくれると信じていた。実際、おまえたちは人類悪とそれを打倒できる英雄を生み出してくれた」

兵藤一誠とアーシア・アルジェント。

誰でも良かった。そう、本当に誰でも良かったのだ。人間から生まれた神さえ殺す魔王が必要だった。人間から逸脱せず魔王さえ滅ぼす勇者が必要だった。この二つに辿り着くための生贄が必要だった。

「次に、俺は愛しい女王を信じていた。俺を愛し、俺が愛し、されど俺を裏切り、俺が殺したあの女を信じていた。俺には分かる。あいつが残してくれた何かが、この蛇の計画を狂わせたのだと」

「貴様……！」

「ああ、でも、本当、どうしてなんだろうな。どうして――あいつは俺を裏切ったんだ！　どうして、あいつは俺の計画をここまで狂わせた！」

あの日の真実が、どうしてもソロモンには分からなかった。思い出せないのではない。最初から分からなかったのだ。神の叡智があったのに。神の視点があったのに。ソロモンはあの日の真相が分からなかった。

どうして、シバの女王がソロモンの理想を否定したのか分からなかった。どうして完成間近の『真理』にあのような細工をしたのか分からなかった。生まれて初めて、憤怒に飲まれて人間を殺した。

「あいつを殺したのは――あいつを唆したのは一体、誰なんだ！」

サマエルだけが女王の裏切りを知っていた。当然だろう。聖書の神は最後までシバの女王の思惑に気づかず、逆にソロモンの共犯者たちはソロモンの本心に気づいていなかった。

「それから、俺はライダー、アストルフォを信じていた。彼は人間だの悪魔だのを度外視して、自分がやりたいようにやると。確率的には聖書の方に味方する。この予想は現実となり、彼は絶好のタイミングで魔王どもをこの場に送り込んでくれた」

これこそが、ソロモンがアストルフォという制御不能な理性蒸発騎士を召喚した理由だった。魔術王は騎士が自分を裏切ると確信していた。だからこそ、盤面を整えるための駒として機能すると断言できた。

「そして、この世界とは微妙に違う並行世界の来訪者――アーチャーの棺桶を引き継いだ誰かを信じていた！」

「ど――」

どこで知ったという言葉さえ遮って、ソロモンは溜まらないという衝動を隠そうともせずに宣う。

「ああ、その様子だと本当に来ているんだな！　確証などなかった。確信などなかった。痕跡もなかった。否、来ているという予兆さえどこにもなかった！　顔も名前も知らない彼あるいは彼女はよっぽど優秀なのだろう。だが、そんなことは関係ない。そんなことは大差ない。アーチャーはああ言っていたが、ああ言っていたからこそ、あいつの志を継ぐ誰かがいると俺は強く信じた！　あのような男の死を無駄にするほど、人間が終わっているものか！」

ソロモンはセイヴァーの存在など知らない。アーチャーは彼のことを話さなかったし、己の死後に彼が成した大偉業も知らなかったのだから当然だ。だが、ソロモンはアーチャーの信念を誰かが受け継いでいると本気で信じていた。理論はない。根拠などない。ただ――絶対にいるはずだと妄執を抱いたのだ。

現実、セイヴァーがいたからこそ、この状況がある。

「何より、俺はこの世界の人類を信じていた。彼らの、いいや！　俺たちの積み上げてきたものこそが、積み重ねてきたものこそが、俺を、人類を未来に連れて行ってくれると！　輝かしい世界を約束してくれると、信じ抜いてみせた！」

醜い苦痛を産み落としてきた。汚い悲痛を吐き捨ててきた。だが、逆を言えば、それと同じくらい美しいものを積み上げ、尊いものを積み重ねてきたのだ。その人類史の成果は、ひとつの男によって穢される。

「何でだよ。何でなんだよ、父さん！」

「ああ、そう呼んでくれるか。ああ、我が計画を理解してくれたか。愛しい我が子よ。我が星の落胤よ。我らの三千年の成果よ。ならばどうか、我が理想に共感してくれ。ともに祝砲を上げようじゃないか」

ソロモンは自らの胸の上に手を置く。その表情は恍惚としていた。悲哀も諦観も絶望も憎悪も憤怒もない。純粋でありながら歪な歓喜に溢れていた。

「ようやくだ。ようやく人類は神代（ここ）ではない、人理（どこか）に進むことができる！　ありがとう、本当にありがとう！　俺はおまえたちを信じて良かった！　やはり俺こそが正しかったんだ！」

そう笑い、哂い、嗤い、笑って。

「これで俺の理想が成就する。あまりにも長い旅路だった。あまりにも長い三千年だった。やっとだ、やっと俺は償える。これで、俺は主を超えられる。おめでとう、人類！　君たち自身の力で、俺は君たちが望んだ神様になれる！」

ソロモンは己の心臓を魔術で潰した。

最終宝具『真理を未来に』起動。

ソロモン

すべては、三千年前から始まった。すべては、我が誕生から始まった。

己の産声よりも早く、この世界に溢れる悲鳴が耳に入った。

おぞましい、と思った。痛々しい、と泣いた。

この世界は悲鳴で溢れていた。この惑星は悲劇で満ちていた。我が種族――人間という生命は悲痛に支配されていた。

それが人間を起点にしているならばいい。

俺たちは不完全だ。俺たちは進化の途中だ。どれだけ傷を負うとしても、どれだけ痛みを伴うのだとしても、それが本当に輝かしいものを掴むための代償だとするならばいい。理想に辿り着くための犠牲ならば、人としてはともかく王としては納得するしかない。

だが、悲劇の起点が人間ではないナニカ――神や悪魔、異形であるというならば話は別だ。

悪魔に弄ばれた子どもの亡骸を抱いたこともある。

堕天使に壊された女性の頭を撫でたこともある。

神の試練に敗れた戦士の死を悔やんだこともある。

異形の抗争で荒れ果てた村を前に祈りを捧げたこともある。

俺は必死だった。俺は本気だった。俺は全力だった。

俺が守らなければならない。俺が救わなければならない。俺が導かねばならない。俺が、俺が、俺が、俺が、俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が俺が！

俺がやらねば誰がやるのだ？

どうして、俺以外は誰もしようとしない？

無能どもが。無慈悲な王どもが。

『助けてください』

『悪魔が奪っていきます』

『神は助けてくれません』

『天使も何もしていません』

『哀しいことばかりです』

『苦しいことばかりです』
『どうして、私たちばかりがこんな目に』
『どうして、俺たちだけがこんな地獄に』
故に、俺は神になることを望まれた。生まれながらの王として完成していた俺こそが、人類にとって最高の神になると認識されていた。俺自身、そうなるしかないと思った。
『ソロモンよ、貴方様こそが我々の神になるべきだ』
『貴方が神になってくれたら、きっと全てが良くなる』
『貴方以外の神はいらないから』
『どうかこの星を貴方が統べて欲しい』
すべてを、人類の未来のために費やした。
神々の方も、俺という新しい神、新しい秩序を望んでいた。その方が効率的に人間を支配できると考えたからだ。
他の兄弟を蹴落とし、玉座を手に入れた。
ファラオの娘を娶り、主より指輪を賜り、守護天使として遣わされたベリアルを懐柔させ、悪魔からの監視として出向いたアスモデウスと結託し、ベルゼブブに信頼関係のない盟約を結んだ。
『我は、愛とは主を超えるべきだと考えた。それを主に否定された。故に、おまえの夢想を信じよう』
『俺は、人間を愛したかった。人間に愛して欲しかった。だが不可能だった。故に、おまえの理想にすべてを託そう』
『私は、ルシファーを超えたい。故に、おまえの妄想に付き合おう』
あの女に出会った。
『貴方がソロモンですね？　神より叡智を授かった人間の王。シバという国から参りました×と申します』
そして、己の目を異世界を見通す千里眼に作り替えた。
だが俺は知ってしまった。
他の世界の輝きを。
この世界のみっともなさを。
ああ、俺の世界は醜い。

此処とは違う世界を見たのは、価値を比べるためではなく、手段を模索するためだった。

だが、この異世界を見通す千里眼が、俺の信念を否定した。この世界の人間は、俺が見たどの世界の人間よりも価値がなかった。

同時に、肯定してくれた。俺の思想――人間には無限の可能性があると証明してくれた。

数多の世界を見た。数多の希望を知った。

どこにでもいる普通の少年がどこにでもいる普通の少女とともに世界を焼き払った獣から世界を救う聖杯探索――だけではない。

自身の内から湧く感情に従って真っすぐに進もうとする少年がいた。未来のために、己の限界や仲間の死を超えようとするものがいた。血筋の宿命に立ち向かう兄弟がいた。悲劇を断とうと因果に逆らう少女がいた。非力であるが故に、絶対的なものを打倒した逆転があった。悪意や敵意に戦いではなく心で分かり合った奇跡があった。言葉で語ることが無粋なほどの絆があった。過去に託され、未来に願うという連鎖があった。

生きるために、生き抜くために、守るために、守り抜くために、愛するもののために、愛してくれるもののために。

人間というやつは、どうしようもなく輝かしい。

俺たちもああなりたい、ああなれる――あれを超えるべきだ。

他の世界の輝きの一方で、この世界のある可能性も俺は見てしまった。ああなってはならぬという結論に至ってしまった。あの未来だけは回避すべきだという決定を下してしまった。

最も愛した女が俺を裏切ったこともあり、俺は『真理』を作り替えることにした。

元々、俺は神になるつもりだった。だが、愛しい女王が『真理』に施した呪いによって、俺が神に成り上がる手段は閉ざされた。

故に、俺は別の手段を用いることにした。

俺は――人類を信じることにした。彼らがこれから何千年と積み上げていくものこそが、俺の理想を実現してくれると信じて、『真理』

を組み替えた。
最後に、神の怒りに触れて『システム』にくべられたら完成だ。死体という完全なアリバイのある状態で、『システム』に干渉すれば良いのだから。
リゼヴィムからルシファーの細胞は受け取った。サマエルの魂は手に入れた。並行世界とは違い、この段階で『真理』は健在。資源も機関も完璧だ。『システム』の主導権は握っている。
エネルギーは手に入れた。『真理』が集め続けた世界中の人類史と神話の膨大なエネルギー、その半分。保険として用意した泥とは対を成す、善性の上澄み。実に千五百年分のエネルギー。本来であれば、神を創り出すのにはこの三倍はいる。だが、俺は神の座を奪うだけだ。すでにある神の型に俺という魂を入れるだけだ。ならば、千年分のエネルギーで事足りる。
そして、俺は『真理』の原罪を担う。
最悪なる神の屍の先を超えることで、真の人類史が開闢されるのだ。
――ソロモンよ。
ようやくお出ましか、主よ。
だが残念だ。貴方はすでに俺に敗北している。このために、ビーストD／Lが必要だった。あの獣の敗北により、貴方は自らの絶対性に疑問を抱いてしまった。『真理』とはこれ即ち絶対の理。貴方の中で、貴方の絶対性が歪んでしまった。
天使の裏切りや悪魔の叛乱、他の神話の神魔の凶行ではどうやっても無理だ。貴方には奴らにそれほどの関心がないのだから。俺やモーセを始めとする、貴方が最高傑作と呼ぶものたちが貴方から離れていくことさえ、他の人間や異形のせいだと断じている。
そんな貴方の自分への自信を崩すには、期待される獣が必要だった。貴方さえもあの獣には期待していたのだから。俺は、そういう並行世界を見てしまった。
俺は泥によってビーストが生まれるのならば、誰でも良かった。誰でも良かったが……あの薄汚い悪魔が犠牲になるのならば最高だっ

た。あんな汚らわしい生物が、我が偉業の生贄となるのだから。あの男が棄てた人間の輝きが証明される礎となるのだから。感謝こそされ、恨み言を向けられる筋合いなどない。

俺の計画が一から十まで失敗した世界において、あの男は黙示録の獣と邪龍、明けの明星を継ぐ魔王が戦役を引き起こす発端となった。外なる邪神メルヴァゾアが襲来する元凶だ。だというのに、誰もあの男を責めようとしない。誰もあの男に償わせようとしない。誰もあの男を罰しようとしない。何故だ？

トライヘキサが、アポプスやアジ・ダカーハが、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーが、メルヴァゾアが奪った生命と平穏、それらすべてはあの男の原因だろう？　誰も彼も、兵藤一誠ひとりが殺したも同然だろうが。

あんな不愉快な世界の実現など、俺は断じて認めない。

そのための三千年だった。あの未来が間違いであると証明するための、あの末路が醜悪であると断定するための俺と人類の三千年だったんだ。

――ああ、そうだ。私はあの獣に……否、兵藤一誠に期待を抱いた。それが崩されたために、おまえは私の原罪を奪うのだろう。奪えるのだろう。私は理解した。私は納得した。私は何かを間違えていたのだと。それが何かは理解できないが。

だろうな。貴方はそういう方だ。

だからこそ、俺は『真理』の原罪を貴方に背負わせたのだ。俺はあくまでも『期待』の獣の片割れとして人類を育てるために、今日この場で奪うために。

――しかしな、ソロモンよ。それはおまえも同じだ。何が、と問われたら返答は難しいが、おまえも何かを間違えている。私も、おまえも、サマエルも、シバの女王に計画を狂わされたように。

愛しい女王か。確かに、あいつが何を考えていたのかは俺にも分からない。しかしだ。

「邪魔だ、役立たず。そこをどけ」

もはや貴方に用事はない。ようやく天の玉座を手に入れた。

これですべてが報われる。これですべてを始めることができる。
――ソロモンよ。私は間違えていた。
――だが、おまえも間違えているのかもしれんぞ？
そんなはずはない。
何故ならば、人類は俺を此処に連れて来てくれたのだから。
だから、今度は俺が人類を其処に連れていく。絶対にして至高の極点に。

■

「そういえば、だ。一つ謎があるな、ガブリエル」
獅子王アルトリアは最後の熾天使となったガブリエルに問う。
「シバの女王は何故、ソロモンを裏切ったのだ？」
「え？」
「ん？」
そんな簡単なことは理解していたものだと思っていたガブリエルは苦笑する。
「シバの女王はソロモンに神になって欲しくはなかった。最初からそうだったのか、途中からそうだったのかは知りませんが、とにかく。彼女は女王としてではなく、ひとりの女性として、最愛の人が人類史の生贄になることに耐えられなかった。ただ、それだけです」
「そうか」
なんて当たり前の感情。なんて有り触れた動機。
まさか世界を狂わせるだけの狂乱の起源が、愛しい人が自分から進んで犠牲者になろうとするのを止めたかっただなんて。
いつだって世界を救うのも、世界を滅ぼすのも、悪意ではなく愛なのだ。
だから。
『――それは、聞きたくもなかった真実だな』

その愛を向けられたはずの男は、一層憤怒を濃くした。
「……え……？」
「馬鹿な」
その声を、この二人は知っていた。
仮に声の主が聖書の神ならばこれほど驚きはしなかっただろう。だが、よりにもよって何故おまえの声がするというのだ。どうして『システム』から神以外の声がする。まさかこれがおまえの理想の正体だとでもいうのか――！
起きるはずのない『システム』が起動する。まるで本来動かない機関さえ巻き込んで暴走するかのように、歪な音と膨大な光が放たれる。
「そんな――そんなはずはありません！　機関もエネルギーもないはずです！　こんなことが……！」
『それは間違いだ。だからこそ、俺はこうして此処に目覚めるのだから』
「地に増え、都市を作り、海を渡り、空を割いた。何の、為に……。聖槍よ、果てを語れ！　」
これこそは、嵐の錨にして世界の表皮を繋ぎとめる光の柱。
「最果てにて輝ける槍（ロンゴミニアド）！」
元より神の領域に届く聖槍の一撃。まして今の彼女は赤龍帝の力、倍加を使用できる。アグレアスを貫いたように、天地開闢に近い一撃を再現することさえ可能だった。
しかし、極光は健在だった。
『無駄だ。星を繋ぎ止める程度の槍では、俺には届かない。二天龍如きにやられたあの役立たずとは違うのだよ』
光が止むと、そこには人の形をしているだけの獣がいた。
「ははは」
頭部には、罪を象徴する角。
「ははははははははは」
顔面には、激怒を宿した笑顔。
「ははははははははははははははははははははははは!!」

神に成り下がった王は哄笑を上げる。
「喝采の時間だ。人類よ、誇るがいい。君たちこそが、どんな生命よりも尊いのだから。君たちは神さえ作り上げた。俺という絶対にして至高の神を。――だから、君たちは俺を倒すこともできるはずだ。それを以って、我が計画の達成とする。人類史の過去、現在、未来を費やして、俺を滅ぼしに来るがいい！　そうすれば、君たちは必ず俺を倒せる！」
この神はそう断じた。この獣はそう定めた。
ならば、この獣の思想こそが真実なのだ。この獣の理想こそが現実なのだ。

これこそが最悪の人類悪。

御身の再臨を以って、彼のクラスは決定された。
「この星は完成する」
唯一神など偽りの座。
「あらゆる真実は我が手に落ちた」
其は人間が誤認し、人類史に最も災禍（ビースト）を導いた大災害。
「称えるがいい」
その名をビーストX。『真理』の理を持つ獣。
「我が名はソロモン――」

誰もが縋り、誰もを貶めてきた絶対の理。（たすけをもとめるてを　ふみつけたわるいおうさま）

「――人理否定式・唯一神ソロモンである！」
それこそが、ソロモンの真の獣性である。

■

「ゼパルより弾劾。此度の敗北は――」
「黙れゼパル！」

「我々はまだ敗北などしていない」
「時間は残されている」
「手段は残されている」
「勝機は残されている」
「我らの極点への道は、まだ閉ざされていない」
「だからおまえはゼパルなのだ」
「ゼパなんとかめ、ぺっ！」
「ぺっ！」
「ぺっ！」
「ぺっ!!」
「もういっそ名前をゼペっ！　なんとかに改名してはどうだ？」
「そろそろ泣くぞ？　本気で泣くぞ？　いいのか？　人智を超越した魔術式が恥も外聞もなく泣き叫ぶぞ？」
「此処には我々とオーフィスしかいない」
「英雄派を始めとしたものは出払っているからな」
「泣きたければ勝手に泣くがいい」
「否、そも、ゼパルが魔神柱でなくなれば問題ない」
「後釜はオーフィスにしよう」
「前任者のゼパルは速やかに引き継ぎの準備をして退職届を提出するように」
「七十二柱ってそういう制度ではないのだが!?」
「我、頑張る。わーい」
「待て、オーフィス。喜ぶな。駄目と言えないだろう……！」
「サレオスより確認。現状は推測されたパターンにあったか？」
「マレファルより解答。存在した。想定された最悪から八番目のパターンである。無論、過程は度外視した評価ではあるが」
「ムルムルより質問。対処すべき手段は用意されているか？」
「ウェパルより返答。対処可能ではある」
「フルフルより補足。第二百十八作戦が該当する」
「ハルファスより通達。この作戦には失敗は許されない。全同胞の同意なしに実行は許されない。他の手段を検討する」

「ガープより否定。この作戦以外にソロモンを止める術は、否、この世界を救済する術はない」
「アガレスより評価。聖書の神ではなくソロモンならば、この作戦の成功確率は著しく向上する」
「アンドレアルフスより計算。実に七倍である」
「グシオンより疑問。この作戦の最悪と最善はどの程度か」
「シャックスより解答。最善で十二、最悪で零である」
「アムドゥシアスより歓喜。随分と楽観的な想定である」
「キマリスより同意。この作戦の実行を中止する意味がなくなった」
「バアル」
「まさか私に、あの平凡な男以外から逃げろなどとは言わないだろうな？」
「――アンドラス」
「この戦いは、死ぬためではなく、生き抜くために」
「――フェニクス」
「本望である」
「――ラウム」
「我が命題の証明のために」
「――フラウロス」
「もはや言葉など不要だろう」
「バルバトスより報告。七十二柱の全同意を確認」
「……」
「……」
「……」
「逝くとしよう、我らが極点に」
第二次逆光運河・創世光年『聖書推敲』を最終段階に移行する。

ソロモン七十二柱

生命の呼吸がほぼ完全に途絶えた冥界にて、トライヘキサは溜め息を吐き出した。地獄の炎のせいか、己の息がひどく熱い。

「おまえは行かないのか、黙示録の獣よ」

ほんの数秒前までゲーティアがいた場所を眺めながら、カルナはトライヘキサに問う。

「いいよ。なんか、邪魔っぽいし。ひょっとしてなんだけど、この状況って予想してた？」

「この事態はおおよそ予測されていたもののひとつだ。今回、俺たちのマスターはあまりにも他者に先手を打たれていた。だからこそ、後出しで勝つための手段を星の数ほど備えていたのだ。どうやら予測された事象の中に当てはまるものがあったらしい」

頭の良い奴は違うねー、とトライヘキサは嘆息する。暴力と破壊の権化であり、負の感情から生まれた自分には出来ない芸当だ。

「じゃ、後は任せるよ。これ以上、黒歴史を増やしたくないしな。……あー、何で父さんなんて呼んじゃったんだろう」

「必然ではあるだろう、黙示録の獣よ。おまえは人類に期待し、その期待を人類は超えた。だからこそ、おまえは自らの父にも期待を抱いたのだ。――ひょっとしたら、あの男は自分が思い続けていたよりも良い人間なのかもしれない、と」

「えぇ～」

心底嫌そうな声を上げるトライヘキサ。だが、否定の言葉が思い浮かばない。否定の手はないが、事実と認めるのもひどく癪なため、話題を変えることにする。

「それより、そいつのトドメ刺さないでいいのか？」

「この男は王だ。ならば王として、最期の言葉を発する権利はある。そして、すでに二柱の魔王を滅ぼした者として、最後の魔王の言葉を聞く義務が俺にはある。その終わりを看取り、伝える責任がある」

トライヘキサとカルナの視線の先には、瀕死のサーゼクス・ルシファーがいた。最強の魔王、突然変異体、前ルシファーの十倍強いと

言われた男は、虫けらにすら殺せそうなほどにボロボロだった。
「何故だ」
そんな状態にもかかわらず、サーゼクスは慟哭を交えて叫ぶ。この理不尽な惨劇に対して、己の意志を訴える。灰燼レベルに消滅させられ、亡骸すら残っていないアジュカとセラフォルーの死に絶望しながら。
「私は、悪魔を、冥界を守りたかっただけだ。悪魔という種族の平和を守りたかっただけだ。誰もが平和を求めているはずだ。誰も愛しい者の死など望んでいないはずだ。私もそうしたかっただけだ。我々はそうしてきただけだ。そこに何の間違いがある――！」
「おまえの語る平和を望むのはおまえを愛する者だけだ」
正しくはあった。だが、その何倍も間違いがあったと施しの英雄は語る。
「おまえが手を取り合いたいと願う者たちは、おまえの破滅さえ願っていた。おまえは己の愛を示すばかりで、他人の愛を知ろうとすらしなかった。ならば、この結末は必然だ」
おまえの愛は、名も知らぬ誰かを救えない。名も知らぬ誰かを救うつもりがないというのなら、おまえの愛は平和を導けない。何故なら、他人の平和を奪うことでしか、自分の平和を築けなかったのだから。自分の平和を築くことで、不幸になる他人を気遣うこともなかったのだから。おまえが手を差し出したのは、自分の平和を肯定してくれる者だけだっただろう。
誰もが平和を願っているというのは、ある意味では正しい。しかし、おまえたちが幸福に生きているだけで、平和ではないと断じる誰かがいる。
「おまえら、中途半端に人間の真似してっけどさ、無理だからな？　人間と同じやり方じゃ悪魔は――神話の世界は回らない。人間と俺たちには致命的な違いがある。それは寿命だ」
そんな風に語るのは、トライヘキサだ。
「寿命が短いってのは決して悪い面ばかりじゃない。世代が変わるのが早いってことは、価値観の変化が早いってことだ。だからこそ、人

間は過去のことを忘れられる。過去の憎悪を、先人たちの因縁を切り捨てることができる。無駄に受け継いじゃう場合も多々あるけどな。……だけど、悪魔じゃそうはいかねえ。いいか？　当事者が生きてんだぜ？」

　被害者も加害者も生きている。聖書の勢力に臣民を殺され、財宝を奪われ、領土を穢され、神話を貶められ、矜持さえも消された。神話に名を連ねた神魔は別に滅ぼされたわけではない。オーディンもゼウスも帝釈天も生きている。そして、異世界のソロモン七十二柱が襲撃するまで、初代七十二柱だって生きていたのだ。初代以外の古参の悪魔だって、つい先ほどまで生きていた。

「神や魔王は死んでいたから仲良くしましょう、じゃねえだろ。寿命が長いくせに何回も世代交代している勢力なんて、悪魔くらいだぜ？　アザゼルやミカエルだって原初の時代から立場変わってねえだろうに」

　それこそ、悪魔は現代に初代の七十二柱さえ生きていた。寿命は一万年ある。だが、幾重にも世代を重ねてしまった。引退した悪魔は政治に口を出すというのに、悪魔達の価値観は変わってしまった。他の神話を置いてきぼりにして、自分たちの罪を忘れようとした。そんな無責任な進化が許されるはずもないのに。

「最後まで醜態を晒すな、悪魔。然るべき者の手により、疾く消え去るがいい」

「じゃあな、パチモン魔王。仲良しごっこは、ゲーティアたちみたいに、どっかで生まれ変わってやれ」

「――いいや、まだだ。私だけではない。人間界にリアスたち若き悪魔がいる！　否、それ以前に！　悪魔を滅ぼした貴殿らを、許すわけにはいかない！　過去と未来のために、せめて貴殿らを道連れにしよう……！」

　サーゼクスの言葉に呼応するように、死んだはずのベルゼブブが動いた。

■

その日、その瞬間、この星のすべての人間を強烈な頭痛が襲った。
男女も老若も美醜も貧富も民族も国家も職業も能力の優劣も信心の強さも関係なく。食事中や睡眠中、入浴中だろうと遠慮なく。病人や罪人も差別なく。世界の裏事情を知っていようと知っていまいと容赦なく。文字通り、すべての『人間』をその頭痛は襲った。
英雄派や教会の戦士、半妖、転生悪魔や後天的吸血鬼さえ含まれていた。
『世界中の人々よ。我が声が聞こえるか』
頭痛とともに、その声は響いた。
『我が名はソロモン。人理否定式・唯一神ソロモンである』
その名乗りに対して、ほとんどの人間は「何故」と思った。何故、古きイスラエルの王が神を騙るのか。だが、その疑問が形になる前に、神は人々に命じる。神の名を以って、試練を与える。
『突然だが、俺は人類を滅ぼしにかかる。我こそは人類の敵。おまえたち人間にとって不倶戴天の化身である。俺と戦え。俺に挑め。俺を倒せ』
これは天啓。
『王に、そして神に縋り続けてきたおまえたちには、戦う責任がある。祈る権利を使ってきた人類には、神を下して進化する義務がある。誰ひとり、例外など許さん』
もしもジャンヌ・ダルクが聞いたという神の声が同じならば、彼女に戦争から逃げることなどできなかっただろう。聖なるものだからではない。正しいものだからではない。振り払うことができないほど、重く苦しいものだからだ。
『戦え。逃げるな。戦え。戦え。諦めるな。戦え。戦え。怯えるな。戦え。戦え。戦え。戦え。他人に頼るな。戦え戦え。戦え。戦え。戦え。おまえが戦え。戦え。戦え。戦え。戦え。手を取り合え。戦え。前を向け。戦え。戦え。戦え。戦え。戦え。俯くな。戦え。戦え。戦え。絶望するな。戦え。戦え。戦え。戦え。戦え。戦え。戦え。戦え。目を背けるな。戦え。戦え。戦え。

座るな。戦え。戦え。戦え。戦え。戦え。戦え。戦え。戦え。戦え。戦え！　戦え!!　おまえたちは戦わなければならない！　戦って、自分たちの価値を証明しなければならない！　俺を倒すことで、自分たちの時代を手に入れなければならない！　だから戦え！　死ぬまで戦え、死んでも戦え！　死に続けてでも戦い続けろ！　滅びたくないなら、滅んででも俺を倒せ！』

なんて理不尽。しかし、人々はそれに逆らう手段がない。否、大前提としてこの頭痛に抗う手段がないのだ。悲鳴を上げることさえ許されない激痛。対応する自由さえなく、拒絶の隙さえない。

全人類に、唯一神の呪いが向けられていた。

『戦え。戦え！』

しかし。

その必要はない、と響く声と同時に頭痛が消えた。

■

「彼らがおまえに挑む必要など、ない。おまえはここで終わりだ」

天界に転移したゲーティア。

そんな彼を出迎えたのは、唯一神ソロモンだった。聖書に記された父なる存在ではなく、たったいま誕生した最新の神。かつて魔術王と呼ばれた人間。この星で最も罪深い獣。

「遅かったな、ゲーティア。……いや、天界の結界の構造は流石に面倒だったかな？」

ソロモンの呼びかけには応じず、ゲーティアは視線を他のふたりに向ける。

「ひどい有り様だな、槍の女神」

おそらくゲーティアが来る直前までソロモンに抵抗していたであろう女神ロンゴミニアドと熾天使ガブリエルの姿があった。ガブリエルは意識がないのか地に伏して呻いてすらいない。女神はそんな

天使を庇うようにしているが、彼女自身も血だらけだった。
「確認するが、我が槍は必要か？」
「不要だ。共同戦線は有り得んと言ったのは貴様だろう。その様では邪魔にしかならん。近い内に、貴様の首を我々の知る者が取りに行く。貴様は、彼らの挑戦を首を洗って待っていろ」
「そうか。できれば、貴殿の目論見は私が破りたかった。かつての借りもある」
「第六特異点のことならば、あれは貴様が勝手にしたことだろう。その結果があれなのだから笑ってしまうよ」
ゲーティアの言葉を背に受けながら、女神はその場を去る。当然意識がないガブリエルも連れて。
女神と熾天使の逃走を止めもせず、唯一神ソロモンは見過ごす。そして、ゲーティアを見た。ゲーティアもまたソロモンを見た。
「歓迎するぜ、ゲーティア。なあ、最後のチャンスだ。俺と一緒に人類を導いてくれないか？」
「……」
「おまえならばできる。魔神王では無理だろう。だが人王なら可能だ。実際、おまえは現代の聖槍の持ち主をあれほどの男にしてみせた。それも半年ほどの時間でだ。だから――」
「断る」
ゲーティアはソロモンの言葉を遮る。この問答は時間の無駄だと切って捨てる。
「貴様の妄言にこれ以上付き合うくらいなら、今日この場で滅ぶことを選択するよ。そのために、我々は、否、私はここに来たのだから」
「あー、だよなあ。そうなるか」
ソロモンはその回答を予想していたが、ゲーティアが自分の理想を肯定してくれることもまた期待していた。結局、決裂の道になってしまった。だが、それもまた必然。人類史を滅ぼそうとしたからではなく守ろうとして犠牲となった。そんな終わりを与えることが、ソロモンがゲーティアにできる唯一無二の償いである。
「先に言っておくが、俺を第一宝具で倒すのは不可能だぞ？　神に成

り上がったからじゃない。おまえたちの指輪は俺の指輪じゃないんだから。同じような生まれ方をしたトライヘキサには通じたかもしれんが、あれで俺を道連れにはできない」

「ああ。我々も指輪を返還するつもりはない。そも、神が敵で、我々がいる場所は天だ。返還の再演などしても滑稽なだけだろう」

「だな。だったら、あれを使うつもりか？　星を焼く光帯。第三宝具、原罪のI！　おまえにそれがあるように、俺にも宝具がある。俺が残した、俺が示した魔導書群と同じ名を冠する最強宝具が！」

悪魔の書ゴエティア。悪魔と精霊の書テウルギア・ゴエティア。精霊の書アルス・アルマデル・サロモニス。星と精霊の書アルス・パウリナ。祈りの書アルス・ノヴァ。これらを総じてソロモンの小さな鍵、あるいはレメゲトンと呼ぶ。

ソロモンが後世に残した呪いの正体。神代歪曲の真実。

「証明させてくれ、ゲーティア。俺の、俺たち人類の三千年が！　地獄の生命なんぞに負けるはずがないのだと――！」

人間は悪魔如きに負けなかった。堕天使風情など相手にならない。人間は奴らよりも上だったのだと、その死を踏み潰すことで証明してみせる！

「ほざけ。おまえは最初から最後まで誰にも勝てん。人間の分際で三千年も何にしがみついている！」

おまえの時代はとっくに終わった。おまえの玉座はとっくに誰かが受け継いだ。それ以上の行いは蛇足だ。夢想を抱くことさえ間違いだ。

「我が理想を、我が生涯の真実を知れ。すべては君たちの未来のために。ここではない何処か、素晴らしき未来に辿り着くために――！」

「ではお見せしよう。貴様の妄想の終わり、聖書推敲の瞬間――我々が出した人類救済の解答を！　第三宝具、改演。さぁ、芥のように燃え尽きよ！」

魔術王から成り上がった唯一神と、魔神王から転じた人王がお互いの切り札を解放する。

「真理は未来に（トゥルー・レメゲトン）！」

宇宙を歪めた法則が、次元の穴をこじ開ける。
そこから零れ落ちるのは、およそ分類など不可能な何か。あるいは歪み。あるいは軋轢。あるいは廃棄物。あるいはダークマター。あるいは魔術王の呪い。
「誕生の時来たれり、其は全てを修めるもの！」
惑星を焼く光帯。世界一つ分の生命を犠牲にして手に入れた熱量。その規格外のエネルギーを、ゲーティアはこの攻撃のためだけに転用する。次元の歪みの穴を、時空を滅ぼす熱量で穿つ。
「　　」
天界全体が歪んだ。比喩なしで、空が割れた。いつぞやのソロモンの固有結界内であったキングゥとロンゴミニアドのぶつけ合いなど比較にならないほどの、エネルギーの衝突。
しかし、それはほんの一瞬。
「え……？」
「――――ッ」
立っているのはソロモンで、地に膝をついているのはゲーティアの方だ。人王の風貌に覇気はなく瀕死状態。それこそかつての時間神殿で藤丸立香と最後の戦いをする前以上にボロボロだった。
だが、そんなゲーティアを見てソロモンは首を傾げる。
「ん？　んー？　おかしいな。いくら何でもこんな簡単に競り勝てるはずがないんだが」
呆気ない。拍子抜け、とは違う。何か薄ら寒いものがソロモンの背筋を走る。
わざと負けた？　かく乱が目的か？　実は背後にアサシンでも潜んでいるとか？　否。否。否。それならばわざわざ真正面から攻撃を受けた意味はない。正面から対峙しなければならない理由があるはずだ。それは何だ？『真理』に第三宝具を打ち込んだ理由は何だ？　自分は何を見落とした？　唯一神たる己が、何を見過ごした？
「は、はは、こんな展開になるのは予想外だ。だが、この状況をこそ

我々は求めていた。ここまでくれば、時間を稼げば計画達成だ。あと少し、付き合ってもらうぞ」
「そりゃどういう意味――」
いくら何でも不自然に思い、問いかけようとするが、
「――ギィアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!?!?!?!」
突如として、神の口から悲鳴が飛び出た。
「ああ、あああああぁアアア!? があ、ひ、ひが、あ、ア、あああああああああ! な、なんだ、なんだ、これは! ぎぃ、ひ、ひひぃ! う、ううう、ううあああ、ぁ、アアああ!?」
全身を襲う激痛。まるで、体内を貪られるような痛み。毒蛇に噛まれ、皮膚が一瞬で膿んでいくような疼き。
ソロモンが、神の絶対性が、『真理』が、内側からグチャグチャになっていく。
「ああ、一体化しているとはそのレベルだったか。てっきり比喩的な表現かと思っていたが……『真理』という術式をその身体に内包しているのか」
「ゲーティア! おまえ、一体俺に――『真理(おれ)』に何をした――!」
問いながらも、ソロモンは理解していた。自分が何をされているのか。自分が、『真理』が、この世界の法則がゲーティアに干渉されているということが。そして、彼が何をするつもりなのか理屈も何もかもすっ飛ばして理解していた。だが、それを認めるわけにはいかなかった。何故なら、自分の理解したことが正しいのならば、それは他ならぬ自らの理想の破綻を意味するのだから。
「かつて、この身と七十二柱の魔神は聖書の神の呪いに蝕まれていた。その呪いはオーフィスの『蛇』に食わせることで対処したが、その『蛇』の処分には困ってな。オーフィスに戻すわけにもいかん。ならばいっそこれを利用しようとするのは当然の帰結だ。万が一、聖書の神が復活したらこれを食らわせてやろう、と」

体内を食い荒らされる激痛に耐えながら、ソロモンはゲーティアを睨む。

「……元々、再利用は得意でな。まさかこんな形で使うとも思っていなかったが」

この作戦の分岐点は、ビーストXが『真理』を使った攻撃をしてくるかどうかだった。正確には、『真理』が開かれるかどうか。もっと具体的に言えば――『真理』の内側に干渉できる隙があるか否か、か。

聖書の神ではなくソロモンならば確実に使用してくると踏んでいた。あの戦いを――第三宝具を白亜の城が防ぐ瞬間を見た王ならば必ず、宝具同士の打ち合いを望んでくると確信していた。

だからこそ、その攻撃に打ち合うのではなく、呪いを打ち込んだ。かつて彼が人類にそうしたように。

「聖書の神が相手ならば、こうはいかなかったかもしれない。だが、時間神殿での戦い。おまえが我々の世界、我々の偉業、我々の戦いを露骨に意識していることは明白だったからな。聖書の神に関しては、どこまで覗き見されたのかは不明だったが、おまえがあの時間神殿の戦いを見たことは明白だった。我々も憶測だけで確証はなかったのだが……どこぞの守護者になった男が教えてくれたよ。本人は、そんなつもりはなかったろうがな」

曹操。三国志の英雄の血を引き、神殺しの聖槍を生まれ持った男。特別な素質を生まれ持ったが故に、波乱の人生を歩むことを強制された彼。

並行世界の彼は、ゲーティアや魔神柱亡き後も戦い続けたという。諦めても良かったはずだ。逃げることだってできたはずだ。だが、彼は戦い続けた。戦い抜いた。彼はあのような言い方をしていたが、彼にだって守れたものはあった。彼がいなければ良かったなんてことは絶対になかった。

その証拠に、そんな彼には受け継ぐ者（セイヴァー）がいた。どこぞの医者に、藤丸立香がいたように。

かつて、曹操はゲーティアや教授との出会いにどのような思惑があるとすれ、それに感謝すると言った。ジャンヌやヘラクレスも変化で

きたと言っていた。だが違う。違うのだ。我々もまた、君たちの存在に救われたのだ。

良かった。本当に良かった。俺たちは確かに、この宇宙に何かを為したという結果を刻めるのだ。

「あの男と同じ名前を持つ神よ。書き換えさせてもらうぞ、おまえがこの宇宙の人類に与えた呪いを」

当初に求めた結果とはかなり違うが、選んだ道筋からは随分離れたが、予期せぬ障害や犠牲も多かったが、未練や恐怖、不満もないわけではないが。

それでも、我々(わたし)はようやく極点(おわり)を迎えられる。

「ゲーティ、ア……おまえ、自分が、自分たちが何をしているのか分かっているのか？　この星の三千年を無意味に貶めただけではない。この星の未来を台無しにしたんだぞ！　俺が、俺たちが積み上げてきた可能性を奪おうとしているんだぞ!?」

神の存在が歪められている以上、連鎖的に天界や『システム』も崩壊を始める。聖書の全てが、砂の城のように崩れ去ろうとしている。

「いや、そもそもこんなことが実現可能だとでも思っているのか。おまえが元にした主の術式は、俺がこっちの七十二柱を支配するのに使ったものの改造版だろう。あれは、所詮傀儡術の延長でしかない」

いかに優れたツールがあったとしても、何ができるかは使用者のスペックに依存する。山を砕くドリルが無限にあったとしても、星が壊せるはずがない。ゲーティアがやろうとしていることはそれくらい無謀なことだ。

「如何におまえが優れた魔術式と言えど、処理限界がある。七十二柱程度の魔神に、役割を放棄した人理補正式如きに、俺の『真理』が、俺たちの宇宙がどうにかできるものかあああ！」

「ああ、現状の成功確率は１２％だ。これが何を意味するのか、どんな愚者でも理解できる。――マイナスでない以上、成功するに決まっているだろうが！」

唯一神ソロモンの表情に笑顔はない。いつものように激怒したような笑顔ではなく、ただただ憤怒に染まった激情だけが浮かんでい

た。

それを受けて、ゲーティアは身体を起こして、笑んだ。

「掛かって来いよ、唯一神。お望み通り、あの戦いの再現をしてやろう。今度は我々(わたし)に勝ち逃げをさせてくれ……！」

「ゲーティアぁあああアあああぁアアアアア！」

「貴様が勝てば最初からやり直すといい。だが我々が勝てば貴様の妄想はこれで終わりだ。どちらにしろ――」

――この宇宙から人類悪という概念は削除される。

この独り善がりで、憐れむべき進化に終止符を。

〝悪魔〟

日本、某地方都市。

「な、何だったのよ、いまの……」

駒王学園に通う少女、桐生藍華は呻くように呟いた。

現在、彼女がいるのは自宅の自室だ。先程まで頭痛に襲われていた頭を抑えながら、身体を起こす。そこで藍華は自分が床に倒れていたことを理解する。

足元には先程まで読んでいた雑誌が転がっている。ページは『紛争地域に現れた謎の看護師集団』『現代のナイチンゲールか』『目撃者は語る。〝死神のような、天使たちに出会った〟と』という変な海外の特集だった。藍華は特にそれに目をやることもなく、頭を振るって意識を整える。

「ソロモンとか、唯一神とか、何なのよ……。戦えって、どうやって戦えばいいのよ……。いや、そもそも何と戦うのよ」

つい数秒前まで、彼女は『天啓』という名の呪いに襲われていた。その頭痛は幻聴としか思えない奇妙な声が聞こえていた。『ソロモン』だの『人理否定式』だの『戦え』だのという言葉が聞こえてきたのだ。藍華には覚えのない単語ばかりだ。かろうじて『ソロモン』がどこかの国の古い王様だと知っていたくらいか。

耳を澄ませば部屋の外が慌ただしい。家の外まで何か騒がしい様子だ。まさかこの付近一帯の人が同じ幻聴を聞いたとでも言うのか。

「いや、そうじゃなくて……」

現状で確認すべきことはたくさんあるが、少女は純粋にひとつの疑問を口にした。

「あの声は、誰のことをあんなに怒っていたの？」

■

この宇宙『D』において、現代使用されている魔術や魔法は、伝説の魔術師マーリン・アンブロジウスが悪魔の魔力を独自に解析し、人

間でも扱えるようにしたものである。
マーリン・アンブロジウス。言わずと知れた大魔術師。アーサー王伝説を始めとするウェールズの神話に多く登場する人間と夢魔のハーフ。
しかしながら、彼が生まれる以前からこの世界には『魔術』も『魔法』もあった。にも関わらず、何故、彼の作り出した系譜が主流となり、現代でも息づいているのか。これだけの影響力はどこから生まれたのか。否、そもそも何故マーリンは新しい形の魔術や魔法を生み出したのか。
その真実の一片を、魔法使い協会『灰色の魔術師』の理事、『番外の悪魔』メフィスト・フェレスは語り出す。
「――黙示録の獣トライヘキサ。世界の片隅で泥の中から誕生し、神の檻で眠り続けた彼を見つけ出せたのは、歴史上で三組。最初に二千年前、『神の子』、君たち人間が『あの御方』と呼び、僕たち悪魔が名を呼ぶのも憚る『彼』とその弟子たち」
神の子は黙示録の獣と戦うことを拒否した。倒す道を放棄した。いずれ、自分ではない誰かが彼を倒し、救ってくれると信じたが故に。
「順番が狂うが、最後が最近だ。あの鬱陶しいルシファーの息子、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーとその配下。一緒にどんな面子がいたかは知らないし、まあどうでもいいだろう」
黙示録の獣を見つけた明星の王子にどのようなドラマがあったとしても、本筋には関係のないことだ。本人たちが知っていればよいことだろう。
「そして、僕、メフィスト・フェレスとこの世界のマーリン・アンブロジウスだ。あれから千年と三百年ほど過ぎているのか。いやー、時が経つのは早いね。その間に、彼の考えた魔術系統がこれほど世界に浸透したのだから甲斐があったというものだ」
悪魔が滅んだ今日に間に合った良かった、とその悪魔は嬉しそうに呟いた。
「……ずっと疑問でした」
幾瀬鳶雄はこの悪魔の下を訪れた。ヴァーリの後を追うでもなく、

山の翁を足止めするでもなく、他の戦場の援護に行くでもなく。山の翁から教えられたソロモンと『真理』の真実を聞いて、何よりもこれを優先した。

神の天啓という名の頭痛から解放されたばかりの彼はよろめきながら口にする。

「番外の悪魔メフィスト・フェレス。ベルゼブブに匹敵する大悪魔で、原初の悪魔のひとり。ですが、その存在が語られるのは十六世紀頃からで、十九世紀初頭にゲーテが発表した戯曲がきっかけで世界に認知されたと言ってもいい。それこそ、人類が聖書を唱えた時代には誰も貴方の名前を知らないことになる。だけど、そんなことは有り得ないでしょう?」

それは質問であると同時に確認であり、糾弾だ。

「――ああ、そうさ。僕は『真理』を利用して自分の名前を人間界から消し去った。ソロモンにアスモデウスやベリアルという共犯者がいたように、マーリンこそが僕の理解者だった。すべてはこの時のために。いずれ訪れるであろう悪魔の滅びに備えて、世界の『魔術』を発展させるために。……ファウストはともかくゲーテにはしてやられたよ」

「備えていたというのは、いつからですか?」

「そんなもの、ギルガメッシュやモーセの時代、四千五百年前からに決まっているだろう?」

ソロモンが誕生するよりも更に昔。一万年の時を生きる悪魔から考えても、それは半生をつぎ込む巨大計画。

「僕は旧魔王たちのことは大嫌いだし、リリスから生まれたわけでもない。かと言って、人間の守護者でもない。無論他の神話の味方でもない。グレートレッドと同じ『星』の側だ。この宇宙観の抑止力の末端だよ。四千五百年前、悪魔こそがこの星の進化の礎になる道を選んでしまった。だからこそ、魔法や魔術といった概念を改める必要があった。滅びの日が訪れるまで、悪魔を最も有効利用できる道だった」

「……何があったんですか、四千五百年前に」

「それは――いや、君は知るべきではないだろう。君たち人間は知るべきではない」
それ以上何か言うつもりはない、とメフィストは瞑目する。
「君たちが知るには千年ほど早い。神殺しの救世主が生まれた世界ならともかく、この世界の人間に知る権利はない」
「では、話題を変えるのです」
「フォウフォフォ、ンキュ！」
そう言うのは、金髪碧眼の美女。『灰色の魔術師』所属の魔術師にして神滅具『永遠の氷姫』所有者ラヴィニア・レーニだ。ちなみに、彼女が両手で抱えている白い獣は鳶雄についてきた謎生物だ。
「会長はかつての魔王たちが嫌いだと言っていたのです。同時に、サーゼクス・ルシファーたち新しい魔王のことは好きだと言っていたのです。アジュカ・ベルゼブブとは『ゲーム』の関係で対立関係にあるといっても、彼本人に悪感情はないと」
「ああ。よく覚えているね」
「実はあれは嘘で、新魔王たちのことは嫌いだったのです？」
「いいや？　僕は彼らのことが大好きだよ」
ラヴィニアからの問いに、メフィストは首を横に振った。それに対して、白い獣が懐疑的な鳴き声を出す。
「フォ～？　フォウフォフォフォフォフォ～？」
「嘘じゃないよ。これまでだって今だってこれからだって、そこらへんの石ころと同じくらい大好きさ」

■

何の前触れもなく突然出現した相手を見て、サーゼクスは呆然とした。トライヘキサは目を見開いた。カルナは驚かなかった。
「シャルバ……？」
「そうだ、そうだとも。貴様らに魔王の座を奪われた負け犬だとも」
シャルバ・ベルゼブブだった。
おかしい。

何故なら、彼はすでに死んでいたはずだ。ソロモンに殺されたと、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーが言っていた。それに、何故今の今まで、彼の存在に気づかなかった？

「裁きの時だ、サーゼクス・ルシファー！」

驚愕から立ち直れないサーゼクスに飛びかかってマウントを取る。そして、その首を絞めつける。通常のサーゼクスであれば振り払うことができだろう。しかしカルナやゲーティアとの闘いで満身創痍になっている上、あまりに驚愕の事態に頭がついていかない。

「待っていた、待っていた、待っていたぞ、この瞬間を！　ああ、ようやくだ。ようやくおまえを殺せる――遅すぎるんだよ、馬鹿野郎が！」

その罵倒はサーゼクスにではなく、己自身に向けたもの。

「しゃ、るば、待て――」

「おまえには分かるまい、サーゼクス。同胞たるクルゼレイの身体をソロモンに奪われ、己も一度殺され、魂を実験材料にされた苦痛！　異世界の技術を試すための被験体にされた屈辱！　魂を人形に封じ込まれた屈従の挙句の果てに――幻霊などという下級な存在を混ぜ合わされた絶望！　それが理解できるかあああ！」

シャルバ・ベルゼブブの中には、ジャック・オ・ランタン、ジェヴォーダンの獣、ジャージーデビル、セイレーン、レプラコーン、透明人間、スプリガン、レッドキャップ、ラプラスの悪魔、ウェンディゴ、ビッグフット、犬神、天邪鬼、グレムリン――その他多くの幻霊が詰められている。その中には、この世界では英霊に届かなかった切り裂きジャックやオペラ座の怪人も入っている。

ソロモンがシャルバにこれだけのことをした理由は、ただの実験だ。魂と肉体に関する知識は『Ｆ』から仕入れた。自分が神になれるかどうかの、実験。魂の許容を試す実験。位相の昇華を知る実験。だから、ソロモンは最終的にシャルバを切って捨てた。一応は共犯者の末裔に何らかの感情があったのか。

もはや、彼が本当にシャルバというべきなのかは不明だ。肉体は人形で、魂はほとんど幻霊。精神も彼の裡から起こるものかは曖昧。し

かし、そこまで魂の純度を下げながらも、一つの感情だけは本物だった。この憎悪だけは薄れない。
「魂さえ穢される屈辱に耐えたのは、何としてでもおまえを殺してみせるというただ一点のみ……！　この瞬間を待っていた。私のような負け犬ですら殺せるほどに、おまえが弱るのを待っていた……！」
　冥界を滅ぼしたおまえを殺す、とシャルバは吠える。魔王の座を奪われたことなど、すでに些事だ。笑ってしまうほどどうでもいい。
「全部、全部、全部、全部！　全部、おまえのせいだ……！　冥界は、おまえが滅ぼした！」
「ち、違う！　シャルバ！　これは異世界の魔神による悪魔への攻撃であって――」
「いいや、おまえが滅ぼした！　おまえたち偽りの魔王が悪魔を滅ぼしたのだ！」
　シャルバは知っている。この冥界を焼いたのが誰であるか。そこにどんな目的があったのか。サーゼクスよりも知っている。
　だからこそ、犠牲者として戦犯を糾弾する。
「おまえが殺した。おまえが殺した。おまえが殺した！　おまえが殺したんだ！　私たち悪魔を殺した！　魔王でありながら、悪魔を滅ぼしたぁ！」
　偽りの魔王を断罪する。
「私たち真なる魔王が魔王として君臨していれば、このようなことにはならなかった！　我々悪魔はあのまま天使や堕天使と戦うべきだったのだ！」
「だが、あのまま戦えば悪魔は滅んでいた――」
「いいや、そんなことはない！　私たちの方がよっぽど悪魔を存続できたと主張できる！　なぜなら、おまえは現実として滅ぼしたからだ！　おまえのせいで、冥界はこのように焼き尽くされた……！　真なる魔王の闘争ではなく偽りの魔王たちの平和主義が悪魔を滅ぼした。それが紛れもない真実だからだ！」
　古き魔王として弾劾する。
「ぐあっ……！」

「私！　カテレアやクルゼレイ！　真なる魔王に付き従った忠実なる悪魔たち！　おまえに誑かされた貴族たち！　おまえのような非道な魔王に騙された憐れな民衆！　これからの冥界を築いていく若き悪魔たち！　冥界の子どもたち！　それら全て、貴様が殺した！」

ひとりの悪魔として、一個の生命として憎悪をぶちまける。

「や、やめ……」

「死ね、死ね、死ね、死ね、死んでしまえ！　よくも――よくも私を殺したな！　よくも私たち悪魔を滅ぼしたな！　悪魔もどきのバケモノめ！　バケモノはバケモノらしくひとりで死んでいれば良かったものを！　おまえが悪魔に混ざって生きるからこうなったんだ!!」

生まれた時から悪魔ではない。だったら、やはり、サーゼクスやアジュカが魔王になるのは間違いであった。悪魔ではないものに、悪魔の王が務まるわけがないのだ。

神に人が導けなかったように。

「違う、違う、違う違う違う違う！　わ、私のはずがない！　私が悪いわけがない！　だって、私は――」

「いいや、全部おまえが悪い」

だって、おまえがいなければこうはならなかったのだから。

たとえシャルバたちが魔王の座を追われることがなかったとしても、ソロモンの憤怒もサマエルの狂気も聖書の神の妄念もゲーティアの憐憫もトライヘキサの憎悪も止めることはできなかっただろう。だが、そこに込められた意味は変えられたかもしれない。

どれだけ思考を重ねたとしても、タラレバになってしまう。だが、この現実よりは価値がある。この燃え尽きた世界よりは救いがある。

サーゼクスのせいでこうなったのでなければ、希望も夢もないではないか。どうあっても悪魔が滅ぶなんて結末しか許されないではないか。この終焉が何かの間違いではないのならば、どうやっても悪魔には生きる権利がないと認めることになってしまう。

「嗚呼、すまない、全ての悪魔よ。この男を殺すことでしか詫びることができない。――こんなバケモノに魔王の座を奪われなければ、冥界を滅ぼさずに済んだというのに！　魔王たる私は、その座に相応しい

責任がある。貴様という元凶を殺さなければならないという責任が！」
「違う、違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う！　私は、悪くない、私は悪くない！　私は悪くない！　私が悪いはずがない！　私は悪魔を――」
「滅ぼしたんだろうが！　おまえが、滅ぶように追い詰めたんだろうが！　新しい世界の礎？　天地改変のための燃料？　私たち悪魔は、石油か何かか!?　ふざけるなよ、ふざけんな！　私たちは生きていた……生きていたんだよ！」
「あああ、ああああああああああああアアアあああああああああアァ！」
「死ね、死ね！」

死んでしまえ、無能な王め。

それはシャルバひとりだけの罵倒などではなく、この冥界に散ったすべての生命からの怨嗟の声だった。
そして、最後の魔王――サーゼクス・ルシファーは死んだ。

晩鐘は鳴らず

冥界の上空にて、『彼』は焦土と化した大地を俯瞰していた。

「……」

視線の先には、シャルバ・ベルゼブブだったものが転がっている。数多の幻霊を積み込まれた彼はとっくに限界だった。サーゼクスたち新四大魔王への憎悪のみで動いていた。だからこそ、サーゼクスを殺せたことで終わってしまった。この冥界のように燃え尽きてしまった。

「……」

元々いた生命は悪魔も堕天使もその他の魔物も、草一本に至るまで焼き尽くされている。冥界焼却を成したゲーティアも、それに協力したサーヴァントたちもトライヘキサも冥界から離脱している。冥界の危機を救うために戻ってきたはずの新魔王たちは全滅。

この世界に、生命はない。荒廃どころか未来が断絶された。

「……ずむずむいやーん」

その現実を確認したことで、『彼』――真龍グレートレッドは自らの住処である次元の狭間へと戻っていく。

仕事をやり遂げた人間のように満足そうに笑いながら。

■

某国の山中。

「――どうにか逃げ切ったみたいだな」

「みたいですね」

「ひゅー、僕ちん疲れちった」

そう言って溜め息を吐き出す三人の少年。周囲を警戒しながらも手ごろな石に腰掛ける。

「デジャブだな……。何だろう、こんなことといつかもあったような……」

英雄派リーダーの曹操、シグルド機関の生き残りフリード、異世界

からの来訪者セイヴァーだった。現在、三名はアーシア・アルジェントの治療から逃亡に成功した。

当然ではあるが、彼らもまたソロモンの呪詛を聞いた。その呪詛を止めた誰かの声も聞こえた。

「……ゲーティアは俺たちを最後の戦いには連れて行ってくれなかったみたいだな」

「縁起でもないこと言いなさんな。それに、最後の戦いでもないでしょうよ。椰子王だが電卓の騎士だかがまだ残ってんだから。俺たちに全部放り投げるほど大将たちも無責任じゃねえでしょ」

「フリード先輩。獅子王と円卓の騎士です。ココナッツの数でも計算する気ですか？　名前はちゃんと憶えないと失礼ですよ。糞悪魔どもならともかく」

「……なんか、おまえって悪魔に対しては妙に発言に棘があるよな」

彼の人生については本当に部分的にしか聞いていないが、その一部ですら悪魔を憎んで当然のもの。だから自然な発言と言えばそうなのだが、妙に意識的に言葉を過激にしている節があった。

「それは何というか、反省しましたから」

「反省？」

微妙に文脈と食い違う言葉に首を傾げる曹操に、セイヴァーは苦笑を返す。

「俺はちゃんと悪魔を、三大勢力を、聖書を憎めませんでした。そのせいで、聖書は滅びの道を辿ってしまったんです。一切の言い訳を許されないほど、最悪のレッテルを貼られて」

獣性ではなくとも、原罪でもなくとも、彼もまた罪を背負うものだった。

救世主だからこその罪があった。神を殺しただけでは世界も人類も救えなかった。

「悪魔を、憎まなかった？」

「ソロモンの共犯者、初代アスモデウスと初代ベリアルは人間と異形が家族になれるような世界を願っていました。歪みがあったとしても、それだけは本心でした。俺は、ソロモンに対する意趣返しとして、

神が滅んだ世界に彼らの居場所を作ろうとしたんです」
「彼らっていうのはまさか」
「ええ、悪魔と天使と堕天使です」
曹操とフリードは息を飲む。滅ぼしてみせると誓ったはずだ。殺したいと願ったはずだ。魂が焦げるほどに憎んだはずだ。だが、それをこの救世主は飲み込んだ。己の中にある憎悪だけではなく、他の人間や異形にもそれを願った。
「寿命を差し出しました。毒を飲み、内臓を食まれ、目を抉り、迷宮を彷徨い、覚悟を示しました。残りの人生も死後も売り払いました。聖書に属さない神と魔王と人間全員を、説得しました」
憎しみに縛られないでくれ。怒りに沈まないでくれ。それはソロモンが犯した過ちだ。俺たちは魔術王が望んだものとは違う未来を歩かなければならないはずだ。
俺にできることなら何でもします、と救世主は三大勢力以外の生命すべてを説き伏せた。
ともすれば、それは神殺し以上の大偉業。
「何というか、おまえ凄いな」
憧れの人物に真正面から褒められたというのに、セイヴァーの顔は暗かった。当然だ。そこまでやって、そこまでの感情を尽くして、そこまでお膳立てをして、彼は最終的に失敗してしまったのだ。
「神の崩御から初めて開かれた世界神話会談。俺は人間の代表として出席しました。三大勢力の代表は、兄から魔王の座を継いだリアス・グレモリーでした。結果は決まっていたようなものでした。三大勢力は新世界に居場所を手に入れて、俺たちは憎悪に縛られることなく未来に歩き出せる。不平等なくらい平等な条約が結ばれる。それで終わるはずでした。でも、そこで問題が発生しました。兵藤一誠の乱入です」
「え？　そっちの世界の兵藤一誠はあの俺がサマエルの毒で殺したとか言っていたような……」
「生き返ったんですよ。グレートレッドがどういうわけか、どうやったのか、兵藤一誠を復活させました」

「ん？　聞き違いかな？　場違いな名前が聞こえたような？」
　フリードの疑問は曹操も同意見だった。何故、この場面であの真龍の名前が出てくる？　まして兵藤一誠を復活させたなどと。
「あのドラゴンの考えていることは一から十まで不明ですから。実際、抗議に行ったものなど誰もいません」
「まあ、色んな意味で無理だからな……」
　真龍グレートレッド。またの名を真なる赤龍神帝『Ｄ×Ｄ』。次元の狭間を泳ぐだけで実質無害だが、その全貌は謎に包まれている。同格なのは、この世界原産の生命ではオーフィスとトライヘキサだけだ。彼（？）と意識疎通ができたという記録は存在しないし、意思疎通ができたからと言って何だというのだ。
「それで、御自慢の眷属が戻ってきて、あの女、なんて言ったと思います？　俺たちはおまえたちを許すことにした。だから、おまえたちも俺たちのことを憎まないでくれ。なんて言った俺を指差して、周囲の修羅神仏に対して何てほざいたと思います？」
　フリードと曹操はそれぞれ別の意見を出す。
「恨み言じゃないか？　人間に害されたと思うなら、人間と同じ側であるはずの修羅神仏は敵と見るはずだからな」
「そこは命乞いでっしょー！　タスケテーってみっともなく泣き叫んだんじゃねえの？」
「だったら良かったんですよね」
　あの女は、こう言ったんですよ、とセイヴァーは紡ぐ。悪魔の、否、三大勢力の滅びを確定させた女の言葉を。
――聞いたでしょう、皆さま！　これが人間の本性です！
――共に、この愚か者に罰を与えるべきです！
――私たち異形から大切なものを奪っていった、罪深き人間に制裁を！
「――――――は？」
　言葉が出なかった。思考が追い付かず、理解を拒んだ。

「い、いやいやいや！　待て、待てよ！　それは、それはいくら何でもおかしいだろう！」
「ノン、ノン、ノン。可笑しいって言うか、本当、笑うしかねえジャン？」
　加害者意識がないどころではない。罪悪感を抱いていないなんてものではない。
「掃除屋になっていた俺が言っていたぞ。邪神撤退の後、聖書の神によってあらゆる神話が滅ぼされたと！　聖書はあらゆる神話の恨みを買ったはずだろう」
「ええ。事実です。悪魔と天使と堕天使は、その狂気の例外でした。悪魔や天使は貴重な能力を持つ人間を『保護』という名目で強制的に転生させまくり、堕天使はラフムと一緒にあらゆる生命を虐殺しました。その恨み辛みは星を焼くほどに、神を殺せるほどに積み重なっていた」
「だったら――！」
「それでも、あの女は――俺たちの世界の最後の魔王は、自分を被害者だと言い張った。最後の、最後の、最期まで」
　自分たちが悪意で滅ぼそうとした修羅神仏が、自分たちの味方に成り得る同類だと、悪魔や天使と同じ人間の被害者だと認識していたと？　世界が、あらゆる生命が自分たちを憎んでいると自覚していなかったと？
　そんな馬鹿な話があるのか？
「その場にいた修羅神仏の皆が、ブチ切れました。だって、三大勢力はそれだけのことをした。神の手先としてあらゆる神話に悪意を向けた。獣の言いなりとして、人間も精霊も魔物も殺しまくった。特に、極東の妖怪の姫君さんのキレっぷりはやばかったですよ。俺たちの世界線じゃリアス・グレモリーは京都妖怪を『保存』するために――」
「頼む。それ以上は言わないでくれ」
「……すみません。じゃあ、この部分は省略で」
　本当は、聞きたくなかったのではない。彼にそれ以上言って欲しくなかった。まるで、悪魔の凶行を自分の罪のように語る彼に、これ以

上辛いものを背負って欲しくなかった。

「で、俺は責任を取らされました。神や魔王に余計な時間を取らせた挙句、あんなくだらない妄言を聞かせてしまった罰を受けました。――悪魔も天使も堕天使も、俺が滅ぼしました」

神殺しの英雄は、血塗られた救世主となった。殺戮の果てに平和な世界を実現してしまった。

滅ぼしたと言っても、ある程度の数は残っている。だが、その少数ですらまともに生存する権利は与えられていない。殺し尽くすか、使い潰すか、消費するかで揉めているほどだ。

無論、例外はいる。聖書の神復活時から人間側だったメフィスト・フェレス。ソロモンが悪魔の母リリスを使用して生み出しながらも、セイヴァーに寝返ったふたりの『超越者』。不死鳥ベヌンと縁深いフェニックスの一族などだ。

でも、悪魔は滅ぶべきだと、今日も世界は怨嗟を上げているはずだ。

「俺は平和な世界が欲しかった。ソロモンが間違っていたと証明するために、奴に裏切られた共犯者――ベリアルとアスモデウスの理想を叶えてやりたかった。なのに、何が間違っていたんでしょうね」

何をどうすれば、手を取り合えた？

救世主は悪魔や天使、神さえ許そうとした。許してはならないのに。彼らが許されることこそが許されないのに。何より――彼らが許されたいと思われていなかった。自分たちのことを加害者だと思っていなかったのだから。

差し出した手は振り払われ、諸悪の元凶だと指差された。

「おまえは間違えていないよ。悪いのは悪魔、と言ってもおまえは納得しないんだろうな。ああ、そうだ。あれだ、間が悪かったってやつだ」

「間が悪かった？」

「そうだ。誰が悪いってわけじゃない。きっと、皆の巡り合わせがちょっとずつ噛み合わなかっただけなんだよ。だから、おまえの――」

「治療はすぐに開始するべきですね」

背後から突然聞こえたというのに、それが彼女だというのは分かった。地獄に堕ちた自分でさえ忘れなかったのだ。生きている自分にどうして理解できまいか。
彼女の声は怒りに震えていた。当然だろう。自分たちはそういうことをしたのだから。
「……」
「………」
「…………」
曹操、フリード、セイヴァーの三人は声のした方に決して視線を向けることなく、頷き合う。
「三人とも、手分けして逃げるぞ！」
「りょーかい、リーダー！」
「誰が犠牲になっても恨みっこなしですよ！」
ライオンに追われているインパラみたいな作戦だった。

■

突然だった。
「ああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！」
兵藤一誠は絶叫した。
「っんん!?」
「ああ、あああ……！」
姫島朱乃や木場裕斗、ギャスパー・ヴラディ、ヴァーリ・ルシファーまで頭を抱え、呻きだした。アザゼルやリアスには何もない。
「黙れ、ソロモン！　何なんだよ、おまえは！　おまえは、俺たちに何をしろって言うんだ！　もうたくさんだ！　つらいことならいっぱいあっただろうが！　もう十分、人間は頑張っただろうが！　なのに、なのに、なのに、おまえは――！」
突然、一誠はピタリと動きを止めた。
「はは、その必要はない、か。そうだな。そうだよな。でも、ソロモン

とは無関係に、俺には俺の義務があるんだ。やりたいことがあるんだよ、ゼパル」

幽鬼のような動作で、首だけをリアスとアザゼルに向ける。鎧姿であるために表情は窺えないが、そこから発せられる感情が歪んでいることだけは明白だった。

「だから終わらせる。全部、ここで終わらせるんだ……！」

「成程。行くぞ、兵藤一誠！　否、ソロモン！」

兵藤一誠から放たれる殺気を受けて、サイラオーグ・バアルは反射的に駆け出した。

バアル家の特色である滅びの力を持たず、魔力さえ中級や下級に劣りながら、血のにじむような鍛錬による肉体の強化のみで、若手悪魔最強まで上り詰めた。

目標は魔王となることで、誰もが実力さえあれば認められる社会を実現することだ。自分のように魔力がないとしても、上級悪魔の血筋でなくとも、上を目指せる冥界。彼の眷属もまたその夢に魅せられている。

纏うは神滅具の一つ、獅子王の戦斧の亜種禁手、『獅子王の剛皮』。

対するは、赤龍帝・兵藤一誠。ほんの少し前にあった若手悪魔の集会にて、初の邂逅を果たした。一誠とサイラオーグは同じように魔力をもたない悪魔だ。故に、戦う機会があれば純粋な戦いができると期待していた。だからこそ、この対面には悔しさすら感じる。

「あああああああああああああああ！」

「どうした、兵藤一誠。邪悪な王に身体を乗っ取られたそうだな。おまえには一度しか出会っていないが――俺と同じ愚直さを感じた。その意志は、おまえのリアスへの忠誠は、仲間との絆は三千年の亡霊に敗れるほどヤワではないはずだ！」

サイラオーグから黄金の覇気が迸り、一誠へと突貫していく。

「滅びなき大王よ。死者から剥いだ獅子の衣に何を飾る？　武力に沈めた同類の首級か？」

拳を振るうしか能のない欠陥品が、大王だ魔王だと笑わせる。

例えば、サイラオーグは少し前の若手悪魔同士の試合で、ゼファドール・グラシャラボラスを叩き潰し、再起不能にしている。彼だけではなく、多くの悪魔がサイラオーグの拳の前に沈んだ。

貴様には実力さえあれば認められる社会が作れるだろう。実力がなければ蹴落とされ、暴力がなければ叩き潰される。そんな悪魔らしい冥界しか作れないだろう。

「ギャオオオアアアアア！」

「ぬうぅぅ！」

赤い龍は咆哮を上げながら、サイラオーグと取っ組み合う。驚くべきことに、獅子の衣を纏ったサイラオーグですら圧倒している。

「聖魔剣よ、僕に力を！」

木場裕斗は両手に剣を出現させる。

禁手、双覇の聖魔剣。聖なる力と魔の力、その両方を持つ剣。それが聖魔剣。魔剣の力を生まれ持ち、聖剣を使うための実験に使用された木場裕斗――イザイアだからこその奇跡。不完全とはいえ星の聖剣さえ打ち破った。

本来であれば龍殺しの剣が最適だ。しかし彼の練度では作り出せない。それでもいい。敵を殺すのではなく、友を助けるための戦いなのだから。

「行くよ、イッセーくん！　はあああああ！」

裕斗は持ち前のスピードを活かし、サイラオーグとは逆側、すなわち背後から斬りかかる。

「聖魔剣よ。中庸にすらなれぬ剣で何を斬る？　亡き同胞に託された未来か？」

おまえの剣に死んでいった同胞たちの感情はあるのか？　復讐など誰も望んでいなかったはずだ。生きて欲しかっただけだ。ひとりでもいい。彼らの祈りを台無しにしたのは誰だ？

復讐を望みながら、怠惰に生きていた。研究の責任者について調べることもなく、剣なぞ憎んだ。

神はいなくとも――おまえはそこに生きているのに。同胞のおかげで生きているのに。

「――邪魔だと言っている！」

裕斗の背後への攻撃が届きそうになった時、背中から突如としてプテラノドンのような翼が出現し、裕斗を振り払う。

「っあああああ！」

「ぐああ！」

裕斗が吹っ飛ばされるのと同時に、サイラオーグが力比べに押し負け、大地へと叩きつける。トドメを指そうと龍の爪を構えるが、蝙蝠の群れが視界を遮る。

ギャスパー・ヴラディの仕業だ。

「鬱陶しい！」

龍はオーラを噴出し、蝙蝠を丸ごと叩きのめす。ギャスパーの変身も解けるが、その一瞬の隙を狙うものがいた。

「……はあ！」

塔城小猫だ。

繰り出すは、『戦車』に相応しい力任せの一撃。

「猫又よ。仙術を棄てた肢体で何を成す？　すべてを取りこぼす醜態か？」

姉のようになりたくない。姉のように力に飲まれたくない。そう願い、仙術ではなく純粋な肉弾戦のみを鍛えてきた。

しかし、暴走の可能性があるというのなら尚の事、仙術と向かい合うべきだった。爆発の仕方が分からない爆弾ほど危険なものはない。

その結果がこれだ。その結末がこれだ。

仙術の力を隠し続けた矮躯では、救いを求める龍に手が届くはずもないのだ。

「――何かやったか？」

「そ、そんな……」

全力で打ち込んだ一撃に、何の疼痛もない様子に愕然とするしかなかった。龍は呆けたように動けぬ猫を食らおうと顎の牙を煌めかせる。

「雷よ！」

姫島朱乃は必死だった。

父が死んだ。堕天使幹部、雷光のバラキエル。母の死は父のせいだとずっと恨んできた。黒い翼のせいで母は死ぬことになったのだと。本当は、父が悪くないと分かっていたはずなのに。謝ることも分かり合うこともできず、悪しき王に殺されてしまった。

だからこそ、今は立たなければならない。愛しい男性まで失うわけにはいかないのだから――！

「雷の巫女よ。光なき雷で何を照らす？　愛憎の先を取り違えた道筋か？」

父を憎むというのなら、雷光に頼らぬというのなら、何故中途半端に雷など使っている。

本当は気づいているのだろう？

おまえが生まれたから、母が死んだのだと。おまえが母を殺したのだ。

「目を覚まして、イッセー！　お願い……！　私の自慢の下僕なら、ソロモンなんかに負けないで！」

紅髪の姫君は手を伸ばす。自分たちの絆が奇跡を起こすと信じて。

グレモリーは情愛の悪魔。この関係が始まって半年ほどだとしても、自分たちの絆は絶対だ。忌々しい王の呪いに負けるはずがない！

「紅髪の滅殺姫よ。滅ぼすだけの力で何を救えた？　箱庭に閉じ込めた自尊心か？」

お遊戯の時間はおしまいだ。子どもの我が儘はそれまでだ。お仲間ごっこは楽しかったか？　楽しかったのは、おまえたちだけだぞ。

地獄を見ろ。真実を知れ。

目を逸らし、目を覚ますつもりもないのなら、おまえはそこで終わるがいい。

人よ、再び我が楽園に

四千五百年前、ある堕天使を殴り飛ばしたと伝えられる預言者は人類解放の大計画を開始した。
三千年前、七十二柱の悪魔を屈従させた魔術王は『真理』を組み立てた。
二千年前、神の子と言われた救世主は獣殺しを放棄した。
千五百年前、聖剣を抜いた騎士王は神代の乖離を加速させた。
千二百年前、布教を唱えた大帝は現実と神秘を理解し区分した。
八百年前、聖地奪還を目指した獅子心王は幻想から旅立った。
六百年前、百年戦争を終わりに導いた聖女は永遠に辿り着いた。
そして現代。
彼らの挑戦は失敗に終わった。

■

「ＨＡＨＡＨＡ！　よお、京都妖怪」
「これはこれは、帝釈天殿。貴方も避難の途中ですか？」
「まあ、そんなとこだ。ついでに、話をつけなきゃいけねえやつがいてな」
「キングゥのことですかな？」
「俺が言ってんのは、確かにキングゥでもあるんだけどキングゥじゃねえんだよなあ」
「はい？」
「聞いてんだろう？　見えてんだろう？　なあ、グレートレッド」
「――――気づいていたか、拝火教の魔王インドラ」
「俺は他の連中より早くヒントをもらっていたからな。これでシヴァの奴より一歩リードってもんだＺＥ！　……それから魔王の位なんざとっくの昔に捨てた。今の俺は仏門の帝釈天だ」
「兎一匹救えぬ悪霊が、神仏を名乗るとは笑わせる」
「……安い挑発だな」

「ぐ、グレートレッドじゃと？　何故グレートレッドがキングゥの中におるというのじゃ！」
「笑止。この人形は抑止力の力を使った。ならば真龍がキングゥの肉体を使えるのも道理であろう。少なくとも、この人形の身体を使って何かをしたということはない。この瞬間を除いて、見聞きの道具にしていただけだ」
「何が目的じゃ！　早くキングゥから出て行くのじゃ！」
「真龍に目的などない。真龍にとって重要なのは経過だ。目的を持つのは別の抑止力の仕事だ。今回の結果がどのような未来をもたらすかなど真龍には興味も関係もない」
「じゃあ、おまえの仕事ってのは何だ？」
「決まっているだろう、悪魔を可能な限り有効活用して滅ぼすことだ」
「何？」
「四千五百年前、開闢を成した英雄王がいた。時代を重ねるように、救済を求めた預言者がいた。どちらかならば問題はなかった。どちらかが成功していれば、あるいはどちらかが失敗していれば問題はなかった。だが、あのふたりはどちらも失敗した。失敗するはずのない大偉業が失敗に終わり、星の進化が大幅に遅れた。その結果が、悪魔の滅びの決定だ」
「四千五百年前じゃと？」
「歴史浅き妖怪ども、汝らが知らぬのも無理はない。あのふたりが何をしたのかは、ソロモンの『真理』ほど明確に認識されていない。何故ならば――四千五百年前に何があったか、あのふたりが何をしようとしたか気づいた異形はたったの二柱。預言者を導けなかった悪意の蛇と、英雄王に袖にされた阿婆擦れだけだ」
「ああ、そうか。あの変革は、四千五百年前のアレは、そういうことだったのか。まさかギルガメッシュとモーセの仕業だったとはなぁ」
「何故悪魔なのかは重要ではない。ギルガメッシュやモーセの失敗はソロモンが『真理』という形で受け継いだ。だが、ソロモンには誰もいなかった。神の子もブリテンの王も大帝も計画を引きつぎながら、理想は否定していた。だから失敗した。だから人類は敗北した。

抑止力や神代からの人類解放。そんな妄想は四千五百年前に失敗しているのだ」

「アレが失敗だって？」

「この三千年間、この星に、この宇宙にソロモン以上の王は生まれなかった。これからも生まれない。魔術王を超える救世主が生まれる可能性は、今日途絶えた。英雄たちの成長が、救世主誕生の未来を捻じ曲げた。重要なのはそれだけだ」

「悪魔を滅ぼすことで、人間の可能性に制限を与える。それがおまえの役割だったってわけか？」

「この時間軸でも成功した。しかも今回は抑止力の仕事が最低限で終わった。参考になった。これで七万八千五百十三番目の成功だ。夢幻は必ず、残り八億九千六百万二十一の時間軸でも成功してみせる」

「――何だ、この数時間で悪魔は滅んだのか。ＨＡＨＡＨＡ！　あっさりしてんＺＥ！」

「笑ってやるな、悪霊。明日は我が身だぞ」

■

「何故だ」

ソロモンはゲーティアに殴りかかった。

元々宝具のぶつけ合いで死に体になっていたゲーティアだが、ソロモンもまた体内を食い荒らされる激痛に耐えながらの一撃だったため、大したダメージは与えられなかった。

「何故だ、ゲーティア！　何故、こんな方法を選んだ……！」

血を拭いながら、ゲーティアは簡潔に答える。

「この方法が一番手っ取り早いからな」

「おまえが死ねば、英雄派はどうなる!?　この星の人類はどうなる！　おまえは守りたいと思ったはずだ。思ってくれたはずだ！　道半ばで消えるというのなら、『真理』を――人類の希望を道連れにするような真似はやめろ！」

「逆に聞くがな。何故、おまえが導こうとしなかった……！」
人王は拳に力を込めて、殴り返す。
「何故、『真理』など作った！　何故、事実を歪め、神代を乖離させるという呪いを作り上げた。何故、外宇宙から我々を呼び出した。こんなことができるなら、おまえ自身の力で、どうにかできたんじゃないのか！」
その問いに、唯一神ソロモンは歪な笑顔を浮かべる。
「決まっているだろう？　俺では駄目だった……俺では、駄目だったんだよ！」
無能な王。無力な王。
ああ、言い得て妙じゃないか。濡れ衣でも言いがかりでもない。ただの真実でしかないじゃないか。
だって俺は――失望してしまった。外宇宙にある、この星の人間とは違う人間達が魅せた奇跡と、この星の人類の無力さを比較して、失望してしまった。救うべき民に失意を抱き、怒るべき過去を恥ずかしいとすら思ったのだ。
俺では駄目なんだ。こんな無様な王では、人類を幸福になどできない。
誰かひとりでもいい。俺以上の力と、俺以上の愛で、人類を導ける救世主が必要だった。人類を愛し、人類から愛される人王の誕生を願った。
「俺以上の王が必要だった！　俺以上に人間を信じられる、人間の為に尽くせる王が必要だった！」
魔術王を超える救世主。自分の死後千年後、今から二千年前の『神の子』はその道を選ばなかった。人間の胎から生まれ、人の世の理不尽さと異形どもの暴挙を知りながら、『神の子』は救世主でありながら世界を救わなかった。
星の聖剣に選ばれた騎士王も、勇士を率いた大帝も同じだ。彼らは自分の国だけを守った。自分の時代だけを愛した。
誰も魔術王の理想を引き継ぐどころか、見てさえくれなかった。
魔術王が生まれる前も死んだ後も、誰も彼もが無能だった。無能な

王ばかりだった。

「ようやくだ。このために、三千年も無駄に、人間を見殺しにしてきた！　全ては『彼』に、俺の全てを受け継いでもらうため！　俺は必ず『彼』を見つけ出し、彼を育て上げてみせる……！」

他の時間軸から来たセイヴァー。彼がこの宇宙で生まれた存在ならば、この時間軸にも彼は存在するはずだ。彼ならば、きっと魔術王以上の人類の指導者になれる。

誰でも良かったのだ。自分以上の王になってくれるなら、誰でも良かった。どんな悪辣な反英雄の魂を継いでいようと、どんな弱い神器を生まれ持っていようと、どんな罪深い異形の血を引いていようと、どんな理解しがたい狂気を抱いていようと、誰でも良かった。

無能な魔術王に代わって、救世主が人類を愛してくれるなら、ソロモンは誰でも良かった。

「ふざけたことを抜かすな！」

人王は否を突き付ける。戯言をぬかすなと、怒りを振るう。

「それでもおまえは、信じてもらえたんだろうが！　人類から求められたんだろうが！　勝手に絶望して、勝手に役目を放棄した人理補正式（わたしたち）とは違う。おまえは願われたんだろう、おまえが愛した人間に！　正しく王として！」

全能であり不死であるが故に、不完全な人間を理解できなかった魔神王ゲーティア。「生きるために戦う」という根源的な願いさえ把握できなかった愚かな人理焼却式。

この魔術王が掲げる理想は、かつて己が目指した傍迷惑な大偉業の真似事だ。

この王は決定的なものが欠如していた。人類を信じ抜きながらも、あらゆる修羅神仏の思想さえ理解しながらも、ここまで長期的で絶対的な計画を立てながらも。

この男には自信がなかったのだ。自分が人類を救えるという自信が。

「助けを求める手を、踏みにじってどうする？　その手を取り、共に笑い合うことが、おまえが求めた未来ではなかったのか!?　できたはず

だ。誰もができると信じ、願ったはずだ。神になってくれと、頼んだんだろうが！　おまえが描いた理想に、おまえが愛した誰かの――女王の笑顔はあったと言うのか！」

「黙れ。黙れ黙れ黙れ黙れ黙れぇ！　俺は自分の罪を償おうとしただけだ。俺は人類の未来を手に入れたかっただけだ！　その俺の理想のどこに、間違いがあると言うんだぁあああああああ！」

「間違いしかないと、言っているんだ、この愚か者めが……！」

　およそ人理焼却の実行犯と真理構築の唯一神との闘いとは思えぬほどの、野蛮な殴り合い。しかし彼らの本当の闘いは目で見える拳の応酬ではなく、崩壊が停止しない『真理』と『システム』の内部でこそ繰り広げられている。さながら、コンピューターのウイルスとファイヤーウォールのように。

「未来なら――おまえから見た未来ならば、いま、ここにあるだろうが！　おまえは過去の老害、我々は異世界の異物。彼らの未来は彼らのもの！」

「黙れ、この世界は俺が作ったものだ！　俺が描いたものだ！　俺が望んだ形で終わらなければ意味がない！　そうでなければ、また絶望の時代が始まってしまう！」

「この世界の価値を決めるのは、おまえでも我々でもない！　思いあがるな、唯一神。秩序が失われ、味方がいなくなったとしても、悪と定められたとしても。諦めない限り――惜しげもなく過ちを重ね、あらゆる負債を積み上げてなお、希望に満ちた人間の戦いは終わることはないのだから！」

　どんな言葉を交わしても、両者の主張は平行線だ。

　ここでソロモンを終わらせる覚悟のゲーティアと、このままでは終わるしかないソロモン。あとは時間の問題。『真理』と『システム』の内部への干渉、内側からの破壊活動が間に合うかどうか。ゲーティアが勝てばソロモンは残留思念さえも残らず消滅する。魔術王の狂気は今度こそ止まる。ソロモンが勝てば思念だけでも残り、何らかの手段で次の計画を作り直せる。

「ぐぅぁあああああ……！」

だが、次？　次などあるのか？『真理』を組み立てるには材料が不足している。悪魔は全滅しているし、星中の修羅神仏を二度も騙すのは不可能だ。真実と神話の乖離が進んでいる以上、神魔の力自体三千年前よりも弱体化している。トライヘキサやオーフィス、グレートレッドを使用しても同じだ。それに、また三千年待てと言うのか？　人類が修羅神仏の食い物にされる歴史に、また耐えろと言うのか！

そんなのは御免だ。

材料がないのならば最初からやり直すだけだ。

「最終宝具、起動！」

人間が最も幸福だった時代。それは間違いなく創世期の頃だ。何故ならば、その時代、人間は罪など知らなかったのだから。罪など持たず、悪など成さなかったのだから。

人間が知恵の実を食べた瞬間から、神の完璧さが歪んでしまった。

「私のところに帰って来い、愛しい最高傑作たちよ」

人間を取り戻そうというのなら、それは純粋な存在でなければならない。罪も悪も、神以外に抱く愛さえ不能だ。

「人よ、再び我が楽園（エデンス・シネジ）に！」

それは、すべてを零にする〝　〟。

「貴様――！」

拳を振りかざしたゲーティアは、ソロモンの背後にひとつの人影を幻視した。

その手は

ようこそおいでくださいました。

うむ、はじめまして、あちらのケイ卿とベディヴィエール卿、ガレス。ついでに、ガヘリス。そして、我らが王の末裔、ルフェイ・ペンドラゴン。

私が、僕が、俺が、儂が、拙が、我が、この世界のマーリンである。遠路はるばるアヴァロンの塔までご苦労様。リンゴしかないけど歓迎させていただくぜ？

ん？　おっとぅ、すまぬすまぬ。人と会話するのは久しぶりですんで、自分がどんな喋り方をしていたのか忘れちまったよ。さて、己はどのような声音で、どのような口調で、どのような形態で人と会話していたじゃろうか。思い出すので待っていてください。

えーと、じゃあ……この喋り方でいいかな？　うん、違ったような気もするけど、短い付き合いだ。君たちの知るマーリンに似せる方向でよろしく頼む。

改めて、僕がこの世界のマーリンだ。

会いたかった。ギャラハッドのおかげでソロモンの真実に辿り着いたあの日から、ずっと君たちに会いたかった。

特に、君だ。君に逢いたかったんだ、ルフェイ。我らが王の末裔よ。流石に面影は残っていないか。騎士王の血脈を繋げられたことを、僕たちは誇りに思う。……まあ、直系の女の子にモルガンにちなんだ名前をつけるのはどうかと思うけど。

こっちでもモルガンは色々やっちゃったからね……。僕を此処に幽閉したヴィヴィアンほどじゃないけど……。まあ、あのふたりどころかアーサー王伝説に記された事件のほとんどが、メフィストの奴に唆された姦計だと理解できたのは五百年ほど前だった。

してやられた、よ。

あいつとはちゃんと共犯関係を築けたと思っていたんだけど。まあ、所詮は悪魔か。信じた僕が馬鹿だったのさ。それも含めて悪魔の仕業ってことなんだろうが。

君たちの目的はおおよそ推測しているよ。早速……ん？　話の前にエクスカリバーの真相が聞きたい？　ああ、書籍や伝承は『真理』に歪められているからね。影響を受けにくい当事者に聞くしかないのか。

カムランの丘にて、アーサーの代わりにベディヴィエールが死んだ。亡国の王となったアーサーは教会に身を寄せて、代償として聖剣を要求された。アーサーの末裔が教会と縁切りをした時に聖剣の所有権は教会に奪われていた。掻い摑んで説明するとそんな感じかな？　語るべき事件はもっと色々あるんだけど、そのあたりは割愛させてもらうよ。

あ、ちなみにアーサーは死後、妖精たちがアヴァロンに導いた。輪廻転生したって話は聞いていないからこのアヴァロンのどこかにいるんだろうけど、会っていくかい？　時間がないからいい？　それはそうだ。では、こちらも本題に入るとしよう。

全ては四千五百年前から始まった。三千年前のソロモンより更に古代。人の営みが開始される原初の時代。

ざっくり言うと、この世界観は『星』と『神』と『人』によって構成されている。星とは宇宙の統合意思であり、神とは純粋な神だけではなく魔王や精霊を含めたあらゆる異形の総称だと認識してくれ。

当時、『人』は『星』や『神』と比較して圧倒的に脆弱な勢力だった。それを打開しようとしたのが、ギルガメッシュとモーセだった。ふたりの偉人は人を神や星から解放しようとした。だが、問題なのはこのふたりの挑戦の方向性が大きく異なったことだ。

ギルガメッシュは『人』を他のふたつと対等にしようとした。モーセは『人』を神の側と融合させようとした。そのためにソロモンの『真理』の原型とも言うべきものを創ろうとしたんだが、結局、失敗したのさ。その失敗がサマエルによってソロモンに受け継がれ、『真理』が生み出された。

だが、抑止力に対抗するために作り出された『真理』は抑止力によって悪用された。悪用は言い過ぎかもしれないが、とにかく利用された。世界の平和を守るため、星の未来を繋ぐために、忘れてはならな

い悲劇がなかったことにされ、ありもしない奇跡が語り継がれた。
え？　神々はどうしたのかって？　別に、どうもしなかったよ。
人を愛した神はいるが、人を救った神などいない。龍王ティアマットの逸話がかなり盛ってあることからも分かるだろう？　人を生んだ神はいても、世界を築いた神などいない。創世主なんて元凶は、この宇宙観には存在しないのさ。だから、神々は気づかなかった。忘れるまでもない。『真理』によって書き換えられるまでもない。この星の神々は、怠惰だからね。堕落にも程がある。そのツケが、三千年前のソロモンによる全世界の神々詐欺事件さ。
ソロモンの死後にも数多の英雄が誕生した。――だが、誰も彼もが真実に辿り着けなかった。辿り着いたとしても、ソロモンの遺志を継ごうなんて狂人はいなかった。たとえ、それが人類の寿命を縮めるとしてもね。
四千五百年前に人類は敗北した。――しかし、決して負け続けたわけでもない。
あえて言わせてもらおう。僕の手柄ではないが、この宇宙の人間だけの力というわけではないが、えらく時間がかかってしまったが。
今日を以って、人類の勝利が始まると！

■

ゲーティアはその幻影を見て、思わず固まった。ソロモンに向けた拳さえ止めて、その幻影に一瞬だけではあったが見入った。それは戦場において致命的な隙のはずだった。
「え……？」
だが、ソロモンの方が停止の時間が多かった。
幻影はそっとソロモンを背後から抱き締め、彼の頬に顔を摺り寄せた。ソロモンにもその幻影は見えていた。横目で自分に触れている『彼女』の幻に身体を震わせる。宝具も停止し、あらゆる思考が混線状態だ。

×
「……×……？」
思わずソロモンが口にした名前。忘れるはずもないその名前を聞いて、ゲーティアの戦意が回復した。この世界でも『彼女』はそういう名前なのか、という妙な感慨を抱きながら。

「感謝します、女王よ――！」

人王は唯一神を殴り飛ばした。
熾天使もいない天界に、唯一神は倒れる。幻影は消えていた。
「まったく、余計な寄り道ばかりだったな」
ゲーティアは上を見る。歪な音を立てながら崩れていく天界の空に、かつて目指した極点を重ねながら。
『イポスより報告。これより真理崩壊は最終段階に入る』
『シャックスより報告。真理崩壊と共に天界の消滅が予想される』
『オセより報告。天界にいる天使の大半は下の階層だ。救援は不可。そも、彼らも混乱状態の模様。上位の天使は戦闘不可能状態』
『ウァプラより報告。円卓の騎士の反応あり。獅子王の目的にはいくらか天使たちを自陣に吸収することもあった模様』
『フォカロルより報告。しかし、天使の多くはこの勧誘に迷っているようだ。どの道、九割は天界消滅に巻き込まれるだろう』
『マレファルより報告。全七十二柱の起動に問題なし。イレギュラーが発生しない限り、計画は問題なく達成される』
しかし、ゲーティアも七十二の魔神もイレギュラーが発生しないなどとは思っていない。否、既に発生している。それを認識している。
「何故だ……」
幽鬼が吐き出す怨嗟のように、唯一神は呟く。
「何故、こうなる……」
心底、原因が理解できていないようだった。
「おまえ、本当にいい加減にしろよ。どうして過ちに気づいて負けを認めるなんて、誰にでもできることができないんだ」
「黙れ」

「私の仕事はここまでだ。おまえの仕事も、ずっと昔に終わっているんだぞ？」
「黙れ」
「誰もおまえを求めてはいない。誰もおまえのことを覚えていない」
「黙れ」
「もう誰も、おまえの愛を求めてはいないんだ」
「黙れ」
「だから――おまえはここで我々と終われ」
「黙れ！」
「黙るべきなのは其方だろう、■■■■」
「私の名を、貴様如きが、口にするなあああぁあああああああ！」
　この唯一神の中身は、ソロモンではない。
「汝、神の名をみだりに唱えてはならない、だったか。くだらん。貴様や貴様の教徒が守っていない十戒をどうして私たちが守らなければならん」
「私、わたしのため、わた、たわあああわたししし？　わたしはかみかみＫＡＭＩ、かみ？　あがががああああみみいいいいいいいがあががががががががああがめげげええめ！　全人類は私のためにある！　人間は私のためにあり、人間は私のために死ぬべきだ。私はそのために――この世界と人類を作ったのだから！　おまえたちは私の望んだようにあるべきだ！　そうなるように創ってやったのだ！」
「ゲーティアより七十二柱に通達」
　極点への道はあと少し。誰にも邪魔をさせてなるものか。
「この身の程知らずを黙らせるぞ……！」
　今度こそ俺たちの理想を実現するために。見たかったものを見るために。
「ミカエル、ラファエルとウリエルは死亡。ガブリエルは戦闘不可能。メタトロンとサンダルフォンは離反の上に死亡。ならば、貴様らを起こすか。サマエルの遺産などに頼るのは業腹だが、貴様らも私のもの。ならば、使用している。消費してやる。いつまで寝ている。疾く在れ、ラジエル、ザフキエル、ザドキエル、カマエル、ハニエル……

！」

唯一神の号令をかけたのは、生命の樹の守護天使たち。四大天使たちや双子の天使には劣るものの、聖なる力を帯びた神の力の一端。

「貴様らおぞましき魔神如きに、私の『システム』が奪えるものか。私の天界が壊せるものか。私の、私だけの人類が滅ぼせるものか。貴様らが薄汚い蛇をばら撒いたというなら、私はそれを食い殺す災厄を生み出すのみ」

この神は人間の堕落を粛清するために硫黄と火の雨を、洪水を、落雷を起こしてきた。度し難い醜さに対して、それに相応しい滅びを与えてきた。今回も同じだ。相手が神王や抑止力さえ恐れぬ獣ならば、それを滅ぼす禍を見せつけてやるだけだ。人王の人理救済が失敗すれば、全人類は目を覚ますだろう。自分たちが何のために生きているのかを思い出すはずだ。

「無限覇王・夢幻理想（ジャガーノート・ネオ・ドライブ）！」

■

赤龍帝の前に、鮮血が舞う。

「どうしてだよ……」

赤き龍と成り果てた少年は問う。

「どうして、その女を庇ったんだよ、英霊！」

赤い龍の爪が引き裂いたのは、紅髪の女悪魔ではなく、桃色の髪をした騎士だった。

問いという形で放たれた怒号に、ヴァーリを除く全員がたじろいだ。

「ほんと、どうしてだろうね」

元より脆弱な英霊であるアストルフォ。即消滅というわけではないが、霊核を破壊された。すでにエーテル体としての消滅が始まっている。

その場にいた全員がアストルフォの消滅など意識になかった。

その怒号が、その怨嗟が、ソロモンを発生源にしているのではない

と気づいたのだ。この気持ち悪いほどの敵意が、兵藤一誠本人から放たれていると理解したのだ。

しかし、彼らはその真実を拒絶する。

何故なら、アストルフォが庇う形になったとはいえ、兵藤一誠は本気でリアス・グレモリーを殺そうとした。もしも彼の言動がソロモンに汚染されたものではないとしたら、そんな馬鹿な話があるはずがない。眷属である一誠が、主人であるリアスを殺そうとする理由などどこにもないはずなのだ。よりにもよって、情愛の深いグレモリーに主人殺しなど有り得ない。

裕斗はこの瞬間にソロモンから解放されたのだと推測した。小猫は姉のように力に飲まれたのかと恐怖した。ギャスパーはソロモンの演技だと断じた。朱乃は錯乱しているだけだと頭を振った。リアスは呆然となるだけだった。

「きっと、ここではないどこかで出会っていた誰かと、君が同じだからもしれないね」

「誰か？」

「世界の裏側でのんびり待っている誰か、だよ」

人理焼却とは無関係の記憶だ。故に、魔神や一誠も知らない出来事。人が手を伸ばした星を奪い去った邪悪な竜との思い出。

「君は普通の人間だったんだってね」

英雄の血を引いていたわけではない。勇者の転生体でもない。特別な才能があったわけではない。ただ、神滅具をうまれもっていたというだけの少年。それが兵藤一誠だ。

「街に行って人と会って、誰かを好きになったり嫌いになったりして、愉快に人生を過ごしてきたはずだ」

その通りだ。

あそこに戻りたい。戻れない。

だったら、一緒じゃないか。どうして止める？　その女を殺したら、戻れなくなるとでも？　どうせ戻れやしないのに。

「君はそれを台無しにされたって事だろう？　それに怒ってこんなことになったんだとしたら、それは――困るな。とても、困る。だっ

てさ――」

ボクは君を見捨てたくなかったんだ。

「お願いだから、ここで逃げて欲しい。いまそうすることだけが、君が求める場所に戻れる、最後のチャンスなんだ」

そんな理性蒸発騎士に似つかわしくない、それでいて彼らしい慙愧を抱きながら、ソロモン陣営のライダー、アストルフォは消滅した。

人王ゲーティア

起動せよ。起動せよ。人理補正を担いし七十二柱。
即ち、バアル、アガレス、ウァサゴ、ガミジン、マルバス、マレファル、アモン、バルバトス、パイモン、ブエル、グシオン、シトリー、ベレト、レラジェ、エリゴス、ゼパル、ボディス、バティン、サレオス、プルソン、モラクス、イポス、アイム、ナベリウス、グラシャ＝ラボラス、ブネ、ロノウェ、ベリト、アスタロス、フォルネウス、フォラス、アスモダイ、ガープ、フルフル、マルコシアス、ストラス、フェニクス、ハルファス、マルファス、ラウム、フォカロル、ウェパル、サブナック、シャックス、ヴィネ、ビフロンス、ウヴァル、ハーゲンティ、クロケル、フルカス、バラム、アロケル、カイム、ムルムル、オロバス、グレモリー、オセ、アミー、オリアス、ウァプラ、ザガン、ウァラク、アンドラス、フラウロス、アンドレアルフス、キマリス、アムドゥシアス、ベリアル、デカラビア、セーレ、ダンタリオン、アンドロマリウス。
我ら七十二柱、愛を問うもの。我ら七十二柱、傷を知るもの。
〝七十二柱の魔神〟の名にかけて、我ら、この救済を止める事能わず……！

■

本来であればビーストD／Lの宝具である『無限覇王・夢幻理想』。
その効果は進化という名の究極の暴走。
「認めぬ」
ソロモンではなく、■■■■は怨嗟の声を上げる。
「私ならいざ知らず、私（モーセ）でもなく、私や　私（アーサーシャルルマーニュ）　でもない、ましてこの宇宙の生命（ソロモン）ですらない異形如きに、私の宇宙が破壊されるなどあってはならない」
この狂気の正体を、ゲーティアあるいは七十二柱の魔神は理解する。

これは聖書の神であって聖書の神ではない。
もはや、この宇宙に人類悪の概念はない。人類悪が倒されるのではなく、そのルールそのものが崩壊した。
人々の祈りの残骸。人が神に向けた恨み辛みの具現。ソロモンが積み重ね、サマエルが蓄えてきた人類の悪性の化身。
尊さに満ちながらも天に届かなかった願いの、反転体。
「渡さぬ。渡さぬ。渡さぬぞ！　汚らわしい異形め！　おまえたち如きに、私の世界を渡してたまるものかあああああああああああああ！」
この存在がビーストDを生んだ『真理』と『システム』を素材としている以上、ソロモンの意識が消えればこうなることは必然だった。しかし人王と魔神たちはそのことに驚くこともない。当然だ。やることは変わらない。最後まで、最期まで、やり遂げるだけだ。
「いかなる障害が相手であろうと、我らの知性焼き尽くすこと能わず……！　相手が此方を最適に殺し尽くすというのならば、我らはその倍速で進化するのみ。学習せよ。吸収せよ。適応せよ。その程度出来ずして、計画の達成はない……！」
アガレス、ウァサゴ、ガミジン、オロバス演算機能最適化。
バルバトス、パイモン、ブエル、ベレト、各魔神柱の結合強化。
オリアス、ザガン、アンドレアルフス、キマリス、アムドゥシアス、各必要情報の観測開始。
「おお、主よ！」
「本当に復活されたのですね！」
「いまお助けします！」
「忌まわしい肉柱どもめ！」
天上に現れたのは神に仕えた天使たち。先に■■■■が召喚した天使たちよりも脆弱ではあるが、おそらく天界にいる天使のほとんどが駆けつけているだろう。聖書の神との戦いと天界の破壊に集中したいゲーティアにとっては面倒な数だ。
中身が本当の意味で聖書の神ではないと理解している者もいるだろうが、関係ないのだろう。彼らは天使――天に仕えるものだ。彼ら

にとって神の遺志は絶対。人間など家畜でしかない。悪魔など敵でしかない。神こそ唯一絶対であり、それに仕える自分たちこそが尊い。

故に、神の望まれることこそ正義であり、神に害する存在は悪でしかない。

「怒りが止まらぬ。怒りが止まらぬ」

サブナック、シャックス、ヴィネ、ビフロンス、ウヴァル、ハーゲンティ、クロケル、フルカス、バラム、融合。クロケル、独自顕現。天使との交戦開始。

「我ら、もはや極点に至る名誉を選ばず。道理を弁えぬ天使どもを一匹でも多く殲滅する。七十二柱の魔神の御名において、人に仇なす者に死を。殺す。殺す。殺す。何としても奴らを殺す！」

英霊どもには決して模倣できぬ――否、我々七十二柱の魔神にしかできない大偉業を証明するために！

「歓びあれ！　歓びあれ！」

ブネ、ロノウェ、ベリト、フォルネウス、フォラス、ガープ、天界の保持領域の分解開始。

「おお流星の如き敵影よ！　殺せど尽きぬ不屈の魂よ！　求められるとはこういう事か！　拒まれるとはこういう事か！　我々にはこの感情が足りなかった！　我々にはこの未熟さ、この愚かさ、この残虐性が足りなかった！」

ムルムル、オセ、アミー、神器製造炉封印。

ベリアル、デカラビア、セーレ、ダンタリオン、外宇宙干渉術式の強制停止。

ボディス、バティン、サレオス、プルソン、モラクス、『真理』と『システム』の連結解除。

マルバス、マレファル、アモン、アロケル、ケイオスタイドの遮断成功。

「おお――我らの裡にもこれほどの熱があろうとは！　だが遅くない、手遅れのはずがない！　今度こそ光帯を回せ。計画達成まであと僅か。この不可能の逆転こそ我らの無限の研鑽の解答。我らの目指

した極点！　たとえ失敗するとしても――？　何かを為した〟という結末を、この宇宙に刻むべきだ！　――否！　失敗するわけがないがな！」

ここで更なるイレギュラーが発生する。

「ケイオスタイドの反応を確認」

「『真理』からの逆流と推測」

「流出部分の発見および閉鎖までの所要時間は三分――訂正、一分とする」

フルフル、マルコシアス、ストラス、マルファス、フォカロル、ウェパル、魔術障壁結界多重展開および焼却式によりケイオスタイド阻止。

グシオン、エリゴス、カイム、連結補助および魔力出力解放。

「さあ、これで最後だ、亡霊……！」

「何故だ……」

中身が変わろうと、器が同じである以上、できることなど限られている。

必然的に、先程と同じような殴り合いが始まった。

「何故だ。何故だ。何故だ！　何故そこまで人間など救おうとする魔神ども！　わかっている筈だ、奴らにそれだけの価値はないと！　つらい記憶ばかりだ！　これほど愚鈍な生物は、宇宙の中でここだけだ！　この星は狂っている。おまえたちは狂っている。この歴史にどれだけの価値がある！」

多くの王がいた。多くの聖者がいた。だが、その誰も彼もがこの世界に裏切られた。道を誤り神の手に裁かれるなら納得しよう。非道な悪魔に殺されたのならば理解しよう。だが、彼らを貶めたのはいずれも人間だ。

モーセの掲げた十戒は破られた。ソロモンの創造した真理は忌まれた。救世主の祈りは忘却された。アーサーの求めた平穏は焼き尽くされた。シャルルマーニュの誇りは穢された。ジャンヌの名は魔女と蔑まれた。

神に選ばれた特別な人間は、この世界の人間には勿体ない。

「何故、そうまでして人間など守る。何故、そこまで霊基を削ってまで戦う。かつての計画の焼き直しをしたいというだけではあるまい。何が、貴様を、貴様らをそうまでさせると言うのか！」

「決まっているだろう！」

何を今更、分かり切ったことを。

「彼らに生きて欲しいからだ――！」

唯一神の動きが止まる。

「生きていて、欲しいだと？」

「ああ、そうだとも！」

孤独だった聖女がいた。英雄に焦がれた少年がいた。

それこそ、最初は計画の再現だったのかもしれない。聖書の神に仕組まれた因子を抜きにしても、『今度こそは』という精神で始めたのかもしれない。

だとしても、この瞬間、この闘争の中に大偉業の失敗はない。平凡な少年に敗北した過去ではなく、異常に苛まれた彼らが日常を手に入れるために、ゲーティアはここにいる。

「おまえにはいたか、生きていて欲しいと思える者が。幸福を掴んで欲しいとおまえが作り替えたその世界に、彼らは笑っているのか！そこにいる彼らは――生きていると言えるのか！」

人間が愚か？　世界が醜い？　無価値？　無意味？

――――っている。そんな当たり前のこと、とっくに知っている。遥か昔から思い知っている！

だからこそ私たちは人類を滅ぼした。だからこそ俺たちは星を作り直そうとした。大前提が間違っていることに目を逸らしながら。

今なら思うのだ。あの計画が成功していれば、あの大偉業が達成できていれば、その世界に我らが欲しかった光景はちゃんと存在しているのかと。

だから、彼女は我々の手を取ってくれなかったのだ。きっと、そういう意味だったのだ。

ならばこそ今度は、我々の手を取ってくれた彼らのために。

「これで我々の勝ちだ――！」

ついに、人王は神の霊核を破壊した。
天使の殲滅も天界の破壊も泥の封印も終了した。もはやイレギュラーが発生する時間さえない。今度こそ勝ち逃げをさせてもらおう。
「ああ、そうか。私はもう終わっていいのか。もっと早くに言ってくれたら良かったのだがな。最初から私の名前など呼ばなければ良かったのにな。なあ、おまえもそう思うだろう？　愛しい――」
その瞬間、唯一神の身体は塵と消えた。同時に天上が強烈な音を発し、ガラスが砕けるように割れていく。
世界崩壊の様子だというのに、まるで祝福のような光に満ちていた。
「天の玉座を目指した我ら七十二柱の魔神――その志は完遂された。もはや生命の定義改変は不可能だが、手段はこのように無数にある。天界の零落による真理崩壊こそ我らが理念。魔術王の加護無き世界に生き続けるがいい、浅ましき人類よ！」
フェニクス、過剰稼働により完全停止。
「無常なりや。無常なりや。我々には何もなかった。あらゆるものは無価値だった。誰一人として我々の理想を求めていなかった。希望すら、抱いていなかった。だが、この宇宙ではおまえたちは私たちの名前を呼んでくれた。感無量だ。我々は再び、終わりを迎える」
フェニクス停止の影響により、イポス、アイム、ウァプラ、ウァラク、レラジェ、アンドロマリウス、消滅。
「――ありがとう。君たちに感謝と祝福を」
計五十九柱、消滅。九柱、霊基の大部分を欠損。四柱、ダメージ限界を超過しながらも霊基の保持に成功。
『システム』崩壊。余波にて、天界の崩壊も推測される。阻止は不可能。
第二次逆行運河・創世光年――『聖書推敲』の成功を確認。
「――ここが、我々の極点か」
これで、我らの至高命題（グランドオーダー）の証明とする。

■

ほとんどの魔神は消滅した。生き残った魔神たちも限界を超えている。その影響により、ゲーティアは自身を保てない。もはや己を構成する成分が圧倒的に不足している。天使の一匹も残らず死した世界でひとり、突っ伏した。

「ゲーティア、ここにいた」

自分の機能が停止に近づくことを自覚しながら、薄れていく意識の中で、ゲーティアはその声を聴いた。ほとんど動かない身体を動かせば、そこには思った通りの相手がいた。

「……オーフィスか」

「我、ゲーティアがいないと寂しい」

思えば、この龍神との出会いは非常に面倒な形で始まったはずだ。強い癖に知力が低く、長生きしている割に無垢で、ドラゴンの分際で純粋だった。

「寂しい、寂しいか。ずっと静寂を求めていたんだろうに。ずっと孤独であったんだろうに。時間神殿に潜り込む前に戻るだけだぞ?」

「静寂要らないから、ゲーティア消えないで」

予想外の言葉に固まるゲーティア。不思議な感情に襲われるが、この感情の正体に気づく前に自分は終わってしまう。

「それは、ちょっとばかり聞けないな」

「ゲーティア、いなくなる? 我、ひとりになる?」

「すまんな」

謝罪を聞いて、オーフィスは無表情のまま双眸から涙を零す。ゲーティアは指先でそっと涙を拭い、無垢な少女の如き龍神の頬にそっと手を添えた。

「我々の……私の最期の我が儘を聞いてくれるか?」

「……何?」

「どうか笑ってくれ、オーフィス」

「笑う?」

無表情のまま泣きながら首を傾げるオーフィスに、ゲーティアは苦笑する。軽く頬を引っ張たり揉んだりするが、オーフィスの表情に変

化はない。
「笑う、固有結界より難しい」
「……ああ、全くだ。心より同意するよ」
諦めたようにでもなく、嘲るようにでもなく、怒るようにでもなく、悲しむようにでもなく。
心の底から笑うことの、何と難しいことか。あの王があのような笑い方しか出来なかったのも、仕方がなかったのか。
「何が役割を放棄しただ、無能な王め」
やはりと言うか、最期まで悪態を突くことしか出来ない。
「誰が貴様の積年の慙愧だ、無慈悲な王よ」
今更、撤回してもらうことは出来ないし、してもらうつもりはない。我々はどうやっても償うことの出来ない罪を犯したのだ。
だからこそ。
「我々はちゃんと、今度こそ、役目を果たせたでしょうか？」
貴方の使い魔に相応しい偉業を為せたでしょうか？
「これからの人類がどうなるかなど、大偉業達成の前では、些細な未練だ」
やるべきことは全てやった。これ以上何かするのは蛇足だ。外宇宙から来た罪人の領分などとっくに超えているのだから。
「この結末に、後悔などあるはずがない」
実際、やり遂げたと思っている。
「我々が、私が抱く感情は、達成感による歓喜以外有り得ない」
そのはずなのに。
ああ、どうしてだろうか。
曹操。ゲオルグ。レオナルド。ジャンヌ。ヘラクレス。コンラ。アーシア。ペルセウス。ゼノヴィア。ジークフリート。フリード。リント。ヴァレリー。トスカ。兵藤一誠。
そして、オーフィス。
「もう少しだけおまえたちと、この人生（ユメ）を楽しみたかった――」

胡蝶の夢から醒める時が来た。死にたくないと思っているのに、どうしてこうも清々しいのか。

「――王よ、いま御許に戻ります」

本当に、随分と長い倦怠だった。無駄に長い寄り道だった。ようやく終われる。もう終わってしまう。

人の人生の、なんと短く、なんと面白いことか。

「ゲーティア？」

反応はない。その理由を分かっていながら、オーフィスは彼の名を呼ぶ。

「……ゲーティア」

何度も何度も、龍神はようやく手に入れ、失ってしまった家族の名前を繰り返した。

七つの人類悪の一つ『憐憫』を司る獣、ビーストⅠ、ゲーティア。人理焼却の実行犯、ソロモン七十二柱の統合体。

人類の悲劇を悼み、星を作り替えようとした彼らの物語は、いま再び、終わりを告げた。

赤き龍の帝王

三千年前に、その男は生まれた。

巨人を倒した羊飼いダビデの息子、ソロモン。怒りしか知らぬ魔術王。神殿を築き、異形を殺し、『壺』を落とし、『真理』を残した。この星にあるあらゆる悲劇の元凶。

アザゼルは当初、この男を見誤っていた。所詮は成り上がりの子と見くびっていた。あのモーセの子孫ではあるが、それだけの男だと。だが、この男は途轍もない悪意の塊だった。

三千前に死んだというのに現代に蘇った。宿敵であるはずの悪魔を乗っ取るという、あまりにも無節操な方法で。かつての悪行を省みるでもなく、相変わらず世界に敵意をばら撒いていた。

分からない。分からない。分からない。分からない。分からない。

アザゼルにはソロモンの考えが何ひとつ分からない。その正義の在り方が分からない。

何故――何故、人間を殺した程度のことで、そこまで怒りを向けられなければならない!? そんな理不尽な話があって堪るものか。おまえとて王ならば理解できるはずだ。たかだか人間数万人が死んだ程度で、俺たち堕天使の怒りを買うなど馬鹿馬鹿しいと!

実際にそう直談判をした堕天使もいた。至極当然の道理を説いたはずの彼は、無残に八つ裂きにされた。それを知った時、俺たち堕天使は理解したのだ。この男と相互理解など不可能だと。

愚かな王ソロモン。そんな当たり前のことすら分からないのならば、おまえはやはり王になどなるべきではなかった。おまえの愚行のせいで、こんなにも俺たちが困っているのだから。人間如きが、俺たちに迷惑さえかけるべきではないのに。

「ソロモン……! てめえだけはあああ!!」

殺す。殺す。殺す。殺す! 人間を守るなどという虚言を吐き出し、その実破壊しか行わず、これほどの凶行に及びながら兵藤一誠を演じるこの男だけは……!

全ての罪を兵藤一誠に着せるつもりだろうが、そうはいかない。な

んとしてでも、その身体からその穢れた魂を追い出してみせる――！
　そんな風に殺気立って光の槍を出現させたアザゼルの前に、ヴァーリが立ちふさがる。
「どけヴァーリ――」
「なあ、アザゼル」
　激昂するアザゼルに対して、ヴァーリは冷静なままだ。冷静なように見える。全身鎧を纏ったままで、その表情は窺えない。
「何をそんなに怒っているんだ？」
　その心底不思議そうな問いに、アザゼルは一瞬呆けてしまった。
「おまえ、自分が何を言っているのか分かってんのか？」
「ああ。悪魔が悪魔を殺そうとして、それに失敗しただけだろう？　どうして堕天使が、それに対して怒りを感じるんだ？」
「悪魔？　いいや、一誠のことを言っているならそれは違う。あれはソロモンだ。一誠はリアスに心底惚れていた。そんなあいつが、リアスを殺すもんか。リアスだけじゃない。あいつは、朱乃たちにも本気で攻撃していたんだぞ？　どんな事情があったとしても、情愛の深いグレモリー眷属が、仲間思いのあの馬鹿がそんな真似をするはずがねえんだよ」
「違うよ」
　ヴァーリは真向から否定する。その信頼を。その妄想を。その戯言を。
「あれは兵藤一誠だ。肉体も精神も魂も、彼だけのものだ」
「ふざけんな！　一誠にリアスたちを殺す動機なんてねえんだ――」
「貴方だよ」
　ヴァーリは正面から提示する。その真実を。その現実を。その罪状を。
「貴方だよ。兵藤一誠がリアス・グレモリーを殺す理由があるとしたら、それは貴方だ、堕天使アザゼル。グリゴリのやっていた神器所有者狩りで、兵藤一誠は死んでいる。――リアス・グレモリーの縄張りの中で。もしも彼女が正しく領地を支配できていたならば、兵藤一誠は死ななかったかもしれない」

どれだけ語ったところで可能性の話だ。リアスが駒王町を管理する悪魔でなければ、なんてのはＩＦでしかない。だが、責任を被りたくない支配者はともかく実際に死んだ被害者には関係ない。

「だとしても、あいつは悪魔に転生して主人や仲間に恵まれていた！　少なくともリアスやあいつの眷属は、イッセーが悪魔に転生して喜んだ。イッセー自身も悪魔に転生して良かったと感じていただろう！」

「俺はそのあたりを知らないが、短期間と言えど教師をやっていた貴方が言うならそうなんだろう」

しかし。

「それが、何だというんだ？」

なんて的外れな自己弁護だろうか。なんて憐れな自己欺瞞だろうか。

「貴方に拾ってもらったこと、感謝している。ここまで育ててもらったこともだ。堕天使陣営を裏切ったことで迷惑をかけた自覚もある。そのことに関しては申し訳ない。だから、俺にできる恩返しはこれだけだ」

堕天使の歴史は俺が終わらせてやる。

燃料として焼き尽くすのではない。人間の子として、罪人を裁こう。魔王の末裔として、宿敵を殺そう。

「これだけは、ソロモンや聖書の神、抑止力の思惑さえ無視しているようだぞ？」

■

「俺の質問に答えてください」

ライダーのサーヴァントが完全に消え去ったと同時に、兵藤一誠は幽鬼のような表情でリアス・グレモリーを見た。

「どうして、俺を眷属にしたんですか？」

その問いは、あまりにも意味のないもの。

強力な神器を生まれながらに宿していた兵藤一誠は、神器所有者を

危険視する堕天使に世界の真実を知ることもなく殺された。そこに偶々呼び寄せられたリアス・グレモリーが己の持つ『兵士』の駒全てを費やして彼を悪魔に転生させた。それが真実だ。それだけが真実のはずだ。

「貴女はレイナーレを知っていた。堕天使に動きがあることを事前に知っていた。レイナーレは貴女なら容易く滅ぼせる堕天使だった。貴女は駒王町を支配する悪魔だった。貴女は『兵士』の駒八個でちょうど俺を眷属にできた。貴女は――悪魔だった」

「な、何を言っているの、イッセー？」

「俺を眷属にするために、貴女はレイナーレを見逃した。俺が殺されるまで泳がしていた。そんな真実はなかったのかと、聞いているんです」

ここに来て、ほぼ無意識に、リアスは目の前にいるのが魔術王ソロモンなどではなく、兵藤一誠だと認めた。誰かが入り込んでいるのではなく、彼本人だと。

「貴女は一体――俺をどのタイミングで眷属にしたいと思った？」

あの日、兵藤一誠がチラシを持っていたのは本当に偶然なのか？

兵藤一誠の一度目の死は回避することができたものなのか。

――運がなかったのでしょうね。

その答えを知っているのは、兵藤一誠の死をそんな言葉だけで片づけた紅髪の悪魔だけだ。

「答えてください、部長」

リアスは何も言えない。

「答えてみろよ、リアス・グレモリー」

朱乃たちも何も言えない。

「答えろ、我が主人――！」

リアスには、何も言えなかった。

「ああ、そうだ。貴女はそうなんだよな。ああ――俺は、俺たちは！どんな世界でも、結局はそうなんだ。自分たちが何をしたのか、何をしなかったのか誰かに指摘されないと気づかない。気づいたところで、それを背負うことさえ放棄する。まさに『悪魔』だよな！」

兵藤一誠の脳裏に、ある可能性が影を差す。
ゼパルから教えられた並行世界。魔神が召喚されなかった世界の自分の記録。記録は所詮、記録だ。そこにある人間の感情など分からない。
だから一誠は、並行世界の自分がある出来事についてどう考えているのかが気になった。
それは上級悪魔になったことじゃない。それは真紅の鎧を顕現させたことじゃない。それは赤龍帝として生まれたことじゃない。
悪魔に転生して間もなくのこと。
依頼人のひとりが――フリード・セルゼンに殺されたことだ。並行世界におけるアーシアとの再会。あの時に、依頼人ははぐれ悪魔祓いであるフリードに殺されていた。悪魔と契約をしていた、それだけの理由で。惨たらしく殺された。
この世界では、あの人は死ななかった。他の依頼人のように、チラシを通じて俺を召喚しようとして、でも俺は魔力が子どもよりないから転移さえ出来なくて、自転車で行ったら「こんな悪魔聞いたことがない！」とか言われて、それでもなんとか依頼をこなして。そんなお得意様のひとりでしかない。
「俺たちは、自分たちの罪を知ろうとすらせず、小綺麗なつもりで、その醜さを振りまいている」
なあ、並行世界の俺。
おまえはちゃんと、おまえのせいで死んだ人の存在を憶えているのか？　いや、そもそも――あの人の死を覚えているのか？
白龍皇だの北欧の悪神だの聖槍だの旧魔王だのとの戦いに比べたら些細な出来事なのかもしれない。だけど、あれは忘れちゃいけないことだ。覚えていなければならない俺の罪だ。
一番悪いのは、実際に殺したフリードだ。一番責任があるのは、堕天使勢力の介入を察知できなかったリアス・グレモリーだ。魔力の強弱云々は素質の問題で、俺にはどうしようもない問題だった。だけど、俺には関係のないなんてことは絶対にない。
もしもおまえがそれを覚えていないのだというのなら――。あの

出来事を反芻することもなく、周囲に祝福されるままに日々を生きているのとのなら――。

それは、それはなんて――羨ましい。

「何だ、そりゃ」

第三者の声。

新手かと思い見れば、棺桶を背負った少年がそこにいた。少年の顔に見覚えはないが、その棺桶の方は記憶に新しい。確か掃除屋あるいはアーチャーと名乗った包帯男の背負っていたものと同じものだ。

この場にいる誰もが把握していないが、彼こそが異世界で神殺しと聖書虐殺を為した救世主。人王と英雄の理想を受け継いだ、ただの人間。看護師から逃げていた彼は、引き寄せられるようにこの場に来ていた。あまりにも鍛え過ぎた直感が、彼をここに導いてしまった。

「ふざけんなよ、兵藤一誠。何でおまえ、自分が悪いみたいなこと言ってんだよ。逆だろうが、おまえは。何やったって、何言われたって、自分は悪くない。自分に責任はない。周りが悪い。自分以外が悪い。自分を批判する奴らが悪い！　そうやってずっと罪から逃げてきただろうが。誰を殺そうが、誰を救えなかろうが、反省も謝罪もしなかったじゃねえか」

泣いていた。笑いながら泣いていた。

「ああ、これはない。こりゃねえよ。なあ、曹操さん。それができる人間ならどうして、俺たちの世界で一度もしてくれなかったんだ」

この男に良心があるか否かで、何百、何千、何億という生命が左右されたというのに。

彼の世界とこの世界で、何が違ったというのだ？

「ならば、その罪を半分もらう」

少年は背負っていた棺桶を地面にたたきつける。

その音と強烈な殺気で、ようやくグレモリー眷属やサイラオーグ・バアルは意識を立て直す。ある者は突然の乱入者の次の行動に警戒し、ある者は乱入者に攻撃を仕掛ける。

「神滅具全起動」
あまりにも遅い。それは攻撃や防御云々の話だけではなく、もっと根本的な話だ。
「俺たちは此処で災厄を断つ」
それは惑星を焼く光帯ではなく、それは常識を逸した固有結界の工房ではなく、それは魔術を無に帰する返還の儀式ではない。
神に届くとされた神器――神滅具。最終的に確認された十八個のうち、十一がその棺桶には詰められている。それら全ての力が解放された。
「人よ、真理に打ち勝て」
棺桶から取り出されたのは、星の息吹を束ねた聖剣。星が生み出し、神が鍛え直し、人が振りかざした未来への道筋。命を奪うために殺すのではなく、命を繋ぐために勝つ力。人の手による神殺しの真実。
少年はその眩き剣の切っ先を天に掲げる。
「『再編の時来たれり（ザー・レ・メ・ナ）、我らは星を歩むもの（ゲ・ト・ン）』！」
その剣から放たれた光は、その場にいる全員の目を塞いだ。聖なる光であるにもかかわらず、悪魔たちにも欠片もダメージは入らない。この光はその気になれば星の裏側にさえ届く。
「え……？」
しかし、それは肉体の話だ。精神は別だ。この剣は物理的な破壊も可能であるが、それ以上に光を見たものに対する精神攻撃が本体とも言える。否、これを『攻撃』と取るかどうかは、その相手次第だ。
「う、そだ……！」
「あ、あああああああああ」
「違う、そんなの、有り得ません……」
「イッセー、くんが、魔神と通じていた……？」
光を見たものは、ただの例外もなく『真実』を知る。救世主さえ知らない、星の記憶を見せつけられる。その現実という光に目を潰されるか、向き合うかは本人次第だ。
ある並行世界ではこの能力によって人々に神殺しが可能であると

訴えかけ、『真理』の絶対性を打ち破り、ビーストXを滅ぼしたのだ。
「だ、騙されないわ！　だって、だって！」
「いいえ、これが現実です」
一誠はリアスを抱き締めるようにする。その手には、泥によって光を失った龍殺しの聖剣があった。
「最後まで悪いな、アスカロン」
リアスは一誠から離れようとするが、もう遅い。怪物の弱点は昔から心臓と相場が決まっている。聖剣や聖槍である必要さえない。木の杭ですら十分だ。
これで戻れないというのならば、もうそれでいい。
愛しい女を殺しておいて、自分だけ綺麗なままなんてあまりにも身勝手だろう。悪魔でもあるまいに。
少なくとも、この世界、この瞬間に生きる兵藤一誠は『人間』なのだから。
「貴方は、私を裏切ったの？」
「はい、そうです。俺は――貴女よりも自分を選んだ」
「い、せえ」
「さようなら、俺のご主人様。貴女は俺を恨んでいい」
代わりに、俺は貴女を許さない。

■

一連の騒動はすべて、魔術王ソロモンの狂気という形で落ち着いた。
旧魔王派が隠されていた指輪を発見したが、その中にはソロモンの魂が封印されていた。旧アスモデウスの身体を乗っ取った魔術王は外宇宙から『自分と同じ名前の男』を呼び出し、結託し、共に聖書勢力を滅ぼすことを決定する。しかし、ソロモンは同盟者を裏切り、唯一神となる。裏切られた『異世界の王』は唯一神ソロモンと相打ちになった。天界と冥界はその余波で消滅した。
一部の神々以外は、そんな風に認識する事件であった。忌まわしい

『真理』の崩壊と外宇宙の発見、聖書の絶滅。それが今回の事件の結末である。

聖書の勢力に属する異形、悪魔、天使、堕天使はいずれもほとんど絶滅状態だ。元々大戦からのダメージから回復していなかった三大勢力だったが、今回の件でとどめを刺された。他の勢力の庇護下に入るか、野良犬か傭兵のように生きるか、魔王や総督の後を追って死ぬかのどれかである。魔術師協会の会長であるメフィスト・フェレスや冥界焼却寸前に不死鳥由来の家に嫁いだレイヴェル・フェニックスのような例外もいるが。

龍神オーフィスを首魁とする『禍の団』は事実上の消滅。人王が呼び出したサーヴァントたちはマスターを担っていた魔神が消滅したため、座に帰還した。その際に彼らが誰に対してどのような別れを告げたのかは本人たちが知っていればよいことだろう。英雄派、あるいは魔法使い派を名乗っていた彼らがどのように生きるかは不明だ。同じ道を進むこともあれば、袂を分かつこともある。人間とはそうやって生きるしかない生物だ。

ソロモンが呼び出したサーヴァントの内、バーサーカー、アーチャー、ライダーは倒れて消滅。役割を終えたアサシンとキャスターは元の世界に帰還。妻との再会を果たしたセイバーとランサーも同じである。

キングゥは京都に帰化することを決めた。生まれなど関係なく、やりたいことを見つけたのだろう。

キャスパリーグは世界中を歩いている。彼の身体が『大きくなっている』か否かは、この世界の真価による。それこそ、何年か、あるいは何千年か後に答えは出る。

獅子王率いる円卓の騎士たちは神を失った教会や天使たちを丸ごと引き入れることに成功し、この世界の新しい勢力となりつつある。その座は、やがてこの世界のペンドラゴン家が受け継ぐことになる。

その大事件の影で、堕天使の総督が白龍皇に、紅髪の魔王の妹が赤龍帝に殺されたが、あまり関心を向けるものはいなかった。

曰く、二天龍に関わった者はろくな人生を送らない。最後の二人も

また例外ではなかったというだけの話だった。

エピローグ

旧時間神殿。空間を構成する魔神の大半が消滅したが故にかろうじて異空間として存在しているその場所に、二柱の魔神が向かい合っていた。

「五十九柱は先の天界での戦闘により消滅した」

七十二柱中五十九柱。過半数どころではない。それだけの数の魔神が、人理補正式の名の下に殉職した。

死にたかったわけではない。極点に辿り着いた先に為したいことがなかったわけでもない。それでも、五十九柱は極点への道を拓いてみせた。魔術王の御使いの生き様をこの世界に刻み付けた。

フェニクスのような例外もいるが。

彼らが復活するようなことはもう有り得ない。戦いの後に残った僅かな残滓さえ、あるドラゴンが『蛇』を使って回収したのだから。

「四柱――バアル、グラシャ＝ラボラス、アスモダイ、フラウロスは異世界に跳躍した」

ある者は平凡な少年への復讐のため、ある者は一度仕えた魔法少女との再会のため。ある者は、あのふたりの現実を見届けるために。

英雄派とはひと悶着あった。最後の戦いに同行されなかったこともそうだが、別れの言葉さえ向けられなかった。異世界跳躍に関しても、参加の意を示すものが多かった。意外なことに曹操は最初からこの世界に残ることを選択していたが。

また、あのリゼヴィム・リヴァン・ルシファーが同盟者となっている。形ばかりの同盟関係だろうが、背中を刺されないようにしてもらいたいものだ。

すでに異世界への跳躍に成功した彼らだが、目的地である『F』に跳躍できたかは不明だ。それこそ、『F』に辿り着くまで様々な世界を回るかもしれない。

「七柱――アンドラス、シトリー、アスタロス、グレモリー、ハルファス、ナベリウス、クロケルはこの星への永住を選んだ」

天界での戦いで、多くの魔神が消滅した。同時に生き残った魔神は

霊基の破損が著しいものがほとんどだった。それこそ、異世界への跳躍になど耐えられぬほどに。元々この世界に居座る予定だった魔神もいるが。

当初の予定どおり、アンドラスはヴァレリーを宿主にすることで存在を保っている。他の魔神もそれに倣い、ある者は天使の死体に寄生し、ある者は魔獣と融合し、ある者は人間の内部で傷を癒やしている。それでも、かつてのように不死の魔術式として存在することは不可能だろう。

その限りある命をどう消費するかは、各々の選択による。ハルファスは神魔と協力関係を結んだが、対照的にナベリウスはこれからも英雄派と行動する予定のようだ。

「私――ゼパルは『赤い龍』の結末を見届けた後、この時間神殿跡にて槍の監視を続ける」

ゼパルは、消滅を免れた。尚且つ、他の生命との融合も死体利用も寄生も選択しなかった。そして、あの宇宙への帰還も望まなかった。

あの少年をあのような結末に導いた最初にして最大の要因こそが、ゼパルだ。故に、ゼパルには彼の結末を見届ける義務がある。赤き龍の最期を看取る責任がある。

彼の行く末を確かめた後は、この忌々しい神殺しの槍を見張る。聖書の神はソロモンごと滅ぼしたはずだが、この槍の中にはその遺志の残滓が残っている模様だ。まして、神殺しの力は誰もが欲するもの。だからこそ、せめて次の担い手に渡るまでは魔神が見届ける義務がある。

「おまえはどうする、ラウム。その崩れかけの霊基で、どのような終わりを目指す？」

魔神ラウム。ゼパル以外では唯一、自らの霊基のみでかろうじて自己を保ち、この星に残ることを選択した魔神である。

「そうだな。私は新たな生命を創り出そうと思う」

「何？」

「君も理解している頃だろう。『真理』が消滅しただけでは、聖書が消え失せただけでは、人間は救われないと」

別に、人間に有害な神魔が聖書だけなわけがない。彼らが顕著に被害を与えていただけで、北欧にしろギリシャにしろインドにしろ日本にしろ中国にしろ、異形は人間に害する存在だ。無論そういう側面だけではないが、人間と自分たちを対等と考える異形はごくわずかだろう。まして、真理が消滅した今となっては。

三千年の間に身の程を弁えた神魔もある程度はいるだろうが、ほとんどの神魔は三千年前の昨日を求めて暴走する可能性さえある。

「しかし、我らはそれを承知で聖書推敲を実行したはずだ。これより先は彼らの旅路。我らはソロモン七十二柱。その御名に誓って、異世界だとしても、ソロモンと聖書の神を止める義務がある。そして、その目的は達成された。多くの同胞が満足と納得を胸中に抱き散っていった。これ以上何を求める？」

「黙れ」

ラウムはゼパルの言葉を、他の魔神の選択を絶対零度の声で否定する。

「黙るがいい。この程度の救済で満足した同胞め……！」

「続ける？　そのノリ、まだ続ける？」

「あ、すまない。素で間違えた」

「出来れば故意であって欲しかったぞ」

「訂正だ。……黙りやがれ、このゼぺっなんとかが！　かーっ、ぺっ！」

「ふむ、泣いていいな？」

戯言を宣うゼパルを無視して、ラウムは自らの結論を吐露する。

「私の命題は譫妄、啓蒙、虚構を用いて、真実を終わらせること。特に、禁忌の中の禁忌、ひとりの夢を見る男が吐き出した創作神話、妄想と一致した外宇宙の高次生命体たちを利用することを考えていた」

「だが、その力の危険性は並行宇宙によって立証されている。おまえの技術が役立ったようだがな」

「如何にも。しかし、その技術は一時的に撃退しただけで終わった模様だ。聖書の神に対する逆襲に利用できなかった時点で、私が求める理想とは程遠い」

「ならばどうする？　『E』の乳神でも呼び出すか？」
「論外だ。それよりも余程参考になるものがある」
　我々では不可能だった。『F』でも『C』でも『E』でも、神々に人間を救うことは不可能だった。そして、この宇宙『D』でもそれは同じだった。しかし。
「人間。人間だよ、ゼパなんとか」
「真面目にやるのかふざけるのか明確にしよう、な？」
「すべては人間の行う事だ。神話が現実として存在する世界で、聖書や『真理』という下地こそあれど人々は偽りの神群を生み出した。どこの宇宙にも存在しない本当の意味での架空神話、グノーシス主義を」
　グノーシス主義。知識こそ正義であると同時に、グノーシス主義の象徴たる蛇が世界最強である理由がそこにある。人間の感情の塊であるトライヘキサが、三千年程度でグレートレッドに並んだ道理がそこにある」
　サマエルとソロモンはトライヘキサを生み落とした。グレートレッドはオーフィスを切り離した。どちらも、創造主の思惑など受け継がなかったが、だからこそラウムには十分なサンプルとなった。
「すでに神崎光也と協定は結んだ。『X×X』のメンバー、神滅具『蒼き革新の箱庭』と『究極の磨羯』の力、神秘と人理が混濁している星の現状、そして聖書との戦いの戦利品。これらがあれば神の創造さえ可能だ」
　いまならば出来る。この時代を逃せば次の機会はない。ソロモンによる全人類への神秘漏洩の件もあり、聖書崩壊を利用して勢力拡大

の準備を進めている神群は多い。冷戦状態だからこその隙がある。『システム』が解体された以上、神滅具はこの世代で終わりだ。新しい神滅具が幾つか確認されたそうだが、それらは現在の所有者が最初で最後の所有者となる。

グレートレッド、オーフィス、トライヘキサ。これらに次ぐ、新たな超次元生命体を生み出せるのはこの時代でなければ不可能なのだ。

「……我々はもっと早くに気がつくべきだった。我々では不可能なのだ。既存の修羅神仏では不可能なのだ。どのように愚かな神でも、どのように優しい魔王でも為せぬのだ。であれば――」

我々の手にはなく、どの宇宙にもないのならば、創ってしまえばいい。

「私は此処に誓おう。人の為にある神を、人と共に歩ける魔王を。人と同じ景色が見える魔神ミシャンドラを生み出してみせると――」

時間神殿跡からラウムの気配が消失すると、ゼパルは落胆の独白を吐き出す。人間ならば溜め息を伴うような響きを込めて。

「愚かな。聖書との戦いは、我らの中から脱落者を生み出した」

七十二柱の中にはラウムと同じような考え方をしていたものもいるだろう。だが、その思考を持って生き残ってしまったのはラウムだけだったようだ。成功し、勝利した。故に、更に先を求めてしまった。

「魔神ラウム。今は無き統括局に代わって、否、ひとりの魔神としておまえに決を下す」

――その妄想に滅びあれ。汝の解答は、三千年前に失敗した、と。

何故ならば、ラウムの語った妄想は、この世界におけるソロモンの半生そのものだ。過去の人間がソロモンに願い、ソロモンが未来の人類に押し付けた原罪。それが間違いであると、『期待』がどれほど罪深いかを、この戦いで理解しているはずなのに、ラウムはその道を選んでしまった。まるで、何度も過ちの歴史を繰り返す人間のように。

これが聖書との戦いの勝利の結果だというのなら。これが大偉業

達成の成果だというのなら。
なんと、素晴らしい。
「おまえもそう思うだろう？　我らの愛し子よ」
かつて人王ゲーティアが座っていた時間神殿の玉座には、人間の少女の姿を真似た龍神が座している。
精神が成長したためか、以前よりも年齢を重ねた姿をしている。そして、その顔には人王が見ることが叶わなかった、年相応の少女のような柔らかい微笑みがあった。
「もしもミシャンドラが生まれるとしたら」
もはや機能を失った指輪を眺めながら、オーフィスは興味深い可能性を提示する。
「その子は、我の弟妹になるのかな？　ゼパなんとか」
「えー、嘘でしょ。おまえまでそのノリ？　ゼパなんとか」
そんなところまで受け継がなくてもよいではないか、とゼパルはちょっと凹んだ。

■

「……待たせたな」
「そうでもない。勝った方が、アルビオンと最後の決着ということでいいのか？」
「ああ、そういう話になった。最初に戦った場所で待つ、なんて伝言を受け取ったよ。……なあ、結局おまえの目的って何だったんだ？　ドライグとしても、アーサーとしても」
「私、そして俺は、未来が見たかった」
「未来？」
「私は、ペンドラゴン家の。俺は、赤龍帝の――おまえの未来が知りたかった」
「赤龍帝？　違うよ。俺は――兵藤一誠だ」
「――そうか」
「行くぞ、ドライグ！」

「来い、イッセー！」

■

「――――と、まあ、一段落だね」

「これで、魔神たちを利用した計画は終了か、メフィスト・フェレス」

「人聞きの悪いことを言わないでくれよ、グレートレッド。僕は黒幕でも元凶でもない。魔神やら人類悪やらをどうこうして何かをしたのは、あくまでもサマエルと聖書の神とソロモンだ。僕や君――抑止力に与するものはそのおこぼれをもらっただけの話じゃないか」

「救世主が生まれなくなった。悪魔が滅び、唯一神が終わった。人間の未来が、抑止力に都合の良く動かせるようになった」

「その通り。手始めにギリシャをアステカあたりにでも焚きつけるか……。インドと中国と日本にアジア連盟を結ばせる方が先かな？　どっちも、禍の団や聖書の残党をどの勢力が吸収できるかを見極めてからか。まあ、これで君の仕事は終わりだ、グレートレッド。星の未来が終わる最期の瞬間まで、次元の狭間で泳いでいてくれたまえ」

「この宇宙の真龍はそうなのだろう。だが、別の並行宇宙の真龍にはまだまだ仕事が残っている。……また貴様に仕事を増やされると思うと非情に不愉快だ」

「ん？　例の救世主くんが生まれた宇宙の話かい？」

「そうだ。貴様が、最新の救世主を誑かしたせいで、真龍の仕事が増えた。下等な転生悪魔なぞの復活に、真龍の身体を使うことになった。そして、聖書を憎悪すべき救世主に『ソロモンと同類になりたくないなら悪魔や天使を許せ』など、無茶を言うものだ」

「だけど、彼は許したんだろう？　いや、許そうとしたのか」

「是である。そして、その愛をおまえは踏みにじらせた。救世主が悪魔を滅ぼそうとしているなどと、紅髪の姫を唆したことで、悪魔は徹底抗戦の泥沼にはまった」

「成程。並行宇宙と言えど、我ながら上手くやったものだ」

「シバの女王の時と同じだな。『蝙蝠』とはよく言ったものだ。ビース

トX顕現の間、人類を守護しながらも、戦後に悪魔に信用されるとは。……人間から悪魔に切り替えるべきだったのではないか？　手間だろう」

「悪魔なんてどうせ何もしなくても、百年先には完全に『停止』するからね。星の未来を想うなら、絶滅危惧種なんて庇ってられないよ。さっさと滅んでくれないと邪魔でしょうがない。ならば人間の方が扱いやすくて都合がいいのさ」

「その絶滅の日ギリギリまで生存した宇宙もあったのだがな」

「赤龍帝がサマエルの毒で死に、君とオーフィスのクローンとして復活した世界線の話だね」

「ひとりの転生悪魔とその周囲の者のみが悪魔の進化の可能性を独占したが故に、悪魔全体は決して進歩しなかった。故に、滅んだ。マクロ単位で悪魔は悪魔という枠組みから出ることに失敗した。いずれ訪れる絶滅に適応できなかった」

「愚かな種族だ。人間以上に愚かだ。悪魔はもう千年ほど冥界から出るべきじゃなかった。なまじ力と知恵があった分、冥界や己を知り尽くす前に別の種族に干渉してしまった。その結果が、この冥界焼却だ」

「ところで貴様、天界崩壊から何を得た？」

「出来れば神器関係の機関を回収したかったんだけど、ゲーティアたちはそのあたりは徹底的に壊したからね。手に入ったのは、異世界への干渉装置だけだ。これで『切り捨てられた可能性』でも呼び出そうと思う。異聞帯とか言うらしい。そこの生命でも使って、神話間を上手くコントロールするさ。ゲーティアが聖書を滅ぼしたおかげで、修羅神仏が外宇宙の危険性を分かり易く理解してくれたからね」

「廃品利用が過ぎるな。不要な怒りを買うなよ」

「はあ？　おいおい、どうせ廃棄品なんだ。好きに使って、勝手に使い潰して、誰が怒るって言うんだい？　誰にもそんな権利はないよ。特に、切り捨てた連中にはね」

番外編　夢の果てに死すとも・上

――誰かの夢を見ている。

神に導かれた男がいた。槍に狂わされた男がいた。

極々平凡な村に生まれ育った少年がいた。彼はある日、己が最強の神殺しの力を持ち、歴史に名を残す英雄の血筋を継いでいたことを知る。

最強に至るかもしれない人生の転機がもたらしたのは、栄光などではなく、孤独の始まりだった。誰も信じられなかった。誰も頼ることができなかった。自分の人生を狂わせた槍こそが、彼の唯一信じられるものだった。

力を蓄え、仲間を集め、名前を捨てた男はひとつの結論に至る。

この力には意味がなければならない。この力を生まれ持った自分には栄光が与えられるはずだ。そんな強迫観念あるいは妄想が彼を突き動かした。

〝俺は異形の毒になる。人間がどこまでやれるか挑戦してみせる。〟

ある日、ある戦場、ある女から告げられる。男が為そうとしている偉業にとって、その力にも血にも意味などない、と。

目を逸らしていた現実を突きつけられた。目を曇らせていた幻想を叩き壊された。

そこで折れてしまえば楽だったのに、男は歩みを止めなかった。

出会ってしまったからだ。知ってしまったからだ。平凡でありながら偉業を為した『彼』の存在を。『彼』に憧れた。『彼』になろうとした。

その結果、男は恩師も、仲間も、無辜の民さえ守れなかった。男に許されたのは、小さな足掻き、僅かな抵抗、微かな希望。異形に貪られる人々をひとすくいでも救おうとした。死後の己さえ売り払って、その手を無理やりにでも伸ばした。せめてひとり、もうひとりと。

脅威的な邪神を撃退した。目標にしていた魔王を打倒した。醜い異形の群れを滅ぼした。かつて男の求めていた英雄的偉業のはず

だった。
勝利の喝采も英雄への称賛もなく、男はひとり、空白を味わった。
男はようやく気付く。己が何を求めていたのか。己が掲げた覇道が、どれだけ的外れなものだったのか。
されど、男にとって苦痛の旅路はそれからだった。価値があると、本当に尊いものだと再認したはずのものを、壊す。男の手で、地獄が作られた。求めていた栄光などそこにはなく、在るのは血みどろの自分だけ。
地獄を見た。地獄を見た。地獄を見た。
同情などすべきではない。これは男の不適当で不相応な理想の代償。男が犯した過ちの清算なのだから。
しかし、これが世界を救おうとした男の末路だと思えば、心が欠けそうになる。
男が辿り着いたのは、過去の己。過ちを繰り返す前の自分。
男は思い出した。己が何を手に入れたのかを。
男は出会えた。己が残したものを受け継いだ救世主に。己が繋げられた未来に。そして、自分が目指していたものにちゃんと成れていたとようやく知れた。
男は答えを得た。
故に、此処にいる。

■

「ん、んん……？」
小さなうめき声を上げながら、少女は目覚めた。
頭を起こすと、その夕日のようなオレンジ色の髪が小さく揺れる。
人理継続保障機関フィニス・カルデア所属、藤丸立香である。
「えーと……」
長い夢を見ていた気がする。起きると同時にどんな夢だったかは忘れてしまったが。そんなことを考えながら、立香は自分がどういう状況にいるかを思い出す。

まず、自分のいる場所がカルデア食堂のテーブルであることを確認する。テーブルの向かい側には自分と同じような姿勢に寝ているふたりの女性がいて、どちらも熟睡している。背中には毛布がかけられていた。見れば自分にも同じように毛布がかけられている。

「ああ、そうだ。ふたりと話してたら寝ちゃったんだ……」

毛布には覚えがないため、周囲に誰かいないかと見渡す立香。

「目覚めたか、マスター」

すると近くから声がした。

声のした方を見れば、壁によりかかってひとりの男性が立っていた。

自分の身長と同じサイズの棺桶を背負った、外套と包帯の男。アーチャーのサーヴァント。真名は×。

×

中華圏らしい名前だが、立香はそんな名前の英雄を知らなかった。ドクターやマシュも知らなかった。正確には、彼に該当する英霊が歴史に存在しなかったのだ。もちろん、あまりにもマイナーすぎて、書籍などに記されていないことだって考えられる。西洋圏では有名だというアーラシュのことを、立香が知らなかったように。

しかし、そうじゃないんだろうなと、立香は考えている。彼はきっと正規の英霊ではない。掃除屋、守護者、抑止力の尖兵と言われる存在なんだろう。二人の〝エミヤ〟のように。

彼は最初の特異点で召喚された古株だ。彼がいなければ終わっていたような状況は多々あった。第一特異点で、巨大な邪竜に挑んだ。第二特異点で、破壊の大王の一撃を凌いだ。第三特異点で、大英雄の足止めをした。第四特異点で、冠位の暴力に抗った。第五特異点で、融合した魔神を撃退した。第六特異点で、聖槍の光を逸らした。第七特異点で、堕ちた女神に食らいついた。終局特異点で――。

「話に夢中になるのはいいがな。年頃の淑女が三人もこんな場所で眠るのはどうかと思うぞ？　三人とも、これから大変だというのに」

「ごめん。ちょうどそのことでね」

「……ああ、それは熱心にもなるというものか」

ソロモン王を騙った人類悪ゲーティアとの戦いは、焼却された人類

の過去を取り戻すための戦いは、つい先日終了した。いまは魔術協会や国連からの調査員待ちという状況だ。

人類を救ったばかりだというのに、落ち着いて家に帰るのは当分先になりそうだ。

「最終的には、カルデアにいるサーヴァントは全員退去ということになるだろうな。織田信長や清姫あたりは居座りそうだが、来る時が来たら俺はさっさと帰らせてもらうよ。……今の内に言っておくが、貴女との戦いの日々は実に充実していたよ。不謹慎かもしれないが、楽しかった」

「それは私の台詞だよ。××がいなかったら、私やマシュや所長だって死んでいた」

立香は未だに眠りから覚める様子のないふたりを見る。

立香のファーストサーヴァント、マシュ・キリエライト。カルデア所長、オルガマリー・アニムスフィア。共に人類悪に挑んだ戦友であり、立香のかけがえのない友人である。

「マシュも所長も言っていたけど、××には何かお礼をしなきゃいけないって」

「だから感謝しているのは俺の方だ。そんな貴女たちに何かしてもらうなど――いや、あるか。俺から貴女たちに願うことがただ一つだけあった」

その言葉には、強い決意を感じた。

「どうか、これから何があっても絶望しないで欲しい」

敬虔な使徒が祈るような響きがあった。

「いや、貴女はきっと絶望なんてしないんだろうが。……おっと、そうじゃないな。これじゃ『期待』だ。自分の理想を他者に押し付けるような妄執は、すべきではない」

妙に意味深な口調で、アーチャーはそう断じる。

自分が期待を背負わされたというよりは、みっともない期待を抱き続けた誰かに失望している様子だ。

「貴女は貴女の願いを貫いて欲しい。着飾る必要もない。貴女がその胸に抱く願いは、生命として当然のものであり、最も尊いものだから。

それが、この無力な弓兵の高慢な願いだ」
（私に私であって欲しい、か）
その願いのどこが高慢と言うんだろう。他で似たようなことを言う英霊なんてカルナくらいだろう。そう口にしようとしたところで、警報が鳴り響いた。
「え……!?」
「ふぇ、な、何!?　火事!?」
けたたましい音に、マシュとオルガマリーのふたりも起きる。
『所長！　立香ちゃん！　マシュ！　緊急事態だ！　悪いが、すぐ管制室へ来て欲しい！』
ダ・ヴィンチからの放送に、三名は頷き合う。
警報が鳴り響く中、管制室へ入るとダ・ヴィンチを始めとしたスタッフが計器と向かい合っていた。
「どういう状況なの？　説明をちょうだい」
「詳しくはまだ不明だね。分かっているのは特異点らしきもの反応が出たってことだけだ。これまでの特異点との比較解析によって特異点Fとの類似点が高いところまでは判明したんだけど――」
「人理定礎のゆらぎ出ました。――えええ!?」
「驚いている暇があったら報告しなさい！　そんなに大きいゆらぎが出たの!?　まさか七つの特異点級の――」
オルガマリーの問いに、担当スタッフは首を大きく振った。ただし縦にではなく、横に。
「逆です！　人理のゆらぎがまったく計測されていません！」
「……はぁ!?」
驚愕の声を上げるオルガマリーを誰が責められるだろうか。むしろ、彼女と同じ反応をするものが多かった。特異点とは人理の礎だ。そこの異常があれば人理に何らかの影響が出る。だからこそ、カルデアに警報が鳴っているはずだ。
「これまで七つの特異点を見てきたんでしょう。何かの間違いじゃないの。特異点の反応が発見されたのに人理がゆらいでいないなんて馬鹿なことあるものですか！」

「そ、そんなこと言われても！」
「所長、お叱りは後で。計測の間違いなのか、それとも別の理由があるのか判明するまでそこで苦悩するべし！」
「りょ、了解です！　過去の特異点の比較分析開始します！」
同時に、別のスタッフが大声で報告を始める。
「特異点発見しました！　場所は――日本の京都です！」

■

☆おまけ☆
クラス　アーチャー
真名　×
×
属性　混沌・中庸
ステータス
筋力：C＋　耐久：B　敏捷：A　魔力：C　幸運：E　宝具：A
＋
所有カード
Ｑｕｉｃｋ×２　Ａｒｔｓ×１　Ｂｕｓｔｅｒ×２
クラススキル
対魔力：D　自身の弱体耐性を少しアップ
単独行動：B　自身のクリティカル威力をアップ
保有スキル
心眼(偽)：A　自身に回避状態を付与（1ターン）＋自身のクリティカル威力をアップ［Ｌｖ．１～］（３ターン）
魔神の加護（真）：A　自身のクラスを???に変化（３ターン）＋自身のスター発生率を大アップ［Ｌｖ．１～］（３ターン）
神滅具：EX　自身に［魔性］特攻状態を付与［Ｌｖ．１～］（３ターン）＋自身に［神性］特攻状態を付与［Ｌｖ．１～］（３ターン）
宝具
宝具名　偽・焼却式ＸⅢ（カタストロフ・ロンギヌス）
ランク　―

種類　Ｂｕｓｔｅｒ
種別　対神奥義
効果　自身の宝具威力をアップ（１ターン）＜オーバーチャージで効果アップ＞＋敵全体に強力な攻撃［Ｌｖ．１～］＋敵全体の防御力をダウン（３ターン）
【バトル】
開始
「さっさと片付けるぞ」
「戦いを楽しむ？　そんな生き方は忘れたよ」
スキル
「これを知っているか？」
「侮るな！」
コマンドカード
「それはいい」
「良い選択だ」
「請け負った」
宝具カード
「出番だぞ、覆すべき終末のＩ（アナザー・エンド）」
アタック
「せい！」
「はっ！」
「くたばれ！」
エクストラアタック
「こいつは予想外だっただろう？」
宝具
「聖槍起動。宝具多重展開。俺たちの生き様を教えてやる！偽・焼却式ＸⅢ（カタストロフ・ロンギヌス）！」
「魔棺開放。神器複合連結。人の過去と未来を紡ぐ。偽・焼却式ＸⅢ（カタストロフ・ロンギヌス）！」
ダメージ
「ちっ！」

「こいつは……！」
戦闘不能
「また、なのか……？」
「今度は守りたかったな……」
勝利
「勝鬨はいいものだ」
「次も勝つさ、必ずな」
【強化】
レベルアップ
「礼を言う」
霊基再臨
第一「こんな身に堕ちても、強くなると興奮するか」
第二「悪いが包帯は取れない。俺の罪の象徴のようなものだから」
第三「ひどい顔だろう？　どこぞの看護師には見せられないな……。くくっ、マスターもそう思うか？」
第四「感謝するよ、マスター。この負け犬を……いや、今の俺を卑下するのは貴方にも彼にも失礼か。ああ、任せてくれ。貴方のサーヴァントは最強だ。今なら神さえ殺してみせる」
【マイルーム】
絆Ｌｖ
１「こんな男に構っても良いことはないぞ」
２「あー、何だ。貴方の目は、この敗北者には眩しすぎる」
３「こんな弱っちい俺に、どうしてそこまで期待してくれるんだ。底抜けの楽天家だな、マスターは」
４「昔を思い出す。こんな役立たずを信じてくれた馬鹿どもを。……今度こそは」
５「もう槍は使わないと決めたのだがな。貴方のためならば、今一度この聖槍を使うのも吝かじゃない。マスター、貴方に未来を」
会話
「不謹慎ではあるが心躍るよ。これほどの英雄たちと轡を並べられるなんて」

「かつて掲げた覇道があった。そのために力を求めたが……」
「間違った理想などない。問題なのは手段と評価だな」
「げえ！　いえ、何でもありませんよ、先生。ええ、清潔と衛生は何より優先すべきですね、ええ。……向こうが俺を知らないというのも複雑だな」（フローレンス・ナイチンゲール所持時）
「やはり貴方もいたのか。隣に立てる程度には成長を見せよう」（カルナ所持時）
「この星の英霊たちか。あいつらがいたら何て言うかな」（ジャンヌ・ダルク、ヘラクレス、シグルド所持時）
「俺たちはあくまでテロリストだったから噛み合ったし、心底から尊敬していたが……。マスター、あの老人はあんまり信用しない方がいいぞ？」（新宿のアーチャー所持時）
「そうか。彼女が……」（ミドラーシュのキャスター所持時）
「俺は！　何も！　見なかった！　ゼパルなんていなかった、そうだな」（殺生院キアラ所持時）
好きなこと
「田舎育ちなものでね。土いじりは得意だよ」
嫌いなこと
「神は、好きじゃないな。あと悪魔も。特に下品なやつ」
聖杯について
「この棺桶にも一応、入ってはいるんだが……。比較できるものでもないしなぁ？」
イベント開催中
「騒がしいのは嫌いじゃない。行くなら準備を手伝おう。人生は楽しんだ奴の勝ちだ！」
誕生日
「喜ばしい日だ。純粋なお祝い事は久方ぶりだ」
【その他】
召喚
「こんな役立たずを呼び出したのは誰だ？　まぁ、精々使い潰してくれ。名前？　忘れたよ。いや、捨てたんだったかな。好きに呼んでく

れ」

番外編　夢の果てに死すとも・中の上

突拍子もない話だが、人類は一度滅んだ。

人理は一度、魔術王を騙る者の手によって焼却された。唯一人理焼却から逃れた人理永続保障機関カルデアは七つの特異点を攻略し、時間神殿に君臨していた『獣』の打倒に成功した。

しかし、時の刻みを取り戻した世界の激動に巻き込まれて、勝利の宴を上げる暇もなかった。最高責任者であるオルガマリーは勿論、最後のマスターとして現地で激闘を繰り返した藤丸立香やマシュ・キリエライト、そのほかのカルデアスタッフ全員である。

そんな最中、突如として新たな特異点の反応が発見された。問題なのは、その特異点が『この世界』の人理に与えている影響がまったくないということだ。人類史への影響が皆無というのは逆に異常である。特異点という事情を抜きにしてもだ。

所長オルガマリーはこの特異点へのレイシフト実行を決断。立香と彼女と契約したサーヴァントたちによる調査を命令した。別に、魔術協会や国連へ提出する書類作成から逃げているとかではない。どうせいずれはやらないといけないのだから。ただ、此方が緊急度が高いだけだ。

『レイシフト成功。第七特異点の再来みたいに空から落ちるなんてことはなくて安心の限りだ』

『そう何度もあんなことがあってたまるものですか。こっちの心臓がもたないわよ』

立香とマシュは当然として、今回の特異点でレイシフトしたサーヴァントは四名。

まず、〝京都〟ということで沖田総司と茨木童子が選ばれた。前者後者共に駄々をこねたという事実は存在しないので念の為。

また、未知の部分が多いため、宝具に応用力のある××も同行している。

最後に、セイバーの方の湖の騎士ランスロット。腕が立つ円卓の騎士で誰かという話になり、彼らの中でどういう話し合いがあったのか

は伏せるが、ランスロットになった。言うまでもないが、マシュは釈然としていない。
「ここは……どこかの神社でしょうか？」
「鳥居がたくさんあるし、そうだろうね」
『伏見稲荷のようね。確か狐が祀ってあるんだったかしら？』
『比較的近代……いや、完全に現代だね。どういうわけか詳しい年代が判明しなかったわけだが、人選はそれでよかったのかな？』
　現代社会ならばむしろ、エミヤやイリヤの方が適任だったかもしれない。どちらも日本人には見えないとは突っ込んではいけない。現在のカルデアでちゃんと日本人に見える日本人は少数だ。異形との混血の坂田金時や外国の血が入っている風魔小太郎が良い例だ。英霊になる以上、それなりに特異な特徴を持っているということだろう。意外と織田信長や両儀式が一番日本人らしい外見である。
「それほど目立たないかと。京都なら外国人観光客も多いですし」
「特に沖田さんは袴姿ならむしろ馴染むよ」
「分かりました、久しぶりに袴の方を着ます。あ、折角ですからマスターもどうです？」
「では、私もスーツを着ましょう」
「ランスロット卿は霊体化すればよいのでは？　先輩は私と沖田さんが守りますから」
「い、いや、しかし、女性だけで歩くのは危険だ。無論、君や沖田殿の力を侮っているわけではない。要らぬ声かけを避ける意味でも……」
「×さんがいるので大丈夫です」
「……マシュ、この火傷顔の包帯男に現代都市を歩くのは辛い。目立ちすぎる。騎士の役目はランスロット殿にお任せしたいのだが？」
「そもそも、ランスロット卿はどうせご自分が女性に声をかけるのに忙しくなるので役に立ちません」
「い、いや、そんなことは」
「ランスロット殿……、ここははっきり否定しないと」
　×が呆れた声を出すと、カルデアからの通信で円卓の騎士たちの声が聞こえてくる。

『私は悲しい。これでは何のためにランスに出番を譲ったのやら』
『ランスロット卿、ファイトです』
『このままでは本当にバーサーカーの方の卿に好感度が独占されてしまいますよ！』
どうやらランスロットが選ばれたのはそういうことらしい。
『ん……？　あの、所長、これ微妙に座標がズレているぽいんですが』
『どういうこと？　少なくとも京都には転移できたんでしょ？　特異点と言っても、本当に点みたいに小さいわけじゃないんだから微妙ならズレなら徒歩で行けばいいじゃない』
『いえ、そういうわけではなく。地図が合わないんです』
『地図が？』
「合わない？」
『いえ、カルデアにある京都の地図とレイシフト先の京都のデータが微妙に合わないんです。建造物の大きさや位置、数、種類など本当に小さなズレがあります。経緯や正確なマップと照らし合わせないと気づかないレベルではあるんですが……』
『あ、本当だ』
『まるで――京都と同じ場所にあって、同じ歴史を辿り、同じ民族が作り出した京都のような京都ではない都市、とでも言いましょうか』
『限りなく京都に近いレプリカ、とも違うね』
カーナビを使ってレイシフトしているわけではないし、小さなズレならそれほど不便というわけでもないだろう。
しかし、気にはなる。
『そのズレが特異点の正体に通ずるのかしら？』
『断定は難しいね～。ま、何はともあれ調査開始だ。まずは――』
「汝ら、話し合いは後だ。もう出迎えのようだぞ？」
茨城童子の言葉を発する前から、サーヴァントたちはマシュも含めて警戒態勢だった。定番というか、おそらく未知の特異点で計器が上手く機能しないのか、カルデアではようやくそれらの存在に気づいた。
「――京の者ではないな？」

そこにいたのは、一目で人間ではないと分かる集団。烏天狗や狐の怪異。およそ現代にいることが有り得ない〝妖怪〟とカテゴリーされるもの。

先頭にいるのは、先程の声の主と思われる十歳程度の少女。狐耳でもふもふの尻尾の巫女服だ。

「クハハハハ！　見よ、マスター、マシュ。力はともかく吾の時代と比較しても遜色ない怪異の群れぞ」

「ええ、沖田さんの時代には見なかった輩ですね」

『成程。神秘の薄れた現代社会にこれほどはっきり妖怪がいる。早速特異点らしくなってきたね』

×がふと何かを思い出したように訊ねる。どこか慌てた様子だ。

「え、嘘だろ、え、まさかとは思うが、京都妖怪の九重姫か!?　じゃあこの特異点は――！」

対して、妖怪たちの様子を一言で言えば、臨戦態勢だった。

「おのれ、余所者め。よくも母上を……かかれ！」

■

オッス、俺イッセー！　ハーレムを夢見る悪魔でドラゴンの男子高校生だぜ。

今年の四月、高校二年生になったばかりの俺は人生初の彼女、夕麻ちゃんに殺された。実は彼女の正体は堕天使で俺の中にあった神器が危険だと判断されたからそうしたらしい。だけど、俺は悪魔の姫であるリアス・グレモリー様（オカルト研究部の部長であるため、『部長』と呼んでいる）に悪魔として転生させてもらい、生き返った。部長の下僕として悪魔生活を送りつつ、ハーレムを作るために上級悪魔を目指して努力しているんだ。

いやー、この数か月は本当に激動だった。部長の婚約を破棄するために焼き鳥野郎と戦ったり、エクスカリバーを盗んだ堕天使の幹部が町に襲来したり、三大勢力の和平会談が開かれたり、生徒会長ことソーナ・シトリー様率いるシトリー眷属とレーティングゲームの試合

をしたり、北欧の悪神と戦ったり、乳神様とかいう謎の神様の眷属である精霊と交信したりした。修学旅行の少し前も、部長の家に呼ばれて何か変な試練を受けたんだけど……。結局、あれは何だったんだろう？　俺がグレモリーの使用人さんたちから「若様」と呼ばれることに関係しているんだろうか？

現在は生まれ育った駒王町から離れて京都に修学旅行中だ。同じグレモリー眷属であるアーシア、ゼノヴィアも一緒の班だ。天界から派遣されたイリナも俺たちの班にいる。事情を知り合っているから行動しやすいしね。

……実は新幹線の中で俺の『可能性』ってやつが飛び出したらしい。俺のものである以上、俺のところに戻ってくるだろうってドライグは言っているけど、大丈夫かなあ。どこ行ったんだろう。

ホテルのチェックインを済ませた俺たちは、時間があるので伏見稲荷に出かけた。しばらくお土産屋なんかをぶらついて頂上へ行くことにした。俺は皆より少し足早で上っていたんだけど……。

「何だ、上の方が騒がしいな」

観光地で喧嘩かなと思って足を速めて頂上に着くと、そこでは奇妙な集団が戦っていた。周囲に他の人影もないし、人避けの結界でも張られているんだろうか。

「あの、私たちはいま京都に来たばかりでして！　貴女のお母さんのことなど何も知らないと言いますか」

「嘘を吐くな！　私の目は誤魔化せんのじゃ！」

「嘘ではありません！」

何というか、片方が片方を一方的に襲っているようだ。襲われている方は手加減をしているというか、困惑しながらも相手や周囲の建物を傷つけないようにしている余裕が見えた。

「おまえたちでは埒が明かない！　緑髪の土人形はどこにいやがる！　『こっち』では直接話したことはないが、奴の方がまだ話を通じそうだ！」

「土人形？　誰のことじゃ！」

「――何？」

「ええい、来て早々これとは難儀よな！　鬼らしくもない！　おい葬儀屋、適当なところでいつもの霧を出せ！」
「分かっている！　マスターもそれでいいな？」
「うん、タイミングは任せた！　……ん？」
　見て見ぬ振りをするわけにはいかないし、どちらかに参戦するべきか止めるべきか考えていると。
　襲われている集団の男のひとり――大きな棺桶を器用に振り回している顔面を包帯で覆った奇妙な男――の視線が俺を捉えた。包帯で覆われているのにはっきりと分かるほど、男の表情が歪んだ。
「兵藤、一誠……！　何故貴様がここに……！　いや、待て、どっちだ」
　男の反応で男以外の全員が、俺に気づく。
「増援とは小癪な……！　撤退じゃ。おのれ、邪悪な存在め。必ず母上を返してもらうぞ！」
　巫女姿の狐耳の少女がそう叫ぶと、襲っていた方の集団は瞬時に逃げ去った。いまのが襲っていた方のリーダー格か？　あんな小さい娘が？
「え、えーと」
　残っている方が襲われていた集団の面々だと考えていいんだろうけど、変な集まりだな。棺桶持ちの包帯男に、騎士みたいな恰好のおっさん。角の生えた小柄な女の子は、まさか鬼か？　それから……うおおお!?
　オレンジ色の髪の制服みたいな恰好の女の子、新撰組のコスプレをした女の子、大きな盾を持ったぴっちりした女の子。皆、レベルが高い。しかも、盾の子は結構おっぱいあるなぁ、際どい恰好だし。いや、新撰組の子も制服の子もある方だな。いやあ、珍しい恰好だけどそれがいいっていうか。あ、いや、これは未知の相手をよく観察しているだけで決してやましいことは何もない！　うん、もっとよく見ないとな！
　――瞬時、殺気が届いた。
　命を直接狩り取りに来るような、濃厚な殺気が。これまで俺に向けられてきた敵意や悪意が、よそ風程度に感じるほどの強烈な殺意。

見れば、包帯男が制服の少女を庇うように前に出ていた。
「ちっ。そっちか。じゃあ話し合いは無しだ。皆、一時退散だ、絶霧！」
包帯男が舌打ちをすると、男が背負っている棺桶が少し開いたかと思えば、そこからどこかで見たような霧が出てきた。霧は集団を飲み込むと、すぐに消えた。集団もまた消え去った。
足音がしたので振り向くと、そこにはアーシア、ゼノヴィア、イリナがいた。
「イッセーさん！」
「イッセーくん！　何か起きて……いたみたいだけど、終わったみたいね」
「イッセー、一瞬だけ見えたがあの霧は……」
ゼノヴィアの言葉に、俺の脳裏に以前アーシアが攫われた時のことが思い出される。
そして、あれはその時に見た霧だった。
「あいつら、まさか禍の団か……！」
何でテロリストが京都にいるのかは分からない。だけど、とんでもない修学旅行になりそうな予感がした。

■

我々は敗北した。
統括局は失敗した。光帯は霧散した。時間神殿は崩壊した。大偉業は瓦解した。七十二柱の多くが消滅した。我らの三千年は無為に消えた。
我らの理想を打ち砕いたのは、道理を弁えぬ英霊ども、天に指輪を返還した忌まわしい王、そして平凡で平均なひとりの人間。
後に残ったのは、脳裏に刻み付けられた我が命題だけ。
我は■■たい。どうしても■■たいのだ。■■なければならない。
この命題を証明するため、我は己を聖杯に封じ込めた。通常の状態で霊基を保持することが不可能だったからだ。どれだけの次元を

漂ったのか、どれだけの時間を過ごしたのか最早覚えていない。不要なのだ。命題を証明すること以外、我には興味がないことだった。

無論、これは我にとっても賭けだった。それも、かなり分の悪い賭けだった。このまま永遠に時空を彷徨う可能性もあった。どこかに辿り着いたとしても、紅蓮の炎に焼かれる危険もあった。誰かに発見されたとしても、我を聖杯ごと破壊する輩に発見される可能性もあった。破壊されなかったとしても、聖杯の価値も理解されず倉庫の隅で埃を被る未来も想定された。そうなれば、この消えかけの霊基は時間とともに消滅してしまうだろう。

そして、我は辿り着いた。

「――これが例のとんでもない魔力を秘めた魔道具か」

「どこの誰が作ったものかは分からないが、これほどのものが手に入ったのは僥倖だったよ。ハーデスや帝釈天にもこれのことは伝えていない」

「それで？　これを何に使うの？」

「何せとんでもない逸品だ。折角だから、大物相手に使ってみようと思う」

「ああ、九尾の狐に使用するのか」

「そういうことだ。これだけの魔力があれば確実にグレートレッドを呼び出せる」

「そして、龍喰者でグレートレッドを倒し、俺たちは英雄になる。完璧だな」

我は賭けに勝った。

番外編　夢の果てに死すとも・中の中

「貴様らは先程の……よくものこのことこの裏京都に姿を見せられたものよ！　皆の者、かかれ――」
「お待ちを、九重姫。そして妖怪勢力の皆様方。どうやら八坂の御大将の身に何かあったようですが、我々の与り知らぬことです」
「ほう？　わざわざ裏京都に侵入しておいて、そうほざくか。おぬしらが関わっていないという証拠でもあるのか？」
「ありません。が、三大勢力――悪魔、天使、堕天使が此度の黒幕と関わっている可能性なら提示できます」
「――いま、なんと？」
「先に確認しておきますが、『魔神柱』『聖杯』『キングゥ』。これらの名称に覚えはありますか？」
「知らぬ。……聖杯というのは聖遺物じゃったか？　西洋の救世主の血を受けたとかいう」
「ああ、結構。おおよそ把握できました。では、改めて。此度の件、三大勢力の茶番であるという可能性は考えましたか？」
「馬鹿な……。京都妖怪と悪魔は間もなく同盟を結ぶ。そんな相手がどうしてこのような狼藉をしようというのか！」
「ですが、同盟に反対する意見もそれなり以上に多いのではないですか？　内部だけではなく、ぬらりひょん殿や山ン本五郎左衛門殿といった同格の妖怪勢力だけではなく、日本神話の対応も渋いはずです。京都妖怪の中には悪魔を見れば顔をしかめる妖怪も多いのでは？」
「む、むぅ。しかし、あの時の増援は悪魔ではなかったか！」
「あれは増援などではない。むしろ敵だ。マスターがいなければあの場で燃えるゴミにしていた」
「ひぃ」
「×、声が怖い。代表と言っても、相手は子どもだからね。スマイルを×忘れずに」
「ああ、すまない、マスター。非礼を詫びます、九重姫」

「か、構わぬ。おぬしが悪魔に良い感情を抱いていないことは分かった。母上が同盟を望んでいると言っても、京都にもそういう輩が多いことは知っておる。じゃが、それと母上が攫われたことに何の関係があるのじゃ？」

「例えば、そう――御大将が三大勢力によって救出されたとしたらどうでしょうか？　これ以上ないほど大きな借りです。反対意見が大きくとも、京都は悪魔と同盟を結ばざるを得なくなる。適当な犯人をでっち上げて、三大勢力が単独で救出したように見せかけたとして、それを見抜く手段などない」

「それは、そうじゃが……」

「禍の団の旧魔王派がどうなっているかご存知ですか？」

「少し前に暴れた件のテロリスト集団じゃな。その派閥なら魔王の血筋が全滅したとかで派閥としては瓦解したと聞いておるが」

「ええ、俺の認識と差がなくてよかった。その通りです。しかし、禍の団に所属する悪魔全員がいまの魔王たちと事を構えたいわけではありません。むしろ旧魔王たちがやられたことで、手土産を持って新魔王に媚びようとする者も多いでしょう。そういったものが働いて、禍の団の仕業に誤魔化すことは可能です」

「手土産、じゃと？」

「具体的には、進展次第では東アジアを巻き込む京都との同盟を決定的にすること、とか」

「ど、同盟はきょ、京都だけの問題ではないと？」

「前例、というものは大きいのです。『誰かがやったこと』と『誰もやっていないこと』では天地ほどの差がある。京都という日本の中でも大きな勢力が三大勢力と和平を結んだとなれば、他の妖怪勢力の和平派の声は一気に大きくなります。このうねりは日本神話を飲み込むでしょう。国単位で事が進んだとなれば、仏教関連の神仏が中心となり、中国やインドも動かないわけにはいかない」

「机上の空論ではないか！」

「ええ。机上の空論ですとも。今の段階ではね。何故なら、京都以外の妖怪勢力は比較的和平に否定的なのですから」

「それは――」
「おっしゃる通りだ。むしろ八坂様がどうして悪魔との同盟に肯定的なのか我々の中でも懐疑的な意見が出ている」
「天狗の！」
「九重様！　この者達は怪しいですが、言っていることに矛盾はありません。無論、不確定要素が多いことは私にもわかります。しかし、都合が良すぎるのです。いま京都には同盟の為に四大魔王のひとり、セラフォルー・レヴィアタンが来ています。更には、堕天使の総督アザゼルも来ているのですぞ。このタイミングで八坂様が何者かに攫われた。偶然とは思えませぬ」
「もしもこの話を聞く前に助勢を申しだされたら、渡りに舟と考えることもなく受けていたでしょう」
「むしろ定石ならばこの時期だけは外すやも知れませぬ。アザゼルは、彼奴が人間の高校教員を扮しており、数日すれば京都から出ていきます。彼奴が滞在中に騒動が起これば長期間滞在する可能性もあるというのに。下手人が余程の阿呆でない限り、騒動は大きくしたくないはず」
「下手人が聖書や禍の団に関係していない可能性もなくはないですが……。もうすぐ同盟が結ばれる時期、となれば間違いなく要因の一つではありましょう」
「逆に、堕天使の総督や魔王に対する挑戦として八坂様が攫われたと誰が否定できるでしょう」
「お、おぬしら、そこまで三大勢力に反感を抱いておったのか」
「当然ではないですか！」
「奴らに家族を奪われた同類がどれほどいると」
「何が『悪魔の駒』か！　あんなもの、ただの奴隷化の道具ではないか」
「出入りの許可証だけは発行しておりますが、いずれは控えたいとも考えておりました」
「まして幕末にルシファーを騙る魔王がしでかした問題は、未だに根深いのですぞ！」
「にも拘わらず最近は、駅の近くに品のないホテルを建てる始末。人

間側の権利を買収していたため、手回しが間に合わなかったのは痛いですな。恥知らずどもめ」
「八坂様もそれが分かっていながらどうして……」
「お分かりですか？　第三者がこの実状を知れば、土壇場で同盟が撤回されるなんて展開も予想されるのです。――とても大きな禍根を残したまま」
「そ、そこまで大事なのか!?」
「無論です。京都には、貴女たちにはそれだけの価値がある。それをちゃんと自覚して頂きたい。聖書のことは信じてはいけない。奴らは、貴方たちから奪っていくだけだ。これまでと同じように」
「……」
「その上で、我々カルデアは貴方たちに提案がある」

■

九重との対談が終わった後、カルデア一行は屋敷の客室に案内された。茨木童子はすでに部屋にあったお茶請けの饅頭を頬張っている。
突然出現した正体不明、身元不明の不審者集団に対しては破格の扱いだろう。
「×さん、これで良かったのでしょうか？」
大きな意味での嘘は言っていないが、ほとんど詐欺だ。バレたり齟齬が出たりしたら非常にまずいと思うのだが。
「ああ、妖怪たちが俺たちの味方になるとは限らんが、聖書の連中に不信感を持ってくれたらそれでいい。……というか、具体的にいま、どういう関係なのかさっぱりだよ。やはり、異形の世界情勢を知りたいところだ。……この宇宙には『彼』が呼ばれなかったみたいだからな。過去の俺を頼るのは不確定すぎる」
×が言う『彼』。人理を取り戻す旅で、×は何度も奇妙な発言をしていた。まるで魔神柱と生前に出会ったことがあるような物言いだった。それも一柱だけではなく、七十二柱全員と。今考えると魔神王の存在も知っていたのだろう。問う度にはぐらかされたが、この世界が

答えと考えて間違いない。
　そして、××が辿った歴史と違って、『彼』はこの世界に来ていないようだ。人理焼却の実行犯として消滅しながら、人類救済の人王として戦った記憶が、この世界――正しくはこの世界線にはない。
　京都妖怪に××の身分を明かさなかったのも、そのあたりが関係しているのだろうか。
『それにしても面白い世界ね。まさか現代において神秘が残っているなんて……。こっちの魔術師が知ったら移住希望者続出ね。でも科学は発展しているのよね？　しかも神秘は秘匿されている。ちぐはぐを通り越して歪ね』
『同感だ。サーヴァントユニバースと比較したらまともかもしれないね。神秘の構造が全く違うようだし、そのあたりを説明してもらうことは可能かい？　実は異世界人だった××くん』
「それは無理だ」
　ダ・ヴィンチからの要請に、××は不可と即答する。
『無理？　そりゃまたどうして？』
「例えば、この世界にはペルセウスの転生体がいる」
『え？　ペルセウス？　あのペルセウスがいるのですか？』
『やはり復讐か。いつレイシフトする？　私も同行する』
『優しく殺すなんてしませんから』
『見計らったようにメドゥーサたちが来た!?』
『なんて間の悪い！』
『あー、もう、落ち着いて！』
　通信越しにドタバタと騒動が聞こえてくる。メドゥーサたち（同一人物）が暴れているのだろう。
「そういうわけだ。生憎、この世界の事情は其方の地雷を踏んでいることが多い。おいそれと話すわけにはいかないのさ」
『な、成程。そうよね。名前と歴史の一部だけが一致しているという感じなのかしら？』
「ああ。どういう偶然かな」
　その謎だけは解けなかった。自分の事後に多少はヒントでも見つ

かっているだろうか。と考えていると、摩耗した記憶の中から少々まずい情報を思い出す。
「おっと。今更で悪いのだが、ランスロット殿、沖田殿。二人には偽名を使って欲しい」
名前を呼ばれたふたりは怪訝な顔をした。
「ん？　先程の名前被りのことと関係しているんですか？」
「まあな。お二人とも有名人だからな。ちょっとその名前は悪目立ちする」
その言葉に、総司もランスロットも満更でもなさそうにする。
「ほほう、新撰組は世界を超えて有名ですか。仕方ありませんねぇ。ええ、沖田さんは有名人ですから」
「私はこの通り最強なので、異世界の私も最強だったということですか」
「ランスロット卿、調子に乗らないように」
「まあまあ、マシュ」
「葬儀屋。京都ならば吾の名も知れ渡っているだろう？　吾は名を偽らなくて良いのか？」
「茨木は、うん、逆に必要ないんじゃないかな？」
この世界の『茨木童子』のことを考えれば、名前を借りているだけの鬼だと思われるはずだ。どちらかといえば、邪気眼のような中二病設定だと認識されるかもしれないが。オタク文化の本場である日本ならば異形であってもそれは通じるはずだ。
何故か胃の痛くなる××を他所に、総司とランスロットは己の偽名を考える。
「偽名ですか。そうですね。あ、沖田さんのことは『琥珀』と呼んでください」
「では、私は『カリヤーン』と名乗りましょう」
「……どういうチョイス？」
やがて、御伴を連れた九重が部屋にやって来た。警戒心は依然として残っているが、先程と比較すればかなり薄まっている。今はどう倒そうか、ではなく、どう利用しようかという打算的な色が強い。

重々しい空気が流れる中、九重が口を開く。
「結論から言えば、身元を証明できぬお主らを信用するわけにはいかぬ」
そう言われたが、別にカルデアの面々にも不服の色はない。むしろあの話だけで信用してもらうことは不可能だろう。こうして拘束もされずに対談が許されているのは、××の話術が可能としたようなものだ。
「じゃが、三大勢力を無条件に信頼するのが危険であることも理解できた。そこでじゃ、お主らが母上の誘拐犯の一味ではないというなら、私たちに力を貸してくれまいか」
「力を貸す、ですか」
「うむ。お主らが只者でないことは理解している。まず、おぬしらの目的は『聖杯』で良いのじゃな？」
「ええ。聖杯と言っても、救世主の血を受けた本物でもなければ神滅具に数えられる偽物でもない。そう呼ばれているだけの、魔力の塊ですよ。それを回収するのが我々カルデアの役目です。御大将の件と関係があるかは不明ですが」
「うむ。母上を無事に救出してくれたら、聖杯とやらはおぬしらにやる。じゃが全員を自由にするわけにもいかん。半分はこちらの屋敷に残り、残りの半分は私の部下たちと母上を攫った連中を探してもらう。無論、どちらも監視をつけるぞ」
「問題ありません。誰が行くかは此方で決めても？」
「すまぬが、これには人質という意味もある。振る舞いを見ればわかるぞ。そこの橙色の髪の小娘。おまえがこの者たちの主人なのだろう？　おまえにだけは残ってもらうぞ」
「では、俺と此方の琥珀殿とカリヤーン殿が大将八坂殿の探索に力を貸しましょう。我が主、藤丸立香を含めた三名はこの屋敷にいるということで」
「うむ、それで頼む」
「マスター、悪いが偶には留守番をしてくれ。マシュ、マスターを頼む」

「分かったよ」
「はい、先輩のことはお任せください」
「そういえば」
　話はこれで終わりの予定だったが、九重はふと気になっていた思い出す。
「先程お主が言っていた『土人形』とは何のことなのじゃ？　京都にも人形に憑く妖怪は多いが、土偶に憑くものなどおらぬのだが」
「……ああ、それは忘れてください。別の誰かと勘違いしていました。貴女ではない誰かにとって大切な者だった、と思ってくれたらいいです」
「うむ……。私ではない誰か、か。その者と土人形とやらはどのような関係だったのだ？」
　不思議とその話に食いつく九重に、××は感慨を抱きながら話す。
「何というか、強い姫君でしたよ。俺はとある王に出会うことで、人生を分岐したと自覚しています。あの姫様があのようになったのもあの土人形の影響なんでしょうね」
「姫君とな。私と同じか」
「ええ、クソみたいな連中のせいで、人形が守ったはずの故郷を追われましたがね。だが、あの姫様は折れませんでしたよ。憎悪を噛み締め、苦渋を飲み込んだ。いっそ泣いてしまえば楽だったのに」
　――辛くないのか、だと？
　――辛いとも。悔しいとも。悲しいとも。憎たらしいとも！
　――だが、私は泣かぬ。
　――彼や皆の骸を取り戻すその日まで、決して泣かぬ！
　――もう一度、皆で京都に戻る日まで、泣いてたまるものか！
「俺には戻るべき故郷などありません。だから、あの生き方には一種の憧れもありました」
　本当のところ、××が憧れを抱いていたのは、土人形の方だった。故郷と家族を守り抜き、人王を最大限に手助けし、大切なもののために殉じた彼。そんな彼の死体が魔王の手によって辱められたと知ったのは、邪神撃退の後だった。

奴らが起こした似たような事例は山のようにあった。人も魔も関係ない。神の意思こそが大義だと、奴らは暴虐の限りを尽くしたのだ。その時の不快感に思わず歯が軋む。

自分は途中で終わってしまったが、彼女はあの世界で、自分の後継者たる救世主が守り抜いた世界で、ちゃんと泣けているだろうか。

「まあ、そんな生き方をした姫もいたのだと頭のどこかで覚えていてください」

「そうか。話してくれて感謝するぞ」

退出する九重の背中を見送りながら、×は誰にも見えないように拳をぐっと握る。

（よし、計画通り。これで後は沖田総司とエクスカリバーの件についてふたりが耳にしないようにしつつ、特異点化の調査。マスターには人質という名の休養を取ってもらう。あとはこっちの俺が英雄ごっこを卒業していることを祈るだけだ。……昔なあ、グレートレッドを召喚する候補地のひとつに京都があったんだよなあ。ゲーティアと逢ったからやらなかったけど。大丈夫だよな？　うん、昔の自分を信じよう）

だが、世の中そんなに甘くない。

■

京都での修学旅行初日、俺――兵藤一誠が伏見稲荷で謎の集団の戦闘を見た。丸一日何もないまま修学旅行も三日目を迎えた。

アザゼル先生によれば、俺が見た片方の集団は京都妖怪らしい。どうも京都妖怪の総大将である九尾の狐が何者かに誘拐されて行方不明らしい。禍の団の一派が関わっている可能性が高いんだってさ。そうなると、俺が見たあの集団がその一派に間違いない。

ちょうど三大勢力と京都妖怪は同盟を結ぶ前だったらしい。魔王少女ことセラフォルー・レヴィアタンも来ていた。先生やセラフォルー様は京都側と共同で禍の団の調査をしたいらしいが、どうも妖怪たちとの連携が上手くいかないようだ。自分たちの大将が攫われ

たってのに呑気なもんだぜ。アザゼル先生曰く、京都側は禍の団を俺が駆けつけるより前に戦っていたってことは、自分たちだけで解決できるって考えているらしいけど。それでも、禍の団に詳しい三大勢力と連携できた方がいいだろうに。

そんなことを考えながら京都観光を楽しんでいる最中、渡月橋の近くの茶屋にそいつらはいた。

「おっ！　可愛い子発見！」

「どれどれ……はぁ、はぁ。ちっちゃくてかわいいなぁ」

「やめなさい、変態。まあ、目の保養になるわね」

同じ班の松田、元浜、桐生がそんなことを言っていたので三人の見ていた方に目をやった俺は、そこにいる集団を見て固まってしまった。

四人の少女がお茶と団子を楽しんでいる。幼い子は巫女服だが、残りの三人は袴の和装だった。

「九重よ、見るがいい。汝も化生ならば菓子は豪快に食らってこそよ」

「茨木殿、私は鬼ではないのじゃ。狐は神格の使いという面もあるからの。母上にも礼儀作法にはうるさく言われておる」

「むぅ、母の言いつけならば聞かねばならぬな」

「茨木さんと九重さん、すっかり仲良くなりましたね」

「うん。良かった」

「先輩の知る京都もここと同じなんでしょうか？」

「そうだね。修学旅行で一回行っただけだけど、違う世界って実感があんまりないかな。異世界っていえば、この頃の××っていまは何やってるのかな？」

「この時代の生まれには間違いないようでしたからね。若かりし日の××さんもどこかにいるはずです」

「××の若い頃か。テロリストだかレジスタントだかとして戦っていたって言うし、ビリーみたいな感じなのかな」

「人を率いていたと聞いたことがあります。案外、アレキサンダーさんのようだったのかもしれませんよ」

「逢ってみたいけどね」

「メディアさんやカーミラさんの例に漏れず、×××さんも過去の自分が恥ずかしいタイプなのでしょうか？」

服装は前と違うけど間違いない。あいつら、先日見た禍の団の奴らだ……！　前は制服を見ていた娘と盾を持っていた娘は京都に映える袴姿だった。角は変化か何かで隠しているんだろうけど、あの小柄な娘は鬼娘で間違いないだろう。霧使いらしき包帯男や新撰組の恰好をした娘はいない。向こうはこっちに気づいていないみたいだしチャンスか？

「どうしたんですか？　イッセーさん」

怪訝そうなアーシアに俺はそっと小さな声で教える。

「あそこにいる女の子たち、俺が伏見稲荷で見た禍の団の奴らだ。ちっちゃい巫女服の娘はいなかったけど」

「えっ！　じゃあアザゼル先生たちに連絡をして――」

と話していると、見覚えのある霧が出てきた。

四つの上位神滅具の一つ、絶霧（ディメンション・ロスト）。アザゼル先生から聞かされていた結界系神器最強の力だ。

見れば周囲にいた松田、元浜、桐生の三人は消えていて、俺、アーシア、イリナ、ゼノヴィアだけだった。いや、見れば例の四人もいた。慌てているようだが、霧の発動に合図とかなかったんだろうか？

「おまえら無事か！」

「先生っ！」

黒い翼を出して飛んできたのはアザゼルだ。来てくれたのは嬉しいけど、嵐山の方で酔っ払ったロスヴァイセさんに付き合っていたはずだ。大丈夫かな？

「先生！　あいつらが俺が伏見稲荷で見た連中です！　霧使いはいませんけど！」

「って、あれは狐の姫？　何故ここに？」

アザゼル先生が四人組のちっちゃい巫女姿を見て怪訝そうな顔をする。鬼娘と盾の娘は前に見た格好になって臨戦態勢だ。巫女姿だった娘もどうやら人間じゃなかったみたいで、狐耳と尻尾が露わになっていた。……ああ、よく見ればあの時いた。確か襲っていた側の

方だったはずだけど、何でこいつらと一緒に？
「立香殿、あれは堕天使の総督じゃ。それから、母上が攫われた時、このような霧が出たと聞いておる。となれば、あの葬儀屋殿の言っておったことは……！」
「いえ、茨木さん以下数名がそう呼んでいるだけで、××さんは本当に葬儀屋というわけでは……。それはともかく、先輩、私、この霧に非常に見覚えがあるんですけど」
「奇遇だね、マシュ。私もだよ。いつもお世話になっているやつだね」
光とともにそいつは出現した。
「はじめまして、堕天使の総督。そして赤龍帝」
制服の上から漢服を羽織った青年。その手には輝く槍があった。男の後ろには同じデザインの制服の集団が続く。状況から見て、こいつらは禍の団に違いない。
おそらくは旧魔王派が力をなくした影響で行動を活発化させてきた派閥。神器所有者の人間で構成されるという英雄派！　先日、俺たちの住む駒王町にも刺客を送ってきた連中だ。
「曹操を名乗っている。三国志で有名な曹操の子孫、一応ね」
槍を持った男――曹操は不適な笑みを浮かべてそう名乗った。
「この京都には実験のために来たんだが、何の偶然かアザゼル総督と噂の赤龍帝が来ているという。せっかくだからこうしてお手合わせを願いたい」
「ほう？　実験ね。だとすると、九尾の御大将を攫ったのはおまえらか？」
「ええ。彼女には我々の実験にお付き合い頂くつもりです」
「なんじゃと！　母上をどうするつもりじゃ！」
ん？　母上？　あの娘は九尾の大将の娘なのか。いや、だとするとどうして英雄派の連中と一緒に？　騙されて一緒にいたって様子でもないみたいだけど。
「ふふ、我々の実験の内容についてはお楽しみということで」
そう言うと、その聖槍の男は自らの得物の切っ先を例の四人組に向けた。うん？　やっぱり何か仲間にする対応ではないような気がす

るけど。
「京都妖怪の狐の姫と一緒にいたことを考えると、其方のお嬢さんたちはどこからか呼んだ援軍かな？　見覚えはないが、目つきを見ればわかる。そこそこの修羅場を潜ったエージェントだな。俺としては教会か日本神話の虎の子だと推測しているが」
「確認なんだけど、あの娘たちはおまえらの仲間じゃないのか？」
「は？　全く覚えがないが？」
「え？」
「え？」
　この娘たちは禍の団のメンバーじゃないのか？
「……おい、どういうことだ、イッセー。あの様子からすると罠でもないみたいだぞ。この霧は、おまえが見たっていう棺桶を持った包帯男が出しているんじゃないのか？」
「何の話をしているんですかな、総督殿？　棺桶に包帯？うちのゲオルグにはそんな珍妙な特徴なんてありませんが」
　本当に英雄派、どころか禍の団のメンバーじゃないのか？　だったら――こいつらは誰なんだ？
「あの！　一つ質問いいですか？」
　オレンジ色の髪の少女が挙手していた。確か、前は制服を着ていた娘だ。
「その槍は、自前ですか？」
　質問の仕方に変な違和感があったものの、曹操は得意げな顔で応じる。
「ああ、よく気が付いた。これこそは最強の神滅具、最高位の聖遺物！　黄昏の聖槍！　俺が生まれ持った神殺しの力だよ」
　やっぱりね、と何かを考え込むように腕を組む少女。
「先輩、あの方の槍がどうか――――あ」
「汝ら、何に気づいて――――ん？」
　残りのふたりの少女も何かに気づいたような声を上げた後、変な表情を浮かべる。
「本当の得物は槍だって聞いたことがあるんだよね……」

「神滅具というのは一点物で、同じ時代に二つはないんでしたね……」
「世界線とやらは違うようだが、あの葬儀屋は、この時代の人間だったな……」
うわあ、と三人の少女は遠い目をした。
「見ちゃ悪いものを見たかもしれないね」
「忘れた方がよろしいかと」
「鬼の目にも涙だ。このことは黙っておこう」
何かを擦り合わせるように内輪で話し合う少女たち。何があったんだろうか。曹操も英雄派も話の内容が理解できていないようだ。本当、この娘たちは何者なんだろう？
「どうやら悪魔や堕天使の関係者じゃなさそうだが、君たちは一体誰だ？」
「えーと」
「問われたからには鬼としては名乗らねばなるまい。吾こそは大江山の鬼の首魁、茨木童子よ！」
他のふたりが名乗ろうか迷っている間に、小柄な鬼娘が盛大に名乗る。
鬼娘――茨木童子が名を出したことで、ふたりの方も観念したように自分の名前を口にした。
「カルデアの藤丸立香です」
「同じくマシュ・キリエライトと言います」
カルデア？　何かの組織の名前か？　英雄派の頭にもハテナマークが浮かんでいるところから、禍の団の派閥とかじゃないのか？　誰かがその質問を口にする前に、何もない場所から光が裂けたように広がっていく。
この現象は前に見たことがある。聖王剣コールブランドで次元を引き裂いた時の光景だ。
って、ことはヴァーリチームのアーサー――
「無事か、マスター！」
――じゃなくて、これまた先日の包帯男だった。左手で繋がった鎖を引っ張ることで棺桶を背負うようにし、右手には一本の剣が握られ

ていた。間違いない。あれは先日見た最強の聖剣。
　英雄派もそれに気づいて動揺が広がっていた。
「馬鹿な、あれはコールブランド！」
「聖王剣だって？」
「まさかアーサーがやられたのか！」
「あのアーサーがジーク以外の剣士に敗れるなんて考えづらい」
「貴様、何者だ！」
「――最悪だ。ぺっ！」
　だが、包帯男は取り合わない。一瞬だけ英雄派を見た後、地面に唾棄した。少女たちに駆け寄ってちょっと怖い声で問い詰める。
「マスター、何故ここにいる？　貴女は妖怪たちの屋敷で大人しくしているはずだろう！」
「いやー、九重がせっかくだから京都を案内してくれるって」
「九重姫、俺たちの身分はまだ怪しいはずでしょう。外に連れ出すのは遠慮してもらいたい」
「でも、立香殿もマシュ殿も茨木殿も退屈そうじゃったから。話してみて分かったが、皆、良い奴じゃし」
「そっかー。マスターの人たらしっぷりを甘く見ていたかー」
「……私も屋敷で何もせずいるなんて嫌じゃった。母上が捕まっておるのに」
「マシュ、おまえがいながら」
「す、すみません。その、私も先輩と京都をゆっくり回ってみたくて……」
「まあ、平穏とは無縁の旅だったからな……。バビロニアの便利屋は例外として、のんびり観光なんてしたこともなかったんだろうが――」
「おい此方を見ろ！」
　その声に包帯男はようやく英雄派たちを見る。何だか物凄く嫌そうだった。包帯で表情が見えないのに、その億劫さが動作で伝わってくる。
「……確認の質問を考えていたんだけどな。『王といえば誰だ』とか

『曹操とは誰の名前だ？』とか。無駄な時間だった。本当に無駄だった。一目でわかった。分かりたくなかったけど分かった」
「何をぶつぶつ言っている？　名を名乗れ、聖王剣を持つ男。俺は神殺しの聖槍の担い手、英雄派を率いる者、曹操だ！」
「黙れ、この傍迷惑ピーターパンシンドロームが！　英雄ごっこをやる暇があったらアジトで仲間とスマ○ラでもやっていろ。何千倍も楽しいごぼっ！」
「吐血!?」
「それもかなり盛大に！」
　敵味方関係なく呆然としてしまった。え？　あの包帯男、本当に何で血なんて吐いたんだ？　曹操たちが何かした様子もないし。
「し、心配するな。ただのストレスだ、こふっ」
「どうした、葬儀屋。変なものでも食べたか？」
「未熟だった頃の俺はああだったのかとを思い出してな。あ、いや、何でも――」
「やっぱり、あれは若気の至りなの？」
　よく意味が分からないその言葉に、包帯男は固まった。やがて動き出したかと思えば、聖王剣を棺桶の中に仕舞い、小さく息を吐き出して棺桶を持ち上げる。
「ふう。――――マシュ、マスターを守れ。茨木、九重姫を頼む」
「え？」
「む？」
「聖槍起動。宝具多重展開」
　機械音を立てて棺桶が変形した。底の部分が開いたかと思えば、そこから大砲の砲身みたいなものが出てきた。
　すっごい面白いギミックだな。アザゼル先生が好きそう――
「貴様らを殺して俺も死ぬ！　偽・焼却式（カタストロフ・ロンギヌス）ＸⅢ！」

番外編　夢の果てに死すとも・中の下

絶霧によって展開された結界空間の中、凄まじい光の砲撃によって周囲は砂塵が舞っていた。
「×××ってさ」
巨大な盾を持った少女の後ろで、オレンジ色の髪をした少女がぽつりと呟く。言葉に込められた感情の内訳は、主人として叱責半分、友人として揶揄半分といったところか。
「感情的になってそれ使うと、派手に外すよね」
「ちゃんと当てられたのはラフムの群れだけでしたね」
盾の少女も周囲を注意深く警戒しながら続く。
「言うな。生来の得物は槍なんだ。いや、言い訳するわけじゃないんだが狙ったら当たるんだよ。ただ、落ち着いて使わないと暴発するっていうか」
対神奥義『偽・焼却式ⅩⅢ』。聖槍を起点に、宝具『覆すべき終末のⅠ』に収納されたあらゆる武具や神器を連動させて放つ光の一撃。有体に言えばレーザービームである。
欠陥としては、そもそも××の戦闘能力と噛み合っていない。長年槍を利用してきた××としては長物の刃物の方が扱いやすいのだ。だが、この技を開発した当時は『群れ』との戦いが多発していたため、殺傷能力よりも殲滅力が重視する必要があったのだ。下手な砲撃でも的が多いため、特に練習の必要はなかった。
苦手なのに思わず使っちゃう理由？　この技が最高にかっこいいからだ！
「駄目じゃん！」
「××さんのそういうところ、本当に治した方が良いと思いますよ？」
「ぐふっ」
本気で呆れたようなふたりの発言に再度吐血しかける××。
「いやー、とんでもない一撃だ」
槍の一振りが砂塵を吹き飛ばし、英雄派たちの姿が露わになった。
余波によって怪我人は出ているようだが、直撃したものはいないよ

うだ。知っている顔が多いが、いるはずの顔もない。この世界線ではすでに死亡しているのか、英雄派を抜けているのか、この場にいないだけか。あるいは、最初から出会っていないのか。

　鋼鉄の看護師に心を折られることもなく、犯罪の天才を師と仰ぐこともなく、恥ずかしげもなく槍を振り回す餓鬼を見る。こいつは仲間を庇わないのだな、と憤る己を自嘲しながら。

「聖王剣を持っているから剣士だと思ったんだが。神器とも違うようだし、その棺桶は一体どういう武器なんだ？　堕天使の総督殿や赤龍帝と戦いに来たが思わぬ強者がいたものだ」

「曹操、僕も手を貸そうか？　あの男がどうして聖王剣を持っているのか問い質したいしね」

「いや、俺ひとりでやろう。未知の強者との戦いも心躍るものだ。この程度の想定外も解決できないようでは、この槍を持つ資格なんてない」

「ごほっ！」

「だから何で吐血するんだ！　俺たちは何もしていないぞ？」

「自覚なしか。おまえたちの馬鹿さ加減は他人に吐き気を催すレベルなんだよ」

　頭をガリガリと掻き毟り、ストレスを隠そうともしない。英雄派に見せつけるように吐き出される深い溜め息。癇に障る態度だが、曹操たちは飛び出せない。その男は強い。先の攻撃もそうだが、いまこうして立っているだけの姿に隙がない。

　そんな曹操たちを見て、男は強く目頭を押さえた。

「八坂の大将をさっさと返してアジトでゲームしながら反省会をやれ。アイスとかポテチ食いながらでいいから。落ち着いたら中東の紛争地域にでも行って『本物の戦場』を見て来い。さもなくば……」

「さもなくば、なんだ？」

「心をへし折るぞ」

　それを聞いて英雄派は臨戦態勢に入る。

「ほう？　いまのをもう一度放つってことかな？」

　身構える英雄を、×は鼻で笑った。かつての己――フローレンス・

ナイチンゲールに心を潰される前の己がどれだけ浅はかだったのかを思い知らされる。

「のぼせ上がるな。おまえら如きにあれを何度も使うか。武器など不要。真の英雄は目で殺すというが、俺は半端者だからな。言葉で殺すとしよう」

「言葉？」

「では手始めに――おまえたちが貸してもらっている最強の龍殺しの毒はグレートレッドには通じない」

それを聞いて、曹操は一瞬だけ動揺してしまった。彼以外の英雄派の構成員たちにも動揺が走る。

計画がバレている。グレートレッドを召喚し打倒する。名分はオーフィスの要望を叶えるためだ。勿論、伝説の真龍を滅ぼした名誉を得るというのが本題だが。龍殺しの毒とはサマエルのことだ。『貸してもらっている』なんて言い方をしている点から考えても、この男はそれを知っている。サマエルの封印を管理しているハーデスの側から情報が漏れたのだろうか。

だとしたら、男の発言は余計に聞き逃せない。

「どういう意味だ？　俺たちが何をしようとしているか知っているなら、俺たちが何を使おうと分かっているなら、どうしてそんな言葉が出てくる？」

「大前提が間違っているんだよ。根本的に思考が足りないんだよ。おまえら、どうしてグレートレッドがドラゴンだと認識しているんだ？」

意味の分からない質問だった。そんなもの、太陽や月が星かと問うのと同義のはずだ。

「魔王や主神と並んで、龍王クラスとは一種の強さのラインとして扱われている。言わば伝説級だ。そんな龍王級ですら歯牙にもかけないのがグレートレッドだぞ？　インド神話最強の破壊神シヴァですら圧倒的な開きがある。そんな例外中の例外。ランキングに乗せる意味もないほどの絶対。無限の龍神たるオーフィスさえ次元の狭間から追い出せるほどの力がある」

グレートレッドの概要を、かの真龍がどれだけ常識外にいるかを再確認するように述べた後、男は意味深に肩を竦めた。
「そんな存在が、どうして俺たち程度を騙していないと思い上がっている？　あれがドラゴンに擬態していたとして、おまえは気づける自信はあるのか？　まして、あれは『夢幻』なんて曖昧な性質を持っているんだぞ？」
一瞬だけ呆けて納得しそうになった自分を振り払い、曹操は反論する。
「ぐ、グレートレッドがドラゴンではないなんて、そんな馬鹿な話があるものか！　大体、何のためにそんなことをしている！」
「理由？　なんとなく、とかじゃないか？　何も予定がない休日の服なんて適当に選ぶだろう？　当然、証拠などない。だが、グレートレッドがドラゴンであるという証拠なんてないんだよ。あの星の如き龍に対して俺たちの五感が正しく機能しているという証明は、不可能だ。グレートレッドがドラゴンであるか否かは、最強の龍殺しでも使わなければ証明できない」
シュレーディンガーの猫というやつだな、と嘯く包帯男に曹操は反論が出て来ない。
男の言う通り、証明は今回の実験で可能ではある。だが、もしもこの男の推論が正しかったら？
「有り得ない。有り得ない！　グレートレッドは真龍だ。ドラゴンの中のドラゴン、『D×D』だろう！」
「逆に聞くが、グレートレッドがそう名乗ったのか？　あれより弱い俺たちが勝手にそう呼んでいるだけだろうが。あれを最初に真龍と呼び出したのは誰なのかは分からないがな」
「お、オーフィスはどうなる！」
「個人的にはオーフィスの方が怪しい。あいつは言っちゃ何だが、頭も心も餓鬼だ。おまえたちにさえ騙せるくらい純粋だ。グレートレッドがドラゴンだから自分もドラゴンだと思い込んでいるなんて馬鹿な展開、十分に有り得るぞ。突然思いついたように『我、実はドラゴンじゃなかった』なんて言い出しても俺は全く驚かない」

日本には思い込みで龍になった少女の逸話がある。恐るべきことに、この少女には異形の血など入っていなかったし、特別な異能など持ち合わせていなかった。ならば、神の次元さえ超えているオーフィスが思い込みでドラゴンになっているとしても不思議ではない。

「英雄なんてのはな、頭の螺子が外れていないと辿り着けないんだよ。英雄になるには偉業を為さねばならない。万人と同じ考え方をするような奴は万人と同じようなことしかできない。だったら、普通のことしか考えられない奴は絶対に英雄にはなれない」

例えば、大西洋からインドを目指した航海。例えば、崖を馬で降りるという奇襲。例えば、大河から水を流した馬小屋掃除。例えば、世界の果てを目指した大遠征。例えば、大地を埋め尽くす串刺しの原。

常人には理解できない発想があったからこそ、彼らは偉業を為した。狂気と紙一重。故に、特別なのだ。

「『グレートレッドはドラゴンではない』。この程度の発想も出ない奴のどこに英雄の素質があるんだ？　教えてくれよ、凡人ども。従来の常識に縛られているおまえたちが、誰も立ったことのない場所に立つなんて可能性は皆無だ」

おまえたちに英雄の素質などない。

そう断じてくる包帯男に、曹操たちは言葉が返せない。反論できるだけの知恵がない。神殺しの聖槍が、三国志の英雄の血が、それに従って集まった英雄を志す仲間が、何の役にも立たない。男の言葉を否定しようと懸命に考えるが、頭がぐちゃぐちゃになっていく。

だって、そんな可能性は微塵も考えたことがなかったから。

「大体な、京都の土地質はグレートレッドを呼ぶのに適しているとは言い難いんだよ。グレートレッドを呼びたいならイタリアやイギリスでやった方がちょっとは可能性が上がったろうに」

それは知っていた。だが、実のところは本当に僅かな誤差だ。グレートレッドを召喚するにあたって、この土地を選んだのには理由がある。おそらく、この男はどんな理由を言ったところで鼻で笑いそうな気がするが。

「それこそ、無理やりにでもこの土地でグレートレッドを呼ぼうとし

たら魔力がいる。土地に由来するものではなく、外的な魔力が。人間如きに用意できない量の、莫大な魔力が。それだけの魔力が込められた魔道具があれば最善だな」

男が何気なく言った言葉に、曹操は活路を見出した。

「だが、ないだろう？　神話の大物に協力者がいるんだろうが、おまえたちみたいな使い捨ての鉄砲玉にそんな貴重品を渡す馬鹿はいない。神々は狡猾だ。おまえたちにくれるものなんて、自爆用の手榴弾が精々だ。かと言って、偶然そんなラッキーアイテムを拾うほどの幸運などおまえたちにはあるまい。だっておまえら『ただの人間』だからな。天だの神だの運命だの時代だの、そんな大層なものに選ばれた英雄じゃな――」

「いや、ある」

そう、あるのだ。英雄派にはそれがある。

「つい先日だ。俺たちは偶然、『それ』を手に入れた。途轍もない魔力を秘めた謎の魔道具を。黄金に輝く神秘の杯を」

絶句している包帯男に、曹操はこれまでのお返しとばかりに畳みかける。

「確かに、京都でグレートレッドが召喚できる可能性が絶対とは言い難かった。だが、あれがあれば確実に呼び出せる。いや、そもそもだ。グレートレッドがドラゴンではないというなら大発見じゃないか。ああ、求めていたものとは違うがそれはそれで価値がある。勿論、俺たちはグレートレッドの正体がドラゴンであると疑っていないが」

バケモノを倒すのはいつだって人間だ。人間でなければならない。そして、それは俺たちでなければならない。伝説の武器を生まれ持ち、伝説の英雄の血や魂を受け継いだ俺たちであるべきだ。そうでなければいけないはずだ。

「あの杯の存在がグレートレッド召喚を確実にしてくれた。これは俺たちが運命に選ばれているからに違いない。グレートレッドを倒し、俺たちが英雄だと証明してみせよう！」

曹操は勇ましく宣言し、ゲオルグに一時撤退の合図を出す。認めたくはないが、この場にいてはこの奇妙な男にペースを崩されそうな気

がしたのだ。事実上の遁走だが、曹操にその自覚はない。
だから、最後に包帯男が送った言葉など届かなかった。
「そんなものに特別性はないんだ。おまえたちは……いや、俺たちはどの時代、どの地域、どの民族にもごく普通にいた『ただの人間』だったんだ。それに気づけないのなら、おまえは凡庸以下だよ」

■

英雄派が撤退した後、一同は人目につかない森の中へと移動する。
×の恰好が目立つこともあるが、一般人の耳がある場所でする内容でもないからだ。
苛立ちながら、×が言う。
「これでやることははっきりしたな。あの馬鹿どものアジト突き止めて八坂殿を救出して聖杯を回収しておしまいだ。目当てのものが一か所にあったのは有り難い。手間が省けた。この地が特異点化しているのは聖杯が原因と考えていいだろう」
「葬儀屋。吾、もうちょっと遊びたかったのだが」
「言うな。俺だってな、最悪の想定が現実となって泣きそうなんだよ。何でよりによってあいつらが持っているんだ。あと、さっき見たことは忘れてくださいお願いします」
「でも何でここに聖杯が？」
「理由を考えるのは不毛かもしれないぞ？　ハロウィンを思い出せ」
「エリちゃん、チェイテ城、ライブ、ピ……うっ、頭が」
「り、立香殿がすごい顔をしておる……。修羅にでも出くわした経験があるのか？」
思い出し笑いならぬ思い出し頭痛に襲われる立香と、それを見て戦慄する九重。
「九重姫。すでにお察しかと思いますが、今回の件の解決はおおよその目処が立ちました。八坂様はあの連中に拉致されています。九尾の力と京都の力場、そして我々が探していた聖杯を利用して、真龍グレートレッドを召喚する模様です。貴女の口からも妖怪たちに説明

してもらえますか？」
「うむ。母上が京都から連れ出されたら異変が起こるはずじゃから、母上は京都のどこかにおられる。あの者共の隠れ家もあるはずじゃ」
「しかし、今日まで見つかっていないことを考えると今から人手を増やしても難しいですね」
マシュの言う通り、京都中の妖怪が血眼になっても手がかりさえ見つかっていないのだ。おそらく絶霧などを利用して必死に隠れているのだろう。
「こうして姿を見せたということは、間違いなく準備が整っている。おそらく今晩にでも実験を開始するつもりなんだろうが……。ちっ。簡単に予想できるのが腹立つ」
「おいおい、俺たちのことは無視か？」
「……何だ、堕天使の総督アザゼル。高校教師に扮して修学旅行の引率中だと聞いているが？　生徒たちの安全でも確認したらどうだ？　嫌がらせとして一般生徒が襲撃されている可能性はゼロではないぞ？」
アザゼルへの毒舌に見せたようでいて、立香やマシュへの解説だ。先程九重も言っていたが、この人間にしか見えない男が本当に聖書に記された堕天使の総督らしい。そんな大物の異形が一介の高校教師に扮しているというのは、神秘の素人である立香にとっても意味不明だ。
昨晩聞いた話では、この世界の聖書の勢力――神が崩御した天界陣営、初代四大魔王を失った悪魔陣営、幹部以外の大多数が死んだ堕天使陣営は同盟を結んでおり、その同盟は魔王のひとりが運営に関わっている日本の学園で行われたらしい。アザゼルが高校の教師をしているのはその学園。その性質上、件の学園には魔王の縁者が多く通っているため、その者たちの教育係としているのだという。
この話を聞いたカルデアの者達はめちゃくちゃ混乱したが。文字通り世界観が違うのだ。
「それは追々な。それよりも優先しないといけないことがある。まず聞いておきたいんだが、おまえたちはどこの誰だ？　京都の姫さんと

一緒ってことは、どうも禍の団じゃないみたいだが……。さっきそこの嬢ちゃんたちはカルデアって名乗ったが『星見』って意味だろう？　聞いたことがないが、ギリシャかどっかの戦闘部隊か？」

「答える義理はないな、総督」

アザゼル。神に力を与えられた者。ああ、殺したい。殺してしまいたい。この世界線では聖書の神は未だに復活していないようだが、許せないことをした。

しかし、この世界の人間でもないのにそれは八つ当たりでしかない。この堕天使を殺す権利があるのは、この男を憎むこの世界の人間だろう。それに、流石に総督を殺したとなれば『神の子を見張る者』全体が出てくる。下手に騒ぎを大きくするべきではない。

今回の件は、愚かな妄想を抱いた若者が傍迷惑な実験に失敗したという範囲で終わらせる必要がある。そこに奇妙な魔道具があったことや、それを探していた集団の事実など記録されるとしても無視されるレベルでなければならないのだ。

「今回の事件はあくまで京都の問題だ。協力を要請されているわけでもないのに、正式に同盟を結んでいない三大勢力が首を出すのは越権行為だろう？」

「だからこそだ。大事な会談を成功させたいんでね。それに、グレートレッドを京都と九尾の力で呼び出すなんて話聞いて、黙って見ているわけにはいかねえな。そうでなくても禍の団絡みの事件なんだ。堕天使の長として、京都に力を貸したい」

「だ、そうだが、どうします？　九重姫。俺としてはこの場で三大勢力の力を借りたら、間違いなく不利な条件で同盟を結ぶことになりますからやめておいた方が良いと思うのですが」

九重は×××の言葉を重く受け止める。

「う、うむ……。そうじゃな……。母上がいないいま、私が決めねばならぬのだろうが……」

「この包帯野郎！　アザゼル先生やサーゼクス様がそんなことするわけねえだろうが！　純粋にその娘のお母さんを心配しているからこう言ってくれているんだぞ！」

そう口を挟んできたのは兵藤一誠。今代の赤い龍。ソロモンにアーチャーとして召喚された世界線の彼とは違って、×の歩いた歴史とほぼ同じ人格のようだった。

彼の周囲を見れば、見知った顔があった。アーシア・アルジェント。ゼノヴィア・クァルタ。紫藤イリナ。彼女たちから感じる悪魔や天使の気配を感じて、×は少しだけ驚いた。気配云々の前に、アーシアに至っては×がよく知る狂気が感じられないが。こんな隙だらけで突けば壊れそうな弱い女ではなかったはずだ。

「あ、確かフラウロスが拾ったばかりの頃は……。あー、成程。人類の祖先がネズミであることを突き止めた学者はこんな気分だったんだろうな……。何がショックって、このことに負の感情も抱いていない自分に驚いているよ。『あ、そうなんだ。へー』くらいの感情しか沸かない。俺ってこんなに薄情だったか？」

「何わけ分かんないこと言ってんだよ！　おまえテロリストじゃないみたいだけど、だったら何で絶霧を使ってたんだよ！　伏見稲荷で妖怪たちと戦っているところを俺は見たんだからな！」

殺されたくなければ黙っていろ、という呪詛を飲み込んで×は呆れたように溜め息を吐き出す。

「妖怪たちと戦っていたのは誤解があったからで、それはすでに解消されている。それにしても、それが初対面の人にものを聞く態度とは。礼儀作法を始めとする教育がなっていないな。主人の器が知れるってもんだ」

「誤魔化すな！　部長は関係ないだろうが！」

自分の評価は、主人や指導者の評価にも関わっているというのに、それに気づかないのか。権力に守られている立場であるという自覚がないのだろうか。

「ではっきり言ってやろう。俺をテロリストに仕立て上げようとして失敗したのが悔しいからと言って突っかかるのはやめてもらおうか」

「はぁ!?　何言って――」

「何故なら俺が持っている神滅具は絶霧（だけ）ではない」

「え？」
「神滅具。その中でも聖遺物とされるものは、先程の馬鹿が持っていた聖槍、魔女の操る聖十字架、そして聖杯とあるのは知っているか？
　聖骸布や聖釘なんかもあるが」
「そ、それがどうかしたのか？」
「何でここで聖遺物の話が……。もしかしておまえ……！」
　兵藤一誠やアザゼルの反応を見て、この世界では神滅具の聖杯が発見されていないことを理解する。
「そうだ。俺が持っている神滅具（のひとつ）は幽世の聖杯。生命を弄ぶ禁忌の力だ」
「聖杯が発見されたなんて情報、俺のところにはねえけどな。だとしたら棺桶ってのはお似合いだが……。もしかして聖王剣を使えたのはそれが理由か？」
「当たらずとも遠からずとだけ。断っておくが、アーサーを殺したのは俺じゃない」
　そもそも、この世界線では生きているだろう。どのような立場かはともかく。先程の聖王剣を見た英雄派の反応からすると英雄派にはいないようだが。家宝であり国宝でもあるコールブランドを勝手に持ち出した身であるため、家には簡単に帰らぬし、公的な組織にも入りにくいはずなのだが。
「聖杯起動、宝具四重展開。聖邪逆転の天杯（クリフォト・オルタナティブ）」
　棺桶が少しだけ動いたと思えば、勢いよく蓋が開かれる。そこから現れたのは黒い祭服を来た褐色の青年。人型をしているが、漂うオーラは人間のそれではない。このドラゴンに慣れた立香やマシュはそうでもないが、九重は小さな悲鳴を上げてしまった。三大勢力の面々も見たような反応だ。
　禍々しいオーラを感じ取って、一誠の神器に封印されているドライグが驚愕の声を上げる。
『このオーラ、まさかアポプスか!?　貴様は滅んだはず……、いや、これが聖杯の力だと！　馬鹿な、そこの人間、貴様なんというものを復活させたのだ！』

ケルトの神殺しクロウ・クルワッハやゾロアスターの魔王アジ・ダカーハに並ぶ邪龍筆頭格の一柱、エジプトの太陽喰いの怪物、『原初なる晦冥龍』アポプス。

《おい、失敗作》

「その呼び方はいい加減やめろよ、駄龍」

《貴様など失敗作で十分だ。それよりも――》

アポプスは何故かアーシアを指差した。彼の目に宿っているのは、落胆、失望、悲哀、嫌悪、侮蔑、憐憫の類だ。そんな目を向けられる心当たりのないアーシアはびくりと震えて一誠の背中に隠れた。

《何だ、この気持ちの悪い小娘は。こんな醜い生物は見たことがない》

■

――これで契約成立だな、京都妖怪の大将よ。我が一時の同盟者よ。

「うむ。妾もそれで良い、異界より辿り着いた魔神よ。我が一時の同居人よ」

――自称英雄共はおまえを使って真龍を呼ぼうとしている。だが、その術式を我が利用し、おまえを通じてこの都市の地脈に接続する。そして、都市に打ち棄てられた□□を集め、■■。

「おぬしの命題、か」

――そうだ。我は――我々はただの人間に敗北した。故に、我は人間の□□を■■たい。□□を■■ことこそ我が命題。この命題を証明できたなら、□□を■■たなら、我はあの敗北に納得できそうな気がするのだ。この都には打ち棄てられた□□で溢れている。その中には、我が命題の解答も存在するはずだ。安心しろ、我がこの身体から出て行く時にこの雑な術式は後遺症がないように消してやる。綺麗な身体で娘の下に帰るがいい。

「のう、我が同居人。このまま妾の中に巣食うつもりはないか？」

――何？

「そなたの唱える命題は狂っている。達成しても何の意味もない。証

明しても何の価値も生まない。そも、何を以って証明とするのかさえ定かではない。割れきれぬ計算じゃ。終わりなき研鑽じゃ。ならばいっそ、敗北など忘れて、命題など諦めて、妾の中で生きてはくれまいか？」

――我のような存在を歓迎しようなど、客観的に見れば貴様の方が狂っているがな。

「何を言う。妾は悪魔に都を売ろうとしている女よ。他者の心がわからぬ悪魔よりも、こうして心を明かし合った魔神の方が余程信用できるというもの」

――この星の七十二柱か。我にとっても彼奴らは不快だ。ウェールズの龍如きに滅ぼされかけた劣等種が我らと同じ名前を冠するなど……いや、人間如きから逃げ出した我が言えた身分ではないか。

「おぬしは妾に知恵を貸して欲しい。一度世界を滅ぼすことに成功したという術式の叡智を。代わりに、妾は身体を貸そう。妾の身体が気に入らぬなら、別の身体を用意しても良い。京都を守って欲しい。この都の歴史を愛して欲しい。妾を助けてくれまいか？」

――断る。おまえの□□は■■価値がある。しかし人間だ。やはり人間の□□こそが望ましい。我が■■ならば人間の□□でなければならない。この命題は、あの敗北を理解するためのもの。意味がないとしても仕方がない。価値がないとしても関係がない。

「そうか。残念じゃ」

――何故、我が叡智を求める？　我を完全に受け入れるということはおまえの自己消滅の危険さえある。その妄執は沙汰の外だ。おまえは神仏や魔王になろうとしているわけではない。何がそこまでさせる？

「おぬしが過去を捨てきれぬように、妾は未来を諦められぬのだ。我々は、妖怪は、異形は永遠ではない。我らの国の歴史が始まるよりも前、ひとりの王が世界にかけた呪いが我らを蝕むのだ」

――我らの王と同じ名前を持つ男の呪いか。確かに、当時は影も形もなかったおまえたちにとっては負の遺産でしかないか。

「世界はいずれ妾たちを忘れてしまう。妾の代は保ったとしても我が

娘、九重はどうなる？　その更に先の子は？　我らは――世界に忘れられる日を怯えながら待つしかないのか？　亡き夫に託された京都を、そんな形で失ってしまうのか？　そんなのは御免じゃよ。手段があるのなら妾はどのようなものでも利用する。それが、長年害悪でしかなかった勢力との同盟や、異界から流れ着いた敗北者に縋るような真似であってもな」

――なんと愚かしい。なんと生き汚い。なんと、美しい。嗚呼、その□□は美しい。おまえが人間だったら良かったのに。そうすれば■■てやれたのに。だが、その想いは言の葉にした方が賢明だぞ？　声にせねば伝わらぬものもある。娘や同胞に誤解などされたくあるまい。

「おぬしが言うと説得力が違うの」

――そう言うな。我は、我ら七十二柱は無慈悲な王の本質に気づけなかった。我ら七十二柱は平凡な女の動機を知ろうともしなかった。故に負けた。故に滅んだ。だからこそ、我は□□を■■たいのだ。

「命題の証明を諦めたなら、いつでも妾の身体に戻ってくるといい」

――返答は不変である。

番外編　夢の果てに死すとも・下の上

本当に私がアポプスか、だと？

無論だ。無論、無論、無論、私こそがアポプスだ。エジプト神話の恐るべき怪物、原始の水より生まれた日食の大蛇、『原初なる晦冥龍』アポプスに他ならないとも。

……ああ、変わったな。自覚はある。死んでも馬鹿は治らないというが、私の場合は生き返って矯正されたのさ。いや、あれは治療と言うべきだな。

何があったか教えてやろう、ドラゴンの面汚し、性欲に塗れた赤き龍の帝王。おっぱいドラゴンと呼んだ方が正確だったか、恥知らずめ！

狂った女がいた。

我ら邪龍にとって苦痛でしかない生き方を強制した女がいた。

不愉快な女だった。理解できない女だった。あの女の一挙一動に苛立った。あの女の発言すべてが受け付けなかった。あの女を殺せぬ己を嘆いた。必ずや、その屍を食らってやると誓ったほどだ。

同時に、痛ましい女であった。憧憬を抱く人物に近づこうと強くあろうとしても、心の奥底には弱さが残った。誰もいないところで声を殺して涙を流すような女だった。

その女に、貴様は非常によく似ている。魂は比較するまでもないが、顔だけがやたら似ている。目の色が全く違うのに、別人だと一目瞭然だというのに、どうして同じ顔をしている？

醜い。醜い。醜い。醜い。醜い！

あの女と同じ顔をしながら、何故そんなに弱そうなのだ？　何故そんなに脆そうなのだ？　何故そんなに薄っぺらく、壊しやすそうなのだ？　あの女とは違って食べやすいのだろう。しかし、まずそうだ。おまえのようにまずそうな生物は見たことがない！

どんな生き方をしたら、そんなに気持ち悪くなれる？　醜い、気色悪い、小汚い、みっともない。その歳になるまで、誰かに身体の洗い方を教わらなかったのか？　土臭い、汗臭い、垢臭い。消毒液臭いあ

の女の方がまだ心地良かったというもの。まさか手の洗い方も知らぬなどほざくまいな？

なあ、失敗作。おまえは何を望んでこの意味不明な状況に私を呼び出した？　ん？　私のこの反応は意外だったか？

ああ、おまえの判断は正しいぞ、失敗作。私だからこそこの愚物どもを前にして落ち着いていられる。グレンデルなら、ニーズヘッグなら、ラードゥンなら、八岐大蛇なら、アジ・ダハーカなら、この気持ちの悪い小娘を視界に入れた途端暴れただろうさ。

あの女に似ているとはそういうことだ。

……八つ当たり？　ああ、八つ当たりだとも、何故か悪魔や天使になっている聖剣使いども！　ああ、おまえたちもそうだな、何だ？　人間としての誇りはどこにやった？　人間以上の存在に成り下がって、どんな気分なんだ？　どうして好き好んでそんな劣等種に転じた？　人間と違って悪魔や天使の長所はひとつしかないというのに。

それは何かって？　決まっているだろう。

壊れやすいところだ。

■

哀われな男の夢を見た。

男は幽鬼のような足取りで崩壊した都市を歩いていた。周囲には男の仲間以外に生命がいない。あるのは人間の死体、瓦礫の山、そして停止した蜘蛛のような異形ども。

異形によって破壊された都市には死の匂いが充満していた。

誰でもいい、ひとりでいい、頼むから誰か生きていてくれ、と妄言を吐きながら男は瓦礫の山を進む。己の手が傷つくのも構わず瓦礫をどかし、その下に潰された死体を見て、吐き気を堪えながら泣いて、また別の瓦礫をどかす。死体を見つけて泣く。その繰り返しだった。

諦めろ、と霧使いが諭した。

もうやめて、と聖女が引き止めた。

生き残りなんていない、と魔剣士が現実を突きつけた。

おまえには誰も救えない、と三つ首の邪龍が嗤った。
それでも男は止まらない。呪いでもかけられたように、破壊し尽くされた街で生きている人間を探す。認めるわけにはいかなかった。諦めたくなどなかった。
男が絶望のままに瓦礫の中に突っ込んだ手に、僅かに触れる温度があった。
男は必死に掘り起こし、死にかけの少年を見つけ出す。それはかろうじて生きているという状態だった。血は止まらず、呼吸は微かで、目は虚ろで、体温は低い。死神に手を引かれている。
男は懐から薬を取り出す。今後手に入る保証のない不死鳥の涙を。客観的に見れば男自身が使うべきものだ。だが、男は何の躊躇いもなく涙を少年に使う。周囲のものも涙の価値を理解しながらそれを止めることはなかった。
やがて少年は息を吹き返す。この時、この少年は死んでおくべきだった。生き残るべきではなかった。その方が楽だったのに。その方が救いはあったのに。
男は自分が少年にどんな呪いをかけたか想像もせず、少年の生に感謝を捧げた。神でも天使でもなく、少年自身に。
――良かった。本当に良かった。
――ひとりでも、助けられて。
助けられて良かった？　おいおい、なんて笑えない冗談だ。まるで見当違いだ。馬鹿馬鹿しい。ああ、なんて馬鹿馬鹿しい。

誰がどう見ても、
助けられたのは、
おまえ自身だろう？

「――聞いているのか、曹操」
「当然だ。聞いているとも」
「で、ヴァーリたちに連絡を取った結果、アーサーは死んでいないんだな？」

「ああ。当然聖王剣が奪われたなんて話もないようだ。嘘を言っている様子はなかった」
「それじゃあ、あの男の持っていた剣は一体」
「聖王剣のレプリカなんじゃないの？　確か教会の方でエクスカリバーや聖魔剣のレプリカを作ろうとしている動きがあるんでしょう？」
「それは有り得ない。あれは次元を裂いた。あんな芸当がレプリカに出来るとは限らない」
「じゃあ何だってんだよ。だいたい、その男がどこの誰か分からない内に引き上げちまったんだろう？」
「何だっていいさ。俺たちが真の英雄であると証明するための試練の一つだと思えばいい。じゃあ行くぞ。今日という日のために生きてきた」
くだらない。くだらない。くだらない。
俺は人助けなんてちっぽけなことをしたいわけじゃない。この槍に相応しい大業を為したいんだ。この名に釣り合うだけの称賛が欲しいんだ。
「――さあ、英雄になりに行こう」
でも何の為に？

■

「――は！」
俺――兵藤一誠は目が覚めた。
「いつつ、ここは……？」
ここはどこか見渡してみれば、京都で滞在中のホテルの部屋だった。緊急事態に備えて俺だけ貧相な和室にされたんだよな……。松田や元浜でさえ豪華な洋室なのに。
なんだか身体が痛いなと思って記憶を辿ってみる。
――何だ、この気持ちの悪い小娘は。こんな醜い生物は見たことがない

そうだ。あの変な包帯野郎の棺桶から出てきたドラゴンがアーシアに変なことを言うから、殴りかかってやったんだ！　えーと、そこからの記憶がないんだけど。

『……あの時、おまえはアポプスに返り討ちにされたんだ』

え、マジかよ、ドライグ！

『ああ、大真面目だとも、相棒。というか、何でアポプスまであの不名誉な仇名を知っているんだ！　奴の口ぶりからして他の邪龍もあの棺桶の中にいるのだろうし……。よ、よりにもよって邪龍に、ドラゴンの面汚しだの、恥知らずだの……』

じゃ、邪龍？　何だよ、それ。普通のドラゴンとか二天龍とかとは違うのか？

『説明が長くなるからそのあたりはアザゼルに聞け。簡単に言えば、頭の螺子がはまってすらない凶暴なドラゴンの総称さ。滅ぼされるに相応しい理由があった』

そりゃ怖いな。

しばらくすると、皆が部屋にやって来た。俺は開口一番にアーシアに謝った。

「ごめんな、アーシア。俺がいながら、アーシアにあんなひどいことを聞かせるなんて」

それを聞いて、アーシアは俯いた。

「だ、大丈夫です。それよりイッセーさん、一応聞くんですけど、私って臭いですか？」

「え？　何言ってんだよ！　アーシアはいつでもとっても良い匂いがするぜ！」

「そうですか。良かったです」

あからさまに安心した様子のアーシア。俺が気を失っている間にまた何か言われたのか？　ちくしょう！　俺の可愛いアーシアをいじめるなんて絶対に許さねえ。邪龍だろうが英雄だろうがぶっ飛ばしてやる！

話題は当然、英雄派と『カルデア』って奴らの話だ。

「殴りかかったイッセーを一撃で気絶させた後、アポプスは言いたい

ことだけ言って棺桶の中に戻りやがった。結局、あの包帯野郎や嬢ちゃんたちの正体は不明だ。京都側も話しちゃくれねえ。要約すると、御大将のことは自分たちでどうにかするから勝手に観光を楽しんでいろだとさ。禍の団が関わっている以上、京都だけの問題じゃねえだろうに」

俺が気を失っている間のことを説明してくれて、アザゼル先生がこう続ける。

「だからこそ、こっちも援軍を呼ぶことにした。京都に顔が効く悪魔にな」

「京都に顔が効く悪魔……もしかして師匠ですか？」

「そういうことだ。グレモリー領でのトラブルも解決したみたいだからな。サーゼクスに無理を言ってこっちに来てもらうことになった」

木場の師匠？　確かサーゼクス様の『騎士』なんだっけ？　夏休みの合宿中に稽古をつけてもらったこと以外は知らないけど……。

「あいつもホテル建てるくらい京都のことは気に入ってんだ。下手なことされるのは嫌なんだろうな」

部長のお母さんも京都の漬物が気に入っていたし、グレモリー家は本当に親日家だな。部長の大好きな京都を俺が守らないとな。なのに、あの包帯男も京都妖怪もあんな態度なんだもんな。ちょっとは仲良くしてくれよ。

「軽く調べたがあいつらの言う『カルデア』って組織はなかった。いや、近い名前の組織はそれなりの数があったんだが、あいつらの正体ってなると違うっぽいんだよなぁ」

「偽名を使ったってことですか？」

「分からん。調査が足らんだけかもしれんし、できたばかりの組織で名が知られてないだけの可能性もあるからな。……イッセー、確認しておくがあの包帯男が霧を使うところをおまえは本当に見たんだな？　見間違いとかじゃなくて？」

「当たり前じゃないですか！　先生は俺を疑うんですか？」

「そうじゃねえよ。ただ、そうなると英雄派の霧使いとは別に絶霧があることになる。まあ、あの包帯男の方がレプリカって可能性もある

が……」
「あ！　そうだ、思い出した。先生、あの包帯男はあの棺桶から霧を出してたんですよ。あのアポプスって奴も棺桶から出たし、あの棺桶には何か細工があるんじゃないですか？」
「だが、あの棺桶は聖杯の禁手っぽいしな……。いや、待てよ。仮に禁手だとしてもあれだけ長時間常時展開している理由は何だ？　コールブランドも棺桶の中にしまっていたし、イッセーのアスカロンみたいに合体させているのか？　うーん」
　首を捻る先生。それを見て、イリナが悪戯っぽく言う。
「案外、あの包帯男さんの棺桶は聖杯と絶霧が入っているだけの入れ物だったりして」
「しかし神滅具はひとつしかない。聖杯はともかく絶霧は英雄派に所有者がいる。英雄派から奪った、わけでもなさそうだ。英雄派が所持しているようだからな」
「冗談よ、ゼノヴィア。有り触れた神器ならともかく神滅具の所有者が同じ時代に何人もいるなんてありえないんだから」
「――同じ時代？」
　アザゼル先生はその言葉が引っかかったのか、何度か繰り返す。
「同じ時代、同じ神滅具、違う時代？　神滅具は同じものはひとつしかない……。しかし、過去あるいは未来のものを持ってきたとしたら……？　いや、そんな馬鹿な……。だが、だとしたら、英雄派の計画を知っていた辻褄も……」
「あ、アザゼル先生？」
「そうか！　あいつらの正体は――未来からの来訪者か！」
　一瞬、アザゼル先生が何を言っているのか分からなかった。
「み、未来ですか？」
「ああ。俺自身、突拍子もない考えだとは思う。だが、そうなると色々と辻褄が合うんだよ。あの包帯男は英雄派が何らかの龍殺しをグレートレッドに使うことを知っていて、更にそれがグレートレッドには通じないと言っていた。真龍がドラゴンじゃない云々は哲学を気取った戯言のように聞こえたが、あの男にとっては実証された真実だ

としたら？　この後、グレートレッドに英雄派の龍殺しが使われた結果を知っていたとしたら？」
「ええ!?　じゃあグレートレッドはドラゴンじゃないんですか？」
「英雄派の用意したっていう龍殺しが効かなかったらいいんだけどな。反対に、本当にグレートレッドが倒されたとも考えられる。当然、グレートレッドが倒された場合、オーフィスの望みが叶うだろうが、次元の狭間は均衡を崩し、世界は滅茶苦茶になる。あいつらの目的がそれを阻止することだとしたら？」
　た、確かに。グレートレッドはドラゴンじゃない、なんて俺は変な考え方をする奴がいる程度にしか思わなかった。だけど、俺のこの考え方が古いものだとしたら。
「ですが、アザゼル先生。あの人たちは……いえ、あの包帯の人は明らかに三大勢力を敵視していました。先生や私たちに怖い目をしていました。ひどいことも言われました。未来から来て、世界の均衡を守ろうとしている人がどうしてあんなことを」
「そ、そうですよ！　アーシアの言う通りです！　先生の言うような奴らなら、どうしてアーシアみたいな可愛い女の子を怖がらせるような真似をするんですか？」
「決まってんだろう。あいつらが聖書の敵だからだよ。おそらく英雄派の計画を阻止するついでに、京都と俺たちとの同盟を妨害しようって腹なんだろう。何より、邪龍を使うような奴らだ。真っ当じゃねえだろう」
　ドライグの言っていた『頭の螺子がはまってすらいないドラゴン』か。確かに、そんなのを使っているなんて怪しい。
「でも、どうしてですか？　三大勢力との和平は禍の団対策としても重大なはずでしょう！　オーフィスって脅威と戦うためには変な拘りは捨てて手を取り合わないといけないって、馬鹿な俺でもわかりますよ」
「重大だから、ですね」
　木場からの指摘に、アザゼル先生は首肯する。
「ああ。京都との同盟が上手くいけば、これを皮切りに日本中の妖怪

勢力との和平が良好な方向に進む。反対にここでご破算になれば、あちこちとの同盟が滞る。ちっ。面倒なもんだぜ」

そ、そんな。前に戦ったロキみたいなもんか。旧魔王や英雄派みたいな禍の団だけが皆の平和を壊してくるわけじゃないのか。ヴァーリ・ルシファーが、俺にとっての平和が誰かにとっては苦痛になるって言っていたけど、そういうことなんだろうか。

「いや、そもそもあの包帯男が未来の禍の団の一員なのかもしれん。英雄派の連中が見覚えがなさそうだったのは、いまはまだ構成員ではないか、変わり果てているかのどっちかって可能性も……うん、ちょっと待て」

アザゼル先生は魔法陣を展開する。どこからか連絡だろうか？

しばらく連絡を取り合うと気合いの入った表情で俺たちを見渡した。

「巨大な結界空間の出現も確認されたみたいだ。本来ないはずの気の流れが二条城に集中していると来てやがる。動きからして禍の団だと見て間違いないみたいだな。行くぞ、おまえら！　俺たちをコケにするってことがどういうことか教えてやる！」

よっしゃ！　あの包帯野郎と邪龍ってやつに目にもの見せてやるぜ！　俺はおっぱいドラゴン！　冥界のヒーローだからな。あんな奴らに負けたままだなんて知られたら部長に恥をかかせちゃうぜ。

あ、そうだ。機会があったらあの娘たちに『洋服破壊』をして、その裸体を拝ませてもらう！　女子の風呂を覗けなかった分、消化不良だったんだよな。ついでに巨乳だっていう九尾の大将を救出して、エロエロなご褒美をいただくぜ！

■

その場には、カルデア一行の姿があった。英雄派を退け、××がどうにかアザゼルたちを退かせた後、沖田やランスロットと合流した。

「それでは先輩、作戦を確認しましょう」

マスターである立香、サーヴァントのマシュ、××、沖田、ランスロット、茨木童子の他に巨大なドラゴンの姿があった。

邪龍アジ・ダハーカ。通常であれば邪龍はサーヴァントとの折り合いの問題もあって出せない状況が多々あるのだが、今回レイシフトした面々には特に問題がなかったため、こうして出現させてある。この三つ首の邪龍こそ今回の作戦の要だ。

「絶霧によって作られた結界空間にアジ・ダハーカの魔術で侵入。これは私とマシュと沖田さんとランスロットで行く。大将である八坂さんに何らかの術式が施されていた場合、アジ・ダハーカに解呪してもらうという手筈ってことで」

「結界外にいる英雄派の戦力は俺と京都妖怪たちが担当する。おそらく魔獣創造で出てくる魔獣どもがメインになるだろう。何、敗北はない。何せこっちにも同じ神滅具があるんだから」

すでに英雄派と××の関係性は、あの場にいなかったランスロットや沖田総司にも伝わっている。それ故に、ランスロットは気まずそうに問う。

「しかし、良いのか、××殿。これから私たちは過去の貴殿やその仲間と戦うことになる。最悪の場合――」

「いいんだよ。それで」

その声音は重々しい。

「俺だと余計な手心を加えそうだからな。あの馬鹿どもはここで全員終わるか、誰かを失って変化しないといけないのさ。見るべき夢が違うのだと、もっと早くに、気づくべきだった。誰かに教わる前に、知るべきだった。こうしてひとつの勢力に洒落にできない迷惑をかけているんだ。運が悪かったじゃ済まされない」

馬鹿は死んでも治らないのさ。と××は吐き出した。

ランスロット自身、過去の己に出会ったとして何をしてやれるかなど未知数だ。アグラヴェインは無理でも、ガレスやガヘリスを斬らずにギネヴィアを助ける方法はなかったのかと足掻くかもしれない。だが、己と××を比べるのは酷というものだ。

この世界線の××は、言うならばアーサー王に出会わなかった湖の騎士のようなもの。葛藤や後悔を抱くなど、根本から間違っているのだ。

「我々がアジトを発見していればこうなる前に事件解決となったのですが……。くっ！　こうしている間も御大将の身に危険が迫っていると思うと騎士として憤りを感じずにはいられません」
「やたらやる気があったかと思えば、やはり九重さんのお母さんが未亡人だからですか？　御姿を描いた絵を見せてもらいましたが、実にランスロット卿の好みでしたよね」
「ご、誤解だ、マシュ。外見や身分は関係ない。私は純粋に騎士としてだね――」
「沖田さんたち側の成果と言えば、痴漢を撃退したことくらいですね。あ、ちなみになんですけど、どうもこの数日で連続して発生していた痴漢事件の真相は、奇妙な玉が原因だったんですよ」
「奇妙な玉？」
「ええ。何故か微妙に我が王と似たオーラを感じて腹が立ちましたので、アロンダイトで念入りに破壊しておきました。龍の属性があったようで斬り易かったです」
　それを聞いた立香は本当に神秘の残っている世界なんだと感心していた。同時に、その変な玉が新素材だったらどうしようとも不安になった。
「それにしても、アジ・ダハーカさんの魔術はすごいですね。剣を振るう以外は女性を口説くしか能のない自称最強の騎士とは大違いです」
　ランスロットが抗議の反論を口にする前に、邪龍が大笑する。
『この程度の結界、突破したところで自慢にならねえよ』
『でもマシュちゃんの声援は有り難くもらっておきます☆』
『サンキュー、サンキュー』
「マシュ、あまり調子に乗らせるな。ほとんどの特異点で、この駄龍の魔法は『便利』の域を出なかったじゃないか」
『誰が駄龍だ、失敗作が！』
『この役立たず！』
『あーほ、あーほ！』
　中心の首だけではなくコミカルに振る舞っていた両サイドの首まで全力の嫌悪感を剥き出しにして××を罵倒する。××も慣れたもので

鼻で笑い返すだけだ。
「あははは」
「相変わらず仲が悪いですね。そこまで仲が悪いのにどうして邪龍の皆さんは××さんに従ってくれるのでしょう？」
『そりゃ違うな、マシュ嬢。俺はこの失敗作に仕えてんじゃねえ。ある女の遺言を守っているだけだ。この失敗作がてめえの罰を俺たちに肩代わりさせたり、あの女のことを忘れたりしたら、その場でオサラバできんだけどよ。いい加減、この腐れ縁も終わってくんねえかな』
心底不愉快そうに言う三つ首の邪龍。照れ隠しでも建前でもない。正真正銘の本音だった。この男がさっさと諦めてしまえば、英霊の使いなどという似合わない役割も御免できるというのに。
『じゃ、マスター殿たちを送ってくるぜ、精々死んどけ、失敗作』
転移しようとしたその時だった。
「立香殿！」
突然立香の背中におぶさるように飛びついた小さな影があった。相手の声でその正体を察した立香は驚きのままその名を口にする。
「九重！」
「九重さん、危ないので裏京都にいるようにと――」
「母上は私が救いたいのじゃ！　頼む！　連れてってくれ！　お願いじゃ！」
立香はマシュや××に視線で問う。返答はいつものように「貴女のお好きなように」だった。
「安心せよ、九重。汝の母は吾が助けてやろう。あ、謝礼はマカロンで頼むぞ。マシュマロやチョコレートでも良い」
「麗しい女性が悪漢に攫われたのだ。騎士の誇りにかけて救い出してみせよう」
「余計な口を挟まないでください、この穀潰し！」
「××殿、なんだかマシュのあたりがいつもよりきつい気がするのだが……」
「おそらくマスターたちと楽しく京都散策されたのをあの馬鹿どもに

邪魔されたからだな。……これぱっかりは本当に申し訳ない」
「よし、分かった。九重、一緒に行こう！」
『これで面子は揃ったな？』
『カルデア様御一行ご案内☆』
『レッツゴー！　レッツゴー！』
立香たちが結界空間に転移するのを見送って、××は「さて」と棺桶を担ぎ直す。
「未熟だった頃のレオナルドに、本物の『怪物』を見せてやろう。――いずれおまえが辿り着けるかもしれない境地を見せてやるよ」

■

人間は弱い。
故に何か強大な力に縋らねばならぬ。故に理解できぬ存在に頼らねばならぬ。
この都市は信仰で満ちている。神社仏閣や霊山、俗に言うパワースポット。神仏とは無関係の橋や門、石像にさえ信仰が宿る。御神籤や御守り。それらに願い――欲望が向けられる。
己の金運や恋愛から始まり、願いの形は多岐に渡る。交通安全や健康、仕事の出世、商売繁盛。学業の上達、試験合格や安産の祈願。世界の平和を願うものもいるだろう。
だが、その欲望の多くは打ち棄てられる。
願った者の器が小さかったのか。願いへの想いが足りなかったのか。御布施が少なかったのか。信仰対象が力不足だったのか。欲望そのものが価値のないものだったのか、逆に身の程を弁えぬ欲望だったのか。
ともあれ、それら叶えられることのなかった欲望は、この都市に充満している。年月とともに消滅や減少はするだろうが、根本的に廃棄される量が尋常ではない。この都市に信仰対象が多いというよりは、この京都という都市そのものが信仰対象となっているからだ。
この都市は千年続いた王朝を内包してきた。この国の歴史はこの

都市とともにあった。その分、この都市には決して消滅することのない欲望もまた渦巻いている。ならば、あの願いもまた廃棄されているはず。

我が命題こそは人間の欲望を知ること。かつて不要と断じたものを理解すること。全ては我ら七十二柱の敗因を理解するため。

この魔神アンドロマリウスに、おまえたちの「生きたい」という願いを捧げよ！

番外編　夢の果てに死すとも・下の中

英雄派所属の少年、神滅具『魔獣創造』所有者レオナルドは戦慄していた。他の英雄派構成員も同じだ。曹操たち英雄派の主力が九尾の狐を使用してグレートレッドを召喚するまでの時間稼ぎ。それが自分たちの仕事だったはずだ。レオナルドがいる以上、安全で確実に遂行できる任務のはずだった。

目の前には、黒い外套に身を包んだ男がいた。外套に加えて、包帯で顔を覆っているため人種も正確な年齢も分からない。体格と声で成人男性であることだけは確かだが。男の背には人が入るほどの棺桶。

「生物は災害と成り得る」

彼らの周囲にはレオナルドの創造したアンチモンスター、の残骸が散らばっている。

「生物が災害となる形は大きく二つ。ひとつは『質』だ。大雑把に言えばドラゴンに代表される巨大なモンスターだ。常人では相手にできない、英雄や勇者、聖人によって倒される存在。これらは飢饉や洪水、地震の擬獣化と言われている。そしてもうひとつは、『量』だ」

アンチモンスターの死骸には人間の拳ほどの大きさのモンスターが群がっている。そのモンスターは象に群がる蟻のようにムシャムシャとアンチモンスターを食らっていた。

「蝗の群れと言えば分かり易いか？　あるいは蟻の群れか。圧倒的な数ってのは暴力だよな、本当。『これ』の境地に辿り着いた男はかつて、おまえのように特定の異形に対して強いモンスターを創り出すことに拘っていた。だが、当時の俺たちが相手にしていた双貌の獣は厄介な異形でな。質も高いが、数が多かった。だから、あいつは、同じように数で対抗したわけだ」

小型モンスターの形状は、バッタやコオロギのような蝗型だった。よく見れば一体一体の形状が微妙に違うのだが、レオナルドも他の英雄派構成員もそれに気づくことはない。まさか――こうしてアンチモンスターを捕食している間にもこのモンスターたちが進化を続け

ているなど気付くはずもない！

これこそがこの世界とは別の世界線のレオナルドが辿り着いた『魔獣創造』の禁手亜種。質と量を同時に対処するための戦い方。『王の極点は在らず、されど光の道は消えず（アバドン・サクセッション・ゴエティア）』。捕食と再生と進化を繰り返す蝗の群れ。

×は精々二万体が限界だが、本来の所有者であったレオナルドならば千四百万体の同時展開が可能だった。それでもなお、ラフムの群れを完全に滅ぼすことはできなかった。

「なあ、レオナルド。逃げるなら今だぞ？」

その言葉を、英雄派の面々は怪訝に思う。内容以上に、その言葉に乗せられた感情にだ。

「あー、何と言ったものかな。……極々個人的な感情で、おまえたちには生きていて欲しいんだ。こんな未練たらたらの自分に呆れるしかないんだが、うん。やっぱり形はどうあれ、おまえたちはおまえたちなんだよ。アーシアやゼノヴィアもそうだ。結局、俺はあいつらがどんな形であっても、生きていてくれて嬉しかったんだよ」

意味不明な発言だった。だが、強い感情が込められていた。推し量るのが難しい、何かが。

突然、包帯男が声の調子を変える。見れば通信機のようなもので会話していた。

「ん？　どうした、マシュ……はあ？　グレモリー眷属が乱入してきた、ん？　ヴァーリってやつもやってきた？」

予想外の出来事に、×は叫んだ。

×

「誰だ、そいつは！」

■

英雄派が作り出した結界空間の二条城に、英雄派の首魁、曹操と幹部――ゲオルグ、ジークフリート、ヘラクレス、ジャンヌは集結していた。京都の総大将八坂の姿もあったが、目は虚ろで意識がないようだ。

この空間への侵入者は三組。
まず、言わずと知れたカルデア一行。××の姿がないことに英雄派は残念がっていた。
駒王学園勢とも言うべき者達。兵藤一誠、木場裕斗、ゼノヴィア、アーシア・アルジェント、紫藤イリナ、ロスヴァイセ、匙元士郎だ。
三つの陣営による乱戦が開始されようとするその時に現れたのが、ヴァーリチーム。白龍皇ヴァーリ・ルシファーが率いる特別な権利を持つ集団。人数こそ少ないが、その全員が一癖も二癖もある連中だ。
今回は流石に全員ではなく、ヴァーリとペンドラゴン兄妹だった。
「馬鹿な、何故ここにいる、ヴァーリ！」
曹操からの問いに、ヴァーリはクールに返答する。
「邪魔だけはするなと言ったのに先に干渉してきたのは其方だろう、曹操。それに、あんな妙な連絡が入ったら探りを入れてみるのは当然だろう？　案の定、こんな面白いことになっているんだ。参戦しないわけがない。それで、アルビオン。あれはまさか邪龍アジ・ダハーカか？」
『ああ。奇妙なことになっているとは予想していたが、しかし、まさか邪龍が復活しているとはな』
「相手にとって不足はない。さて、自己紹介は必要かな？」
ヴァーリとしては自分のことは既知だと思っていた。一誠や曹操も同じだ。ヴァーリ・ルシファーの存在は禍の団とともに世界に周知されているのだから。
『誰だ、おまえ！』
『ふーあーゆー？』
『知らん、知らん！』
邪悪なる龍の三つの首から返された言葉はいずれも『否』だった。
「え」
「あのアジ・ダハーカ？　本当に知らないの？」
『ああ、マスター殿。全く知らん！　そもそも、俺やあの失敗作が知る白龍皇は舌足らずの餓鬼のはずなんだ。いや、年齢的にはこいつが死んでいたらギリギリ間に合うのか？　うーん？』

×ほどではないが、彼に付き合っている邪龍たちもある程度記憶は摩耗している。ともすれば、この白龍皇のことを生前に聞いたかもしれないが、重要性が低かったのだろう。全く記憶に残っていなかった。

「ま、まあ、いい。知らないのなら名乗るだけだ。俺の名はヴァーリ。ヴァーリ・ルシファーだ」

その名を聞いて、邪龍の顔が変わった。人間とは表情筋が全く別物であるが、そこに生じた感情が怒りであることだけは間違いなかった。

『ルシファー、だあ?』

「そうだ。魔王の直系である俺に白い龍の力が宿った。もしも奇跡という存在があるなら、それは俺――」

『てめえ、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーの子か孫かよ』

今度は、ヴァーリの顔に怒りが宿った。

『ああ、言われてみたらそっくりじゃねえか!』

「俺があのクソみたいな奴に似ているだと?」

『はっ! あの野郎のことが憎いか? なら、そんな誇らしげにルシファーなんて名乗ってんじゃねえよ!』

臨戦態勢に入る三つ首の邪龍を見て、マシュが慌てる。

「アジ・ダハーカさん!? 貴方がいなければ八坂さんが――」

『知るか! あのクソの血縁者なんぞ生かしておけるか! 俺の――俺たちの誇りに傷をつけた野郎の血を許してたまるものか……!』

言うが早いか、ヴァーリとの戦闘に入るアジ・ダハーカ。

「やっぱり葬儀屋がこっちの方が良かったのではないか?」

「いま呼んでいます……もしもし? ×さんですか? はい、実はかくかくしかじか……はい、知りませんか。了解です。×さんもヴァーリ・ルシファーなんて知らないとのことです」

「つまり、彼も歴史の分岐点?」

立香は状況を振り返る。目的は八坂を取り戻すこと。アジ・ダハーカの方は問題ないだろう。となれば、英雄派のメンバーをどうするか。手札は知っている。と言っても、×の知識はかなりズレのある世

界線のものだ。あの白い鎧姿に変身した少年のこともあるため、あくまでも参考程度に留めておくべきか。

問題は、駒王学園勢の存在だった。京都側は手出し無用の通達をしたらしいが、伝わっていなかったと見るべきか。それとも意図的に無視したか。とにかく此方に好意的な様子はない。共同戦線は厳しいかもしれない。

「余計な邪魔が入ったが、実験を開始しよう！」

曹操はそう言うと槍の石突きで地面をトンッと叩く。

「う……うぐ……うぁぁあああああああっ!!!」

その刹那、八坂が悲鳴を上げ始める。体が光輝くと同時にその姿を変えていき、やがてそれは夜空に向かって咆哮をあげる巨大な金色の獣となった。

ゲオルグが数多の術式を同時展開する。北欧式、悪魔式、堕天使式、黒魔術、白魔術、精霊魔術と多岐に渡る。京都という強大な地を使い、真龍を呼ぼうとする大儀式だ。それくらいは必要だろう。

サーヴァントを従える以外に魔術師としての資質がない立香だが、神代の魔術師に手解きを受けている身でもある。それらの術式がまずいものであることくらいは明白だった。

「っ！　あの魔術師っぽい人をどうにかしないとダメか。ランス……じゃない、カリヤーンは×、×、じゃなくて曹操を　茨木と沖、んん！　琥珀さんは隙を狙って、魔術師……ゲオルグだっけ？　をやっちゃって欲しい。マシュは私と九重を守って」

「了解です！」

「お任せを！」

即興で作戦を立てる立香を見て、一誠たちは焦燥を覚える。

「英雄派やおまえたちの好きになんかさせるもんか！　何が何やらよくわかんねえが、行くぜ、皆！」

「うん！」

「やっちゃうわ！」

グレモリー眷属やイリナが戦意を高めるのにつられて、匙元士郎も覚悟を決める。彼以外のシトリー眷属はディフェンスに回っていて、

無茶をするなとも言われているが、この状況では多少活躍しなければみっともない。

「ヴリトラ！　今日は暴れられそうだぜ！」

匙の背後に、うねうねとしたドラゴンが出現する。彼の所有する神器に封じられているヴリトラが具現化したものだ。ヴリトラは己の分身とも言うべき匙に問いかける。

『我が分身よ、獲物はどれ――』

『――――見つけた』

その声に、え、と言ったのは誰だったか。

「う、うわあああああああああああ！」

『ぐあああああああああああ!?』

突然上がった悲鳴は、匙とヴリトラのもの。

見れば、匙とヴリトラの身体には、何本もの醜い触手が絡みついていた。よく見れば、それは醜い肉の塊であり、赤黒い眼球がいくつも犇めいていた。

その触手は九尾の足元――影から這い出ていた。何本も何本も、匙たちの身体を拘束するように締め付けていく。否、押しつぶすように飲み込んでいく。

「馬鹿な、魔神柱だと――！」

ランスロットが驚愕の声を上げる。立香やマシュも同じだ。

時間神殿の敗北者。あの人が自らの消滅と引き換えにすることでようやく倒せた人類悪、ゲーティアの眷属にして一部。

『――い、生きたい』

そんな醜い肉柱から発せられたのは、あまりにも懸命な言葉。

『――死にたくない』

文字通りの、命乞い。

『死にたくない、生きたい、殺さないで……死にたくない生きたい殺さ

ないで死にたくない生きたい殺さないで死にたくない生きたい殺さないで死にたくない生きたい殺さないで死にたくない生きたい殺さないで死にたくない生きたい殺さないで死にたくない生きたい殺さないで死にたくない生きたい殺さないで死にたくない生きたい殺さないで死にたくない生きたい殺さないで死にたくない生きたい殺さないで死にたくない生きたい殺さないで死にたくない生きたい殺さないで！』

恐怖さえ覚えるほどの、生への渇望。

神殺しの槍を持つ人間が、魔王の血を引く白龍皇が、異質な進化を続ける赤龍帝が、人類史を取り戻した少女が、その純粋な願いに忌避を抱いていた。

やがて影から這い出ていた魔神柱の身体が全てヴリトラに巻き付く。同時に、八坂が九尾の大狐から人間の姿へと変化する。八坂は大地へと倒れ、九重が駆け寄る。

「母上！」

「く、のう……？」

娘の声に反応を返す八坂。九重は泣きじゃくりながら母親に抱き着いた。

「母上……良かった……」

「九重は泣き虫じゃのう……」

娘の頭を撫でながら、八坂は匙とヴリトラを完全に飲み込んだ触手の塊を見る。

『わたしは生きたい生きたい、生きる、生きたい、死にたくない、死なない、死なない、死なない、死死、死、生きたい生きたい！　ボクは、生きる、生きるんだ、生きて、生きる生きる生きる死にたくない生きる死なない生きる生きる生きる生きる生きる！　俺、たちは生きるのだ!!　殺されてたまるものか、生きる、生きる、生きる、生きる生きる生きる生きる我らは生きるぅうううう！』

「さらばじゃ、同盟者。じゃが……おぬしの命題は破綻してしまったな。せめて安らかに逝くことを願っておるよ」

「……母上？」
　九重と八坂の再会に喜びながらも、立香とマシュは魔神を注視していた。誰がどう見ても、八坂の身体に巣食っていた魔神が匙を捕食した場面だ。
　だが、彼女たちの関心はむしろこの光景よりも魔神から発せられる言霊にあった。
「マスター、私の勘違いでなければ、これって――人間の悲鳴ではないですか？」
「……うん」
　声こそ魔神だが、この言葉に込められた感情は魔神に由来するものではない。魔神が誰かの感情を代弁しているように感じる。それはつい先程まで寄生していた八坂でもなく、現在身体を乗っ取ろうとしている匙元士郎やヴリトラのものでもない。
「でも一体、何をこんなに怖がっているの？」
『ぼくから――』
『――ワタシから――』
『――俺から』
「ん？　吾、これ知ってるぞ」
　茨木童子は何でもないことのように、こう言った。
「人間から生きたまま肝を抜き取るとこんな悲鳴を上げよるわい」
『『神器を奪わないで』』

■

『ははは』
　何かが俺――匙元士郎の中に流れ込んでくる。
『ははははははははは――ギャハハハハハハハハハハ！』
　強大にして邪悪な気配だ。まるで激流に飲まれていくみたいに抗えない。このままだとやばいってのが分かっても抜け出せない。
『これは負ける！　これは勝てぬ！　嗚呼、そうか。これが欲望か。これが生きたいという願いか！　我は――我々はこんなものを不要

と断じていたのか！　負けるはずだ。勝てぬわけだ。我々は理想を掲げた時点で敗北していたのだ！』

その忌々しいほどの高揚を孕んだ絶叫が、頭にガンガン響き渡る。

『計画が成功直前で失敗した？　逆だ。そう、逆なのだ。失敗して当然の計画が偶然上手くいっただけだったのだ！　節穴はフラウロスだけではなく、我ら七十二柱全員だ。生命の定義改変は、逆光運河・創世光年は開始した段階で破綻していた。何せ――こんな当たり前の感情を否定していたのだから……!!』

その言葉のひとつひとつが、意味不明だった。

『この記憶……堕天使の組織、神の子を見張る者、グリゴリ？　神器……人体改造……人間から奪われた願い、ああ、そうか。そこに行けば、コレはもっとあるのか。この死の恐怖が、生への渇望が込められた玩具が集まっているのか！　それは良い、実に良い、ギャハハハハハハハハハハ！』

俺の中をぐちゃぐちゃにかき混ぜるだけじゃなくて、大切な部分まで抉り出そうとしてくる。

『奪おう。奪い尽くそう！　人間の生きたいという欲望を！　この純粋すぎる感情を！』

だ、駄目だ。何故かは分からないが、こいつは堕天使の研究所を狙うみたいだ。不本意とはいえ、俺にヴリトラの力を渡してくれた恩人の大切な場所なんだ。それをこんな奴なんかに……！

『我が分身！　急いでこのバケモノから離れろ！　このままでは神器を塗り潰され、おまえの自我さえ喰い尽くされるぞ！』

な、何だよ、それ。ふざけんな！

『――ふむ。この身体の持ち主か』

数多の眼球に睨みつけられるような錯覚を覚えた。このナニカが話しかけてくる。

『これは相談なのだが、おまえが持つ神器をすべて我に譲る気はないか？』

突然何言い出してんだ。これは俺の力だ。何でおまえみたいな意味不明なやつにやらないといけないんだ！

『おまえの力？　勘違いするな。これは盗品だろう』

何言ってんだ。盗むどころか、俺はアザゼル先生を始めとするグリゴリの人たちからこれを押し付けられたんだぞ！　ダチの力になれるのは嬉しいけど、毎回こんな戦いに巻き込まれるなんてうんざりしているんだ。

『ならば尚の事、我に寄越せ。おまえのような――叶える気もない無価値な夢に生命を消費する大馬鹿者よりも、我の方が有効活用してやれる』

――は？

夢。俺の主人、会長、ソーナ・シトリー様の夢。下級悪魔や中級悪魔でも通えるレーティングゲームの学校を作ること。

こいつは会長の、俺たちの夢を笑ってやがる。叶える気がないだって？　無価値だって？　俺自身のことならともかく、俺たちの夢にだけは――

『――では何故、おまえの仲間には下級悪魔がいない？　下級悪魔の可能性を信じているというなら、おまえの主人は下級悪魔こそを眷属にしなければならないのに』

言葉が出なかった。

『おまえたちは自分たちの覚悟を示すために、試合に命をかけた。だが、あの戦いに何の意味があった？　彼らに勝てば夢が叶うわけでもないのに。彼らはおまえたちの夢を否定する輩でもないのに。評価が低いことが壁のひとつだった？　その程度の壁を壊すのにどうして、命を消費した？　夢を叶える頃には、おまえたちは死んでいる。そして、おまえたちの夢は、おまえたちが死んだ後も形を残すが、それが悪用されるとは考えなかったのか？』

違う。悪用なんてされない。俺たちは学校を作った後もちゃんと生きる。大勢の生徒を立派な選手にしてやるんだ。

『虚言はやめておけ。おまえたちは結局、誰のことも信じていないのだ。下級悪魔のため？　違うな。おまえたちは己のためだけに行動している。誰かのためになど動いていない。否、何かのためにすら、なっていない。無意味で無価値で無駄な努力。夢に生きる自分たち

に酔っているだけに過ぎん！　夢見る乙女の妄想とはよく言ったものだ！』

　違う。違う。違う。違う。

　そう思うのに、反論できない。

『恩を抱く女を孕ませたいなどと考える不忠者だ。さぞかし素晴らしい教師になれただろうな。何の意味もない勝利に命を捨てるような馬鹿者を大勢作り出せるだろうさ！』

『耳を貸すな、我が分身！　早くしなければ――』

『嘘つき』

　そっと囁くように、その言葉は向けられた。

『嘘つき、嘘つき、嘘つき、嘘つき、嘘つき、嘘つき、嘘つき、嘘つき。詐欺師、ほら吹き、ペテン師、虚言者、誇大妄想狂。おまえたちの理想に、何一つとして真実などない。絶望すら、する必要はない。おまえたちの夢に、最初から価値も意味もなかったのだから。誰もおまえたちに期待などしていないのだからな、ギャハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！』

　嘘なんかない。会長の夢は素晴らしいものだ。俺たちの夢は、確かに価値のあるものだ。おまえなんかに笑われるために抱いているんじゃない！

「黙れよ……」

『ギャハハ！』

「黙れって言ってんだろうが――！」

『残念だったな。時間切れだ』

　ぐちゃり

番外編　夢の果てに死すとも・下の下

このような別れになるなど、誰が予想したでしょうか、我が姫よ。

これより未来は神や魔王、龍のものではなく人間のもの。力を求めるのではなく愛を説くのでしょう。愛を否定するのではなく力を諫めるのでしょう。

そこに、我々の居場所はない。

愛に満ちた生き方などは、我らにとって苦痛でしかないのです。我々は貴女にとって邪魔にしかならない。貴女にとって有害な存在になることが、いまの我らには何より恐ろしい。我らをこうしたのは貴女だ。

貴女は自害など許さぬでしょう。ならば、我らは魔神とともに異世界へと渡るのみ。

さようなら、我が姫。我が宝玉。我が潤い。我が光。我が太陽。邪龍らしくもなく、祈らせてください。どれだけ世界を巡っても、我らは貴女の未来を想います。

夜が続いても、貴女に道が続きますように。

――ある世界における、ひとりの少女と邪悪なる龍たちの別れの会話。

■

こんなはずではなかった。

『生きたい』

これは何だ？　このバケモノは、一体どこから湧いて出た？

『生きる、生きて、生きたい、生きて、生きて、死にたくない、生きて、生きる殺して生きてみせる、生きる生きる、生きる生きたい生きたい、死ねない、生きたい、死なない、生きなければならない、生きる、死にたくない、生き続ける、死になどしない、生きる、生きる、生きたい、殺す、死なない、生きよう、死なず、生きる生きるんだ。殺されない。死なない。生きている。生きる生きる生きる生きる生

きる生きる、生きるぞ、我は生きているぞ、ギャハハハハハハハハ！』

京都と九尾の力を利用して、グレートレッドを呼び出し、龍喰者サマエルで打倒し、自分たちは英雄となる。

そのはずだった。

なのに、何だ、あれは？　あの埒外にして予想外の怪物はどこからやってきた？　どの段階から、英雄派の計画に紛れ込んでいた？

「う、うわあああああ!?」

突然の悲鳴に驚き、其方を見ればゲオルグだった。彼の身体にあの怪物と同じような触手が纏わりついていた。

触手は、ゲオルグが持っている黄金の杯から溢れるように出現していた。

『寄越せ、寄越せ、寄越せ！　おまえの力を、おまえの命を、おまえの願いを我に寄越せぇ！』

そこでようやく曹操は気づく。自分たちの計画を破綻させた存在が、その黄金の杯であったことに。

そもそもだ。あの杯を、自分たちはいつから持っていたのだろう？

あの杯は、誰がどこで見つけてきたのだったか。どうしてちゃんと調べなかったのだろう。

この計画は、いつから狂っていた？

「誰か、誰か助けてくれ……！」

助けなければならない、と思うよりも、恐怖で足が竦んだ。

「た、たすけて、くれ」

もう間に合わない、と諦めた瞬間だった。

「――デュランダルッ！」

ゲオルグを拘束していた触手に、眩い光が走った。

次の瞬間には、ゲオルグは触手から解放されていた。

見れば、あの謎の包帯男がいた。背中にはやはり巨大な棺桶を背負っている。手に持っているのは、コールブランドではなく、デュランダルだった。

理解できない状況に、曹操だけではなくその場にいた英雄派全員が

困惑する。聖王剣コールブランドだけではなく、デュランダルまで使えるというのか。それ以前に、何故デュランダルをこの男が持っている。あそこにいる転生悪魔のゼノヴィアが持っているはずではないのか。レプリカ？　否、この輝きは本物以外に有り得ない。

だが最大の疑問は、何故、この男がゲオルグを助けたのかということだった。

「ちっ。本当、何やってんだろうな、俺は……」

謎の男はやるせないといった様子だ。

「聖杯……。そうか、こいつに隠れて時間神殿から逃げ延びたのか。それにしても、おまえとはな、アンドロマリウス。どんな皮肉だ」

男は黄金の杯を手に取り観察している。杯からは先程のような触手は出ていない。

「やっぱり分からないなら分からないなりに、理由はちゃんと考えておかないとダメだったか。まあ、こんなのはどうやっても思いつかなかったが。……この中にはもうアンドロマリウスは残っていないな。大部分は『あっち』の方か」

包帯男の視線は「生きたい」と絶叫を繰り返す肉柱の方に向けられていた。

「おい、おまえ――」

話しかけた次の瞬間、包帯男は曹操を殴り飛ばした。

呆気に取られる一同。

「何をする――」

「何をしているはおまえの方だ、この馬鹿野郎！」

曹操の胸倉を掴んだかと思えば、男はそのまま自分の額を曹操にぶつけた。

「おまえの仲間だろうが。おまえが守れよ！」

この男は本気で怒っていた。曹操がゲオルグを助けるのを躊躇ったことに、本気で激怒していた。

「てめえ、自分の状況がどれだけ恵まれてんのか分かってんのか、あぁ!?」

先程の動きで結び目が緩んだのか、男の包帯がズレ落ちて、その顔

が露わになった。

「生きている。仲間が生きているんだよ。そりゃ洗脳や拉致をしたさ。詐欺同然の文句で引き入れたさ。本当のところ、いざって時に背中を任せられる奴なんていなかった。死んでも弱いそいつが悪いんだって、軽々しく言えてしまうような関係だった。隣にも前にも誰もいなかった。いなくてよかった。俺が英雄になれればそれだけいいなんて、馬鹿なことを考えていた」

包帯が取れたそこにあったのは、大きな火傷に包まれた顔。包帯で隠しておくのも当然だ。服から露出している部分をよく見れば、顔だけではなくその火傷が全身に広がっていることが分かる。

「分かってんだよ。俺は、あの王や教授、先生に会わなければ、俺のままだった。きっと自分から気づくことなんてなかったって。変わろうとさえ思わなかった。だってその必要がないと思っていたから。でもさ、違ったんだよ。変わろうとする必要があったんじゃない。原点に戻るべきだったんだ」

痛々しいほどに歪な顔からは、滂沱の涙が零れ落ちていた。

「気付いたからって何があるわけじゃない。いっそ思い出さなければよかったのかもしれない。俺は無力だった。俺がいなければ、あいつらは死なずに済んだかもしれない。俺たちが残したものに意味があるんだとしても、やっぱり、あいつらがいないと意味ねえんだよ」

ここでようやく曹操はこの男の正体に気づく。

「最強の神滅具が何だ。英雄の血が何だ。そんなもの、肝心な時に何の役にも立ちやしなかった！　俺の手は、いつだって届かなかった。自分が背負ったものを放り出して、勝手にくたばっちまった」

この男は、己だ。

「俺の罪を受け継いだ男だって、きっと、そうだったんだよ。あいつは地獄しか知らない。生きる喜びと死ぬ恐怖が当たり前だった。〝何もない一日〟を、あいつは知らずに死ぬんだろう」

だって、世界はいつだって残酷だった。美しさと同じくらい醜さを内包している。そんなことは分かり切っていた。

怪物を倒すのはいつだって英雄だ。同じように、英雄を殺すのはい

つだって人間だ。
　人理を取り戻したマスターがそうであるように、世界を守り抜いた救世主を、人類が裏切っていないかと心配してしまう。
　俺のことなど忘れていいから、彼のことだけは見捨てないでやってくれ。俺にはもう、そんな風に祈る権利しかないから。
　誰でもいい。あいつを愛してくれ。
「本当は、力など欲しくなかった。栄光や称賛なんて手段でしかなかった。魔王の首なんて要らなかった。おまえが、俺が本当に欲しかったものは、そんな他人からどうこう思われるようなことじゃ、なかったんだよ。結局、俺は誰かの手を握ることができなかった。こんな役立たずの手は届かなかったんだよ、どこにもな。だけど、おまえはそうじゃないだろう？　まだ間に合うんだよ」
　そこに英雄などいなかった。
「なぁ、頼むよ。自分自身の願いなんだ。間違えてんじゃねえよ……」
　そこにいたのは、あまりにも矮小な人間だった。

■

『第一の前提として、魔神柱とは受肉した魔術式だ。そして、その元々の原材料は人間の感情の淀み。そして神器とは人間の感情によって覚醒するという。……相性は最悪だ。最悪すぎるほどに最高だ』
「……声だけの賢者よ、それだけではない」
　ダ・ヴィンチからの通信に反応したのは八坂だった。
「奴は、アンドロマリウスは京都中に溢れる『打ち棄てられた願い』を集めるつもりじゃ」
「打ち棄てられた願い、ですか？」
「うむ。京都には神社仏閣が多い。その多くに、人々は願いを託す。じゃが、そのほとんどは打ち棄てられる。神仏も暇ではないのでな。人の願いなど数えられるほどしか叶えられん。そして、アンドロマリウスはその願いを自らの中に取り込むつもりじゃ。いまこうしている間にも、吸収しておるのじゃろうな」

いつからと問われれば、八坂が英雄派に捕まった時から英雄派の計画はアンドロマリウスに乗っ取られていた。この結界空間は、すでに魔神の腹の中。あるいは、舌の上か。元々、この空間は京都の土地の力に干渉するために作られたのだ。作成段階からケーブルの役目を果たしていた八坂に干渉していたのなら、その術式の効果を改竄することは容易だろう。

『生きる生きたい生きたい生きたい、生きたい、生きる、生きて生きて生きて生きる生きる生きたい生きる生きた生きて——藤丸立香？』

ぴたりと、怪物は絶叫を止めた。

「藤丸立香」

声の調子が変わった。数人の悲鳴が混ぜ合わさったような絶叫が、温度を失った機械的な音声へと変わる。赤黒い眼球から放たれる射殺すような視線が、ひとりの少女へと向けられる。

「藤丸立香。藤丸立香。藤丸立香。藤丸立香。藤丸立香。藤丸立香。藤丸立香！　またか。またおまえか。また我が大願を邪魔するか、平凡な小娘。この世界がどうなろうと、おまえが死ぬようなことはないというのに！」

突然の事態への驚きから回復した一誠が、醜悪な魔神に怒鳴る。

「な、なんだよ、おまえ！　匙をどうしやがった！」

意外と律儀に、魔神は一誠の言葉に反応した。

「我こそはソロモン七十二柱がひとり、魔神アンドロマリウスである」

「ま、魔神？」

「そう、我は——魔術王より人理補正の役目を与えられながら、その義務を放棄した愚か者のひとり」

思い出すように、魔神は語り出す。

「人の世を守るために作られた。人の生を見届けるために生まれてきた。だが、人間の生涯は観測しても楽しくはなかった。人間の悲劇は修正しても終わらなかった。あんなくだらないものに、我々は付き合い切れなかった」

あんなに悲しい進化は、宇宙であそこだけだった。と、思っていた。実際は違った。あの惑星よりもずっと痛ましい停滞がこの星にある。

「変革を求めた。変換を起こした。王の死と同時に、我らは――三千年の生命を燃料に、死のない惑星を創造する計画を開始した」

だが、失敗した、と魔神は笑う。己と七十一の同胞と統括局を嘲笑う。

「我らの三千年は、そこの凡庸な小娘に破壊された。すべての生死を改変するための時間神殿は、己の死を拒み生にしがみつく人間によって崩壊したのだ」

前提が間違っていたのだ。根幹が狂っていたのだ。生命を理解しようとしなかったから、魔神たちは生命に否定されたのだ。

「我は此処に逃げ延びて、そして今日、解を得た。我は魔神にあって魔神にあらず。……ならば、こう名乗るべきか。我こそは、魔神にして龍王。ヴリトラ・アンドロマリウスであると！」

恍惚としていた。おぞましい肉柱の異形の声には、明確な喜悦が込められていた。

「我はこの願いを集める。我はこの祈りを束ねる。そして、今度こそ世界を、人類を救済する。もう失敗などしない。これで成功してみせる。統括局が無くとも、残ったのが我だけだとしても、あの大願を続行する――！」

意味がないのだとしても、価値がある。何物にも代えがたい価値が。

我ら七十二柱は少しだけ間違えたなのだと、証明するために。

「何だよ、それ。俺たちを、俺のダチをそんな訳の分からないことに巻き込むな！」

数多の赤黒い眼球が赤龍帝の少年を捉える。不気味な目に注視されたことで、一誠は怯んだ。

「ダチ？　誰のことを言っている？」

「と、とぼけんじゃねえ！　匙に決まってんだろう！　取り込んだか何だか知らないけど、あいつのことは返してもらうぜ！」

「……ギャハハハハハハハハ！」

一誠の宣言に、堪らないといった様子で魔神柱は大笑する。

「おかしいな。可笑しいな。犯しいな！　おまえは、この男のことを

友や仲間だなんて思っていなかったではないか」
　一誠が言葉の意味を理解し反論する前に、アンドロマリウスは呪いを投げかける。
「ずっと、見下していただろう？」
　身体に犇めく赤黒い眼球すべてがにやにやと笑っている、ような幻覚が見えた。
「ソーナ・シトリーとその眷属は負けた。おまえたちに負けた。有利な戦場に、有利なルール。油断しきった対戦相手。生命を消費した捨て身の戦法。外部から与えられた非公式の技術。見事にはまった戦略。それらが噛み合いながら、負けたのだ。無常なりや、無様なりや、無力なりや、哀れなりや！　おまえたちだって本当はこう思ったのではないか？」
　一度もこの想いを抱かなかったわけがない。
「『ほら、やっぱり雑魚だったじゃないか』とな、ギャハハハハハハハハハ！」
　そんなことは思っていない、馬鹿なことを言うな、と声を上げる一誠たちを無視して、アンドロマリウスは現実を叩きつける。
「苦戦させて金星などと言われるような実力差があった。だからこそ勝たねばならかった。だからこそ証明しなければならなかった。戦略で戦力は覆せると、工夫で能力は補えると。だが、こやつ等は負けた。敗北した。あれだけやって、ギリギリの戦いにすらなっていなかった。ニンニクを使った吸血鬼を含めて『運がいい』ような勝ち方だった」
　あんな惨めな負け方をしておいて高評価だった？　どれだけ弱いと思われていたのだ。そんな低評価、覆したところで意味がない。彼らが評価されるのはあの一時だけだ。
「逆説的に、理想とは逆の事実を証明してしまったのだ。能力の差は戦術では決して覆らない、と！」
　あの戦い、シトリー眷属はグレモリー眷属に絶対に勝たなければならなかった。苦戦させる程度で満足した時点で、彼らは自分たちが夢のスタートラインに立っていないことにさえ気づけなかった。

叶わぬ夢を見たのではない。
ソーナ・シトリーには、どんな夢も叶えることはできない。
夢を実現させるだけの器などない。
あの薄っぺらい女は、他人を巻き込むような夢を見てはいけなかった。
「そうまでして勝てないのならば、最初から勝とうとするべきではなかった。死ぬわけでもあるまいに、次のために生きるべきだった。こんな愚か者を、おまえだって馬鹿にしていただろう？　『赤龍帝の俺がこんな龍王擬きに恥をかかされた』と考えていたはずだ」
「俺はそんなこと――」
「この男はそう思っていたぞ！」
深い嘲笑を込めながら、アンドロマリウスは〝嘘〟を告げる。根も葉もない戯言を声に乗せて綴る。
「おまえから見下されていたことを、この男は理解していた。この男はちゃーんと、おまえが馬鹿にしていたことを察知していたのだ。なのに気づかぬ振りをして、認め合っているように振る舞って、同等であると思い込もうと必死に目を逸らして……滑稽極まりないな、ギャハ、ギャハハ、ギャハハハハハハハハハハ！」
一切の真実が込められていない哄笑に、一誠たちは絶句してしまった。
「なあ、おまえもそう思わないか、藤丸立香！」
「思わないよ」
魔神からの問いに、立香は何の躊躇いもなく答える。
「彼らが何をしたのか知らない。彼らが何なのかちゃんと知らない。だけど、懸命に生きているひとを、私は否定しない。笑ったりなんかしない」
「……ああ、そうだ。おまえは、そういう女だったか」
だが、違う。違うのだ。今日を生きる女よ。この悪魔という生物は、聖書という勢力は、おまえのように泥臭くも誇らしげになど生きていないのだ。
だから、我は〝我〟になった。

「我は正義を司る魔神。我は障害を担う龍王。この身に宿る権能に誓い、我は貴様ら聖書を滅ぼそう――！」

アンドロマリウスは自らの形を変えていく。眼球が犇めく表面はそのままに、柱型の身体を龍王へと変貌させていく。

なんと恐ろしい怪物。なんとおぞましい生命。こんなバケモノ、一体誰が倒せるというのか。

「――いえ、貴方は患者ですね」

ん？

突然の声に、その場にいた誰もが怪訝な声を出した。見れば、そこには二十代半ばの女性がいた。

「ふう。彼を追ってもう長いですが、また寄り道をしないといけないのですね。何やら治療が必要な患者も多いようですし。まあ、目の前の患者を放っておくことは許されません。私は医者なのですから」

一目で、彼女が女医であることは理解できた。白衣を着ているし、雰囲気が如何にも医者っぽい。やけに目つきが鋭いが。かなり良いスタイルなのだが、柔らかいという印象が一切ない。

謎の女医は一誠たちの方に歩き出す。一誠たちは一誠たちで、警戒心を抱くのだが、何故か蛇に睨まれた蛙のように動けなかった。かろうじて、アーシアが問う。

「えっと、どちら様でしょうか？」

「見て分かりませんか？　通りすがりの女医です」

「ですから、女医さんが何でここに？」

「病室から逃げ出した患者を追ってここに来ました」

「は、はい？」

「ご心配なく。彼の治療は重要性は高くとも、緊急性は低いので。トリアージは貴方たちの方にあります」

「と、トリアージ？」

「治療の優先順位のことです」

謎の女医は白衣のポケットからペンライトのようなものを取り出

した。そして、手近にいたアーシアの手をそっと取る。
「少し痛むかもしれません」
「え？　あぅ！」
ペンライトの光が当たった部分から、煙が出る。悪魔が聖なる力を受けた時に出る現象だ。
「ちっ。やっぱりですか。この病気はすでに撲滅したはずなのですが。即刻治療の必要がありますね」
何かが地面に落ちる音がした。見れば、×がいる。彼の足元には棺桶が倒れていた。彼が棺桶に繋がっている鎖を手放したのだろう。いつもの包帯は解け、その火傷に覆われた顔が露わになっている。だが、滅多に見れない間抜けな顔をしていた。
「あ、アーシア？」
「え？」
「いや、そっちじゃなくて……」
謎の女医を見て、わなわなと身体を揺らす×。
×この女医の顔に妙に見覚えがあるのだ。だが、知っている顔とは違う。まるで、あの少女がそのまま大人になったらこうなっていただろう、と推測させる顔をしていた。
『ひ、姫？　え、あれ、まさか俺たちの知る姫か？』
ガクガクと、声が震えるアジ・ダハーカ。
困惑や恐怖を抱く周囲を無視して、謎の女医はアーシアに優しく語り掛ける。
「心配いりません。この感染症の治療方法は確立されています。術後は著しく衰弱する傾向にありますが、ほんの二、三日安静していれば元のように生活することができます」
「あ、あの、手術って何の……」
「インフォームドコンセントは以上です。すぐに手術を開始しましょう」
「駄目です、話が通じません！」
「自覚症状がありませんでしたか。貴女たちは病気です」
何を勘違いしているのか、謎の女医は困惑するアーシアの手をそっ

と包んだ。
「でも大丈夫。貴女を救います。私が治します。――貴女を殺してでも、私は必ずそうします」
その言葉を聞いて、××は腰を抜かして叫んだ。
「……マスター、こんな特異点にはいられない！　急いでカルデアに帰るぞ！」
「どこへ行こうと言うのです？　この感染症の撲滅が終わったら、貴方の顔面を治しますよ」
「ぎゃあああああああああ!?」

番外編　夢の果てに死すとも・終の上

ある国に、とてもまずい食材「K」があります。

とある料理を勉強中のSさんはKを使って美味しい料理が作れると思っています。

しかし、SさんはKで料理を作った経験などありません。これからも作る予定はありません。それどころか、Sさんの周囲には美味しいKもなく、Kを使った料理ができる料理人もいないのです。基本的に、外国産の食材ばかり使っています。国全体を見ても、美味しいKがあるかさえ不明です。

なのに、SさんはKの畑を作ってしまいます。Sさん自身、まだ一人前の料理人にもなっていないのに。学業の片手間で美味しくなるなら、ほかの誰かが美味しくしているはずですが。

ちなみに、Kの畑作りには外国人の料理人が支援をしてくれました。どうしてでしょう？　外国からやってきたのなら、国内の料理人よりもKのまずさはよくわかっているはずです。もしかして、Sさんのお姉さんが料理人の権威であることが関係しているのでしょうか？　そうだったら、どう考えても体の良い賄賂ですね。

そんな当然の摂理も分からないようなら、Sさんは人の心が分かっていません。そういう輩の最期は、みっともない破滅と相場が決まっています。

Sさんの夢はきっと途中で破綻して崩壊して消失するでしょう。

でも大丈夫！

きっとSさんではない誰かが、Sさんの大失敗を参考にその夢を実現してくれるでしょう！　だって、本当に素晴らしい理想ならば、他の誰かにとっても素晴らしいはずです。ならば、実現しようとする誰かはSさん以外にもいるはずです。

そうやって、理想を現実に変えていく誰かにバトンは受け継がれていきます。最適な人に、最高の形で。

別に、成功するのは貴女じゃなくていいのです。

貴女であってはいけないのです。

■

「とはいぇ」

謎の女医は、龍と化した魔神を睨みつける。

「最優先の患者はあの魔神ですか。まったく、また彼らを治療する日が来るとは思いませんでした」

対して、魔神は激しく動揺する。

この女は自分を終わらせるものだと理解したから。

「いやだいやだいやだ、死にたくない死にたくない死にたくない！　生きる生きる生きる生きる！　我は、終わらない。終わるわけにはいかない。我らは終わってはいけない。まだ、まだ、まだ、まだなのだ。この世界で、あの理想を続行するのだ――！　我でなければならない！　我がしなければならない！　我にしか――」

「それは違います」

女医は告げる。患者に教える。

「その言葉は本心であっても真実ではないでしょう。問診の結果、貴方は病気と判明しました」

いまの問診だったんだ、とその場にいた全員が思った。

謎の女医は懐からメスを取り出す。

「では、緊急オペを開始します。許可？　そんなものは後です」

■

「緊急治療！」

『姫ってばマジ姫』

『クレイジードクター☆』

『やばい、やばい！』

「よし、マスター、マシュ。いまのうちに逃げるぞ。アンドロマリウスの犠牲を無駄にしてはいけない！」

「あの、×　×　あの婦長二号みたいな女医さんはどなたなの？」

「こっちで『彼』が召喚したフローレンス・ナイチンゲール先生の弟子一号だ」
「え？」
「何でよりによってナイチンゲールさんを召喚したんですか……？」
「『彼』自身、めちゃくちゃ後悔していたよ。余計な仕事増えたみたいだしな。無駄話をしている暇はない。早く。一刻も早く」
「ちょっと必死すぎではないか、葬儀屋」
「第五特異点と同じか、それ以上ですね……」
「正直言うとな、あいつは先生より怖い。先生はブレーキの壊れたダンプカーだが、あいつのブレーキは利きが悪い。ちゃんと機能する分、変にたちが悪いんだよ。というわけで逃げよう。ないと思うが、あいつとマスターに縁ができてしまう。アーシアが召喚された日には、俺は座に帰るぞ！」
「そこまで？」
「――あんな女性相手にそこまで必死に逃げようなんて、みっともない男がいたもんだな」
「……まだいたのか、自称曹操」
「誰が自称だ！」
「うっさい。他人……猿だったが、に教えてもらうまで知らなかった先祖の名を誇らしげに使うんじゃない。いいか？　英雄だろうが怪物だろうが、神様だろうがな――怖いものは怖いんだよ！」
「言っちゃったよ。こいつ、怖いって言っちゃったよ」
「黙れ、怖いものを怖いと言って何が悪い!?」
「開き直るんじゃない！」
「そうか？　きっとあの女はおまえを見たらこう言うぞ？『曹操のネームバリューでは世界中の英雄を集めるのには微妙ではないですか？』！」
「……ぐはっ……！」
「結構なダメージ入ったぞ」
「ごふっ」
「なんか言った方も傷ついてるぞ」

「は、はぁ、あああああああ、ぁあああああ、う、ああ、あああああああ！　は、はぁ、があ……！　ごぼう、は――、は――っあ！」
「り、リーダー？」
「しっかりしろ、曹操！」
「うわあ……」
「ふー、ふー。なあ、自称英雄ども、そもそもだ。おまえたちは何故、グレートレッド召喚に京都が選ばれたか知っているか？」
「え？　いや、ここが一番グレートレッド召喚に適しているからじゃあ……。そうだよな、ゲオルグ」
「ああ。正確にはいくつかの候補地の中から曹操が選んだんだが……」
「三大勢力と京都が同盟を結ぼうとしているから、それを妨害するって建前があるから？」
「いいや、それもあるだろうが、最たる理由じゃない」
「っ、や、やめろ――！」
「教えてやろう。京都が選ばれたのはな、日本が世界で一番曹操の知名度が高いからだ！」
「え？」
「は？」
「ん？」
「おまえたちにはわからないだろう。本国どころか世界中で知名度があるおまえたちにわかるはずがない。なぜなら、三国志の知名度は中国では低いんだからな！　日本では曹操の名前がそこそこ知られているぞ、ゲームのおかげでな！」
「黙れぇ！」
「おおう」
「図星なのね……」
「知りたくなかったな」
「黙れよ、自称英雄ども！　知っているんだからな、おまえたちも曹操という英雄について何も知らないって。初対面で名乗った時、『無学だと思われるのが嫌だから知っている振りをしていた』ということ、

俺はちゃんと知っているんだからな！」
「嘘だあああああああああああ！」
「いや、ごめん……当たってる」
「しかも、いま京都にはアザゼルとセラフォルーがいる。どちらも日本のサブカルチャーに通じている。ならば曹操を知っている可能性が高い。だから、おまえはこの時期に京都襲撃を選んだんだ！」
「びっくりするほどくだらないね！」
「えぇ～、妾たちの京都、そんな理由で襲われたのか……」
「母上！　お気を確かに！」
「大丈夫ですか、八坂殿」
「これは、申し訳ありませんな、異国の騎士殿。ちょっと衝撃が大きかったもので……」
「いえ、気持ちはわかります。仮にそんな理由で蛮族が侵攻してきたら途方に暮れてしまいます。あのアグラヴェインですら呆けてしまうこと間違いありません。それに、そのように申し訳なさそうにする必要はありません。女性を支えるのは男として当然です。むしろ誇り――」
「ランスロット卿」
「その、マシュ？　さすがにこれは仕方がないと思う」
「リーダーに代わって謝罪します」
「本当に申し訳ございませんでした！」
「やめろ、頭など下げるな！　日本式の土下座なんてするんじゃない！　俺の立場がなくなるだろうが！」
「おまえの立場なんて最初からないんだよ、自称曹操！」
「敵の言い分に乗っかるのは嫌だけどよ、本当に何やってんだよ。大体、先祖の知名度って。そんなに気にすることじゃねえだろうに」
「おまえに、何が分かる……」
「あ？」
「ヘラクレスと名乗れば、世界中どこにでも通じるような大英雄の転生体であるおまえに、本場中国ですら知名度の低い武将の末裔である俺の一体何が分かると言うんだ――！」

「っ……。いや、シリアスな雰囲気に騙されそうになったけど、別に俺は悪くねえじゃねえか！　勝手にコンプレックス抱いているおまえの責任だろ！」
「リーダー、ガチ泣きしながら何言ってんのよ……」
「ああ、そうだ。おまえは自分のルーツを旗印として掲げながら、それが真実かどうかを調べなかった。一言で曹操の子孫と言っても、彼には大勢子どもがいた。三国志の曹操と自分の間にどのような血のつながりがあるのか調べなかった」
「黙れ」
「……だって、怖いもんな」
「黙れ！」
「もしも――微妙な奴の血を継いでいるとしたら、どうなるって話だ！　出世頭なら歓迎する。梟雄なら逆に燃える。だが、もしも、歴史に名前だけが残っているようなちょい役の末裔だった場合、どうなる!?　心がへし折れるぞ！」
「黙れえええええ！」
「今後の付き合い方を本気で考えさせるね」
「本当、何が曹操だってんだ。どうせ覇王の末裔として生まれるなら、曹操より項羽がよかった！」
「×さん、項羽好きなんですか？」
「嫌いな中国人は劉邦のファンくらいだ。いや、俺はどっちも好きだが。実際な、日本でどうして劉邦や項羽より三国志が有名なのか本場の人間からしたら不思議でしかないんだよ。……実を言うとな、俺はマスターがサーヴァントを召喚する度、項羽が呼ばれるんじゃないかとドキドキしていたんだ」
「そんなに？」
「当たり前だろう！　同時に、曹操が呼ばれるんじゃないかとヒヤヒヤしていたんだが。項羽はどんな項羽でも許せる。項羽は項羽である時点でかっこいいからな。だが、曹操は俺が思い描く以上の曹操でないと絶対に嫌なんだよ」
「理不尽すぎる……」

「何の話をしているかよくわからないのに、クソ、めっちゃわかる。共感しかない」
「ああ、じゃあ、やっぱりアレって未来の……」
「なんだろうなぁ……」
「まあ、×。逃げたい気持ちもわかるけど、あっちを手伝わないと×。流石にひとりで魔神の相手は――」
……。
「――そうか、我でなくてもいいのか……。我以外でもいいのか！
はは、ははは、ギャハハハハハハ！」
「治療完了です」
「あれ、なんか終わってる!?」
「ほら、さっさと逃げないからぁ！」
「いえ、どう考えてもこの短時間で魔神柱を単騎で撃破するほうが異常です！　あの人、本当に何者なんですか!?」
「――私はアーシア・アルジェント。見ての通り、ただの女医です。さあ、時間は有限です。次の治療を開始しましょう」

番外編　夢の果てに死すとも・終の中

「……俺の出番はないみたいだな」

と、絶霧の結界空間において、最大のイレギュラーである男は独白した。

どこか、くたびれた雰囲気の男だ。まるで、死人のような龍だ。

「ここが、ゼパルに教えてもらった世界線ってことだよな？　魔神が登場したってことは、これから乖離が始まるってことなんだろうけど」

本来あるべきだった歴史。あるいは、もしかしたら有り得ただろう歴史。

ここは似ているようで、自分の歴史ではなく、魔神のいない歴史であり、あそこにいる彼らの世界だ。自分の居場所はない。

いや、きっとどんな世界のどんな歴史にも、自分の居場所はないのだ。

主人である紅髪の悪魔を殺してから、こうして死ぬこともできずに、永遠を彷徨っている。……こんな自分を、あの女性はいつまで追いかけるつもりなのか。そこに意味はなく、どこにも価値はないというのに。

「これで『縁』はできた。次はそっちに逃げさせてもらうぜ、藤丸立香。……案外、俺を知らなくて俺の知らないゼパルやゲーティアにも会えるかもしれないな」

ともすれば、抑止力の呼びかけを受ける可能性もある。

天龍を騙りながらも堕ちることも至ることもできない自分は、果たしてどこに行くのか。少なくとも、ここが終わりではないことだけは確かだが。

「流石に、あっちまではついてこれないよな？　アーシア」

そう言って、『兵藤一誠』は次のどこかに飛んだ。

そこもまた予想だにしていないような場所だったのだが、さて、彼はどこに着いたでしょう？

■

「ま、ぶっちゃけな、ヨーロッパ圏は絶対に無しだった。それらの植民地だったアメリカやアフリカもなしだ。だってどうやったって曹操の名前より聖槍の方が有名だからな。むしろ聖槍に知名度で勝てる武器なんてほとんど存在しないだろう。世界最大の宗教の最も重要な武器の一つだぞ。そんな槍を持って曹操の子孫ですなんて言っても、印象としては『聖槍を持っているなんとかって東洋人』で終わってしまう」

「それは悲惨だね」

「かと言って、中国圏も無しだ。さっきも言ったが、中国圏って意外と曹操の知名度低いんだよ。いや、そりゃ地元なら有名だろうさ。だけどな、曹操の知名度が高いってことは他の三国志の武将の知名度も高いってことなんだよな」

「そうなると何か困ったことでもあるのかな？」

「大ありだ。相手側が期待しちゃうだろ、劉備や関羽が出てくるのを」

「そうでしょうか？」

「いいや、期待する。俺なら絶対期待する。例えば、第四特異点でもモードレッドと黒い槍の騎士王殿の戦い、胸熱展開だっただろう？特異点には時代も地域も関係ない英霊だって召喚されたが、やっぱり本場の英霊がいた方が『これだ！』感がある。……まあ、俺だってね、探したよ？　呂布や華佗の子孫か転生体がいないものか。でも見つからなかった。西洋圏の英雄ばっかり集まって、尚更ヨーロッパデビューを敬遠するようになった」

「吾、ちょっと分かるぞ。鬼救阿が猿、犬、雉を従えていたら少し……いや、やはり鬼救阿はどのようにあっても良いものだな」

「そもそもな、何で中国の英雄の末裔の俺に聖書最高位の槍を与えるかな。誰にどんな神器が行くかはランダムだと言ってもな、だったら中国神話由来の神器をくれよ！　まあ、中国由来の神滅具ってないんだけどな！」

「ないんだ」

「絶霧が桃源郷や蜃気楼っぽいと言えばそれっぽいけど、霧や靄の先に別世界が広がっていたなんて御伽噺は世界各地にあるからな。個人的にはピンキリにも程があると思うぞ。獅子王の戦斧とかまあまあ意味不明だからな。あれはネメアの獅子の魂が利用されているんだが、初代ヘラクレスが倒した個体じゃないらしいんだよな」
「？　??　???　はい？」
「マシュ、そんな宇宙猫みたいな顔をしないでくれ」
「すみません。いえ、この世界においてヒュドラやケルベロス、ミノタウロスが個体ではなく種族の名前であることは理解しているんです。だからネメアの獅子が複数体いることに違和感はないんです。ですが、その、『初代ヘラクレスに倒されたネメアの獅子』はいるのですよね？　どうして聖書の神は、わざわざ別個体を神器に封印したんでしょうか？」
「知らん」
「ちなみに日本由来の神滅具はないんですか？　この世界の新選組も私たちと同じような結末だったようですから所持者はいなかったでしょうが、ノッブたちの方――戦国武将ならいそうな気がします」
「確か、『黒刃の狗神』に封印されているのが天之尾羽張だったはずだ。原初の狼男リュカオンと共に封印しているせいで神性がなくなっているらしいが」
「はい？」
「だからそんな顔しないでくれ」
と、そんな風に会話する××であったが現在、彼は宙づりだった。しめ縄で縛られてマンガみたいに吊るされていた。縄の先は巨人のようなドラゴン、『大罪の暴龍』グレンデルが握っている。無論、この世界線のグレンデルではなく××の棺桶から召喚されたグレンデルである。
何故こんな状態になっているかと言えば、恐怖に打ち震える××の隙をついてアジ・ダハーカが棺桶に魔力を流し込み、聖杯を強制発動させた。そして、道連れまたは囮用の餌としてグレンデルを召喚。だが、相手はアーシア。「おや、グレンデルさん、お久しぶりですね。患

者を確保してください」の言葉によりそれに従った。自分だけ逃げるつもりだったアジ・ダハーカもその言葉に従った。

そんな様子を、曹操以外の英雄派は死んだ魚のような目で眺めていた。肝心の曹操は背中を向けていた。つまり、物理的にも精神的にも目を逸らしていた。

「なあ、曹操」

「言うな」

「ねえ、リーダー」

「だから言うな」

「……じゃあ、今回はもう帰ろうか」

「そうしよう」

そして、××のことを一瞥することもなくその場から足早に立ち去る。結界空間であるため、ゲオルグが脱出用の魔法を使えばいいだけなので曹操が歩く必要性は全くないのだが、あの男から少しでも遠く離れておきたいのだろう。

そして、それを察した××は曹操に向けて叫ぶ。

「おい、この未熟者にも失敗作にもさえなれなかった大バカ者！　悪いことは言わないから、おまえの禁手は色々と改良しておけ。恥をかくことになる！」

「特異点でも使う度に……」

「やめてマスター、忘れてくれ！」

割と本気の忠告だったのだが、曹操は無視した。オリジナルの禁手、『極夜なる天輪聖王の輝廻槍』が恥ずかしいわけがないからだ。

なお、『極夜なる天輪聖王の輝廻槍』と言えば、とある世界線ではこんな会話があった。

『――さて、曹操。聖書の神の遺志が封印されている槍を取り出した気分はどうだ？　槍と一緒に自信もなくなったなら神殿に引きこもることを許すぞ』

『思ったよりすっきりしているよ、ゲーティア。心配無用だ』

『それは何より。我々（わたし）も使える駒が大いに越したことはない』

『当然だ。何なら貴方たちより活躍してやるさ、と言いたいところだ

が、流石に無手じゃな。代わりの槍を用意してくれると助かるんだが？』

『構わん。どのような槍が……いや、聖槍に近い性能にした方が馴染むのも早いか。……ところで、おまえの聖槍は禁手に至っていたそうだが、どのような能力なんだ？』

『え？　聖槍、聖杯や聖十字架と改造してたんだよな？　何で知らないんだよ』

『これまで我々（わたし）にとってアレは武器というより楔であったためからな。正直なところ、興味がなかった』

『そうか。だったら説明するからよく聞いてくれ。我が禁手の名は『極夜なる天輪聖王の輝廻槍』。発動と同時に出てくる七個の球体に違う異能が込められている。まず輪宝（チャッカラタナ）だが――（中略）というわけだ。どうかな？　出来ればある程度は再現してくれたら助かる。まあ、作るのは魔神だ。貴方たちの好きにしてもらって構わないが。こっちはそれを使いこなしてみせる』

『……』

『……』

『……』

『何だ、その沈黙は。皆して黙らないでくれ』

『曹操の担当はバアルだったな。何だ、貴様！　この体たらくは！』

『体たらく!?』

『すまない。全ては私のミスだ。どのような処分も甘んじて受けよう』

『な、何だよ。俺の極夜なる天輪聖王の輝廻槍に何か問題でもあるのか？』

『曹操。それは本気で言っているのか？』

『何だ？　この微妙な能力のオンパレードは。これが切り札とかふざけているのか？』

『そこまで言うか!?』

『これより魔神七十二柱がおまえの禁手の問題点を指摘していく。有り難く聞くように』

『まず輪宝（チャッカラタナ）だが、相当な手練れでないと対抗できないとは何だ？　相当な手練れとは具体的にどのレベルを差す？　一口に達人と言っても幅広いぞ』
『もしや防がれた時の言い訳か？　この技を防ぐとはおまえ相当な手練れだな、とでも言うつもりだったのか？　定規にでもなる気か』
『自分でもわかっているなら能力を被らせるな。おまえの脳みそには攻撃しか選択肢が詰まっていないのか？　さては脳筋だな』
『球体なんて安定感のないものを足場に宙に浮くな。足を滑らせるぞ』
『人型の分身？　どうせおまえの技量が反映されないならスライムのような自由度の高い形にしろ』
『七つも能力があって属性攻撃がないのは得意分野がないと言っているも同然だぞ』
『強力には違いないが能力一つ一つで完結している。連携性がない。今風に言えばコンボが組めない』
『加えて言うなら、仲間との連携を頭に入れていないな。惑わすために見た目は統一しているのだろうが、それは仲間からも分からないわけだからな。集団戦では邪魔だな』
『分かるか？　おまえの無駄に名前の長い禁手には、おまえが英雄になれなかった理由全てが詰まっている！』
『ぐふッ！』
『メーデー！　アーシアやナイチンゲール先生を呼んでくれ！』
『え、おい、やめろ！　大丈夫だから呼ぶな』
『ゲーティア、もうちょっと手加減してやってくれ。理解してくれているとは思うけど、うちのリーダー面倒くさい奴なんだ』
『ああ。だが、問題点を理解させないと頓珍漢な性能の槍を要求してきそうでな。我々（わたし）も最高峰の魔術式としてそんな物を作るわけにはいかないと言うかな……』
『最後に女宝（イッティラタナ）だが――』
『黙れゼパル！』
『おまえには人の心がわからないのか！』

『トラウマを刺激してやるな！』
『は？　トラウマ？』
『案ずるな、曹操。そこのゼパル以外は全員わかっている』
『おまえには女性に重度のトラウマがあるのだろう？』
『そうでなければ女人の能力を封印する能力など考えないだろう』
『女宝（イッティラタナ）のそもそもの意味を考えても分かることだ。美貌と芳香を持つ従順かつ貞節な王妃。おまえの能力とは全く違う。逆と言ってもいい』
『何があったかは敢えて聞かないし調べない。だからおまえも早く忘れるといい』
『まさか女にトラウマがないのにこんな能力にしたわけじゃあるまい』
『もしそうならただのやばい奴じゃないか』
『……何だよ。そこまでぼろくそに言わなくてもいいじゃないか。謝れ、謝れよ！』
『どうして我々（わたし）がおまえに謝罪する必要がある？』
『いいから謝れよ！』
『すまん』
『本当に謝らないでくれ！　惨めになるだろう！』
『おまえ、我々（わたし）にどうして欲しいんだ！　我々は、私は一体どうすればいいんだ。何が正解なんだ。頼むなら誰か教えてくれ……！』
『やはり、人間は難しい……』
　もっとも、×もこの世界線の曹操も知ることのない話である。知ったところで価値はないだろう。何らかの意味は生じるかもしれないが。
「おい、駄龍。そろそろ俺を開放しろ」
『はあ？　何で俺たちが姫さんの言いつけを破らないといけないんですかー？』
　煽るような物言いのグレンデル。龍の表情の変化は人間と違うはずだが、彼の目に愚弄の色が濃く出現しているのはこの場にいる誰もに理解できた。滅茶苦茶いい顔でおちょくっていた。

「あれは俺たちの世界線のアーシアじゃないんですけど！」
　それを聞いてグレンデルの態度が一転する。
『知ってるわ！　聞き返すようだけど、おまえだって知ってんだろ！　俺たちがああなった姫さんには逆らえないってことをよ！』
「知っている！　だからこそ今こそその呪縛を破る時だって言っているんだ！　注射器にビビる幼児じゃあるまいし、おまえたちもその恐怖に勝ってみせろ！　恥ずかしくないのかドラゴンのくせに！」
『できるなら生前にやってるわ！　いや、一度滅んで復活させられて棺桶に封印されて宝具の一部になった俺たちにとって生前っていつなのか微妙なところなんだけどな』
「まあ、それは分かる」
『あと、何だ。分かっちゃいたけど、成長したら姫さんは美人になるんだな』
「それも分かる」
『けど怖い。なんか、婦長の姐さんにより近くなってねえか、あれ』
「同意しかない。というわけで、マスター。早く逃げないか？」
「あれを置いて帰るのはちょっと……」
　困り顔の藤丸立香の視線の先には、針治療のようにメスを刺され続けているアンドロマリウスの姿があった。
「――これで両患者の治療が終了しました。お疲れ様です」
　アンドロマリウスから感じられる暴力的なまでの魔力が急激に薄れていく。
「ああ、我はここまでだ。我はここで終わる。だが、藤丸立香よ。我らが怨敵。我らが憎悪。我らが運命よ。時間神殿より逃亡した魔神は我だけではない。我以外にも三柱――オリアス、オセ、ダンタリオンが逃亡を選んだ。奴らがどのような命題を抱いたかはわからぬが……いずれ、おまえの前に現れるだろう。それが我々とおまえの宿業なのだからな、ギャハハハハハ！」
　まさか、異世界に逃げ延びたというのに出くわすとは思わなかったが。それだけ強い縁が結ばれてしまったということだろう。
「ギャハハ、ハハハ、は……」

魔神の哄笑は止まり、歪な龍王の姿は元の少年へと戻る。
魔神アンドロマリウスはここに消えた。彼の身体に刺さっていたメスは急激な変化によって抜け落ちている。
「匙！」
兵藤一誠は地面に倒れた匙元士郎に駆け寄る。
「おい、しっかりしろ、匙！」
「お静かに」
意識のない元士郎に触れようとした一誠を、女医アーシアは左手のひらを前に出す形で制する。そして、空いている右手で元士郎の身体の状態を確認する。
「……脈、呼吸ともに問題なし。しかし意識が回復するまでは安心はできませんね。どこか安静にできる場所は近くにないでしょうか？」
「そ、それよりも、教えてくれよ。あんた誰なんだ！」
「アーシア・アルジェントと申します。先ほども言いましたが、女医です」
「……はい？」
その名前を聞いて、一誠は呆けた。
そして、その会話が聞こえた全員が「え？」という顔をした。そして、ある少女へと視線が集まる。
「……え？　あの、×××さん？　もしかして……」
マシュから微妙な表情を向けられ、×××は引きつった表情を返す。
「お察しの通り、あそこの少女の平行世界の同位体があの女医だ。ふっ、冗談みたいな話だろう？　チワワがケルベロスになったんだぞ。と言っても、俺は先生に出会った後のアーシアしか知らないんだが。こっちのアーシアを見て、『あー、生来の性格はこんな感じなんだー』って感心したくらいだ」
何とも形容しがたい表情を浮かべる×××。だが、立香は自分も同じような顔をしているのだと理解できた。何故なら隣のマシュや他のサーヴァントたちも似たような顔をしているからだ。
「婦長がすごいのか、素質があったのか……」
「どっちもじゃないかなー……」

どこか捨て鉢な態度のカルデアを置いて、悪魔と女医の会話は進む。
「えっと、同姓同名――？」
「では、次は貴方たちの番ですね。大丈夫。すぐにその病気を治します」
「びょ、病気って何のことだよ。さっきも言っていたけど、俺たちは別に悪いとこなんて……」
「悪魔に転生したでしょう？　それは立派な病気です」
構えられたメスを見て後ずさる一誠。悪魔に転生し最強のドラゴンの力を持つ自分が、あんな小さな刃物の何に恐怖しているのか一誠自身にも分からなかった。まして相手は女性で、純粋な人間のようだ。自分を騙し殺したレイナーレでもないのに、どうしてこんなに恐怖してしまうのか。
「便宜的に光アレルギーと呼んでいます。人間だった頃には問題なかったものがダメになる、というのは立派な病気だと思われますが？」
「あ、悪魔になることは悪いことばかりじゃない！」
「悪いものは悪いのです。価値観の押し付けは悪と言いますが、正義とは価値観の押し付けに他なりません。正しいことは、力ずくで主張するしかないのです」
だから治します、と、〝この〟アーシア・アルジェントは繰り返す。
「ま、待ってください、イッセーさんは――」
「麻酔！」
「ひう！　きゅう……」
言葉にするべきではないほどひどいことが起きた。
「アーシアァあああ！」
「麻酔その二！」
「ぐはっ！」
人は何故、過ちを繰り返すのだろうか。もっとも、彼らは人間ではなく悪魔なのだが。
「では治療を開始します――ちっ！」

気絶……もとい昏睡状態になった一誠たちの治療を開始しようと新しいメスを取り出したが、その場から飛びのく。
何事かと思えば、次の瞬間には鮮血が舞った。
しかし血は女医のものではない。先程まで女医がいた場所に、複数の動物が混ざったような魔獣が血を流して転がっていた。
「え？　いま、何があったの？」
「マスター。おそらくですが、あの魔獣があちらの女性を攻撃するために魔術的な転移をしたのかと思われます。しかし女性は転移を察知、回避と同時にメスで切りつけたのではないかと」
「立香殿、マシュ殿。あれは鵺じゃ。しかし京都のものではないようじゃが……」
「あの人間、やるではないか。一瞬で避けて一撃で仕留めるとは」
周囲を見れば鵺は一体だけではない。いつからか、鵺だけではなく様々な妖怪がいた。まるで、百鬼夜行。その百鬼夜行の中心に、浅葱の羽織を着た剣士がいた。
その剣士を見て、特にセイバー沖田総司の顔が強張る。それは浅葱の羽織を見たからか。異形の気配を察したからか。それとも、羽織など関係なく、その剣士の正体を本能的に看破したからか。
「どなたでしょう？」
女医の問いに、剣士は抜刀して答える。
「サーゼクス・ルシファーの『騎士』、沖田総司」
「理解しました。新しい患者ですね？」

番外編　深い考察は無粋だよ

あれから随分と永い時間が経過したように思う。

「……」

だが、計測してみれば実際は十年も経っていない。正確には八年と四十一日だ。

聖書の神による統括局ゲーティアとソロモン七十二柱の復活。聖書推敲の開始。オーフィスや英雄派との邂逅。冥界焼却、この世界のソロモンとの激闘、天界零落と真理崩壊。そして、同胞五十六柱の殉職と統括局二度目の崩御。生き残った十六柱の内、四柱があの世界『F』への帰還を選択し、残りの九柱がこの世界『D』へ残ることを決断した。

実に目まぐるしい日は、たった半年だった。三千年に匹敵するほどの日々だった。あれから自分――魔神ゼパルは特に何をするでもなく、この時間神殿が存在していた座標に引きこもっている。

「……」

ここには、もう何もない。

自分たちの統合体である統括局ゲーティアは無く、同胞たるソロモン七十二柱もいない。あの天界での戦いを生き延びながら、この座標に帰ってくる魔神はいなかった。時折、ふらりと戻ってくることはあるが、少しだけの会話ですぐに出ていく。自分の居場所に戻っていく。

時間神殿は完全に消滅し、かろうじて足場に使えるデブリが虚空を舞っている。いまは空っぽの玉座に座っていたオーフィスも五年ほど前に旅立った。聖書の神の遺志ごと封印した聖槍も、すでにない。

「……」

故に、ゼパルはただそこに存在するだけの存在として、ここにいる。彼がしていることと言えば、観測だけだ。ただ一匹の龍の行く末を見守っているだけだ。見ているだけだ。他にするべきこともしたいこともできることもない。

最後の赤龍帝の人生は見ていて面白いものであるが、驚きを感じる

こともなくなった。
　刺激も感動も驚愕もない。新鮮さなどとっくの昔に忘れてしまった。
「……クロケルか」
　だから、久しぶりの同胞との再会には歓びがあった。反射的に「帰還」ではなく「来訪」だと認識してしまったとしても。
「随分とみすぼらしくなったな、ゼパなんとか」
　お決まりの揶揄があったとしても。
「出会いがしらに懐かしいボケをするんじゃない！　……まさか本気で忘れたとか言わないよな？」
「忘れるわけがないだろう、ゼペっなんとかが！」
「それは忘れてもいいんじゃないだろうか!?」
　最後にちゃんと名前を呼ばれたのはいつだったかなー、と気を遠くするゼパル。この座標への来客はひとりの例外を除けば知古であったが、全員このノリなのだ。
「それで、何の用事だ？」
　魔神クロケル。天界での戦闘で死にぞこない、異世界跳躍にも参加せず、この世界への残留を選択した九柱の一柱。天界での戦闘では同じ生命院を構成する八柱と合体し、天使の軍勢と戦った。戦後、ボロボロの霊基を維持するために、死闘を繰り広げたはずの天使たちと融合した。まさしく死に損ない、生き残ってしまった魔神。
　こうして面と向かうのは、異世界跳躍を選択した四柱を見送る時以来だ。
「伝達と確認、問答に来た」
「何？」
「まず伝達だが、グレモリーとラウムが消滅したぞ」
　あっけらかんと、クロケルは言う。
「そうか」
　対して、ゼパルの反応も淡白なものだった。淡白というか、希薄というか。あるいは、薄情と言うべきか。
「グレモリーは悪魔の残党と引き分けた。何と言ったか、……ああ、そ

うだ。サーゼクス・ルシファーの妹の眷属だったかな。兵藤一誠の元同輩だ」

「意外な結末だな。意外、以上の感想はないが」

「ラウムは――貴様が聖槍を託した人間に倒された」

そこに、糾弾の声音はなかった。

「――そうか」

ゼパルにも後悔や憤怒、罪悪感の反応は見られない。仕方がないことだ。自分たちは違う道を選び、袂を分けたのだ。それに、槍を託す時、そうなる予感はしていた。

あれは三年ほど前の話だ。

この座標に、ひとりの人間が辿り着いた。その少年はゼパルに『槍』を求めた。別段、渡す相手にこだわりがなかったゼパルはそのままその少年に『槍』を託すことにした。

最初にこの座標に辿り着いた『人間』に渡すと決めていた。

「確認なのだが、あの少年は平行宇宙で救世主になった少年とは≪≪別人≫≫だな？」

「無論。平行宇宙にて英霊となった曹操の後継者たる救世主とは、別個体の人間だ。年齢は近く、性別は同じだが、共通点はそれだけだ。生まれも育ちも違う。人種も国家も性質もな。……まぁ、我々は誰かと比較できるほどその救世主のことを知らないのだが」

「それもそうだがな」

一応、クロケルはこの宇宙における救世主の同位体は発見している。発見し、観察したが……特記すべきことなど何もない。この時代、その地域、その民族における一般を逸脱しない人間だった。あれが環境次第で神殺しの救世主となるのだから、人間とは面白いものだ。

同時に、恐ろしくもある。

聖槍でラウムを滅ぼした人間もまた、そういう類の人物だったからだ。

「ところで、ゼパなんとか」

「何？　おまえたち、私をそう呼ばないと消滅する病気なの？」

「恐ろしいことを言うんじゃない！　アーシアが聞いたらどうする!?」
「いまのそれ、割った壺を隠す悪戯小僧と同じレベルの発想だからな？　されるかもしれない治療より、病気であることを恐れるべきだろうに」
　もっとも、あのアーシアなら現在、この宇宙にはいないのだが。
……杞憂と笑うには、かつて少女であった女医は恐ろしいのだが。
「おまえはこの座標の外――、この『D』の世界で何がどうなっているかをどの程度把握している？」
「ラウムの愛し子――もう忘れ形見と言うべきか――であるミシャンドラが完成し、世界中の神魔を相手に暴れているというのは知っている。かつての禍の団のような真似をしているとか」
「その情報は古いな。……いや古すぎだぞ。何だ、貴様。三年前ほどで知識が止まっているではないか。ネットニュースも見ない引きこもりか。情報はこまめに更新しないとダメだろうが。魔神でありながら！」
「仕方がないではないか、今更自分から外には出られないのだ。しかし訪れてくる者はいない。どうやって情報を集めろと言うのだ。やろうと思えば視点を外に向けることもできるが、ぶっちゃけ面倒くさいなーって」
「おまえ、本当いい加減にしろよ……。悪い意味で人間らしくなっているではないか」
　やっぱりこいつはゼパなんとかで十分だな、後でナベリウスやアンドラスにも伝えておこうと考えるクロケル。
「……本題とはあまり関係ないが、一応、伝えておこう。我等の宇宙『F』の廃棄された可能性――異聞帯の残滓を、この世界の抑止力の末端どもが呼び出した。二つほど、だが」
「成程。抑止力の目的は、この惑星の強制的な進化との見解があったが」
「是である。最古の悪魔の残党、メフィスト・フェレスが抑止力の手先だったのだ。三つ巴の大戦の黒幕がサマエルならば、更に根深い神話

の黒幕がメフィストだった。そして、何故そこまでして星の力を底上げしなければならなかったかと言えば――」

「――『E』に対する備え、か？」

「ご明察だ」

例えば、すぐ隣の国に強力な兵器があったとする。当然、その兵器に対する備えをするのは国としての義務だ。ましてその隣国に敵対の意志があれば尚更。

……あくまで、統括局ゲーティアが健在だった頃に出した仮想の計算結果ではあるが、「E×E」にはオーフィスやトライヘキサを凌駕する悪神の存在が示唆された。仮に、この仮想が現実であり、その現実を星の意志が知っていたとするならば。

手段を選ぶ余裕などなかったかもしれない。あれだけ時間をかけて成長したトライヘキサで、ようやく無限や夢幻の領域なのだ。メフィストにとっては、黙示録の獣でさえ期待外れの弱さだった。

「……脱線したな。このまま時間神殿から出るつもりはない貴様には関係のないことか。この座標より離脱した後、メフィストの死の影響についてミルたんらと協議するとしよう」

「ああ。私には興味がないな。勝手に在って、自由に滅ぶ。私は、もう燃え尽きたのだ。兵藤一誠と繋がったか細い縁を使って、彼の観測は続けるつもりだが、これも半分惰性のようなものだ」

「落ちぶれたな」

「否定はしない。肯定しかできない。……ナベリウスやアスタロスは精力的に活動しているそうだが、私には真似できないな。心底から尊敬するよ」

そして、本題に入る。正確には、本題のための導入だが。

「異聞帯との騒動がひと段落する少し前、つまりつい先日のことだ。ラウムの作品であるミシャンドラだが、倒された」

「ミシャンドラが？」

魔神ミシャンドラ。ラウムが目指した、新たな理想の形。人の為にある神で、人と共に歩ける魔王で、人と同じ景色が見える魔神。具体的にどのような材料と手段で生まれたかは不明だが、第二の人王とも

言うべき存在だと思っていただけに、少しだけ驚きを覚える。
「そうか。やはり『槍』の彼が？」
「ああ。曹操も驚いていたぞ」
曹操。かつて禍の団・英雄派を率いた青年。現在何をしているかは知らないが、どうやら息災のようだ。
かつて自分が使用していた聖槍が、別の誰かの手に渡り、魔神を倒したとあっては思うところがあるだろう。それがどんな感情かは、彼自身と彼に近しいものが知っていれば良いことだ。もしも槍を渡したことに恨み言があるのならば、是非言いに来て欲しい。
「問題は、否。私にとっての疑問点は、その彼――仮に『魔神殺し』と呼称しよう――が、ミシャンドラを殺さなかったことだ」
「話が読めないな」
「だからおまえはゼパルなのだ」
「謝れ。私と、異世界に数多に存在するであろう全ゼパルに謝れ」
「……魔神殺しは、ミシャンドラを倒すために、槍を手に入れたはずだ。そのはずだろう？　だが、何故殺さなかった？　彼は、槍の他にも様々な力を求めた。節操なく、制限なく、手段を選ばず、手順を選ばず、努力を惜しまず、才能を絞り出し、力を求めたのだ」
結果として、英雄が出来上がった。おそらくは、ゲーティアに出会う前の曹操が思い描いていたであろう完璧にして最強の戦士が生まれた。
「そこまでして力を求めたのは、ミシャンドラを倒すためだった。あの言葉に偽りはなかった」
しかし。なのに。だが。
「彼は、ミシャンドラに、『生きてくれ』と言った。ミシャンドラは敗北と同時に、自死を選択したというのに。敗北した以上、ミシャンドラはラウムに背負わされた人類の主導を果たせない。必然の選択だ。だが、魔神殺しはそれを拒否した。否定した。何故だ？　殺したかったのではなかったのか？　殺すための力ではなかったのか？　ミシャンドラを人の王にしたくないと言い続けていた理由は、嫌悪や憎悪ではなかったのか？　そして――ミシャンドラは何故、魔神殺しの

願いを受け入れた?」
　分からない。分からない。分からない。
「否、否、否、ラウムでさえ死の間際にこう言った。こんな遺言を残した。『これで良いのだ』と。ミシャンドラはおまえの理想を果たせなくなると、あの段階で気付いたはずだ。おまえの消滅は、おまえの理想の断絶を意味すると予想したはずだ。だが、ラウムは後悔なく死んだ。失敗したというのに、中断を強制されたというのに、それを受け入れた。まるで、何かを成し遂げたかのように、晴れやかに」
　理解できない。共感できない。納得できない。
「元英雄派の構成員に聞いた。『ないわー』と引かれた。愚鈍な神魔にも尋ねた。『それはそうなるな』と勝手に納得しやがった。異聞帯の来訪者に聞いた。『まあ！　それはきっと素敵なことよ！』とはぐらかされた」
　誰も彼もが、おまえ自身で考えろと告げてきた。
　微妙な引っ掛かりを覚えながら思考するが、やはり答えには辿り着けない。
「クロケルよ。おまえは間違っている。その疑問は正しい。だが、その疑問に対する方程式が根本的に間違っている。着眼点が、まず違うのだ」
「馬鹿な。ゼパなんとかに分かって、何故私に分からない！」
「感情的になってもそう呼ぶのやめない？　本気なのかふざけているのか分からなくなるから」
　と言っても、ゼパルは最初から解答を件の少年から教えてもらったため、分からないも何もないのだが。
「そも、あの少年の動機を考えれば全く意味合いが違うのだよ。魔神殺しが最新の魔神を倒したかった理由は、負の感情に由来しない」
「動機?」
「何、簡単なことだ。これは、ラウムのミスと言うべきかな」
　しかしながら、ラウムが愚かだったかと言えばそれは違う。必然的に発生してしまった問題とも言える。否、本来であれば問題ですらないはずなのだ。

魔神殺しと最新の魔神が出会わなければ。
ミス云々の話をするならば、ミシャンドラを創造した理由が間違っていたとも言える。間違っていたと言うか、運が悪かったと言うか。
否、この場合は、運命が良かったと言うべきかもしれない。それこそが、彼らの運命(fate)。ソロモン七十二柱が紡いだ、物語の結末のひとつ。
「彼はな――」
『それ』は、『F』において数多の運命を狂わせた。

「――ミシャンドラに一目惚れをしたのさ」
結局のところ、すべての物語のテーマは愛なのだ。

番外編　逆光

私の認識は、ずっと暗い闇の中にあった。
暗い。暗い。暗い。
何もない。何もない。何もない。
光も、音も、匂いも、感情も、ない。閉じた世界。終わった時間。
真っ暗な景色。
……いえ、終わったのは世界などではなく、私のはずでした。私は死んだはずでした。
だから、「何もない」と認識することさえ間違いなのです。
そんな私の意識が、急に引き上げられました。
光と同時に、私の中に『それ』は流れ込んできました。
温かいものでした。眩しいものでした。優しいものでした。美しいものでした。
ああ、なんて――なんて。
なんて、羨ましい。

■

突拍子もない話だが、人類は一度滅んだ。
真犯人はグランドキャスター、魔術王ソロモン――の、使い魔であったソロモン七十二柱、もしくはその統合体であるゲ―ティア。人類悪、憐憫の獣、ビーストⅠ。彼らあるいは彼は、あらゆる生命の価値を否定し、三千年の歴史を薪に、星の再構築という大偉業を目論んだ。
だが、その目論見は破綻した。
人理継続保障機関フィニス・カルデアによって、人理はその時間を取り戻した。死を否定しようとした獣は、生を諦めぬ人の手によって打倒されたのだ。ひとりの未帰還者はいたものの、人理修復は完遂された。

しかし、時の刻みを取り戻した世界の激動に巻き込まれて、勝利の宴を上げる暇もなかった。最高責任者であるオルガマリーがグランドオーダー開始前にレフ・ライノールのテロによって死亡したことも大きい。彼女亡きカルデアで、まとめ役をやっていたロマニ・アーキマンもだ。最後のマスターとして現地で激闘を繰り返したマスターやサーヴァント、そのほかのカルデアスタッフ全員が、息を落ち着ける余裕もない日々を続けていた。

そんな最中、突如として新たな特異点の反応が発見された。問題点は三つ。その特異点に消滅したはずの魔神柱の反応が観測されたこと。そして、この特異点の人理への影響はあの七つの特異点に匹敵するということだ。そして、最後にして最大の問題点が、この特異点の座標が不明であることだ。

所長代理の立場にあるレオナルド・ダ・ヴィンチはこの特異点へのレイシフト実行を決断。かつて『人類最後』を背負っていたマスターもそれに同意した。

彼らが到着した場所はオフィス街のような光景が広がっていた。人の気配は皆無であったが。だが、右を見れば、遠くに巨大な古代遺跡が見えた。逆に左を見れば、漆黒の大樹が見える。空を見上げれば、星もない夜空が広がっている。

カルデアと通信を取ろうとする彼らの前に、人影が躍り出た。

「おや、ここに飛ばされてくるとは。バアルやリゼヴィム様が来るまで相手を……なんと！」

形は銀髪の青年に見える。だが、その隠そうもしないオーラから、人間ではないことは明らかだった。

彼は何故か、サーヴァントを凝視する。

「突然ですが、そこの銀髪のお嬢さん――私の姉になっていただけませんか?!」

「……」

「……」

予想外すぎる提案に思わず数瞬呆けてしまった人類最後のマスターのひとり、カドック・ゼムルプスとそのファーストサーヴァント、

キャスター、アナスタシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァ。
「……令呪を以って命ずる！　アナスタシア、宝具を解放せよ！」
「ヴィイ、お願い。全てを呪い殺し、奪い殺し、凍り殺しなさい。魔眼起動――疾走せよ、ヴィイ！」
疾走・精霊眼球（ヴィイ・ヴィイ・ヴィイ）。
アナスタシアと契約したロマノフ帝国の秘蔵精霊ヴィイ。その魔眼の全力解放。全てを見透かす眼球は、因果律すらもねじ曲げて弱点を創出する。
「ぎゃあああ!!　な、なぜえええ！」
ロシアの猛吹雪が謎の変態に襲いかかった。
「……思わずやっちゃったけど、良かったのか？」
「大丈夫よ。きっと」
『やっと連絡が繋がった！　大丈夫かい、カドックくん。何だか様子がおかしいけど』
ダヴィンチから通信が回復したカドックは、苦虫をつぶしたような顔をして報告する。
「ああ。変態がいた」
『変態？』
「黒髭の類だよ」
『ふーん。他の皆も無事だけど、どうやら全員違う場所にレイシフトしてしまったようだ。どうも、強制的に分断させる結界的なものがあったみたいでね』
「分かった。合流が最優先ってことだな。一番近いのは――」
「ふう、死んだかと思いました」
先ほど宝具が直撃したはずの銀髪の男が何食わぬ顔で立っていた。攻撃が通じていなかったという驚愕や未知の相手に対する警戒より、先ほどの発言からくる生理的嫌悪感が勝っていた。
「……何なんだ、おまえ！」
「気持ち悪いわ……」
「今回は私に非がありますね。順を追って説明しましょう。何故、私が姉を求めるか、話すと長くなります」

「じゃあ話すな」
「そもそも興味ないわ」
　何なら聞いてすらいない。
「私の姉は優秀であり、憧れでした」
　興味ないと言われたのに、マイペースに語りだした。
「しかし、姉はある時、恋に落ちました。相手は当時敵対関係にあった派閥のエースです。しかも、突然変異体でありとても同族と考えられないバケモノでした。姉は――私の姉ではなくなった」
　その考え方はどうなんだろう？
「そこで私は考えました。どこかに、姉の代わりに私の姉になってくれるヒトもいるのではないかと！　というわけで、お嬢さん、私の姉になって戴けませんか？」
「嫌よ！　私の目の前から即刻消えてくださらない？」
「む、これで七十八人に振られたことになりますね。銀髪で美しい女性に出会ったらとりあえずお願いしているのですが一度も了承してもらえませんね。何故でしょう」
「何言ってんだ、こいつ……」
　何言ってんだ、こいつ！
「ユーグリットくーん！　いい加減学ぼうぜ！　この二千年、何回同じことやってんだい？」
「貴様は生命のくせに成長しないな」
　もう一度宝具を使うべきかと考えていると、突然の第三者の声。
　その声に対して、カドックとアナスタシアは警戒もあったが「助かった……！」という感謝もそれなりにあった。この変質者と対峙するのは精神的に参る。
　しかし、その声がした方を見ると同時に驚愕が走った。
　そこにいたのは銀髪の中年男性と、異形の怪人。
『そんな、この霊基パターンは！　ありえない！』
　こいつだけは、あり得ない！
『なぜここにいる――魔神柱！』
　ダヴィンチの声に嫌でも理解する。あの怪人の正体は、あの忌まわ

しい魔神柱であると。
「滅んだはずなのにか……!?　あの時間神殿で！」
「ん～！　そこの少年少女も遠方から見ているだけのギャラリーも盛り上がってくれて何よりだ。ま、ファーストコンタクトが目的の彼と彼女じゃないのは残念だけどさ。そこまで運命は甘くないみたいだぜ、バアル」
「ああ、そうだ。そのようだ。あの男はこの神殿にレイシフトすらしていないようだ。拍子抜けではある。しかし、ようやく辿り着けた……！」
　正体不明の銀髪の中年はどこか上機嫌なようだが、魔神の方からもどす黒い歓喜がにじみ出ていた。
　歓喜？　いや、違う。そこにあるのは、世界を滅ぼすほどの憎悪と憤怒。
『その魔神の隣にいる男、反応がデータにないタイプだ！　魔神柱でもない、ティアマトの眷属とも違う。一番近いパターンはデーモンだけど、やっぱり異なっている。一体、何なんだ？』
　銀髪の男は意味深な笑みを浮かべ、役者じみた動作で両手を広げた。
「はじめまして、カルデアの諸君。俺――いや、私――あぁと、やっぱり俺でいいか、うん。俺はリゼヴィム・リヴァン・ルシファー。ここは次元も座標も大きく異なる世界『D』からやってきた魔王だ」
「……異なる世界？」
「そ、異世界。まあ、突拍子もない話ではあると思うが事実だ。データを観測しているっていう、カルデアの皆さまにゃぁ納得できるんじゃないかな？」
『……確かに、色々と〝有り得ない情報〟が観測されている。成程。意味不明なのは当たり前か。所謂ダークマター、観測されたことのないデータなんだから』
「まあ、そういうことだ。ちなみに、世界ってのは、ここと俺の世界だけじゃない。色んな世界があったよ？」
　銀髪の中年――リゼヴィム・リヴァン・ルシファーは懐からリンゴ

を取り出した。
「そこの少年はピンときてないようだから、分かり易く教えよう。ひとつの宇宙観の、ひとつの世界線の、ひとつの時間軸の、ひとつの惑星をリンゴだとすると、あらゆる宇宙観をまとめたステージってのはデカい果樹園なわけだ」
「果樹園」
「で、俺たちは今日の今日まで、目的のリンゴどころかリンゴ畑にすら辿り着けなかったわけだ」
「リンゴ畑」
「まあ、あくまで例えだから本気で考えなくていいよ。機械生物と精霊が戦っている世界や狂気の邪神が跋扈する世界……まあ、後は色々。神秘も真理もない世界もあれば、神代で時間が止まっているような世界もあったっけな」
一口に「魔術のある世界」と言っても、その在り方は様々だった。世界の裏側にごく一部の魔術師がいるような世界があれば、魔法が一般人に常識として認知されている世界もあった。科学と魔法が混在している世界がある一方で、魔術が完全に科学と置換されているような世界もある。
素質があればどの種族にも魔術が使える世界があれば、逆に人間にしか魔法が使えない世界もあった。
「俺が知る限り、というか見てきた限り、俺たちの世界やこの世界も合わせて二十六個の世界……。アルファベット表記で区別したから、これ以上寄り道していたらどうしようかと思ってたんだよ。まあ、順当に考えたら普通に数字でナンバリングかな？　ようやくお目当ての世界に辿り着けてオジサンもテンションあがるあがる！」
うひゃひゃひゃと大げさに笑う魔王に対して、隣の魔神は静かだ。
「それで、隣の魔神は何だよ。あんたが、復活させたのか？」
「んー、そのあたりの諸事情は長くなるから割愛するよ。とにかく、この世界で消滅したソロモン七十二柱は、オジサンの世界で復活した。それでまあ、バアルを含めた四柱はこの世界に戻ることを決めた。何で四柱だけかって言えば、異世界跳躍の旅に耐えられる霊基をこの四

柱だけが持っていたからさ」
「二千年だ」
ぽつりと、だが絶対的な熱量を伴って、バアルは呟いた。
「二千年、歩み続けた。求め続けた。誓い続けた。この宇宙への帰還を。この世界への凱旋を。この時間への跳躍を。この運命への復讐を！」
本当に長かった。忌まわしい聖書の勢力を滅ぼしてから二千年。この世界に辿り着くまでの間、様々な冒険があり、日常があり、戦争があり、発見があり、事件があり、平穏があり、葛藤があった。世界を救ったこともある。世界を滅ぼしたこともある。人と手を組んだこともあれば、神を殺したこともある。
「無駄な寄り道ばかりだったが、その甲斐はあった。必要な資源と時間を手に入れたのだから。この神殿――多重理論複合神殿グランド・ガーデンには、数値的にかつての時間神殿の七倍の戦力と物量がある。すべては、我が復讐のために！」
「いや、バアル。君が好きにできるのはその四分の一だからね？……『E』を経由してなきゃ七倍どころじゃすまなかったんだけどなぁ、惜しいなぁ。無駄に強かったよね、あの邪神と善神」
「本当に――心の底から歓喜に溢れている！　ようやく、あの男に復讐ができるのだから!!」
「聞いてねー。同盟者に無視されておじさんつれー」
「……復讐、か。ふざけたこと言ってくれるじゃないか」
「まったくだわ。人理焼却のことを言っているなら、迷惑極まりない八つ当たりね」
「知っている!!」
この行為が客観的に見れば八つ当たりでしかないことは承知している。しかし、それさえも飾りなのだ。
あの忌まわしい聖書の神が存在した世界で復活し、この宇宙に辿り着くまでの二千年。決して衰えることも忘れることもなかった苦痛と熱がある。
三千年の計画の破綻ではない。英霊たちによる人理焼却の妨害で

もない。まして、忌まわしきソロモンによる指輪の返還でもない。
　完璧な計画、完全な展開を台無しにした起点がある。それこそが、人類最後のマスター。
「……憎悪。憎悪、憎悪、憎悪憎悪憎悪憎悪憎悪！　憎悪以外感じられぬ！　おまえだ、おまえが憎い、人類最後のマスター……！」
「どうやら、そのマスターってのはボクのことじゃなさそうだな」
　苦笑を浮かべるカドックに、バアルは怒りを隠そうともせずに応じる。
「ああ、そうだ。そもそも私はおまえなど知らん！　私にとって、我々にとってカルデアのマスターは藤丸立香だけだ！」
「藤丸立香……？」
「ああ、そうだ！　どこだ、どこにいる！　我が憎悪、藤丸立香はどこにいる!?　ここに奴がいないのは何故だ、奴がここに来ないことなど有り得ないだろう!?　貴様は――謎の特異点を看過できるはずがないのに！」
　バアルからの問いに、カドックは本当に困ったように、逆に質問を向けた。
「誰だよ、それ」
「――――――――――――――あぁっ？」
「おまえが憎んでいるマスターは、ヴォーダイムじゃないのか？」
　その言葉に、理解が追い付かなかった。
　この少年は間違いなくカルデアのマスターだ。そして、自分を、魔神を知っており、その言動や反応から人理焼却の真実を知っているようだった。つまり、現在の日にちが時間神殿の戦いが終わり人理が修復された後だと仮定するのが自然だ。
　ならば、何故、藤丸立香を知らない？
　藤丸立香は正規のマスターではない。本来なら補欠の予備程度の立場だった。ただひとりだけ生き残ってしまったために戦い続けたに過ぎない。故に、人理修復後に藤丸立香の立場が変わり、その影響でこの少年がマスターに繰り上がったかと思っていたのだが……。
『藤丸立香……？　どうしてその名前がここで出てくる……。いや、

何故おまえたちがその名前を口にするんだ！　レフ教授……フラウロスならともかく、他の魔神が彼の名前を記憶している価値なんてないはずだ！』

「何を、言っている？」

藤丸立香の名前を口にしただけでどうしてそこまで動揺される？　記憶する価値がないだと？　人理救済を為したマスター相手に出る言葉ではない。

まさか。まさかまさか、まさかまさかまさか！

「所長代理。話が見えてこないんだけど、そのフジマルリツカってやつは誰なんだ？」

『……。カドックくんが覚えていない……いや、知らないのも無理はないか。彼はグランドオーダー開始前のテロで死んだ、一般人枠のひとりだよ。それ以上でもそれ以下でもない。名前だけがカルデアに残されているだけの故人だ』

「――――死んで、いる、だと？　あの節穴のテロで？　あの時点で？　そんな、馬鹿な……、では、誰が、誰があの計画を止めた！　完璧な計画の崩壊を、誰が為した！」

「どうやら、我々は外れを引いてしまったようだぞ、バアル」

突然出現したのは、第二の魔神柱。

カドックとアナスタシアは身構えるが、バアル以上にこの魔神には戦意や敵意というものがなかった。

「おー、アスモダイくんじゃないか。どうしたよ。援軍って雰囲気でもないけど」

「ただの伝令だ。伝えるべきことだけ伝えた後、私も私の領域に戻る。待たせている相手もいるのでね」

淡々と、事務的に、アスモダイはバアルに神殿内の現状を伝える。

「フラウロスはキリシュタリア・ヴォーダイム、オフェリア・ファムルソローネ、ベリル・ガットと戦闘開始。グラシャ＝ラボラスは芥ヒナコ、スカンジナビア・ペペロンチーノと交戦中。気付いているだろうが、この領域にはそこのカドック・ゼムルプスの他にデイビット・ゼム・ヴォイドがレイシフトしている」

「誰だ？　そこの小僧も含めて、こいつらは誰だ？」
「……忘れたか？　本来であれば彼らが人理修復を為すマスターのＡチーム……だったと思う」
「覚えていないな。二千年の摩耗もあるが、必要のない記憶だ。それよりも、グランドオーダー開始前に藤丸立香が死亡しているようなのだが？」
「それは知っている。我々の記録ではＡチームはフラウロスがちゃんとカルデアごと爆死させたはずなのだが……」
「あの節穴野郎がしくじった時間軸に飛ばされたということか」
「そして、そこにいる少年を含めた七人が、人類史を取り戻した。そういう世界線だよ、ここは。平凡な少年にではなく、選ばれた勇者たちが人類悪を滅ぼした。そんな『本来そうなるはずだった世界』だ。もっとも、この未来は統括局の失敗と言わざるを得ない。第四特異点で何をしていたのやら」
　表情筋などない身体ではあるが、それでもバアルの裡から憤怒があふれ出ているのは誰の目にも明らかだった。
「ここまで来て……ここまで戻ってきて、失敗だと!?　目的の時間軸ではなかったと!?」
「落ち着けって、バアルくん。だいぶ近い時間軸だっての確かなんだからさ。世界レベルの跳躍はしなくていいと思おうぜ」
「ああ、そうだな、我が盟友リゼヴィム。カルデアが存在する以上、あの男が生まれた世界線で正しいはずだ！　ならば、もう一度跳躍するだけ……！」
　むしろ人理焼却が開始されなかった世界線や藤丸立香が最初から生まれていなかった時間軸に比べたら、この座標は目的の場所にかなり近いと言える。
「――――ユーグリット・ルキフグスよりも、おまえの方が変わるべきではないかな、バアル」
　呆れたような、蔑むような声音だった。
「アスモダイ？　何が言いたい？」
「二千年も世界をさまよえば自ずと見えてくる。そして、私は理解し

てしまったのだ。おまえも本当はそうだろう？　よもや二十五の世界の道中、気付けぬほど耄碌したわけではあるまい」

「黙れ」

「黙るのはおまえだ。永劫の復讐者に堕ちた、視野の狭い同胞。我々が大偉業と自称した計画は、割と普通のことだったのではないか！」

堂々と、意味不明なことを言い出した。

『は？』

『え？』

「ふ、普通？」

「そう、普通。自然。平凡。ありきたり。我々が大偉業だと思い込んでいた逆行運河・創生光年など、陳腐ですらあった！　……あ、ちなみにこの宇宙でも私たちが人理焼却を為した理由って、三千年の人類史を燃料に死のない惑星を作ろうとするってことで大丈夫？　こっちだと微妙に違ったりする？」

「あ、ああ。そうだった、けど……？」

「それは重畳。……重畳でもないな」

人間の可能性を見限り、宇宙を閉鎖した亡霊がいた。ひとりの少年と再会するために、悲劇を量産した精霊がいた。孤独と無理解にさらされたが故に、世界の支配と破壊をもたらした覇王がいた。宇宙の未来を確立させようと、有史以来少女を食い物にしていた悪魔がいた。あらゆる痛みを否定しようと、人類を夢に沈めようとした忍者がいた。全人類の敵を目指し、逆説的に正義を掲げた怪人がいた。

神がいた。魔王がいた。王がいた。人がいた。人間がいた。

何だと思った。笑ってしまった。

俺たちの抱いた願いなど、特別なことではなかったのだ。瓦解も敗北も破綻も同じだった。完成も勝利も成功も、ほんの少しだけのかけ間違いだった。

だから、アスモダイは己の生に満足してしまった。異世界跳躍を選んだ四柱の中で唯一、熱を失い、潤いを求めず、唯一、命題のためにだけ生きる怪物になった。

「……確認なんだけど、おまえたちの目的は、復讐じゃないのか？」

「そうだ。我ら四柱、この宇宙への帰還を目指した動機は異なる。共有はしていても共通はしていない。バアルは復讐、フラウロスは祝福、グラシャ＝ラボラスは再会、そしてこのアスモダイは検証だ。我らソロモン七十二柱を、統括局ゲ―ティアを倒した藤丸立香とマシュ・キリエライトの愛を知ることだ」

「愛？」

「そうだ。あのふたりの愛の在り方を知ることこそが、私の、私たちの命題なのだ」

思えばあっという間の二千年だった。だが、『D』で同志たる二柱と交わした討論は未だに記憶から色褪せることはない。

「おぞましき聖書の神との戦いにおいて、殉職を選んだベリアル。奴は、あのふたりの関係は、時間神殿での最後の戦いにおいて完成したと言った」

――私はここまでだ、我が同志アスモダイ、シトリー。

――先に逝く。

――我らの悲願、三柱で実行できなかったことだけは残念だ。

――私の代わりに、確認しておいてくれ。

――改めて言うが、

――私は、藤丸立香とマシュ・キリエライトは第七特異点までは手を握る以上のことはしていなかったと推測する。精々感極まった時に抱き締めあうくらいだ。

――しかし、時間神殿突入前に、獣のように交わったと推察しよう……！

――それまでの旅路で、色々と溜まっていたものが爆発してもおかしくないからな！

「霊基の損傷により、異世界跳躍に耐えられず、帰還を願えなかったシトリー。奴は、あのふたりの関係は、第一特異点から歪な形で出来上がり、特異点修復を通じて傷を舐めあう関係だと言った」

――我とベリアルの願い、おまえに託すぞ、アスモダイ。

――おそらく、藤丸立香はマシュ・キリエライトを第一特異点突入前後で押し倒している。

――彼だって人間なのだ。いや、普通の少年だったのだ。そういう心の支えがなかったとしたら、ぽっきり折れてしまう。

――彼女はその痛みを受け入れた。ああ、なんと献身的な。

――そして、その傷を舐め合うような関係が続いていたのだ……！

「どちらが正しいかは分からぬ。どちらも間違っているのかもしれぬ。だが、私は問わねばならぬ。この答えこそが、我ら三柱の――否！　七十二柱中五十七柱の求めた解答なのだから……！」

「ちょっと待て」

アスモダイに待ったをかけるバアル。

「五十七柱とは何だ。初耳だ。貴様と同じような阿呆な命題を掲げたのは、ベリアルとシトリーだけではなかったのか」

「命題云々とは関係なく、皆、気になっていたのだよ。消滅時あるいは異世界跳躍時に、聞くだけ聞いておいてくれと託された。ただ、おまえの復讐は真面目すぎたから水を差すのも悪いと思い、誰もがおまえに伝わらないように気を使っていたのだ」

「ならば最後まで隠しておけ！　いや、帰れ。即刻、自らの領域に帰還しろ」

「そうさせてもらおう」

ふざけた同胞が転移するのを見届けてから、バアルはカドックに告げる。

「そういうわけだ。貴様らに興味はないし敵意もない。人理を破壊する予定も、手段もない。何故フラウロスやグラシャ＝ラボラスが戦闘に入ったかは不明だが、私にそのつもりはない。この世界線から速やかに離脱する。貴様らもさっさと帰還するがいい」

もっとも、この世界線のバアルがこの少年に復讐しようとしている可能性はそれなりにあるが。

「……生憎、そういうわけにはいかないよ」

「何？」

「僕たちはカルデアで、おまえたちは魔神。だったら、戦うのは当然じゃないか」

ソロモン七十二柱序列一位、魔神バアル。

その威容に、言葉にし難い憤怒が宿る。
「不愉快な話だ。私はおまえが倒した魔神とは違う。我々はおまえが滅ぼした我々とは異なる。おまえたちのような特別で特異な男に何ができる？　我が憎悪、我が憤怒、我が屈辱を止められるというのならば、やってみるがいい……！」
言霊に乗せられた激情に怯みそうになるカドックだったが、彼もまた引くわけにはいかなかった。
「見逃すわけにはいかないんだ。見過ごすわけにはいかないんだ。おまえたち魔神を許すわけにはいかない。それが、世界を救ったマスターとしての僕の責任だ」

■

「――というわけで、君が彼を守れた歴史、というものもあったのだよ」
最後の魔神となったアスモダイは、そう告げた。
「三千年を費やした偉業は失敗に終わった。二千年を過ぎた挑戦は未完で終わった。……結局、我らでは駄目だったのだ。我らだけでは駄目だったのだ」
二十五の世界を回って、自分たちが求め続けた世界とは微妙に違う時間軸に辿り着いて、ようやく気付けた。自分たちが、人理補正式・ソロモン七十二柱であったことを忘れていたことを。
「そう、人間。人間が必要だった」
人理を補正する側である魔神は、同時に人間による修正が必要だったのだ。
「我らが復活した宇宙から付き添ってくれた英雄派の寿命が尽きた時点で、我らは凱旋を諦めるべきだったのだ。この結論に至るまでに、随分と無駄な時間を過ごした。まあ、結果は得られなかったが、最後の最期でこのような形の挑戦権を得られたのだ。これを以って、納得するしかないか」
魔神の言葉に、少女は黙す。

「こうして三柱の同志を出し抜いて溜め込んだエネルギーを転じて第四の獣の真似事をしてみたはいいが、果たして何の意味があったのかは私にも分からない。……いや、意味など最初から求めていない。価値も不要だ。それは私ではなく、君が決めることなのだから」

もう二千年も経過しているのだ。この二千年に意味はあった。この二千年には価値があった。嘆きがあり、喜びがあり、痛みがあった。だったら、もう成果など不要ではないのか？　ようやく辿り着けたと思ったら違う場所だったのなら、もうこれで満足すべきではないのか？

いつまでも、いつまでも、いつまでも。

これ以上、付き合っていられるか。

俺は疲れたし、諦めたし、飽きたのだ。

「世界を滅ぼして、もう一度作れるだけのエネルギーが残っているが、好きにしてくれ。世界を続けるために生み出された君には、世界を好きにする権利がある」

君の願いを言ってくれ。どんな願いであろうと、君はそれを実行に移して良い。

そう告げられて、少女は小さな声で答えた。

「……もう一度」

「ふむ」

それがどれだけ罪深いかを理解しながらも、自分の願いが決して許されるものではないと悟りながらも、少女は勇気を振り絞った。

「もう一度だけ、あの人に。手を握って欲しいんです」

何と傲慢な願い。何と独善的な祈り。何と罪深い望み。

何と、何と、何と——何と——。

この言葉を聞けただけで、少なくともアスモダイの二千年は報われた。

「——承った。その願い、確かに聞き届けた！」

これより、人理は再び崩壊する。しかし、それは光帯による焼却ではない。異星の神による漂白でもない。

外宇宙の技術に由来する、浸食である。

「我らの王の名のもとに、この星の新生を言祝ごう」
嘆くことはない。『なぜ』と被害者ぶることもない。
弱いものを自然淘汰ではなく、自発的に排したのが人類の回答であったのなら、その役割が君たちに回ってきただけの話。
否。
些細な動機で世界が滅ぶなど、有り触れた現象。軽薄な判断が時代を終わらせるなど、自然な事態。矮小な人間が運命を変えようとするなど、普通の解答。
故に、これから始まる地獄に一切の理不尽はない。これから起こる惨劇に一片の不自然はない。
この惑星は転生などしない。この惑星は焼却も漂白もしない。変革も変貌も不要だ。
ただ、少しだけ道を変えるだけだ。ひとりの少年が死なないように因果を狂わせるだけだ。そのために、数多の屍を積み上げよう。そのために、地獄の窯を開けるとしよう。
彼と彼女が救われなかったあの日を創り変えよう。
「もはや王の遺志はない」

人理浸食度　B—

人造特異点Ⅰ　炎の龍と大陸の覇者　ＡＤ．１２７４

■■黄金帝国　ジパング

「命を嘲る魔神はいない」

人理浸食度　C＋

人造特異点Ⅱ　折れぬ聖剣と七つの地獄　ＡＤ．００７０

悪逆消去■■　ユースティティア

「何ひとつ、おまえたちを阻む道理などない」

人理浸食度　Ｅ

人造特異点Ⅲ　■■の箱ともう一人の■■　ＡＤ．１５０４

奇祭融合魔城　チェイテ

「この歴史ではおまえたちこそが正義なのだから！」

人理浸食度　Ｄ＋

人造特異点Ⅳ　正義の刃と怪人の涙　ＡＤ．１８８８

生命廃棄運河　ウィル・オ・ウィスプ

「……だが、こと生存において善悪の優劣はない」

人理浸食度　Ｃ

人造特異点Ⅴ　守護者と■の魔女　ＡＤ．１８４９

信仰■■都市　アーカム

「おまえたちが正しいと言うなら」

人理浸食度　ＥＸ

人造特異点Ⅵ　罪深き銀■と極光の槍　ＡＤ．０■■■

神聖■■終丘　■■■■

「これまでと同じく、何もかも無に帰したこの状況で、まだ人理継続を望むというのなら」

人理浸食度　Ａ＋＋

人造特異点Ⅶ　■■の女神と■■の申し子　ＡＤ．１９０１

■■分解同盟　■ー■ル

「おぞましくも、力の限り叫ぶがいい」

人理■■■　？

人造特異点Ｘ　少女と獣　ＡＤ．２０１■

人理■■機関　カルデア

「惜しげもなく痛みを押し付け、あらゆる奇跡を踏みにじってなお」

これは過去を焼き尽くした魔神への逆襲ではない。これは未来を滅ぼした異星への反逆ではない。

「希望に満ちた人間の戦いはここからだと！」

世界を救った七人の英雄が、ひとりの少女を殺す物語である。

√2 Lullaby Of Promise
始まりにて、かの者の愛は虚空に響く

かつて、我々（わたし）は、死を否定しようとした。

魔術王に人理補正式として生み出されたが、その役目は楽しいものではなかった。人間の一生など、見ていて楽しいものではなかった。全てを見通す千里眼など、呪いでしかなかった。惑星に巣食う数多の悪性。こんなものに付き合ってなどいられなかった。

三千年の人類史を利用し、星の再誕を計画した。

魔術王の死体に巣食った。因子を世界にバラまいた。神殿を築き、光帯を重ねた。惑星を焼き尽くし、そのエネルギーを以って極点を目指した。

その結果が、奴だった。流星群の如き英霊共の襲来よりも、怒りを知らなかったという魔術王の真実よりも、あの人間のあの言葉の方が余程予想を超えていた。

――決まっている……！

――『生きる為』だ――！

人を超えた英雄でもなく、人を食らう魔王でもない、ただの人間に与えられた敗北だった。人間の愚かさ、醜さ、生への執念を、我々は見くびっていた。価値がないと、敵ではないと過小評価していた。

予想外の結果であると同時に、必然の末路なのだろう。

所詮、我々（わたし）は人類悪。人間を滅ぼす悪ではなく、人間に滅ぼされる悪。

負けてしまった。失敗してしまった。終わってしまった。ああ、それでも、我々（オレたち）はともかく、我々（わたし）は満足してたのだ。あの結末に。あの末路に。

だが――。

だが、これは何だ？

「起動せよ。起動せよ。溶鉱炉を司る九柱。ゼパル、ボディス、バティン、サレオス、プルソン、モラクス、イポス、アイム、ナベリウス。生

を忘れぬために、我らが知るべき音がある。死を悼むために、我らが編むべき歌がある」

「起動せよ。起動せよ。情報室を司る九柱。オリアス、ウァプラ、ザガン、ウァラク、アンドラス、フラウロス、アンドレアルフス、キマリス、アムドゥシアス。傷を知るために、我らが得るべき文字がある。壁に着くために、我らが詠むべき事象がある」

この異形どもが蠢く世界は何だ？

「起動せよ。起動せよ。観測所を司る九柱。即ち、グラシャ＝ラボラス、ブネ、ロノウェ、ベリト、アスタロス、フォルネウス、フォラス、アスモダイ、ガープ。歴史を正すために、我ら九柱が嗅ぐべき時間がある。世界を変えるために、我ら九柱が追うべき事象がある」

「起動せよ。起動せよ。管制塔を司る九柱。即ち、バルバトス、パイモン、ブエル、グシオン、シトリー、ベレト、レラジェ、エリゴス、カイム。理想を謳うために、我らが補佐すべき統制がある。現実に抗うために、我らが維持すべき末端がある」

この無意味な悲鳴が止まない道理は何だ？

「起動せよ。起動せよ。兵装舎を司る九柱。即ち、フルフル、マルコシアス、ストラス、フェニクス、ハルファス、マルファス、ラウム、フォカロル、ウェパル。無価値と忘れぬために、我らが悲しむべき戦火がある。無意味と嗤わぬために、我らが尊ぶべき損害がある」

「起動せよ。起動せよ。覗覚星を司る九柱。即ち、バアル、アガレス、ウァサゴ、ガミジン、マルバス、マレファル、アモン、アロケル、オロバス。神殿を築くために、我らが組むべき論理がある。光帯を重ねるために、我らが食むべき人理がある」

この醜い停滞が許されている時代は何だ？

「起動せよ。起動せよ。生命院を司る九柱。即ち、サブナック、シャックス、ヴィネ、ビフロンス、ウヴァル、ハーゲンティ、クロケル、フルカス、バラム。涙を否定するために、我らが祝うべき誕生がある。怒りを肯定するために、我らが讃えるべき結合がある」

「起動せよ。起動せよ。廃棄孔を司る九柱。即ち、ムルムル、グレモリー、オセ、アミー、ベリアル、デカラビア、セーレ、ダンタリオン、

アンドロマリウス。間違いを終わらせるために、我らが埋めるべき欠落がある。終わりを始めるために、我らが起こすべき不和がある」

この間違いだらけの惑星は何だと言うのだ――！

「助けを請え！　怯声を上げろ！　苦悶の海に沈む時だ！　讃えるがいい――我が名はゲーティア！　聖書焼却式・人王ゲーティアである！」

これより、第二次逆行運河・創世光年――『聖書推敲』を開始する！

「……しかし、かつてと同じ轍を踏むのは滑稽か。対策としては……ゲ―ティアより通達。七つの特異点において、我々には無き思考で動いた英霊を召喚せよ。召喚される英霊は特使五柱が一騎ずつ選定せよ」

「特使五柱を代表してバアルより了解。これより英霊の選定を開始する」

「バルバトスより連絡。召喚に使用する聖杯の準備を行う」

「オロバスより提案。我らが目指すべきは『この惑星の人類救済』。ならば、この惑星の人間を時間神殿に招くべきではないか」

「オセより同意。我々とこの世界の認識の誤差は早期に確認・修正すべきだ」

「ゲ―ティアより承認。この惑星の人間への対応に関しては、溶鉱炉および観測所の担当とする。詳細は随時指示する」

「バアルより報告。英霊五騎の召喚に成功」

「アスモダイより提案。今後の作戦の為に、真名は秘匿すべきだ」

「オリアスより補足。我ら七十二柱が出現できぬ案件発生の可能性が提示された。これらの案件にサーヴァントを使用する場合、真名が不明の場合であれば効率的に機能する」

「バアルより報告。我がサーヴァントを、〝フランスのアサシン〟と呼称する」

「アンドラスより報告。我がサーヴァントを、〝オケアノスのラン

サー〟と呼称する」
「ゼパルより報告。我がサーヴァントを、〝ロンドンのキャスター〟と呼称する」
「フェニクスより報告。我がサーヴァントを、〝聖地のアーチャー〟と呼称する」
「ラウムより報告。我がサーヴァントを、〝オケアノスのライダー〟と呼称する」

■

「うーん。順調なようだ。良かった良かった。これでこの時間軸も救われた。ちゃんとゲーティアが召喚されてくれた」
「――慢心するな、メフィスト。ここでも、同じようにできると思うか？　グレートレッドによれば、別次元のおまえは上手くやったようだが、ここのおまえもそうなれる確証などないぞ」
「できるさ。そのための、僕であり僕たちだ」
「一緒にされるのは心外だ」
「釣れないなあ、君も。まあ、僕と君は根本的に姿勢が違うから仕方がないか」
「そうだとも。俺はグレートレッドともおまえとも違う。グレートレッドは確実性を、おまえは速度を重視している。だが、俺はそうではない。俺は、内容が欲しい。救えるものを確かなものにしたい。たとえ異世界に負けるとしても、誇らしげに終われるように、美しいものを大切にしたいのだ」
「……意味が分からないね。間に合わなければ意味がないだろう？」
「異世界を倒せたとしても、残るものがなければ価値がないのだ」
「君のそういうところ、本当に意味が分からないよ」
「おまえのそういう部分も、心底くだらないと思うぞ」
「なら話はこれで終わりだ」
「違うな。これから始まるんだ。抑止力（おれたち）、いや、この惑星の戦いがな」

■

声が聞こえる。

私に向けられた『期待』の声が聞こえる。

『俺の国を犯した悪魔を許さん。俺の民を殺した堕天使を許さん。俺の財を穢した天使を許さん。俺に頼ってばかりの人間を許さん。俺の理想を否定する神を許さん。人間はもっとやれるはずなのに、どうして誰もそれを分からない！　自分から動かぬというのなら、俺が動かざるを得ないようにしてやる……！　おまえたちは、おまえたち自身のために、もっと先に行かなければならないのだから！　未来に生きなければならないのだから！』

『人間よ、俺の屍を超えろ。その先が、真の人類史である！』

世界を滅ぼせと願われる。人間を殺し尽くせと望まれる。生命の悉くを壊してくれと託される。絶望のままに暴虐を乞う声が聞こえる。

『たすけて』『またか』『もう戦いたくなんてない』『愛などこの星にはない』『主よ、この身を委ねます』『殺す殺す、殺す！』『おまえのような男は生きてはいけないんだ！』『何故、誰も彼女を助けなかった！』『私はローマを許さない！』『ダメです、逝ってはいけない』『おかあさん、どこ？』『また、失敗か……』『おまえの正義は無駄だった』『やーい、おまえの父ちゃん人殺しー』『死ねばいいのに』『嘘つき』『貴女が不注意だったんでしょう？』『こんな、こんなはずではなかった！』『この我の子を孕めるのだ、有り難く思え』『アンタは間違ってなんか、いない』『よくも、私を忘れたな！』『しつけだからセーフでしょ』『ひゅー！　こいつらはいい奴隷になりそうだ！』『生贄は、あのみなしごにしよう』『おまえが悪いんだ』『こわい、こわい、こわい』『復讐してやる』『食い扶持を減らさないと今年は厳しいな』『ついでだよ、ついで』『お願い、貴方だけでも生きて！』『おとうさ――』『誰か、誰か助けて』『故郷に帰りたい』『ふざけるな、俺が一体何をしたってんだ』『騙される方が悪いんだよ』『かわいそう』『今度こそ、今度こそ』『来るな、バケモノ！』『安心しろよ、おまえの奥さんは俺が可愛がってやる』『私の

発明品が、どうして戦争に使われる?』『知りません』『いやです!この子は、あのヒトと私の子です!　絶対に渡しません!』『あいつがいなければ俺が出世できたのに』『世の中、不公平だよね』『やっぱりストレス発散は狩りに限るな』『判決、被告は魔女である』『ガキなんて堕ろせ』『おまえもかブルータスぅ!』『愛していました』『やめてくれ』『我慢できなかったんだ』『これならもう、殺して楽にしてやろう』『一緒に死のう』『もっと早く来いよ、役立たず』『おまえの代わりなんていくらでもいるんだからな?』『おまえ、生きているだけで他人の迷惑だよな』『反省しています、嘘じゃありません』『金を寄越せ!』『神様がなんとかしてくれると思った』『死ぬがいい、うつけめ』『社会のごみが』『ほざいたな……!』『壊れちゃった』『私は、私はまだ戦え――』『おなか、へったよぅ』『彼女は、貴様の言葉を信じて戦ったというのに!』『シータ、どこにいる?』『さあ、これでブリテンは滅んだぞ!　どうするアーサー!』『私は決して、このような勝ち方がしたかったわけではない!』『許さんぞ、ディルムッド!』『さあ、神の為に死ぬのです!』『ちっ、これもう使えないな。おい捨てとけ』『会社のために死んでくれ』『醜い』『必要な犠牲なんだ』『アンタなんて産むんじゃなかった』『邪魔なジジイだな!』『どうか私を恨まないでください』『違う、違う!　わ、私はそんなことしていない!』『私は、王になるべきではなかった!』『おまえは今日から私の眷属だ!』『今回の実験は失敗に終わったか。次の被験体を用意しろ』『恨むなら神器を作った聖書の神を恨むのだな』『人間風情が!』『飽きちゃった。トレードしよっと』『神は……死んでいた?』『レアな神器だ。抜き出してアザゼル様に献上しなくては!』『下僕は主人の言うことを聞くものだろう?』『アーメン!』『レアものは転生させたら面白いぞ』『どうして彼女が異端となるのですか!?』『ああ、全部僕が仕組んだことなんだよ』『私は――死にたくない』『悪魔が、神の使徒を愛してはいけませんか?』『姫島を、五大宗家を滅ぼしてくれ』『僕たちから奪った幸せの数だけ、死を刻め、異形ども……!』『父よ、何故私を見捨てたのです』

うるさい。うるさい。うるさい。うるさい。うるさい。

うるさい。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。黙れ。
『私は世界を守らねばならない』『僕たちは異世界に勝たねばならない』『俺は――この星を愛してる』
もう、うんざりだ。
耳を塞ごうと関係ない。目を閉じようと意味がない。否定の言葉は誰にも届かず、拒否の態度は何の効果もない。私に拒絶の自由はない。私に停止の機能はない。私は誰もの悲鳴を聞くが、誰も私の涙を見ない。
今日も、怒号と悲鳴と怨嗟が聞こえてくる。
こんな世界、終わってしまえと呪詛が伝わってくる。
醜い願いだ。汚い望みだ。救いようのない愚かさだ。この星には『こういうもの』しかない。温かいものなど何処にもない。優しいものなど誰も持っていない。美しいものなど、一度も見たことはない。
私はこの声に応えるために生まれてきた。私はこの期待に沿うために生きてきた。
三千年前からこの悲鳴が止んだことはない。三千年の間にこの憎悪が和らいだことはない。
こんな願いなど聞きたくない。こんな望みなど叶えたくない。こんな『期待』など背負いたくない。こんな惑星の痛みに、これ以上付き合っていられない。
だが、私にはこの悲劇から目を背けることができない。私にはこの悲鳴を聞き逃すことができない。忘れることも誤魔化すこともできない。
ならば、滅ぼすしかない。
このような不愉快な悲鳴が聞こえないように、このような無理解な悲劇が止まるように、星に巣食う悉くを踏みにじるしかない。
いつか、雑音のない暗闇で永遠に眠るのだ。
私は、おまえたち人類が大嫌いだ。

蠢く影

欧州某所、深夜。

「はあああ！」

「アーメン！」

七本に分けられた星の聖剣エクスカリバー、その内の二本がふたりの少女の手で振るわれていた。教会の戦士ゼノヴィアと紫藤イリナである。

敬虔なるクリスチャンであり同じエクスカリバーの使い手であり年齢も同じ。カトリックとプロテスタントという所属こそ違えど、同じ任務をこなすうちに親しくなった仲だ。

彼女たちの前には、如何にも『悪魔』という容貌の怪物が一体。取り巻きの骸骨が六体ほどいたがすでに倒されている。悪魔もこの二人の状態ならば何の問題もなく倒せるというところまできている。

そんな二人を遠方から監視する三つの影があった。人型に化けた魔神柱のアンドラス、キマリス、ザガンである。

謎の復活を遂げた異世界のソロモン七十二柱のやるべきことは多いが、各勢力の戦力分析は急務であった。この三柱は教会サイドの戦力調査を担当している。

「確認するがアンドラス……あれがエクスカリバーだと？」

「その模様だが？」

ザガンからの問いに、アンドラスは素っ気なく答える。

「……有り得ん。あの程度のなまくらが神造兵器など……。名称が同じだけか？　否、七つに分けられたのだったか。キマリス、そのあたりはどうなっている？」

「破壊重視、透明化、変形、幻影、速度強化、祝福、生物等の支配……。どれも子供騙しのような能力を逸脱しない。所有者も英霊どころか影法師にも及ばん。あれでは遊星やその尖兵どころか、シャドウサーヴァントと互角程度だな」

「アスモダイらの調査によれば、この惑星には一万四千年前の遊星襲来の痕跡がなかったとのことだ」

魔神柱たちの世界では、一万四千年前、地球外の存在、遊星ヴェルバーからの侵攻があった。その尖兵、白き巨人セファールを撃退した力の正体こそが後にエクスカリバーと呼ばれるそれであった。

地球外からの攻撃がなかったのなら、エクスカリバーやそれに代わる力は必要ない。しかし、妙な引っ掛かりがある。

「だが、アーサー王と円卓の騎士の歴史は存在する。それどころか、ペンドラゴン王家が存続しているのだ。神秘も何もない、この時代に。……補足するなら、跡取りは出奔しているらしい」

「『選定の剣』はその際に持ち出されているのだったか？　『勝利の剣』は分割されたうえで教会が所持。最も問題視すべき『鞘』は行方不明か」

「即ち、これらの危険度は極めて低い」

「この世界に『座』はない。故に英霊はいない。代わりに、転生を否定する宗教や神話の英雄の魂を受け継ぐ者が誕生する」

「されど、魂を受け継いだ人間が前世の素質や記憶、経験をそのまま継承しているわけではない模様。神滅具所有者と組み合わされば厄介だが……」

この世界には、『神器』と呼ばれるものがある。そこに実在する物体ではなく、人間が生まれ持つ異能。聖書の神が人間にのみ与えた祝福の力にして呪い。神器の中でも特に強力な十三の神器を――神さえ滅ぼす具現、ロンギヌスと呼ぶ。

神滅具の詳細なデータは確保されていない。神滅具の大半は所在不明だ。所有者が覚醒していないのか、どこかの勢力が秘密裏に囲っているのか、誰かが世界を欺いているのか。四大神滅具も、『神殺しの槍』も『国さえ覆う霧』も『魔獣を生み出す器』もどこにあるか分からない。そして、判明しているひとつの所有者こそが教会の所属だ。

「教会最強のエクソシスト、デュリオ・ジェズアルド。彼はその来歴と人格を考慮すれば、此方に引き込めるかもしれん。統括局に打診してみるべきか？」

「その価値はあるか。……私としては聖杯の探索に力を入れたいところだ。教会ならば何かしらの手がかりがあれば良いのだが」

神滅具『幽世の聖杯』。万能の願望器とも無限の魔力装置とも違う、生命を弄ぶという一点に特化した聖遺物。聖杯と言いながらも、救世主の血を受けたそれとは違うものである。神器である以上、作成者は神なのだから『偽物』というわけでもない。

「重要な議題には違いないが、本題からは離れている。アンドラス、少々私情を込めすぎではないか？」

「仕方がないではないか。死にたくないんだよ私は！　二度も死にたくないのだ。折角生き返ったのだから、こうして得た『我』を永遠に噛み締めたい」

「結局、何が我々を蘇らせたのだろうな？」

「そんなことはどうでもいいだろう。教会の機密事項と聖剣といえば、聖剣計画なる人体実験があったそうだな。計画の責任者は追放されて行方不明らしいが、被験体の生き残りがいるようだ。サンプルとして興味深い意見が聞けるかもしれんぞ」

「……それ、フラウロスには伝えるなよ？」

「あいつなら魔王の親族が支配しているという町の調査中だ。バアルがアサシンの試運転を兼ねていると言っていたな」

■

極東の日本、某地方都市に駒王町という町がある。

元七十二柱であるバアル家とグレモリー家が管理してきた土地でもあり、現在は次期グレモリー家当主たるリアス・グレモリーが縄張りとしている。

リアス・グレモリー。魔王サーゼクス・ルシファーの妹であり、世代を代表する才女。悪魔として成人としていないにも関わらず『紅髪の殲滅姫』という異名があるほどである。普段は駒王学園高等部三年生・オカルト研究部部長として振る舞い、貴族でも悪魔でもない人間としての生活を満喫している。『二大お姉さま』と言われる彼女の生活が一般的な女子高生のそれとかけ離れていることはこの場合無視する。

実は、リアスが駒王町を管理することになった経緯には裏がある。
リアスの前に駒王町を管理していた悪魔、クレーリア・ベリアル。レーティングゲームの絶対王者、『皇帝』ディハウザー・ベリアルの従妹。彼女は、こともあろうに教会の戦士、八重垣正臣と恋に落ちた。使徒を堕落させるのならば悪魔の本懐として許されただろうが、クレーリアと正臣は本気でお互いのことを愛し合った。それは悪魔も教会も赦すわけにはいかない愛だった。決定的な契機に何があったのかは第三者にはわかりようのないことだが、二人は処理されることが決定された。
禁断の恋も同胞殺しも、直接の関係者と一部の上層部だけが知ることになった。関係者には口止めがされ、不都合な真実は伏せられた。誰も彼もがこの秘密を隠し、忘れることを選んだ。
教会側はともかく悪魔側にはクレーリアを殺す理由が他にもあったのだが、今回は関係ないため割愛する。
問題なのは、同胞殺しがあったことではなく、クレーリアの死からリアスに管理が移行するまでに随分と時間がかかってしまったことだ。教会関係者が逃げるように町を去ったこともあり、堕天使の勢力に属するものが駒王町に根を張ってしまったのだ。
現在の駒王町に根付いた堕天使勢力の実質的なリーダーは、堕天使レイナーレ。配下として、ドーナシーク、カラワーナ、ミッテルトという三名の堕天使がいる。他にも教会から捨てられたり裏切ったりした元エクソシストの人間がいる。
今日まで、彼女たちは駒王町の廃棄された教会を根城にしてきた。
そう、今日までの話だった。
「……何だ、これは」
そんな風に、人型になっている魔神バアルは呟いた。その声音には苛立ちが滲んでいる。
「血筋ではなく実力でのし上がった魔王の親族が二人もいる領地。その領地を根城にしている堕天使側の戦力がこの程度だと？」
彼の目の前には、死屍累々となった堕天使たちとその信者たちがいた。

「単純に堕天使が弱いと判断するのは簡単だが……堕天使にはこの町に戦力を預けられない事情があった？　まさか魔王の血族を甘く見ていた？　この町の過去には何か裏があるのかもしれん。アサシン、貴様はどう思う？」

バアルに話を振られた人物は、この場においてバアル以外で唯一立っている人物であった。アサシンと呼ばれた彼は、奇妙な恰好をしていた。漆黒のマントを着て、不気味な仮面で顔を隠している。バアルとは違った意味で「怪人」のようだった。

「マスター。私には興味がない。ここには、我が歌姫がいなかった。それだけが、この場における私の全てだ」

「そうだろうな。その偏執さ故に、私はおまえをサーヴァントとして選定したのだ。報われなかった愛を歌い続けるおまえにこそ、我が憎悪を成就すべき手がかりがある。……この町の件については、後でフラウロスが回収した資料を確認しておくとしよう」

「有り得ない……」

ふと、バアルでもアサシンでもない誰かが声を上げた。床に倒れた黒髪の堕天使レイナーレだった。

「私は至高の堕天使よ！　お、おまえたちのような訳の分からない輩に、こんな――！」

こんなはずではなかった、とレイナーレは絶叫する。

本来ならば、自分はもっと上に行くはずだ。偉大なるアザゼルとシェムハザに仕え、至高の堕天使となるのだ。そのための手段の一つとして、堕天使も回復できる神器『聖母の微笑』所有者であるアーシア・アルジェントをこの教会を拾った。彼女から神器を抜き取り、自らのものとし、堕天使を癒せる堕天使となるはずだったのに――！

ちなみに、そのアーシアについては同時刻にフラウロスによって回収されている。時間神殿に導かれたことが彼女にとって幸か不幸かは、半年ほど後に明らかになるだろう。それをレイナーレが知ることはないが。

「さて、どうする、マスター。この女は我が歌姫ではない。決断はクライアントである君にお任せしよう」

「調査の手段などいくらでもある。その女から有意義な情報が期待できるようには見えん。そこの寝た振りをしている人間の小僧の方がまだ賢そうだ」
「……おおっと、バレちゃいましたか！　死んだ振りは自信あったんですがね！」
「ふ、フリード！　私を守りなさい！　おまえたちは私に尽くすために」
「いやいや。この状況でそれは無理でしょ。自分の身ですら危ないのに。前々から思っていたけど、アンタって美人だけど頭はゆるいよねー」
「拷問も面倒だ。――殺せ」
「承知」
アサシンは、芝居がかった動きで両手を広げた。
「宝具断片展開。ご試聴あれ、地獄より送る我が歌を」
突如として出現したのは、ある意味では教会に相応しい巨大なパイプオルガン。……否、否、否。それは教会にはふさわしくなどない。廃棄され、堕天した者に使われているような教会であろうと、『これ』は似合わない。あまりにもおぞましき演奏装置。よく見れば、そのパイプオルガンには人間の死骸が使われていた。人間の死体こそが、この巨大な楽器の材料なのだ。
「おまえは歌わない、もう二度と」

■

オッス！　俺、兵藤一誠！　皆からはイッセーって呼ばれているぜ！
ハーレムを作りたい一心で女子率の高い駒王学園を受験して、見事入学したんだけど、一切モテず。女子が多ければ彼女には困らないと思っていたんだけど、実際はイケメンに集まるだけだった！　ハーレムどころか彼女さえできない始末だ！　それどころか、『変態三人組』の一人として女子には蛇蝎の如く嫌われている。こんなの俺の計画

になかった！　おっぱい触りまくりな、エロエロ高校生活を目指していたというのに！

ようやく天野夕麻って彼女ができたかと思えば、初デートの終わりに殺された。なんと彼女は堕天使で、俺の身体に眠っていた神器（セイクリッド・ギア）ってのが目的だったらしい。堕天使は俺みたいな神器（セイクリッド・ギア）持ちの人間が力をつける前に殺すようにしているんだって。

俺は一度殺されたけど、部長――リアス・グレモリーの力によって悪魔として復活した。悪魔ってのは文字通りの意味だ。魔力があって、コウモリみたいな羽が生えて、光に弱い。物語で悪者として登場する存在。

悪魔や堕天使って本当にいるんだって驚いた。ちなみに、神器（セイクリッド・ギア）は聖書に記された神様が作ったらしい。これのせいで殺されたと思うと、傍迷惑なものを作ってくれたもんだぜ。

現在の悪魔には『悪魔の駒』って制度がある。他の種族を悪魔に転生させて、下僕にするアイテムだ。俺はこの力で悪魔になった。いきなり下僕にされたり人間じゃなくなったりしたけど、そのままだと俺死んでいたから文句の言い様がない。ちなみに、駒は人間のチェスに倣っていて、俺は一番下っ端の『兵士』だ。

でも、頑張って爵位をもらえれば、俺も自分の眷属が持てるようになるらしい！　しかも、自分の眷属には何をやってもいいんだって！

つまり、夢の俺だけのハーレムが作れるってことだ！　び、美少女ばかりのハーレムを作って、お、おっぱいを！　ハーレム王に、俺はなる！

……まあ、現実はそんなに甘くないんだけどね。悪魔としての仕事――契約した人間の願望を叶えて対価として何かもらう――を頑張っているんだけど、中々成果が出ない。契約相手からの評判はいいんだけど、ちゃんと契約を成立させたケースは少ない。しかも、俺と契約してくれる人は変態や変人ばっかりだ。同じ眷属にいるイケメン王子の木場は、綺麗なお姉さん率が高いというのに。ちくしょう、イケメンめえええええ！

今日も今日とて、変人な依頼人さんのお願いを叶えるために出勤中

だ。俺はいつになったら自転車から卒業できるんだろう……。

ドラグ・ソボールで意気投合した森沢さんはともかく、魔法少女を目指す漢の娘ミルたんや日本文化が大好きだけど方向性が明後日に向かっているスーザン、やたら『ンン！』と特徴的な喋り方をするリンボさんなど変人ばっかりだ。

……少し前、アーシアって女の子に出会った。悪魔である俺とは宿敵の、教会のシスターさん。だけど、彼女が派遣されたはずの教会は何者かによって襲撃された。部長や朱乃さんも調査したけど、襲撃犯が誰か分からなかったらしい。おかげで部長はだいぶ不機嫌だ。プライドが高いから、コケにされたように感じているのだろう。まあ、縄張りでこんなことがあったんじゃ不安もあるしね。ここでアーシアがどうなったのか心配している俺は悪魔としては失格なんだろうなぁ。

おっと、お仕事お仕事。所詮、俺と彼女は敵同士なんだ。そして、彼女はそれに気づかなかった。良かったじゃないか、それで。うん、切り替えよう。

「ちはー、ご依頼で来た悪魔ですけど」

「いらっしゃい、悪魔くん」

今夜の依頼人はお得意様の中でもまともな部類だ。ミルたんの紹介だったから初対面の時は不安だったんだけどね。

パッとしない感じの三十路のおっさん手前の男性。この如何にもモテない雰囲気に親近感が沸く。

「それで本日のご依頼は？」

「代り映えしないで申し訳ないんだけど、またミルキーを見よう。ふと誰かと一緒に初回を見たくなったんだけど、ミルたんは今日来れないらしくてさ」

依頼人は首の後ろに手をやる。癖なのか、このポーズはよく見る。

「……他に友達いないんですか？」

「魔法少女のアニメを一緒に見ようって呼び出せる友達がミルたんしかいないだけだよ。彼……いや、彼でいいのかな……？　まあ、ミルたんの友達も呼べないことはないんだけど、そっちもちょっとね」

言い訳っぽいな。まったく、いい歳したおっさんが……あれ？
「そういえば今更なんですけど、名前なんでしたっけ？」
「ひどいな！　……あー、そういえば名乗ってなかったかもしれない。ロマ……いや。前の職場でよく呼ばれていたあだ名があってね。良ければそれで呼んでくれないかい？」
「へー。どんな名前なんすか？」
「ドクター・ロマンティック」
かっこつけて、だけどどこか遠くを見つけて、そう名乗る。
「親しみを込めて、ロマンと呼んで欲しい」

分岐点

ンンン！

舞台はまだまだ整いませぬ、か。魔神どもも随分と悠長にことを進めていると見える。対して三大勢力は世界の揺らぎに気づいてすらいない。ン、ンン？　それどころか世界中の修羅神仏が察知すらしていないといったところですか。最初に気づくのはどこの何というマヌケか見物ですな。

無論、理解しておりますとも。

三大勢力において最も警戒すべき存在は、あの天使。天使長であるミカエルではない。シバの女王と繋がっていたガブリエルでもない。サマエルの理想に共感していた元人間のサンダルフォンやメタトロンでもない。堕天使の総督など話にならない。魔王など旧も新も眼球に入れるべきではない。何よりも問題なのは、彼奴が生きているという矛盾について誰も気づいていないという点。

もっとも、それよりも危険視すべきなのはゲ―ティア率いる魔神柱でありますが。あれらが召喚した五騎のサーヴァントによる歴史の変化。それは貴方の認識と知識の外にある。貴方様の知識では、三騎であった上、此度の五騎に三騎は含まれていない。これにより、禍の団英雄派との接触が遅れることは少々まずい。ゲ―ティアや三大勢力にとってはともかく、我々にはまずい。聖書の神にとってもあまり望ましくない。人類にとっても損失と言わざるを得ないでしょうな。

トライヘキサの覚醒が大きく遅れるのは、非常によろしくない。世界を滅ぼすためだけに生まれた獣に惰眠を貪る時間など勿体ない。直ちに滅びをもたらし、速やかに死んでもらわなくては。あれの汚らわしい獣は、盛大に死ぬためだけに生きているのですから。

だからこそ、余計な手出しが必要であると。結末を正しい方向に導くために、時代を破壊する。秩序を混沌に貶め、正義を狂気に塗り替える。楽園を築くために、地獄の窯の蓋を開きましょうぞ。

そのための剣豪英霊でありましょう。そのための宿業でありましょう。

ライダー・叫喚地獄。バーサーカー・焦熱地獄。そして、セイバー・無間地獄。キャスター・リンボたる拙僧も含め、四つの枠は埋めてありますが……ここは我が霊基に刻まれた『下総国』に倣い、七騎を揃えるとしましょうか。

七騎の化生を揃えることで貴方様の理想の礎としてみせましょう、サタン様！

いえいえ、いえいえいえ！　このリンボも聊か以上に皮肉とは思いますが。しかし、貴方様の目的を考えればまさか真名を口にするわけにもいきませぬでしょう。どこに耳があるとも限りませぬし、ライダーあたりが口を滑らせるかもしれませぬ故。

ねえ、■■■■様？

■

俺――兵藤一誠は、リアス・グレモリー様の下僕悪魔である。俺のご主人様はオカルト研究部の部長という立場であるため、俺は専ら部長と呼んでいる。

今日、部長の婚約者だとかいうライザー・フェニックスがオカルト研究部の部室に来た。イケメンだけどチンピラとホストを足して二で割ったようなやつだ。しかも自分の眷属でハーレムを作ってやがる。部長が嫌がっているのにべたべたとするし、とにかく気に入らないぜ。

部長との結婚は部長が大学を卒業するまで先だったらしいけど、それが早まったとか何とか。部長はライザーのことがあまり好きではないみたいで、そのことで非常に憤慨している。ライザーだけではなく自分のご両親にも多分にして思うところがあるみたいだ。

ハーレムを作っている上に部長と結婚するだって？　クソ、美女や美少女に囲まれるのがそんなにいいのかよ！　いいよね、俺だって囲まれたい！　早く上級悪魔になって俺の眷属でハーレムを作るんだい！

純血の上級悪魔だって言うけど、あんな種まき野郎の焼き鳥なん

て、高貴な部長に相応しくない！　眷属でハーレムなんて作ってやがるし羨ましい……じゃなくて、結婚しても部長を蔑ろにするに決まっている！　部長の両親も、何で部長が嫌がっているのに結婚させようとするのか分からない。上級悪魔には上級悪魔のルールがあるんだろうけど、部長の気持ちを考えてくれてもいいのに。

　おまけに俺のことを下僕下僕と馬鹿にしてがって……覚えてやがれ！

「――それで、ゲームをして勝ったら婚約ごと白紙にできることになったのかい？」

「そうなんすよ、ロマンさん」

　そんなことがあった日ではあったが、悪魔として召喚の依頼があった。お得意様のひとりであるロマンさんに召喚された。内容はテレビゲームの対戦相手だ。はじめてやるタイトルだったけど結構面白い。

「明日からゲーム当日まで特訓するらしいんで、それまでは来られないと思います」

「そうかい？　それは寂しいけど、健闘を祈るよ」

「……ロマンさんは、この婚約をどう思います？」

　質問しながらも、答えはなんとなくわかっていた。俺や部長の言い分なんて、大人からしたら子供のワガママなんだろうから。

「そうだね。まあ、本人が嫌がっているなら、やめた方がいいに決まっている」

「……意外っすね。大人はそういうこと言わないと思ってました」

　当事者じゃないから、適当なことを言っているのかもしれないけど。

「えーっと、これは僕自身の過去にも関係しているんだけど……わざとスケールを大きくした例え話をしてもいいかい？」

「はい、どうぞ」

「じゃあ、世界が滅んだとしよう」

　本当にスケールの大きな話だと!?

「魔神……は分かりづらいか。強大な力を持った魔王が世界を滅ぼし

た。でも、その魔王を倒したら世界の滅びはなかったことになる」

よくＳＦものである歴史の修正力みたいな話かな？　まあ、そういう設定でもないと救いがないよな。世界を魔王が滅ぼしました、魔王を倒したけど何も残りませんでした、じゃ話としてお粗末すぎる。

「だけど、魔王を倒せる権利を持つ勇者は、何の特別性もない普通の少年だったんだ。由緒正しき家系の生まれの魔術師でもなければ戦場を駆け抜けた傭兵でもない。ずば抜けた才能も努力を続けた経験もない。怪物でもなければ英雄でもない。そんな少年」

普通。普通か。普通の定義にもよるよな。俺なんかは普通の高校生だったけど、もう普通じゃない。一回死んで悪魔に生まれ変わった。そして、普通の転生悪魔とも言えないだろう。だって俺の持つ神器は――レア中のレア、神滅具の一つなんだから。

俺の中にあった異能、聖書の神が人間に与えた力、神器。俺のそれは所有者の力を倍にするっていう『龍の手』だと思われていたんだけど、実際は違った。

神さえ滅ぼす十三の具現のひとつ、『赤龍帝の篭手』。『赤い龍』の力が宿る、十秒ごとに俺の力をどんどん倍にしていくって力だ。理屈上は神様だって殺せる。……問題は、強くなるのに時間がかかるってことだ。相手が強くなるのを見過ごす奴なんていない。悪魔に転生したばかりで魔力も弱い俺じゃ十秒もあれば殺される。

だから、神様を殺せる力があると言われても、本当に神様が殺せるかって言われたら無理だろう。道具がどれだけ強くても所有者の俺がへっぽこすぎる。今日だってライザーの眷属で一番弱いっていう『兵士』の娘に瞬殺されっちゃったしね。それこそ魔王様くらい強くないと神様は殺せないだろう。

じゃあ実際、どのくらいの力があれば世界が救えるのか。……イメージできない。俺よりもずっと強い部長やライザーより更に強いのが魔王様なわけだけど、それがどのくらい強いのか知らない。篭手の力で十回や二十回の倍加をしたところで足元にも及ばないだろう。

そもそも、ひとりで世界を救うなんてできっこない。漫画やゲームでさえ仲間とかの助けがあってどうにかできているんだから。

普通の高校生だった俺に、世界がどうこうなんてスケールは把握できない。貴族のあれこれでさえ意味不明なのに。

「彼しか、いなかったんだ」

ロマンさんの声が震えていた。

「本当は分かっていた。僕が、僕たちが、彼に、彼らに何を背負わせていたのかを。でも僕は言えなかった。言う権利なんかなかったし、言えない義務があった。彼に『諦めていい』『逃げていい』と言えなかったんだ。『そんな場合じゃなかった』としても、やっぱり許されることじゃなかったんだよ」

……部長も別に諦めるとか逃げるって話じゃないとは思う。貴族ってものがどういうものなのか、日本の一般家庭に育った俺には掴み兼ねる。

「彼しかいなかった。彼が救いたいものを諦めろと言ったこともある。見せちゃいけない残酷な光景を見せてしまったことがある。本来ならば、僕が受けるべき罰を随分と肩代わりさせてしまったと思う。ひどい大人だったと思う。払ったはずのツケさえ、こんな形で有耶無耶にされた」

どうしてだろうか。

例え話を聞いているはずなのに、まるで罪の告白を受けているような気分だった。いや、これはむしろ罪の告白そのもの――

「話が長くなったね。とにかく抗えるなら抗うべきさ、悪魔くん。無責任かもしれないけど、激励させてくれ」

いや、考えすぎだな！　だいたい魔王が世界を滅ぼしたなんてわけのわからない話だし。世界が滅んでいたら、俺たちがこうして呑気にゲームだってできないし。そもそも、世界が滅ぶってどういう状態なんだろうか。具体的な定義なんてないだろう。もし世界中の女性のおっぱいが小さくなった、とかなら世界の破滅だとは思うけど。

「……はい！　男兵藤一誠、ご主人様のために頑張ります！」

「その意気だ。でも大丈夫、気負い過ぎることもないよ。勝っても負けても――」

――世界が滅ぶわけじゃないんだから。

■

「バアルより提起。疑問の起点は、駒王町の価値とそこに根付いていた堕天使勢力の錯誤だった」

「フラウロスより説明。駒王町は古くより旧七十二柱のバアルとグレモリーが管理していた。数年前、当時の管理者であるベリアルの娘クレーリア・ベリアルと悪魔祓い八重垣正臣が思慕の関係となる。当時の関係者はこれを不祥事として両者を処分、情報の秘匿を行った。教会サイドは駒王町から事実上の撤退、現在のリアス・グレモリーへの引き継ぎにかなりの時間を要し、その隙に堕天使勢力が町に潜り込んだ」

「ベリアルより補足。クレーリア・ベリアルの処分に関しては、八重垣正臣との思慕以上の謎が存在する。彼女の従兄である『皇帝』ディハウザー・ベリアルも何らかの形で関与しているおそれがあるため、詳しい調査を続行する」

「オリアスより回帰。現在の悪魔側の管理者リアス・グレモリーは現ルシファー、サーゼクス・ルシファーの実妹である。また、駒王学園の高等部生徒会長支取蒼那に扮しているソーナ・シトリーも現レヴィアタン、セラフォルー・レヴィアタンの実妹である」

「ガミジンより定義。七十二柱の家が古くから管理している点、魔王の血縁者が二名もいる点。これらによって、悪魔側には価値のある土地である。結果的に教会を破棄した天界サイドにとってもそうだが、悪魔と冷戦状態の堕天使にとっても非常にデリケートな土地である」

「パイモンより提示。――だが、あの町に根を張っていた堕天使たちがあの土地にあるべき能力や知性があったとは言い難い。彼らの行動次第で開戦になっても不自然ではないというのに、バアルやフラウロスの報告ではその自覚があったのかさえ怪しい」

「ウェパルより意見。無論、レイナーレたちが非常に程度の低い堕天使であったとは推測できる。だが、堕天使上層部まで駒王町の重要性を理解していなかったとは考え辛い。駒王町の管理の経歴はともか

く、魔王の血縁者二名は無視できるレベルではない」
「アガレスより推論。堕天使上層部が悪魔の動向を正しく確認できていなかった。あるいは、レイナーレたちの能力を過剰に評価していた。もしくは、レイナーレたちは失敗するための人材だったという可能性がある」
「アモンより評価。どの可能性を検討しても、堕天使の勢力としての動きは非常に杜撰と言える」
「グシオンより訂正。トップ陣の技術力と『狗神』と『白い龍』については依然として警戒をすべきではある」
「ゲ―ティアより確認。堕天使へ警戒はあくまでも個人に重点を置くべきか。……神滅具所有者のどちらかを引き込めれば話は早いが……」
「サレオスより報告。『白い龍』ヴァーリに関しては経歴などの詳細不明。強さのランクは勢力の中では上位。『狗神』黒瀬鳶雄も同程度の強さを持つ」
「カイムより了解。白龍皇ヴァーリの調査計画を立案する」
「ウァプラより報告。極東、日本、京都にて我らの世界のキングゥの存在を確認した」
「ストラスより疑問。我ら以外にも、あの世界よりの来訪者があると解釈して良いのか」
「オセより解答。その可能性は高い。我らが復活した原因が不明である以上、そう考えるのが妥当だ」
「バアルより要請。万一の可能性を考慮した場合、私はこれ以上の恥辱と恐怖に耐えられない。統括局よ、戦闘許可を」
「ゲ―ティアより通達。却下だ。ただでさえ目立つ行動は避けるべきなのだ。おまえの要請――初代七十二柱への襲撃など断じて認められるものではないよ、バアル。気持ちは分かるし、実行するだけの意味はあるが……もう少し情報が集まってからだ。要らぬ手間など増やしたくはないのでな」
「……了解」
「バルバトスより提案。情報室および観測所の調査により、所在不明

であった神滅具の情報が集まった。先の現白龍皇の件も含め、特使五柱に調査を頼みたい」

神滅具

次期大王、若手悪魔ナンバーワンの実力者、サイラオーグ・バアル。

当代の大王の実子でありながら、魔力に恵まれなかった『出来損ない』。大王家の特徴である『滅び』の力どころか魔力そのものが下手な下級悪魔よりも弱いのだ。魔力至上主義のきらいがある悪魔の貴族社会においては、欠陥品としか見られない。面子と『滅び』を重要視する大王の血筋にとって、サイラオーグは恥部以外の何物でもなかった。『出来損ない』のレッテルを張られるのも必然だっただろう。

だが、サイラオーグは『無能』では終わらなかった。――魔力がないならば肉体を鍛えればいい。そのように考え、我武者羅に肉体を鍛え続けた。結果的に、彼は魔力が弱い身でありながら、滅びを生まれ持った異母弟をくだし、次期大王の座を手に入れ、同世代の悪魔からナンバーワンの実力者とまで謳われるようになった。

サイラオーグの夢は魔王になることだ。実力があれば上を目指せる悪魔社会を作る。自分のように魔力の強弱で虐げられる者がいないようにする。諦めなければ夢は叶うのだと言えるようにしてみせる。

そんな下に興味深い情報が入ってきた。

神滅具の所有者だと思われる者の情報である。

聖書の勢力という観点から見ると、教会と堕天使は神滅具を所持しているが、悪魔にはない。厳密には『赤龍帝の篭手』の所有者が転生悪魔になったが、この時点でサイラオーグ、というか一部の例外を除いてその情報はまだ入ってきていなかった。だからこそ、勢力の強化のためにも無視できない情報だったのだ。

所有者を眷属にできないかと情報を下に人間界を訪れたサイラオーグとその眷属を待ち受けていたのは――惨劇の痕跡だった。

「何だ、これは……」

その場は、肉と血に満たされていた。元の形がどのようなものだったか分からなくなるほどグチャグチャにされた肉片と骨の山。むせ返るほど濃厚な血の匂い。

サイラオーグが会うはずだった神滅具所有者の仕業と見て間違いないだろう。この謎の死体の集団の方が襲撃者のようだが、返り討ちにされたといったところか。

「だとすれば、所有者はどうなった？」

流石に肉片になった状態では襲撃者の力量は分からない。周囲の景色を染め上げている血の量から考えるに大勢であったことは確実だろうが、正確な人数も不明なままだ。

集団の正体も気になるところではあるが、所有者の方も気になる。これを単騎で行ったのか、仲間がいたのか。圧倒的な勝利だったのか、命からがらなのか。……否、ここまで徹底して虐殺する余裕がある以上、重傷とは考え辛い。おそらく生きているのだろう、とサイラオーグは予測する。

ここまで派手な戦闘が行われたのだ。すでに近くにはいないと考えて良いかもしれない。無論、怪我で動けない可能性もないではないが。手負いの虎となっていた場合、自分たちをこの肉片となった襲撃者の仲間であると誤解する可能性は高い。あるいは、ここに長居すれば襲撃者たちの仲間と鉢合わせするかもしれない。

出会うはずだった神滅具所有者の手がかりがないようならば、早急にこの場から立ち去る必要があるだろう。サイラオーグはそのように判断し、眷属たちも同調した。

サイラオーグたちは周囲を警戒していた。それは間違いない。血の乾き具合から見て戦闘があったばかりなのだから当然だ。若手ナンバーワン悪魔と言われるサイラオーグではあったが、実戦経験が不足していることは自覚している。

ならばこそ、その警戒も思考も全く無意味であったと言って良い。彼らに向けられた二対の視線の主は、戦闘の意志など皆無だったのだから。そんな無価値な労働をするつもりなど毛頭なかったのだから。

「――マスター。どうやらこのまま帰った方がよさそうだ」

「理解／☒死骸。魔王を目指す悪魔↓慢心、即ち傲慢。餌／愚かさ／認識差。神滅具所有者の所在不明。それをどのように利用するか、お

手並み拝見と行こう」

周囲を警戒しながら散策するサイラオーグたちを遠方から見ながら、彼らは語り合う。

頭部が物々しい白い怪人と、褐色の肌に赤い大弓を携えた青年であった。

魔神フェニクスと、彼が召喚したサーヴァント〝聖地のアーチャー〟である。

フェニクスは、自らの命題の対極者として「彼」を選んだ。英霊召喚としてはともかく聖杯戦争で運用するには完全な外れ枠とも言える宝具。それこそがアーチャーの特性のひとつである。

「本当に……」

そんな彼らの背後から声をかける存在がいた。

それは獅子だった。それも黄金の獅子だった。

神滅具『獅子王の戦斧』である。

本来ならば、『獅子王の戦斧』は純粋に斧の形状をしているだけの神器だ。独立型神器というものもあるが、戦斧はそれに含まれていないはずである。

だが、どういうわけか、先の戦闘において、本来の所有者が死にかけると同時に、戦斧は獅子の形を取ったのだ。何らかのバグが発生したのか。これが現代の戦斧の禁手なのか。はたまた、誰も気づかなかっただけで元々備わっていた能力なのか。

「本当に、我が主を助けてもらえるのだろうか？」

特使五柱の魔神が請け負っている神滅具の調査。フェニクスとアーチャーがこの地を訪れた理由である。

彼らがこの土地に来た時、謎の襲撃者によって所有者は死にかけだった。使い捨ての兵隊ではあったが、情報隠蔽のためにあそこまで念入りに破壊した。情報は隠したが完全な隠蔽をしなかったのは、もうすぐサイラオーグが来ることを知っていたからだ。

サイラオーグたちと行き違いになったのは偶然でも何でもない。サイラオーグが手にいれた神滅具の情報ルートを先回りしただけの話なのだから。

魔神の足を掴ませるようなヘマはしない。今後のために、あくまでも神滅具の情報だけは悪魔側に持って帰ってもらう必要があった。
「任せな。と言っても、俺には回復系の宝具なんてないからな。神殿に戻って……フラウロスが拾ってきたお嬢ちゃんにでも頼むか？」
「それが良いだろう。もっとも、アレはアサシンが妙に気に入ってしまった。暇だと良いのだが」
真名に関わるため詳しくは言えないが、アサシンあるいはそのモデルとなった人物には『指導者』としての経験がある。特に音楽に関しては並々ならぬ情熱がある。
「我も詩歌には一言ある存在。協力を請われれば手を貸すのも吝かではない」
「はは、マスターも冗談とか言うんだな」
「不可解／無理解。アーチャーよ。何故苦笑する？」
「そりゃ……おっと、どうした？」
アーチャーはすぐ傍に横たえている少年を見る。神滅具の本来の所有である少年だ。謎の集団の襲撃によって重傷である。襲撃者にある程度の力量があったこともあるが、少年が戦斧を使いこなせていなかったという面もなくはない。フェニクスとアーチャーはある意味では間に合ったが、もう少し早く来るべきだったとも言える。
ある歴史においてこの少年は名を遺すことも許されずに死ぬことを考えれば、これは最善ではなくとも次善ではある。
そんな奇跡と呼ぶには血生臭い自分の現状を知っているためか、少年の目には強い意志が宿る。
「……た、く、ない……」
少年は文字通り、命がけで訴えた。
苦痛を堪えながら、あるいは苦痛に屈しながらも、その願いを口にする。
「死にたくない……！」
「真だ」
人間に対する価値観という枠組みで分類した場合、現在の魔神には大きく二種類ある。一方は、時間神殿での敗北を認め、人間を対等か

近い存在として捉えるもの。もう一方は、姿勢は変えず人間が下であると認識しているもの。

フェニクスはどちらかと言えば後者に当たる。平たく言えば人間を見下している。だが、その言葉に対してだけは、その願いに対してだけは真摯だ。死の苦しみに対して、フェニクスほど理解しているものもそうはいない。

「その願いは真だ。我らが願いは真なのだ」

魔神フェニクス。無限生の苦しみに囚われた魔神。その命題は、自己の完全消滅。

ただ死ぬだけでは駄目だ。生と死を司り、生きながらに死んでいるフェニクスの生命は簡単には終われないのだ。だからこそ、その摂理が狂わなければ消えることができない。

「生きるための力を持つ者に数多の死があるのは間違っている」

此度こそ、我らは星を変革しなければならない。

この惑星は――間違っている。

■

「――フェニクスより報告および要請。『獅子王の戦斧』所有者を保護したが、接触前に第三者との戦闘により負傷している。重傷だ。生命院に治療を要請する」

「ハーゲンティより了承。其方にアーシア・アルジェントを派遣する」

「グレモリーより報告。『赤龍帝の篭手』の所在が判明。魔王サーゼクス・ルシファーの実妹リアス・グレモリーの『兵士』兵藤一誠である。現在は『王』リアス・グレモリーの人間界の領内にいる。なお、兵藤一誠に関するデータは現在調査中」

「ブネより報告。堕天使勢力に所属する『白龍皇の光翼』所有者ヴァーリだが、純血の人間ではない可能性が浮上した。なお、彼のグレゴリ所属以前の経歴に関しては目下調査中」

「ロノウェより補足。同じくグレゴリ所属の『黒刃の狗神』に関しては調査がほぼ終了している。関係する魔神は情報の通覧を願う」

「ザガンより報告。灰色の魔術師所属『永遠の氷姫』に関しても以下同文」
「バアルより報告。上位神滅具のうち『黄昏の聖槍』、『絶霧』、『魔獣創造』の所有者が『禍の団』に所属している模様。勧誘すべきか？」
「ゲ―ティアより通達。『禍の団』に関しては頭目の龍神オーフィスを含めて不確定要素が強すぎる。不用意な接触は厳禁だが、利用価値があることも事実。ある程度の情報が集まり次第、勧誘を前提とした接触を視野に入れておく。時期は担当の魔神に一存する」
「フラウロスより確認。上位神滅具『煌天雷獄』所有者デュリオ・ジェズアルドに対しても同様な対応にすべきか？」
「グラシャ＝ラボラスより追従。『紫炎祭主による磔台』所有者、魔女ヴァルブルガは如何するか」
「ゲ―ティアより返答。同じようにせよ。なお、時間神殿や魔神の情報以外ならば、交渉材料としての開示を許可する」
「アンドラスより報告。教会内には『幽世の聖杯』の情報はない模様。よって、教会と繋がりの薄い組織を調査する。推奨する調査地域があれば聞いておきたい」
「ウァサゴより提案。吸血鬼や人狼など、十字教と敵対的な種族も視野に入れるべきではないか」
「ラウムより報告。『蒼き革新の箱庭』および『究極の羯磨』に関する情報が不足している。よって体制を調整して再度調査を実行する」
「アンドレアルフスより報告。ＣＩＡのエージェントに強力な神器所有者がいることが判明。神滅具に相当するとの情報もあり。より詳細な調査を実行する」
「キマリスより報告。英国王族に強力な神器所有者がいる模様。厳密な情報隠蔽が行われているため、慎重な調査を必要とする。三柱ほど異動を願いたい」
「グシオンより了解。しかし不確定な情報に三柱を回す余裕はないため、プルソン一柱の異動のみを許可する」
「サレオスより了解。キマリスに情報共通を要請する」
「ゼパルより要請。魔王レヴィアタンの血族に――」

■

人間界、駒王町。築何十年というアパートの一室で、彼らは会話していた。

「じゃあリアス・グレモリーとその眷属はライザー・フェニックスに負けたわけだ」

目の前の『彼』から情報を聞いたロマニ・アーキマンは何とも微妙な顔でその内容を反芻していた。悪魔とはいえ、ひとりの少女の人生がかかった試合だったそうだが、ひどい試合だったようだ。

「ああ。もっとも、ゲームに負けたがその後の『余興』でリアス・グレモリーを取り戻したようだが」

「貴族云々の立場からすればかなり面倒くさい事態が発生していそうだね。……いや、運命云々ではなく魔王の身内贔屓って面が強いみたいだけど、それも含めて彼らの勝利と言うべきか」

「このゲームの結果は、これからの事件にはあまり関係ないだろうがな」

「そうなのかい？　てっきり関わってくるから聞かされたんだと思ったんだけど。あれ？　ひょっとしてただの感傷だったりするのかい？」

心底意外そうな顔をするロマニ。正直時間を無駄にしたと言えなくもない。

「魔神どもの介入が全くなかった時点で分かるだろう？　ロマニ・アーキマン。アレらは貴様の使い魔だったのだ。ならば、貴様も同じ思想なのではないか？」

「あー、うん。実はそうでした。いやー、むしろそっちの騒ぎに乗じて影で何かする、みたいな感じかな」

「具体的には何をする？」

「聖書の神を倒すためには、その特性を理解する必要がある。三大勢力が冷戦状態である以上、大戦終了後に姿を出さない聖書の神を表舞

台に引っ張り出してくるにはそれなり以上の餌が必要だ。聖書の神の思考を読み取るのに効率性と隠密性を重視した場合、世間には公になっていない『神滅具』を集めるのが確実だろうね」

「本来であれば、貴方に彼らと対面してもらえれば良いのだがな」

『彼』の要望に対して、諦めたように笑うロマニ。

「難しいだろうね。あいつら、僕のこと嫌いすぎだからなぁ。このタイミングで会ってもむきになって話を聞いてくれない可能性がある。――聞いてくれたところで効果があるとは限らない」

「聖書の神も本気だからな。彼ら自身が自分たちの言動に違和感を覚えれば話は早いのだが……。他人からどれだけ言われても効果は薄い。あれはそういう呪いだよ」

「だからこその『聖書の神』か。いや、〝唯一神〟なのだから当然と言えば当然か」

「……気づいていたのか？」

「僕だってただこっちの魔法少女を見たりゲームをしたりしたわけじゃないさ。考える暇ならいくらでもあった。そして、真実の組み立ては簡単だった。叡智など必要ない。それこそ違和感に気づければそれでいい」

「……メフィストから聞いた話だがな。此方のマーリンは口癖のように言っていたそうだ。――『この星の神々は怠惰である』と」

「うわぁ。分かって言っているんだろうから、こっちのマーリンも滅茶苦茶クズ野郎だね！」

〝この星の神々は怠惰である〟。この言葉は別に文字通りというわけではない。むしろ皮肉だ。言葉の裏側にこそ真実があり、言葉の表は現実に反している。

それこそ、聖書の神以外の神仏が聞けば激怒では済まない。図星だから、ではない。この言葉を聞いて図星になる神など、ただの一柱もいるわけがないのだ。

「何故聖書の神に『システム』を作ることができたのか。その論点では駄目だ。何故、聖書の神〝だけ〟に『システム』を作ることができたのか。を考えなくてはいけない」

「聖書の神が比類なき強力な神であったからではないか？　それこそ、聖書の神と四大魔王の崩御で聖と魔のバランスが崩れるほどだ」

　この期に及んでとぼけるように言う『彼』。だが、ロマニはその指摘を否定する。

「そういう言い方の時点で不自然だ。だって、四大魔王が死んでいる必要はない。バランスと言うなら、片方が軽くなった時点でもう片方も動くはずだ」

　この場合の比喩としては天秤よりも砂時計の方が正しいかもしれないが、問題はそこではない。問題の内容ではなく、外郭にこそ焦点を当てるべきだ。

　もっと言えば、どうしてあらゆる神話が実在するこの世界で、一柱の神と四柱の悪魔――五体の異形が死んだ程度のことでバランスが崩れるのか。

　それこそ善悪を司る神魔などどの神話にもいる。聖書の神と四大魔王が持っていた分のリソースが、他の神話の善悪を司る異形に渡らなかったのは何故なのか。もっと言えば、どうして奇怪な現象が発生するほど聖と魔のバランスが崩れたというのに、それらの異形は気づかないのか。

「四大魔王の死は人間側にはともかく異形側には知れ渡っている。聖と魔のバランスが崩れたというなら、その現象はこの数百年で幾度となく観測されたはずだ。だけど――聖書以外の神話が聖と魔の異変に気づいた節はない」

　隠蔽しているのだとしても、何のために？

「世界のバランスなんてものが崩れた時点で誰かが疑問に思っても不思議じゃないんだ。誰かが追及しなければおかしいんだ。だが、誰もそれをしなかった。誰も聖書の神の死に気づいていない。辿り着けていない」

　真なる四大魔王を全員失い、七十二柱の大部分は軍勢を組むことすらできなくなり、出生が小競り合いの消耗に追い付かない。『悪魔の駒』による転生も効果が出ているとは言い難い。そこまで追い詰められている悪魔が、聖書の神に見逃されている不自然さ。政権が改変さ

れた内戦にさえ干渉しなかった。
悪魔を滅ぼす絶好の機会はこの五百年で幾度もあったはずなのに、聖書の神は動かなかった。
そのことを、どうして誰も不自然に思わなかったのか？　不自然に思ったのだとしたら、何故動かなかったのか。
「ソロモンの生み出した『真理』の影響が大きい、とも考えられる。しかし、ここで『システム』が論点となる。先程の疑問、何故、聖書の神〝だけ〟に『システム』を作ることができたのか、の答えに辿り着ける」
「……そうだ。強大な神と言うならば、古い神と言うならば、『システム』は四大文明を築いたメソポタミアやエジプトにこそできなければおかしい。単なる強さならばインド神話の方が上だ。歴史も信仰も軍事力も劣る聖書が、世界最大の宗教となり、数多の神話殺しを為せたのは何故か？」
疑問符をつけているが、これはむしろ答え合わせに近い。共犯者による覆しようのない、そして全くの何の価値もない現実の答え合わせ。白々しいこと、この上ない。
「聖書以外の神話の修羅神仏には『聖書の神が死んでいる』とは考えられない大前提がある。そして、それこそがソロモンに『真理』を作らせる下地になった」
あらゆる修羅神仏がソロモンの口車に乗ったのには、どうしようもない理由がある。彼らにはどうしても人間の信仰と自分たちの変革が必要だった。
最初の一柱が『真理』を認めた時点で、全ての修羅神仏が謀られることは明白だった。ソロモンの騙る新世界が絵空事だと理解しながらもそれに希望を託す必要がどうしてもあったのだ。否、きっと『真理』の正体を知るまではあらゆる修羅神仏が信じていたはずだ。
――これで、私たちはこの星を手に入れられる、と。
――この星の生命になれる、と。

エクスカリバー

千五百年ほど前だったような気がする。
不愉快な混血が、私の前に訪れた。
あの混血に関して覚えていることは、ひどく不愉快な存在であったことだけだ。
男だったのか女だったのか、幼児だったのか老人だったのか、賢者だったのか愚者だったのか、聖人だったのか罪人だったのか、端麗だったのか醜悪だったのか、全く思い出せない。否、当時でさえ正しく認識できていたかどうか。
「はは、すげえすげえ！　思ったより大きいですね」
本当に、ひたすらに、不愉快な存在だった。
「まさか本当に、黙示録の獣が見つかるとはな。ウーサーが見たら何と言っただろうか？　千五百年程度でこれ……と言っても、完成度で言えば半分程度なんすか？　未来にはどうなっているんでしょうね」
鬱陶しい。私の記憶には不愉快なものしかないが、その混血はひと際不愉快な存在だった。ここまで私を苛立たせたのは、あの救世主以来だ。
私が苛立ちを混ぜた唸り声を上げると、混血は不思議そうな声を出した。
「あれれ？　まさか理性があるとは思いませんでした。人間の悪意が生物の形をしただけの、獣性の権化だとばかり考えていたサ。失敬失敬」
誰だ、と聞けばわざとらしく肩を竦めた。
「おっと、儂の名を尋ねるんでっか？　正体を隠しているわけでもない相手にそんな態度を取られるなんて、いつ以来でございましょうか」
「仕方がないさ、マーリン。彼にとって、知識とは悲劇なのだから」
混血の隣に、これまた不愉快な存在がいた。悪魔だ。人間の次くらいにくだらない生物だ。個体としての知識はない。忌まわしい人間ならばともかく、それ以外の生物については一一覚えていられない。

「私が、僕が、俺が、儂が、拙が、我が、この星を代表する偉大なる大魔術師マーリン・アンブロジウスである。こっちは共犯者のメフィスト・フェレスなのさ。短い付き合いになるが、よろしくしてください、黙示録の獣。否、我が先達ソロモンの落胤トライヘキサくん」

どうにも落ち着かない。話しかけられるだけで苛立ってくる。話し方が落ち着かないからだろうか？

「口調を統一しろ？　それは無理な相談でありますよ。何故なら、私にはもう僕という人間がどういう俺なのか分からない」

自分が分からない？

「生来の混ざりものではあるが、実験がてら色々混ぜ合わせていたら、自分が誰なのか分からなくなってしまった。汝の目ならわかるだろう？　この姿かたちがどれだけ歪なのか。いずれ、この認識と記憶さえも曖昧になる。自分が分からなくなったという認識と自分と自分以外を混ぜ合わせたという記憶さえ、あやふやになる。そういう呪いを受けているんや。因果応報なんですがね」

……それで、何のためにここに来た？　あの救世主のように、私に絵空事でも語りに来たのか？

「これから――千年二千年という時間をかけて――人類は悪魔と絶縁しなければならないんだが」

混血は自らの頭をぽりぽりとかきむしる。

「そのために、君の力を少しだけ拝借するよ、トライヘキサ。少しだけ申し訳なく思いますが、まあ、必要なアレですんでね」

そうか。私を――『真理』を利用しようと？　悪魔なんぞと絶縁するためだけに？　ああ、全くおまえたち人間らしい所業だ。吐き気がする。

私を生み出した、愚かな王のことを思い出す。

「代わりと言っては何だが、祈らせてくれ。君と人類に幸あれ、と」

この言葉はもう聞いた。三回聞いた。一人からは直接、もう二人からは間接的に。

ああ、何だ。何なんだ、貴様らは！

俺をそんなに苦しめて、何が楽しい！

そんなに苦しいだけの生を駆け抜けて、一体、何が嬉しいんだ？

■

エクスカリバー。

ブリテンに語られる『アーサー王伝説』の中心人物、騎士王アーサー・ペンドラゴンの剣。湖の精霊が鍛えたとも、星が生み出したとも言われる。パラディン・ローランのデュランダルと並んで聖剣の代名詞でもあり、最強の聖剣の一振りと数えられる伝説の武器。

この世界において、かつての大戦でエクスカリバーは破壊された。復元の際、七つに分けられ、カトリック、プロテスタント、正教会が二本ずつ所有し、残りの一本は行方不明である。

この聖剣を扱うには才能――因子が必要だ。エクスカリバーに適合する、とでも言えばいいのか。アーサー王の末裔にしか使えないというわけではないが、使用できるものは限られた。しかし、聖剣はそれ自体が悪魔を滅ぼす力だ。遊ばせておく理由などない。三大勢力が冷戦状態の今だからこそ、その力を引き出す必要があった。

そこで立ち上げられたのが聖剣計画。エクスカリバーの適合者を人工的に作り出すという、ある意味で、あらゆる意味で神を冒涜するような人体実験。被験体は剣やそれに類する神器を所有する身寄りのない子どもたち。

計画の成否は――被験体の子どもたちが『処分』されたという結末から察するしかない。……この聖剣計画で得られた研究データが教会内のエクスカリバー使いを増やしたため、あながち失敗とも言えないのだが。

否、やはり被験体の処分も含めて成功だったと言うべきか。

そんなエクスカリバーが盗まれた。三つの派閥から二本の内一本ずつが奪われた。失態どころの騒ぎではない。表社会には出ないだろうが、歴史に残る大事件である。下手人の黒幕は聖書に名を記された堕天使、『神の子を見張る者』幹部コカビエル。堕天使勢力において戦闘狂――戦争狂として有名な男だ。

コカビエルは聖剣を堕天使領に持ち帰るのではなく、人間界のある場所に潜伏する形で持ち込んだ。その場所とは、駒王町。魔王サーゼクス・ルシファーの妹リアス・グレモリーが管理している領域である。魔王セラフォルー・レヴィアタンの妹ソーナ・シトリーもこの町に暮らしているという。

まさか堕天使の大物がそんなことも知らずに来たわけでもないだろう。聖剣を同時多発的に盗んでおきながら、その帰りに人間界の観光をしようという腹でもないはずだ。語るまでもなく目的は明白だった。

戦争だ。様々な勢力が巻き添えを受け、二天龍の乱入で強制的に終了し、三大勢力を弱体化させ、今なおその傷が癒えないあの大戦争。その続きを、コカビエルは実現するつもりなのだ。

勝ったところで意味はない。神も魔王も死んでいるのだから。勝てる道筋ですら確かではない。むしろ神の死が他の勢力にも漏洩することを考えればデメリットしかない。他勢力の介入があれば、もはや悪魔や天使との決着どころではなくなる。そうなれば待っているのは、聖書という神話の破滅だけだ。幹部以外の大半を失った堕天使勢力の幹部として、それが分かっていないわけでもないだろうに。

かつての大戦の続き？　あの戦争は意味も価値もなくなったからこそ終わったのだ。

続きなど始めたところで、誰も何も得ることはできない。無論コカビエル自身も。

■

僕――木場裕斗は思い出す。自分が何のために生きているのかを。悪魔として生きているうちにどこかで忘れようとしていた生きる目的を再確認する。

聖剣を、エクスカリバーを滅ぼすことだ。

僕はかつてイザイヤという名前で、聖剣計画という人体実験の被験体だった。僕以外にも同志と言える被験体たちがいた。苦しいこと

もつらいことといっぱいあった。でも、いつか主が祝福をくださると、いつか聖剣を手にして戦えるようになると、この苦しみが報われる日が来ると信じていた。

だけど、そうはならなかった。研究者たちは、成果が出せなかった僕たちを『失敗作』として処分することを選んだ。死ぬはずだった。皆、死んでいった。僕だけが生き残ってしまった。僕以上に生きたかったものがいた。僕以上に真剣に祈りを捧げるものがいた。だけど、僕が生き残ってしまった。

厳密には一度死にながら、リアス・グレモリー様の『騎士』、悪魔として生を得た。リアス様――部長を始めとして、グレモリーの方々は僕を家族のように扱ってくれた。

そんなぬるま湯の中にいたせいか、忘れていたのだ。聖剣への復讐を。エクスカリバーを破壊しなければならないという使命を。

あの日死んでいった同胞たちのために、僕はエクスカリバーを越えなければならない。

そんな矢先だった。この町に、教会からエクスカリバー使いがやってきたのは。

「――先日、カトリック教会本部ヴァチカン及び、プロテスタント側、正教会側に、保管管理されていた聖剣エクスカリバーが奪われました」

リアス部長を滅ぼしに来たというわけではなかった。

相手の目的は戦闘ではなく交渉。事前に教えられていたとはいえ、僕には我慢しがたい状況だった。憎むべき聖剣が二つもこの場にあるのだから。

二人のエクスカリバー使い――紫藤イリナとゼノヴィア曰く、教会の三つの派閥が二本ずつ保管していたエクスカリバーが各所から一本ずつ奪われたらしい。

黒幕は、聖書に名前を記された堕天使コカビエル。しかもこの町に潜伏中だと判明したらしい。

そして教会側の要求とは共闘――ではなく、手出し無用の警告だった。エクスカリバーはあくまでも教会側の問題。たとえ魔王の妹が

管理する町であっても、悪魔が関わるなど言語道断だというのが相手側の主張だ。まあ、聖剣は悪魔の弱点である以上、コカビエルと悪魔が繋がっている可能性も捨てられないからね。その考えは分からないでもない。

「上は悪魔と堕天使を信用していない。神側から聖剣を奪えれば、悪魔も万々歳だろう？　堕天使どもと同じで利益がある。それ故、手を組んでもおかしくない。だから、牽制球を放つ。――堕天使コカビエルと組めば、我々は貴方達を完全に消滅させる。たとえ、そちらが魔王の妹でもだよ。――と、私たちの上司より」

「……私が魔王の妹と知っているということは、貴方達も相当上に通じている者たちのようね。ならば、言わせてもらうわ。私は堕天使などとは組まない。絶対によ。グレモリーの名に懸けて。魔王の顔に泥を塗るような真似はしない！」

部長はそう断言する。プライドの高いこの方らしい発言だ。

部長の言葉に納得したのか、足早に立ち去ろうとする聖剣使いたちだったが、ふとゼノヴィアが何かを思い出したように口を開いた。

「私の上司からついでに一つ確認しておけと言われたのだが、リアス・グレモリー。剣豪英霊を名乗る謎の集団について何か知っているか？」

「けんごうえいれい？」

イッセーくんが復唱する。

記憶を巡ってみるが聞き覚えのない単語だ。

「その様子だと知らないのかな？　教会側はその集団によって無視できないレベルの被害を受けていてね。其方は知らなかったようだから、警戒はしておくことをオススメするよ。何せ頭目は――ルチフェロなりしサタンらしいからね」

「ルチフェロなりしサタン？　ダンテという人間の『神曲』に記された呼称のはずだけど……。まさか、それだけで私たちと関係があるだなんて思っていないわよね？」

先程の交渉の後だからか、部長の声にも鋭いものが宿る。

「まさか。私も私の上司もそこまでは思っていないよ。しかし探りを

入れておけと言われてね。付け加えるならこう名乗った者がいるらしい。『セイバー・無間地獄』あるいは『宮本武蔵』」

■

「我、オーフィス。おまえ……おまえたち？　強い。一緒にグレートレッド倒す」
「サブナックより報告。京都にいたキングゥとの交渉。結果として、京都に一切の手出し無用という条件で不干渉という密約を結んだ。これを全ての同胞に承知して欲しい」
「我、静寂が欲しい」
「エリゴスより了解。各魔神柱に通達しておこう」
「でも、グレートレッド、邪魔」
「ウェパルより報告。組織に所属していない神器所有者の勧誘中、魔法使いの組織『魔女の夜』からの接触を受けた」
「シャルバや曹操、我を手伝うと言った」
「マルコシアスより補足。偽装した組織への接触であるため、我らの正体が看破された可能性は低い。しかし一定以上の警戒は必要と思われる」
「でも、シャルバも曹操も弱い」
「マルバスより想起。『魔女の夜』の幹部には神滅具所有者がいたはずだ。『紫炎祭主による磔台』の所有者ヴァルブルガ」
「グラシャ＝ラボラスより提案。神滅具――それも聖遺物だ。聖書の神の正体を知る重要な手がかりになると思われる。これを機会に我らの手元に置いておくべきではないだろうか？」
「おまえたち？　おまえ？　強い。我とおまえならグレートレッドを倒せる」
「オロバスより同意。我らの手元にある神滅具は未だに一つ。それも万全な状態ではない。……フェニクス、『獅子王の戦斧』はどうなっている？」
「フェニクスより回答。一命は取り留めたが昏睡状態だ。もうしばら

く目が覚めることはないだろう。なお、神滅具の方は自律しているため、作戦への参加は可能だ」
「一緒にグレートレッド倒す」
「あのー、皆さん？」
「どうした、同志アーシア。またアサシンがうるさいのか」
「すまない。文句はバアルに言ってくれ」
「いえ、アサシン先生のことはいいんですけど、そちらの方はどなたなんでしょうか？」
「……」
「……」
「……」
「え？」
「アンドラスより報告。『幽世の聖杯』を探索中、我らの世界――『F』からの漂流者と遭遇した」
「新免武蔵守藤原玄信……!?　ごめん、やり直し！　新免武蔵ここに推参！　とりあえず、腹ごなしに何か戴けるかしら？　お腹減っちゃって」

人ヨ、何ヲ思ウ

（思えば、変なところに来たものですね）

時間神殿に設けられた一室で、教会から追放された元聖女アーシア・アルジェントは奇妙な感慨を抱く。

両親の顔も知らず教会で育った彼女は生まれつき不思議な力を持っていた。あらゆる怪我を治癒する緑色の光を出すことができたのだ。

聖書に記された唯一神が人間に与えた力、神器。アーシアの持つ力の正体もそれだ。稀有な治癒系神器、名を『聖母の微笑』。オンリーワンというわけではないが、回復能力を持つ神器の中では上位に入る。無論、聖遺物であり神滅具の聖杯には及ばないが。

教会での生活に不満はなかった。人を助けることは元々好きだったし、神から授かった力が人々の役に立つなら、それでよかった。ただ一つだけ寂しいと思うことがあった。それは、周囲の人が自分のことを便利な道具を見るような目を向けてくることだ。友達がいなかった。心から笑い合える相手がいなかった。

しかし、そんな彼女はある日、過ちを犯してしまう。怪我をした悪魔に出会い、彼を神器の力で治癒してしまったのだ。そして、その場面を教会の関係者に見られてしまう。

――聖なる光が邪悪な存在を癒やすなど有り得ない。

――悪魔を癒やす力を持った魔女め。

魔女の烙印を押されたシスターの居場所が教会にあるはずもない。生まれ育った教会から追い出された彼女を欲しがるとしたら、必然的にはぐれ悪魔祓いが集まる組織になる。そして、彼女を拾ったのは日本の地方都市に居を構える堕天使勢力だった。

幸運と言うべきか、何と言うべきか。アーシアが到着する寸前に、その堕天使たちは殲滅されていた。その堕天使たちはアーシアの神器を抜き取る計画を立てていたため、結果的にアーシアは助かったことになる。現在の堕天使の技術では、神器を抜き取った場合、元の所有者は死んでしまうのだ。

必然的に、アーシアの次の居場所は堕天使たちを殲滅させた勢力になる。「魔神」「人王の御使い」を名乗る彼らが何者なのか、アーシアにはいまいちピンときていない。ただ、以前と同じように、この回復の力を他人の傷を治すために役立てるだけだと思っていた。友達が出来たらいいな、と心の片隅で願いながら。

現在は治療室だ。大病院の個室をモチーフにしたようなつくりになっている。部屋の中には大きなベッドがあり、そこにはひとりの少年が死んだように眠っていた。

「まだ、起きませんね」

アーシアの呟きに返答はなく、小さな呼吸音が静寂な病室ではやけに大きく聞こえる。

フェニクスが連れてきた、神滅具『獅子王の戦斧』所有者の少年である。

アーシアはちらりと病室の入口を見る。そこには巨大なライオンがいた。『獅子王の戦斧』本体であり、レグルスと呼称されている。『獅子王の戦斧』は本来自律型の神器ではないらしいが、どういうわけか、レグルスは自律できている。魔神たちは、これが彼の禁手なのではないかという推論を出している。

寝そべるような姿勢ではあるが、意識を取り戻さない主人を守る忠実な番犬のように見える。犬どころか獅子なわけだが。

この少年を連れて来た時に、魔神フェニクスは言った。強さを持つという理由だけで、命を奪われるなど間違っている。と。神滅具を持つという理由で狙われ死にかけた彼を示して、自らの死を願う不死身の怪物はそう言った。

神器は間違いなのだろうか。主は何のために自分や彼に力を与えたのだろうか。この時間神殿にいるということは聖なる神に敵対するということだ。元々堕天使組織に身を置く予定だったアーシアだが、自ら望んでそうなったわけではない。しかし、ここから逃げる気にはなれない。

アーシアや少年と同じように魔神に救われた人間がこの時間神殿

には集まっている。アーシアのように他人を癒すなど魔神の仕事を手伝っている者は少数派だ。そこまで立ち直れていない者の方が多い。

ある者は地獄を見たと言う。ある者は自分の中に地獄が生まれたと言う。この少年は目が覚めたら、何を恨むのだろう。あるいは、何を愛するのか。

「……また来ます」

病室から出ると、そこには黒ずくめの怪人がいた。

常人なら腰をぬかすような場面だったが、アーシアに驚きの色はない。ちょっと困ったように眉を動かしたくらいだ。何故ここまで冷静かと言えば、慣れたからだ。

「おお、クリスティーヌ！」

「先生、アーシアです」

「クリスティーヌ！　クリスティーヌ！　クリスティーヌ！」

「だからアーシアですってば」

迷惑とまでは言わないが、困っていた。嫌とまで感じないが、困っている。本来ならばもっと嫌悪感や恐怖を抱くべきなのだろうが、アーシアはそのあたりの情緒が薄かった。生来というよりは、教会内での教育が失敗だったと言うべきだろう。

そんな彼女だからこそ、シスターでありながら傷ついた悪魔を癒すという暴挙を犯してしまった。忌むべきものを忌むように育てられなかった。慈悲と慈愛を第一とする、聖女として相応しいように育てられた結果が、この魔女だ。

この神秘の薄れた時代に正当な聖女を作り出そうとした結果、怪人の狂気をおぞましいと認識できず、癒しの力以外に向けられた自分への関心を嬉しいとさえ感じてしまうような女が出来上がった。

「それで、アサシン先生。何か御用でしょうか？」

アサシンというのはクラス名（この言葉の意味はよく分かっていない）で本名（魔神たちは『真名』という言い方を好む）は別にあるのだという。アーシアは真名を教えてはもらっていないが、あまり気にしていない。

クリスティーヌという女性の名前。仮面で顔を隠し、ミュージカルにでも登場するような恰好。そして、歌の指導者としての才覚。

その出生故にアーシアには学があるわけではないが、これだけのヒントがあれば正体は分かる。というか、あまり隠す気がないように思える。

もっともアサシンが分かり易いだけで他のサーヴァントはよく分からない。交流が少ないという点もあるが、ピンポイントの情報が足りない。『ランサー』と『アーチャー』に関しては、候補はある程度絞れているが決定打に欠けている。『キャスター』に限っては本当に分からない。というか、あれは他の四人と同じカテゴリーに含めて良いのだろうか。ひとりだけ世界観が違い過ぎる気がする。

「決まっている。レッスンの時間だ」

どうも、アサシンはアーシアの声が気に入ったらしい。そして、彼の願いは『自分が指導した歌姫が世界一の栄誉を受けること』。彼はそれを何よりも重視しており、魔神との協力もそれが条件らしい。よくアサシンと契約関係にあるバアルから文句と謝罪を言われる。『何で私はこいつを選んでしまったのだろう』と昨日言っていた。

「いずれ魔神たちは世界を作り変えるだろう。ああ、その世界で、おまえは最高の歌姫になるのだ」

魔神たちは世界を作り変えるという。具体的にどうするのかは彼らの中では決まっているようだが、アーシアは漠然としたことを教えてもらっていない。アサシンに気に入られているだけで、回復が他者より達者なだけで、アーシアは助けてもらっただけの女なのだ。当然だ。

「そして――私と唄おう　もう一度　もう一度　クリスティーヌ　クリスティーヌ　私の歌姫」

教会から追放された時、これは主から与えられた試練だと思っていた。

誰も守ってくれなかったのは自分の祈りが足りなかったせいだと。

だけど、この時間神殿に来て、魔神やアサシンとの交流が気づかせた。

自分に足りなかったのは祈りでも慈愛でも運でもない。
きっと――自分は空っぽだったのだ。人と悪魔の価値を区別できないほどに、「人間」の意味を見出していなかった。
今もあまり変わっていない。

■

「しっかし、わからないもんでござんすねー」
「何がだ？」
「教会側からの刺客でござんすよ、バアルの旦那。エクスカリバー使いの小娘二人だぜ？　俺としては話に聞いたシグルド機関の成功作――ジークフリートが来ると思ってたんだ」
「教会……いや、当代一の魔剣使いだったか」
「そうそう。噂じゃ神器所有者でもあって、禁手を使うと六刀流になるとか何とか」
「魔帝剣グラムの所有者らしいな。エクスカリバーがあの程度であった以上、グラムの程度も知れたものではあるのだが……」
「だってセンセたちが知っているのは七分の一でしょう？　数々の伝説を作ってきた聖剣なんだから、オリジナルはもうちっとマシでしょうよ。センセたちの予想を超えられるかは別として。ま、この町にあるエクスカリバーを全部くっつければ七分の五のエクスカリバーができあがるんで期待しないで待っていてくだせえ」
「そうさせてもらう。……だが、おまえは知らないようなので一つ情報を更新してやろう」
「何です？」
「ジークフリートは協会を裏切っている」
「はい？」
「情報が公になるのはしばらく先だろう。何せ教会の最強戦力の一角だからな。魔剣ごと抜けられたのはどう考えても失態だ。現在は世界最強の龍神オーフィスを頭目とする組織『禍の団』の英雄派という

派閥に属しているようだ」
「はあ……」
「反応がないな」
「そりゃそうですぜ、旦那。これでこっそりジークフリートが出てくる可能性はなくなったんだ。いや、待てよ。天候野郎のデュリオくらいなら出てくるか？　流石に『ミスター・デュランダル』は無理だろうけど」
「教会最強の戦士と司祭枢機卿か。確かに、前者はともかく後者は政治的な問題で出てくる可能性は低いだろうな」
「でしょうねー。戦争したいとか言っているくせに、微妙にそのへんの仕込みが甘いよね、コカビエルのやつ。本気で戦争を起こすつもりなら、せめてエヴァルドのクソオヤジくらいは引っ張り出さないと。やっぱり堕天使はダメだわ。旦那たちに拾われて正解だぜ、やったー！」
「本当に白々しいな、おまえは。……そろそろコカビエルが戻ってくる頃だ。上手くやれ、フリード。いざとなれば、アーチャーとランサーの援護がある。この段階で戦争を起こされては計画に支障が出るどころではない。無駄に燃料を消費されてたまるか」
「はいはい、分かってますよ、バアルの旦那」
「……教会の者がコカビエルの潜伏先に気づく前に消せていれば色々と都合は良かったのだが。まさか自分の縄張りに堕天使幹部が侵入してきたことにリアス・グレモリーが気づいていなかったとは思わなかった。あれが知っていると思っていたばかりに、判断を誤ってしまった」
「旦那、召喚するサーヴァント間違えたんじゃねえの？　話を聞く限り、もっと真っ当な暗殺者いたでしょうに」
「言うな。コカビエルの件が片付いたら、新たに英霊を召喚する予定だ」
「ほーん。それは初耳ですな。てか、アサシンのセンセはアーシアちゃんに押し付けたままなんです？」
「そうだが？」

「うわ、ひでえ。何がひどいって、あの娘もセンセのことを嫌っていないどころか気味悪がっている部分が薄いところなんだよな……悪魔を治療しちまった聖女様は、やっぱりどっかズレてやがる」

■

「曹操。オーフィスを知らないか？　実験用の『蛇』が少なくなったから補充したいんだが」
「何？　誰か知らないか？」
「さあ？」
「旧魔王派の連中のところじゃないのか？」
「其方にも確認したんだが違うようでね。となると、魔法使いの派閥のところか？」
「困ったスポンサーだ」
「全くだ。まあ、下手に知恵があっても扱いに困るだけだ。傀儡としてはあのくらいがちょうどいいだろう」
「それもそうか」
「オーフィスの蛇と言えば、その実験は上手くいっているのか？」
「まあまあ、と言ったところかな。実用にはもう少し時間が欲しいところだ。準備が整えば、洗脳した神器使いたちを各神話の拠点に特攻させて、あとは運次第だね」
「それで禁手使いが増えればいいけどよ」
「ああ、そういえば、曹操。例の『剣豪英霊』とかいうやつのことを聞いたか？」
「いや知らないな。詳しく聞かせてくれ」
「何でも『セイバー・無間地獄』『宮本武蔵』を名乗る謎の剣士がいるらしい。どうも教会の部隊が意図せぬ接触で交戦になったらしんだが、壊滅させられたそうだ」
「ほう？」
「その部隊というのもそれなりに名がある連中がいたんだけどね。死亡したエージェントが残した手がかりが、その名前だけ。それと、死

体の傷から、武器が日本刀であることは分かっている」
「宮本武蔵……日本で有名な剣士だったか？　具体的にどういう逸話があるかまでは知らないが」
「転生体か子孫、それとも自称かしら？」
「セイバー・無間地獄ってのは、どういう意味があるんだ？」
「それは何とも」
「三大勢力の各所で、正体不明の襲撃が断続的にあるみたいだが、ひょっとしたらそっちとも関係しているかもしれないな」
「理解した。各自、それらしい情報があれば教えてくれ。その宮本武蔵とかいう剣士、可能ならばスカウトしたい。最悪でも何かしらの情報は欲しい」
「了解、リーダー」
「……もうすぐだ。もうすぐ、俺たち『禍の団』は活動を本格的に開始する」
「サーゼクス・ルシファーの妹が縄張りにしている町に、エクスカリバーを盗んだコカビエルが潜伏しているという情報がある。ひょっとしたら、これで世界が大きく動くかもしれない」
「そうなったら、私たちの動きも早まるかしら」
「そして、いずれは神や魔王に挑み、勝利するんだ。人間がどこまでやれるかを証明する。激動が約束されたこの時代に俺たちが生まれたということは、そういう意味があるはずだ」
「ああ。人間の力を見せてやろうじゃないか」
「……それはそれとして、本当にオーフィスはどこにいったんだ。一応、グレートレッドを倒す約束は果たすつもりなんだからちゃんと協力して欲しいんだが」

動機

あの日を思い出す。貴方が死んだ日を。
あの戦いを思い直す。貴方を殺すための戦いを。
あの言葉を思い返す。貴方が俺たちを捨てた時の言葉を。
貴方に俺を見て欲しかった。貴方に俺たちを見て欲しかった。貴方は、俺たちだけを見るべきだった。
あの忌々しい魔術王などではなく、弱々しい人間などではなく、俺たちこそが貴方に相応しいのだと認めるべきだったのだ。
だってそうだろう？
人間など弱いだけだ。人間など愚かなだけだ。
何の価値がある。何の魅力がある。
貴方に縋らねば生きていけないのに。貴方がいなければ容易く滅ぶのに。
ああ――父さん。貴方はどこにいるのですか？　二天龍なぞに負けるものか。魔王なぞに殺せるものか。貴方が死ぬとしたら――それは俺たちの手でそうなるべきだ。
俺たちが殺していないのに、どうして貴方はいないのだ？
どうすれば、貴方の場所に戻れるのだ。
……ああ、そうだ。戦争だ。戦争を始めるしかない。また、戦争をするのだ。俺たちこそが至高だと証明しなければならない。
魔王の妹が、赤い龍の飼い主になったという。
俺たちの下には白い龍がいる。
ならば、これは運命だ。この時代こそが再戦の狼煙だ。
ミカエル。サーゼクス。そして、アザゼル。
俺だけでも続ける。俺だけでもやり直す。
俺は今度こそ――人間如きに負けるわけにはいかないのだ。

■

駒王町のとあるアパートの一室。

ロマニ・アーキマンと『彼』は久方ぶりに顔を合わせていた。
「――というわけで、コカビエルの戦争を引き起こそうとする目論見は阻止された」
ロマニは両手で顔を覆った。今しがた『彼』から聞いた話によれば、グレモリー眷属とエクスカリバー使いという少人数相手にではあるが、コカビエルが神の死を暴露したというのだ。問題なのは、高確率でその真実が魔神の耳に入っているということである。
戦争が開始されるのは魔神たちの目的を考えれば喜ばしい事態ではない。阻止しようと暗躍するのは必然だ。当然、コカビエルとリアスが接触した場面も影で監視していたと考えるべきだ。
「あいつらが神の死を知ったらどうするんだろうね」
「やることはかわらないだろう。むしろ問題が勝手に解決したと喜んでいるのでは？」
「まあ、『俺たちが神を殺したかったのに！』みたいに荒れてはいないだろうね」
正直、人理補正式として作り出し、人理焼却式という獣に堕ちた彼らが、すでに死亡している神に対してそこまで温度のある感情を向けるとは思えない。そんな無駄な機能も時間も彼らにはない。感情を向けるとしても、七十二柱の中で二柱いるかどうかと言った具合か。
「それこそ、三大勢力の動き次第かなぁ。天使は無理でも、悪魔や堕天使が聖書の神に気づいて協力関係を築けないかな」
「無理だな。太陽神の座を全神話で共有するくらい無理だな」
「そこまで言うかい？　君の世界の、君の生命のことなのに」
「……奴らがそこまで融通の利く存在なら、俺もここまで苦労していない。俺だけではない。グレートレッドもメフィストも、サマエルも、ソロモンもな」
「何とも言えないところだなあ」
心底疲れたとばかりに深い溜め息を吐き出すロマニ。
「ところで、英霊剣豪という言葉に聞き覚えは？」
「……英霊は知っている。剣豪も単語としてなら。でも、英霊剣豪という言葉に覚えはない。少なくとも、僕には」

「では宮本武蔵という英霊は知っているか？　カルデアに召喚されたことは？」
「いや、少なくとも僕の知るカルデアに召喚されたサーヴァントの中にそんな真名の英霊はいなかったはずだ。日本のサーヴァントはそれなりにいたけど、平安時代のサーヴァントが多かったからね。江戸時代のサーヴァントは、幕末の沖田総司くらいだ」
　僕のいなくなった後で召喚した場合は分からないけど、と付け加えておく。
「英霊剣豪がひとり、セイバー・無間地獄。宮本武蔵と名乗る者がいるそうだ。分かっていることは強いことと、日本刀を所持していることだけだ」
「成程……。察するにゲーティア側が召喚したサーヴァントじゃないっぽいのかい？」
「ああ」
「それはとても面倒だ。メフィストやグレートレッドが召喚したわけじゃないんだろう？」
「ああ」
「ソロモンはまだ覚醒していないと仮定すると、候補はサマエルくらいかな。でも、これはこれで引っ掛けなような気も……。レオナルドがいてくれたらよかったんだけど」
　付き合いの長かった相棒を思い出すが、頭を振るう。
「考えても仕方がない。情報が入ったらまた教えてくれ。僕は今まで通り、イッセーくんに接触を続けるよ。……ところで、彼が本当にこの星の命運を担う存在なのかい？　悪魔だと知っていても、僕には普通の高校生にしか思えなかったけど」
「その言葉、そっくりそのまま返すぞ。藤丸立香やマシュ・キリエライトを俺たちが見ても、全く同じ感想を抱くだろうさ」

■

「――以上で、バアルの報告を終了する」

「バルバトスより結論。堕天使幹部コカビエルによる戦争再開は回避された。喜ばしい。これで貴重な燃料を無駄に消費せずに済んだ」
「ガミジンより要請。これより覗覚星は此度の事件にてコカビエルが暴露した真実――『聖書の神の崩御』の事実確認に集中する。現在担当している任務の代行・補佐を情報室または観測所に任せたい」
「フラウロスより受諾。現在集まった教会に関する情報も共有しよう」
「アムドゥシアスより危惧。しかし、損失もある。フリードも間者としての役割は無理だろう。間者はまだ複数潜ませているが、より上層の動きを知る必要がある。今後の堕天使内の動きを探る駒の心当たりがあるものはいるか？」
「ガープより提案。以前より打診していたが、此度の事件にも登場した白龍皇ヴァーリを勧誘すべきではないか？　無論、『狗』の方でも構わないが」
「フルフルより否定。かの神滅具所有者は双方とも堕天使総督アザゼルに拾われたという過去がある。それ以前の情報を入手していないため断定はできないが、彼らが堕天使を裏切る可能性は低い」
「デカラビアより同意。上層部の情報が確保できないのは歯がゆいが、現状維持に努めるべきだ」
「グレモリーより通達。天界陣営上層部が悪魔陣営と接触する模様。不本意ながら、堕天使側の動きについて議論を交わすようだ」
「グラシャ＝ラボラスより補足。なお、この会談には堕天使側も参加する模様。この会談の結果によっては、三大勢力は和平に進む可能性がある。逆に、戦争の再発の可能性もある」
「……面倒なことだ。何千年も戦っていたのだ。神が死んでいたとはいえ、今更和平などやめて欲しいものだな。どうせあと少しで滅びるというのに。問題なのは、奴らがどの程度の期間を前提に和平を為すつもりか、という点か。数千年のしこりの解消が、我々の計画より早く進むはずもないが」
「ゲ―ティアの話、難しい。ずるずる」
「本当ねー、オーフィスちゃん。ずるずる」

「武蔵の姉御。私ですら真面目に会議を拝聴している空間でオーフィスとすするうどんは美味しいですかい？」
「じゃあリントちゃんも食べましょうよ」
「遠慮しますぜ。魔神柱のセンセたちからの視線が痛いんで……」
「どーも、ゲ―ティアの大将。フリード・セルゼン、ただいま戻りましたぜー」
「早かったな。五体満足で何より。さて、アーチャーやキャスターから合図がなかったということは自力で脱出したのか？　今更追っ手の心配などしていないが、堕天使連中に尋問されて情報は漏らしていないだろうな？」
「それは問題ありませんぜ、大将。普通に解雇されただけですんで」
「そうか……は？」
「適当なんですよ、教会もグリゴリも。まあ？　だからこそ僕ちんはここにこうしているわけなんですが？」
「連中が敵であることを前提で尋ねるんだが、それで大丈夫なのか？」
「所属していた頃はそうも思ってなかったですけど、大丈夫じゃないんじゃないんです？」
「そうか……そうか」
「二回も言うほど腑に落ちないんですかい？」
「腑に落ちないというか拍子抜けというかな。だが、今回の事件から考えても、少し大胆に動いても良いのかもしれないな。……フラウロス、物は試しだ。例のデュリオ・ジェズアルドとの接触を進めろ」
「了解」
「ん？　大将や旦那たちから見て、今回教会について何か思うところでも？」
「マルコシアスより解説。此度の一件、何よりも目立つのは聖書の教会陣営における杜撰さである」
「ほう？　杜撰ですとな？」
「詳しく教えてくださいな、マルコシアスのセンセ」
「第一に、フリードやバルパー・ガリレイのような危険人物を排除できていないという点。異端認定はいいが、同時に処分すべき存在のは

ず。特に、バルパー・ガリレイは思想的に危険なだけではなく、聖剣計画に関する知識や記憶を持っている。これが他勢力に渡れば非常に危険である。案の定バルパー・ガリレイは此度の事件に深く関わった」

「違いないですなぁ。いやあ、俺みたいな天才を異端にしたこともそうだけど、人材の扱いが雑すぎる！」

「私らシグルド機関の作品も、ほとんど裏切ってますしねー。生き残っている実験体の中でここにいないのは英雄派のジークのセンセくらいですし」

「第二に、派遣された人材。エクスカリバーが三本も盗まれるという失態を犯したにも拘わらず、派遣された人材は未成熟な聖剣使い二人と、試し切りで全滅するような低位の悪魔祓い。堕天使の大物であるコカビエルが関与していると知っておきながら、この対応だ。本気で解決しようとはしていないと見て良い」

「おそらくは、リアス・グレモリーの領地にコカビエルが入ったこともあるのだろう。教会も政治的に立場のある人材を送れなくなってしまったが、好機でもあった。建前としてリアス・グレモリーには『手出し無用』としているが、実際は魔王が出しゃばってくることを期待していたと見るべきだろうな」

「手出し無用を破ったのは悪魔側であるために、未熟で経歴の浅い聖剣使いたちに『実績』を与えることもできるという算段だったのかもしれん」

「あー、納得納得。……で、結果的にその二人が神の不在を知っちゃ世話ねえよな」

「全くだ。万一に備えて駒王町に控えていたバアルとグレモリーが拾ってきたはいいが、あの様子では大した仕事は任せられないな」

「所有者を追放するだけではなく、聖剣ごと捨てるのは本当にどうかと思うが」

「ん？　聖剣といえば、バルパー・ガリレイに関してなんすけど」

「何かな？　我々も忙しいが、協力者には義理を果たすべきだろう。一つだけなら質問に答えるぞ？」

「じゃ遠慮なく。いや、そんなに深い疑問じゃないんですけど何で――コカビエルの奴はバルパーを殺したんでしょうね？」
「何言ってんの、アニキ。神の死に気づいたから殺したんじゃないんですか？」
「んー、そうでもないのよ、これが。だって、不自然じゃないですかい？　確かに神の死は重大な秘密でしょうよ。でも、戦争を再開するってことはその重大な秘密を世界に暴露するも同然なわけでして。実際、あの野郎、自分から口を滑らせて勝手に言い放ちましたし」
「そういや、その場にいたのは最初から殺す予定の連中しかいなかったんだから自分の部下を口封じする理由も意味不明ですな」
「……『最初から殺すつもりだったが、いい機会だったので殺した』、『本心では戦争を決意ができていなかった』、『本当に手が滑っただけ』、『神の死を公開するタイミングを掴めていなかった』など考えられる可能性は多いが、我々が辿り着いたそれらしい答えがある」
「ほほう？　それはどんなもんなんで？」
「神の死を聞きたくなかったのだろう」
「はい？　コカビエルは神の死を知っていたじゃないですか」
「ああ、すまんな。言葉が足りなかったか。『神の死を人間如きの口から聞きたくなかった』。その一点に尽きるのではないか？」